



部典宗
卷四第

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.38

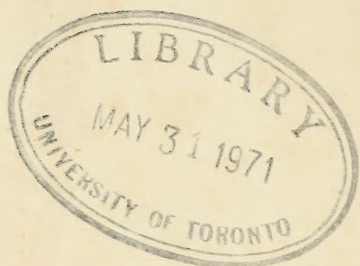
East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
F8J3
1929
V. 38

昭和
新纂
國譯大藏經
宗典部
第十四卷

華嚴經探玄記第一 目次

卷	第	一	一
卷	第	二	七九
卷	第	三	一七三
卷	第	四	二五九
卷	第	五	三六八
卷	第	六	四五五

目次

一

華嚴經探玄記 第一

宗典部
第十四卷

【一】本書二十卷は華嚴宗第三祖賢首大師の撰。至相大師の撰玄記を祖述して以て一乘圓教の綱旨を闡明せるものなり。

【二】四頌の中、初二頌は三寶に歸敬す。

【虛舍那】唐譯には毘盧舍那(वेदिशान)報身佛の稱號、遍照又は光明遍照と譯す。

【方廣】總じては大乗經、別しては十二部經をいふ。小乘を簡ぶ。

【圓滿解脫輪】三乘を簡びて、一乘教をいふ。

【海會】會座に參集せる普賢等の徳深くして佛に齊く敷廣くして量り難き故に海に喻ふ。

【唯願くは云々】後二頌敬意を申ぶ初に加被を乞ひ次に造意を述す。

【二】佛教の綱紀

華嚴經探玄記

卷第一

西國寺沙門法藏述す

(一) 大智海の、十身の盧舍那と

諸の法界に充滿する、無上大慈尊と

方廣離垢の法と、圓滿解脫輪と

普賢文殊等の、海會の大菩薩とに歸依したてまつる

我其縛地に在るも、心に大法門を希ふ

唯願くは加哀せられて、念智力を増さしめ

此秘奧藏を開きて、廣く自他を益し

願くは法をして久住せしめ、燈を傳へて佛恩を報ぜんことを

夫れ以れば、法性の虚空は、廓として涯無く、視聽を超え、智慧の大海は深くして極

無く、思議を抗えたり。渺渺たる玄猷名言も、其際を尋ぬること罕なり。茫茫たる素範相

見るも其源を究むること靡し。但以みるに機感萬差にして、形言を奮ひて法界に充ち、

心境一味にして、能所を泯じて寂寥に歸す。體用無方にして圓融測り回し。是に於て無像

にして像を現すること、猶し暘谷に太陽の昇るがごとし。無言にして言を示す、滄波の

を以ぶるに、初に法華離思門の内、理智顯現

【以下、教義離思を標す。其義を語れば、胸玄妙其教を語れば、外素微純高妙廣大にして、音を超え觀見を絶す】

【三】一經の大意を述するに、初に題目を釋す。

【鏡光の眞象】本經第三十三に明珠鏡光金剛象鏡中無量の刹を現する驗あり。

【一は多・圓通す】事事無礙を對して體の空有に對して相即を談ず。

【九世を…永劫を談ず】念劫圓融・九世とは三世に各過劫未を分つ。

【三世に…齊くす】因果不二。

【五位…分け】信住、行、向、地の五地各各に成佛を許す、これ一位即

巨象を傾くるが若し。是故に削めて蓮華藏界に於て、無盡の玄綱を演べ、上達の流を牢籠し、控引して佛境に著らしめ、然る後に、化は忍土を雷して、漸く慈雲を布き、微澤を灑ぎては、以て三根を潤し、道芽を滋して而も一揆に歸す。是に知んぬ、機緣感異なり。聖應所以に殊分す。聖應殊なりと雖も不思議一たり。

【華嚴經】とは斯れ乃ち海會を集むるの盛談、由王を照すの極談なり。理智宏遠にして、法界を盡して眞源に互り、浩浩たる微言、虚空に等しくして摩訶に被る。是に於て大小を虧くこと無く、巨刹を濟めて以て毫端に入り、未だ鴻濶を易へずして、極微を總じて以て法界に周し。故に因陀羅網互に影を參へて重重たり。鏡光の眞象は雙方を照して懸懸たるを以て、一は多に即して無礙に、多は一に即して圓通す。九世を攝して以て刹那に入れ、一念を舒べて永劫を該ぬ。三世に究竟する堅固の種を、而も因と爲す。十信の道圓に普く

德顯れて果を成ず。果は、因に異るの果無ければ、五位を派ちて以て體を分け、因は、果に異るの因無ければ、十身を總べて以て、致を齊す。是故に覺母、機に東域に就く、六千頌に十眼を具す。童子、友を南國に詢ね、百十圓にするに一生を以てす。遂に樹王を越すして六天斯に居らしむ、即ち華藏を移して十刹虛融せん。寶偈を空中に示して、齊しく八會を輝かし、玉珠を性徳に啓きて七處圓に彰る、浩浩鏗鏘として思議を隔てて迫に出づ。巍巍煥爛として眞觀露音に超ゆ。是故に舍那削めて海印を陶甄し、二七日の旦、爰

に興り、龍樹總に備して虵宮を察して、六百年の後に方に顯る。

一切位なるが故にかく開闡すれば五位を分つも妨げざる也。

【是故に覺母：以てす】未會の三會中攝比丘會、攝善財會を擧げて利益を辨ず。

【覺母】文殊。

【遂に闍王：彰る】覺母の甚深を示す。

【闍王】菩提樹。

【是故に舍那：顯る】流傳緣起を叙す。

【四】題を略釋す。

【五】十門を開き述釋す。

【六】教起の所由を明すに、智度論法華經の説を引く

然れば則ち大は包含を以て義と爲し、方は軌範を以て功と爲す。廣は即ち體極り用周し、佛は乃ち果圓に覺滿す。華は萬行を開敷するに譬へ、嚴は茲本體を飾るに喩ふ。經は即ち貫穿縫綴して能詮の教著る。法に従ひ人に就き、喻に寄せて目と爲す。故に大方廣佛華嚴經と云ふ。世間淨眼品と云ふ、器等の三種、時に顯耀して、光潔照明なるを淨眼に況ふ。法喻合して擧ぐ、故に世間淨眼と云ふ。語言理一にして、格類相從す。故に稱して品と爲す。此經に三十四品有り。此品を初に建つ、故に第一と稱す。故に大方廣佛華嚴經世間淨眼品第一と言ふ。餘義は下に説くが如し。

將に此經を釋せん、略して十門を開く、一に教起の所由を明し、二に藏部に約して所攝を明し、三に立教の差別を顯し、四に教所被の機を簡び、五に能詮の教體を辨じ、六に所詮の宗趣を明し、七に具に經の題目を釋し、八に部類傳譯を明し、九に文義の分齊を辨じ、十に文に隨ひて解釋す。

初に教起の所由とは、先に總じて辨じ、後に別して顯す。總とは夫れ大教の興る因縁無量なり。故に「智論」の初に、廣く般若の教起の因縁を辨ず。須彌山の、無事及び小因縁を以て、而も能く動せしめられざるが如し。佛も又是の如し。大因縁の故に、而も所説有り。謂ゆる般若波羅蜜、世間に流行して、廣く群品を益する故なり。「法華」にも亦云はく、「如來一大事因縁の爲の故に、世に出現したまふ。謂ゆる佛知見を開示悟入す一等と。此經の下に云はく、「如來應供等正覺、性起の正法は、不可思議なり。所以は何ん。少因縁を

【七】以下、別して興起の所由を示す。

【初に法爾の故に】第一に法爾常恒の說法ありといふ。

【大王路】轉輪王の路。無盡の大衆の常軌、斷一路にあるをいふ。

【無停無息】三世常恒に衆生を化するをいふ。

【句身】(Pāṇi)又は (Paṇḍita) といふ。句の重なるを句身といふ。【味身】義味を顯す語。

もて、等正覺を成じて、世に出興するに非ず。十種の無量無數百千阿僧祇の内縁を以て、等正覺を成じて、世に出興したまふ。何等をか十と爲す。一には無量苦現の心を發して、一切衆生を捨てず、是の如き一等乃至廣說、應に知るべし。

次に別して顯さば、略して十義を掲げて以て無盡を明す。何者をか十と爲す。謂はく、法爾の故に、願力の故に、機感の故に、本と爲すが故に、徳を顯すが故に、位を顯すが故に、聞發の故に、見聞の故に、成行の故に、得果の故に由る。

初に法爾の故にとは、一切諸佛法爾として、皆無盡世界に於て、常に此の如きの無盡の法輪を轉じたまふ。大王路の、法爾の常規、無停無息にして、未來際を盡窮するが如し。

是故に下文の不思議品に云はく、「一切の法界虚空等の世界、悉く毛端を以て周遍度量す。一一の毛端の處に、念念の中に於て、不可説不可説の佛刹微塵等の身を化し、乃至未來際劫を盡す。一一の化佛の身に、不可説不可説の佛刹微塵等の頭有り。一一の頭に不可説不可説の佛刹微塵等の舌有り。一一の舌、不可説不可説の佛刹微塵等の音聲を出す。一一の可説の佛刹微塵等の音聲を説く。一一の法の中に、不可説不可説の佛刹微塵等の句身味身を説く。復、

不可説不可説の佛刹微塵等の劫に、異の句身味身を説くに、音聲、法界に充滿して、一切衆生、聞かざる者無く、一切未來際劫を盡して、常に法輪を轉ず。如來の音聲、異無く斷無く、窮盡すべからず」と。解して云はく、此經文に準するに、一毛端の處に於て、一念

【此れ亦因縁：法爾なり】華嚴の大經は常恒の所説に逐機破病の所説に非ざるをいふ。

【二に願力の故に】以下三故は佛に約す。今は願力を説く。

の中に於て如上の業用を出す。餘の念念の中にも、皆亦是の如し。一毛端の處に、是の如く念念の業用無盡なるが如く、餘の一一の毛端、次第に虚空法界等の、一切世界に周遍すること、各皆是の如く無盡無盡なり。此れ即ち處は毛端を以て法界を該ね、時は刹那を以て劫海を盡す。謂はく、此處に於て、願に業用を起すことを明す。謂はく、此時に於て、常に業用を起すことを明す。此れ亦因縁を待たず、諸佛法爾なり。此經の下の文の所説若し。問ふ、若し爾らば、何が故に處は唯八會、時は二七に局るや。答ふ、遮那品に云はく、「一一の微塵の中に佛國海安住す。佛雲遍く護念し、彌綸して一切を覆ふ」と。又云はく、「一毛孔の中の無量の佛刹、莊嚴清淨にして、曠然として安住す。彼一切處に盧遮那佛、衆海の中に於て、正法を演説す」と。解して云はく、況んや八會の處、十方法界を該攝せざらんや。又、發心品に云はく、「無量劫は即一念、一念は即是れ無量劫と知る」と。解して云はく、況んや二七日の時、無量の劫海を攝せざらんや。不思議品に云はく、「一切の諸佛、一微塵の中に於て、普く三世の一切の佛刹を現じ、一微塵の中に於て、普く三世諸佛の自在神力を現じ、一微塵の中に於て、普く三世の一切衆生を現じ、一微塵の中に於て、普く三世の一切諸佛の佛事を現す」と。解して云はく、此中の塵内の三世に、一切の前後際劫を通括す。是を「諸佛法爾の常説なるが故に」と謂ふなり。

二に願力の故にとよ、謂はく、是れ如來の本願力の故に。此教法をして、機に稱ひて顯現せしむ。是故に盧遮那品に云はく、「十方國土の中、一切の世界海に、佛願力をもて、

自在に普く現じて、法輪を轉す」と。又云はく、「盧遮那佛は神力の故に、一切の刹の中に法輪を轉す。普賢菩薩の願の音聲、一切の世界海に遍滿す」と。解して云はく、即ち是れ此經に十方を該ぬ。虚空法界等の一切の世界と、及び諸の塵内の諸の刹土の中に、同時に此經を説くことは、皆是本師の願力の致す所なり。是故に下の諸當の初に、皆盧遮那佛本願力の故にと云ふ。又、雲集品の頌に云はく、「無量無數劫にも、此法甚だ値ひ難し。若し聞くことを得ること有る者は、當に知るべし本願力なり」と。解して云はく、此れ即ち佛の願力に由りて、衆をして聞くことを得しむるなり。又云はく、如來出世せざれば、亦涅槃有ること無し。本大願力を以て自在の法を顯現す。

【三に機感の故に】
 教起の第三故。現身說法に就て本影具足、唯影無本無礙法界の三義を明す。

【眼有り…見る】
 經十四、勇猛轉善音の偈。淨信心を因、佛力を緣として佛を見るよある

【佛過去…應ず】
 經六十、佛の平等語業を明す文なり
 【三世…現ず】
 經十四、夜光幢偈。

三に機感の故にとは、如來は平等にして改易有ること無きも、衆生に隨應して身を現じ法を説く。此に三義有り。一には、佛果の色聲清淨の功德を以て、増上緣と爲す。彼機感に應じて、以て攝化を成す。雲集の偈に云はく、「眼有り、日光有りて能く微細の色を見る。最勝の神力の故に、淨心諸佛を見る」と。此は現身。又法界品に云はく、「佛、過去の行に於て、一の微妙の音を得。彼此に心無くして、而も能く一切に應ず」と。此は說法。二には、佛果に色聲の塵相有ること無し。但平等の理智、増上の願力を以て、機感相應して、形音有りて現す。雲集の偈に云はく、「三世一切の佛の法身、悉く清淨にして、其所應化に隨ひて、普く妙色身を現す」と。又云はく、「一切の諸の如來は、佛法を説くことと有ること無し。其所應化に隨ひて、爲に法を演説す」と。三には上の二義に通じて、有

【又云はく…脱す】
經十一、夜摩大富
説偈品、無盡精歡
の文。

【佛身…説く】
三、勝音菩薩説偈

【四に本と爲す故
に】
【教起の第四故
華嚴の根本法輪よ
り、一代無量乘を
流出するなり。】

【五に徳を顯す故
に】
【教起の第五故
摩毛の分を擧げ刹
身の總に攝す、こ
れ用の相入を示す

無無礙なり。法界に稱ひて、障礙無きを以ての故に。遮那品に云はく、「佛身、諸の法界に充滿し、普く一切衆生の前に現じて、受化の器に應じて、悉く佛を充滿す、故に此菩提樹に處するに、一切の佛刹微塵等の兩所の佛、一毛孔に坐す。皆無量の菩薩衆有りて、各爲に共に普賢の行を説く」と。解して云はく、正しく是れ此經の所説の分齊なり。

四に本と爲す故にとは、謂はく、將に機に逐ひて漸く末教を施さんと欲するが故に。宜く最初に先づ本法を示し、後に此に依りて、方に末を起すことを明すべきが故に、是故に最初に此經法を説き、然して後に方に鹿園等の處に於て、漸く枝末の小乘等の法を説く。又、下の性起品に云はく、「猶し日出でて、先に高山を照すが如し」等、下の立教の中に引説するが如し。

五に徳を顯す故にとは、謂はく、佛果殊勝の徳を顯し、諸の菩薩をして信向し證得せしむ。此に二種有り。一には依果。謂はく、蓮華藏莊嚴世界海。二には正果。謂はく、如來の十身。三世間に通ずる等、並に下の文に説くが如し。此二無礙に四句有り。一には、依の内に依を現す、塵の内に刹海を現するが如し。二には、正の内に正を現す、毛孔に佛等を現するが如し。三には正の内に依を現す、毛孔に刹等を現するが如し。四には依の内に正を現す、塵の内に佛等を現するが如し、是故に、一門を擧ぐるに隨ひて、即ち一切を攝して皆盡さざること無し、並に下に説くが如し。此果徳を顯さんが爲の故に、是經を説く。

【六に位を顯すが故に】故起の六故行位を辨ず。

【二位の中：至る】總じて相攝を辨じ是故の下は別して五位互攝を別す。

【七に開發の故に】衆生：開發し衆生性起の心中より法界無礙自在の法門を開發すること。

【八に日聞の故に】教起の第八慧、以下三は利益に就いて別す。

【九に成行の故に】教起の第九教、【少しき：得る等】一行一切行を攝する故なり。

【二には通：成ず】阿耨に約して一切即一を談ず。

六に位を顯すが故にとは、菩薩、佛因を修行して、一道果に至るに、五位を具すること、顯さんが爲の故に。此に亦二種あり。一には次第行布門。謂はく、十信、十解、十行、十住向、十地滿じて後に、方に佛地に至る、微従り著に至る。階位漸次なり。二には圓融相攝門。謂はく、一位の中に、即ち一切の前後の諸位を攝す。是故に一一の位滿じて、皆佛地に至る。此二無礙なり、廣くは下の文の諸會の所説の如し。

七に開發の故にとは、衆生心中の如來の藏、性起の功德を開發し、諸の菩薩をして此に依りて修學し、無明の卵を破し、性徳を顯さしめんを欲するが故に。此に亦二種有り。一には、言説を以て顯示す、有を知らしむるが故に。二に其修行を顯現することを得るを教ふ。故に下の文に微塵を破して、經卷を出す等の如し。具には彼説の如し。

八に日聞の故にとは、此無礙自在の法門を示すことは、唯是れ佛位の大菩薩の境、而して下位の諸の衆生等をして、此に於て見聞せしめて、而も彼金剛の種子を成ずることを得て、毀せず盡さず、要す當に其をして、究竟位に至らしむべきが故なり。亦性起品の説の如し。

九に成行の故にとは、謂はく、此普法を示して、諸の菩薩をして、普賢の行を成じ、一行即一切行にして、初發心の時に便ち正覺を成じ、慧身を具足して、他に由りて悟らざらしめんが爲なり。又云はく、菩薩此法を受持して、少しく方便を作して、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得る等と。此に亦二種あり。一には、頓に多行を成ず。二には遍く普行を

成ず、並に下の説の如し。
十に得果の故にとは、佛地智斷の果を得しめんが故に。亦二種有り。一には斷果。謂は

【十に得果の故に】
欲起の事十す。

【一障一切障】
一切法無礙即空の理に體達すれば一斷一切障なり。

【三世間】
三世間を盡す。

【舍耶法身】
三世間を盡し遍く衆生を利益するに業用多端なるをいふ。

【八】
以下、本經の所攝を示す。十義の中、初は三藏次四は二藏、後四は十二部教に約して明す。

【初に三藏云云】
以下、經律論の名を釋す。

【是處に依と爲す】
說經の處と因縁と、意趣、これを説法の所依とす。

【眞俗相】
眞俗の相

初めに三藏を明さば、一には修多羅と名く。或は修妬路と云ひ、或は素呾囉と云ふ。此には契經と云ふ。契に二義有り。謂はく、理に契ふが故に。機に合するが故に。經に亦二義有り。謂はく、法相を貫穿するが故に、所化を攝持するが故に。貫穿とは世親釋して云はく、「謂はく能く貫穿す、依の故に、相の故に、法の故に、義の故に、素呾囉と名く」と。謂はく、是處に於て、此に由りて、此が爲に所説有り、之を名けて依と爲す。眞俗論の相、これを名けて相と爲す。十善巧法等、之を名けて法と爲す。密意等に隨ひて以て諸法を説く、之を名けて義と爲す。又無性釋して、貫穿縫綴と爲す。解して云はく、貫穿は是れ契入の

顯示して、此經の、教の興起ならしむるに由るが故なり。
第二に藏部に攝するを明すとは、略して十義を顯して、以て收攝を明す。一は三藏を明し、二には所攝を顯し、三には三藏を辨じ、四には相違を釋し、五には種類を開き、六には所攝を定め、七には一部に收め、八には三部に攝し、九には或は九部、十には十二を具す。

【眞俗相】
眞俗の相

【眞俗相】
眞俗の相

【眞俗相】
眞俗の相

【眞俗相】
眞俗の相

【眞俗相】
眞俗の相

【眞俗相】
眞俗の相

の相貌、即ち二諦を以て衆生に説く【密意等云云】、佛の說法、顯了義、密意説あれども、要は滅惑生善にあり。

【又唯心云云】以下用遠を會通す【唯心】、雜阿毘曇心論のこと。

【二に毘奈耶云云】行を釋す。

【尸羅】(五三)三業の罪惡を離れ、清淨なる果を得るをいふ。

【三には阿毘云云】論を釋す。論は智を以て眞理を尋求するが故に、阿毘達磨といふ。

義、縫綴は是れ契合の義なり。謂はく、聖言を以て義理を貫穿して、散失せざらしめ、隱沒せざらしむ。縫綴連合して詮表を成せしめ、久しく住することを得しむ。『佛地論』に云はく、「能貫し、能攝するが故に名けて經と爲す」と。佛の聖教は所應説の義及び所化の生を、貫穿し攝持するを以て、名けて契經と爲す、契理の經なれば、依主釋なり。契經即藏なれば、持業釋なり。又一雜心一に五義あり。一には涌泉、二には出生、三には顯示、四には繩墨、五には結鑿、正しく翻じて線と名く。何が故に經と稱する。謂はく、線能く華を買き、經能く緯を持す。義用相似すればなり。但し此方には經の名を重じて、線の稱を貴ばざるを以て、是故に翻譯するに、其重んずる所に逐ひて、線を廢して經を存し、譬に從つて名を立つ。二に毘奈耶、此には調伏と云ふ。調とは和御、伏とは制滅なり。身語等の業を調和し控御し、諸の惡行を制伏し除滅するが故に。此は是れ所詮の行なり。謂はく、調伏の藏なり。或は翻じて滅と名く。滅に三義有り。一には業非を滅し、二には煩惱を滅し、三には滅果を得。或は尸羅と云ふ、此には清涼と名く。三業の過非は猶し火の然るが如し。戒能く息滅するが故に清涼と云ふ。『十誦律』の中には、名けて性善と爲す。或は守信と云ふ。昔、受くる所の如く、實に能く持つが故に。或は波羅提木又と云ふ。此には聽順解脫と云ふ。戒を持つに由るが故に、二の解脫に順ず。亦別解脫と名く。三には阿毘達磨藏と名く、達磨は法に名く、阿毘に七義有り。一には對法と名く、此に二義有り。一には對向。謂はく、因智、涅槃の果に趣向するが故に。二には對觀。謂はく、果智、涅

【無住涅槃】所知障を斷じて顯得する眞如の妙理。有情を利せん爲に涅槃に住せざるを無住といふ。梁の攝論。佛陀扇多譯の攝大乘論をいふ。

【契經】經文は、機に契ひ法の理に契合するを以て經をいふ。

【法が通】依主釋を以ていふなり。

【順正理】阿毘達磨順正理論八十卷をいふ。衆賢の著文并譯す。

【雜集】阿毘達磨雜集論、十六卷をいふ。安慧の著、文并譯す。

【莊嚴論】大莊嚴論經十五卷をいふ。馬鳴著、羅什譯す。

槃の波を觀證するが故に。因智に亦對觀有りと雖も、然るに仰きて進修するを以ての故に、但對向と名く。世親の『攝論』に云はく、「此法は無住涅槃に對向し、能く諸諦の菩提分等の諸の妙門を説くが故に」と。此は因智に約して説く、これ唯所詮なり。二には數法と名く。梁の『攝論』に釋して云はく、「諸法の中に、一法に隨ひ、或は名相を以てし、或は別相を以てし、或は通相等を以て、數數に此一法を顯すが故に、數法と名く」と。三には伏法と名くることは、彼論に云はく、「此法能く諸説を伏して、立破の二能あり。正く依止等の方便を説くに由るが故に、故に伏と名く」と。四には通法と名く。此能く契經の義を通釋するが故に。契經を法と稱す、此法能く彼に通ず。即ち法が通なり。梁の『攝論』には、解法と名く。阿毘達磨に由りて、修多羅の義解し易きが故なり。五に無比法と名け、六には大法と名け、七には釋法と名く、此三は唯所詮に約す。又『順正理』に云はく、「或は契經を名けて達磨と爲す、論は能く決了すれば、名けて對法と爲す」と。此れ即ち教を以て教に對す。上の通法に同じ。或は摩得勒伽と云ふ。此には本母と云ふ。教と義とを以て本と爲し母と爲す。亦分別解說と名け、或は優波提舍と云ふ。此には論義と云ふ。『雜集』の中には解釋と名くるなり。此契經等の上の二種は、皆所詮を舍攝し、義理を生ずれば、俱に名けて藏と爲す。『莊嚴論』の第四に云はく、「彼三と及び此二を、云何が藏と名くる」答ふ、「攝に由る故に。謂はく、一切の所應知の義を攝するなり」と。初の藏は持業依主に通じ、後の二藏は唯依主、所詮に従つて名と爲すを以ての故に。餘の體性を出し、及

【第二に云云】本經を何れに攝するやを明す。

【十藏】十無盡藏品にして、信、戒、慚、德、聞、施、慧、正念、持、辨藏をいふ。

【若し小乘に融せず】小乘は、聲名句文の三教、七十五法の義、恒有にして差別す。三乗教は差に於て、別立し融ぜず。義に於て、即空を證ず故に融ず。一乗教は教即義にして融攝自在なり。

【第三に云云】二藏を擧げ所攝を明す。

【第四に云云】以下、五箇の問答を以て相違を釋す。【生空】人我の存在を否定して無と説くをいふ。

び諸門分別は、廣くは別に説くが如し。

第二に所攝を攝すとすは、此經は何の藏の攝とせらば、或は唯契經の攝なり、餘の二に非ざるを以ての故に。或は一の攝なり、義理を決擇すること有りて、對法の收なるを以ての故に。或は三の攝なり、下の文に亦諸の戒行を顯すが故に。此は同教に約して攝す。或は是下の文の十藏の所攝なり、主伴具足して、無盡を顯すを以ての故に。此は別教に約す。問ふ、「三藏は教に攝り、十藏は義に約す、如何が義を以て教を攝すと云ふや。答ふ、「若し小乘は教義俱に融せず、三乘は義融じ、教融せず。一乗は教義俱に融ず、是故に攝することを得。意言の無分別觀を教に入れて、攝する等の如し。三乘の中に已に有り、況んや一乘をや。但し標名表示は即ち教に屬して攝す、之を思ひて見るべし。」

第三に二藏に約して攝せば、謂はく、聲聞藏、菩薩藏なり。初には聲聞の小根に約して、三藏教を立てて、聲聞の理行果等を證示するを、聲聞藏と爲す。二に菩薩の大根に約して、三藏教を立てて、菩薩所行等の法を證示するを、菩薩藏と爲す。莊嚴論の第四に云はく、「此三藏は上下乘の差別に由るが故に、復説いて聲聞藏及び菩薩藏と爲す」と。

第四に相違を釋すとすは、問ふ、「經の中に、亦緣覺を求むる者の爲に、十二因縁を説くと云ふ。何が故に緣覺藏と名けざるや。答ふ、「諸の緣覺は亦唯我執を斷じ、唯生空を證し、果は羅漢を成じて入滅殊らず、菩薩に望むるに、俱に是れ下乘なるを以ての故に、別に説かず。問ふ、「等しく俱に是れ下ならば、何が故に獨り聲聞藏と名くる。答ふ、「緣覺は亦無佛

【普超三昧經】三卷。西晋の竺法護譯。『入大乘論』二卷。堅意菩薩造、北涼の道秦譯。

【第五に云云】攝を辨するに、まづ種類を開くなり【調伏の五部】五部律をいふ。曇無德部、薩婆多部、迦葉遺部、彌沙塞部、婆龜富那部。

の世に出でて、教ふることに無き者有るを以ての故に。聲聞は爾らず、故に偏に名を得たり。問ふ、小乘教の中に、亦菩薩乘の法を詮示すること有り、何んが亦菩薩藏と名けざる。答ふ、彼宗の菩薩は、所斷、所證、所入の涅槃、亦二乘と差別無きを以ての故に。又、菩薩は唯一にして、多にあらざるを以ての故に、亦説かず。問ふ、若し爾らば何が故に「普超三昧經」の三藏品、及び『入大乘論』に、彼三乘を説いて、即ち三藏と爲す。一には聲聞藏、二には緣覺藏、三には菩薩藏なり。答ふ、彼經論の中に、皆大乘の中に、此三藏有り」と云ふが故に。小を謂ふには非ざるなり。問ふ、即ち此文に據らば、緣覺に藏有り、「莊嚴論」と如何が會釋せん。答ふ、前は理果異らざるに據るが故に、合なり。此は教行小しく別なるに、約するが故に分なり。是故に二説相違せざるなり。

第五に種類を開くと、聲聞藏の中に就いて、諸經論に準ずるに、曲に三種を開く。一には諍論の聲聞藏、謂はく、契經の四阿含、調伏の五部、對法の二十、互に相違諍す、所説不同なれども、聖果を妨げず。是故に總じて名けて諍論藏と爲す。二には稱實の聲聞藏、謂はく、「瑜伽」の聲聞地、及び聲聞決擇に、聲聞の行位果等を詮示するが如し。皆悉く實に稱ひ、理と相應して、婆沙及び諸の異論に同からず、補處の所説、諸の異論の、能く諍ふ所に非ざるを以ての故に、是故に、總じて稱實の聲聞藏と名く。問ふ、此中の所説、既に小乘の諸部と不同なり、豈聲聞の人に兩種有らんや。答ふ、此は教の中に聲聞法を説くに、盡理と不盡とに約する故に、開きて二と爲す。聲聞に亦差別有り」と謂ふには非

【大乘經】今は廣く逐機の末教を指す。【無作の四諦】涅槃經所説の四種四諦の一。天台はこれを圓教に配し、迷悟の事相に當體即中道實相なりと議す。

【大乘共教】大乘中、二乘に共通して説くをいふ。【十地行布に至る】十地の一一を経て佛果に至る意。

す。三には假立の聲聞藏。大乘經の中の如き、聲聞を引きて廻心せしめんが爲の故に、所立の法門、亦聲聞の名數に同じて説く。無作の四諦及び道品等の如し、諸の大乗經の中に説くが如し、繁く引くこと能はず。既に菩薩の所學に非ず、是故に名けて假立の聲聞藏と爲す。問ふ、「此中の名は、小乘に同すと雖も、義實に是れ大なり。何ぞ總じて説きて、聲聞藏と爲すことを得るや。」答ふ、「只此義の爲に、名けて假立と爲す。問ふ、「諸の聲聞の人、根熟し廻心して、學する所は即ち是れ菩薩藏の收なり。此假立の藏には、彼に於て何の用ぞ。」答ふ、「但、聲聞の廻心に二種有り、一には勝、二には劣なり。勝れたる者は一往大に入りて、此藏に藉らず。劣れるは猶大を怖る。是故に方便して彼名數に同じ、信受し易からしむるが故に、此門を立つ。第二の菩薩藏の中に、諸の聖教に準ずるに、亦三類有り。一には小乘の中の菩薩藏。謂はく、菩薩は三十四心等に依りて、次第に成佛することを詮示す。亦十地の行位を論ぜず。仍復、聲聞等に同じからざるもの是なり。二は沙彌舍の説の如し。二には大乘共教の中の菩薩藏。謂はく、菩薩の次第の行位を詮示す。説に廻心と直進の不同有りと雖も、俱に十地行布の漸次に依りて、修して佛果に至る。三は瑜伽の菩薩地、及び諸大乘經論の中の説の如し。三には不共教の中の菩薩藏。菩薩は普賢の行位に依りて、五位圓融することを詮示す。謂はく、一位即一切位、一行即一切行にして、圓極法界無礙自在にして、始終皆齊し。一一の位、滿じて、即ち十佛を成じ、主伴具足する等なり。故に『智度論』に云はく、「般若波羅蜜に二有り。一には共。謂はく、此大

【不思議經】 華嚴經をいふ。愚法小乗の二類に於て、自乘の法空に思なるをいふ。

【佛體圓融】 果佛の自體本來圓融して、適化無方なりと雖も、佛體別なし。第六に云云。所攝を定むるなり。

品經一及び餘の方等經は、諸の聲聞と共説するが故に。二には不共。謂はく、「不思議經」は聲聞と共説せざるが故に」と。解して云はく、此中の、大に共するの小は愚法に非ず、小に共するの大は、別教に非ず。是教に三の菩薩藏有るなり。問ふ、菩薩聲聞の二藏別なるが故に、即ち彼二人各別に果を得。菩薩藏の中に既に三位を分つ、三種の菩薩、各別に成佛すべきや。答ふ、成佛は唯一なり。但機に淺深有れば教に三類を説く。成佛の體實に三有りと謂ふには匪ず。今は教に就いて問す。佛體に約せず。問ふ、若し三説俱に理に稱はば、佛體亦三を成すべし。若し成佛の理是れ一ならば、二説即ち虚と爲らん。答ふ、一の成佛に於て通じて三義有り。一には以本從末門。小乘に説くが如し。聲聞に向するを以ての故に。二には開本異末門。共教に説くが如し。聲聞と相對して異を辨するを以ての故に。三には未盡唯本門。不共教に説くが如し。二乘並盲にして、對すべき異無きが故に、佛體圓融して斯三義を具す、是故に三説各異れども、佛は若干無し、是故に今、菩薩藏の中に、此三類有り。

第六に所攝を定むとは、此經何の藏の攝とならば、俱に前の三の聲聞藏の攝に非ず。後の三種の菩薩藏の中に於て、正しくは唯後の攝なり。智論の中に、別して此經を指して、不共と爲すを以ての故に。或は三類の中に、唯初の一を除きて、後の二に俱に攝す。此經の中に、普別を具するを以ての故に。或は亦彼假立の聲聞藏に通じて收む。經の中に亦、四諦等を辨するを以ての故に。或は亦總じて二藏の所收に通ず、聲聞藏の法、並に一乘法界

の所流にして、味に別無きに依るを以ての故に。

【第七に云々】以下三は十二部經に約して辨す。【方廣】十二部の一。梵名毘佛略(Vaulya)といひ、方正廣大なる眞理を説くの意。【第八に云々】本經を、記別以下三に收むることを明す。【第九に云々】九部の攝を明す。大乘の機は、利根にして悟り易し、故に三を落しず。【第十に云々】十二部經を説き、みな具すと説く。【應頌】長行と相應して説く故にいふ。【記別】(Vaidalya)利伽羅那。佛、弟子の成佛するを記し、委しく國土壽命等を明示するをいふ。【本事】佛弟子の過去世の因縁を説

の所流にして、味に別無きに依るを以ての故に。
【第七に云々】以下三は十二部經の中に於て、或は唯方廣の一部の所攝に約す。『對法論』に、「一切有情の利益安樂の、所依處なり」と説くが故に、廣大甚深の法を宣説するが故に、名けて方廣と爲す。又『瑜伽』に、聲聞藏の中には、方廣無しと説くが故に。或は此經の題目は、已に顯現するが故に。
【第八に云々】三部の攝とは、謂はく、記別と自説と方廣なり。『法華』の中に餘の九部を説きて、小乘と爲すを以ての故に、此經は彼に非ざるが故に、唯三の攝なり。
【第九に云々】或は九部の攝とは、謂はく、因縁、譬喩、論義を除く。『涅槃』の第三に、大乘を護る者は、九部を受持すと説くを以て、前の三を除くが故に。
【第十に云々】十二を具すとは、一には是れ契經の攝なり。『涅槃經』に、始め如是従り、終り奉行に至るまで、是れ契經なりと説くを以ての故に。二には應頌。下の文の如き、具に重頌有るが故に。三には記別。下の文の如き、具に成佛等を、記すること有るが故に。四には諷頌。下の文に、直に頌を説く等有るが如きの故に。五には自説。下の文に、定従り起ちて、即ち本分を説く等の如きの故に。六には縁起。下の文に、請に因りて説くが如きの故に。七には譬喩なり。下の文に、廣く喩を説くが如きの故に。八には本事なり。下に盧遮那等及び一普賢本所經一の本事を説くが如きの故に。九には本生。下に遮那等の本生の相を説くが如きの故に。十には方廣の一門知んぬべし。十一には希法。下の文に、毛孔法を説き、

く。
【本生】佛自身の過去の因縁を説く

【九】以下立教の差別を明す。

【二】以下古説を叙す。十家あり。
【一音教】如來の説法は一音なれ共機縁に隨ひ僧等別所異り頓漸等の別を生ず。故に一代教、本に約すれば如來無靈の一音を出でずといふものこれなり。
【二】には陳、同じ眞諦の漸頓二教。【大遠法師】隋の淨影寺の慧遠の【三】に後魏の慧遠の光統の三教。

及び座より衆を出し、寶柱、佛を現する等の如し。十二には論義、瑜伽の八十一に説くが如し。謂はく、「諸の經典には、循環研覈するは摩怛理迦なり。一切の了義の經を、皆摩怛理迦と名く。謂はく、是處に於て、世尊、自ら廣く法相を分別す」等と。下の文の明難品等の説の如し。是故に此經には、具に十二部の攝有り。餘の義は下の十二部經の處に説くが如し。藏部の攝竟んぬ。

第三に立教の差別を明すとは、略して十類を提ぐ。一には古説を叙べ、二には是非を辨じ、三には西域を述べ、四には相違を會し、五には現傳を明し、六には權實を定め、七には閉合を顯し、八には教の前後、九には義に就きて教を分つ、十には理を以て宗を開く。

初の中に、古來の諸德、立教多端なり。以て具に顯し難し、略して十家を叙べて以て龜鏡と成さん。一には、後魏の菩提留支は一音教を立つ。謂はく、一切の聖教は、唯是れ如來の一回音教なり。但、根の異なるに隨ふが故に、種種に分つ。經の、一雨所潤等の如し。又經に云はく、「佛は一音を以て法を演説したまふ。衆生は類に隨ひて、各解を得」等と。二には陳朝の眞諦三藏等は、漸頓の二教を立つ。謂はく、漸悟の機に約せば、大は小に由りて起る。所設具に三乘の教有るが故に、名けて漸と爲す、即ち涅槃等の經なり。若し直往の頓機に約せば、大は小に由らず。所設唯是れ菩薩乘の教なるが故に、名けて頓と爲す、即ち華嚴等の經なり。後の大遠法師等、亦此説に同じ。三に後魏の光統律師は佛陀三藏に承習して、三種の教を立つ。謂はく、漸頓同なり。光師の釋の意は、一には根未熟の爲に

【光統律師】北齊
翟城の大覺寺の慧
光律師のこと、地
論の宗匠たり。

【圓には齊云云】
大衍の四宗

【圓には齊云云】
大衍
【大衍法師】大衍
寺の曇隱。

【五には護云云】
護身の五宗。

【護身の五宗】
護身の
【護身の五宗】
護身の
【護身の五宗】
護身の

【六に陳云云】天
台の四教。如來一
代の説法の淺深に
由りて立てたるも
の、謂ゆる化法の
四教これなり。

【三藏教】正くは
二乗を化し、傍に普
薩を化す。

【通教】正くは普
薩、傍に二乗に通

先に無常を説き、後に乃ち常を説く。先は空、後は不空等と。是の如く漸次なるを、名けて漸教と爲す。二には根熟の輩の爲に、一の法門に於て具足して、一切の佛法を演説す。謂はく、常と無常と空と不空等と、一切具に説きて、更に漸に由ること無きが故に、名けて漸と爲す。三には、上達分に於て佛境に階る者の爲に、如來無礙解脫究竟果徳圓極秘密自在の法門を説くが故に、名けて圓と爲す。即ち此經は是れ圓頓の所攝なるを以てなり。後の光統の門下の遺統師等も、亦皆宗承すること、此説に同じ。四には齊朝の大衍法師等、四宗教を立つ。一には因縁宗、謂はく、即ち小乗の薩婆多等の部なり。二には假名宗、謂はく、『成實論』及び經部等の説なり。三には不眞宗、謂はく、諸部の般若に即空の理を説きて、一切法の不眞實を用す等なり。四には眞宗、謂はく、『華嚴』、『涅槃』なり。法界眞理佛性等を明すが故に。五には護身法師等は五宗の教を立つ。謂はく、此れ前の第四宗の内に於て、眞の佛性を開きて、以て眞宗と爲す、即ち涅槃等の經なり。第五を法界宗と名く、即ち『華嚴』なり。法界自在無礙の法門を明す。六に陳朝の南嶽の思禪師、智者禪師等は四教を立つ。一には三藏教、亦小乗教と名く、『法華』に「不得親近小乘三藏學者」と云ふが如し。『智論』の中に、小乗を説きて三藏と爲し、大乘を摩訶衍藏と名く。二には通教と名け、亦漸教と名く。謂はく、大乘經の中に、通じて三乗を説き、通じて三根に被らしむる等なり。又『大品』の中の、乾慧等の十地、三乗に通ずるが如き者は是なり。三には別教と名け、亦頓教と名く。謂はく、經中の大乘經の中の、所説の法門の道理、小乗等に通ぜざる者は是

ずる義あり。

【別教】二乗に通

ぜず、菩薩教なり

【七には云云】

海東の四教。

【三乘別：如し】

人法二空を明すに

前は人法を明し後

は二空を明す。

【一乘分教】これ

普法の一分を別機

のために説く。

【一乘滿教】圓融

無礙の法門を説く

本經の如きをいふ

【八に唐云云】吉

藏の三輪。

【九には梁云云】

光宅の四乘。

【三車】羊、麈、

牛の三車。法華經

譬喻品の説。大乘

に於て三乘家（三

論法相）一乘家（華

嚴天台）の別あり、

今は三乘家の所立

たる菩薩乘を、方

便假説とす。

【十には唐云云】

印師の二教。化儀

に約したる立名。

なり。四には、圓教と名け、亦祕密教と名く。謂はく、法界自在、具足圓滿して、一即一

切、一切即一の無礙法門なり、亦華嚴等是なり。七は唐朝の海東の新羅國、元曉法師は、此

經の疏をつつ、亦四教を立つ。一には三乘別教。謂はく、四諦の教、緣起經等の如し。二

には三乘通教。謂はく、『般若經』、『深密經』等の如し。三には一乘分教、『瓔珞經』及び『梵

網』等の如し。四には一乘滿教。謂はく、『華嚴經』の普賢教なり。此四の別を釋すること、

彼疏の中の如し。八に唐の吉藏法師は三種の教を立てて、三法輪と爲す。一には根本法輪。

即ち『華嚴經』にして最初に説く所なり。二には枝末法輪。即ち小乘等にして後に於て説

く所なり。三には攝末歸本法輪、即ち『法華經』なり。四十年の後説なり。三を廻して、

一に入るの教、具に釋すること彼の如し。九には梁朝の光宅寺の雲法師は、四乘教を立つ。

謂はく、『法華』の中の如し。臨門の三車を即ち三乘と爲し、四衢道中の所授の大白牛車を即

ち第四乘と爲す。臨門の牛車亦羊鹿に同じく、俱に得ざるを以ての故に。若し爾らずんば、

長者の宅内にして諸子を引く時、此三車祇門外に在り、諸子宅を出でて、即ち應に車を得

べし」と云ふ。如何が由で已りて本所指の車の所住の處に至りて、而も得ざるが故に、後

に更に索むるや。故に知んぬ、是れ權にして羊鹿に同じきことを。是れ大乘の中の權教方

便の説なるを以ての故に。具に釋すること、彼『法華の疏』の中の如し。十には唐の江南の印

法師、敏法師等は、二教を立つ。一には釋迦經、屈曲教と名く。機の性に逐ひて計に隨ひ

て著を破するを以ての故に。涅槃等の如し。二には盧遮那經、平道教と名く。法性を逐ひ

【木樹草座】菩提樹下の説法をいふ

【二】立教差別の第二に、是非を辨する一段なり。

自在に説くを以ての故に、華嚴等の如し。彼師此一教を釋するに、略して四の別有り。一には、異。謂はく、彼は釋迦の化身の所説、此は是れ遮那の十身の所説なり。二には、處異。謂はく、彼説は娑婆世界の木樹草座に在り。此説は蓮華世界的寶樹金座に在り。三には、衆異。彼は聲聞及び菩薩の與に説き、此は唯菩薩の極位同じく説くなり。四には、説異。謂はく、彼は但是れ一方の所説、此は要す十方を該ねて同説す。廣く釋すること、彼華嚴の疏一の中の如し。

第二に是非を辨ずとは、此上の十家の立教の諸徳は、並に是れ當時の法將、英悟倫を絶す。思禪師、智者禪師等の如きは、神異感通して、迹を登位に參はる。靈山に法を聽きて今に憶在せり。雲法師此に依りて宗を聞きて法華を講じ、天の雨華を感ず等、並に僧傳等に顯るる所の如し。又、此諸徳豈夫れ異を好まんや、故に聖教を分つは、但解は群典を該ね、異軫は根を呈するを以てなり。言じむことを得ずして、宗を聞きて別釋し、務めて聖説をして、各其宜に契はしむ。問ふ、此上の十説誰か是、誰か非なる。答ふ、二成實論に依るに、佛、内外中間の言を説き、遂に即ち定に入るの時、五百の羅漢有りて、各此言を釋す。『佛定を出でて後、同じく世尊に問ふ、『誰か佛意に當る。佛の言はく、』並に我意に非ず。』諸人佛に問ふ、『既に佛意に當らず、將に罪を得ること無からんや。』佛言はく、『我意に非ずと雖も、各正理に順ず。聖教と爲すに堪へたり、福有りて罪無し。』況んや此諸説各多少の聖教有りて證と爲す。是故に全く非棄すべからざるのみ。

【二】立教差別の第三、西域の説を述す。

【真師の三輪】金光明により轉照持の三輪を立つ。

【波多の四教】遠摩波多の(法密)四諦教、無相教、法相教、觀行教をいふ。

【波頗の五説】波頗密多羅(朋友)四諦教、安樂教、觀護教を立つ。

【戒賢】梵名尸羅跋陀羅(Silabhadra)摩訶陀園那爛陀寺の僧、護法の弟子。

【波法】梵名遮摩波羅(Dharmapala)唯識十大論師カ。

【唯識十大論師】(Yantra)唯識十大論師の「生空」非ず。小乘は法有我無も説くをいふ。【三性三無性】遍依、圓の三性、生に對して、相、生

第三に西域の説を述ぶとは、眞諦の三輪、波多の四教、波頗の五説、並に別に説くが如し。又、法藏は文明元年中に、幸に、中天竺の三藏法師、地婆訶羅に遇ふ。唐には日照と言ふ。京の西、太原寺に於て、經論を翻譯す。余、親奉の時に乃ち問ふ。西域の諸徳

一代の聖教に於て、權實を分別すること有ること巨きやいなや。三藏説いて云はく、近代

天竺、那爛陀寺に、同時に二の大徳論師有り。一を戒賢と名け、二を智光と稱す、並に神解倫に超え、聲五印に高く、群邪稽顙し異部歸誠す。大乘の學人之を仰ぐこと日月の如く、

天竺に獨歩せるは、各一人ならくのみ。所承の宗、別なるを以て、立教不同なり。謂はく、戒賢は即ち遠くは彌勒、無著に承け、近くは護法、難陀に踵ぎ、深密等の經「瑜伽」等の論に依りて、三種教を立つ。謂はく、佛、初め鹿園にして小乗の法を説き、生空を説く

と雖も、然も猶未だ法空の眞理を説かざるが故に、了義に非ず。即ち「四阿含」等の經なり。第二時の中には、遍計所執の自性に依りて、諸法、空なりと説くと雖も、然も猶未だ依他圓

成の唯識の道理を説かず、故に亦了義に非ず。即ち諸部の般若等の教なり。第三時の中に、方に大乘の正理に就いて、具に三性三無性等の、唯識の二諦を説く、方に了義と爲す。即ち

「解深密」等の經なり。又此三位に各三義を以て釋す。一には機を攝し、二には教を説き、三には理を顯す。且く初は唯聲聞を攝して唯小乘を説き、唯生空を顯す。二は、唯菩薩を攝し、唯大乘を説き、唯二空を顯す。三には普く諸機を攝し、通じて諸乘を説き、具に空有を顯す。是故に前の二は、攝機教理各互に闕くること有るが故に、了義に非ず。後の一

勝義の三無性の空を説くをいふ。

【提婆】本、執師子園の人、龍樹の弟子。

【清辯】梵名婆毘吠剌（Jihvavikra）と義法師と同時の人、論師の有宗を説いて空宗を立つ。

【外道の自性等】邪因無因を破するに、數論の自性、勝論の十句義、自在梵天等、諸法の因と説くを斥す。

【緣生實有】因緣所生の物體實にありといふなり。

【般若燈論】十五卷、波羅頗迦羅蜜多辯の譯、分別明菩薩、中論五百偈を釋せしもの。

は、機として攝せずといふこと無く、教として具せずといふこと無く、理として圓ならずといふこと無し、故に了義と爲す。第二に智光論師は、遠くは文殊、龍樹に承け、近くは提婆、清辯に稟く、「般若」等の經、「中觀」等の論に依りて、亦三教を立つ。謂はく、佛初鹿園にして、諸の小根の爲に小乗の法を説き、心境俱有を明し、第二時の中には、彼中根の爲に法相大乘を説き、境空心有の唯識の道理を明す。根猶劣なるを以て、未だ平等眞空に入らしむること能はず。故に是説を作す。第三時に於て、上根の爲に、無相大乘を説き、心境俱空、平等一味を辨じて、眞の了義と爲す。又、此三位、亦三義をもて釋す。先づ機を攝すとは、初時に唯二乗の人の機を攝す、第二に通じて大小の二機を攝す。此宗に一分の二乗、佛果に向はずと計するを以てなり。三に唯菩薩を攝す、漸顯に通ず。諸の二乗、悉く佛果に向ひて、異路無きに以ての故に。二に教に約すとは、初は唯小乗を説き、次は三乗に通じ、後は唯一乘なり。三に顯理に約すとは、初は外道の自性等を破するが故に、緣生の法、定んで是れ、實有なりと説く。次には即ち漸く、二乗の緣生實有の義を破し、此緣生を説きて、以て似有と爲す。破、此眞空を怖畏するを以ての故に、猶假有を存して、之を接引す。後時には方に究竟の大乘に就きて、此緣生即ち是れ性空にして、平等一味不礙の二諦なることを説く。是故に法相大乘の有所得等は、第二の教に屬す、眞の了義に非ず。此三教の次第は、智光論師の『般若燈論』の釋の中の如し。具に『蘇若那摩訶衍經』の説を引く、此には『大乘妙智經』と云ふ。此れ昔未だ聞かざる所なり。

【二三】 立教差別の第四、相違を會す

【悉檀】 (Siddhan) 譯して成といふ。四あり、一、世界悉檀、各各爲人悉檀、對治悉檀、第一義悉檀これなり。今は、衆生の機、宿種の淺深に隨ひ法を説くをいふ。

【四意趣】 平等、別時、別義、衆生樂欲の四。今は衆生の意樂に隨ひ説法するなり。

第四に相違を會すとは、問ふ『此二説、既に各聖教にして、互に矛盾を爲す。未だ知らず、和會すべしとや爲ん、會すべからずとや爲ん。』答ふ『會すること無く、會せざることを無し。初に會すること無しとは、既に並に聖教なり。緣に隨ひて、物を益す、何ぞ會を須ふることを俟たん。即ち是れ『智論』の四種の悉檀の中の、各各爲人悉檀なり。亦是れ『攝論』の四意趣の中の衆生樂欲意趣なり。一法の中に於て、或は讚じ、或は毀す。是故に二説強ひて會すべからず。二に會せざること無しとは、二門有り。一には、教の機に應ずるに約し、二には機の教を領するに約す。前の中は但佛の教門の了と不了となり。其に四位有り。一には機を攝するの寛狹に約し、二には言教の具闕に約し、三には益物の大小に約し、四には顯理の淺深に約す。初をいはば、若し唯二乘を攝して、菩薩を兼ねず、或は唯菩薩にして二乘を兼ねざれば、各機を攝すること狭きが故に、了義に非ず。若し寛く三機を攝し周く盡さば、方に了義なり。二には、若し唯小を説きて、兼ねて大を説かず。或は唯大乘を説きて、小乘教を兼ねざれば、言に各闕くること有り、故に了義に非ず。若し言に大小を包ねて、三乘を具足するを、方に了義と爲す。深密經等は、上の二門に據る。戒賢の所判、亦道理有り。三に益物の大小に約すとは、若は一切衆生をして、小乘の益を得しめ、或は一切の有情をして、大乘の益を得しむ。小益を得ること有りて、全く究竟の益を得しむること能はざるは、俱に了義に非ず。若し能く、彼一切衆生、及び入寂の二乘をして、悉く皆當に大菩提の益を得しむべきを、方に了義と爲す。四には顯理の

【二に據の教云云】
初めに華嚴の初説
を以て、三時の前
後次第を難す。

淺深とは、若し緣起に於て、隨つて實有を説き、或は實を破すと雖も、猶假有を存す。既に相を會すること、未だ盡さず、理を顯すこと未だ極まらざるが故に、了義に非ず。若し緣生即ち是れ性空にして、緣起を礙へず、融通無二なることを説き、緣を會すること既に盡き、理性圓に現するを、方に了義と爲す。彼、妙智經は、上の二門に據る。智光の所判甚だ道理有り。是故に二説、各別門に據りて、互に相至せず。豈相違有らんや。二に據の教を領するに約すとは、問ふ、「二説の三教、各初には小を説くに、『華嚴』を初に説くこと如何が會釋せん。」答ふ、「諸徳に三釋あり。一は云はく、此三法輪は、漸悟の機に約して説き、『華嚴』の最初なるは頓悟の機に約して説く。」と。若し爾らば、『密迹力士經』には、初時に具に三乗の法を説く。此れ漸に屬すとや爲ん。若し是れ漸教ならば、應に唯小を説くべし。若し是れ頓教ならば、應に唯大を説くべし。彼既に三を具せば、極めて違害を成す。是故に此釋亦用ひ難し。一は云はく、「若し顯了門に依らば、則ち前の如きの三法の次第有り。若し秘密門に約せば、即ち諸説同時なり」と。若し爾らば、即ち初時には、小は顯にして、大は密なり、何ぞ大は顯にして小は密を以てせざるや。又、此秘密を判ずることは、何の聖教に出でたるや、理既に齊からず、復聖教無し、故に依用し難し。此上の二釋は、此三法輪に法を攝するも盡さず。初は即ち漸にして頓に非ず、後は即ち顯にして密に非ず。一は云はく、但是れ如來の圓音一たび演ぶるに、異類等く解す。小に就きて結集すれば、唯小乘を説き、大に就きて結集すれば唯大乘を説き、道に就きて結

【今此難を云云】
上は相宗の會通を
難殺し已りて、今
記主の自義を述す

【樹王】 菩提樹の
こと。

集すれば、具に三乘を説く。若し爾らば隨つて一結集するに、俱に前後無し。何ぞ此の如
きの三教の次第有らんや。今此難を解して便ち二説を會せんに、汎く如來の圓音の説法を
論ずるに、大いに例するに二有り。一には此世に根定まる者の爲に説き、二には此世に根
不定の爲に説く。初の中に三節あり。一には、或は衆生此世に小乘根性の定まること有
る者は、佛の始終唯し小乗を説くと見る。小乗の諸部の如し、三藏を結集して、總じて大
乘無し。二には、或は衆生此世に三乘の根性熟すること有る者は、佛の始終但三乘を説く
と見る。『密迹力士經』の如し。佛初鹿園説法の時、無量の衆生、阿羅漢果を得、無量の
衆生、辟支佛の道を成じ、無量の衆生、菩提心を發し、初地に住する等、乃至廣く説く。
『大品』『大龍若』も亦此説に同じ。此義を以て後時の所説に準ずるに、皆通じて此三乘を
具す。諸の大乗經の中の所説の如し。三には、或は衆生、此世に一乘の根性熟するこ
と有る者は、即ち初佛、樹王の下、華藏界の中に於て、海印定に依りて、唯菩薩の爲に、
無盡圓滿自在無礙の法門を演説し、主伴を具足すと見る、乃至終極も亦此説に同じ。此法
の中に、九世を通括し、前後を攝するを以ての故なり。二に不定根の爲とは、二位有り。
一には、此世には小乗の根不定の故に、三乘の位に進入すべきに堪へたるものは、即ち初
に唯小を聞きて、以て不了と爲す。次に唯大を聞きて亦是れ了に非ずとし、後に三を具す
るを聞きて、方に了義と爲す。『解深密經』は此根に就て辯す。二には、此世には小乗の根
不定の故に、一乘の位に進入すべきに堪ふる者は、即ち初に唯小を説くを、不了教と爲す。

次に大小に通ずるも亦了教に非ず。後に三を會して一に歸し、唯一乘を説くを、方に了教と爲す。『妙智經』は此意に當るなり。根の不定なるに由りて、此二門有り。是故に二師各一門を述ぶるが故に相違せず。是の如く、此世の根に、定と及び不定と有るに由るが故に、是故に彼教門をして、或は前後有らしむ、或は前後無きことも、準釋して知んぬべし。

【二門】立教差別の第五、現傳を明すに、まづ西域の兩説を承けて、新舊兩譯諸師の所立を總括す。

【三乘の大乗】新譯三藏の門にして、肪尙光基四哲等これ。

【前の師云云】別して教證を顯すに、初に大乘三乘を顯す。

【正性離生】無滯智を生じて煩惱を斷ずるを正性といふ、かく一分の正性を離るるを正性離生といふ。

第五に現傳を明すとは、當今の諸徳、大乘の中に、自ら二説有り。一には、三乘の大乗を立つ。此宗には、入寂の二乘、定んで成佛せずと許すを以て、是故に彼五性の差別に約して、具に三乘を説く。二には、一乘の大乗を立つ。此宗には、入寂の二乘も亦並に、成佛すと許すを以て、是故に此佛性遍有に約して唯一乘を説く。前の師、教を引きて成立して云はく、『大般若經』の第五百九十三に云ふが如し、「若し有情の類、聲聞乘に於て、性決定せる者は、此法を聞き已りて速に能く自の無漏地を證得す。獨覺乘に於て、性決定せる者は、此法を聞き已りて速に自乘に依りて出離を得。無上乘に於て、性決定せる者は、此法を聞き已りて、速に無上正等菩提を證す。若し有情の類、未だ正性離生に證入せずして、三乘に於て性不定の者なりと雖も、此法を聞き已れば、皆無上正等覺心を發す」と。又『解深蜜經』の第二に云はく、「乃至更に法要を説く。謂はく、相に自性の性無く、勝義に自性の性無し。乃至諸の聲聞乘、種性の有情も、亦此道此行迹に由るが故に、正しく無上安穩の涅槃を得。一切の聲聞、獨覺、菩薩、皆共に此一の妙清淨の道なり。皆同じく此一の究竟清淨にして、更に第二無し。我此に依るが故に、密意をもて、説き

【又瑜伽論云云】
次に經論を引きて
三乘の差別を證す
【補持伽羅】(一)三
情と譯す。

【趣寂】二乘の人
寂滅涅槃に趣向す
るをいふ。

【二に後の師云云】
一乘の大乗教を證
するに初に佛性平
等に約し、次に眞
實の一法に約す。

【又云く…脱す】
三外の大乗を結す
【又第三云云】二
に無趣寂を證明す

て唯一乘有りと言ふ。一切の有情界の中に於て、種種の有情の種性有ること無きに非ず。或は鈍根の性、或は中根の性、或は利根の性、有情差別せり」と。解して云はく、此は三乘同一の所觀の、無性の道に約する故に、密意此を説きて、名けて一乘と爲す。理實には、三乘各涅槃を證す。是れ一に非ざるなり。又『瑜伽論』の第三十七に云はく、「補持伽羅成就の者に、略して四種を説く。聲聞の種性有るは、聲聞乘を以て之を成就し、獨覺の種性有るは、獨覺乘を以て之を成就し、佛種性有るは、無上乘を以て之を成就し、無種性の者は、即ち善趣を以て之を成就す」と。善戒『地持』皆此説に同じ。又『解深密經』に云はく、「一向趣寂の聲聞種性の補持伽羅は、諸佛の施設の、種種の勇猛の、加行方便化導を蒙ると雖も、終に當に道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を證すべからしむる能はず」と。『深密解脫』も亦此説に同じ。『十輪經』の第九卷に亦三乘各定んで差別すと説く。是の如き等の文は、並に小乘に非ず。是れ大乘の中に、三の差別を許す。是故に各々三乘の大乗教と爲すなり。二に後の師、彼一乘の大乗教を引くとは、『涅槃經』の三十三に云はく、「一切衆生同く佛性有り。皆同一乘、同一解脫、一因一果、同一甘露にして、一切當に常樂我淨を得べし、是を一味と名く」と。又『法華』の第一に云はく、「十方佛土の中には、唯一乘の法のみ有り、二も無く、亦三も無し。佛の方便の説を除く」と。又云はく、「初に三乘を以て、衆生を引導して、然して後に、但大乘を以て之を度脱す」と。又第三に云はく、「我減度の後、復弟子有りて、此經を聞かず、菩薩の所行を知らず覺らず。自ら所得の功德に

【又法華論云云】
以上の無趣寂の意
を重顯す。

【又楞伽云云】
次に伴三昧に約し
て明す。

【無上依經】 二卷
後諸譯。

【寶性論】 四卷。
後魏 勒那摩提譯。
【佛性論】 天親造
眞諦譯。

【五】 教の權實を
定む。
【有る説云云】 慈

於て、滅度の想を生じて、涅槃に入らん、我餘國に於て作佛して、更に異名有らん、是人
滅度の想を生じて、涅槃に入ると雖も、而も彼土に於て佛の智慧を求めんと。『大智度論』
の第九十五も亦此説に同じ。又『法華論』の中の、四聲聞の内の退菩提心と及び應化と、
此二の聲聞は、佛授記を與へ、決定と及び増上慢と、此二は根本未だ熟せざるが故に、菩薩
授記を與へ、方便して發心せしむ」と。解して云はく、既に但未熟と云ひて、無根と言は
ず。故に知んぬ、定んで當に佛菩提を得べし。又復「方便して發心せしむ」と云ふ。即ち
是れ菩提心を發すなり。又『楞伽』の第二、第四、第七に、皆同じく二乘に實の涅槃無
く、但是れ三昧力をもて住す。後に必ず當に無上菩提を得べしと説く。『法華論』に云はく、
「第四の人とは、方便して涅槃の城に入らしむるが故に」と。涅槃の城とは諸禪三昧の城な
り。彼城を過ぎ已りて、大般涅槃の城に入らしむ。此れ『楞伽』の住三昧樂に同じ、分段
を離るるが故に、假に涅槃と説く。而も實には彼變易身有り、故に淨土の中に於て、菩薩
の道を行す。『勝鬘經』に云はく、
唯如來の二有りて般涅槃を得」と。又此經及び『無上依經』、『寶性論』、『佛性論』に、皆
入滅の二乘、三界の外に於て、變易身を受くと説く。又『密嚴經』の中に、二乘は必ず灰
斷永滅無し」と。是の如き等の文、亦是れ大乘なり。三乘の決定差別を許さず。是故に名
けて一乘教と爲す。

第六に權實を定むとは、或は有る説は、一乘は是れ權、二乘は是れ實、『深密經』の第一

恩所傳の一乘權、三乘實の綱格によりて一三權實の旨を明す。
【第二…説く】五性各別論より、菩薩に對していふ。

【又法華云云】違文を會通す。初に無趣寂の文を會す無上依經の下は廻心向大の文を會す

【或は有る説云云】第二説。三權一實今家の正意是在り。

時の教は、唯、聲聞乘に發趣する者の爲なるを以て、即ち總じて成佛すること無しと説く。第二時の教は、唯大乘を發趣し、修する者の爲に、即ち總じて、成佛せざることを無しと説く。此二は若は過、若は不及なり。故に俱に了義に非ず。第三時の教に若くは莫し。有種性の者は成じ、無種性の者は成ぜず。方に了義と爲す。『法華』は既に第二時の教に當る。即ち是密意の權説なり。是故に『勝鬘經』には、一乘を以て方便の説と爲す。是故に理實には、但不定種性に約して、説きて一乘と爲す。『攝論』『莊嚴論』『顯揚論』等、皆此釋に同じ。又『法華』の第三に滅度の想を生じ、涅槃に入る等は、『瑜伽』の八十一に依るに、並に是れ變化の聲聞、入滅を示現す。『楞伽』『密嚴』皆此會釋に同じ。『無上依經』『寶性』等の論は、並に是れ不定の二乘、菩提に向ふ者の増壽の變易なり。入滅して更に起ちて身を受くと謂ふには非ず。『瑜伽』に本轉の二識、成就不成就の四句を説く中に、第四の俱不成就とは、聲聞獨覺の無餘依涅槃界に入る時なりと爲す。又八十に云はく、『無餘依涅槃界の中には、唯清淨眞如法界のみ有り』と。此等の文に依るに、涅槃に入り已りて身智俱に滅し、根識永く無し。豈變易有りて、修行して成佛せんや。是故に唯一乘のみ有り、極了義に非ず。『深密經』の中の第三時に、普く一切乘に發趣する者の爲に説くを、名けて了義と爲す。故に知んぬ、三乘は是れ盡理の實教なり。又『深密』の第二、第四に皆、一乘は是れ密意の説なりと云ふ。故に知んぬ、是れ權なり。或は有る説は、一乘は是れ實、三乘は是れ權なり。謂はく、『法華經』の唯一佛乘のみ是れ實なり。『深密經』の三乘の後に説き

【四の聲聞】決定小聲聞（修行して小果を得）上慢聲聞（小法を習ひ未得を得といふ）退大聲聞（本菩薩たりしが中途にして生死を疲厭し退小果を得て修習し聞（菩薩聲聞形を現す）是なり。

【法華中：】べけんや【變化示現滅を破す。

て、定性の二乗の滅、亦存せざるが故に、方便して三と説く。實には唯一なるが故に。若し「法華」は是れ第二時の教なり、不定の二乗を引かんが爲の故に、一切悉く皆成佛すと説く。而も猶未だ、定性不定を説かざるが故に、了に非ずと言はば、若し爾らば「法華」の時、猶未だ定性の二乗有りと言かず。何に因りてか彼論に四の聲聞を立つるや。彼定性の言何の處に従つて得るや。若し定性有らば、豈總じて成ずることを得んや。若し總じて成ずると許さば、何ぞ定性と名けん。故に知んぬ、定性の言は、前の「深密」の所説を標し、後に「法華」に至りて、悉く全く成佛すと明す。是故に彼論は、此經の文に順じ、前の權説を會して、後の實學に歸す。故に知んぬ、「法華」は定んで「深密」の後に在りて説くことを「妙智」の三教にも、一乘を三乗の後に在りて「梁論」の成立正法の三の中にも、亦一乘は後に在り、並に此説に同じ。「法華」の中の「滅度の想を生じ、涅槃に入る」等を釋して、變化示現の滅と爲すは、極めて教理に違ふ。教に違ふとは、若し是變化の聲聞ならば、即ち實に是諸佛菩薩なり。豈自ら示す所の涅槃に迷うて、乃ち滅度の想を生すべけんや。若し此釋を作さば、元未だ經を讀まず。理に違ふとは、若し涅槃に入らば、是れ永く斷滅す。諸佛菩薩、所化の前に於て、涅槃を示現するに、若し彼所化の不定種性の、是勇猛の者は生死を怖れず、能く勝行を修す。若し一類の性怯弱なる者有りて、生死を怖畏して、佛菩薩に學んで、先づ涅槃に入り、後に、菩薩の道を行ぜんと欲せんと擬せば、汝が宗の入滅、既に起ること有ること無し。豈彼一類の衆生を悞らざらんや。此れ乃ち衆生を悞る。

何ぞ引導を成ぜん。況んや復此文元より相于らず。又亦未だ『勝鬘經』の意を見ず。乃ち輒く一乘を斷じて以て方便と爲んや。彼經に云はく、「若し如來、彼所欲に隨ひて而も方便して説くり謂はく二乘なり。即ち是れ一乘にして二乘有ること無し」と。二乗の一乘に入る。一乗とは即ち第一義乘なり。又彼經の中に、廣く二乘を破して無涅槃と云ふ。又云はく、「此經は一切の疑を斷ず」と、決定了義にして、一乘の道に入る。豈一乘を説きて以て方便と爲んや。『解深密經』に「一乘は是れ密意なり」とは、是れ未だ法華を説かざるの前のが故に、是説を作す。後に法華を説く時に及んで、前の三乘皆是れ方便と會す。『瑜伽』の轉木俱滅、『毘揚』の六義をもて、一乘を説く。『攝論』の十義は一乘を説く、皆「深密」に同じく會釋すべし。此等の論は彼經に隨ひて、造するを以ての故に。『法華論』に、「決定の二乘亦記を受く」等と説く、是れ此本經に隨ひて、造する故に。若し一乘を信ぜずして、權を守りて實に乘くは、甚だ惑むべしと爲す。故に『百喻經』の第二卷に云はく、「昔一の聚落有り、王城を去ること五由旬、村の中に好美の水有り、王、村人に勅して、常に日に其美水を送らしむ。村人疲苦して、悉く移りて此村を遠け去らんと欲す。時に彼村の主、諸人に語りて言はく、「汝等去ること莫れ、我當に汝が爲に王に白して、五由旬を改めて、三由旬と作し、汝をして近きことを得て、去來疲れざらしむべし」と。則ち往いて王に白す。王爲に之を改めて三由旬と作す。衆人聞き已りて、便ち大いに歡喜す。人有りて語りて言はく、「此れ故是れ木の五由旬なり。更に異ること有ること無し」と。此言を

【六】立教差別の第七、三乘一乘の開合を辨ず。これ法門に約せば、還機逐法の分際を示し、經本に就かば、本末法輪の別を知らしめんためなり。科を立つるなり。

聞くと雖も、王の語を信するが故に、終に背て捨てず。世間の人も亦復是の如し。正法を修行して、五道を度りて涅槃の域に向ふに、心に疲倦を生じ、便ち捨離して、頓に生死に駕せんと欲して、復進むこと能はず。如來の法王に大方便有り、一乘の法に於て、分別して説く。小乗の人之を聞きて歡喜して、以て行じ易しと爲し、善を修し徳を進めて、生死を度らんことを求む。後に人あつて、三乘は無く故是れ一乘なりと説くを聞くも、佛語を信するも以て、終に背て捨てざること、彼村人の如き、亦復是の如しと。解して云はく、此經は即ち是れ金口の良斷、權實顯然たり。諸説を息むべきのみ。

第七に開合を顯すと、然も此三乘一乘に、各二種有り。三乘の二とは、一には異時の三乘『深密經』の、初時は唯大乘、第二は唯大乘なるが如し。二には同時の三乘、第三時の普く一切乘に發趣するが爲等の如し。此教の中に於て、一乘は相隠れ、三乘は相顯る。是故に顯に就くに、總じて三乘と名く。一乘の二とは、一には異を破して一を明す、『法華經』の如し。二の實滅を破す。及び『涅槃經』に無佛性を破す。但に是れ權に對して、會破して方に一乘を説く。二には直體に一を顯す、『華嚴經』の如し。三乘に對せざれば、所破無きが故に、大菩薩の爲に、直に法界成佛の儀を示すが故に、是故に初華嚴を説くには、權の會すべき無く、終に涅槃を説くには、前の諸の權を會す。是れ即ち權を盡して無きに非ざれども、實を顯せば是れ俱に一乘と名くるを以てなり。又復更に開するに、各三種有り。初に三乘の三とは、一には始別終同の三。謂はく、始は因に約して、四

【四諦緣生六度】
聲聞、緣覺、菩薩の修行すべき行なり。即ち聲聞は四諦の理を、緣覺は十二因縁を、菩薩は布施等の六度を修す。

【一乘の三云云】
一乘の三類を説く

諦、緣生、六度等の別を修す。終は得果に就く、三乘の人身智同じく滅す。『俱舍』等に説くが如し。此は初時の小乗教に約して説く。二には始同終別の三。謂はく、同じく般若を開き、同じく無性を觀じて、三乘の人各自果を得。前に引く所の説の如し。若し聖諦、緣生、六度の行異なるに據らば、亦名けて始終各別と爲すことを得。此は是れ、第二第三時の教の説なり。三には近異遠同の三。謂はく、『法華』等の初に、三乘を以て方便誘引し、後に同じく大乘を以て得度せしむる等なり。一乘の三とは、一には三を存するの、一は、『深密』等に説くが如し。二には三を遮するの、一は、『法華』等の如し。三には表體の、一は、『華嚴』等の如し。是故に通じて説くに、其四句有り。一には、或は唯三にして一無し、『俱舍』等の如し。二には或は唯一にして三無し、『華嚴』等の如し。三には或は亦は一亦是三、此に二位有り。初には、三は實、一は權、深密』等の如し。後には一は實、三は權、『法華』等の如し。四には或は一に非ず、三に非ず、理の絶言に約す。故に『大般若』の中に、舍利子、善現に問うて云はく、『如來諸天子に記を授くるは、三乘の中に於て、何の乗か記を得るや。』善現答へて言はく、『法相の中に於て一無く、三無し、云何が問うて、何の乘に於て記を得ると言ふ。』と。是故に一乘三乘に存有り、泯有り、諸説不同なり。或は唯二乗を破すと聞き、即ち唯不定種性に約すと謂ふ。或は無二亦無三と聞き、即ち大乘の實教も亦破すと謂ふ。或は大乘を破せずと聞き、即ち謂ふ、大乘の權教亦存すと。今釋するに二位有り。一には事に約すれば、二乘の實滅を破し、二には教に約すれば、亦大乘の權教を會

【七】立教差別の第八、教世の前後を明して經の分齊を示す。

【五部律】一、曇無德部(Dharmapala四分律)二、薩婆多部(Sarvastivada十誦律)三、彌沙塞部(Mahāsāhāya五分律)四、迦葉遺部(Kāśyapa部)五、婆伽富羅部(Vāṣṭipūtrīya)九世、現、宋の三に各三世を具するをいふ。

【譬へば日・作す】本經性起品の日光等照の論。【如來應供等正覺】佛の十號のうち、第一より第三の名稱。

す。大乘の權教に、入寂の二乘、成佛せずと許すが故に。但深く二乘を破すれば、即ち是れ三を破す。是故に二を破し三を破す、皆相違せず。

第八に教の前後とは、今如來一代の所説を辯ずるに、時に約して教を顯す。大いに例するに四有り、一には本末差別門、二には依本起末門、三には攝末歸本門、四には本末無礙門なり。初の中は、本末同時、始終一類にして、各異説無し。然るに三位有り。一には、若し小乗の中には、即ち最初に彼論陳那等を度し、最後に須跋陀羅を度し、中間に亦復唯小乗を説き、唯小機を益す。四阿含經「及び五部律」「遺教」等の説の如し。二には若し三

乘に約せば、即ち始より終に至るまで、皆三乘を説きて、通じて三機を益す。前に引く所の「力士經」「大般若」等の諸大乘經の如し。中に於て、權實の不同有りと雖も、皆三乘を具す。三には、若し一乘に約せば、即ち初より極に至るまで、大菩薩の爲に唯一乘を説く最初の時に、「華嚴」等を説くが如し。其中、二乘に通せず、復九世を攝し、前後を該ぬ。是故に極に至るまで、更に異説無し。然るに此三類は、既に此世に根定まれる者に依りて説く。此れ即ち諸教相望して、各始終に通じ竟に前後無し。二には、依本起末門とは、四

類有り。一には謂はく、初時に大菩薩の爲に、大乘を説き、次に中乘を説き、次に小乘を説き、後に人天を説く。此經の下の性起品に「譬へば日出でて先づ一切の諸の大山王を照し、次に一切の大山を照し、次に金剛寶山を照し、然して後に普く一切の大地を照すが如し、如來應供等正覺も亦復是の如し、無量無邊法界の智慧の口輪を成就し、常に無量無礙

し、如來應供等正覺も亦復是の如し、無量無邊法界の智慧の口輪を成就し、常に無量無礙

【文殊問經】二卷
 文殊師利問經の略
 僧伽婆譯す。う
 ち、大乘戒、悉曇
 小乘分出を説く。

【普超三昧經】三
 卷、文殊師利普超
 三昧經の略、竺法
 護譯す。

【入大乘論】二卷
 摩意著、北凉道秦
 譯す。大乘教の梗
 概を述ぶ。

【無量義經】一卷

智慧の光明を放ちて、先づ菩薩摩訶薩等の諸の大山王を照し、次に縁覺を照し、次に
 聲聞を照し、次に決定善根の衆生の、應に隨ひて化を受くるを照し、然して後、悉く一
 切衆生を照し、乃し邪定に至り、爲に未來饒益の因縁を作す」と、云ふが如し。又此品の
 中に、「三千界の初、始めて成ずる時、先づ色界の諸天の宮殿を成じ、次に欲界の諸天の宮殿
 を成じ、次に人の處及び餘の衆生の諸の所住の處を成ずるが如く、如來應供等正覺も亦
 復是の如し。先づ菩薩の諸行智慧を起し、次に緣覺聲聞及び餘の衆生の一切の善根を起す」
 と。此等の文に依りて、佛、初時に大を説き、後に漸く小を説くことを明す。法に約して
 以て、本に依りて末を起すことを明す。根器に約するに非ず。先づ大を學し、後に小を學す
 ること、無きを以ての故に。問ふ、「法豈別ならずや。」答ふ、「小乘の法は定んで大乘より流
 出する所なるが故に。『文殊問經』に云はく、「十八及び本の二、皆大乘より出づ」と。『普超
 三昧』及び『入大乘論』の意並に此に同じ。三に攝末歸本門とは、『無量義經』に依れば、
 初時に小乘を説き、次に大乘を説き、後時に大乘を説く。『解深密經』に依れば、初時は唯
 小乘、第二時は唯大乘、第三時に三乘を具す。『妙智經』に依れば、初時は唯小乘、次に三
 乘を具し、後は唯一乘、是れ即ち『無量義經』は大を合して小を聞し、『深密』等は、小を
 合して大を聞す。謂はく、大乘に於て權實を聞す。然るに『深密』『妙智』既に各聖教な
 り。一を取り、一を捨つべからず。是故に此二經を合すれば、總じて四門有り。一には初
 時は小乘、二經同説、第二時は唯大乘なり、唯『深密』の説、第三時は三乘を具す、此は

善善善摩伽陀耶舍
譯す。法華三部の
一、無量の法は一
實相より生ずと説
く。

【定性の二乗】五

性各別して云へば
二乗性と決定せる
ものは、無情有情
と共に永久に成佛
の縁かく。

【闡提】成佛し能
はざるもの。斷善
と大悲との二種あ
り。
【解節經】 解深密
經なり。

是れ「深密」の第三、「妙智」の第二、第四時は唯「一乘」なり、唯「妙智」第三の義なり。是
故に當に知るべし「妙智經」は「深密」の後に在りて説くことを。若し「妙智經」は、此土
に未だ翻せずと謂はて、信ぜずんば、彼「深密經」は、既に第三時の教に當る。然るに定
性の二乗及び無性の有情、並に成佛せずと許し、二乗を具足せるを、一切乗と名くること
は、是れ即ち「法華」「涅槃」は、既に「深密」の後に在りて説く。然るに、定性の二乗及び
無性闡提、悉く皆成佛す。當に知るべし、即ち是れ第四時を、一乗教と名くることを。是
故に「妙智經」と懸に會して疑ふこと無し。又何小乗教は「法華」等に依るに、佛成道
の後、三七日等の説、眞諦三藏の記に依るに云はく、「佛成道七年の後、諸部の般若を説
く」と。是れ第二時の義なり。又云はく、「三十八年の後に「解節經」を説く」と、第三時
の教に當る。今「法華經」及び「無量壽經」に依るに、並に四十年の後「法華」を説く等と云
ふ。故に知んぬ、是れ「深密」の後の説なることを。眞諦の此説は、必ず聖教有るべし。若し聖
教無くして豈自ら年數を作るべけんや。若し此を信ぜずんば、即ち「涅槃經」最も末後に
居するは、是れ即ち疑無し。然るに此四時は、昔前は權、後は實にして、後を以て前を
會す。「法華」「涅槃」に「深密」の三乗を會して、究竟一乘に歸すれば、其義決定せり。是
故に此四は淺より深に至りて攝末歸本の漸次を明すなり。四に本末無礙門は、謂はく、初
に山王を照す。本教を擧ぐることは、本に非ずんば、以て末を起すこと無きことを明す。後
に大海に歸する異流を顯すことは、末を盡すに非ずんば、以て本に歸すること無きことを

【二八】立教差別の第九、義を以て教を分つに、初に機の趣入に約す。

【初に小乗云云】正しく五教を釋す【定性の二乗】不定性の者の成佛を許すも、闡提と定性の二乗を成佛せずとす。

【思益經】思益梵天所問經の略。

明す。是れ即ち本末交映し、與奪相資けて、方に攝生の善巧と爲すなり。是故に、通じて論ずるに、總じて五位有り。一には根本一乘教、此は『華嚴』の説の如し。二には密意小乗教三には密意大乘教、四には顯了三乘教。上の三は『深密經』に説くが如し。五には破異の一乘教、『法華』、『涅槃』等の説の如し。此上の四門は、既に圓通無礙なり。是れ即ち前後即無前後、無前後、即前後にして、皆障礙無きこと之を思準すべきのみ。

第九に義を以て教を分つに、教類に五行り。此れ義に就きて分つ時事に約するに非ず。一には小乗教、二には大乘始教、三には終教、四には頓教なり。初に小乗とは「知んべし。二に始教とは『深密經』の中の第二、第三時の教には、同じく定性の二乗、俱に成佛せずと許すを以ての故に、今之を合して、總じて一教と爲す。此れ既に未だ大乘の法理を盡さず、是故に立てて大乘の始教と爲す。三に終教とは、定性の二乗、無性闡提、悉く當に成佛すべし。方に大乘至極を盡すの説なり、立てて終教と爲す。然るに、上の二教は、並に地位漸次に依りて修成すれば、俱に漸教と名く。四に頓教とは、但一念不生、即ち名けて佛と爲す。位地の漸次に依りて説かざるが故に、立てて頓と爲す、思益一に云ふが如し、「諸法の正性を得る者は、一地より一地に至らず」と。楞伽に云はく、「初地即ち八地乃至所有無し、何の次かあらん」等と。又下の地品の中に、「十地猶し空中の鳥跡の如し。豈差別して得べき有らんや」と。具には『諸法無行經』等の説の如し。五に圓教とは一位即ち一切位、一切位即ち一位なりと明す。是故に、十信の滿心に即ち五位を攝

【若し法明云云】
以下五教所説の論
要を述べて、差異
を辨す。

【所立の百法】 五
位百法をいふ。

【教を呵して】 當
教の正意、以心清
心不立文字なるを
故に。
【生心即妄】 心境
兩妄の安心を達成
す。
【淨名】 維摩居士
のこと。

【然るに云云】 以
下、開合を辨定す
【一には】 方便な
り。同別無礙の一
圓教を指す。

し、正覺を成ずる等、普賢法界、帝網重重、主伴具足するに依るが故に、圓教と名く。此
經等に説くが如し。若し所説の法相等に約すとは、初に小乗の法相に、七十五法有り。藏
は唯六有り。所説法原を盡さず、多く異評を起す。小乘諸部の經論に説くが如し。二に辯
教の中には、廣く法相を説き、少しく眞性を説く。所立の百法、擇分明なる故に、違評
無し。所説の八識は、唯是れ、生滅法相の名數にして、多くは小乘に同じ、固より究竟玄
妙の論に非ず。瑜伽一雜集等の説の如し。三に終教の中には、少しく法相を説き、廣く
眞性を説く。事を會して理に従ふを以ての故に、所立の八識如來藏に通じ、緣に隨ひて成
立すれば、生滅、不生滅を具す。亦百法を論ぜざれば、名數廣からず。又小に同じからざ
れば、亦多門無し。楞伽一等の經、寶性一等の論の説の如し。四に頓教の中には、總じて
法相を説かず。唯眞性を論ず。亦八識差別の相無し。一切の所有は、唯是れ妄想、一切の
法、實には唯是れ絶言なれば、教を呵して離を勸め、相を毀ちて心を泯す。生心即妄、不生
即佛にして、亦佛も無く不佛も無く、生も無く不生も無し、淨名の、默住して不二を顯
す等の如き、是れ其意なり。五に圓教の中の所説は、唯是れ無盡の法界、性海圓融にして、
緣起無礙なれば、相即相入すること、因陀羅網の重重無際にして、微細相容し、主伴無盡
なるが如し。十十の法門、各法界に稱ふ。具には下に説くが如し。然るに此五教に、開
有り、合有り、亦五重有り。一には、或は總じて一と爲す。謂はく、唯是れ如來の一大善
巧にして、生を攝する方便なり。二には、或は開して二と爲す。謂はく、一乘と三乘との

【後の一】 一乗教

教なり。前の諸教の中に、三を存し、二を泯する不同有りと雖も、然も皆通じて三乗趣入するが故に、三乗教と名く。後の一は直に本法を顯し、二乗に通ぜざるが故に、唯是れ一なり。即ち「智論」の中には、共教不共教と名く。此れ亦上の印師等の所立の二教に同じ。三には、或は分ちて三と爲す。謂はく、小乗、三乗、一乗教なり。「智論」に既に、此經を將て、二乗と共せずと爲す故に、名けて不共と爲す。即ち是れ一乘なり。「大品」等は、三乘同觀の得益に通ずと爲すが故に、名けて共と爲す、即ち是れ三乘なり。義準するに「四阿含經」は、既に菩薩に共せざれば、亦不共と名く、即ち是れ小乘なり、此三位に依りて、梁の「攝論」の第八に、「如來、正法を成立するに三種有り、一には小乘を立て、二には大乘を立て、有る本に三乗、三には一乗を立て、第三最勝の故に善成立と名く」と云ふ。此れ亦上の「妙智經」の説に同じ。又眞諦三藏の「部異疏」の第二卷の中にも、亦此説に同じ。四には或は分ちて四と爲す。此に二義有り。一には、上の共教の中に於て、存三泯二に約して、兩教を聞くが故に、四と爲す。一には別教の小乗、二には同教の三乘、「深密」等の如し。三には同教の一乘、「法華」等の如し。四には別教の一乘、「華嚴」等の如し。二には歷位無位に約して、漸頓の二教を聞くが故に、四と爲す。一には小乘教、二には漸教、三には頓教、四には圓教なり。五には或は散分して五と爲す。上の漸教に於て、復始終の二教を分つ。此上の五教は、局りて經を判ずるには非ず、但多分にして論ず。上に指す所の如く、諸の經論に通じて並に知んぬべし。

【九】立教差別の第十、理を以て宗を聞く一段なり。小乘の中、初六は十乘、後四は大乗教なり。

【人天の位】五戒十善を修するこれ人天教。

【非二聚】非即非菩薩の我。五法藏の第五、またこれなり。

【法無去來】法に現在ののみありて、過去未來なしといふ。

【現通假實】現在有體なれども、また假と實とありといふ。蘊は五蘊、界處とは十二處十八界なり。

【俗妄眞實】現在の五蘊の法に於て、俗諦の法は虚假なるを以て眞と名く。

【諸法但名】前宗今は漏無漏眞俗二諦共に空といふ。

【悉く皆性空】下

下

第十に理を以て宗を聞かば、宗に乃ち十有り。一には法我俱有宗。謂はく、人天の位及び小乘の中の犢子部等なり。彼は三聚の法を立つ。一には有爲法、二には無爲法、三には非二聚。即ち初の二は是れ法、後の一は是れ我なり。又五法藏を立つ。一には過去、二には未來、三には現在、四には無爲、五には不可説、此れ即ち、是れ我は是れ有爲無爲と説くべからざるを以ての故に。二には法有我無宗。謂はく、薩婆多等なり。彼は説かく、諸法は二種の所攝なり。一には名、二には色なり。或は四の所攝。謂はく、三世及び無爲なり。或は五法を立つ。一には心、二には心所、三には色、四には不相應、五には無爲なり。此即ち但此法のみ有りて、別に我有ること無しと。三には法無去來宗。謂はく、大衆部等に説かく、有は現在と、及び無爲となり、過去の法は、體用俱に無きを以ての故なり。四には現通假實宗。謂はく、説假部等、彼は説かく、去來の二世、有ること無し、現在の法の中に於て、蘊に在りては實なるべし。界處に在りては假と爲す、應に隨ひて、諸法の假實不定なりと『成實論』及び經部の別師、亦此類に同じ。五には、俗妄眞實宗。謂はく、説出世部等、彼は説かく、世俗の法は、假なり、虚妄を以ての故に。出世の法は實なり、非虚妄なるを以ての故にと。六には諸法但名宗。謂はく、一説部等なり。一切の我法は、唯假名のみ有りて、都て實體無しと。此又、初教の始に通ず。七には一切皆空宗。謂はく、大乘の初教には、一切の法悉く皆性空にして、情の表に超え、分別無しと説くが故に『般若』等の經に辯ずるが如し。八には眞徳不空宗。謂はく、終教は、諸經の所説、一切の法

は小乘の但空に、
上は終實の眞空を
簡びていふ。
【相想俱絶】言亡
慮絶の意。
【圓明具徳】圓満
明著にして、徳と
して缺くことな
く主伴無盡の自前
の相をいふ。
【二】教の對機差
別。

唯是れ眞如如來藏の中の實徳の攝なるが故に、眞體空ならず、性徳を具するが故に。九
には相想俱絶宗。謂はく、頓教の中の絶言所顯の離言の理は、理事俱に泯じ、平等離念な
り。十には圓明具徳宗。謂はく、別教一乘の如し。主伴具足し、無盡自在の所顯の法門な
り。上來の分教開宗は、粗梗概を陳べ、廣く教理を引く、其に義相を明すこと、別記に説
くが如し。

第四に教所被の機とは、通じて十位有り。中に於て前の五は、其非器を簡び、後の五は
正しく所爲を顯す。

前の中の五とは、一には眞に違するは非器なり。謂はく、菩提心を發さず、出離を求め
ず、此經に依傍して、名を求め利を求めて、我人を莊飾す。經は彼縁に非ず、故に其器に
非ず。下に云はく、「名利の爲に説法す、是を魔業と爲す。又、不淨の説法は惡道に墮す。
等の如し。二には正に背くの非器。謂はく、詐りて大心を現じ、偽りて別善を修す、近く
は人天を感じ、終には成佛せず。恐くは阿鼻地獄に墮して、多劫に苦を受くること、提婆
達多を闡提の頂と爲すが如し、又八大善人の、當に不善を成すべきが如し。前は初時に據
る、即ち知んぬべし、此は終時に就きて方に顯す。下に云はく、「菩提心を忘失して、諸
の善根を修する、是を魔業と爲す」と。經は此縁に非ざるが故に。亦非器なり。三には實
に乖くの非器。謂はく、巧偽ならずと雖も、然も自の執見に隨ひて、以て經文を取り、遂
に超情の至教をして、適に心に入らざらしむ、故に非器と成る。『地論』に云はく、「聞きて

【彼は：修行す】始權の菩薩、十信十住、十行、十廻向を修行する意。
 【二宗】權實二宗【第二に所爲】教の所被の機類を明すに、正爲兼爲の二は別教一乘に約し、在世滅後を以て分つ。

聞の解を作すこと得ざれば聞かず。又聲に隨ひて義を取るに五種の過失ある一等の如し。此上の三位は、俱に是れ凡愚の衆生の境界なり。下に云はく、「此經は一切衆生の手に入らず、唯菩薩を除く」と。良に以れば、此經は是れ、衆生流轉の縁に非ざるが故に、手に入らず。四には狭劣にして非器。謂はく、一切の二乗は、廣大の心無ければ、亦此器に非ず。下の文に云はく、「一切の聲聞緣覺は、此經を聞かず、何に泥んや受持せんや。又舍利弗等の五百の聲聞、皆聾盲の如く聞かず見ず」と。五に權を守るの非器。謂はく、三乘共教の諸の菩薩等は、自宗の中に隨ひて修行し、未だ初阿僧祇を滿ぜざれば、亦此器に非ず、故に下の文に云はく、「菩薩摩訶薩、無量億那由他劫に、六波羅蜜を行じ、道品の善根を修習すと雖も、未だ此經を聞かず。聞くと雖も、信じて受持し、隨順せず」と。是等は猶假名の菩薩爲り。問ふ、「璣珞經」等には、十千劫に十信を修して行滿すと。何が故に、此中には無量億等に、此經を信ぜざるや。答ふ、彼は但行布位の中に於て、信等を修行するを以て、此間融普賢の十信に、一切を攝するに於ては、猶未だ聞きて信ぜざるがごとし。此に由るが故に知んぬ、二宗差別することを。若し爾らざれば、修行既に爾許の時劫を経とも、此經を信ぜずんば、何ぞ菩薩摩訶薩と名けんや。非器を簡べ竟んぬ。」
 第二に所爲を顯す中の五とは、一には正爲、謂はく、是れ一乘不共教の中の普機の菩薩なり。正しく是れ此經の所爲の器なり。下の文に云はく、「是の如き經典は、但不思議乘に乗する菩薩摩訶薩の爲に説く、餘人の爲にはあらず」と。解して云はく、乘とは運轉を義

【一位即一切位】位位成佛を許すはこれに由る。

【二に兼爲】別教一乗の中に於て、今は滅後に約す。【劫盡の火】四劫の中、壞劫の最後大火災起りて、初禪以下を蕩盡するをいふ。【三に引爲】同教一乗の機を分ちて明す。次の轉爲亦同教の利益なり。

と爲す。若し別門に依らば、初運は十信に至り、次轉は十住乃至佛果に至りて、次第に相乘じて、以て彼岸に階る、可思議と名く。若し普門に依らば、一位即一切位なるが故に。亦一運即一切運なれば、不思議乘と名く。此乘に乗ずれば、十信の滿心に即ち六位を得。賢首品等に説くが如し。又十住等の位も皆亦是の如し。下の文の諸の會處に説くが如し。又善財、一生に五位を具する等の如し。皆是れ普法相收するが故なり。又舍那品に云はく、「餘の境界の所知に非ず。普賢の方便をもて、皆入ることを得」と。又普賢、衆を誡めて云はく、「普眼の境界清淨身、我今演説す。仁、諦に聽け是の如く知るべし」と。問ふ、「何が故に此法は、餘の境界に非るや。」答ふ、「盧舍那、摩方に周遍し、普く法界の一切の群機に應ずるを以てなり。若し彼別機の、自根に稱ふ器は、但各己が所見を見、白が所聞を聞きて、皆他の所見を見ず、他の所聞を聞かず。此普賢の機は、乃ち一切の所見を見、一切の所聞を聞きて、皆盧舍那能化の分齊を盡す、故に普眼の境と云ふなり。是故に當に知るべし、普別の二機、普別の二法を感じて、各不同なることを。」二に兼爲とは、謂はく、遺法の中に、此無盡の法を見聞し信向せば、金剛の種を成じて、當に必ず此圓融の普法を得べし。下の文の、金剛を吞服するの喻、又小火の廣く燒く喻等の如し。又兜率天子、地獄より出でて、十地の無生忍を得て、展轉の利益、窮盡せざる等の如し。皆宿に此法を聞きて本因と爲すに由るが故に。又下の文に云はく、「大海及び劫盡の火の中に在りと雖も、決定して信じて疑無くんば、必ず此經を聞くことを得」と。三に引爲とは、謂はく、

【四に轉爲】本經末會に攝比丘會あり。かく廻心して法界門に入るをいふ。

彼前の共教の菩薩の如き、彼教の中に於て、多時に深解を長養し、行布の教源を窮徹して、即ち當に此普賢法界を得べし。既に無量億那由劫にも、此經を信せずと云ふ。即ち知んぬ、此劫數を過ぎて、必ず當に信受すべし。此普法を離れて、更に餘路に成佛を得ること無きを以ての故に。經に彼此劫數を過ぎて猶信せずと、説かざるが故に、問ふ、若し彼地前に、後劫數を過ぎて、必ず信受せば、即ち知んぬ、地上は二宗別ならざることを。豈彼所信に十地無からんや。答ふ、彼經の中に於ては、具に行布の十地、漸次に乃し佛果に至ること有りて彼根器を長養し、將に成熟せしめんとす。極遲の者は、此劫數に至りて、定んで當に信入すべし。其疾き者の如きは、是れ即ち不定なり、準知すべきのみ。四に轉爲とは、謂はく、諸の二乗は、根鈍なるを以ての故に、要す先づ共教の大乗に廻入して、二乗の名を捨て、菩薩の稱を得。然して後、方に此普賢の法に入る。故に此經を説くことは、唯菩薩の爲にして、二乗を攝せず。若し爾らずんば、餘の大乗經には、聲聞衆を所被の機と爲し、亦二乗を引きて、其をして大に入らしむること有り。唯獨此經のみ、衆に聲聞の機無く、文に廻小の説無し。何ぞ了義深廣の典を成ぜん。設ひ第八會に聲聞有るも、顯法に寄對して、聲聞の如くなることを表さんが爲なれば、是所被には非ず。其六千の比丘は、是れ羅漢に非ざるが故に、相違せず。是故に當に知るべし、一切の二乗は、總じて頓に普賢法界に入ること無し。究竟の説に依れば、二乗にして共教の菩薩に廻入せざること有ること無く、彼菩薩にして此普賢の法に入らざること無し。是故に展轉して皆是れ此

【五に遠爲】凡夫等乖實違眞の器と雖も、佛性ありと許すを以て、對機に加ふ。

【三】 教體を論ず

法の器ならざるは無し。五に遠爲とは、謂はく、諸の凡愚、外道、闍提、悉く佛性有り、障重きを以ての故に、久遠にして亦、當に此法に入ることを得べし。『佛性論』及び『寶性論』に、皆説くが如し、一闍提の、大乘を誘する因を以て、無量時に依りて、佛性無しと説く、究竟して清淨の性無しと謂ふには非ずと。又此經の性起、大樹の、二乘闍提の二處に於て、芽を生ぜず、亦生性を捨てざる等の如し。又、日の生盲を照す喻等の如し。是故に當に知るべし、一切の衆生、究竟して、皆此法に入らざる無し。此普法は衆生に具せるを以ての故に。下の文に云はく、『菩薩は一切衆生の身中に、如來の菩提有りと知る』等と。問ふ、『若し爾らば、何故ぞ『瑜伽』等の論に、定性の二乘及び無性の有情は、定んで成佛せずといふ。』答ふ、『此は教門に了と不了と有るに由るが故に、諸説有り。若し小乘に依れば、一切衆生總じて皆、大菩提の性有ること無し。小論の説の如し。若し大乘の初教には即ち五性差別にして、二分の有性、一分の無性あり。『瑜伽』等の如し。若し終教に依れば、一切衆生、悉く佛性有り、『涅槃』等の經、『佛性』等の論の如し。若し頓教に依れば、衆生の佛性は、一味一相にして、有と言ふべからず、無と説くべからず、離言絶慮なること、『諸法無行經』等の説の如し。若し圓教に依れば、衆生の佛性は、因を具し果を具し、性有り相有り、圓明に徳を備ふ、性起品の如來菩提處に説くが如し。

第五に能詮の教體とは、通じて教體を論ずるに、淺より深に至るに、略して十門有り。一には言詮辯體門、二には通攝所詮門、三には遍該諸法門、四には緣起唯心門、五には會

【初の中に云云】十門ある中、初に音聲舞體門。
【名句文】體を顯すは名、義を顯すは句、名の二の屈曲字形等を文といふ

【大乘宗云云】以下大乘を明すに、四句を以てす、これらが融會せんが爲のみ。

緣入實門、六には要事無礙門、七には事融攝推門、八には帝網重重門、九には海印攝現門、十には非伴圓備門なり。

初の中に二行あり。先は小乘を辨じ、後には大乘を顯す。前の中に薩婆多宗に依れば、諸德三藏あり。一には云はく、但名句文身を以て教體と爲す。次に「發智論」に云はく、三十二部經「は何を以て性と爲す。」答ふ、「名身、句身、文身、次第に住す」二等と。一には云はく、聲の善なるを以ての故に、是れ佛教の體なり。名等は無記なれば、是れ教の作用なりと「婆沙論」の第一百二十六に云はく、「佛教は云何」答へて謂はく、「佛の語言と、詞と、唱論と、語言と、語路と、語表と、是れ佛教なり。乃至說者の語言を體と爲す。」佛語は何の法ぞ。答へて謂はく、「名身、句身、文身、次第に行列し、次第に宣布し、次第に連合す。此れ即ち總じて佛教の作用を顯す。」解して云はく、評家の正義は音聲を體と爲す。經部宗亦音聲を以て性と爲す。故に「顯正理論」の第十四に、經部を破して云はく、「汝應に名句文身を立つて即ち聲を體と爲すべからず」と。又無性の「攝論」に彼を破して云はく、「諸の契經は、句語を自性と爲すこと、理に應ぜざるが故に」と。初は是れ法處、後は是れ聲處なり。亦又前の二處に因りて、諸德合取して、以て教體と爲す。餘は彼說の知し。大乘宗に就きて四句有り。初には假を攝し實に従ひて、唯聲を體と爲す。名等は聲の屈曲に依りて假立し、別體無きを以ての故に。無性の「攝論」に云はく、「弘誓の願に依りて、菩薩の聲を立つ」と。「雜集論」に云はく、「彼所引の聲は、謂はく、諸樂の說なり」と。二

【佛藏經】四卷。
羅什譯、戒律を説く。

に假を分つ、實を異にして、名等を以て性と爲す。故に、『唯識論』第二に云はく、「若し名句等、聲と異らざれば、法詞無礙の境、應に別無かるべし」と。三には假實合辯す。亦是聲、亦は名等なり。『維摩經』に云はく、「音聲語言文字を以て、佛事を作す有り」と。『十地論』の中に、「説者は二事を以て説き、聽者は二事を以て聞く。謂はく、音聲と名号となり」と。問ふ、「此宗に依れば、聲は善惡を表すれば、聲は是れ無記なり、又、名号文は是れ自性無記なり。何ぞ無記を聖教の體と爲すを得んや。」答ふ、「若し有漏心の變は、是れ無記なるべし。若し佛菩薩、後得智の説は俱に是れ善の攝なり。『十地論』に云はく、「何の事に依止すとならば、謂はく、音聲と及び善字となり」と。四には假實雙泯す、聲に非ず名に非ず、即空を以ての故に、言即無言なるが故に。『維摩』に云はく、「文字の性離は、是れ即ち解脱なり」と。『十地論』の中に、風を音聲に喩へ、畫を名字に喩ふ。若し樹葉を動ずる風、及び壁上の畫は、是れ即ち取るべし。若し空中の風、及び空中の畫は、皆取るべからず。大乘の聲名も、當に知るべし亦爾り。皆取るべからず、相盡くるを以ての故に」と。此上の四句を、一の教體と爲す。是故に空有無礙なるを大乘の法と名く。謂はく、空は有に異らざれば、有は是れ幻有なり。幻有宛然として舉體是れ空なり。有は空に異らざれば、空は是れ真空なり。真空湛然として舉體是れ有なり。是故に空有毫も分別無し。故に『佛藏經』に云はく、「諸法は毫釐許の如きも、空ならずんば即ち諸佛出世せず」と。又下に云はく、「諸法は畢竟空にして、毫末の相も有ること無し」と。是の如きは一に非ざるなり。

【第二に云云】 通攝所詮門。

【第三に云云】 遍該諸法門。

【第四に云云】 緣起唯心門。

【達磨多羅】 (Dharmapala) 法救の梵名。

第二に通じて所詮を攝する門とは、但前の如く、能詮の教を取るのみに非ず、亦漸く通じて、所詮の義を取る。並に是れ、所知所解の法なるを以ての故に。瑜伽一の八十一に云はく、「諸の契經の體に、略して二種有り。一には文、二には義なり。文は是れ所依、義は是れ能依なり。是の如きの二種を、總じて一切所知の境界と名く」と。解して云はく、義は文に依りて、顯なることを得るを以ての故に。

第三に遍く諸法を該ぬる門とは、謂はく、一切の諸法を、悉く教體と爲す。此に亦二種あり。一には有爲の法、二には無爲の法なり。能く、聞覺を生ぜしめざること無きを以ての故に。下の文の、華鬘、寶地、香樹、雲鬘、法界法門にして、佛事に非ざること無きが如し。勝音菩薩及び所生の蓮華、即ち人法、教義、行位、因果、理事に通じて、總じて能く勝解行を發生するが如し。故に並に教體と爲す。準思して知るべし。

第四に緣起唯心門とは、此上の一切差別の教法は、皆是れ唯心の所現ならざる無し。是故に俱に唯識を以て體と爲す。然るに二義有り。一には、本影相對、二には、成聽全體なり。初の中に、通じて諸教を辨するに、總じて四句有り。一には唯本無影。小乘教の如し。唯識の變現等無きを以ての故に。達磨多羅等の諸論師、多く此義を立つ。二には亦本亦影。大乘始教の如し。衆生の心外の佛に、微妙の色聲等の法有り。聞者の善根、増上緣の力に由りて、佛の、利他種子を撃するを因と爲して、佛智の上に、文義の相、生ずるを、本性相の教と爲す。佛の此教の増上緣の力に由りて、聞法の者は、有漏無漏の善根の種子に撃

【龍樹等の宗】提婆の金剛般若を等す。
 【第二に説聽全收】佛と衆生とに於て四句を立て、唯心の所現を説く。

せらる。聞者の識の上に、文義の相生するを、影像相の教と爲す。二十唯識論に云はく、「展轉増上の力、二識決定を成ず」と。護法論師等悉く此義を立つ。三には唯影無本の大乗終教の如きは、衆生の心を離れて、佛果に色身言聲の事相の功德有ること無し。唯如如、及び如如智のみ有り。大悲大願を増上縁と爲し、彼所化の根熟の衆生をして、心中に佛の色聲説法を現ぜしむ。是故に聖教は、唯是れ衆生の心の影像なり。故に下の文に云はく、「一切諸の如來は、佛法を説くこと有ること無し。其所應化に隨ひて、而も爲に法を演説す」と。又云はく、「如來の法身は不思議にして、色も無く、相も無く、倫匹無くして色像を呈現し、衆生の爲にするに、十方の化を受くるもの見ざる瞠し。」是の如く、一に非ず。龍軍、堅慧の諸論師等、並に此義を立つ。四には非本非影。頓教の中の如し。直に心外に、佛の色等無きのみならず、衆生の心内所現の佛も、亦當相空なり。唯是れ識にして、別の影無きを以ての故に、色等の性離して所有無きが故に、一切無言にして、無言も亦無なるが故に。是故に聖教は、即ち是れ無教の教なり。經に「如來出世せず、亦涅槃有ること無し」と云ふが如し。又「密嚴經」に、「佛は常に法界に在りて、元より出世せず」等と明す。龍樹等の宗多く此義を立つ。此前の四説は、總じて一教と爲す。圓融無礙にして、皆相妨げず。各の聖教は、淺より深に至り、衆生を攝するを以ての故に。之を思ひて見つべし。第一に説聽全收とは、亦四句あり。一には佛心を離れて外に、所化の衆生無し。況んや所説の教をや。是故に唯是れ佛心の所現なり、此義云何。謂はく、諸の

此下の説用、正くは別教一乘なるも又同教の意をも合む。

【如来藏】 眞如の煩惱中にあるをいふ。

【佛性論】 四卷。又親善、眞諦譯す佛性の義を詳説す今は如来藏の三義を明す文なり。

【一】には、心中に在り衆生心を明すうち、初は相入門に約し、次に相即門に約し、次に相好覺衆生本覺の心源、無明に重動せられて迷へるもの、漸く内外熏成して覺悟せしをいふ。

【本覺】 衆生の心體は本來虚妄を離れ靈明なるもの、虚空に等く遍ぜざる處なし、即ち如来の平等法身是なり。

衆生に別の自體無し、如来藏を攪りて、以て衆生と成す。然るに、此如来藏は即ち是れ、佛智證して自體と爲す。是故に、衆生の擧體、總じて佛の智心の中に在り。下の文に云はく、「諸佛は悉く、一切は心より轉ず」と知す」と。又云はく、「如来菩提の身中に、悉く一切衆生、菩提心を發して、菩薩の行を修し、等正覺を成すと見る。乃至一切衆生の寂滅涅槃を見ることも亦復是の如し。皆悉く一性は無性なるを以ての故に」と。又云はく、「三世一切の劫、佛刹及び諸法、諸根、心、心法、一切虚妄の法は、一佛身の中に於て、此法皆悉く現す」と。又一佛性論の第二如来藏品に云はく、「一切衆生悉く如来の智内に在り、故に名けて藏と爲す。如来の智を以て、如来の境に稱ふが故に、一切衆生決定して、如来の境を出づる者有ること無し。並に如来の爲に擗持せらるるが故に、所藏の衆生を名けて如来藏と爲す。是故に佛の心智を離れて、一法の得べき無し」と。二には總じて衆生の心中に在り。衆生の心を離れて、別の佛徳無きを以ての故に。此義云何。佛は衆生心中の眞如を證して成佛し、亦始覺は本覺に同するを以ての故に、是故に總じて衆生の心中に在り。體より用を起す、應化身の時も、即ち是れ衆生心中の眞如の用大にして、更に別佛無し。『起信論』の中に、盛んに此義を明す。又、下の文に云はく、「若し人、三世の一切の佛を知らんと欲せば、應當に是の如く觀すべし、心、諸の如来を造す」と。三

には、一の聖教に隨ひて、全く唯二心あり。前の二説相離れざるを以ての故に。謂はく、衆生心内の佛は、佛心の中の衆生の爲に説法し、佛心の中の衆生は、衆生心の佛の説法を

【二心】 生佛の二心。

【是故に】 究竟と爲す上の四句は尙ほ一句に執へられ眞の圓教の意なし、今聖教中一文一句、擧ぐるに隨ひ四句を具足すとす。

【第五に云云】 會緣入實門にして已に緣起唯心を説き時に實相に入らしめんとす。

【如】 法性の理體不二平等なるをいふ。又は眞如といふ。

【如如】 諸法をいふ。悟れば一切萬有眞如ならざるなき故なり。

聴く。是の如く全收して、説聽無礙なり、是を甚深唯識の道理と謂ふ。四には、或は彼聖教は、俱に二心に非ず、兩俱に形奪して、並現せざるを以ての故に、雙べて二位を融じて、泯ぜざること無きが故に。謂はく、佛心の衆生は聽者無きが故に、衆生心の佛は、説者無きが故に、兩俱に雙泯し二相盡るが故に。經に云はく、「夫れ説法の者は、説も無く示も無し。亦其聽法の者も、聞も無く得も無し」と。又、此下の文に云はく、「衆生の所生は是れ生に非ず。亦生死の中に流轉すること無し」と。又經に云はく、「如來は法を説かず、亦衆生を度せず」と。是の如き等なり。是故に此四は、一の聖教に於て、圓融無礙なれば、方に究竟と爲す。

第五に緣を會して實に入るの門とは、亦二義有り。一には本を以て末を收め、二には相を會して性を顯す。初の中に、諸の聖教は皆眞より流るるを以て、是故に眞性と常に異らず。海の潮を起して、鹹味を失はざるが如し。論の中には名けて眞如所流の十二分教と爲す。又云はく、「最清淨の法界より、等流の教法等」と。是故に本を以て、末を收むるに、唯是れ眞如なり。二には、相を會して性を顯すとは、謂はく、彼一切差別の教法は、皆悉く緣より起る。緣より起るが故に必ず自性無し。自性無きが故に即ち是れ眞如なり。是故に空相本盡き、眞性本現す。唯是れ眞如なるが故に。經に云はく、「一切の法は即ち如なり」と。又下の文に云はく、「彼生滅の法は、如如の相なり」と。

第六に理事無礙門とは亦二義有り。一には謂はく、一切の教法は舉體眞如にして、事相

【第六に理事無礙】理事無礙門。眞如の理體と一切法の事象との融通無礙を説く。

【第七に事融相攝】事融相攝門。事と一重の卽入を示す【相在相是】相入相卽に同じ。

の原然として、差別するを礙へず。二には眞如の舉體、一切の法と爲る、一味湛然として平等なることを礙へず。前は卽ち、波の水に卽して、動相を礙へざるが如く、後は、水の波に卽して、濕體を失はざるが如し。當に知るべし、此中の道理も亦爾り。是故に理事混融無礙にして、唯一の無住不二の法門なり。維摩經一の中に、盛に斯義を顯す。又此經に云はく、「非有は是れ有、有は是れ非有、非相は是れ相、相は是れ非相と知る。良に本非有を以て有と爲すに由る。是故に此有は卽ち是れ非有なり」と。聖教も此理事無礙に準じて、之を思つて見つべし。

第七に事融相攝門とは、亦二義有り。一には相在、二には相是なり。初の中に、先は、一は一切の中に在り、謂はく、一の教法の、事に在りて、全く是れ眞理なることを、礙へざるが如く、眞理は餘の一切の事の中に遍じて、同じく理なる、教事も亦理の如くにして遍す。是故に、一切の法の中に、常に此一有り。是義に依るが故に、一微細の塵毛等の處も、佛の説教無きは無し。故に此經に云はく、「一切の佛刹微塵の中に、盧舍那は自在力を現じて、弘誓の願海より音聲を振ひ、一切衆生の類を調伏す」と。二には、一切は一の中に在り。謂はく、無分齊の理、既に性を改めずして、而して全く是れ事なり。是故に一の事に理を攝すること、皆盡さざること無し。餘の事は理の如く、一事の中に在り。理に際限無く、分つべからざるを以ての故に。一の事處に隨ひて、皆全く攝するなり。是故に、一の中に常に一切有り。是義に依るが故に、此經に云はく、「此蓮華藏莊嚴世界海の内に

【父此…見つべし】
重ねて同時具を示す。

【二には云云】
相是を明す。

於て、一の微塵の中に、一切法界を見る」と。又云はく、「一法の中に於て、衆多の法を解し、衆多の法の中に一法を解了す」と。若し具に通じて説かば、其四句有り。初には、一は一の中に在り。謂はく、別して一切差別の事を説く。中に、一々に各彼一法有るが故に。二には、一は一切の中に在り。謂はく、通じて一切を説くに、悉く一有るが故に。三には一切は一の中に在り。謂はく、別して一を説く。中に、一切を攝するが故に。四には一切は一切の中に在り。謂はく、通じて一切を説くに、悉く一切有るが故に。又此れ常に一切を含むの一は、即ち復次に彼一切の中に在りて、同時に自在にして、無障無礙なり。一方を動ぜずして十方に遍する等、皆是れ此義なり。之を思つて見つべし。既に一切の法、悉く教體と爲す、皆互に相收めて、圓融無礙なる、方には是れ此經の教の體性なり。

二には相是とは、先には即ち是れ一切なり。謂はく、一の教事の既に全く是れ眞理なるが如く、眞理は即ち一切の事と爲るが故に、是故に此一は即ち是れ一切なり、一切は即ち一なることも、上に反して應に知るべし。此經に云はく、「若し一は即ち多、多は即ち一なれば、義味寂滅して、悉く平等と通じて亦四句あり。前に準じて之を思へ。良に以れば理を全うするの事と、事を全うするの理とは、非一非異なり。非一門に由るが故に、相在を得るなり。非異門に由るが故に、相是を得るなり。深く思つて見つべし。是義に依るが故に、一句即ち是れ一切句にして、而も窮盡すること無し。一切も亦爾り。下の文に云

【第八に帝網云々】
帝網重重門、譬に
約して重重無盡即
入の旨を明す。

【第九に海印炳現】
海印炳現門。上は
教法に寓いて示し
今は教起の根元た
る定を體とすとす
【海印定】佛智海
に一切の法印現ず
る定に名く。

はく、「具に一句の法を演說せんと欲せば、阿僧祇劫にも窮盡すること無けん」と。是の如く自在なるは、是れ此教體なり。

第八に帝網重重門とは、亦二義あり。先には一門を辨じ、後には類して一切を顯す。前の中に一句の内に、即ち一切を具するが如き、此一の中の一切は、復一にして即ち一切なり。是の如く、重重にして、具に即ち窮盡すべからず。總じて是れ一句なり。二に類して顯すとは、此一句の如く、餘の一切の句、一一皆爾り。是れ即ち、無盡無盡なれば、具に唯善眼の所知にして、是れ心識思量の境界に非ず。下の文に云はく、「彼一一の修多羅に於て、諸法を分別して、不可說なり。彼一一の諸法の中に於て、又諸法を説きて不可說なり」と。又云はく、「若し一の小微塵の中に於て、諸の佛刹有りて、不可說なり。彼一一の佛刹の中に於て、復佛刹有りて不可說なり」と。解して云はく、是の如く重重なること因陀羅網の如し、是を此經圓宗の教體と謂ふ。

第九に海印炳現門とは、亦二義有り。一には果位に約す。前の差別無盡の教法の如き、皆是れ如來海印定中に、同時に炳然として、圓明に顯現す。設ハ所化の機も、亦同緣起にして、此中に在りて現す。是故に唯此三昧海を以て、斯教體と爲す。下の文に、「一切示現して、餘有ること無し、海印三昧の勢力の故に」と云ふが如し。二には因位に約す。要す普賢等の諸大菩薩。方に此定を得て、前の業用に同じく、亦差別無し。是故に十信の滿處、普賢位の中に、亦此定を得。賢首品に説くが如し。

【第十に主伴圓備】

主伴圓備門。

【普莊嚴童子】舍那佛の因位のこと

【此眷屬】眷屬と爲す。伴の二を開く。

【是故……と謂ふ】圓備を結す。

【三】上は能詮の教體を辨ぜるが故に、今所詮の宗趣を明す。

第十に主伴圓備門とは、謂はく、此普法は、教孤り起らず、必ず主伴隨ひて生ず。下の文に、普莊嚴童子、佛の「一切法界無垢莊嚴經」を説くを聞くが如し。世界の微塵數の修多羅有りて、以て眷屬と爲す」と、是の如き等の文は、處處に皆有り。此眷屬の經に其二義有り。一には同類、二には異類なり。初に同類とは、十住を説くが如き、十方に各十刹塵數の菩薩有りて、來りて證す、同じく法慧と名く。我等が佛所に、亦十住を説く。大衆眷屬、名味句身等しくして、異り有ること無し。是故に當に知るべし、一の十住經に、十方に各十刹塵數の修多羅等有りて、以て眷屬と爲す。一の十住の如く、餘の一切處、所説の十住は、皆爾許の塵數の眷屬を攝す。十住既に爾り、餘の十行等の一一の品會に、皆證法有り。數量準釋して知るべし。二に異類とは、謂はく、一方一界に隨ひて、一類の機の爲に一會の法を説くは、既に、十方を結通して、等しく説くこと無し、故に主經に非ず。然るに亦主の與に勝方便と爲るが故に、眷屬と爲す。是故に主經は必ず十方の塵道、同時に同説す。伴經は爾らず。方に隨ひて各別なり。是故に、一一の主經に、各塵數の眷屬有り、是を本末相資主伴圓備と謂ふ。教體門竟んぬ。

第六に所詮の宗趣とは、語の表す所を宗と曰ひ、宗の歸する所を趣と曰ふ。然るに、此大經の宗趣は辨じ難し。略して十説を叙して、以て一宗を顯す。

一には、江南の印師、敏師等は、多く因果を以て宗と爲す。謂はく、此經の中に、廣く菩薩行位の因を明し、及び所成の佛果の勝徳を顯す。下の文の所説、此二を離れず、故に

以て宗と爲す。

二には大遠法師は、華嚴三昧を以て宗と爲す。謂はく、内行の華、能く佛果を嚴ると。此上の二説は、但所成の行徳を得て、其所依の法界を遺る。

三には衍法師に依るに、無礙法界を以て宗と爲す。

四には裕法師に依るに、甚深法界の心境を以て宗と爲す。謂はく、法界門の中の義、分ちて境と爲す。諸佛之を證して、以て淨土を成ず。法界は即ち是れ一心、諸佛、之を證して以て法身を成ず。是故に、初品の内に、初に天王、偈をもつて無盡平等の妙法界は、悉く皆如來の身を充滿せりと讃じ、末後に復、入法界品を明す。故に知んぬ、唯法界を以て宗と爲す。此上の二説は、但所依の法界を得て、所成の行徳を遺る。

五には光統師に依るに、因果理實を以て宗と爲す。即ち因果は是れ所成の行徳にして、理實は是の所依の法界なり。此れ義具すと雖も、然も未だ顯ならず。

六には、今總じて名を尋ね義を案じ、因果縁起理實法界を以て、其宗と爲す。即ち大方廣を理實法界と爲し、佛華嚴を因果縁起と爲す。因果縁起は、必ず自性無し。自性無きが故に、即ち理實法界なり。法界理實は、必ず定性無し。定性無きが故に、即ち因果縁起を成ず。是故に、此二無二にして、唯一の無礙自在の法門なるが故に、以て宗と爲す。

七には、別して法界を開攝して、以て因果を成ず。謂はく、普賢の法界を因と無し、舍那の法界を果と爲す。是故に、唯法界の因果を以て、宗趣と爲す。中に於て分別するに、

【普賢…爲す】法界の因果を示す。

【二には所信云云】
五周の因果にして
正宗四分の所説な
り。

十事五對有り。一には、所信の因果は、初會の中の舍那品の内に、先づ蓮華藏世界の果を明し、後に普莊嚴の因を顯すが如し。二には、差別の因果は、第一會より小相品に至りて、説くが如し。中に於て、初の二十五品には、五位の差別の因を説き、後の三品には、三徳差別の果を説く。三には、平等の因果は、普賢品に、平等の圓因を説き、性起品に平等の満果を説くが如し。上の二門は、是れ生解の因果なり。四には成行の因果は、離世間品の中に二千行の法の内に、先は因行を明し、後に果行を顯すが如し。五には、證入の因果は、入法界品に、先づ祇洹林の中に自在の果を現じ、後に善財童子、證入の因を辨するが如し。因果五周、一部斯に畢んぬ。是故に唯因果を辨ず、所依を失はざれば、但因果を以て宗と爲すも、理亦咎無し。

八には因果を會して以て法界に同ず。法界の法門に、略して十事五對を顯す。一には、教義相對、此所説の教法を擧げて宗と爲し、意所詮の義理を顯すを越と爲す。或は此に反す。義深く教勝るることを辨ずるを以ての故に。二には理事相對。事法を擧げて示と爲し、意理性を取るを越と爲す。或は此に反す。理性に依りて方に事を成ずるを以ての故に。三には境智相對。所觀の境を擧げ、意觀智の行を成せしめんと欲するが故に。或は此に反す。修起智をして、眞境に證同せしむるを以ての故に。四には行位相對。所依の五位を擧げ、意之に依りて、修して勝行を成せしむ。或は之に反す。行を積みて位を成ずるを以ての故に。五には因果相對。彼修因を勸め、意證果に在り。或は此に反す。果を擧げて樂ふ

ことを勧め、因を修せしむるを以ての故に。此上の五對は、一部に通じて、處處に皆有るが故に、別屬せず。是故に唯法界を辨すれども、所成を失はず、但法界を以て宗と爲すも、亦違ふこと無し。

【一には無等云云】以下、境心行位果共に二義を開く。無等の言は通途諸經所談に異るを顯す。【田】 頓離離脫の意。

【此二は所信所證】出經在經の法界所信となりて能信心を起し、所證となりて能證の果を得。

【十には法界：離】性たる法界と相たる因果との混融無礙自在を明す【亦十義有り】初二は俱離を明し、三四は兩存あるを礙へず、五是初二を合し、七は四三

九には、法界因果分相顯示の中に、亦十義五門有り。一には無等の境、即ち理實法界なり。此に二位有り。一には、是れ出纏最淨の法界、二には是れ在纏性淨の法界、此二は所信所證と爲るが故に。二には無等の心。此に亦二義あり。一には、大菩提心は、普賢の行の所依の本と爲るが故に。二には信悲智等、行に隨ひて起るが故に。三には無等行。此に亦二義あり。一には差別行、各別に修するが故に。二には普賢行、一即一切なるが故に。四には無等の位。此に亦二義あり。一には行布差別の位。此證同じからざるが故に。二には圓融相攝の位。一位に即ち一切の位を具するが故に。五には無等の果。之に亦二義あり。一には修生の果、二には修顯の果なり。此五門十義は、通じて此經の一部を收むること、略して盡しぬ。是故に具に以て宗と爲す義、亦備はれり。

十には、法界因果、雙じて融じ、俱に離る。謂はく、性相混融して無礙自在なり。亦十義有り。一には、離相に由るが故に、因果法界に異らず。因果に即して因果に非ざるなり。二には離性に由るが故に、法界因果に異らず。法界に即して法界に非ざるなり。三には離性、性を泯せざるに由るが故に、法界即ち因果なり。法界に非ざるを、法界と爲すを以てなり。四には離相、相を壞せざるに由るが故に、因果即ち法界なり。因果に非ずして因果

を合し、七は五の相混と六の相存を合し、八は前の因果を融じ法界に同ぜしめ、九は法界に同じて因果互攝し、十は因果差別の法一一に別攝せしむ。

【三】本經の題目を釋す。

【初に…立つ】教名を擧げて釋す。

【二に…爲す】法名を擧げて釋す。

と爲るを以てなり。五には離相、離性に異らざるに由るが故に、因果法界變じて泯じ、俱に融じ、適に言慮を超ゆ。六には不壞、不異、不泯に由るが故に、因果法界俱に存し、現前し、燦然として見るべし。七には上の存泯、復異らざるに由るが故に、視聽を超ゆるの法は、恆に見聞に通じ、思議を絶するの義は、言念を離へざるなり。八には法界の性融じて、分くべからざるに由るが故に、法界に即するの果は、法界を統攝して、皆盡さざる無し。因果所依に隨ひて亦果の中に在り。是故に、佛の中に菩薩有り。九には、法界に即するの因も、攝の義亦爾り。故に普賢の中に佛有るなり。十には、因果の二位、各隨つて差別する一一の法、一一の行、一一の徳、一一の位に、皆各無盡無盡の諸の法門海を總攝することは、良に法界に該攝し、圓融せざること無きに由るが故なり。是を華嚴の無盡宗趣と謂ふ。餘の義は「指歸」等に説くが如し。

第七に經の題目を釋すとは、略して十名を釋す。一には數名、二には法名、三には喻名、四には義名、五には徳名、六には事名、七には聞名、八には具名、九には合名、十には品名なり。

初に數名とは、梁の『攝論』の第十の勝相に、「百千經」と云ふに依らば、是れ『華嚴經』に十萬の頌有れば、「百千經」と名く。是れ即ち本數に従ひて以て其名を立つ。

二に法名とは「智度論」の屬累品に、「不思議解脫經」と名く、十萬の偈有り」と云ふに依る。又、彼中に、自ら「華嚴」を指すが故に、良に此經所説の法は、皆一に一切を攝

【三には…如し】
喻名を擧げて釋す

【四には…辯すべし】
義名を擧げて釋す

【五には…釋すべし】
德名を擧げて釋す

【六には…知んぬべし】
事名を擧げて釋す

【七に云云】
開名
此下、初に通別名
を擧げ、後に經題
七字を釋す

して、悉く是れ不思議解脱ならざること無きが爲の故に、以て名と爲す。

三に喻名とは、『涅槃經』及び『觀佛三昧經』に、此經を名けて『雜華經』と爲す。萬行交飾して、緣起集成するを以て、喻に従ひて名を標す。猶し雜華の如し。

四に義名とは、下の離世間品に、菩薩、深妙の義華を生ずる等の、十義の立名の如し。彼に至りて當に辯すべし。

五に德名とは、性起品の末に、十勝德に就きて、以て其名を立つるが如し。亦彼に至りて、當に釋すべし。

六に、事名とは『華嚴』の稱、梵語の名は健拏驃訶と爲す。健拏を雜華と名け、驃訶を嚴飾と名く。日照三藏の説に云はく、西國には別に一の供養の具有り、名けて驃訶と爲す。其狀六重にして、下は闊く上は狭くして、飾るに華實を以てす。一一の重の内に、皆佛像を安すと。良に此經の六位重疊し、位位に成佛するを以て、正しく彼事に類す。故に此名を立つ。人天八會、亦彼に似ること應に知るべし。

七に開名とは、此一名に、開して十事五對と爲す。一には通別一對。謂はく、『大方廣』等は、一部の通名なり。世間淨眼は、是れ當品の別目なり。二には、通の中に就きて、教義一對あり。謂はく、大等は是れ所詮の義にして、經の一字は是れ能詮の教なり。三には義の内に就きて、法喻一對あり。謂はく、大等は是れ法、華嚴を喻と爲す。四には法の中に就きて、境智一對あり、謂はく、大等は是れ所證所覺、佛は是れ能證能覺にして、亦是

【八には具名】經
題の七字を詳釋す
一に大の字を釋す

れ人法一對なり。五には境の中に就きて、簡持一對あり、謂はく、大の字は是れ能簡にして、方廣は所簡爲り。即ち大と簡び小と異にし、實と簡び權と異にし、果と簡び因と異にする故なり。

八には具名とは、大に十義有り。一には境大。謂はく、十蓮華藏及び十佛の三業、無邊の依正を、所信の境と爲す。初會等に説くが如し。二には心大。謂はく、前の大境に依りて、大心を起すが故に。賢首品及び發心品に説くが如し。三には行大。謂はく、大心に依りて大行を起すが故に。離世間品等に説くが如し。四には位大。謂はく、大行を積みて大位を成するが故に。即ち五位の圓通等なり。第二會より第六會に至る來の説の如し。五には因大。謂はく、行位普圓にして、生了究竟す。普賢品等の説の如し。六には果大。謂はく、隨縁と自體との果徳圓明なり。不思議品等の説の如し。七には體大。謂はく、大用平等にして、皆眞性に同じ、性起品等の説の如し。八には用大。謂はく、念念に生を益し、頓に行位を成す、小相品等の説の如し。九には教大。謂はく、一一の名句皆一切に遍す。下の結通等の説の如し、十には義大。謂はく、所詮皆無邊の法界を盡す。一席に十方を含み、一念に九世を包ぬ、八會等に説くが如し。此上の十義は、一一に一切法を統收して、盡して大と稱せざることを莫し。又七義有り、一、瑜伽等の七種の大性相應等の如し、以て大の義を釋す。又一、涅槃經に依るに、更に三義有りて大を釋す。經に云はく、「言ふ所の大とは、之を名けて常と爲す」と。又言はく、「大とは其性は廣博なり」と。又云はく、「能く大

【體相用】體大、相大、用大の三義を明すをいふ。
【次に方廣云云】經題七字の内、方廣の二字を釋す。

【二障及び習氣】煩惱、所知の二障と、重成せられたる煩惱の餘習。

【毘佛略】十二部經の、梵名は、(Vai-bhava) 方正廣大の眞理を説く經の意。

【次に佛の義】經題七字の中、佛の一字を釋す。
【次に華嚴云云】華嚴の二字を釋す

義を建つるを、大涅槃と名く」と。又「起信論」に、亦三義を以て大を釋す。謂はく、體相用等なり。次に方廣を釋す。亦十義有り、一には周遍の義。謂はく、言教は廣く諸の摩方に遍するが故に。二には普說の義。謂はく、普く一切の法を宣說するが故に。三には深說の義。謂はく、甚深の法界海を説くが故に。四には備攝の義。謂はく、普く無盡の衆生界を攝するが故に。五には廣益の義。謂はく、要す衆生をして、佛菩提の大涅槃を得しむるが故に。六に蕩除の義。謂はく、遍く二障及び習氣を除くが故に。七には具徳の義。謂はく、無邊の諸の勝徳を具攝するが故に。八には超勝の義。謂はく、獨絶して餘を超えて、比類無きが故に。九に含攝の義。謂はく、通じて衆多の異類の法を攝するが故に。十には廣出の義。謂はく、能く佛の大果を出生するが故に。然るに此十義は二論に説くが如し、「入大乘論」に五義有り。一には、衆生の爲に、對治の法を説くが故に。二には、衆多の乗有るが故に。三には、多くの莊嚴具するが故に。四には、能く無量の大果を出生するが故に。五には、一切の諸の邪見を、除斷するが故に、毘佛略と名くと。又「雜集論」に「方廣」を釋するに、謂はく、菩薩藏相應の言說を、名けて方廣と爲す、一切の有情利益安樂の所依の處なるが故に、廣大甚深の法を宣說するが故に。亦廣被と名く、能く廣く一切の障を破するを以ての故に。亦は無比法と名く、諸法の能く比類すること、有ること無きが故に。次に佛の義を釋するに、亦十種有り。無著佛等の如し、文を尋ねて具に辯ぜよ。次に「華嚴」を釋せば、問ふ「華」に幾くの義有るや。復何の所表あつて、華を以て嚴と

爲すや。答ふ。華に十義有り。所表も亦爾り。一には微妙の義、是れ華の義なり。佛の行徳、離相を離るることを表するが故に、華を嚴と爲すと説くと。下も並に此に準せよ。二には開敷の義、行敷榮し、性開覺することを表するが故に。三には端正の義、行圓滿し、徳相具することを表するが故に。四には芬馥の義、徳香普く薫じて、自他を益することを表するが故に。五には適悦の義、勝徳の樂、歡喜して厭ふこと無きことを表するが故に。六には巧成の義、所修の徳相、善巧に成ずることを表するが故に。七には光淨の義、斷障永く盡き、極て清淨なるを表するが故に。八には莊飾の義、了因と爲りて、本性を嚴ることを表するが故に。九には引果の義、生因と爲りて、佛果を起すことを表するが故に。十には不染の義、世に處して染せざること、蓮華の如くなるを表するが故に。次に經の字を釋するに亦十義有り、寶雲經一の説の如し、餘の義上に同じ。

【九には合名云云】
合名を明すに、初に大方廣の三字を合釋す。

【方は即ち…持業釋なり】次に方廣佛を釋す。

九には合名とは、大は即ち當體を目と爲し、包含を義と爲す。方は即ち用に就きて名と爲し、軌範を義と爲す、是れ方法の故に。性は邪僻を離る。是れ方正の故に。能く重障を治す、是れ醫方の故に、虚空界に遍じて、方隅を盡すが故に。廣は即ち體用合して明し、周遍を義と爲す。謂はく、一切の處、一切の時、一切の法、一切の人、周遍せざる無く、皆重重にして帝網の如し。此中は且く、一は一切を攝するを大と名け、一は一切に遍するを廣と稱するに就く。前は廣、後は大なり、理亦違せず。方は即ち是れ廣、大は即ち方廣なれば、皆持業釋なり。此は是れ所得の法、佛は是れ能得の人なり。覺照を名と爲し、果滿

【此は…所得の法】上の持業の三字、大方廣を指す。

【既に佛…釋するが如し】後に佛華嚴を釋す。

【一には…べし】此下四句の相を示さず、これ法界縁起無盡の法門、或は人法、或は境智相依相即ありて、理實に無盡の故に開かざるなり。

を義と爲す。此中の入法境界智に、相依相即有り。相依とは、智は境に依るが故に、方廣の佛なり、下乘の佛を簡ぶ。境は智に依るが故に、佛の方廣は、因位の法を簡ぶ。此二相依りて各有力無力の縁起の四句有り、之を思うて見つべし。皆依主釋なり。相即とは、謂はく、佛即ち方廣、方廣即ち佛、人法無礙にして全體相即す。空有の四句亦準じて之を思へ。此れ唯持業釋なり。既に佛は下乘に非ず。法は因位を超えて、果徳彰れ難ければ、喻に寄せて方に顯す。謂はく、萬徳究竟して瓊麗なること、猶し華の如し。互相に交飾して性を顯すを嚴と稱す。此に二門有り。一には、諸徳互に嚴るに、亦相依相即有り。各四句有りて、存亡俱に泯す。皆持業釋なり。之を思うて見つべし。二には、理行互に嚴るに、亦相依相即有り。初に相依の四句とは、一には理は修に由りて顯るるが故に、即ち行の華、性を嚴るなり。二には行は理に従ひて起るが故に、即ち理の華、行を嚴るなり。梁の「攝論」に云はく、「此法身より流れざること無く、還りて此法身を證せざること無し。三には理行具融して、不二にして而も二なり。眞流の行に非ずんば、以て眞に契ふこと無し。眞を飾るの行に非ずんば、眞より起らず。良に以れば、體は行を融じて、而も因圓に、行は眞を該ねて而して果滿す。是故に標して佛華嚴と爲るなり。四には理行俱に泯す。二にして不二、理の行なるを以ての故に、行に非ず。行の理なるが故に、理に非ず。是れ即ち能所、兩ながら亡す。情を超え相を離れて、嚴に非ず不嚴に非ず、是を華嚴と謂ふ。相即の四句、理行全收す。思準して見つべし。是に知んぬ、法喻交映し、昭然として在る

【十には品名】世間淨眼品の名を釋す。

【淨眼に三義あり】眼の内外俱に淨、中また清徹にして現象一時に映じ、而も各各相妨礙せざるを以て喻況とす。

【又釋す云云】此下は喻に約して名となす。

【四】本經の傳譯を述す。初に本經の種類を列舉す。

有り。餘は前に釋するが如し。

十には品名とは、世間は是れ法、淨眼を喻と爲す。世とは是れ時。間とは是れ中なり。

時に顯現するが故に、世間と云ふ。世間不同に其三種有り。一には器世間にして、所依の處と爲す。二には智正覺世間にして、能化の主と爲す。三には衆生世間にして、所化の機と爲す。此品の内、此三を越えざるが故に、斯名を立つ。器に二種有り。一には場地の別處、二には華藏の通處なり。智正覺に亦二あり。謂はく、三身、十身なり。衆生に亦二あり。謂はく、同生、異生なり。淨眼に三義あり、一には洞徹の義、器世間に況ふ。内に理に徹するが故に。下の文に云はく、「法界不可壞蓮華世界海」と。二には現像の義、智正覺に況ふ。下の文に云はく、「清淨の法身、像をして現せざること無し」と。三には照曜の義、衆生世間に況ふ。下の文に云はく、「猶し淨眼の、明珠を觀するが如し」と。又若し通じて論ぜば、此三世間に、各淨眼の三義有り。思準して知るべし。又釋す。佛、未だ出世せず、善く導くこと無し。故に盲の如し。如來創めて世間に出でて、淨眼現するを世間淨眼と名く。是故に、佛の涅槃の時を、世間眼滅と言ふ。品とは類なり、別なり、餘の義は知るべし。

【四】本經の傳譯とは、亦十義有り。一には恆本、二には大本、三には上本、四には中本、五には下本、六には略本、七には論釋、八には翻譯、九には支流、十には感應なり。初に恆本とは、下の不思議品に云はく、「一切の法界虚空界等の世界、悉く一毛を以て、

【貝葉】 貝多羅 (Palma) のこと、多羅樹の葉なり。

周遍に度量し、一一の毛端の處にして、念念の中に、不可説の微塵等の身、未來際劫を盡して、常に法輪を轉ず」と、解して云はく、此樹形等の異類の世界に通じ、各毛端の處にして、念念に常に説き、休息有ること無し。此れ結集すべきに非ず、其品頌の多少を限るべからず。亦下位の能く受持する所に非ず。

二には大本とは、下の海雲比丘の、受持する所の『普眼經』の如き須彌山聚の筆、四大海水の墨を以て、一品の修多羅を書すとも、窮盡すべからず。是の如き等の品は、復、塵數に過ぎたり。此は是れ、諸の大菩薩、陀羅尼力の受持する所、亦貝葉の能く書記する所に非ず。

三には上本とは、此は是れ、結集する文の中の上本なり。故に西域に相傳す。龍樹菩薩龍宮に往き、『大不思議解脫經』を見るに、三本有り。上本は十三千大千世界の微塵數の頌、四天下の微塵數の品有り。

四には、中本とは、四十九萬八千八百の偈、一千二百の品有り。此上の二本は、並に秘して龍宮に在り。闍浮提の人力の、受持する所に非ざるが故に、此に傳へず。

五に下本とは、十萬の頌、三十八の品有り。龍樹此本を將て出現し、天竺に傳ふ。即ち攝論に、百千を十萬と爲すなりと、『西域記』に説かく、「于闐國の南、遮俱槃國の山中に、具に此本在る有り」と。

六には、略本とは即ち、此土に傳る所の六十卷本は、是れ彼十萬頌の中の、前分の三萬

【七には云云】以下、本經の論釋を明す。

【勒那三藏】勒那跋提(Kāṇamati)をいふ。中天竺の人。

【八に云云】本經の疏譯を明す。

六千の頌を、要略して出す所なり。近ごろ大慈恩寺の塔の上に於て、梵本の「華嚴」を見るに、三部有り、略して闕ふるに、並に此漢本と大いに同じ。頌數も亦相似たり。

七には論釋とは、龍樹既に下本を將つて出で、因て、「大不思議論」を造す。亦十萬の頌、以て此經を釋す。今時の「十住毘婆沙論」は、是れ彼一分、秦朝の耶舍三藏、頌出して之を譯す。十六卷の文、纔に第二地に至る。餘は皆足らず。又世親菩薩「十地論」を造りて、偏に十地の一品を釋す。魏朝の勒那三藏、及び菩提留支、洛陽に於て、各一本を翻す。光統律師、自ら梵文を解す、二の三藏をして、御に對し和會し、合して一本と成さしむ。見に傳ふる者は是なり。金剛軍菩薩及び堅慧菩薩、各十地の釋を造る。並に未だ此土に傳らず。又、魏朝に此土の高僧、靈辯法師は、五臺山に於て華嚴を頂戴し、膝步殷懃にして足破れて血流る。遂に三藏を経て冥に解悟を加ふ。懸壺山の中に於て、此經の論を造ること、一百餘卷なり。現に世に傳ふ。後に法師を敕請して内に入れ、式乾殿に於て此大經を講ぜしむ。

八に翻譯とは、東晉の沙門、支法領有り。于闐國より、此三萬六千偈の經を得、并に北天竺の大乗三果の菩薩の禪師を、佛駄跋陀羅と名く、此には覺賢と云ふを請し得たり。俗姓は釋迦氏、即ち甘露飯王の苗裔なり。曾て兜率天に往き、彌勒に就きて疑を問ふ。晋の義熙十四年、歲暮火に次る三月十日を以て、揚州の謝司空寺に於て、別して護淨沙堂を造り、中に於て此經を譯出す。時に堂前に、一の蓮華池有り。毎日二の青衣の童子有り、

【地婆訶羅】梵名 (Dharmakara) 中印度の人。

【九六云】本經の部分別論を述す。

【于闐の三藏】提雲般若を指す。

【三藏】寶叉難陀 (Siksananda) をいふ。

池より之きて堂に出で、灑掃し供養し、暮には池に還歸す。相傳へて釋して云はく、此經久しく龍宮に在るを以て、龍王此傳通を摩びて、躬自ら給侍すと。後に因りて此寺の名を改めて、眞嚴寺と爲す。沙門法業及び慧聖慧觀等、觀り從ひて筆受す。時に異郡の内史孟頌右衛將軍緒叔度等有りて、情起しと爲り、元熙二年六月十日に至りて、出し詔んぬ。大宋の永初二年十二月二十日に至りて、梵本を再び校勘し畢んぬ。法界品の内に於て、摩耶夫人より後、彌勒菩薩の前に至るまで、八九紙の經文を闕く所あり。今大唐の永隆元年三月の内に、天竺の三藏、地婆訶羅有り、唐には日照と云ふ、此一品の梵本有り、法藏觀り共に校勘す、此圖文に至りて勅を奉じて、沙門道成、復禮等と譯出して之を補ふ。

九に支流とは、謂はく、此大經、力に隨ひて受持すれば、分れて多部と成す『兜沙經』一卷、是れ第二會の初なり『菩薩本業經』一卷、是れ淨行の一品、『小十住經』一卷、是れ十住品なり、『大十住經』四卷、漸備一切智德經』四卷、並に是れ十地品なり、『如來性起微密藏經』兩卷、是れ性起品なり、『顯無邊佛土經』一卷、是れ壽命品なり、『度世經』六卷、是れ離世間品なり、『羅摩伽經』三卷、是れ入法界品なり。近ごろ于闐に於て、于闐の三藏と共に、華嚴の修慈分一卷、不思議境界分一卷、金剛鬘分十卷を翻す。此分翻未だ成ぜざるに、三藏亡歿せり。今現に神都に於て、更に于闐國より進むる所の華嚴五萬頌の本、並に三藏を得て、神都に至りて現に翻譯す。其慈恩等の梵本、舊の漢本と、並に同じく異なること無し。新來の梵本の品會及び文句は、少く不同有り。明けし、此大經は數本なる

【第十に六云】感
應ありしを述す。
六事あり。初に功
德賢三藏即ち求那
跋陀羅 (Sinnaha
tha) の事。

【七云】本經の文義
分齊を辨す。

故なり。此れ並に大經の支流は器に隨ひて分流す。

第十に感應とは、宋主、西來の三藏を請じて、此經を講せしむ。其人恨むらくは、方言未だ通ぜざるを以て、愚くは説、旨を盡さざらんことを。乃ち道場に入りて、祈請して觀に七日を盈るに、遂に夢むらく、漢首を以て、己が梵頭に易ふと。因りて即ち洞に宋の言を解して、講授帶ること無し。又、九隴山の尼は、此經を敬重し、專精轉讀すること、二十餘載にして、遂に目に毛端の利海を觀ることを感ず。又、五臺山の尼は、常に此經を誦するに、嚙より曉に至るまで、一部斯に畢る。口中に光輝遍く山谷を耀かす。又、北齊の炬法師、此經を崇重すれども、師受を闕く、專讀して解を祈ること、十五餘年にして、遂に夢むらく、善財聰明の藥を授くと、因りて即ち聞悟して、疏十卷を造り、講すること五十餘遍なり。又定州の中山の修德禪師は、懇誠、淨を護りて此經を鈔寫す。後因を開くに、光を放ちて一百二十里を照す。又闍人劉謙之、因に五臺山に於て、専ら此經を讀み、遂に丈夫の形に復す。諸の此の如きの例事、極めて繁廣なり。具に五卷の華嚴傳の中に説くが如し。

三五九に義理分齊を顯さば、然るに義海宏深にして、微言浩濶たり。略して十門を擧げて、其綱要を撮る。一には同時具足相應門、二には廣狹自在無礙門、三には一多相容不同門、四には諸法相即自在門、五には隱密顯了俱成門、六には微細相容安立門、七には因陀羅網法界門、八には託事顯法生解門、九には十世隔法異成門、十には主伴圓明具德門なり。然

るに此十門は、同一緣起無礙圓融にして、隨ひて一門有れば、即ち一切を具す。應に之を思ふべし。

【初門の中云云】
同時具足極應門。
初に總じて十義具足を辨ず。
【下に云はく】 合那旨也。

【今日く云云】
以下、別して一事十對を辨ず。

初門の中に就きて十義の具足有り。一には教義具足、二には理事、三には境智、四には行位、五には因果、六には依正、七には體用、八には入法、九には逆順、十には應感具足なり。謂はく、衆生機感あれば、如來應赴す。下に云はく、「一切衆生の所樂示現」と。然るに此十對は、同時に相應して、一の緣起爲り、一に隨ひて各餘の一切の義を具す。初門既に爾るが如く、餘の廣狹等の九門、皆各前の十對を具す。但し門の異なるに隨ふのみ。是故に一一の門中に、各十百千等有り、之を思つて見つべし。今日く一の事法の上にて、此十對を辨せん。餘は準知すべし。下の文の中の如し。一には、蓮華の葉は、解を生ぜしむることを長すれば教と爲す。即ち是れ所詮を義と爲す。下の勝音菩薩蓮華の處に説くが如し。二には、華の相を事と爲す。華の體は是れ理なり。下に云はく、法界不可壞の蓮華世界海と。三には、華は是れ所觀にして、亦即ち能觀なり。此經の中には、内行を以て外事と爲すべきを以ての故に。四には、行事の華は位を結成するが故に。五には、因果の華は攬りて果を成するが故に。六には、華臺は所依にして、亦正に入るが故に。國土身等の如し。七には、華體は眞に同じく、用は機に應ずるが故に。八には、全く攬りて人と爲り、恆に是れ法なるが故に。九には、逆は五熱に同じ、順は十度の故に。十には、群機に應赴し、亦能く感ずるが故に。一華の事の既に爾るが如く、餘の一切の事、皆準じて

【初門】 同時具足相應門を指す。

【二には六句】 廣狹自在無礙門を明す。

【三には云云】 一多相容不同門。

【六句有り】 解境行境の二を加ふる

【四には云云】 諸法相即自在門。

【五には云云】 陰密顯了俱成門。

之を知れ。事法既に爾り、餘の教義等の一切皆然り、華思して見つべし。自の上對を具すること、既に爾るが如く、彼一の華葉に、前の十門を具することも亦然り。何となれば、此蓮華葉に前の十義を具するに、同時に相應し、具足し、圓滿するが故に、是れ初門なり。

二には、即ち彼華葉は、法界に普周して、而も本位を壞せず、分即ち無分、無分即ち分なるを以て、應狹自在にして無障無礙なり。下に云はく、「此大蓮華は、其葉過く一切の法界を覆ふ」と。是故に或は唯廣くして際無く、或は分限歴然たり。或は即廣即狹、或は廣狹俱に泯ず。或は前の四を具す。是れ解の境なるを以ての故に。或は前の四を絶す。是れ行の境なるを以ての故に。下皆此に準ぜよ。

三には、即ち此華葉は、己を舒べて遍く一切法界の中に入れ、即ち一切を攝して己が内に入らしむ。舒攝同時にして既に障礙無し、是故に鑿融す。或は四句六句有り、前に準じて之を思へ。下に云はく、「一佛土を以て十方に滿じ、十方一に入りて亦餘無し」と。

四には、此一の華葉は、己を廢して他に同ずれば、舉體全く是れ、彼一切の法なり。而も恆に他を攝して己に同ずるは、彼一切の法を全うして、即ち是れ己體なり。一多相即し、混じて障礙無し。解行の境、別にして六句、前に同じ。下に云はく、「一即多、多即一と知る」等と。

五には、華能く彼を攝すれば、即ち一は顯、多は隱なり、一切、華を攝すれば即ち一は隱、多は顯なり。顯と顯と俱ならず、隱と隱と並ばず、隱顯、顯隱同時無礙にして、全く

【六には云云】 微細相安立門

【七には云云】 四陀羅網法界門

【八には云云】 託事顯法生解門

【九には云云】 十世隔法異成門

【十に云云】 主伴開明具德門

攝し俱に混じり、存亡俱に成ず、句數前に同じ。下に云はく、「東方に正受に入るを見れば、西方には三昧より起つを見る一等等と。」

六には、此華葉の中に、微細の刹等の一切の諸法、炳然として齊しく現す。下に云はく、「一塵の中に於て微細の國土曠然として安住す」と。

七には、華葉は一一の微塵の中に、各各並に無邊の刹海を現す。刹海の中に復微塵有り、彼諸の塵の内に復刹海有り。是の如く重重にして窮盡すべからず。是れ心識思量の、及ぶ所に非ず。帝釋の網の、天珠明徹にして、互相に影現し、影復影を現じて、窮盡無きが如し。下の文の、因陀羅網世界等の如し。

八には、此華葉を見るに、即ち是れ無盡法界を見る、是れ此に託して別に所表有るに非ず。下に云はく、「此華蓋等は、無生法忍より起る所なり一等等と。」

九には、即ち此一華既に具に一切處に遍じ亦復一切時を該ぬ。謂はく、三世に各三あり、攝して一念と爲す。故に十世と爲すなり。時に別體無きを以て、華に依りて以て立つ。華既に無礙なり、時も亦之の如し。是故に下に云はく、「過去の一切劫に、未來今を安置し、未來の一切劫を廻して、過去世に置く」と。又云はく、「無量劫は即ち一念、一念は即ち無量劫」一等等と。

十には、此圓教の法理、孤り起ること無し、必ず眷屬隨ひて生ず。下に云はく、「此華に世界海摩數の蓮華有り、以て眷屬と爲す」と。又、一方を主と爲し、十方を伴と爲すが

【六】十玄の依りて来る因縁を問答す。

【七】別釋する中に、初に第一由を略して釋す。縁起法界無量の義門は、此十門を以て釋する意。【一には守る】諸縁各異の義。

如し、餘方も亦爾り。是故に主を主とし、伴を伴とすれば、各相見ず。伴を主とし主を伴とすれば、圓明具徳なり。一の事華の如き、自の十義を帶し、此十門を具して、即ち一百門と爲る。餘の教義等も亦、各之に準するが故に千門と成る。教義等の、自類の十義及び同時等の十門に望めて、此千門有るが如く、彼同時等亦自類の十門、及び教義等に望めて、亦千門と成る。準思して見つべし。

問ふ、何の因縁有りてか、此諸法をして、是の如きの混融無礙有ることを得しむるや。答ふ、因縁、無量にして具に陳ぶべきこと難し。略して、十類を掲げて、此無礙を釋せん。一には縁起相由の故に、二には法性融通の故に。三には各唯心の現なるが故に。四には如幻不實の故に。五には大小定り無きが故に。六には無限の因より生ずるが故に。七には果徳圓極の故に。八には勝通自在の故に。九には三昧の大用なるが故に。十には難思の解脱の故なり。

初に縁起相由の故とは、謂はく、大法界の中の縁起の法海は、義門無量なり。圓宗に約就して、略して十門を擧げて、以て前の義を釋す。謂はく、諸の縁起の法は、要す此十義を具して、方に縁起するが故に、闕かば即ち成せず。

一には諸縁各異の義、謂はく、大縁起の中に、諸縁相望するに、要す須らく、體用各別なるべし。相和雜せずして、方に縁起を成す。若し爾らずんば、諸縁雜亂し、本縁の法を失して、縁起成せず。此れ即ち諸縁各各自の一を守るなり。

【二には…具す】
互遍相資の義

【此一は…具す】
同體同を以ていふ

【三には…竟んぬ】
俱存無礙の義

【四には…思澤せ】
異門相入の義
【論】 十地論

二には互遍相資の義。謂はく、此諸緣要す互に相遍應して、方に緣起を成す。且く一緣多緣に遍應するが如き、各彼多の與に、全く一と爲る。故に、此一は即ち多箇の一を具す。若し此一緣、多の一を具せざれば、即ち資應遍せずして緣起を成せず。此れ即ち一一に各一切の一を具す。

三には俱存無礙の義。謂はく、凡そ是一緣、要す前の二を具して、方に緣起を成す。要す自の一に住して、方に能く遍應し、多緣に遍應して、方に是れ一なるを以ての故に、是故に、唯一多一自在無礙なり。此れ鏽融するに由りて、六句有り。或は舉體全く住す、是れ唯一なり。或は舉體遍應す、是れ多一なり。或は俱に存し、或は雙べて泯じ、或は總合し、或は全融す。皆之を思うて見つべし。此上の三門は、總じて緣起の本法を明し竟んぬ。

四には異門相入の義。謂はく、諸緣の力用、互相に依持し、互に形奪する故に、各全力有りて全力の義無き緣起方に成す。論に云ふが如し、因より生せず、緣生の故に。緣より生せず、自ら因生するが故に」と。若し各唯有力にして、無力無くんば、即ち多果の過有り。一一各生するが故に。若し各唯無力にして、有力無くんば、即ち無果の過有り。同じく緣に非ずして、俱に生ぜざるを以ての故に。是故に緣起は、要す互に相依して、力無力を具す。一緣を闕きなば、一切成ぜざるが如く、餘も亦是の如し。是故に一能く多を持すれば、一は是れ有力にして能く多を攝し、多は一に依らば、多は是れ無力にして、一に潛入す。一の有力は必ず多の有力と、俱なることを得ざるに由る。是故に一一にして多を

【五には…見つべし】異體相即の義

攝ぜざることを、有ること無し。多は無力にして、必ず一の無力と俱なることを得ざるに由る。是故に多にして、一に入らざること、有ること無し。一は持、多は依なること既に兩るが如く、多は持、一は依なるも亦然り。上に反じて之を思へ。是れ即ち亦多にして、一を攝ぜざること無く、一は多に入らざること無き者なり。一を多に望むるに、依有り持有り、全力無力常に多を全うして、己が中に在き、己を潛入して多の中に在くこと、同時無礙なるが如く、多を一に望むるも當に知るべし亦兩り。俱存雙泯の二句無礙なること、之に思準せよ。

五には異體相即の義。謂はく、諸縁相望するに、全體形奪し、有體無體の義有りて縁起方に成す。若し一縁を闕かば、餘は起ることを成さざるを以てなり、起ること成らざるが故に、縁の義即ち壞す。此一縁を得て、一切をして起ることを成せしめ、所起成するが故に、縁の義方に立す。是故に一縁は是れ能起、多縁及び果は、俱に是れ所起なり。是れ即ち多は一の爲に成すれば、多は是れ無體なり。一は能く多を作れば、一は是れ有體なり。一は有體なるに由りて、必ず多の有體と俱なるを得ず、多は無體なるに由りて、必ず一の無體と俱なることを得ず。是故に多ならざるの一有ること無く、一ならざるの多有ること無し。一多既に兩り、多一も亦然り、上に反じて之を思へ。一を多に望めて有體無體有るが故に、能く他を攝して己に同じ、己を廢して他に同じ、同時無礙なるが如く、多を一に望むるも、當に知るべし、亦兩り。前に準じて之を思へ。俱存雙泯の二句無礙なること、亦之を思う

【六には…竟んぬ】
常用變融の義。

て見つべし。

六には體用變融の義。謂はく、諸の緣起法は要ず力用交渉し、全體融合して方に緣起を成ず。是故に圓通に亦六句有り。一には體として用ならざること無きを以ての故に、擧體全く用にして即ち唯相入のみ有りて、相即の義無し。二には、用として體ならざること無きを以ての故に、即ち唯相即のみ有りて、相入無し。三には、體に歸するの用、用を礙へず、用を全うするの體は、體を失せず、是れ即ち變存を礙ふること無し。亦是入、亦是即して自在に俱に現す。四には、用を全うするの體は體泯じ、體を全うするの用は用亡す。即ち非ず入に非ず、圓融一味なり。五には前の四句をへするに、同一緣起にして俱存を礙ふること無し。六には、前の五句を泯じ、絶待離言にして性海に冥同す。此上の三門は、初の異體門に於て、義理を顯し竟んぬ。

【七には…思へ】
同體相入の義。

七には同體相入の義。謂はく、前の一緣は、所具の多一と彼一緣と、體無別の故に、名けて同體と爲す。又、此一緣は多緣に應ずるに由るが故に、此多一有り。所應の多緣既に相即相入し、此多一をして亦即入有らしむ。先に相入を明さん。謂はく、一緣は有力にして、能く多一を持すれば、多一は無力にして、彼一緣に依る。是故に一は能く多を攝し、多は便ち一に入る。一は入、多は攝なるも、上に反じて應に知るべし。餘の義、餘の句は、前に準じて之を思へ。

【八には…思へ】
同體相即の義。

八には同體相即の義。謂はく、前の一緣所具の多一に、亦有體無體の義有るが故に、亦

【九には…竟んぬ】
俱融無礙の義。

【十には…辨ず】
同異圓備の義。

相即す。多一は無體なるを以て、本一に由りて成ずれば、多は即ち一なり。本一は有體にして、能く多を作すに由りて、一に多を攝せしむ。一は有、多は空、既に爾るが如く、多は有、一は空なるも亦然り。餘の義餘の句、並に前に準じて之を思へ。

九には俱融無礙の義。謂はく、亦前の體用雙融し、即人自在なるに同じ。亦六句有り、前に準じて應に知るべし。此上の三門は、前の第二の同體門の中に於て、義理を辨じ竟んぬ。

十には同異圓備の義。謂はく、前の四門を以て、總合して一大緣起と爲す。故に多種の義門をして、同時に具足せしむることを致すなり。一に住し遍應するに由るが故に、廣狹自在有り。體に就き用に就くに由るが故に、相即相入有り。一は多を攝する時、顯と爲し、一をして多に入らしむるを隱と爲す。多は攝、一は人なるも亦爾り。又、用に就きて相入するを顯と爲せば、體に就きて相即せしむるを隱と爲す。即は顯、人は隱なるも亦然り。又、異門の即人を顯と爲せば、同體ならしむるを隱と爲す。同は顯、異は隱なるも亦爾り。又、異門を以て、同體の中に攝し、相入するの義に由るが故に、微細門を現す。異體相入に、同體の相入を帶するに由るが故に、重重無盡帝網門有り。此大緣起の法は、即ち無礙法界の法門なるに由るが故に、託事顯法門有り。此融通自在に由るに、今此法の上に依りて辨ずる所の時法、亦此に隨ひて無礙自在なるが故に、十世門有り。此法門は、同一の緣起相帶して、起るに由るが故に、一門に隨ひて、必ず一切を具するが故に、主伴門有り。

【上來：如し】總
じて緣起相由門を
結す。

此一門は前の第三の門の中に於て、以て義理を辨す。上來の十義。總じて是れ緣起相由門
竟んぬ。餘門は指歸の中に説くが如し。

華嚴經探玄記卷第一

華嚴經探玄記 卷第二

魏國西寺沙門法藏述す

【一】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【二】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【三】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【四】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【五】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【六】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【七】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【八】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【九】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。【十】第十に隨文解釋。初に總じて文段を分つに、初に三分科を明す。一、第二、第八の三。

第十に、交に隨ひて解釋すとは、今此三萬六千偈の經に、七處八會有り。謂はく、人中の三處と、天上の四處とを七と爲し、重會の普光を八會と爲す。中に於て三十四品有り。初の一品は是れ序分なり。盧舍那品より下は、正宗を明す。流通の有無は、四義を以て釋す。一には、衆生心微塵より下の、二頌を以て流通と爲す、結數勸信するを以ての故に。二には、經の來ること盡きざるが爲に、闕きて流通無し。三には、此經は是れ、稱法界の法門の說爲るが故に、總じて流通無し。問ふ、「若し爾らば、何ぞ便ち序分有ることを得るや。」答ふ、「見聞は通じて趣入すること有るを以ての故に、始有るを序と爲す。所入極無きを以ての故に、終の流通無し。修生の佛果は、始有りて終無きが如し。若し爾らずんば何が故ぞ、八會一一の會の末に、皆流通無きや。」大般若經の十六會の中に、彼會會の後に皆別に流通有り。『大集經』の中の諸會の末に、皆亦有り。即ち此經は爾らず、故に知んぬ、別意所表有ることを。四には餘の三乘等の法は、機の差別に逐ひて、衆生を利益するを以て、流通の益相と爲す。又、大遠法師此經を分ちて四分と爲す。初品を緣起淨機分と名け、二に舍那品を標宗策志分と名け、三に名號品より下、第八會に至る來を、顯道策修分と名

【八、更に…】減せざるなり。以下、五分科を明す。

け、四に最後の普賢所説の偈を、屬累流通分と名く。今更に下の文を尋ぬるに、總じて長分して五と爲す。初品は是れ教起因縁分、二はは、舍那品の中の一周の問答を、舉果勸樂生信分と名く。三には、第二會より第六會に至る來の、一周の問答を、修因契果生解分と名く。四に第七會の中の一周の問答を、託法進修成行分と名く。五に第八會の中の一周の問答を、依人入證成德分と名く。流通の有無は、もつて上に辯するが如し。此五分は皆前に依りて後を起し、文次信生し、義理周足す、故に増減せざるなり。

【二】正しく經文を釋す。初に此土の序分。【初に四字】如是我聞の四字。

【又初の四字…】局なるなり。總じて通局を辨す。

【又佛地…】衆なり。二、義を論説す。

初の序分の中に就きて、分ちて二と爲す。初には、此土の中の序分を明し、二には、十方無盡世界の中の序分を明す。初の中に三有り。一には、初に四字有るは、唯是れ證信なり。二には一時の下は二序に通ず。三には動地より下は唯是れ發起なり。若し後の説に通ぜば、四句有ることを得。或は唯證信なるは是れ初なり。或は唯發起なるは是れ後なり。或は俱なるは、是れ中間なり。或は俱非なるは、是れ下の正宗なり。又、初の四字は、義通じて而も文局れり。文は初首に在れども、義は八會に通ずるを以ての故に。一時の下は、文通じて一義局れり。下の諸會は皆、爾時等といふこと有るを以ての故に文、通ずるなり。今此は初に局る故に、義局るなり。又一佛地論に依るに、分ちて五と爲す。一には總じて已聞を顯し、二には教起の時、三には教主を顯す、四には教起の處、五には教所被の機なり。一法華論等に依るに、六成就有り。一には信、二には聞、三には時、四には主、五には處、六には衆なり。

【三】義門を開きて正しく釋す。【初の中云云】六義安立の所由。

【優婆離】梵名、(Upāsi) 持戒第一の比丘。【阿那律】梵名、(Anuruddha) 佛十大弟子の一。

【阿泥盧豆】阿那律 (Anuruddha) 佛十大弟子の一。

【波羅提木叉】別解 (Patimokkha) 戒律をいふ。

今此義を釋するに、略して四門と作る。一には、此六義安立の所由を明し、二には聞の觀傳を辨じ、三には傳法の人を定め、四には文を釋す。初の中に、此六句を立つる所由に六有り。一には、佛、教へて安立せしむ。『智論』に依るに、佛、涅槃に臨むるとき、阿難に告ぐ、『十二部經は汝當に流通すべし。』復優婆離に告ぐ、『一切の戒律は汝當に受持すべし。』と。阿那律に告ぐ、『汝は天眼を得、常に舍利を守護して、人を勸めて供養せしめよ。』と。大衆に告ぐ、『我若は住すること一劫、若は滅すること一劫すとも、會ふものは亦當に流すべし。』と。語り己つて、雙林に北首にして臥し、涅槃に入らんと欲す。阿難、親屬の愛、未だ除かず、心憂海に没す。阿泥盧豆、阿難に語らく、『世尊今日在りと雖も、明日は既に無からん。汝須らく未來の要事を問決すべし。何に由りてか彼愚人に同じて、是の如く問絶するや。阿難即ち起ちて、問ひて言はく、『我今何の事を請問するやを知らず。』盧豆教へて云はく、『要事に四有り。一には問へ、如來在世には、觀り自ら說法し、人皆信受す。二に云はく、『要事に四有り。一には問へ、如來在世には、觀り自ら說法し、人皆信受す。』如來滅後には一切の經の首に、當に何の言を置くべきと。二には問へ、如來在世には、諸の比丘等、佛を以て師と爲す。如來の滅後には、何を以て師と爲すと。三には問へ、佛在世の時には、諸の比丘、佛に依りて住す。如來の滅後には誰に依りてか住せんと。四には問へ、如來の在世には、惡性の車匿も、佛、自ら之を治す。佛滅度の後には、云何が共に住せん。』と。阿難、教の如く請問す。世尊答へて云はく、『經の首には當に如是等の六句を置くべし。二には云はく、比丘は皆、波羅提木叉を以て師と爲すべし。三には云はく、

【四念處】一、身念處、二、受、苦、觀ず（受念處）三、心は無常と觀ず（心念處）四、法念處。

【梵檀】默摺と譯す。衆僧言を交へず。

【二には斷起；故なり】斷疑の爲に六句を立つるを明す。

【三には；故にと】未來信を生ぜしめんためなることを明す。

皆四念處に依て住せよ。四には惡性の比丘をば、梵檀を以て之を治せよ。此には默摺と云ふ、若し心勇伏せば、爲に『迦旃延經』を説けと。此に『離有無經』と云ふ、我慢の心を破す、又『大悲經』の中の如し。阿難、佛に請ふらく、「云何が法眼を結集せん。」佛阿難に告ぐ、「我滅度の後、大徳の比丘、應に是の如く問ふべし。」「世尊何の處にか、大阿波陀那等の經を説くや。汝應に是の如く答ふべし。」「是の如く我聞けり、一時摩伽陀國の菩提樹下に在りて、初て正覺を成じて説法し、乃至娑羅雙樹の間に於て説法す」と云へ。是の如き等の二十餘處の所説の經は、佛自ら重ねて阿難に教へて結集せしむ。是故に此六句は、佛、教へて立つるなり。二には斷疑の爲の故に、此六句を安す。眞諦三藏の云ふが如し、微細の律に依るに、阿難高座に昇りて、法藏を結集するの時に當りて、其身は佛の如く相好を具す。若し座を下るの時は、還りて本形に復す。衆此端を見て還りて三の疑を生ず。一に疑ふらく、佛は大師、慈悲をもつて、涅槃より起ちて、更に衆の爲に法を説くかと。二に疑ふらく、佛仙他方より來るか。三に疑ふらく、阿難身を轉じて佛と成るか。今此三の疑を除かんが爲の故に、六句を安す。是故に阿難曰ら、是の如きの法は、我佛によりて聞くと稱す。明かに知んぬ、是れ佛重ねて起ちて説くに非ず、亦他方の佛來るに非ず、又、阿難の自身、佛と成るに非ず。但法力を以て、我をして、佛に似せしむるが故なりと。三には未來生信の爲の故に、「智論」に云はく、「一切の經の初に、時方人等を置くは、信心を生ぜしめんと欲するが故に」と。四には増減の過を離るるが故に、『佛地論』に云は

【四】には：修學すべし。教説私なきことを信ぜしめんが爲に、六句を安立するをいふ。

【五】には：辨ず。自説は諍論を招くが故に、六句を安くといふ。

【六】には：信受せしむ。外道と異なることを顯さんために六句を安くといふ。

【四】 聞の親傳なることを辨ず。

く、應に知るべし、此如是我聞と説くは、意増減異分の過失を避く」と。謂はく、是の如きの法は、我佛に從ひて聞く。他の展轉して聞者に顯示するに非ず。諸有の所聞に堪能する所有りて、皆増減異分の過失を離る。愚夫の諸有の所聞に、堪能する所無く、或は増減異分を離るること能はざるが如きには非ず。法を結集する時、佛教を傳ふる者の、如來の教に依りて、初めて此言を説き、衆生をして恭敬信受せしめんが爲に、是の如きの法は、我佛に從ひて聞くと言ふ。文義決定して増減する所無し。是故に聞く者、應に正しく聞き已りて、理の如く思惟すべし。當に勧めて修學すべし」と。五には「諸の諍論を息んが爲の故に。若し自ら制作せば、則ち諍論斯に起る、故に然らざるなり。此は『智論』に依りて辨ず。六には外道に異するが故に。彼外道の經論には、或は石崖崩れて得と云ひ、或は青雀銜み來ると云ふが故に、信すべからず。是故に、今具に委曲を顯して、法は謬に非ざることを明し、人をして信受せしむ。

第二に阿難等の親聞、傳聞の不同を明すとは、若し小乘に依れば、二説有り。一には云はく、阿難は既に是れ佛、得道の夜に生れ、年二十にして、方めて佛弟子と爲る。其二十一年已後の經は、是れ親聞なれども、已前は是れ傳聞なり。『法輪經』に云はく、「阿難結集する時、自ら佛を説きて云はく、「佛、初めて法を説く時、爾時には我見ず、是の如く展轉して聞く。佛、波羅捺に遊んで、五比丘衆の爲に四諦の法輪を轉す」と。故に知んぬ、已前は親聞に非ざることを。二には云はく、「皆是れ親聞の故に。『薩婆多論』に云はく、「阿難、

【覺意三昧】諸の三昧をして無漏となし、七覺と相應せしむる三昧をいふ。

【五】傳法の人を定むるなり。

【上の二乗】緣覺菩薩をいふ。

【阿難陀跋陀羅】(Anandhadrak)

【阿難陀婆伽羅】(Anandhagar)

【下の二乗】聲聞と緣覺をいふ。

神の爲に侍者と作るの時、請願して言はく、「願くは佛二十年の中の所説の經、盡く我爲に説きたまへ」と。毘尼母論亦此説に同じ。故に知んぬ、總じて是れ親聞なり。若し大乘に依らば、一切皆親聞す。二義有り。一には、佛重ねて爲に説く「勝鬘經」等の如し。佛木處に還りて、重ねて阿難の爲に説く。又上の「大悲經」の中の如し。佛總じて重ねて説く、故に是親聞なり。二には、阿難常に聞くが故に「涅槃經」に云はく、「阿難は多聞の士、若は在、若は不在にも、自然に能く常と無常との義を解了す」と。又云はく、「阿難覺意三昧を得て、佛所説の經、近遠常に聞く」と。

第三に傳法の人を定むるとは、問ふ、此經を説く時、二乗の人等は、並に聲旨の如し。豈阿難而我聞くと稱することを得んや。答ふ、二義有り。一には、設ひ是阿難なりとも、此亦過無し。何となれば、阿闍世王懺悔經に依るに、「三種の阿難有り。一には阿難陀、此には慶喜と云ふ。聲聞の法藏を持す。上の二乗に於て、力に隨ひ分に隨ふ。二には、阿難陀跋陀羅と名く、此には慶喜賢と云ふ。中乗の法藏を持す。上の大乘に於て、力に隨ひ分に隨ふ。下の小乗に於て、容預に兼持す。三には、阿難陀婆伽羅と名く、此には慶喜海と云ふ。菩薩にして大乘の法藏を持す。下の二乗に於て、容預に兼持す」と。此經文に準ずるに、阿難海は是れ大菩薩にして、能く大法を持す。理も亦違すること無し。若し聞教に依らば、並に是れ盧遮那佛の海印三昧の内に、此傳法の人等を現するが故に、即ち是れ佛なり。二には云はく、是れ阿難の所傳に非ず。理亦違すること無し。何んとなれば、一智

【六】文を釋するに、初に如是の二字、

【我とは云云】我の一字を釋す。

論に云はく、一には顯示教、二には秘密教なり。此「大日經」は是れ顯示教なるが故に、阿難に付屬す。『法華經』の如きは、是れ秘密教なるが故に、喜王等に付屬す。と。又『涅槃經』に云はく、「阿難、未だ聞かざる所の經は、弘廣の菩薩、當に爲に流通すべし」と。此に準ずるに是れ弘廣の菩薩、如是我聞と稱す。又「智論」に準ずるに、是れ文殊師利、我聞と稱す。彼論に、「文殊と阿難と、餘の清淨處に在りて、摩訶衍藏を結集す」と云ふを以てなり。又「文殊師利般若涅槃經」の中に、「佛般涅槃の後、四百年の時、文殊師利於世間に在り」と。故に知んぬ、是れ彼が此法を傳ふるなり。

第四に文を釋す。「智論」に依るに、如は順なり、是は信なり。又、是は印なり、即ち印順信受するが故に如是と言ふ。如是は總じて一部の文義を擧ぐ。謂はく、己の所聞の法を指す故に、如是と云ふ。長耳三藏に依るに、三寶に約して釋す。一には佛に約して云ふ。謂はく、佛の所説の如きは、是れ我所聞なり。我所聞の如きは、是れ佛の所説なり。二には法に約して云ふ。我所聞の如きは、是れ理に稱ふの教なり。理に稱ふの教の如くに、是れ我所傳なり。三には僧に約して云ふ。我所聞の如きは、是れ諸菩薩の同聞する所なり。

諸菩薩の同聞する所の如く、是れ我所傳なるが故なり。「佛地論」に云ふに依るに、佛教を傳ふる者、是の如きの事、我昔曾て聞くと云ふ。如是は總じて言はば、四義に依りて轉す。一には譬喩に依り、二には教誨に依り、三には問答に依り、四には許可に依る。廣く釋すこと彼論の如し。我とは、謂はく、五蘊の假者なり。汎く我を論ずるに、四種有り。一に

【分別俱生】身と俱生すると、邪師邪教邪思惟に由りて起すとなり。

【問ふ聞…辨ぜよ】以下、聞の字を釋す。

は眞我に謂はく、眞如の中の常樂我淨等なり、眞如を性と爲す。二には自在我、謂はく、八自在の我等なり。智を以て性と爲す。三には假我、謂はく、五蘊の假者なり。唯識の所現なる、主宰有るに似たるを以て、其を以て性と爲す。四には執我、謂はく、分別俱生の所執を性と爲す。又我を緣するの心も、亦四種有り。一には見、謂はく、諸の凡夫等なり。二には慢、謂はく、諸の學人なり。三には習、謂はく、無學の人なり。四には世の流布に隨ふ、謂はく、諸佛なり。此中の我とは、前の四の中に於て、通じて初の三有り。教に約して之に準するに、後の四の中には唯一なり。亦は後の三に通ずべし、之を思準せよ。何が故に無我と説かずして、我と説くや、謂はく、親聞を顯すが故に、語の便なるが故に、世間に隨ふが故に、無我を顯すが故に、並に「智論」に説くが如し。問ふ、「傳法の者、何が故に自ら名を稱せずして、而も我と云ふや、答ふ、「同名に濫する失有るが故に。」問ふ、「我豈通せざるや、答ふ、「已に我と稱す。定んで自に屬するが故に。」問ふ、「聞は但聲を聞く、何ぞ耳聞と言はざるや、答ふ、「總を以て別を收むるが故に。」問ふ、「聞は但聲を聞く、豈能く解せんや、答ふ、「耳に具聲を聞くと、意に文等を解すると、和合して無二なるを、親きに從ひて聞と説く。薩婆多には根をもつて聞かといひ、成實には識をもつて聞かといひ、「智論」には、和合して聞かといふ、即ち空無作なり。涅槃に云はく、「四の因縁和合するが故に聞く、一には耳根壞せず、二には聲可聞の境に在り。三には申間に障礙無し。四には聞かんと欲すること有るが故に、聞くことを得。是故に、此聞は則ち不聞の聞なり。」

【等無間依】前後等同にして、斷絶することなく、所依となる意。
【所緣緣】境は心法之所緣、これまた所起の心法の爲に緣となるをいふ。
【七】此二序の文を釋通す。

【染淨】摩竭國と寂滅道場をいふ。

【前の中に三云云】以下、初に時、次に佛、次に處を明す。

【二に佛云云】次に佛の意義を明す。

と。又十緣を具す。一には本識を依と爲し、二には耳識の種子を因緣と爲し、三には末那を染汚の依と爲し、四には意識を相應依とし、五には白類の耳識を等無間依と爲し、六には耳根の不壞を同境根と爲し、七には作意して聞かんと欲す、八には有覺を所緣緣と爲す、九には中間に障礙無し、十には境近く可聞に在り、亦餘法の不礙等に通ず。是故に此聞は自性無きが故に、不聞の聞なり。教に約して、準じて之を辨ぜよ。」
一時以下は二序に通ず、即ち是れ六句の内の、後の四句なり。中に於て、初の三は同じく辨ず。謂はく、時と主と及び處となり。後の一は別して辨ず。謂はく、同聞衆なり。此れ亦即ち是れ三世間の相なり、應に知るべし。前の中に亦二あり。先づ、通じて三相を標し、後に始成正覺の下は、別して三義を釋す。何が故に此二門有るとならば、謂はく、處に約するに、前は則ち通じて染淨を擧ぐ。後は則ち別して淨相を顯す。又前は染に寄せ、後は別して淨を辨ず。又、時に始終有り、處に染淨有り、佛に權實有るを以ての故に、須らく重ねて料簡すべきなり。

前の中に三あり。初に一時とは「佛智論」に依るに、或は一刹那、或は多相續にして、但說聽の究竟を取る。是故に總じて、名けて一時と假立す。小乘は實の時あり、大乘は假說なり。若し別して釋せば、梁の「攝論」に、一時に三義有り。一には平等の時なり。謂はく、沈浮顛倒無きが故に。二には和合の時なり、謂はく、聞をして能聞正聞ならしむ。三には轉法輪の時なり、謂はく、正說正受なり。二に佛とは、覺の義にして二有り。謂

【自と他と滿】凡夫、二乘、菩薩の上に於ていふ。

【婆伽婆】婆伽伴薄伽梵等といふ、(Bhagavat) 又は (Bhagavan)

【三には處】菩薩なり。【說法の處を明す、初に摩訶陀國なり。】
【摩伽陀】(Magadha) 中印度王舍城の在りし所。

【寂滅に云云】次に寂滅道場を明す

はく、本覺と始覺となり。又一論に云はく、「蓮華の間くが如く、睡の寤むるが如し」等と。此れ初は所知を覺し、後は煩惱を覺す。或は三覺なり。謂はく、自と他と滿となり。即ち覺を有するの者を、名けて覺者と爲す。或は四義あり、「智論」の中の如し。一には有徳と名く、謂はく、婆伽を徳と名け、婆を有と名くが故に。二には巧分別と名く。婆伽を分別と名け、婆を巧と名くるが故に。三には有名聲と名く。婆伽を名聲と名け、婆を有と名くるが故に。四には能破奸怒疑と名く。婆伽を能破と名け、婆を奸怒等と名くるが故に。此四の中に、初の一は總、後の三は別なり。別の中に、初は智徳、次は福德、後は斷徳なり。又「佛智論」に六義の釋有り。彼頌に云はく、「自在と熾盛と、及び端嚴と名稱と、吉祥と尊貴と、斯六種を具し、義差別す。是故に總じて號して薄伽と爲す」と。廣く釋すること彼の如し。又、眞諦三藏は「眞實論」を引くに、十義の釋有り。「佛の謂はく、「覺、天鼓に勝る」等と。云云。三には處とは、國は通、場は別なり。「智論」に云はく、「摩伽陀國尼連禪河の側、漚樓頻螺聚落の中に於て、阿耨菩提を得る」等と。此には不害國と名く、此國の中には諸の犯罪有れば、只擯罰有りて、刑戮有ること無きを以ての故に、此に託して大法慈濟の相を表示するなり。或は善勝國と名く、或は摩伽と云ふは、是れ星の名なり。此には不惡と云ひ、十二月を主る。陀とは處なり、名けて不惡處國と爲す、亦是星處國と名く。寂滅に四義有り。一には障滅なり、謂はく、性滅及び治滅なり。二には證滅なり、謂はく、滅理を證するが故に。三には其滅徳を顯す、謂はく、佛の十身及び

【金剛三摩地】金剛の一切を摧碎し盡す如く、一切諸法に通達する三昧をいふ。

【八】別して三義を釋す。

【九】初に説時を料簡するに五義を以てす。

【鷲子】鷲鷲子即ち舍利弗の譯名。

普賢等の法を示す。經に云はく、「大毘涅鑿能く大義を建つるが故に」と。四には物を益して滅を成ずるが故に知るべし。道場に亦四あり。一には事處、二には行なり。經に、施は是れ道場等の如しと。三には理「維摩經」の、「一切の法は是れ道場にして、諸法、空を知るが故に」等の如し。四には一切の法に通ず。謂はく、人法等の一切、之に準せよ。皆道を得るの處を道場と名く、依主釋なり。亦世の穀場の、糞穢を簡去して、眞實を擇取するが如し。此中も亦爾り。惑を滅し徳を成ず、亦道即場の故に持業なり、之に準せよ。事場とは「俱舍論」に云ふが如し。剌浮洲の中央に於て、金剛地上より、金剛座を起し、剌浮洲の地に徹して、上際と平なり。一切の菩薩、皆中に於て、金剛三摩地を修習す。何を以ての故に。更に餘の依止、及び能く此三摩地を受くるに堪ふること無し。一切菩薩とは、謂はく、賢劫の千の菩薩なり。

(八)始成正覺の下は、第二に別して、上の三義を料簡す。初には時を料簡し、二には處、三には主なり、時の中に且く五門を作る。一には分齊を定め、二には前後を攝し、三には差別を顯し、四には法を表示し、五には本文を釋す。

初に分齊を定むとは、菩提流支の云はく、「華嚴八會の中に、前の五會は是れ佛成道初七日の説なり。第六會の後は、是れ第二七日の説なり」と「十地經」の初に、第二七日と云ふを以ての故に。又有人の説かく、「第八會は是れ後時の説なり。彼文の中に、鷲子等の五百の聲聞有り、並に後時に度するを以ての故に」と。此等の所判は、恐くは文に順せ

す。初七日には定んで説法せざるを以てなり。二十地論に云はく、「何に故に初七日に説かざるや。思惟行、因縁行の故に」と。既に思惟と言ふ、明かに知んぬ、説法に非ず。説ひ救ひて、只十地を説かず、餘法を説かざるに非ずと、言ふこと有らば、則ち思惟と言ふことを得ず。下の「論」に又釋す。已の法樂を顯さんが爲に、是故に説かずと云ふ。故に知んぬ、初七は定んで説に非ざるのみ。又第八會は亦後時に非ず、何ぞ一部の經に於て、前に已に半を説き、中に餘經を説き、後に方に更に續くことを得ん、豈佛をして陀羅尼力無く、一念に一切の法を説くこと能はざらしめんや。祇園、鷲子は並に是れ九世相入す。下の文に、「過去一切劫を、未來今に安置し、未來一切劫を廻して、過去世に置く」と。又云はく、「一念の中に於て三世一切の佛事を建立す」と。乃至廣説せり。是の如き等の文、處處に皆有り。豈所用の鷲子、祇園、而も此類に非ざるべけんや。是に知んぬ、此經は定んで是れ第二七日の所説なり。

二に前後を攝すとは、三重有り、一には、此二七の時に於て、即ち八會を攝して、同時に説く。若し闕らば、何が故に會に前後有るや。答ふ、「印文の、讀む時は前後あれども、紙に印するには、同時なるが如し。問ふ、「若し闕らば云何が重會成ずることを得んや。答ふ、「重も亦同時なり、無礙なるを以ての故に。燈光相入等の如し。餘の不動の昇天等は準釋して知るべし。二には、即ち此時に於て、彼前後を攝す。各無量劫を皆盡さざること無し、是れ不思議解脱の時なるを以ての故に。

【二に前後を攝す】
二七日に前後を攝するを明す。

【此時】 第二七日を指す。

【普曜經】八卷。西晉竺法護譯。廣犬莊嚴經と同本なるも品に開合あり。【密迹力士經】大寶積經四十九會中の第三會をいふ。

【興起行經】二卷。後漢の康孟詳譯。佛の十受難の因縁を説けるもの。【十二遊經】一卷。東晉劉留陀伽譯。佛成道後十二年間の遊行記録。

三には、重重無量の念劫を攝す。因陀羅網の重ねて收攝する如くなるが故に。三には差別を顯すとは、『普曜經』に依るに、「第二七日に鹿野園に於て、彼五人の爲に三び四諦を轉ず」と、此は是れ小乘なり。『密迹力士經』に依るに、「第二七日に鹿園にして、無量の大衆の爲に、法輪を轉ずる時、羅漢、辟支、菩薩の道を得ること有り」と。此は是れ大乘なり。此經に依るに、「第二七日に、樹王下に於て、海會の菩薩の爲に、無盡の法輪を轉ず」と。明けし是れ一乘なり。上の三、同時なることを、法に約せば、本末同時なるを表し、人に約せば、機感の各異を顯すなり。『法華』に依らば三七日、「四分律」には六七日、「興起行經」には七七日、「五分律」に依るに八七日、「智論」には五十七日、「十二遊經」には一年にして方に説くと。此は並に末教機異なり。宜聞各別なるが故に、不同を致す。本教は機定るが故に、唯二七なり。

四には法を表示すとは、『十地論』に云はく、「時處等は校量して、勝を顯示するが故に、此法勝るが故に、初時、及び勝處に在りて説く」と。此に三義有り。一には、此經の初時なるは、本法の勝ることを表するが故に。二には、末教も亦同なり。末は本を離れざることを表すが故に。三には、本にして末に非ざることを顯すが故に。時定んで二七にして、更に異説無し、末に同すからず。

第五に文を釋すとは、始成正覺とは、意は初始の義を顯す。然るに二相有り。一には、初七日は是れ、世に現するの始、二には第二七日は是れ、法を説くの始、此中は是れ正覺

【無間道】惑を斷じつつあるに際し、惑障のために間斷せられざる無漏智のこと。

【】説法の處を料簡するに、また五門を以て釋す。

を成じてより來、今七日を經たり、故に始成正覺と云ふなり。通じて五義有り。一には小乘に約す。生身の佛は、此樹下に於て、三十四心に初めて正覺を成じて、諸の羅漢に同するを以て、實成にして化に非ず。二には大乘に約す。八相の化身、此に示現して、初めて正覺を成ず。三には報身に約す。十地の行滿じて、無間道の後に、果現に圓明なるを、初成正覺と名く。四には法身に約す。謂はく、創めて了因を得て、最初に圓に現ず、故に初成と曰ふ。此上の大乘は、並に無初の初なり。五には十佛に約す。謂はく、一切の因陀羅網の、無邊の世界に遍じて、念念の中に皆初初に成佛し、主伴を具足し、三世間を盡す。是故に此れ即ち、具に前後無量劫の初を攝す。此中、正くは唯第五、兼ては前の因を攝す、準じて知るべし。此五重相離れざるを以ての故に、方便を攝するが故に。

其地金剛の下は、第二に別して處を料簡す。中に於て亦五門と作す。一には其處を定め、二には融攝を辨じ、三には差別を顯し、四には法を表示し、五には本文を釋す。

初に處を定むとは、問ふ、此經に説く處は、是れ淨土とや爲ん、是れ染界とや爲ん、説し爾らば何の失かある。二俱に過有り。何となれば、若し是れ淨土ならば、何が故に上の文に、摩竭提國と云ひ、下の文に復此の如き四天下閻浮提等と云ふや。此に由りて當に知るべし、是れ淨土に非ず。若し染土ならば何が故に下の文に、此蓮華藏世界海六種十八相震動す等といふ。明かに知んぬ、此經は染土の説に非ざることを。一此の如きの相違云何が指定せん。答ふ、但し此經に依るに、染淨二土鑑離し相攝するに、其四句有り。或は

【十六の大國】印
 度古代の國。毘舍
 離、橋薩羅、室羅
 笈、摩伽陀、波羅
 那斯、迦里羅、拘
 舍羅、波陀羅、木
 遮羅、烏尸、奔吒
 吐羅、提婆跋多、
 跋多、瞻波の諸國
 迦尸、瞻波の諸國

唯婆婆なり、本を以て末に従ふが故に。或は唯華藏なり、末を以て本に従ふが故に。此二
 は上に辨ずるが如し。或は雙じて現す、華藏に依りて娑婆有るを以て、染淨相分る、末は
 本に依るが故に。下の文に、華藏界の中の娑婆世界と云ふが如し、此謂なり。或は染淨雙
 べ絶す、果海の不可説に就くを以ての故に。此上の四門、合して一土と爲すは、鎔融無礙
 にして、説に隨ひて皆得たり。

第二に攝入を辨ずる中、初に、融攝を明すとは、亦三重有り。一には、此覺樹の下に、
 即ち八會の人中天土を攝す、是故に皆、此を離れずと云ふなり。二には、十方を攝す。除
 の刹土無く、皆悉く此樹王の下を離れず。三には、毛端微塵内等の重重の刹を攝すること
 と、猶し帝網の窮盡有ること無きが如し、皆是れ此蓮華藏界の所攝なるを以ての故に。二
 には融入に亦三あり。謂はく、此覺樹を融じて、前の三重所攝の處に入るが故に。

第三に差別を顯すと、然るに佛の説經の處に三種有り。一には唯界内なり。十六の大
 國は化身の説處なり。此は小乘教に通ず。二には唯界外なり。諸の妙淨土は十八圓滿、
 受用上の中の報佛の説處なり。『佛地經』等の如し。此妙淨土は、三界の攝に非ずして、而
 も亦離れず、一切の處に遍するを以ての故に。此は三乘及び一乘の説に通ず。三には、染
 淨圓融、帝網無盡、蓮華藏界の十佛の説處、依正渾融して三世間を具す。此は唯、別教、
 乘の説處なり。今此に辨ずる所は、正しくは唯後の一、兼ては前の二を攝す。彼本木相離
 れざるを以ての故に。

第四に法を表示すとは、此勝處に託して、法の勝ることを表示す。地論に云はく、「此法勝るが故に、勝處に在りて説く」と。然るに三重有り。一には、比樹下にして、菩提を得るが故に、此を起たすして説く。所説は所得の如くなるを、表することを明すが故に。異機を逐ひて、改動有るが故に、鹿園の説等の如くには非ず。二には、同融蓮華藏界に託して、所説の圓滿殊勝性の開蒙を、表示するが故に。三には、此重重帝網の處に託して、所説亦重重無盡なることを表示す、不思議解脱等の如し。餘義は、下の世界の章に説くが如し。

第五に本文を釋せば、文の中に三有り。初には、道場の地を明し、二には、地上に菩提樹有り、三には樹下に師子座有り。此則ち、地を行所依の木と爲し、樹を行徳の建立と爲し、座を行用の攝益と爲す。緣起の性各全く融攝して、法として盡さざること無きが如し。然るに此三位、文の中に各十門を以て分別す。

初に場地を釋する中に、標と釋と結と有り。標の中に其地金剛は其地體を標す。謂はく、體として堅ならざること無し。下の文に、金剛厚地不可破壞と言ふは此謂なり。具足嚴淨は、其地の徳を標す。謂はく、相として嚴らざること無し。即ち下の文の中の、蓮華藏界の地下に、具に風輪、香海、蓮華王等を攝して、以て嚴淨と爲し、地上に具に妙寶、光明、香河、樹網有り。是の如く、上下に淨徳圓滿す、故に具足と云ふ。此れ則ち垢として盡さざること無きを、淨と曰ひ、徳として滿ざること無きを、嚴と曰ふなり。二に別して釋す

【初に場地云云】
初に場地を明す

【二に別して云云】
以下、別して十嚴淨を明す

る中に十句あり、十種の嚴淨を顯す。一には寶華嚴淨、二には寶輪嚴淨、三には妙色嚴淨、四には幢等嚴淨、五には香鬘嚴淨、六には寶網嚴淨、七には兩寶嚴淨、八には華樹嚴淨、九には佛力嚴淨、十には奇特嚴淨なり。此十種を具するが故に、具足嚴淨と云ふ。

初に寶華嚴淨とは、謂はく、衆寶雜華に四義を具するが故に。一には微妙の義、二には開敷の義、三には出葉の義、四には嚴淨の義なり。下の文に言はく、「寶華遍く一切の地を覆ひて、悉く能く佛の功德を長養す」と。二に寶輪嚴淨とは、謂はく、此寶輪に五義を具するが故に。一には圓滿の義、缺減を離るるが故に。二には攝德の義、輻輳等を具するが故に。三には轉動の義、此より彼に向ふが故に。四には攝惑の義、碾碎等ノ如くなるが故に。五には降伏の義、聖王の輪寶の如くなるが故に。又寶は是れ可貴の義なり。下の文に言はく、「寶華、妙色を成じて、光明輪を莊嚴して、諸の法界に充滿して、十方に遍ぜざること靡し」と。三には色相嚴淨、謂はく、此妙色に四義を具するが故に。一には炳著の義、形顯を具するが故に。二には即空の義、虚を含めて立するが故に。三には具德の義、一は一切を攝するが故に。四には有用の義、衆生見聞して、勝益を獲るが故に。此類多端なり、故に種種と云ふ、交飾せざること無し、故に莊嚴と云ふ。謂はく、此器海深くして且廣し、德を藪みて包含して、潤益無邊の故に、如海と云ふ。大海の十相は、此に於て應に辨すべし。下の文の世界の名は、此によりて立す。四に幢等嚴淨、謂はく、幢旛藍光の四義別なるが故に。幢に二義有り、一には高出、二には降伏なり。帝釋の幢の如

【稱讚淨土經】一
卷。唐玄奘譯。阿
彌陀經の新譯。阿
【毘盧遮】(Sphai
二)玻璃の新譯名
【阿濕摩揭拉婆】馬
【牟婁洛揭拉婆】(Mularajiva)車
渠又は馬瑞と譯す

し。旛に二義有り、一には標幟、二には隨緣なり。蓋に亦二義あり、一には顯勝、二には
 蔭覆なり。光に亦二義あり、一には除闇、二には照現なり。下の文に云はく、寶幢の中に
 於て光明有り、寶の旗旛を垂れて莊嚴す」と。五に香鬘嚴淨とは、謂はく、妙香は是れ
 芬馥の義、妙華は是れ開敷の義、妙鬘は是れ貫穿の義なり。此三事を以て遍布周圍して、
 以て供養を成す。又亦妙香の華を以て、穿ちて以て鬘を成す。香幢の四面に以て莊嚴を成
 す。下の文に云はく、「維華鬘を懸けて莊嚴と爲す」と。六に寶網嚴淨。網は是れ隱映して
 莊嚴す。下の文に云はく、寶輪羅網其上に彌覆す」と。稱讚淨土經に依れば、七寶と
 は、一には金、二には銀、三には吠琉璃、四には頗胝迦、五には亦眞珠、六には阿濕摩揭
 拉婆、七には牟婁洛揭拉婆なり。七に兩寶嚴淨とは、謂はく、兩る所廣多にして、皆法
 門の用を成ぜざること無し、故に自在と云ふ。即ち現身說法とは此謂なり。八には、寶樹
 嚴淨、謂はく、衆德建立の義なり。下の文に云はく、「清淨の寶樹雲莊嚴し、普く能く一
 切の身を照明す、故に光茂なり。九に佛力嚴淨。謂はく、佛神力故とは、其所因を擧げ、
 令此等とは其所成を辨す。一には、體をして廣ならしめ、二には相嚴、三には用照なり。
 下の文に云はく、「一切の世界海に、無量の莊嚴の寶輪、無邊の色有り、如來の神力より起
 る」と。十に奇特嚴淨。智論に依れば、寶に三種有り。一には、人寶、輪王の珠寶の如
 し、能く物を雨らすの用あり。二には天寶。謂はく、諸天の所有は、並に使喚するに堪ふ。
 三には菩薩の寶、法を説き人を度せしむるに堪ふ。今此菩薩の寶を、前の人天に望むに、

【第二覺樹云云】

以下菩提樹を釋す。經に「其菩提樹を讚揚す」といふ文を指す。

【六天】一、四王天。二、初利天。三、夜摩天。四、兜率天。五、樂變化天。六、他化自在天。

【下は九句云云】

前五句は樹體を釋す。經に「清淨の瑠璃」等といふ文これなり。

已に奇特の寶と爲す。況んや如來所有の、無盡の善根の所生の寶をや、並に甚だ奇特なり。即ち是法門復是れ事實なるを以ての故なり。下の一句は總結す。善根に限量無きを以ての故に、嚴具を生ずるに、亦限量無し、故に無量善根莊嚴道場と云ふ。又亦此善根を以て、即ち用て莊嚴す。下の文に、百萬億の波羅蜜雲及び善根雲等を以て寶座を嚴ると云ふが如し。今亦、彼に同するが故なり。無量とは、下の文に云はく、「盧遮那佛の過去の行は、佛刹海をして、甚だ清淨にして、無量無數無邊際ならしめ、彼一切處に自在に轉ず」と。餘の義は後の品の中に至りて、廣く明す。此中に亦總と別と、同と異と、成と壞との六相有り、準じて之を通ずべし。場地竟んぬ

第二覺樹の中に、亦十句有り。

初の一は總句なり、菩提樹に三釋有り。謂はく、隣近、依主及び持業なり。圓教の中には、依正無礙にして、人法相是なるを以ての故に、菩提樹なることを得。高く六天を出で、十方に顯耀す、故に殊特と云ふ。此は是れ總句なり。下は九句を以て、別して殊特を顯す。一には幹殊特なり。謂はく、是樹身は明淨堅固の義なるが故に、淨琉璃等と云ふ。二には枝殊特なり。謂はく、樹の枝條は是れ方便にして、機に隨ひて差別の義なるが故に、寶枝等と云ふ。三には葉殊特なり。謂はく、枝條頭葉は、是れ蔭機成益の義なるが故に、寶葉等と云ふ。重雲は是れ斷斷の義なり。又重雲は是れ、靈變の義なり。四には華殊特なり。是れ衆行綺飾の義にして、即ち益所成の行なり、故に雜色等と云ふ。五には菓殊特なり。是れ行成じ、果を感ずる義なり。如意とは、一には

【下に四句六云】
菩提樹の用を釋す
經に一樹光普く一
等といへる文これ
なり。

能化の意の如く、平等に救ふが故に。二には所化意の如く、求むるに皆得るが故に。摩尼は是れ珠寶の通名なり。通を簡びて別を取るが故に、如意摩尼と云ふ。又此上の五句は、一樹の體を成ず。謂はく、淨法界は地の如く、佛身を顯現するは、地の樹を生ずるが如し。機見に隨ひて異なること、樹の葉を生ずるが如し。此は起化攝生して、佛樹を現するに約す。又釋す。木識は地の如く、識の中の菩薩種姓は樹子の如し。菩提心を發すは、樹牙を生ずるが如し。正行を増修するは、樹身を長養するが如し。位に隨ひて造修するは、樹の枝を分つが如し。此は自行に約す。蔭覆して他を利するは、樹葉の蔭の如く、自他の二行交飾せるは、華の如し。因圓果現は、樹の葉を成ずるが如し。此は修行の次第に約して、以て佛樹を成ず。此上の五句は、樹體に衆德を攝することを明すなり。下に四句有り。此覺樹の、妙用自在なることを明す。謂はく、第六の句は、光殊特を顯す。謂はく、光用遍く至る。七には現殊特なり。謂はく、所至の處に隨ひて、佛事を現作す。無際を以ての故に、極むべからず、即ち一切處なり。休むこと無きが故に、盡すべからず、即ち一切時なり。八には法殊特なり。謂はく、諸の處に於て何の佛事をか作す。普く大乘の菩薩道の教を現す。是阿含の光明を以ての故に、能く法を現す。又、此上の三句は、其次第の如く、是れ身意語の三業の所攝なり。九には佛力殊特なり。謂はく、佛力加持して音を出し徳を讚す。若し樹中より自ら音を出して讚ざれば、世人は能く如來の勝功德を知る者有ること無し。此十句の中の六相の總別は、之を準知すべし、覺樹竟ぬ。

【第三に寶座云云】
以下、樹下の師子座を釋す。經に「不可思議なる師子」等といへる文を指す。

【下は九句云六】
九別を釋するに、初に前四を釋す、經文「衆の妙寶華」の下なり。

【五には加持：知るべし】
後の五を釋す。

第三に寶座殊勝は、中に於て亦十句有り。初の一は是れ總なり。智論に依るに、佛は人中の師子爲り、佛の所坐之處、若は林、若は地、皆師子座と名く。王の坐處も亦爾り。又、此座に坐して無畏師子吼の法を説く。是故に亦師子座と名く。下の離世間品に、十種の座を明す。中に師子座あり。甚深の義を分別し演説す。此上は皆依主釋なり。或は亦持業釋の義の故に、依正渾融するを以ての故に。又、此座は法界を包含するを以て、人法教義一切の法、及び彼十方の諸佛世界、深廣の殊特の故に、不可思議猶如大海と云ふなり。

下は九句を以て別して不思議を顯す。一には嚴飾不思議なり。謂はく、體衆德を攝するが故に、衆妙寶華等と云ふ。二には流光不思議なり。謂はく、妙用無方にして雲の如く、普く遍するが故に、流光等と云ふ。三には含攝不思議なり。謂はく、内に無數菩薩の大海を含むが故に藏と云ふなり。四には語業不思議なり。謂はく、大音遠く振ひて、益を成すこと量り難し、故に不思議と云ふ。又此上の三句は、其所應に隨ふ。是れ身言語の三業の用なり。五には加持不思議なり。謂はく、此座に光を流し、普く照すと雖も、然も佛の光明は、重ねて更に彌覆す、殊勝を顯すが故に。摩尼珠光は、照すこと四十由旬に及び、輪王の宮を覆ふこと有るべきも、今佛の光明は、遍く法界を照して、此座を彌覆すること、彼量に超過するを以ての故に、踰摩尼等と云ふ。六には變化不思議なり。謂はく、化用開覺の故に、作佛事と云ふ。七には應機不思議なり。謂はく、十方の根熟して一切悉く觀る。一座普く應じて聖處する所無し。八には迅速不思議なり。謂はく、一念とは時の極促

【問ふ故に】以下、十事五對を以て、不思の義を示す

なり。一切化は所現の多きなり。充法界とは極めて深廣なるなり。此一念に於て、能く一化を現す、已に希有と爲す、況んや一切を現するをや。能く一念に於て、一切を化現すること、已に甚だ希有なり、況んや諸の所現、一一深廣にして法界に充滿し、一念の頭に於て、迅速に此無邊の大用を起すをや。餘の念念の中、皆亦此に準せよ。九には眞性不思議なり。謂はく、如來藏の體普遍なるが故に、前の妙用をして、速に無礙を成ぜしむ。又、此上の四句は、此座の用を明す。次第相由る。初には何の相か有る。二には云何が應ずる。三には如何が速かなる。四には何に由りてか成ずる。次の如く四句、此四問を答ふること應に知るべし。下の一句は總結す。別說周り難きを以ての故に、結して無量衆寶等と云ふ。座高顯なるを以ての故に、亦臺と稱す。問ふ、「此師子座は何の義理有りてか、不思議と名くるや。」答ふ、「既に不思議と名く、義實に無盡なり。略して十種を論ず。謂はく、有分をもつて思ふべからず、法界に同するを以ての故に。無分をもつて思ふべからず、機爲に現するが故に。理を以て思ふべからず、寶華の事嚴なるが故に。即ち事をもつて思ふべからず、如來藏性の故に。依報をもつて思ふべからず、菩薩等の所成なるを以ての故に。正報をもつて思ふべからず、是れ佛の依果なるが故に。人を以て思ふべからず、所依の法の攝なるが故に。法を以て思ふべからず、具に三業有りて、人用を爲すが故に。果を以て思ふべからず、具するに因位の諸の菩薩有るが故に。因を以て思ふべからず、佛果の所有の故に。

【此上の…難し】
總じて結す。初に
六相を述し、後に
座量を問答す。

【二一】三に經說
の主を料簡す。經
の「如來は此寶師
子」等とある文を
いふ。

此上の十義は無礙相即す。謂はく、一の座は是れ總相、十義は是れ別相、齊しく是れ座の義なるは、是れ同相なり。十義雜せざるは、是れ異相なり。此十義に由りて、座法をして起らしむるは、是れ成相なり。各自法に住するは、是れ壞相なり。問ふ、「既に機の爲に現するが故にと云ふ、分量無きに非ず。未だ知らず、其量の分齊若爲。」答ふ、「然も亦知り難し。但比況して之を辨すべし。地品の説の如き、「十地の菩薩の座量周圍は、十阿僧祇百千の三千大千世界の量の如し」と。此座量を以て如來の座に比するに、其れ猶し豆許の土を以て、大千世界に比するがごとし。是れ如來の座の量、極めて量り難し。上來三段總じて器世間圓滿を明し竟んぬ。

自下は第三に智正覺世間圓滿を明す。中に於て、略して五門を作りて料簡す。一には佛身を定め、二には融攝を明し、三には差別を顯し、四には法を表示し、五には本文を釋す。初に佛身を定むとは、問ふ、「此八會の佛は、是れ何等の身そや。」答ふ、「有人釋して云はく、是れ化身の佛なり。菩提樹下に八相成道せるは、是れ化身なるを以ての故に。離れずして天に昇るは、是れ重化なるが故に。釋迦の異名を盧遮那と名く、別の報身に非ざるを以ての故に。又有るが釋して云はく、此經を説く佛は、是れ實の報身なり。是れ盧遮那法界身なるを以ての故に。蓮華藏淨土の中に居するが故に。下の第七會の初に、佛を數するに、彼二十一種の殊勝の功德を具す、是れ實報なり。但し化を離れざるを以ての故に、此樹下を該ぬ。是れ化身に非ずと。今釋す。此佛は、下の文の中に準するに、是れ十佛の身

【三尺黑象脚の身】
涅槃經二十二に、
覆師羅長者の爲に
三尺の身を示すと
又觀佛三昧經第三
に、優婆塞の中、
佛の色身、黑象の
脚の如きを見ると
いふ是なり。

にして、三世間に通ず。十信及び三賢等を説くは、地前の所見にして、實報に非ざるを以ての故に。然るに、華藏に居するは、化に局るに非ざるが故に。國土身等は、前の二に非ざるが故に、具に前の二を攝す。性融通の故に主伴を具足す。帝網の如くなるが故に。是故に唯是れ、周遍法界十佛の身なり。第二に融攝とは、二有り。一には、直に一切の三世間を攝し盡す、此三事を具するを、方に佛と爲すを以ての故に。三身二身は但是れ、三の中の智正覺の攝、妙淨土及び同生の身は、皆是れ此中の所攝ならざること無し。二には、亦正報は毛孔、依報は塵中に、各重重に、具に三世間等の、一切の諸法を攝して、帝網の如く現す、準思して見つべし。第三に差別を顯すと、此一の釋迦の身、隨ひて群機に應ずる差別多砂なり。或は凡に同じて聖に非ず。三尺の黑象脚の身、及び樹神の身等と見るが如し。此れ人天の位に在り。或は是れ聖にして凡に非ず、羅漢に同ずるを以て、聖人の身の故に。或は亦是れ凡、亦是れ聖なり、是れ父母所生の實の散身なるを以ての故に、四大成の故に、凡身に同じ。五分法身を具して、諸流盡くるが故に、是れ聖なり。或は凡に非ず聖に非ず。是れ大乘の三身の、攝なるを以ての故に、小乘の羅漢の聖に同じきに非ざるが故に。或は是れ化にして法報に非ず、八相を具して、閻浮に在るを以ての故に、色頂に別して彼實報を立つるが故に、梵網經等の説の如し。此は初教に約す。或は是れ報にし。法化に非ず、即ち身に、二十一種の殊勝の功德を具す、受用身なるが故に。佛地經の初に説くが如し。此は終教に約す。或は是れ法にして、報化に非ず。色即如なるを以て

【第五に云々】以下、本文を釋す。

【又如來：曰ふと】廣く釋する中、初に如來を釋す。

【經】論の字の寫
【論】成實論一。

の故に。經に云はく、「吾今此身即ち是れ法身なり」と。此は頓教に約す。或は亦是法、亦是報化なり、前の三説の如くなるが故に。或は法に非ず、報化に非ず、是れ十佛なるを以ての故に、三世間に通ずるが故に、主伴を具足するが故に。此經の下の方に説くが如し。此は圓教に約す。是故に、此釋迦の身は圓融無礙にして、極めて難思なり。第四に法を表すとは、然るに説法の佛に、總じて四位有り。一は羅漢の身に同じ、小乘の法を説くことを表すを以ての故に。二には、化身の佛は、三乘を説くことを表す。廣く地前を説き、略して地上を説く。三には、報身の佛は、三乘を説くことを表す。廣く地上を説き、略して地前を説くなり。四には十身の佛は、一乘の法を表す。六位齊しく説く。此所説、主伴を具足して、無盡の法なるを以ての故に、佛、亦此に同じて、十身無盡なり。

第五に文を釋せば、文の中に、此智正覺の義を釋するに、還りて十門を以てす。初の一は總にして、餘の九は別なり。總の中に、先に身寶座に安ず、故に如來處此等と云ふ。後は智眞源に契ふ故に、於一切法成最正覺と云ふ。又、如來とは「地持論」に云はく、「言語の所説、如に乖かず、故に如來と名く」と。又「轉法輪論」に云はく、「第一義諦を如と名け、正覺を來と名く。正しく第一義諦を覺る故に、如來と名く」と。又、經に云はく、「六波羅蜜に乗じて、來りて正覺を成するが故に、如來と名く」と。又、論に云はく、「如實の道に乗じて、正覺を成す」と。問ふ、「此れ既に、出障を如來と名くることを得、何ぞ在纏を名けて、如來と爲ざるや。」答ふ、「亦是義有るが故に、經に云はく、「法身、五道に流轉

【又一切法：名く】
以下、能所覺を釋す。

【下は九門云云】
以下別釋するに、
初に三重の三業を標す。

【初の中…竟んぬ】
初に平等の三業を明す。經に「三世の法平等」等といふ下なり。

するを、名けて業生と曰ふ」と。既に流轉と云ふ、當に知るべし去有ることを。或は亦去無し、在纏すと雖も、動ぜざるを以ての故に「爾ふ」若し爾らば、出障も動ぜじ、來有ること無かるべしや。答ふ、「淨法は眞に順じて、眞より所起する故に、來有ることを得。業法は理に違して、是れ妄法なるが故に、去有ることを得ず。或は亦來無し。始覺本覺に同じきを以ての故に。既に始覺の異無し、是故に來無し。故に經に云はく、「如來とは從來する所無く、亦所去無し、故に如來と曰ふ」と。又一切法とは、所覺の二諦の法なり。最正覺とは、能覺の妙智なり、菩薩亦隨分の正覺有るを以てなり。然るに位未だ極まらず、最と稱することを得ず。今至極に就きて最正覺と名く。

下は九門を以て、別して、是の如きの成、正覺の義を顯す。謂はく、如來一法界身、緣に隨ひて顯現するに、三重の三業有り。初に三門有り。平等の三業自在に攝生することを明す。二に其身遍生の下は、攝生の三業成益、非虚なるを明す。三に悉能普現の下は、成益の三業、用に即して如に歸することを明す。

初の中に就きて、先に身業を明す。中に於て二有り。初の句は、平等の身業を明し、次に普入の下は、攝生の身業を攝す。又、上の句は深を顯し、下の句は廣を明す。又上は不即の三世を明す、故に平等と云ふ。下は不離の三世を攝す、故に普入と云ふ。又、初は不變の義、後は隨緣の義なり。又初は體、後は用なり。又、了は謂はく、照了なり。三世の法とは、前の一切の法を顯すなり。平等とは、一には過未現在に等しと了知す、故に平等

【次に平等の語業】
次に語業。經に「妙音：虚空の如し」といふ下なり。

【虚空に五種】
虚空を圓音に喩ふ。

と云ふ。此は俗境に約す。二には三世遷流の法、泯じて一實に歸して、三の異無しと了知す、故に平等と云ふ。此は眞境に約す。文の意此に在り。斯れ則ち事に住せずして、理に入るなり。普入等とは、是れ理に住せずして、事に隨ふなり。又、前は則ち事を壊せずして理を顯せば、理にして事に非ず。後は則ち、理に乖かすして事に隨へば、事にして理に非ず。理事銖融して、二にして不二、無障無礙なり。二句は餘の功德の與に、依止と作る。義は是れ身の義なることを顯示す。

次に平等の語業を明す。妙音遍至とは、如來の圓音は、緣起性の如く、一切處に遍して、而も亦、別別に詮表することを壊せざるを明す。若し等遍に由りて、其音曲を失せば、則ち圓にして音に非ず。若し音曲に由りて、其音遍に乖かば、則ち音にして圓に非ず。今は則ち曲を壊せずして等しく遍す。遍を動ぜずして差韻す、是を如來の圓音と謂ふ。是れ心識思量の境界に非ず。虚空に五種の義有るが如し、佛の圓音に似るが故に、以て喩と爲す。一には周遍の義なり。佛の圓音は、法界に周遍して、處として至らざること無きに譬ふ。猶し目連の、遠く佛聲を尋ねて、崖畔を得ざるが如し。二には平等の義なり。謂はく、空普く遍すと雖も、體恆に無二なり。佛の圓音の平等一味なるに況ふ。三には無礙の義なり。謂はく、此虚空は障礙する所無し。佛の圓音は、根の生熟に隨ひて、聞と不聞と、俱に障礙無きに譬ふ。四には對現の義なり。謂はく、一切衆生皆、虚空は其前に對するも、而も空現前すること無しと謂ふ。圓音も亦爾なり。種種の機に隨ひて、別別に獨り聞けど

も、而も首に彼此無し。五には含受の義なり。謂はく、此虚空は諸の色法を包含し、容受するが故に。圓音も亦爾り、所詮の諸法の義を含攝するが故に。餘義は下の性起品に説くが如し。

【下の意業云云】
後に意業、經の「平等の法相」の下なり。

下の意業の中に二あり。先づ平等の意業を明し、等心の下は攝生の意業を明す。又初は理にして後は量なり。又光は智にして後は悲なり。又、二利に住縁無し、相融じて二相無

きが故に。又、平等の法相は、猶是れ佛智遊履の所なるが故に、行處と云ふ。如空とは、此行平等の法に喩ふ。又、境智、相如、能所、俱に混ずるを以て、空の如く無礙なるが故に、一味の故に、普遍の故に、含攝の故に、有用の故に。又或は唯境にして空の如し。

或は唯智なり、或は俱なり、或は不俱なり。思ひて以て之に準ぜよ。又釋す。佛果の戒等の功德は、眞性に稱同す、故に平等と云ふ。唯佛智の所知なるが故に、智行處と云ふ。然るに、分限無きが故に、虚空の如し。『佛地論』の第四に云はく、「契經」に言ふが如し。乃至有ゆる譬喩を施設して、諸の如來の所有の功德に喩ふるは、一切皆是れ、諸の如來

を誘す。唯一喩を除く、謂はく、虚空の喩なり。如來の戒等の無量の功德、虚空に同じきが故に。乃至廣説す。下の句、等心隨順衆生とは、四義有り。一には、無思にして、物を益するが故に等心と云ふ。二には、等しく圓教に被る。三には、等しく極果を授く。四

には、等しく其性に達して、攝化を礙へず。此れ則ち是れ、前の如空の徳、以て生を攝するに堪へたり、故に隨順と云ふ。上來は平等の二業竟んぬ。

るに堪へたり、故に隨順と云ふ。上來は平等の二業竟んぬ。

【第二に：：竟んぬ】攝生の三業を明す經に「其身遍く」といへる文の下なり。

【別の中に云云】別して三業を釋す。

【次の二句】「不壞の法雲」教化したまふ」の句。

【第三に：：不思といふ】佛の力用を

第二に攝生の三業の成益虚からず。中に於て初の一句は、總じて標して機に就く。謂はく、其身遍坐は三業を具するが故に。一切道場とは、三類有り。一には、一切の須彌山界に遍じ、二には、一切の樹形等の界に遍じ、三には、一切の摩道に遍す。重重なること帝網界の如し。故に下の文に云はく、「是れ盧遮那佛、常に法輪を轉する處」と。又、下の結通は皆此文に依る。別の中に、初の二句は先づ意業を明す。一には、攝生の意業なり。謂はく、根器を了知するが故に、悉知一切等と云ふなり。二には、成益不虛を明す。謂はく、慧目を以て衆生の癡闇を破す、故に智慧日等と云ふ。次に三句有り、身業を明す。一には、土に依りて身を現するが故に、悉能等と云ふ。二には、身に依りて光を放つ。一には光體、三際に通ずるが故に、三世光と云ふ。二には、光三世の境を照す、亦三世光と云ふ。皆智慧の大海の中より出づるが故に、智海光明と云ふ。所照の機境熟するが故に、淨と名く。三には無量光明とは、光眷屬を攝す。又亦多きが故に無量なり。又、照淨は深を顯し、無量は廣を明す。次の二句は、語業を明す。初には實教は改動無きを明すが故に、不壞と云ふ。二には、教の所依の因を明す故に、以力無畏等と云ふ。以とは由なり。此れ即ち前に望めて因の義と爲す。又、以は猶し用のごとし。此力等を用ひて方便の門を開きて、衆生を教化し、此權教を成す。是故に後の權教に望むるに、亦是れ所依なり、又、自在力光とは、通用無礙にして、權實を該ぬ、成益の三業竟んぬ。

第三に用、如に歸する中に、先づ身業を明す。謂はく、普く多處に現すと雖も、用に即

體に歸していふ一段なり。前に「悉く能く…隨順せり」等といへる文。

【次の二句】經に「一切のもの…理じ」の句。

【二無きと…名く】これ取意の文。能所取の是二不二を空相とすといふ。

【下の二句】經に「一諸佛の世界…隨順せり」といへる文。

【二】本經説法の會座に集る大衆を擧げて釋する一段なり。經の十下方世界の一等以下の文を指す。

して體に同ず、故に如空と云ふ。而して來去無きは普遍なるを以ての故に、不動の故に。『起信論』に云はく、「大用を起すと雖も、亦用相の得べきこと有ること無し」と。此れ則ち用にして常に寂なり。次の二句は意業を明す。一には妄を遣る。二には眞に順ず。又、初は性に會して永無なり。二には實相は滅せず。又、前は其不有を了し、後は其不無を證す。中邊論に云はく、「二無きと、此無有ると、是二を空相と名く」とは、此謂なり。又、此は亦是れ、前の義を釋成す。謂はく、何に由りてか、普く現じて來去無き。釋して云はく、無性を了達するを以て、何を以て去來にして是れ無性なる。彼去來は平等に順ずるを以ての故に。平等に順ずるの大用は、無明の闇盡くるを一切光明と名く、大用を失せざるが故に、普現諸佛所行と云ふ。下の一句は語業を明す。諸佛世界とは、諸の所遍の處なり。不思議音とは、所順多繁なるが故に、不思議と云ふ。此上の三の三業は、各一は總にして、二は別なり。又、初の一は總にして、餘の二は別なり。又三三九を別と爲し、最正覺を總と爲す。同異成壞は、準思して見つべし。智正覺竟んぬ。

大段第二に衆生世間圓滿を明す。中に於て、先づ總じて料簡し、後に本文を釋す。初の中に、略して十門を作りて分別す。一には衆數を明し、二には新舊、三には器を定め、四には世出世、五には界趣、六には諸乘、七には權實、八には位地、九には表法、十には因果なり。

初に衆數とは、謂はく、此初會に五十五衆有り、始普賢より摩訶薩に至るまで、三十四

類と爲す。後に普海より還りて普賢に至るまでを、十八衆と爲す。前を帖んで、總じて五十二衆と爲す。海慧の内衆、并に類集の十方、及び勝音衆、前を帖んで、總じて五十五衆と爲す。第二會の中に、新舊の二衆有り。前を帖んで、總じて五十七衆と爲す。三と四との二會に、各天王菩薩の二衆有り。前を帖んで、總じて六十一衆と爲す。第五會の中に、昇天品の内に、五十二衆、及び雲集の一衆有り。第六會に同生異生の二衆、及び第七會の一衆有り。前を帖んで、總じて一百一十七衆と爲す。第八會の中に、菩薩聲聞、及び天王の三衆あり。前を帖んで、則ち一百二十衆と爲す。中に於て一一に、或は十方世界の、塵數を以て量と爲す。是の如き等、皆分齊無し。然るに、此等の八會は、既に並に同時に、互に相融して、一法界の大會を成す。即ち知んぬ、一一の會の中に、各一百二十衆有りて、分齊の相無し。此は且く、此一世界の、八會の中に約して説く。若し十方虚空法界の、一切の世界に通じて、皆各此無邊の衆會有り。相入重重にして、帝網の無盡なるが如し。即ち不可説不可説なり。是を華嚴海會の衆數と謂ふ。二に諸會の新舊とは、或は唯舊にして新無きは、六七の二會の如し。或は唯新にして舊無きは、三四五の三會の如し。或は亦是新、亦是舊なるは、初二八の三會の如し。餘の意は各下の文の、集衆の中に誇ぐが如し。三に器を定むとは、泛く列衆を論ずるに、三義有り。一には是れ當機、二には是れ影響、三には是れ寄法なり、今此は三に通ず。四に世出世とは、四義有り。或は俱に是れ世間なり。時の中に顯現するを以ての故に。又、三世間の中に、是れ一なるが故に。或は俱

に出世なり。其行徳の如き、世の攝に非ざるが故に。或は亦是世、亦是出世なり。前の二義を具するに由るが故に。又相に隨ひて論ぜば、初の普賢等は是れ出世なり。餘は是れ世なるが故に。或は非世非出世なり。是れ出出世の攝なるを以ての故に、是故に此衆は其三位に通じ、斯四句を具するなり。

五に界趣とは、三界の中に於て、無色天を除く。相に隨ひて法を寄するに、殊勝に非ざるを以ての故に。若は『仁王經』に、並無色の天等有り。五趣の中に、地獄衆を除く。彼極苦よ、相に寄せて法を顯すに、亦勝に非ざるを以ての故に。若は『一方等陀羅尼經』に、亦此衆有り。又人王衆無し、相顯にして寄に非ざるを以ての故に。或は菩薩即ち人衆なり。或は唯、王衆を列す。後の十八衆の説の如し。法の自在を表するを以ての故に。或は王臣に通ず。此三十四衆の中に説くが如し、主伴を具するを以ての故に。六に諸衆とは、『大智論』に云はく、若し小乘經の初に、唯聲聞衆を列ぬ。若し大乘經の初に唯菩薩を列ぬ。知る所以は、

【仁王經】 舊本二卷、羅什譯。新本二卷不空譯。十六大阿の王に對し、鎮護國家の爲に、般若の法を説けるもの。
【一方等陀羅尼經】 四卷。北涼法業譯。方等三昧の法規を説く。

【共教】 一に通せず共通して説けるもの、不共教は之に反す。

【愚法小乘】 小乗教徒にして、理に大乘の法空の未だ愚かなるをいふ。

聞の二衆を列ぬ。義をもつて準するに、若し一乘經の初に唯菩薩を列ぬ。知る所以は、彼論に『大品』等を以て共教と爲し、別して『華嚴』を指して不共教と爲す。聲聞と共説とざるを以ての故に。又此上の三門に各二説有り。初の中の二とは、一には、若し小教には、小果を得る等を成せんが爲に、唯聲聞を列ぬ。此は是れ、愚法小乘なり。『阿含』等の經に説くが如し。二には、小乗を成せんが爲に、所被の機を顯し、唯聲聞を列ぬ。是れ大乘廻心教にして、『金剛般若經』の初に辨するが如し。二に二衆を具する中に、亦二あり。一に

【始終頓の三教】始教は大乗の初門未だ一切衆生悉有佛性を説かざるは、一に一切皆成佛を稱ふもの、頓教は頓に理性を徹見するを教ふるもの、稱【同教一乘】法華經の如く、三乘に共に説けるものをいふ。

【別教一乘】三乘に共に説かずける教説、本經の如きをいふ。

【華藏界】蓮華藏世界を略す。寶蓮華を以て成ずる極上なればかくいふ。今は釋迦の華藏界即ち本經の淨土なり。

は、或は先づ聲聞を列ね、後に菩薩を列ぬ。此は始終頓の三教に通ず。「淨名」等の經に辨ずるが如し。二には、或は先づ菩薩を列ね、後に聲聞を列ぬ。此は頓教及び同教に通ず。「羅摩伽經」「炬樓王經」「和休經」等に辨ずるが如し。三には、唯菩薩を列ぬる中に、亦二あり。一には、唯菩薩を列ぬと雖も、主伴具せざれば、是れ同教一乘なり。「十一面經」等に辨ずるが如し。二には、若し主伴具足するは、即ち別教一乘なり。此經に説くが如し。七に權實とは、若し三乘に約せば、佛此娑婆界に居す。雜衆は是れ實なり。實の報の生なるを以ての故に。菩薩は是れ權方便現の故に。經に云ふが如し。「彼諸の菩薩は、其無量の自在力を隱す」等と。或は菩薩は是れ、實に地前の菩薩、猶此土に生ずるを以ての故に。雜衆は是れ權なり。「大集經」に依るに、並に是れ他方の大菩薩等、權形の所作の故に。若し佛、淨土に居すれば、菩薩は唯實なり。實の報の生なるが故に。雜衆は是れ化なり、實有に非ざるが故に。「攝論」に云はく、「受用土の中には、實に此等の衆生無し、淨土をして空ならざらしめんと欲するが故に、是の如きの雜類の衆生を化作す」と。若し一乘の中には、佛此華藏界に在れば、菩薩雜衆、或は並に是れ實なり。是れ海印定の現する、實徳の攝なるを以ての故に、或は俱に是れ權なり、緣に隨ひて現するを以ての故に。餘義は思惟せよ。八に其位を明すと、若し三乘に約せば、此普賢等は、是れ十地已上の菩薩なり。彼神王等は、多分並に是れ隨類生の攝なり。即ち是れ八地已上となり。若し一乘の中には、緣起際の如く、諸位皆齊し。是故に、一人は五位を具し、五位は皆遍く收む。之に準ぜよし。

【國土身】華嚴所說の十身の一。盧舍那佛、機に應じて草木國土を現ず然れば其は舍那の身なるべきより名

【海印】海印定のこと、本經所依の定にして、佛智海に一切の法印現ずるをいふ。釋す。本經の文を釋す。初に總じて四種圓滿を判釋す

【四種圓滿】別して四種圓滿を釋す。初に外衆

九に表法とは、若し三乘の中には、但人に寄せて法を顯す。仍ほ人にして是れ法に非ず。若し一乘の中には、此等の諸人、並に是れ法界緣起の法門なり。又此一衆は、即ち三世間に通ず。或は河池井泉水等と作るは、國土身なるを以ての故に。餘は知るべし。十に因果とは、若し三乘には、但是れ因位なり。若し一乘の中には、或は皆是れ因なり。未だ是れ佛ならざるを以ての故に、或は俱に是れ果なり、並に是れ佛の海印の中に、現ずるを以ての故に。又、解脫力に乗じて、佛海に入るが故に、或は因果に通ず。前の二義に由るが故に。或は俱非なり。離性平等なるを以ての故に。並に下の歎德の中に、説くが如し。
次に文を釋せば、一一の衆の中に、皆四種の圓滿有り。一には數圓滿なり。謂はく、先づ數を擧ぐる等なり。二には行圓滿なり。謂はく、列名等なり、名は行に依りて、立するを以ての故に。三には德圓滿なり。謂はく、歎德等なり。四には供養圓滿なり。下の三業供養等の如し。此衆圓滿の中に於て二有り。先は外衆を明し、後の海慧の下は、其内衆を明す。
外衆の中に就きて、亦二あり。先は三十四衆を列ねて、前の三種の圓滿を具し、後には擲して十八衆と爲して、第四供養圓滿を顯す。問ふ、「前の列の中には、普賢を以て首と爲し、摩訶訶終と爲す、後の供を興す中には、何が故に此に反するや。」答ふ、「古德釋して云はく、初は下より上に向ひて、進行の増徴を表し、後は上より下に向ひて、尊位の次第を表すし。此釋は用ひ難し。豈普賢をして最も卑劣と爲さしめんや。今の釋は、前は則ち近よ

【前の中云六】以下、三十四衆を列することを釋す。

【二五】以下、別釋する中、初に同生を辨するに三圖滿を釋す。

り遠に向ひ、本に依りて末を起すことを表し、後は遠より近に向ひ、末を尋ねて本に歸するを明す。良に以れば、本末無二にして遠近殊らず。二文互に擧ぐるも、障礙無し。前の中に就きて二あり。先は同生を辨じ、後には異生を明す。或は聲聞を以て、同性と爲し、菩薩神等を、並に異性と爲す。此は小乘に約す。相に約して同を明すを以ての故に。同生等の如し。或は出家の菩薩、及び聲聞等を以て同と爲し、餘は並に異と爲す。此は始教に約す。或は菩薩を以て同と爲し、聲聞等を異と爲す。是は終教に約す、或は唯地上の菩薩を同と爲す。同じく法性を證するを以ての故に。餘は悉く異と爲す。或は八地以上を同と爲す、俱に純熟して、純無漏なるを以ての故に。此二は、始終の二教に通ず。或は唯菩薩を同と爲す。諸位に通ずるを以ての故に。神天等を異と爲す。是れ法界の別徳なるが故に。或は菩薩神等は、俱に是れ同じ、法界無二なるを以ての故に。或は俱に異なる、法界の差別なるを以ての故に。此は一乘に約して辨す。

【二五】同生の内に就きて、初に數圓滿の中に、大とは八義有り。一には數大。謂はく、十刹塵等なり。二には徳大。謂はく、俱に一乘法界の徳を具するが故に。三には作業大。謂はく、衆生極重の苦を救ふが故に。四には敬大。謂はく、天王等の大人に敬せらるるが故に。五には勝大。謂はく、一切衆生の中に、最も殊勝なるが故に。六には行大。謂はく、二利六位の行を修するが故に。七には願大。謂はく、十種の大願十盡句の故に。八には時大。謂はく、三無數劫、或は無量億劫に修行するが故に。菩薩とは『佛地論』及び無性の『攝論』

等に依るに、總じて三種有り。一には云はく、菩提此には覺と云ふ、是れ所求なり。薩埵此には有情と云ふ。是れ所度なり。境に従ひて名と爲す。義をもつて言はば、若し心に從ひて稱せば、應に悲智と言ふべし。二には菩提は前の如し、薩埵は是れ能求なり。謂はく、菩提を求むるの有情なり。此は人法に約して名と爲す、亦是れ心境を目と爲す。三には、菩提は前の如し、薩埵此には勇猛と云ふ。謂はく、志能有りて、大菩提に於て勇猛に求むるが故に。又一智論に云はく、「薩埵或は衆生と云ふ、或は大心と云ふ」と。即ち是れ上の二義なり。俱とは謂はく、傳法の菩薩、之と俱に聞くが故に。如來之と俱に説くが故に。又一智論に云はく、「一處一時一心一戒一見一道一解脫、是を名けて共と爲す。共は猶し俱のごとし」と。

【第二に：知るべし】二に行圓滿。細に、其名を俱なりき。の文の下【德法界云云】以下、別して德名を釋す。

【第二に、行圓滿の中に、菩薩の名、雜ることは、二意有り。一には、下の靈細等の雜世界を、顯さんが爲の故に。二には、此衆は八會に通ずる序なるを以ての故に。德法界に周きことを普と曰ひ、至順にして善を調ふるを賢と曰ふ。『智論』には遍吉と名く。此中に、同じく普と名くることは、回過を以ての故に。次に月と名くることは、德清涼の故に。次に王と名くることは、德自在の故に。次に光と名くることは、闇を了する用の故に。次は堅固の德の故に。次は德獨出の故に。次は清涼の教を演ぶるが故に。次は德明尊の故に。『智論』に云はく、問ふ、「菩薩甚だ多し、何を以てか列すること少きや。」答ふ、「菩薩は無量にして、説くとも盡すべからず、若し都て列せば、文字に載せ難し。『復次に菩薩は二種に過

【第三に：華ぜよ】
三に歎徳圓滿。經
に「皆是れ成就
せり」といふ下。

【下は別して云云】
以下、別徳を釋す
る一段なり。

ぎず。謂ゆる在家出家此方他方なり。在家は謂はく、跋陀羅等なり。出家は謂はく、妙徳等なり。此方は謂はく、慈氏等なり。他方は謂はく、觀音等なり。若し此二を説かば、當に知るべし、一切都て以て攝し盡す」と。解して云はく、此は娑婆世界に約して説く。華藏の衆に就きては、文の如く知るべし。

第三に歎徳圓滿の中に二あり。先は人に約し、後は法に約す。初の中に、友とは徳、齊きなり。即ち因果無二を顯すなり。此文に二の意有り。一には、佛を擧げて徳を顯す。其人を觀んと欲せば、先づ其友を觀んと等と云ふが如し。二には何が故に此に集まる。是れ友なるを以ての故に。相成するが故に。俗書に云はく、「志を同じくするを友と曰ふ」と。此中の善友に三義有り。一には、已に過ぐる義、善財道友の如し。二には徳齊き義、是れ朋友なるを以ての故に。三には、少しく劣れる義、普賢等を以て、第一の尊導と名くる故に。二に法に約す中、初の一句は總なり。此れ一切菩薩、皆悉く無邊の功徳を成就し、深廣なること海の如し。十相之に準ぜよ。

下は別して辨ずる中に二あり。先に自分の功徳を成就し、後に無上智願の下は、勝進の功徳を成就す。然るに此二分、通じて説くに七重有り。一には一行の生熟に約して分つ。二には、二行に約す、修行已に成じて後に、戒を修する等の如し。三には、二利に約して以て分つ。四には、行位に就く。位を得るを以て勝進と爲す。五には、比證に約して以て分つ。六には、二位に約す。謂はく、前位已に成ずるを自分と爲し、後位に趣向するを、

【自分の中云云】以下、自分の功德を釋す。經に「諸の波羅蜜…攝す」といへる文の下。

【定に於て…淨といふ】愛味有漏禪を簡ぶ。

勝進と爲す。七には、因果に就く。因成ずるは自分なり、果に入るは勝進なり。今此文の中は、正く末後に就き、棄て通ずることを知るべし。

自分の中に就きて、九種の功德を成就す。一には行滿の功德、處として至らざること無く、時として見ざること無し。施等の十度を行ずるが故に、諸度普照と云ふ。二には、慧眼の功德を成ず。何の義を以て、此度行をして遍通することを得しむる、淨慧眼を以て彼三際の如き而も等く觀するが故に、慧眼等と云ふなり。三には深定の功德を成ず。謂はく、何に依りて此慧眼を得る、深定に依りて發するを以ての故に。此中に三義有り。一には、定に於て味せざるが故に淨と云ふ。定は勝慧を發すが故に明と云ふ。二には、定に於て純熟し、入出無礙なるが故に、明淨と云ふ。下の文の、東方に正受に入り、西方に三昧より起つ等の如し。三には頓に多定に入り、一をして一切を攝せしむ、故に具足明淨と云ふ。下の文に云はく、微塵數の諸の三昧に入るが如し。一の三昧に、塵等の定を生ずるなり。上來の三句は、自利の行を明す。四には妙辯の功德を成ず。謂はく、巧に能く、彼岸説の法を説くが故に、辯と稱す。即ち下の四十無礙等なり。一言を以て一切を説くを、廣と名け、所説皆玄なるを深と曰ふ。此深及び廣は、悉く無崖無底の故に、無盡と云ふ。五には普曜の功德を成ず。佛の功德身光普現し、群機を照曜するを以ての故に。六には調化の功德を成ず。謂はく、善巧に衆生の心器を了知す。即ち心行は欄林なり。根に稱ひて法を授け、調して障を離れ、使を伏して、法に入らしむるが故に、如應調伏と云ふ。上の三

【使】煩惱の異名。煩惱は人を驅使するが故に名く。

【七には眞智：塵不通達といふ】眞智眞諦を證し、量智俗を照すに約して釋す。

【第二に勝進入果】以下、勝進入果の一段を釋す。經に「無上の智願は：智身満足せり」といへる文の下、【二に遍遊の下】經の「遍く一切の佛一等の文を指す

句は即ち三業化他の行なり。七には、眞智の功德を成就す。金剛智を以て、普く一切の差別の境界を照すに、悉く同一味平等法性なり。八には、量智の功德を成す。廣大の慧を以て、深智所知の境を明達するに、周く盡さざること無きが故に、靡不明達と云ふなり。上の二句は、智二諦を照す徳を明す。此上の八句は、行に約して徳を顯す。九には、攝位の功德を成す。此に二義有り。一には、前の諸行を攝して、信等の五位の中に入る。二には、一位に在るに隨ひて、即ち前後一切の諸位を攝す。此二に亦二有り。一には、相入に約して攝を明す。二には、相即に約して攝を明す。前の十門の處の如し、之に準ぜよ。此れ十信の満心より已去、諸位に此相攝有り。是故に下の賢首品の中の、信滿の處に、即ち一切の位乃至佛果を具す等とは、是れ此義なり。上來は自分竟んぬ。

【第二勝進入果の中に、二あり。初の十句は、體德圓滿を明し、二に遍遊の下六句は、妙用自在を顯す。前の中には、佛果の十種の功德を成す。一には、佛の智願の徳を得ず。無上とは、佛果は加ふること無きが故に。智は謂はく、大智、即ち四智十智等なり。願は謂はく、大願にして、即ち自體無障礙の願なり。大智已に成ずれば、大願已に滿す。並に皆現に今成滿し已訖る。是れ當成に非ず、故に皆已成滿と云ふ。二には、佛、密教の徳を具す、此に二義有り。一には言に理を盡さざるを、祕密教と名く、非了義を以ての故に。二には、微妙難解にして、下位の能く測るに非ざるが故に密教と名く、是れ深廣なるを以ての故に。此中は後に據りて説く。何者か深なる。謂はく、言即不言の故に、何者か廣な

る。謂はく、不言の言、法界に周きが故に。下の文の、鷲子聾の如き等、是れなり。此深
 廣の教は、唯佛の所有なり。今此菩薩具足して、佛に同ずるが故に名くるなり。三には、
 佛果の法の徳を得ず、謂はく、十八不共等は、果位の功徳にして、下に望めて皆不共と名
 く。佛佛相望すれば、名けて共法と爲す。是れ菩薩と共するに非ざるが故に佛共の法と云
 ふなり。四には、果位に同ずるの徳。此に四義有り。一には、佛行に同ずることは、謂は
 く、大悲の行なるが故に。二には、佛地に同ずることは、佛の十地を得ず。謂はく、毘盧
 遮那の智藏大海の地等なり。三には、佛徳に同ずることは、佛の無邊の福智の徳を得るが
 故に。四には、佛力に同ずることは、十力を得るが故に。又十種の大力を得る等、不思議
 に説くが如し。五には三昧自在の徳。此に二義有り。一には、出入自在の故に。二には、
 相攝自在の故に。上の五句は、佛の自利の徳を得。六には、機感現形の徳なり。謂はく、
 機感繁多の故に、生海と云ふ、圓身普く應ずるが故に、應現と云ふ。經に「佛身を以て得
 度すべき者には、即ち佛身を現す」等と云ふが如し。七には、隨行攝生の徳なり。謂は
 く、其根行に隨ひて法門を授與し、正行を増せしむるが故に建立と云ふ、前の句は現身
 此句は說法なり。此二句は佛の化生を得る徳なり。八には、巧に法海を證するの徳。謂は
 く、緣起の法は深廣繁奥にして、包含すること海の如し、巧に其際に達す、故に善入と云
 ふ。九には、入海廻轉の徳。謂はく、善く緣起陀羅尼門に入るに、一切を攝せしむるが
 故に、廻轉總持と云ふなり。十には、果海身に充つる徳なり。謂はく、緣起の法海に於て、

【第二に：竟んぬ】
妙用自在を明す下
六に分ちて釋す。
經に一過く一切の
佛の世界海等と
いふ以下の文なり

【六】三十四衆の
中、三十三衆を列
ぬるに、初に金剛
力士衆。經に「復佛
世界；之を化す」と
いへる文。
【金剛力士】手に
金剛杵をもちて佛
法を守護する神。
【前の中に三句】
經の一佛の願行；
三昧の境界を行
じの文。

巧に廻轉するに由るが故に、佛の無邊功德の法海をして、皆悉く攝取して、己身に充滿せしむ。是故に、皆佛果の功德を得るの意。此に由るなり。下の文に云はく、「菩薩因縁和合の中に於て自在なり、乃至能く意に隨ひて佛身を示現す」と、此謂なり。

第二に妙用自在の中に六有り。一には、遍遊諸刹の用なり。此は世界海を窮む。二には、出生願海の用なり。謂はく、此願力に由りて、國土海に入る。又、前の句は、他の佛刹に遊び、此句は願じて自土を嚴る。三には三達圓明の用なり。未來は知り難きを以て、是故に偏に擧ぐ。理實には三なりと知るべし。四には、歷事供養の用なり。五には、願海深廣の用なり。故に普賢願と云ふなり。六には、化物智圓の用なり。故に衆生智滿と云ふなり。同生衆を竟んぬ。

第二に異生衆の中に、先づ金剛力士衆を辨ず。佛を衛ること、近きを以ての故に先づ列ぬ。佛徳緣起は、相を壞せざるを表するが故に。衆行の所依は、金剛際こんごうがいの如くなるが故に。即ち行の眷屬餘衆も亦然り。歎徳の中に八句あり。初の一句は、總じて本願をもて、佛に侍することを明し、後の七句は、別して其徳を顯す。前の中に、若し三乗教の中には、八地已上に方に乃ち形を現じ、形顯に侍衛し、已前は密に衛る。一乘の中には、信滿已去並に顯に衛る。下の賢首明法の二品の説の如し。又、心に隨ひて求むる義を、願と爲し、要契至誠なるを誓と爲す。下の別の中に二あり。先は内徳圓滿にして、後に無量神力の下は、外用普周す。前の中に三句有り。初には願行具し、二には福智淨なり。三には大定

【外用】：四句。經の一無量の神力；之を化するの文。

【善財】：文殊、覺城の東、莊嚴轉娑羅林中に在せし時、城中の五百童子の一。

【普光堂】：普光明殿のこと。佛華嚴の法門を説ける處。

【堅牢】：堅牢地神をいふ。大地の女天の名。

【黎元】：百姓。

【后稷】：陶唐の世に農官をいふ。

【社公】：五穀の神を祀るに、社と相配するをいふ。

【十相】：十地品の十相をいふ。

【風災】：壞劫に入り、最後に起る三災の一。下は無間

深し。外用の中に四句あり。一には力は果に同じて過じ、二には大小重入し、三には身は衆に出で、大衆の畏無きことを表すなり。四には、類に隨ひて巧に現す。皆緣起際の如し、之に準ぜよ。

第三に道場神とは、樹下に在りて近きが故に、次に之を列ぬるのみ。敬徳の中に、略して往因を擧ぐ。下の善財の、第十廻向の知識の處に、説くが如し。又道場を守護す。寶髻等の如し。又、道場の神、此れ依主釋なり。或は道場即神、持業釋なり。一乘は二釋に通ず。並に法門なるを以ての故に。三乘は唯依主、人法別なるが故に。下の諸神の名の二釋は之に準ぜよ。第四に龍、上に居して蔭覆するの義、故に嚴法堂と云ふ。下の普光堂は、龍の所造等の如し。第五に地神、下に居して、運載するの義、多く女身を現す、堅牢等の如し。第六に樹神、中に居して建立するの義、德樹高情の故に喜ぶなり。第七に藥神、是れ對治の義、法藥の惑を遣るは、是れ悲門なり。第八に穀神、是れ資持の義、黎元を育養して喜ばしむるが故なり。后稷等の社公の如し云云。第九に河神、是れ流潤の義、徳の中の勤は是れ、流の義にして、益は是れ潤の義なり。第十に海神、是れ徳を具するの義なり。下の十相等の如し。徳の中に、法を以て事に同すること、知るべし。第十一に火神、是れ成熟の義、照照の義、焚燒の義、除闇の義なり。初の二は二嚴を成じ、後の二は二障を滅す、之に準ぜよ。第十二に風神、是れ聚散の義なり。風災散を爲し、風輪持聚する等の如し。惑を散じ徳を聚むること、知るべし。又、即ち衆生の身をして、分散せざらしむ。皆是れ

地獄より色界第三
禪天までの一切の
物質飄散す。

【風輪】須彌説に

隨へば、世界の最
下底に此輪あり
其上に水輪を生じ
金輪を生じ、上に
九山八海ありとい

ふ。

【齊輪】臍をいふ

【阿修羅】(Asura)
八部衆の一。

【毘摩】(Vimala
citra) 毘摩羅質多
羅、即ち阿修羅王
の名。

法界の縁起、遮那の風神の力なり。又、内風に五種有り。一には息風。謂はく、出人の息は齊輪より起る。二には消風。下に向ひて食を消す。三には持風。人をして行くこと、健ならしむ。四には災風。人をして病を成せしむ。五には力風。人將に死せんとするや、人の支節を解く、死に臨むのとき、人の面に五色の風有り。地獄に入る者は黒色なり。畜生に生ずる者は青色なり。餓鬼に生ずるは黄色なり。兼ねて舌を以て出す。人に生ずるは面常の色の如し。天に生ずるは鮮華の色あつて、精光愛すべし。第十三に空神に七義有り。一には無邊、二には無礙、三には一味、四には含攝、五には顯示、六には離染、七には堅固なり。前の五は、名の中に準じ、後の二は徳の中に彰る。第十四に主方神、是れ顯示の義なり。謂はく、方隅を顯示して、迷を達し正に向はしむ、故に善照と云ふ。照は猶ほ顯示のごとし。第十五に主夜神、是れ助成の義なり。正時に非ざるが故に或は闇夜の中に衆生を導引す。下の夜天等の如し、之に準せよ。第十六に主晝神、是れ正修の義なり。是れ正時なるが故に、故に信樂正法と云ふ。又是れ明飾の義なり、故に莊嚴と云ふ。第十七に阿修羅、新には阿素洛と爲し、婆沙に依れば非天と名く。佛地論には天趣の攝と説く。多く詔詐を行じて、天の實行無し、故に非天と名く。世の惡行を名けて、非人と曰ふが如し。或は非端正と名け、或は不酒と名く。大海の中に於て酒を作るに成せず等と云ふ。或は云はく、毘摩の母は、木天より生ず、故に劣天と云ふ。阿含經に云はく、劫初成の時、光音天、海中に來りて洗浴す。水其身に觸れ、精を失して水に在り、遂に肉卵と成る。八千歲

【光音天】語るに
言語を用ひず、淨
光を發す。色界第
二禪天の終天。

を経て乃ち一女を生ず。身須彌の若し、九百九十九の頭有り。頭に千眼有り、九百九十九の口有り、口に四牙有り、牙上より火を出す、猶し船櫃の如し。二十四の手ありて、九百九十九の脚あり。海に在りて浮び戯るるに、水精身に入りて、一の肉卵を生ず。八千歳を経て、毘摩質多を生ず。身に千頭有り、頭に千眼有り、口中より水を出す。九百九十九の手有り、其八脚有り。其形四倍して、須彌山より大なり。純ら淤泥及び薊根を食す。又、多く天と諍ふ。廣くは正法念經の説の如し」と。然るに修羅に五の住處有り。一には、地上寒相山の中なり。下の文の説の如し。二には、須彌山の北下、大海に入るごと、二萬一千山旬なり。修羅王を羅摩と名く。此には障礙と云ふ、能く手を以て日月を障へ、寧しく無量の衆を領す。三には、此より下、更に二萬一千山旬を過ぎて、王を勇健と名く。亦多掌を領す。四には復二萬一千山旬を過ぎて、王を華鬘と名く、亦諸衆を領す。五には復是數を過ぎ、王を毘摩質多と名く、此には響高と云ふ。是れ舍脂の父なり、身は五須彌山の如し、天帝と戰ふの時、海底より發りて聲を暢ぶ。大いに叫んで云はく、「我は是れ毘摩質多なり、我は是れ毘摩質多なり」と。時に閻浮の山岳一時に震動す。亦是穴居と名く。謂はく、彼中に光明城有り。中に於て住するが故に或は天趣の攝なり。上の佛地論一の如し。或は毘曇に依れば、鬼趣の攝なり。詔曲に覆はるるを以ての故に。或は正法念經に依れば、鬼畜の攝なり。羅摩は是れ、師子の兒等なるを以ての故に。或は伽陀經に依れば、天鬼畜の攝なり。上の説に由るが故に、故に唯五道のみ有り。若し六道

【迦留羅】(ゴロニ) 四天下の大樹に住し、龍を食す八部衆の一。

【三歸】佛寶に歸依して寶とし、法寶に歸依して業とし、僧寶に歸依して存とするなり。

【胎生】胎、卵、濕、化の四生の一

【金剛輪山】金輪の上に九大山あり

を分つときは、善の中の上中下を、天人修羅に配す。悪の中の三品は、下の三塗に配す。知るべし。智論に依れば、其羅喉阿修羅王は、是れ大菩薩なりと。第十八に迦留羅、新には揚路茶と名く。此には妙翅鳥と云ふ。鳥の翅に、種種の寶色莊嚴有り。但し金のみに非ず。海龍王經に依るに、其鳥の兩の翅、相去ること三百三十六萬里、闊浮提は止一足に容ると。涅槃經に依るに、此鳥は能く龍魚七寶等を食消す。唯金剛を除く。消せしむること能はざるを以ての故に。又應に命終すべき龍を食す。又、過去に三歸を受くる者を食せず。袈裟の纏繋る者を亦食せず」と。又一増一經に依るに、四生の金翅の中に、卵生の鳥の如き、鐵叉樹下より海に入りて、卵生の龍を取る。水猶未だ合せざるに、還りて木樹の上に至り、之を食す。若し胎生の龍に向へば、鳥の身即ち死す。若し胎生の鳥は、胎卵の龍を取ることを得、餘の二を得ず。若し濕生の鳥は、三生の龍を取ることを得、化生の龍を取ることを得ず。若し化生の鳥は、四生の龍を取ることを得。又、日別に一の大龍王と、五百の小龍を食す。四天下を遶ること周くして、復始め、次第に之を食す。命終せんと欲する時、諸龍毒を吐かば、復食すること能はず。飢火に焼かれ、翅を聳えて、直に下りて風輪際に至る。風の爲に吹かれて、還りて復上り來り、往還すること七返にして、足を停むるに處無し、遂に金剛輪山の、頂上に至りて命終す。諸龍を食するを以て、身肉の毒氣、火を發して自ら焚く。難陀龍王、寶山を燒かんことを恐れ、雨を降して火を滅す。滯車軸の如くにして、身肉消散す。唯心のみ在ること有り。大いさ人の脛の如し、純

青瑠璃の色あり。輪王之を得て用て、珠寶と爲す。帝釋は之を得て、髻中の珠と爲す。又下の文に云はく、「菩薩の金翅王は、生死の大海の中にして、天人の龍を搏擲して、涅槃の岸に安置す」と、此謂なり。第十九に緊那羅、新には、緊那洛と云ふ。此には歌神と云ふ。能く歌詠を唱へて樂を作す。『雜心』には畜生道に入れて攝す。亦疑神と名く、謂はく、是れ畜生道の攝なり。形貌人に似て、面極めて端正なり。頂上に一角有れば、人見て疑を生ず。知らず人とや爲ん鬼とや爲ん畜とや爲んやと、故に疑と云ふなり。第二十に摩睺羅伽、新には莫呼洛迦と名く。此に大腹と云ひ、亦大蟒と云ふ。又腹行神と名く。能く法を護るが故に、能く疑を除くなり。第二十一に鳩槃荼、正法華經に依れば、厭眉鬼と名く。人の精氣を嘔ふ等と。亦冬瓜鬼と名く、王を毘樓勒と名け、此には增長と云ふ、是南方を主とる。天王二部の鬼を領す。一を鳩槃荼と名け、二を薛荔多と名く、所領に従ひて名と爲す。第二十二に鬼神王、是れ北方の毘沙門なり。此には多門と云ふ。亦是れ所領を名と爲す。諸の惡鬼を攝して、衆生を損惱せしめざるを以ての故に、勸護と云ふなり。第二十三に、月は是れ清涼の義なり。下の文の菩薩清涼の月等の如し。二には數發の義なり。蓮華を數發する等の如き、文の寶心を發する等の如き是なり。又『俱舍論』に依れば、月、地を去ること四萬由旬、廣さ五十由旬にして、水精白銀を以て、合して兩面と爲す。廻轉して相影するが故に、虧盈有り。『阿含經』に依れば、其城正方にして一千九百六十里、高さも亦爾り。一分は天金をして作り、一分は琉璃をもつて作る。王の座は二十

里なり、遙に看るを以て、圓に似たり。天の壽は五百歳、子孫相襲ぎて一劫なり。第二十四に日、廣さは五十一由旬、其城正方にして、二千四十里、高さも亦爾り。宮城は純金にして、七寶瑩飾す。王座は二十里、壽命子孫は月天に同じ。風持するを以ての故に、須彌山の四面を繞る。上の日月天子は、俱に是れ四天王の左右にして、初天の所攝なり。並に是れ道力、縁に隨ひて殊形異現す。徳の中に、初の句は自力にして、後の句は利他なり。日に成熟の義、饒益の義有るが如し。又『寶性論』に依れば、法日に四義有り。一には破闇は慧の如し、二には照現は智の如し、三には輪淨は解脱の如し、四には上の三、相離れざることを、法界に如同じ。第二十五に初利、此には三十三天と云ふ。三十三天とは『佛地論』の第五に云はく、妙高山の四面に、各八大天王有り。帝釋中に居す、故に三十三有るなり。若し具には、應に釋迦提婆因陀羅と云ふべし。此には能天主と云ふ。一と。法度經に依れば、此中の天子の身の長け一由旬、衣の長さ二由旬、廣さ一由旬、重さ六銖、壽は一千歳なり」と。徳の中に二利を具す、知るべし。第二十六に夜摩、此には時天と云ふ。時華の開合を以て、晝夜を辨するが故に名く、『佛地論』に云はく、「謂はく、此中に時に隨ひて、樂を受くる故に時分と名く。此天の身の長け二由旬、衣の長さ四由旬、重さ三銖、壽は二千歳」と。徳の中の自分勝進は知るべし。第二十七に都率、新には、觀史多と名く、此には喜足と云ふ。『佛地論』に云はく、後身の菩薩、彼に於て教化して、多く喜足の行を修す、故に喜足と云ふ」と。『長阿含經』に依れば、身の長け四由旬、衣の長さ八山

句、廣さ四山句、衣の重さ一鉢半、食は甘露、壽は四千歳一と。徳の中の慧定、知んぬべし。第二十八に化樂とは「佛地論」には樂變化天と名く。自ら變化を樂み、諸の樂具と作りて、以て自ら娛樂するなり。又自ら樂具を化して、還りて自ら受用し、他を犯さず、故に善化と名く。亦是化樂と名く。「三法度經」に依れば、「身の長け八山句、衣の長さ十六山句、廣さ八山句、衣の重さ一鉢、食は甘露、壽は八千歳なり」と。徳の中に二利あり。第二十九に他化自在とは「佛地論」には、「他をして諸の樂具を化作せしめ、己が自在を顯す、故に名く」と。「三法度經」に依れば、身衣壽命は前に過ぐることに倍す、之に準ぜよ。徳の中には法自在に入るなり。第三十に大梵とは、新には淨と曰ふ。欲樂を離るるが故に淨の中の極なるが故に名く。「佛地論」には、「欲を離れて寂靜なり。故に曰はく、名けて梵と爲す。身とは衆なり」と。「長阿含」に依れば、「梵衆の中に於て、梵音を以て語るが故に名く」と。天とは自在の義、光明の義、淨の義なり。「智度論」に依るに、「天に三有り。一には人天、謂はく帝王なり。二には生天、謂はく、欲色の天なり。三には淨天、謂はく、佛、菩薩等の第一義天なり」と。尸棄此には火色と云ひ、或は火頂と云ふ、火災此に至るを以ての故に。若し上禪を修すれば、即ち此天に生ず。梵衆の中に於て、大梵音を發すれば、諸天各自ら謂ふ、唯我と共にして語りぬと。大千界に於て、最も自在を得。顔は童子の如く、身は白銀の色にして、長け半山句、衣は金色の衣にして、男に非ず女に非ず、禪悅を食と爲す、壽は一劫なり。此は「長阿含」に依りて辨す。徳の中の四句、一

【徳の中の四句】
 經に曰はく「悉く

大慈を具し：清凉
柔懐一と。
【初禪の大小】：爲
す。火災を追釋す

【梵摩】梵(Brah
ma)即ち梵天をい
ふ。色界の緒天婬
欲を離れて清淨な
るを、總じていふ
【火災頂】壞劫に
起る三災のうち、
火災は、七日輪回
時に出で世界を焚
焼し、無間獄より
色界の初禪天に及
ぶを以て名く。

には何を以て度し、二には何の所度ぞ、三には何をか所除し、四には何の徳をか成する。
文の如し、知るべし。初禪の大小は、欲界の一四天下に等し。一千の初禪は、殆んど二禪
に等し。二禪を火災の頂と爲す、一千の二禪は、殆んど三禪に等し。三禪を水災の頂と爲
す、一千の三禪は、殆んど四禪に等し。四禪を風災の頂と爲す。又、梵摩は 此には寂靜、
清淨潔と云ふ、皆得たり、亦梵潔と云ふ。又尸棄は、火災頂の初禪の主にして、又は持
髻と云ふ云云。第三十一に光音とは、「智論」に依れば、第二禪を通じて光音と名く。彼天語
る時、口より淨光を出すこと無邊なり、身の長け二由旬、壽は二劫、又初禪の爲に火光、
音を發し、引攝して此天に生ぜしむるが故に名くるなり。徳の中の慧定、知るべし。第三十二
に遍淨とは、三禪の中には、喜を離るるを以ての故に、身心遍く淨し。一長阿含に依るに、
上の方便を以て、此天王に生ず。淨智と名く。四臂に風輪を持し、金翅鳥に御す。徳の中
は此は是れ、樂の位なるを以ての故に、眞性の廣樂を得しむるなり。第三十三に、果實と
は、第四禪は是れ、世間善果の中の、最勝なるを以ての故に、亦是廣果と名く。徳の中は
是れ不動の位なるを以ての故に、性寂に入るなり。第三十四に摩醯首羅とは、「智論」に
依るに、此には大自在天と云ふ。八臂三眼有りて、大白牛に騎り、大千界の雨滴の數を知
る。大千界に於て、最も極めて自在なること、更に過ぐることを無きを以ての故に、名を立
つるなり。又「智論」の第九に依るに、云はく、「第四禪に八種有り。五種は是れ阿那含の
住處、是を淨居と名く。三種は是れ凡聖共居す。八處を過ぎて十住の菩薩の住處有り。亦

淨居と名け、大自在天王と號す」と。此に由りて當に知るべし、淨居の居に四種有り。一には報の純淨に約す、此は凡聖に通ず。二には徳、凡に過ぐるに約す、此は唯那含等なり。三には因に約す、十住の菩薩有りと云ふが如し。十住の菩薩は、即ち是れ十地なり。十地の中には是れ、第十地の攝なり。四には依報の果なり、謂はく、此中に三乘の中の、報身の淨土等有り。故に此名を立つ。又「智論」に準ずるに、八天の外に、更に別の十住の菩薩の天有り。

【第三に歡徳云云】別して歡徳を釋す。經の「是の如き一切のもの」等以下の文。

【下は別して辨ず】經の「一切の衆生に於て」等の文。

【三業殊勝】經の「無量の妙色」等の四句。

【佛の同乗】經の「如來の所乗」等。【眞源を照燭す】經の「佛の姿顏」等の文。

【佛乘】一切衆生

【第三に歡徳とは此文に二釋有り。一には、但此衆の徳を顯し、二には通じて、上來の異生衆の徳を辨す。便即ち疑を釋す。疑うて云はく、前の普賢の同生、同じく果海に在り。此異生衆は、既に雜類卑末なり。如何が亦果海の中に在りて攝するや。釋は文の中の如し。初の二句は總標なり、謂はく、内に離相を修し、外に勝流に預る。故に緣起果海の中に在り。下は、別して辨ずる中に、二あり。初には其徳を擧げ、後に所以の下は、果海に同ずることを釋す。前の中に二あり。初の一句は、外化普周す、次は内徳盈滿す。盈滿の中に四あり。初には三業殊勝、二には佛の所乘に同じく、三には斷徳染を離れ、四には眞原を照燭す。初の中に、先は身妙色を成じ、二には意善く安住し、三には語辨傾かず。此中に初は不堪説を離るるが故に衆に在りて傾かず。後は不能答を離るるが故に難も能く壞すること無し。此勝れたる三業を具する所以は、佛の所乘常に、現前するに由るが故に。佛乘現前することを得る所以は、二障を離るるに由るが故に。此二障を離るることを得る所以

悉皆成佛を説く教法、即ち本經の如きをいふ。

【初は習種：正使】煩惱の習氣と現起する煩惱の正體。同を釋する云云。以下同じく佛果海中に在るを釋す。經の「所以は何ん」等の文。

【今前の中に三句】經の「如來：時（往時）四攝：攝し（往行）諸の：集め」等の文。
【二には成行：なり】經の「種種因：清淨」の文。
【二には因：故に】經の「解脱の力：入れり」の文。

は、勝を觀る緣に由るが故に、是故に佛海に入るなり。此は即ち後を以て前を釋す。又、義は前を以て後を釋す。謂はく、此勝れたる三業を具するに由るが故に、佛乘現前す。佛乘現前するが故に二障を離るることを得。二障を離るるが故に佛の法界身を見ることを得。是故に衆の數に在ることを得。若し障を具する者は、日を視るに尙眼光を失ふを以てなり。況んや佛を見ることを得んや。下の如盲等の如し。又、斷德の中の二句は、初は習種全く滅し、後句は正使久しく除く。文は見つべし。同を釋する中に二あり。初には、果能く因を攝し、二には因能く果に入る。初の中に二あり。先は微、次は釋なり。微の意は此衆同じく佛海の中に在る所以は何ぞやと。釋の意は、佛彼を成ずるを以ての故に、別ならず。中に於て三有り。一には、佛を擧げて行の緣と爲す、二には、種種因緣の下は、緣に依りて行を成ずることを明す、三には各隨の下は、行を結して緣に屬す。今前の中に三句あり。一には往時、二には往行、三には物の爲に善根を集む。二には、成行の中に五句有り。初の一句は、三賢は位を得しむ。二の一句は、地位を證す。三に逮得の下は、八地已上の位を明す。四に皆悉の下は、法雲の位を成ず。五に具足とは、總を結すなり。三に行を結して緣に屬する中、初に各隨得出は行を結す。悉由等とは緣に屬す。是故に、果海の中に在り。二には、因能く果に入るとは、謂はく、乘解脱等は、即ち因に乗じて、果に入るが故に、別に乘じて總に入るが故に、門に乗じて海に入るが故に。下の文の中の十種の解脱は、九世相即するが如し。此力に乗ずるが故に、因果圓融同一際なることを得

是故に、佛果海の中の法門に於て、悉く自在を得。下の文に法門を數するは、
 即ち是れ共事なり。若し三乘は則ち此の如くなるを得ず、事異なるを以ての故に。師弟別な
 るが故なり。

【七】以下、十八
 二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八
 二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八
 二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八
 二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八

【中に於て：明す】
 二に同異前後を辨ず。

【又異生：作す】
 三に異生の前後の意を辨ず。

【既に：爾り】 四
 に興仁事法の意を辨ず。

自下は大段第二に供養圓滿なり。遠より近に向ふ、十八衆を辨ずる中に、前の三十四の
 内には、四天の中に於て、略して南北を擧げ、具に諸神を列ね、今此興供の中には、道場
 神より摩睺羅伽に至るまで、此十八を略して、具に四王を顯す。何が故に爾る。釋して云
 はく、前の龍等は西方に屬して攝するを以て、餘類は多分東方に收むる所なり。此の類の
 所領多きに由るが故に、王を分ちて衆に従へ、彼二王を略して具に十八を顯す。今此には
 上首佛を讀することを明さんと欲して、衆を攝して王に従へ、東西を收めて盡す。是故
 に彼十八を略して加へて二王を列す。南北の所領は、文の中に廣ならず、東西に類せざる
 を以ての故に、閉合無し。是故に三十四の中に、十八を略却して、唯十六有り。復二王
 を加ふるが故に十八を成す。中に於て、前は則ち先に同じくして後に異なる。今は乃ち先に
 異りて後に同じ。何が故に爾る、謂はく、前は依本起末を表し、今は攝末歸本を明す。
 又、異生の中に、前は則ち、先は劣にして後は勝なり。今は乃ち先は勝にして、後は劣な
 り。何が故に爾るとならば、謂はく、前は法の増徴を表し、今は尊位の次第を顯す。又釋
 す。此等は並に法界緣起、逆順自在、無障無礙にして、總合して一大法界衆と爲すことを顯
 す、故に是説を作す。既に興供と云ふ、何が故に諸の事供を列ねざる。釋すらく、事供

【中に於て三具す】
五に法供三業の意を辨す。

【二八】以下、正しく本文を釋するなり。經の一佛の法門一等の文の下。【各於自在】經には各の字なく、而も悉に作れり。

【初的首羅衆】準ぜよ。一、善海所得の法門を明す。

は奇に非ざれば、勝を顯すに足らず。經に、「諸の供養の中に、法供養は最なり」と云ふ、是故に唯法供養を顯すのみ。若し爾らば何が故に、下の文の海慧及び新集の衆、皆事供を列ぬるや。釋すらく、海慧等の衆は、座の中より出でて、後に事供を持す、奇を顯す爲の故に。他方の容衆は、各本土より彼事供を持す。此等の常隨の衆に類せず。釋迦の身、舍利弗等を以て、常隨衆となすが如し。但し修行して人を化するを以て、法供養と作す、亦更に餘の事供等を辨せず、此舍那身の眷屬も亦爾り。中に於て、各法門に入り、洞達自在なるを、意業の供と爲し、偈を説きて佛を讚めるは、語業の供と爲し、會に在りて虔敬なるを、身業の供と爲す。又夫れ、法供を論ずは、其二種有り。一には、教に順じて修行し、法の自在を得。二には、讀暢顯發して、法化傳通す。今此三業に斯二行を具す。文の中に二有り。初に一句有りて總標す。故に各於佛法門而得自在と云ふ。下は別して辨する中に二あり。初に十七衆、各一法門に自在なりとは、總を分ちて別と爲し、名けて異生と爲す。後に普賢一人、一切の法門に自在なりとは、別を攝して總と成し、異を攬りて普に歸す、名けて同生と爲す。是故に二衆同一緣起なり、之を思へ。文の中の十八衆を即ち十八段と爲す。一一に各二あり。先は長行もて法を得、是れ經家の序列なり。後は偈頌もて讚嘆す、是れ當時の文なり。

初的首羅衆の内、十天得法の中に就きて、初には體用を明す。體の中に法界空は境なり、寂靜は證なり。用の中の方便とは、善巧、機に應ず。光明とは、覺照、益を成ず。法

【二に一切法…存す】二、稱光明天の所得。
 【三に不生…思淨せよ】三、功徳淨眼天の所得。

【不變…不滅なり】理事無礙の理を顯す。

【五には…約す】依他の三義、初は當性の二義に約し、後三無性に對して説く。

【八には…約す】通計の二義、初は情有理無の當相に約し、次は三無性の義に對す。

門とは、法に三義有り。謂はく、自性軌則及び對智なり。門に四義有り。一には標別の義、此門は彼に非ざる等の如し。二には通智遊入の義、三には收入の義、一切を一に入れ、一を以て門と爲す。四には通出の義、一門の中に於て能く一切を出し、窮盡せざるが故に。此法即ち門の持業釋なり。法界空等即ち法門にして、亦持業なり。下の諸門並に此に準じて之を知れ。此等は並に是れ法界緣起、佛境界の中の、差別の法門なり。然るに、此諸衆各一門を洞にして、佛海の内に入る。眷屬は佛の別徳なるが故に、自在と稱す。又、此一門に於て一切の門を攝し、作用無盡なるが故に自在と名く。下並に之に準せよ。二に一切法とは境なり、普遊とは智なり。又、初は教、後は義、頌は後釋を存す。三に不生滅は是れ法身なり、方便は是れ色身なり。又、初は證道、後は教道なり。又、不生滅とは十義有り。一には、眞理、有爲の相を離るるが故に。二には、有爲に非ざるが故に不生なり。是れ無爲の故に不滅なり。三には、不守性の故に不生なり。不改性の故に不滅なり。四には、不變の故に不生なり、隨緣の故に不滅なり。此上は圓成に約す。五には、緣起無性の故に不生なり、緣起不失の故に不滅なり。六には、緣起不失の故に不生なり、理性現ぜざるを以てなり。緣起無性の故に不滅なり、理性顯るるを以ての故に。七には、緣起に由るが故に、生滅に收むべからず。此上は依他八には、情執は無理に由るが故に、生滅すべき無し。九には、所執の故に不生なり。是れ無相觀の境なるが故に不滅なり。此上は所執上來は境に約す。方便とは上の諸の道理、巧に機に現す。十には、世間に住せざるが故に不生なり、凡夫

【四は：故に】四
 大慧光天の所得。
 【光とは：故に】
 光遊の二字を釋す。
 【五は：なり】五
 淨光吾天の所得。
 【六は：なり】六
 施善眼天の所得。
 【七は：故に】七
 不思議天の所得。
 【八は：無し】八
 樂天乘天の所得。
 【九は：境なり】九
 普雜普天の所得。
 【十は：故なり】十
 上、樂稱光天の所得。
 【二九】二に偈頌を釋す。經の一爾時善光海一等の下。

に同ぜず。涅槃に住せざるが故に不滅なり。二乘に同ぜず。不生に方便有るを以ての故に、涅槃に住せず。不滅に方便有るを以ての故に、世間に住せず。若し爾らずんば、凡に異らば應に小に同ずべし。小に異らば應に凡に同ずべし。方便に由るが故に、雙べて異なることを得。此上の十義は、總別無二なり。六相鎔融するを以てなり、之を思惟せよ。四は巧智深廣にして測り難きが故に。光とは闇を除くが故に。遊とは昇入の故に。五は普門禪に依るが故に一切と云ふなり。法界の理例を見るが故に、惑を滅するが故に、無量の樂を生起するなり。六は業分の可怖は轉滅するが故に、淨分の寂靜は轉現するが故に、遊は是れ證なり。七は境界とは分齊なり、化用過ぎが故に、不起とは不作なり。用て恆に寂なるが故に。八は妙に之際を絶するが故に。又佛德、機に應じて往返無し。九は眞理寂靜は、是れ佛の所縁の境なり。十は佛の多の方便は、是れ衆生の所縁の故なり。此十法門の中に初門を總と爲し、餘の九を別と爲す。同異成壞準じて之を知るべし。

頌の中に、先は生起なり。以佛力とは、自力に非ざることを顯す。觀自衆とは普攝を示すが故に、同説を顯すが故に。何が故に偈をもつて讚すとは、地論に云はく、「少字にして多義を攝する故に。諸の讚嘆とは、多く偈頌を以てするが故に」と。又頌に四種有り。一には數字頌なり。謂はく、梵本に依るに、三十二字を一頌と爲す、長行及び偈を問はず。二には偈陀頌なり。此には諷頌と云ひ、或は直頌と云ふ。謂はく、長行を頌せざるなり。三には祇夜頌なり。此には應頌と云ふ。謂はく、應に重ねて長行の法を頌すべき

【偈の中の云云】
以下、正しく頌頌
を釋す。

【頌の中…頌す】
初頌を釋す。
【或は身…故なり】
第一句の意。一塵
法界に普周し、法
界一塵中にありて
障礙なきをいふ。

たり。四には體宛南頌なり。此には集施と云ふ。謂はく、少言を以て多義を含蓄するを、
集と云ふ。用以て人に施して、受持し易からしむるが故に、集施と云ふ。此上の三種の頌
は、或は七言、或は五四三言なり。處世界如虚空の如きを三言と爲す。皆四句を以て一頌
と爲す。此中は、第三重頌の偈に當る。下の文の諸頌は、之に準ぜよ。

偈の中の二十行は、四句をもて偈を成す。總じて十偈有り。一偈は前の一法門を頌す。
問ふ、此は佛を數ぜんと思す、何が故に己が法門を頌する。答ふ、「此衆は既に佛の海印
の中に現じて、佛の別徳に屬するが故に。己が法を頌するは、即ち是れ佛を數するなり。
佛徳玄妙にして餘の知る所に非ず。若し佛徳に非ずんば、以て佛を顯すこと無し。故に、

「智論」の第十二に云はく、「唯佛のみ佛を供養すべし、餘人は佛徳を知らず。説くが如し、
智人は能く智を敬す。智、論すれば則ち智喜ぶ。智人は能く智を知る、蛇の蛇の足を知るが
如し」と。頌の中に、初の頌は初の法門を頌す。初の三句は體を頌し、後の一句は用を頌
す。前の中に、初の一句は境を頌し、次の二句は證を頌す。或は身法界に滿じ、或は法界、

身に滿じて融するが故なり。心寂の故に取無く、境寂の故に起無し。又、初の句は上の
法界を頌し、次の句は虚空を頌し、次の句は寂靜を頌し、下の句は方便を頌す。二頌の
中に、初の二句は、上の一切法を頌し、次の一句は上の普遊を頌し、下の句は天の名を結
す。三の中に、初の一句は、上の不生滅を頌す、證道なり。次の二句は上の方便を頌す。

教道なり。初の句は身方便にして、後の句は口方便なり。下の句は天を結す。法の自在を

【二】二に第四禪の果實天の八を釋す。
 【物の根】衆生の種類。
 【一に妙色】能應なり。佛微妙の身を現じて説法したまふをいふ。
 【念とは機なり】所對の機類、佛所説の法を念持し、苦身を觀するをいふ。

得るに、名を立つることを明すなり。四の中に初の二句は、上の方便智海を頌し、次の一句は上の光を頌す。下の句は遊を頌し、及び人の得法を結す。五の中に、初の三句は、上の禪無量の樂事を頌し、下の一句は普起及び樂の名を頌す。六の中に、初句は上の癡畏を頌し、次の句は遊靜を頌し、次の句は轉を頌す、謂はく、照除なり。下の句は人の得法を結す。七の中に、初の二句は、無量の境界を頌し、次の一句は不起を頌し、下の句は法を結して人に屬す。八の中に、初の二句は、上の一切の法を頌し、次の一句は不來去を頌し、下の句は法を結して人に屬す。九の中に、初の三句は、佛境寂靜を頌し、下の句は、法を結して人に屬す。十の中に、初の三句は、無量の境界を頌す。無量の境界に三有り。一には時無量なり。上の句は之を顯す。二には境界無量なり。謂はく、菩提及び衆生なり。次の句は之を顯す。三には善巧無量なり、下の句に顯す。下の句は人の得法を結す。
 二に第四禪の果實天に八有り。一には、物の根を觀じて、法雲を興し、法雨を注ぎて、以て前根を益す。二に妙色とは、現身の故に。方便とは説法の故に。此二は是れ態應なり。念とは、持法を念するが故に。觀とは色身を觀するが故に。此は是れ所應の機なり。此念に由りて、癡を滅し淨を成す。三に因陀羅網の如くなる土を見る、緣起無性に由るが故に。四に緣起の陀羅尼に入る。一門の中に、即ち圓融法界を攝するが故に普門と云ふなり。五に不轉愛とは、自ら惑を留むるが故に他の衆生の受生の愛を轉じて、永く滅せしむるなり。又、他をして惑を滅し、三界の處に於て生ぜざらしむ。六に一切世間の境とは、器及び衆

【頌の中に云々】
 上は長行を釋し、
 今は偈頌を釋す。
 十七頌を釋するに
 八段とす。

【二の中に亦二偈】
 經の「佛神通力」等
 を指す。

【三に亦二偈】
 經の諸法を實相」等
 の二。

【四に亦二偈】
 經の諸の緣と」等の
 二。

【五に三偈】
 經の如來は神通力」等
 の二。

【六に二偈】
 經の十方の諸の」等の
 二。

【七に二偈】
 經の如來は衆生」等の
 二。

【八に二偈】
 經の如來自ら」等の二
 後之二」顯す。

【經の「無數の無量」
 等の二頌を釋す。

生なり。佛中に入りて說法し、而も恆に寂に住す、故に不思議と云ふなり。七に二空を會して二諦を顯す。衆生及び法とは、人法を擧ぐるなり。出要とは、眞空を會するなり。八に機をして眞源を證せしむるは、果海に入るが故なり。頌の中に十九の偈有り。二有り。初の十七は、前の法門を頌し、後の二は、因を擧げて總じて嘆す。前の中に、初の二偈は、初の法門を頌する中に、初偈は佛徳の深きことを歎じ、上の能觀を頌し、後の偈は、上の法雲、根欲を開潤することを頌す。二の中に亦二偈有り。初の偈は妙色方便を頌し、後の偈は念觀を頌す。三に亦二偈あり。初の偈は巧に眞理を現し、後は理に依りて事を現す。因陀羅網は理事に通ずるが故に。四に亦二偈あり。初は普門、法界身を現することを頌し、後は法界の法を顯す。五に三偈有り。初の偈は、斷徳生を攝して、惑業苦を轉滅するなり。次の偈は福智等を轉顯するなり、然も各因陀羅に通ず。後の偈は法を結して人に屬す。方便は即ち是れ不轉愛なり。前の長行の中には、但初偈の中の事のみ有り、應に知るべし。六に二偈は、初に、上の入一切世間境界を頌し、後の偈の中の三句は、不思議を顯す。下の句は法を結して人に屬す。七に二偈は、初の偈は、上の衆生の出要を頌し、無我を知らしめ、以て俗諦を顯し、後の偈は、一切法の出要を頌し、無我を知らしめて、以て眞諦を顯す。八に二偈は、上の受化の者の、佛境界の法門に入るを頌す。初の二偈は、果を以て機に就き、後の二偈は、機を攝して果に入らしむ。後の二偈の中に、初の二偈は、因を擧げて徳を成じ、後の二偈は、機に對して用を顯す。又釋す。此偈は逆次に前の法門を頌す。初の

【三】三に遍淨天の七を釋す。經の「復淨智天玉あり」等の文。

【又釋す】如し【智度論七十三の中】にあり。

【四辯】一、教法に於て帶るなきを法無礙、教法所詮の義理を悉く知るを義無礙、諸方の言語に通じて、洩すなきを辭無礙、前三を得て樂ひに隨ひ自由に説くを樂説無礙といふ。【緣起際に順ず】事無礙の法に順ずること云云。【頌の中に云云】以下、偈頌を釋す。【總に由りて用を起す】經の「如來は……見たてまつ

二は末後を頌す。次の二は第七を頌す。次の二は超えて第一を頌す。次の二は超えて第四を頌す。次の三は第三を頌す。次の二は却りて第六を頌す。次の二は却りて第五を頌す。後の四は第一を頌す。並に知るべし。是れ任放の辯才を以て説く。次でを待たざるが故なり。

三に第三禪の遍淨天に七有り。一は諸の衆生の三品の善根を觀じて、增長せしむる故に。又釋す。城門の首、佛名を聞く所の善根を觀じて、驚しは見ざる等の如し。二に一切有とは、一切世界なり。佛中に於て出でて、衆生を覺悟せしむ。諸法を照現するが故に覺照と云ふなり。三には、總持は心に於て、文義を具するが故に、之を宣ぶ、説に於て四辯を具するが故に。四には佛出には、逢ふこと希なり、故に樂を生ず。出で已れば難を除くが故に解脱と云ふ。五に衆生、即ち如、緣起際に順じ、徳を顯すこと無窮の故に、歡喜を生ず。六には初に化菩薩とは勝用なり。次に徳周備し、後に無盡に入るは、極體に順ず。並に是れ一乘別教の法なるのみ。七に苦の衆生は是れ所救、慈悲は是れ能救なり。智とは相を取らざるが故に。滿とは化徳具するが故に。彼益を成ずるが故なり。頌の中に十一あり。初の二句は能觀なり、謂はく、佛智無礙普遍なり。次の一句は善根の難知を明す、是れ佛境界なり。下の句は人の法を得るを結す。二に四偈有り。初の二は上の有に處し、及び照を頌す。中に於て初の二は、體に依りて用を起すことを明す。

る一の文。

【用の體：明す】經の無量劫：無上たり。

【後の二】經の衆生は：見たてまつるの一の二劫。

【四に一頌】經の如來の出世等の

【五に一頌】經の一切衆生等の

【六に一頌】經の三世諸佛等の

【七に二頌】經の衆生は煩惱：化度したまふ一の二の十を釋す。

【長短相即】一切に修する功德を、一念に得る等これなり。

後の一は用の體に歸することを明す。後の二は覺の義を頌す。中に於て初の二は、迷を閉きて覺を顯し、後の一は覺の情を超ゆることを明す。三に一頌は、初の二句は持を頌し、次の一句は結を頌す。下の句は法を結して人に屬す。四に一頌は、初の二句は佛出を樂しむことを頌し、後の二句は解脫を頌す。五に一頌は、初の二句は衆生甚深の法を頌し、後の二句は、歡喜を生ずることを頌す。思理の功德を以ての故に。六に一頌は、初の二句は上の化菩薩を頌し、後の二句は、上の功德周備して入無盡するを頌するなり。七に二頌は、初の一頌の初の二句は、所救を頌し、後の二句は能救及び智を頌す。謂はく、見淨は是れ智なり。下の一頌は滿を明す。謂はく、初の二句は化身の滿、後の二句は化業の滿なり。

【四に第二禪の光音天衆に十有り。初に寂靜愛とは、一には理靜、二には事靜、三には田靜なり。滅苦に亦三有り。一には性滅、二には智滅、三には福滅なり。下の頌の中には但田及び福有るなり。二の中に、初には斷德なり。心淨は性淨の故に。離垢は治淨の故に。【三寶性論】に云はく、「一には自性淨、二には無垢淨」と。次に智德とは、謂はく、廣修等なり。又心淨は是れ器、離垢は是れ緣、德海は是れ依にして、緣の所修なり。頌の中には後の釋を存す。三に二釋有り。一には長短相即す、時劫如如なるを以ての故に。二には自在の位と、不自在の位と、德優劣なるが故に。四に三釋有り。一には云はく、世間生住滅種種とは、是れ染法の緣起なり。清淨とは染に即して性淨なり、性淨の德なるが故に功德と云ふ。一には云はく、是れ淨法の緣起なり、但眞如を簡ぶが故に、世間生等と云ふ。

【陀羅尼】(Dhāraṇī)持、總持等と譯す。善法を保持して散ぜしめず、惡法を保持して起らしめざる力用をいふ。これに、陀、義、呪、忍の四陀羅尼あり。

【頌の中の云云】次に偈頌を釋す。

【靜田】如來解脫の徳、

【二の中云云】經の「如來の無垢」等の一頌の下。

【所成の徳海】四無量心をいふ。

【三の中云云】經の「如來廣大」等の一頌の下。

【四の中云云】經の「如來の神力」等の一頌の下。

【五の中云云】經の「無量の刹」等の

染の過患を簡ぶが故に淨功德と云ふ。一には云はく、世間は是れ處なり。生住滅は是れ佛出でて、及び住滅等の多門もて、物を益し染を滅して淨を成ずる故なり。下の頌の中は後の釋を存す。但し義通するを以ての故に、餘釋を兼ねぬ。五に一生の菩薩は、能供の中の極なり。是故に彼に就きて廣説を顯す。下の百萬徳等の如し、之に準ず。六は自在陀羅尼力を得て、一念に能く多く受け、一念に能く多く説く。七は場處に佛出を莊嚴と名く。八は神足即ち功德なり。又、神足は是れ能益なり。功德は是れ所益の成相なり。九は福智深廣にして機の與に境と爲る。十は願力、功德力は、是れ因位の願行、即ち能持なり。喜藏は是れ果にして即ち所持なり。喜は是れ大智にして、智體含攝するが故に藏と名く。

頌の中の十偈、各一法を頌す。初の偈は靜田に依りて福を生じ、苦を滅することを頌す。二の中に初の句は、離垢行縁を頌し、次の句は心淨行器を頌し、次の句は所成の徳海を頌し、下の句は法を結して人に屬す。莊嚴は即ち是れ妙難光なり。三の中に初の句は、方便の廣きを顯すが故に、次の句は多劫の修を顯すが故に。次の句は性無礙の故に。此方便に由りて、一念に多劫の功德を出生するを方便門と名く。法主音は即ち是れ自在音なるが故に人の法を得るを結するなり。四の中に初の三句は、世間の生住滅を頌す。即ち佛世に興る等の故に。下の句は、滅礙は淨功德を頌し、勝念は天の名を結す。五の中に初の句は田廣、次の句は能供廣、次の句は供益廣なり。總じて上の菩薩、兜率に在りて、廣く供を説くことを頌するなり。下の句は法を結して人に屬す。六の中に、初の三句は一

一頌の下。

【六の中に云云】
【七の無量劫海】等

一頌の下。

【七の中に云云】
【八の如來の無量】

一頌の下。

【八の中に云云】
【九の佛持は廣】

一頌の下。

【九の中に云云】
【十の如來の智慧】

一頌の下。

【十の中に云云】
【十一の過去世】等の

一頌の下。

【十一の過去世】等の

一頌の下。

【十二の梵天の十を釋す。

【三に名く】初

は本後の二智に約

し、一は化他の處

說に約して釋す。

【轉思：伏取す】
折伏攝受の二門な

り。

劫に於て、地の義を施くことを頌し、下の句は能く一念に施を受くることを頌す。心自在

を得るを以ての故に。七の中に、初の句は能嚴、次の二句は莊嚴の相を現じ、下の句は名

を結す。八の中に、初二句は無量の量足を頌し、上の句は體、下の句は用、下の二句は益

成の功德海を頌す。上の句は地前の六根淨を得しめ、下の句は地上の甚深の法に至らしむ。

亦是れ人の名を結す。九の中に、初の二句は、功德海を頌す、上の句は慧、下の句は福、

次の句は境界を頌す。下の句は法を結して人に屬す、十の中に初の二句は、過去の佛の功

徳力を頌し、次の一句は願力を頌し、下の句は所持の喜藏を頌す、即ち所成の果なり。

第五に初禪梵天衆に十有り。初は眞より應を起すを、照現法と名く。應は眞に異らざる

を、入不思議と名く。寂に即して照と爲るを以て、寂をもつて思ふべからず。照に即して寂

と爲れば、照をもつて思ふべからず。二に一切禪等觀とは、是れ法身の理なり、此は是れ

禪の中の、平等觀の境なるを以ての故に。寂靜善住とは、妙智證契するなり。三に初

は本智法を照し、後は後智巧に化す。又、利樂法海を諸法不思議と名く。一音の演說、摩訶

に盡さざるを入方便と名く。偈の中に後の釋を存す。四は佛音圓に應ずるを、妙音海と名

く。齊均に普く契ふを、平等度入と名く。五に轉根の者は攝取し、剛強の者は伏取す。然

るに、此方便、佛身の中に現するが故に最勝と名く。六に佛身普く應じて、諸刹の中に現

するを、能起住と名く。諸業普周して、淨音說法するを、分別法と名く。七に無邊の三業

巧に衆生を化す。八に法の情計を離るるを、淨相と名け、妙智善く證するを、住寂行と

名く。九は過未に來去無く、現在に所依無し。又、生に從來無く、滅に所去無く、住に依止無し。此に於て、心を觀するを、名けて勇猛と爲す。十は隨ひて一行有れば、即ち皆普く無盡法海を照す。

【頌の中に八偈】
以下、偈頌を釋す
【禪等觀】禪心を以て寂照無礙と等觀す。

【三の中云云】經の「一佛刹」等の下

【四の中云云】經の「如來の妙音」等の下

【五の中云云】經の「十方三世」等の下

【六の中云云】經の「一佛身は空」等の下

【七の中云云】經の「佛身無邊」等の下

【八の中云云】經の「法王は等」の下

【九】六に他化天の十を釋す。經の「復自在天有り」

頌の中に八偈あり。前の七は各一を頌す。初の中の初の半は、照現諸法を頌す。後の半は入不思議を頌す。二の中の初の半は、禪等觀を頌し、後の半は寂靜善住を頌す。便即ち下の句は、法を結して人に屬す。三の中の初の句は、照諸法不思議を頌す。次の二句は入方便を頌す。下の一句は法を結して人に屬す。四の中の初の三句は、妙音聲海を頌し、下の句は平等度入を頌す、亦是れ結なり。五の中の初の半は攝伏を頌し、後の半は最勝を頌す。六の中の初の句は、一切利能起安住を頌す。謂はく現身なり。下の句は分別諸法を頌す。謂はく、淨音說法の故なり。七の中の初の半は、無量方便を頌す、即ち三業輪なり。後の半は化衆生を頌す。謂はく、自在に機を照すが故に。八の中の初の半は、住寂行を頌し、後の半は諸法の淨相を頌す。後の二の法門は、略して頌無し。又釋す。總じて第八の頌の中に在り。謂はく、初の句は第八の法門を頌し、次の句は第十を頌し、次の句は第九を頌す。下の句は名を結す。樂は是れ第九の名、音は是れ第十の名なり。

第六の他化天衆に十有り。初の中、衆生に二藏有り。一には煩惱藏、化して轉盡せしむ。二には如來藏、化して轉現せしむ。此二は不二にして和合融通す。故に化益を得るなり。二に衆生をして大涅槃の樂を得しむ。三は機を知りて、巧に益す。四は衆生に三性の

【十力】如來の十力をいふ。一、知覺處非處智力。二、知三世業轉智力。三、知諸禪解脫三昧智力。四、知諸根勝劣智力。五、知種種解智。六、知種種界智力。七、知一切至所道智力。八、知天眼宿命無漏智力。九、知永斷習氣智力。

【頌の中云云】以下、偈頌を釋す。

【一の中の三句】經の「世間一切等」の樂、四種へ出家遠離樂、禪定遠離樂、菩提覺法樂、涅槃寂靜樂を通じて擧げ、次に涅槃の樂のみを取る。

【三の中云云】經の下。如來は普く等の。

【四の中云云】經の一如來の演べ、等

義有ることを分別す。又、佛衆生の爲に、一音に廣大の法海を顯現す、偈の中には、後の釋を存す。五は慈念、機を覆ひ、慧眼觀察す。六は大慈の十力、慢の高山を碎く。七は念に應じて攝化す。八は普く諸佛を念じ、妙に佛境を盡す。九は佛の功德自在とは、能化の徳を顯す。覺悟滿念とは、普く群機に應ず。隨順とは、一には根緣相順す、二には機をして法に入らしむ。十は佛國十海、唯佛慧の境なるが故に世間を離る。

頌の中に十有り。各一法を頌す。初の中、初の半は藏を頌し、後の半は化衆生を頌す。亦是通じて頌すべし。二の中の三句は、前の法を頌し、下の句は人を結す。三の中の初の句は、解衆生を頌す。疑地枯林とは性欲を頌す、餘は方便を頌す。及び人の、法を得るを結す。四の中の初の句は分別を頌し、次の句は義を頌す。次の句は疑を釋す。疑ひて云はく、何が故に一音に能く多法を演ぶるや。釋して云はく、遍の故に。下の句は結す。勝勇は是れ精進なり。五の中の初の半は、觀察を頌す。謂はく、智觀して法を納るるを、入佛毛等と名く。下の半は慈念を頌し、及び名を結す。六の初の句は魔事を頌し、次の二句は超出を頌す。下の句は結す。七に初の半は念佛に由るが故に、智を得ることを頌す。滅癡は染の因を離る。後の半は染の果を離る、及び名を結す。八の中の初の句は、十方の諸佛を頌し、次の句は念充滿を頌す。其念を滿するを以ての故に、後の半は滿念の益を明す、及び名を結す。幢は猶し輪のごとし。九の中に、初の句は佛の功德自在を頌し、次の句は覺悟及び念隨順を頌す。下の半は充滿及び結を頌す。十の中の初の句は、離世間を頌す、

の下。
 【五の中云云】經の一切十方」等の下。
 【六の初云云】經の「一切衆生」等の下。
 【七に云云】經の「如來を觀」等の下。
 【八の中云云】經の「如來の毛孔」等の下。
 【九の中云云】「經の一切十方の」等の下。
 【十の中云云】經の「無量劫海」等の下。
 【三五】七に化樂天の十を釋す。經に「復善化天王」等。

是れ土海なるを以ての故に。次の句は境界を顯す。世間の相盡き、土海超ゆべきこと無きを以ての故に、無高心と云ふ。謂はく、無分別なり。下は名を結す。
 第七の化樂天衆の十有り。初は緣起無作を以て諸法を分別す。二は三釋有り。一には云はく、三有の我の實性を觀するが故に。一には云はく、一切有とは理有なり。我我は情計なり。情理不二の故に、眞實と云ふ。「佛性論」に云はく、「眞諦は人法無き故に有ならず。二空を顯すが故に無ならず。又、人法は無にして無ならず、二空は有にして有ならず。俗諦に於ては、分別性の故に有ならず、依他性の故に無ならず。又、分別は定無にあらす、依他は定有にあらす。是故に二諦俱に有無を離る」と。又、「辨中邊論」に云云。又云はく、佛有を現すと雖も、然も有に於て佛を求むるに得ず。有は即ち眞にして、是れ有無きを以ての故に、觀一切有眞實と云ふ。佛は我を現すと雖も、然も我に於て佛を求むるに得ず。我は即ち眞にして、而も是れ我無きを以ての故に、觀我眞實と云ふ。偈の中は後の釋を存す。三に能く衆生の愚癡を滅するの慧、圓滿すること、佛果に在るが故に。四に回音普く覺ばしめて、彼勇修を起す。五に十蓮華藏微塵數の相海の故に、具足無盡と云ふ。相海品に説くが如し。好功德とは是れ小相にして、小相功德品の説の如し。六には三世劫の事、佛智の中に在りて照すに、雜亂せざるが故に次第と云ふ。偏に過去に約す。偈の中に具なり。七に福智無涯にして衆生を利益す。又、衆生無邊の福智を長す。下の偈は初の釋に顯す。

【好】形貌の大きなを相といひ、小なるを好といふ。

八に縁起の事身同性にして普く遍す。無礙とは、一には、眞身を礙へず、二には、身は眞身を礙へず、三には、遍は隱を礙へず。謂はく、機の感ぜざる處は、遍すと雖も隠る。四には、滿は分を礙へず。謂はく、機に應じて長短を現すれども、而も虚空に滿することを礙へず。五には、坐は行を礙へず等なり。六には、一は多を礙へず。謂はく、諸方に多を現すれども、而も恆に即ち一なり。七には理は事を礙へず。謂はく、空界とは、界は猶し性のごとし。性に即する空理なり。跏坐は是れ事なり、縁起融通するが故に無礙なり。餘の諸根等は之に準ぜよ。九には業行縁起。巧に機の爲に現するを方便と名く。無盡は是れ機の所縁の故に、復境と云ふ。十に一切衆生の善惡因果は、同じく法界に在りて來去無きが故に、等觀と云ふ。

【頌の中云云】以下、偈頌を釋す。

頌の中の十は各一を頌す。初の中に、化に三義有り。一には化の起る所依、二には化の無體を顯し、三には化の現するは似有なり。初の半偈は初の義を頌す。謂はく、上の句は一切法を頌す、即ち所依なり。下の句は分別化を頌す、即ち所起なり。次の句は無體を顯し、下の句は現有を頌す。謂はく、佛と衆生と互に縁起と爲る故なり。二の中の初の半は、觀一切有及び我を頌す。謂はく、俱に所有無し。後の半は眞實を顯し、及び人を結す。三の中の初の半は、離礙を顯し、後の半は慧滿を顯し、及び初名す。力は是れ天の名なり。四の初の半は佛音を頌す。下の半は發起喜勇を顯し、及び結す。五の初の半は、佛の相好を顯し、後の半は無盡を顯し、及び結す。六に初の半は過去無量劫等を顯し、後の半は智

【云】八に免率天の八を釋す。

憶念を頌す。七に初の半は、種種功德智慧の體を頌し、後の半は正しく福智を頌し、及び結す。餘は略して頌せず。結の中の淨知見は、既に是れ淨光勝天なり、何が故に如來と名くとならば、此天等は即ち是れ、佛なるを以ての故に、上に辨ずるが如し。八に空界坐無礙を頌する中に、前の長行には果用を明す、此中には彼因行を頌す。謂はく、初の句は時多、次は徳滿す、次は勇修、下は結名なり。九の初の半は、方便の境を頌し、後の半は無盡力を頌し、及び結す。謂はく、能く法を現するの力、周普するが故に無盡と云ふ。十の初の半は、衆生業行の苦樂を頌し、次の句は等觀を頌す。下の句は結す。照は是れ華光なり。又亦此は第九門を頌し、前は第十を頌すべし。之を思ひて見つべし。

第八に免率天衆に八行り。初は機の爲に世に現するを、名けて成就と爲す。欲に隨ひて法を説くを、轉法輪と名く。二は、慧光は眞空を照す。又空は體なり、淨は徳なり、光は用なり。三は無礙の願海は、物と同體なるが故に、入と云ふ。自性離相の故に寂靜と云ふ。四は遮に約せば、十相俱に無なるを、無量の無相と名く。表に約せば、恆沙の性徳を、無量の無相と名く。諸の衆生をして觀察修行し、惑業障を滅せしむるを、名けて觀行と爲す。五は、佛境に二行り。一には分齊、二には所證なり。超躋に二行り。一には凡小に過ぐ。二には思議を越ゆ。覺力に二行り。一には理を證し、二には機を照す。六は佛の功德を以て、衆生に重習するを、喜修習と名く。發心し不退ならしむるが故に、不壞菩提心と云ふ。七は量智、機を調す。八の中に、初は無盡の緣起、次は速に眞性に歸

【頌の中は云云】
以下、偈頌を釋す

【無邊の心海】
無量の衆生をいふ。

【二七】
九に夜摩天の十を釋す。

す。亦是れ法を廻して機に擬し、正しく現す。又、無邊の心海は機許なり、念念廻向は無間の欲樂なり。隨器普現は、佛、能く應現するなり。

頌の中は後の釋に順す。頌の中は少しく次に非ず。初の中の初句は、法輪の體、次の句は所爲、次の句は正轉、下の句は勝を結す。又、初の半は成覺を頌し、後の半は轉法輪を頌す。二は超えて第三の法門を頌し、初の半は廣願海を頌す。後の半は入衆生寂靜を頌す。諸法方便是れなり。勝は是れ天の名なり。三は却りて第二の法門を頌す、初の半は虛空界を頌し、後の半は淨光を頌す。四の中の、初の半は觀の所爲なり。次の句は無量無相を頌す、即ち觀の境なり。下の句は觀行の成ずるを頌す。五は超えて第七の諸佛、衆生を調伏する方便の法門を頌す。六は却りて第五の法門を頌す。初の半は佛境超躡を頌し、後の半は覺力を頌す。又轉す、亦前は五を頌し、此は七を頌すべし。文の如く知んぬべし。七の中は却りて第六の法門を頌す。初の半は喜修集を頌し、次の句は善長心を頌し、下の句は不可壞を頌す。八の中の初の半は、無邊の心海を頌す。謂はく、佛子は是れ、念念なり。廻向に三義有り。一には雲集の義。二には佛に向ひて供を興し、三には佛に向ひて法を聽く。經の、悉く來集するが故に、供養の故に、聽法の故にといふが如し。下の句は器に隨ひて、普く現することを頌す。

第九に夜摩天に十有り。初は衆生をして、世の憂惱を離れ、出世の順體の善に向はしむ。又、法身の斷德を離憂と名く。衆生に淨道を教ふるを、向善根と名く。二は所終の分

【首楞嚴三昧】(Samantaprabhāṅgī) 新譯に首楞伽摩といふ、譯して健相健行、一切事竟といふ、佛所得の三昧にして堅固にて諸魔に壞せられざるをいふ。

【尼拘陀子】(Nyctanthe) 尼拘陀(Nyctanthe)の實。毘摩訶羅、其子微細、柳花子の如し」といふ。

齊、各一に非ざるが故に。三の中に、初は大智、過を離るれば、生死に住せず。次は大悲、生を攝すれば、涅槃に住せず。又大悲を具するに由りて生を救ひ、苦患を離れしむ。頌の中は後の釋に順ず。四は信等の善根を了する、差別無邊なるは、即ち根行の稠林なり。又、一根の中に一切の根有りて、相即入する等、重重無盡なることを知る。又、諸根即ち同じく眞性にして、諸根歴然たることを知る、故に分別と云ふなり。五は陀羅尼門、法界を窮盡するが故に無量と云ふ。諸法を任持して、觸ること水鏡に同じ、故に照明と云ふ。『首楞嚴經』に依るに、娑婆世界の邊畔に、須彌山上の天王有り、持須彌と名く。首楞嚴三昧を得て、遍く百億の須彌の頂上の帝釋宮の中に在りて住す。餘は夫れ見えす。今此には乃ち夜摩衆の中に在り。菩薩自在に處處に現化するを以て、未だ怪しむに足らざるなり。六の中に四義有り。一には造業の縁なり、即ち身等を縁と爲す。二には所造の業なり、即ち善惡不動なり。三には縁起無作なれば、業性即ち眞なり。四には業は即ち眞なりと雖も、而も生果を失はず。經の、境界の故に、業行の故に、眞實の故に、不思議の故にといふが如し。又、佛を緣じて境と爲す。所造の善業決定して虚ならず、故に眞實と云ふ。小善を種うと雖も、定んで能く當に大菩提の果を得べし、故に不思議と云ふ。尼拘陀子等の如し。頌の中は後の釋に順ず。七に、初に一乘三乘等の無盡の法輪を轉す。次は機を扣ちて益を成す、故に調伏と云ふ。又、初は輪の體、次は輪の益なり。計はく、調して法に入らしむるは、過惡を伏除するが故なり。八の中、生界は所見、天眼は能見、普觀は正

【頌の中に云云】
以下、偈頌を釋す。

見たり。謂はく、衆生界を見るに、極廣の故に、即ち眞性の故に。一の中の一切なるが故に、因果教義等を具するが故に、帝網の如くなるが故に、名けて普と爲す。三乘には此眼無し、故に勝と云ふなり。又勝眼は機を觀じて普く法雨を雨す。頌の中は此に順ず。九は普智を以て法を照して現ぜしむ。又、法の寶なるを以て普く群機を現す。十の中に、天衆は是れ機、次は機に應じて化を施し、心惑を除かしむるが故に、心淨と云ふ、此は化の益なり。又、化すと雖も、能所を見ざるを、亦心淨と名け、白に屬す。

頌の中に八偈有り。初の七偈は、各一法門を頌し、後の一偈は二法門を頌す。初の中の、初の半は離憂を頌し、後の半は廻向善根を頌す。二の中の初の半は、正理に約して境界を明し、次の句は大智に約す。下の句は大定に約す。又、初の半は所證、次の句は能證、下は正しく證す。亦是れ天の名を結す。三の中の初の半は、所離の諸患を頌し、次の句は具大慈悲を頌し、下の句は天の名を結す。四の中の初半は、了達無礙を明す。即ち上の分別を頌す。次の句は諸根を頌す。謂はく、行は即ち根行なり。下の句は根を知るの意を明す。化を爲すが故なり。五の中は兼ねて第七轉法門を頌す、同を以ての故に。初の句は無量總持を頌す。次の二句は照明及び轉法輪を頌するなり。下の句は天の名を結す。又「地論」に準ぜば、初の句は體、次の句は因、次の句は果、下は結す。六の中は超えて第八の法門を頌す。中に於て初の半は、妙身の勝眼、次の句は觀じ已りて身を現す。下の句は結なり。光は是れ天の名、勝は是れ眼の名、境は是れ所觀なり。七の中は却りて第六の

【總持】陀羅尼の義理を總持して失はざるに名く。照明とはその智慧の光明を憶持するをいふ

【三八】十に初利天の十を釋す。
 【九世】中の三現在に各各三世あるが故に、隨ひて三現在あるべし。
 【二色】經に、衆生の色と如来の色とあるを指す。
 【又佛現じ」と名生身とは、その本體同じく眞如あるに約していふ。
 【體雨】一本灑雨に依る、正しき歟

法門を頌す。一見如来身は、境界を頌するなり。次の二句は、業行眞實を頌す。一は染因を滅し、一は染縁を離る。下の句は不思議を頌す、淨妙の境を、證得するを以ての故に。八の中は通じて、第九第十の二門を頌す。初の半は普現を頌し、次の句は施作を頌し、下の句は第十の天の名を結す。

第十に初利天に十有り。初の中に三世佛出等とは、是れ九世の中の三現在なるが故に、機に就きて興廢す、依正に通ずるが故に即ち所觀の境なり。下は能觀を辨す、謂はく、上の興廢に於て、妙に勝用に達するを、決定智と名く。理に順じて善く證するを、念喜と名く。又、用は起盡すと雖も、理を照して湛然たり、故に大智念喜と云ふ。二の中に、二色同く如にして、功德は本淨なり。又佛現じて、衆生の色に同ず、故に衆生の色と云ふ。而も衆生の色即ち如なるが故に、亦如来の色と名く、體より用を起すを、功德力と名く。初の句を結するなり。用は體に異らざるを、名けて清淨と爲す、後の句を結するなり。三に平等とは、同體の故に、智導くが故に、怨親を簡ばざるが故に。云とは空を覆ふが故に、潤益の故に、法水を含むが故に、體雨は機を活すが故に。四に念佛光等は、塵算に過ぐるが故に、名けて衆と爲す。一一に皆備に法界の功德を攝す、故に具足と名く。別別の作用、皆法界に遍じて、互に相妨げざるを、名けて普勢と爲す。五は業果の差別を了す。又彼即ち如に達するが故に、觀等と云ふ。又、佛淨業を以て縁と爲し、機をして佛を見しむるを報と爲す。又、衆生は佛種に依りて、善根を得るを業と爲し、佛を縁じて、見ることを

得るを、根と爲す。六は佛土具淨とは、淨寶もて莊嚴せらるるが故に、受用して惑を滅するが故に、淨者の所居の故に、即ち本性淨なるが故に。七は世間の縁起を生と名け、無作にして即ち眞なるを滅と名く。一無きに由るが故に。生は即ち滅、滅は即ち生なるが故に。經に云はく、「初生に即ち滅有らば愚者の爲には説かず。一切の法は不生なり、我説く刹那の義」等と。佛智此を照すを觀と名く。八は縁起の毛孔、衆の行法を現するを、諸行を起すと名く、菩薩をして修せしむるを、化衆生の因と名く。是れ因人の修なるを以ての故に、修成じて理に入るを、名けて起念と爲す。九は樂に四有り。一には欲界の散樂、二には定地の樂、三には小涅槃の樂、四には大涅槃、大菩提、大悲等の樂、一乘三乘等の樂は、皆佛に由りて、成ずることを得、今は初に據るが故に天樂と云ふ。是れ欲天なるを以ての故に、理實には通ず。又、佛を名けて第一義淨天と爲す、是れ彼樂なり。十は諸の天子を化するに、一念に佛を念すれば、近くは惡趣を離れ、遠くは癡惑を滅す、故に流通善根と名く。

【頌の中に云云】
 偈頌を釋す。
 【衆生色如來色】
 衆生の身、如來の身をいふ。

頌の中に、初の内、初の半は三世の佛の出興、並に大智を頌し、次の句は住滅を頌す。謂はく、佛の國土身に約し、下の句は念喜を頌す、二の中の初の半は、衆生色、如來色を頌し、下の半は功德力清淨を頌し、並に人の法を得るを結す。又、初の句は清淨を顯し、次の句は二色を顯す。謂はく、所應は是れ衆生の色なり。次の句は功德力を顯す。三の中の初の句は、大慈を頌し、次の句は平等を頌し、次の句は蔭覆を頌し、下の句は人の法を

【智正覺】 釋迦能
化の智身。
【器世間】 國土を
いふ。

【佛子】 佛になる
べき種子の意。

【元】 十一に日天
子の十を釋す。

【薩婆若海】 (サハ
婆) 譯して一切
智といふ。廣きを
以て海に喩へたり

見るを結す。四の中、初の半は念佛普勢を頌し、下の半は衆光色具足を頌し、並に結す。五の中の初の句は、總じて業報を頌し、次の句は觀を頌し、下半は別して善の業報、並に觀を頌す。六の中の初の半は、諸佛國土を頌す。智正覺即ち器世間なるを以ての故に。下の半は具淨を頌す。謂はく、受用淨なるが故に。及び結す。念は是れ天の名なるを以ての故に。七の中の初の句は、觀を頌し、次の句は世間を頌し、下の二句は生滅を頌す。謂はく、機に應ずるは是れ、生滅の義なり。又、智生じて惑を滅せしむるが故に。妙音は是れ天の名なり。八の中の初の句は、起諸行を頌す。次の句は化衆生を頌す。佛子は猶し因のごとし。下の半は起念を頌し、及び天の名を結す。九の中の二句は、一切の天の娛樂を頌し、次の二句は樂の所因を頌し、下の句は人の、法を得るを結す。十の中の初の半は、天處の教化を頌し、下の半は流通善根を頌す。慧日は是れ天の名なり。

第十一に日天子に十有り。初は慧日光を舒べて、衆生海を照し、性三際を窮む。未來は知り難きを以ての故に偏に擧ぐるのみ。本緣起に稱ひて、安固にして徳を攝するが故に、正住、莊嚴と云ふ。又、佛の慧光は機を照して、衆生をして盡未來際正しく住し、修行莊嚴せしむる故なり。二に照色は即ち同じく薩婆若海なり、又智海を以て諸色を照現す。又、衆生の色を照して其心を知る。又、心孔の中に水色を照見し、亦心念を知りて、其をして開悟し、大智を發生せしむるが故に云ふなり。頌の中は此に隨ず。三に佛は増上緣と爲り、衆生の劣を捨て勝に従ふ、離染の功德を發起するが故に轉勝と云ふ。又、佛身世に

【五藏】 佛性論二九丁に説く、今は第五の自性清淨藏を指す。

【五乘】 華嚴別論の五乘、即ち小乘（愚法の二乗）、不思議法の二乗、菩薩乘、一乘をいふ。【頌に十一云云】 以下、偈頌を釋す

出づるを、起衆生と名く、佛は是れ、大身の衆生なるを以ての故に、蓋法して生を益するを、轉勝淨徳と名く、四に苦行は是れ因にして、慶に二義有り。一には是れ到の義、此因門の苦行、際に到るが故に。二には是れ過の義、因を超えて果を得るが故に。五に無礙は是れ智體なり、普照は是れ智用なり。又一法を照すに、即ち一切を現す、故に無礙と云ふ。無礙にして即ち照すと、普照と名く、又、無盡の辯才を無礙と名く、滅法開備するを普照と名く。頌の中は此に順す。六に佛光は體を照して、道意を發さしむるが故に云ふなり。七に佛光の照すに由りて、衆生をして菩提を増長せしむるを、積集等と名く。又、佛多劫に、徳を積むに由るが故に、光世間に超ゆることを得、是故に能く照す。八に性海の具徳、貴ぶべきを寶と名く。機に應じて、依正の教義を印現するが故に云ふなり。九に巧に癡膜を除くを、開淨眼と名け、眞理を見しむるを、觀法界藏と名く。法界藏とは、佛性論一に、五藏等と云へるが如し。云云。十には、多根の感ずる所の五乘、終竟に一揆に歸し、諸乘皆淨なるを以ての故に、淨乘と名く。又亦一を分ちて五と爲す。更に餘雜無きが故に、亦淨なり。

頌に十一有り。初の内の初句に、盡未來際を頌し、次の句は照十方衆生を頌す。衆生世間は即ち器なるが故に、二文互に擧ぐ。次の句は正住を頌す。機縁契入するを以ての故に。下の句は莊嚴を頌す。二の中の初の半は、照諸色を頌し、下の半は無上智海を頌す。三の中初の半は、起衆生を頌し、下の半は轉勝清淨功德を頌す。又亦所起の衆生なるべ

し。此中には、略して頌すること無し。四の中の初の半は、苦行を頌す。謂はく、難行の故に。是難行に四種有り。一には時難、經の無數劫の如きの故に。二には處難、經の諸有の中の如きの故に。三には所行難、經の難行苦行の如きの故に。四には所向難、經の、衆生の爲の如きの故に。下の半は樂度を頌す。謂はく、果なり。五の中の初の句は、無障礙を頌し、餘の三は普照を頌す。六の中の初の半は、淨日光照を頌し、下の半は所照の衆生身、並に益相を頌す。七の中の初の句は、所照の世間を頌し、下は並に能照の光、及び積集の功德を頌す。八の中の初の句は、衆寶海を頌し、下は並に種種の色境界を現するを頌す。謂はく、性海、機を印して、法爾として依正の教義を顯現す、故に法如是と云ふ。九の中の初の半は、一切趣淨眼を開くを頌し、下の半は法界藏を觀するを頌す。十に二偈有り。初の偈は諸衆生乘を頌す。謂はく、五乗の方便なり。下の偈は淨を頌す。謂はく、末を會して本に歸する等なり。又、初は同教、後は別教にして、無二の故に淨なり。

(三) 第十二に、月天子に十有り。初の中、先に加行を以て、其心を調伏す。次は正證せしむるを照法界と名く。又、普照に三種有り。一には、光衆生を照して佛を見しむるが故に。二には癡惑を照除す。此二を調衆生と名く。三には、法界を照現して、眞理に入らしむ。二の中に、普觀は是れ能觀の智なり。一切等は是れ所觀の境なり。攝とは此普觀を以て、會して諸法を攝す。同じく彼普門は、皆是れ普智の境界ならざるは無し。三の中、心及び境界、或は心は轉じ境は轉ぜざる有り、十の一切入等の如し。或は境は轉じ、心は

【猗等の諸樂】猗樂、逸樂、歡樂等をいふ。

【又二諦有り】諸法に約していふ。

【情有理無】我法の二は、迷情の見到於てのみ有、實に理に於ては絶無なるをいふ。

轉ぜず云云。或は俱なり云々。又、心へ微多なるを海と云ふ、是れ佛地心智の所縁なり、故に境界と云ふ。根に備ひて法を授け、妄を捨て眞を喜ばしむるを、轉と名く、頤の中は此に順ず。四に無分別智の、正しく眞理に趣くを、名けて愛樂と爲す。此愛、情を超ゆれば、不思議と名く。又、正智の愛、彼不思議の境を證するが故に名く。此智、佛の淨法に因りて生ず、故に能生と云ふなり。又、世間の猗等の諸樂は、皆佛に因りて生ずれば、悉く不思議と名く。五に仰樂生をして、二諦の道理を見しむるが故に、實見と云ふ。又、見即實なるが故に、又、見の實なるが故に。又二諦三性及び三無性に、皆實の義有り。一一に之を辨すべし。六の中に太慈悲とは、佛性論に云はく、「已得の苦に於て、救ひて脱れしむるが故に、將に苦を得んとするに、護りて免れしむるが故に」と。苦は五識に在り、憍は意地に在り、俱に救ふが故に。又、苦を救ひ、樂を護りて失はしめざるが故に。各因果に通ず。七に法喻雙べ擧ぐ。月に四の奇特有り、下の如く準じて辨すべし。八の中、三性をもつて諸法を觀ず。先は依他は幻化の如しと觀ず。化は物に託せざるが故に幻に異なるなり。依他の中には、有力、無力の二義を具するを以ての故に。又、無體は幻の如く、有用は化の若し。眞如には空不空の二義有り。今は且らく一を擧ぐ、故に空と云ふなり。遍計には亦二義あり。謂はく、情有理無、今は理に約して顯すが故に、無と云ふなり。九の中は所起に二義有り。一には、善惡の業に由りて、熏じて本識を起す。二には、果報を生起す。緣に従ふを以ての故に、即ち不起なり。然も妙に此際に達するが故に善解と云ふ。又、

【頌の中に云云】
偈頌を釋す。

有る經本に、趣に作ることは、謂はく、因は果に趣くが故に。及び邪を離れ正に趣くが故に。十は理を照し疑を斷じ、惑染を超度す。

頌の中に八偈有り。初の偈は、初の法門を頌す。中に於て初の三句は、調伏衆生を頌し、後の一句は所照の法界を頌す。二の中の初の半は、普觀攝を頌し、次の句は一切諸法を頌し、下の句は境界を頌す。謂はく、所化を以て境となすなり。三の中の初の半は、衆生心海境界を頌し、後の半は皆悉令轉を頌す。四の中の初の半は、所爲を頌し、後の半は正しく能く、不思議の愛樂を生ずるを明す。五の中の初の句は、令衆生を頌し、次の二句は實を頌し、下の句は見を頌す。亦是れ人の法を得るを結す、實の中の初に、分別とは推求なり。謂はく、世間を推求するに、即ち無性の故に眞を見るなり。次の句は業果亡びずして、俗を見るなり。六の中は、超えて後の二の法門を頌す。中に於て初の半は、前の第九の法門を頌す、知んぬべし。後の半は、前の第七の法門を頌す。上の句は無癡を頌し、下の句は淨月を頌す。謂はく、巧慧は清凉なるが故に。七に却りて第六の法門を頌す、知んぬべし。八の中の初の句は、第八の法門を頌し、後の三句は第十を頌す。謂はく、初の二句は照度を頌し、下の句は滅疑を頌す。疑濁を離るるを以ての故に、清淨見と云ふなり。

【提頭賴吒】四天
王の一。須彌の半
第四層の東に居す

第十三に東方の天王衆に十有り。梵には提頭賴吒と名く、此には持國主と云ふ。所頌に従ひて名と爲す。此天の身の長け半由旬、衣は一由旬、廣さは半由旬、衣の重さは二分、

【乾闥婆】樂人の名。

【鬼眷屬】(Ghacchar)鬼の名。

【九結】一、愛結(貪愛)二、恚結(瞋恚)三、慢結(憍慢)四、癡結(無明)五、疑結(三寶を疑ふ)六、見結(身、邊、邪)七、取結(身、戒禁取見)八、悭結(身、財を悭む)九、嫉結

【十使】五鈍使(貪、瞋、癡、慢、疑)五利使(身、邊、邪、見、取、戒禁取)。

食は甘露なり。人間の五十年を以て一日夜と爲し、亦三十日を以て一月と爲し、十二月を一歳と爲す。是の如きの壽命五百歳なり。此王は二部の鬼を領す。一をば乾闥婆と名け、二は毘舍闍と名く。乾闥婆は、此には尋香と云ふ。謂はく、諸の樂兒、他家の飲食の香を尋ねて、即便ち彼に往く。他の爲に樂を作して彼食を得、故に以て名と爲す。亦是食香と名く、唯細香を食して、十寶山の中に居す。常に諸天の爲に樂を作す。時に身に異相有れば、即ち飛んで天に上る。法門の中の初は、法音の樂を以て、巧に衆生を攝す。又、正道の法樂を見て、自ら娛ましむ。二は福智綺續す。又、十種の莊嚴を具す。明法品に説くが如し。三の中は凡に約すれば、順流喜を生じ、乖失、憂を生ず。一乗は滅に於て喜を生じ、流に於て憂を生ず。今は俱に離れしむ、思準せよ。四に甚深の法を説きて、九結十使等の垢を滅除す。五の中に二有り。謂はく、生天を希ふ者には、爲に淨土を説き、其希望を調す、二乘を希ふ者には、一切智を以て其希望を調す。六に佛を見て無盡の樂を得るに由るが故に、一切樂と云ふ。此修因に依りて、能く果を攝するが故に藏と名く。果の因に稱ひて起るを正住と名く、用は情に返ること有るが故に喜光と云ふ。七に十方界に於て、普く淨法を灑ぐ。八に圓廻の身、無盡に普應するが故に名く。廣智とは、横に十諦に緝り、堅に五乘を該ぬる故なり。九の中に、樹は菩提樹なり。佛は方便を以て、衆生の菩提心を増長するを、長養樹と名け、果を得るを喜と名け、勝用を光と名く。十に劫海を廻動するは、是れ佛境の所作の故に、行と云ふ。衆生をして、此を見て苦を息め、永く安んじて、爲に

【頌に十偈云云】
以下、偈頌を釋す。

【二】十四に南方
天王の十を釋す。
經の「復畏憚制」等
の文これなり。

樂を受けしむ。又亦有る本に、愛樂に作る。謂はく、此を觀て、正希望を起さしむるが故に名く。

頌に十偈有り。各一法門を頌す。初の中に、初の三句は方便を頌す。謂はく、初の句は多、次に深、後の句は廣なり。下の句は、衆生を攝して娛樂するを頌す。二の中に、初の句は、佛の功德海莊嚴の體を顯し、次の句は、徳相を明し、後の二句は徳用を辨す。三の中の初の句は、衆生の憂喜を頌し、次の句は離の字を頌し、下の二句は離の所由を明す。四の中に、初の半は能滅の縁を明し、次の句は、正しく結使を、滅するを頌し、下の句は滅惑の因を明す。五の中に、初の半は、淨土を以て調伏し、後の半は種智を以て調す。六の中に、初の半は一切樂を頌し、下の半は、喜光正住を頌す。七の中に、初の半は、所被の機を明す、即ち寶を雨す處なり。一切方を頌するなり。下の半は所雨の寶を明す、幢は是れ天王の名なり。八の中に、初の半は現妙身を頌す。下の半は、廣智を頌す。九の中に初の三句は、長養諸樹を頌し、下の句は喜光を頌す。十の中に、初の半は、佛境界の行を頌し、下の半は、悉く衆生をして、樂を受けしむるを頌す。

第十四は、南方の天王なり、所頌に從ひて名と爲す、餘は上に辨するが如し。十有り。初は忍力を以て慢惑の諍を除く、二に自他の行海を、一切行と名く、慈門此を起すが故に現前と云ふ。又、行能く果を得れば、亦現前と名く。三に邪執の五趣は、自性等より生ず。今専ら諸趣は、自心發起することを明すが故に正と云ふなり。又、諸の衆生を調して、

【平等とは：願す】三義あり、初は無記の一性に約し、次は善惡融通するに約し、後は善惡の當體に約す。

【娑羅：處なり】娑羅林をいふ、これ釋迦涅槃の所。

【頌の中に云云】以下、偈頌を釋す

其意趣を正すが故に名くるなり。頌の中は此に顯す。四に善惡平等なり、平等とは是れ無記なり。此三性即ち如なるを以ての故に、清淨と云ふ。又、善は是れ涅槃の淨法にして、惡は是れ生死の染法なり。二俱に無性にして、融攝無礙なるに由るが故に、平等と云ふ。然も性徳を具するが故に、清淨と云ふ。又、善惡の二法、並に法輪と作すに堪ふるに由るが故に、平等と云ひ、法輪は物を利するが故に、清淨と云ふ、頌の中は此に顯す。五に、礙を除きて正を見るを、無畏と名け、永く苦を離れしむるを、安穩と名け、佛の淨智を得るを、莊嚴と名く。六に、愛は生死を潤して、深廣なること海の如く、愛心猛盛なること、火の熾然たるが如く、天祠等を燒くが如し。佛は身智を以て、照して永く盡さしむるが故に、除滅と云ふ。娑羅は是れ涅槃にして、愛を滅する處なり。七に、佛身は普く一切の諸趣に應ず。身に依りて、電光を出すを、照明と名け、音雷、法を雨らすを、雲と名くるなり。八に普とは、光體遍周し、照とは光用、惑を除く。九に拔苦與樂を、通じて大慈と名け、逢逢不改なるを、不退轉と名く。慈門は徳を攝すること多きが故に、藏と名け、積助此を修して、現ぜしむるを起と名く。十に身を現すること、十方に遍するを赴と名け、一切趣に在りて、而も來去無きを、所作と名く。又、彼に於て生を攝するを、亦所作と名く。

頌の中に十偈有り。各一法門を顯す、初の中に、初の三句は、能滅闘諍を顯し、下の句は益相を明す。二に初の半は、一切行を顯し、上の句は自行、下の句は利他なり。後の

【三】十五に西方
天王を釋す。

半は現前を頌し、上の句は、慈能く行を現じ、下の句は、行能く果を現す。三には其意趣を正すが故に歡喜せしむ、四に初の半は、善惡の法を頌す。謂はく、佛力、惡を現するが故に思議し難し。次の句は平等を頌し、下の句は清淨を頌す。五の中の初の半は、衆生無畏を頌し、次の句は安穩を頌し、下の句は莊嚴を頌す。謂はく、淨智なり。六に初の句は、愛海を頌し、次の句は除滅を頌し、下の半は益相を辨す。寶樹は是れ、天の名なり。七に初の句は、一切の趣に應ず。次の句は方便して、物を化するを、照明と名く、次の句は雲を頌し、下は人の法を得するを結す。八に初の句は普を頌し、次の句は照を頌し、下の半は所顯現を頌す。九に初の句は、起大慈を頌す。前は慈、此は悲なり。文綺互するのみ。次の二句は不退轉を頌す、興樂滅苦の事、虛からざるが故に、不退と名く。下の句は藏を頌す。謂はく、淨德を出生することは、華の開敷せるが如し。十に初の半は、起一切趣を頌す。無去來は亦是れ所作、次の句も亦是れ所作にして、下の句は結なり。無量門は是れ、天王即ち是れ、佛海に入るが故に、佛能見と名くるなり。

第十五に西方毘樓波叉、此には雜語主と云ひ、新には醜目と名け、二部を頌す。一は富多那、此には熱病鬼と云ふ、一は一切龍なり。『須彌藏經』に依るに、龍の報に五種の形有り。一には善住龍王なり。一切の象形の、龍の主と爲る。二には難陀龍王なり。此には歡喜と云ふ、一切の蛇形龍の主と爲る。三には阿那婆達多龍王なり。此には無熱惱と云ひ、亦是清涼と名く、一切の馬形の龍の主と爲る。『誘佛經』に依るに、此龍王は、諸龍の三

【阿耨多羅三藐三菩提】鳥の名
龍を以て食となす
といふ。

【金翅】 龍身龍鳥
のこと。

秤の、過患を遠離す。一には熱沙其頭に墮せず。二には蛇形を以て欲を行せず。三には伽
 樓羅の長無し。又、閻浮提の龍に、皆四苦有ることを擧ぐ。謂はく、三種は上の如し。更
 に風寶衣を吹きて、身を露し、苦を生ずることを加ふ。唯、此龍王は、獨り斯憍を免る、
 故に清凉と曰ふ。智論一に依れば、此龍王は、是れ七住の菩薩なり。四には婆樓那龍王
 なり。此には水と云ふ、一切の魚形の龍の主と爲る。五には摩那蘇婆帝龍王なり。亦是摩
 那斯と名く。此には慈心と云ひ、亦是得意と名く。正しくと摩那と云ひ、意と云ひ、斯を高
 と云ふ。謂はく、威徳有りて意諸龍よりも高し。一切の蝦蟇形の龍の主爲り、又、律の中
 に説くが如き、諸龍は初生及び死する時と、睡眠と行欲と、此四時に形を變ずること龍は
 ず、餘時には皆能く變ずと。十の中に、初の内に二種有り。一には相に約す。熾然を滅す
 るは、龍の熱沙の苦を救ふなり。恐怖を濟ふは、金翅の苦を救ふなり。二には實に約す。
 惡の熾然を滅するは、惡趣の因を救ふなり。下の句は惡趣の果を濟ふなり。二の中に四の
 釋有り。一には、能く龍身を轉じて、機に應ずるの色を現す、及び佛の淨徳を不思議と名
 く。二には能く一念に於て、上の事を成ずるが故に亦不思議と名く。三には、一毛孔に現す
 るを、亦不思議と名く。四には、龍身即ち佛身なり。是故に、佛の毛孔に現するを、即ち龍
 身を轉ずと名く、亦是れ不思議なり。三に聲深法を演ぶれば、諸趣齊く聞く。四の中は、一
 には衆生の徳海を、佛の毛孔に示し、二には衆生を攝して、大功徳漸に入る。五に徳又働
 なり。此には多舌と云ふ。舌多く有るが故に。或は語を嗜むに由るが故に、多舌と名く。

又能損害者と名くと云ふ。謂はく、此龍王、若し瞋を起す時、世間の人に於て、目に視れば氣
獻きして皆命を捨てしむるが故に以て名と爲す。佛智の淨光は、恐怖の苦を救ふなり。
六に佛身に於て、十方の佛像を現じ、雨を含んで機を潤すを、無量雲と名け、多劫に土を
嚴るを、超度等と名く。七に毛孔に土を現するを、安立等と名け、中に於て説法するを、
分別等と名く。八に法、物の機に稱ふが故に歡喜せしむ。離染に由るが故に。足ることを
知るが故に。巧に證するが故なり。九の中は、一には性の滿に等く觀するに約す。二には
機の爲に齊等なるに約す。十に衆生を願の蓋、癡の覆と爲す、悲を以て度脫するを、離苦
と名く。又、此龍王は、鱗甲の中に於て、諸水を流出し、日夜竭きず、閻浮の衆生を濟潤
するが故に、悲と名く。

頌の中は次に非ず。初の二は、前の初二の法門を頌す、知るべし。三の中は、初の半は
淨法輪を頌し、後は聞聲を頌す。四に超えて第十の法を頌す、知るべし。五六は二法を頌
す、知るべし。七の中は、初の半は現雲を頌し、下の半は住壽等を頌す。八の中は、初の
半は安立界を頌し、下の半は分別等を頌す。九の中は、初の半は往因を擧げ、下の半は普
惡の音聲を頌す。皆度生の爲の故に、平等と名く。十に前の第八の法門を頌す、知るべし。
第十六に、北方の多聞主は、二部を頌す。一は夜叉、此には輕捷鬼と名く。二は羅刹、
此には可畏鬼と名く。羅刹女の、人の精氣を奪ふが如し。衆生の心孔の中に、七滴の甘水
有り。一滴を取れば、人をして頭痛せしめ、二滴は人をして、心悶せしめ、四滴已上は、

【十六】十六に北方
天王を禱す。

【等觀】 平等觀のこと、如理智を以て一切諸法を平等に觀すること。

【福智】 福徳、智慧の二善業をいふ。初發心時より六度の行を修して所有の福徳を具し法身佛となること、一は正智見を修習して無明を斷盡し、法身を顯現するをいふ。

人をして死せしむ。此八部の中には、唯緊要羅は龍なり。毘舍闍は是れ畜生にして、餘の五は皆鬼なり。夜叉羅刹の力大なるを以ての故に、獨り鬼の名を興ふ。是故に上の文に、此を名けて、鬼王と爲すなり。此に八王有り。一は等觀は理智なり、方便は量智なり。此は是れ能救なり。下は救の事を成す、初は惡を離れ、次は善を益す。二の中は、一には普く衆に應じて、勝身を現す。二には普く生を濟ひて、勝益を成す。三の中は、精氣に二有り。一には惡氣なり。謂はく、煩惱業苦なり。此中は是れ法門の夜叉なるを以ての故に、能く彼を除くなり。二には善氣なり。大集經の説に依るに、國內の帝王、三寶を敬奉すれば、此國中をして、三種の精氣を増せしむ。一には地氣、謂はく、五穀熟成する等なり。二には人氣、謂はく、煩惱輕薄にして、顏貌悅澤する等なり。三には善根氣、謂はく、常に法輪を轉じ、三寶熾盛なる等なり。此文の中は、菩提分の善根を生ずるに據りて、生氣と名くるなり。四に、智は佛徳を觀じ、言は數じて法を顯す。五に理智をもつて、衆生を觀す、即ち佛の法身なり。量智をもつて、十方衆生の業果を、照すが故に名く。六の中に、興樂に二有り。初には則ち刑を斥け、正を示す樂なり。終には則ち化に堪へ、調せしむる樂なり。七の中には、一には、自體を任持する力用、生を救ふ。二には、持用の智力、生を救ふなり。三には謂はく、佛の福智、是れ『地持論』の三持の中の、畢竟持なり。然るに此福智は、衆生に超過す、是故に力有りて、能く彼を救ふなり。衆の中は此に賴す。八に多劫の修因、因能く果に順するが故に、佛に十力を具すと云ふ。

【頌の中は云云】
以下、偈頌を釋す

頌の中は次第に各一法を頌す、初二は知るべし。三の中、初の半は、精氣を奪ふことを頌し、後の半は、善氣を生ずるを頌す。四の中、初の半は、往昔、諸聖の徳を觀數することを明し、後の半は、今己が徳を成じて、他をして觀數せしむることを明す。五の中、初は理智、後は量智なり。六の中に二樂、知るべし。七の中、初は力有りて、救ふに由るが故に、福をして勝れしむ。後は慧深し。八の中、初の半は起隨順を明し、後の半は佛力を明すなり。

【三四】十七に力士衆を釋す。經に「復金剛眼」等といふ下なり。

第十七に力士衆に十有り。一に佛の色身を示して世に出づ。二に一一の毛孔に、重ねて光色を現す。三の中、法身無涯なるを、離垢と名け、起用に普く應ずるを、自在等と名く。四の中、淨首に四義有り。謂はく、深の故に、廣の故に、妙の故に、益する故に、皆不可量なり。下の頌の中の四句は、次の如く應に知るべし。五の中に二有り。初には、中に處して身を現じ、後には衆中にして說法す。皆多門有り、故に種種と云ふ。下の頌の中は、各二句を以て、次の如く應に知るべし。六の中に二あり。一には、相を攝して、眞に歸するが故に眞に入らざるの餘相無し。二には、眞より用を起すが故に眞に入らざるの餘用無し、故に名くるなり。頌の中は次の如く、各二句顯れたり、知んぬべし。七の中は、情を移して、法に住せしむるを、學と名く。實は一切に通ずれども、淨に就きて天と名く。八の中、初は功徳の體なり、此れ因果を具す。頌の中、初の二句は因、次の一句は果、廣照は是れ用なり。頌の中には、後の一句顯れたり。九の中は、佛の身土を現じて、機をし

【三五】十八に普賢衆を釋す。

て愚を滅し、善に住せしむ。頌の中、初は土を現じ、後は身を現す。十に光雲は世に遍くして、法寶の雨を灑ぐが故に名く。頌の中、十偈は各一法を頌す。前の如く應に知んぬべし。

(三五) 第十八に普賢衆の中に、何が故に前の中には、人人各一法を得、此中には一人多法を具するや。前は是れ總中の別なるを以ての故に、異生なるが故に。此は是れ、別中の總なるが故に、同生なるが故に。又、何が故に前は多人を列ね、此は唯一なるや。此人は是れ形道位に居し、徳、普門を標するを以て、一即一切、一切即一なることを彰す、普は別を收むるを以ての故なり。

文の中に二有り。謂はく、直説と重頌となり。前の中に二有り、初は總、後は別なり。

【三輪】身、口、意。
【知に三義】初は念劫の當體に約し

總の中に、初は自分、後は勝進なり、別の中に十門あり。一には土を嚴り生を調す。此二相は即ち融じて四句を成す、知んぬべし。二には佛に稱ひて、塵沙に遍するに、佛徳を起す。三の中は五位十願二行なり、知んぬべし。四の中は、一門に一切門有るを、普門と名く。中に於て一身即ち一切身を現するを、法界身と名く。身皆法雨を灑ぐが故に雲と名くるなり。五には、身請利と作るを、土を護持すと名く。中に於て、復三輪を以て、調化するが故に名くるなり。六には、諸佛の國の大會に遍くして、身を現するを、衆中現と名け、此一乘の菩薩の本行を説くを、菩薩境界と名く。七の中に、生滅は是れ極促なり、三世劫は是れ極長なり。一念に是の如く知るは、極めて速なり。此中の知に、三義有り。一に

次は其即入に約するに約す。

【二には性二には用】性體は即ち法身、力用は即ち報化二身。

【二身：相即し】界に約すれば四法界（事、理、理事、無礙）事に約すれば十身（解境、佛具の十身）の如し。次【頌の中云云】に偈頌を釋す。

は、彼長短の際を窮め、二には、彼相即入するを知り、三には、彼平等性に達す。此三無二なるが故なり。八には、菩薩の根欲は是れ能觀、境界海は是れ所觀なり。此二の別を辨するを、分別顯と名く。此中には、或は境を擧げて根を明し、或は根を擧げて境を取り、或は俱に顯すこと、知んぬべし。九の中に、身に二有り。一には性、二には用なり。法界に亦二有り、一には理、二には事なり。次の如く二身二法界に過じ、二界兩身自ら互に相即して、四句無礙なること之を思へ。十の中に、初には廣く因法を明し、後の入一切の下は、其果に契ふことを明す。又、初は一言を以て、一切門を説くを、廣等と名く。後は一一の門の中に、復一切の法を顯すを、入等と名くるなり。頌の中は後の釋に順す。頌の中の二十偈、兩兩次第して、一法門を頌す。因果無二、法體全收するに由るが故に。直説は因を顯し、重頌は果を明す、文を綺へて互にするのみ。初の二偈の中に、初の一是嚴土、後の一是調生なり。二の中の、初の一是諸佛に詣す。謂はく、見は猶し詣のごとし。後の一是功を起す。三の中の初の一是、位に依り行を起し、後の一是願行に依りて入證す。四の中の初の二句は、普門を頌し、次の四句は法界身を頌し、下の二句は實を頌す、法雨を下すを以ての故に、教導等と名くるなり。五の中の初の一是、持佛土を頌す。後の一は方便輪なり。六の中の初の一是、衆中顯現を頌し、後の一是菩薩の境界なり。七の中の二の内、各上半は所知なり、謂はく、長短なり。各下半は能知なり、謂はく、眞に達するなり。八の中の初の一是、菩薩の根欲を頌し、此と長行と文綺へて互にするなり。

【此中に云云】追齊。初に普賢の分齊を釋す。

【汎く大意云云】凡聖の境界を分別す。

【此二に各二法有り】理量不二の故に、理中の理量と量中の理量とあり

【三六】以上外衆終りたるを以て、以下は内衆を説く下なり。

【因果同體】因は菩薩、果は佛にして、同一法性なるを以ていふ。

【依正無礙】依の師子座と正の菩薩とは無礙なるをいふ。

【境智無二】境の一切妙華摩尼法輪

後は境界海を明す。九の中の初の一は體遍、後の一は用充なり。十の中の初の一は、廣く菩薩の法を辨ずることを頌し、後の一は入一切智を明す。又亦是通じて頌すべし。此中に普賢の分齊を釋するには、八門を以て因陀羅網を明す、以て之を知るべし。一には理、二には土、三には身、四には教、五には法、六には行、七には時、八には事にして、事は即ち塵等なり。汎く大意を論ぜば、文に約するに二有り。一には但使習煩惱染業及び報のみ有るは、並に凡境に入り、自より外は聖境に入る。聖の中に二有り。謂はく、理と量となり。此二に各二法有り。因陀羅網の境界は、是れ理中の量、及び量中の一分なるのみ、之を思覃すべし。

大段第二に、海慧等の内衆を明すと、因果同體なるを顯すが故に、依正無礙なるが故に、境智無二なるが故に。緣起の樓觀の、内は因にして外は果なり。内即外なるが故に、菩薩を出すなり。文の中に三有り。初には出處を明し、二には所出の人、三には供養を興す。初の中に一には、座は樓觀の内に在り。此は是れ、如來の別の住處なるが故に。二には樓觀即ち座なり。上に寶臺と云ふが如きは是れなり。二に所出の中に三有り。謂はく、數を標し、名を列ね、數を結ぶなり。三に供養の中に三有り。謂はく、身意口なり。初の一は財、後の二は法なり。前の中に二有り。初には正しく供し、後に隨所の下は靜に歸す。初の中に三大有り。一には供大、二には心大、三には田大なり。前の供大の中に二有り。初には五事有り。謂は

と、出菩薩と無二【縁起の樓觀】經に高臺樓觀といふを指す、これ外用【前の中に二云云】供養を興す中、初に身業供。

【二に意業法供云云】二に意業供。

く、散華、燒香、放光、作樂、雨寶なり、文の如し。此等は皆、並に是れ縁起法門の狀なり。謂ゆる行の華、戒の香、智の光、語音、及び所説の法寶なり。然も亦華等の事相を壞せず。下は供の分量を明す。分量の中に、初は供の多きことを明し、後は供の廣きことを明す。下の皆大喜の下は、心田の二大を明す。田大の中に、先は佛、後は大衆なり、並に知んぬべし。問ふ、何が故に外衆は財供を辨ぜずして此中に説くや。答ふ、外衆は財、供は顯勝に非ざるが故に。内衆は財供奇特を顯すが故に。此に別して顯すなり。下の文に供具を雨らす等は、是れ通じて論ずるが故なり。

二に意業法供の中に二有り。先は法、後は供なり。法の中に二有り。先は所得を明し、後の具足の下は成滿を成す。前の中に二有り。一には境に約して門を標し、下の二句は二利を釋し顯す。二には、智に約して門を標す。下の二句は因果を釋し顯す。後に成滿を結する中に、先は因圓を結す。『涅槃經』に云はく、「愛に二種有り。一には餓鬼の愛、二には法愛なり」と。如來には餓鬼愛無し、衆生を憐愍するが故に法愛有り。此中は妙智巧に眞理を取るが故に、法愛と名く。愛即無相なれば、大力と名く。後は果滿を結す。中に於て、初の句は智徳、後の句は斷徳なり。又、初の句は修成、後の句は入理なり。又、初は無常の徳、後は常の徳なり。又、初は有爲、後は無爲なり。下は正しく供佛を以てす。問ふ、何が故に財供の中には、通じて佛及び衆を供し、此中には唯佛を供するや。答ふ、法供は深細にして唯佛のみ窮むるを顯すが故に。』

【第三に語業云云】
【一偈時に一切海會】
等といふ文。

第三に語業供の中に先は人を標し、後は偈をもつて讚す。一一の嚴具の中より、各海
慧等の衆を出すを以て、今總標して擧ぐら、諸衆の中に、各一りの上首を、俱に海慧と
名け、同じく此偈を説く、故に一切海慧等と云ふなり。頌の中に十九偈有り。義をもつて
分ちて九有り。一に初の一は、體淨を明す。謂はく、境智無礙なり。二には三偈は、相備
ることを明す。謂はく、三世間なるが故に。三に二偈は用勝を明す。謂はく、初は速、後
は益なり。四に二偈は、往因の深固なることを明す。五には、一偈は衆觀じて厭ふこと無
きことを歎す。六には、四偈は嚴座を歎す。一には主、二には香、三には鬘、四には光な
り。七には、二偈は説法を歎す。八には、二偈は處の圓滿を歎す。九には、二偈は佛の普
遍を歎す、結通等の如し。

【七】 第三大段に
發起序を釋す。經
の一偈時に佛の神
力の故に」等の文
を云ふ。 摩竭陀國

第三大段、發起序なり、中に於て二有り。初には地を動じ、二には供を興す。初の動地の
中に三有り。先づ佛力は動の因なり、華藏は動の處なり。六種等は動の相なり。此中は四
句をもつて分別す。一には動處、二には動相、三には所爲、四には動の時を問す。初の中
に、問ふ「何が故に此摩竭を、即ち是れ華藏界と云ふや。答ふ「下の文の中に準するに、
通じて四句有り。一には、或は此界は、唯是れ娑婆と云ふ、此は三乘に約して説く、或は
即ち是れ華藏なりと云ふ、別教一乘に約して辨す。或は華藏の中の娑婆界なりと云ふ、此
は同教一乘に約して説く。或は華藏に非ず、娑婆に非ずと、此は國土海の、平等性に約
して説く。是故に、所説の法に隨ひ、處をして差別せしむ。今、此文は、別教に約して説

【第二に動：如し】
二には動相を釋す

くのみ

第二に動相を明すに二有り。一には六相なり。謂はく、中踊邊沒等、中邊四方を六と爲すなり。此は三乘及び同教に約す。二には十八相なり。別教及び同教に約す。動は是れ掉颯して安からず。風の樹を動するが如し。『涅槃經』に依るに、小動を地動と名け、大動を大地動と名け、小聲有るを地動と名け、大聲有るを大地動と名く。獨り地のみ動するを、地動と名け、山河樹木及び大海一切動するを大地動と名く。又、動を地動と名く、動する時に能く、衆生の心をして動せしむるを、大地動と名く。此等は三乘に約して説く。今此中の動には、三品有り。一には動、謂はく一方なり。二には遍動、謂はく四方なり。三には等遍動、謂はく八方、又は四方、八方、十方なり。又初は獨り一方動じ、二には十方次第に動じ、三には十方同時に動ず。又『大般若』の中には、動、等動、等極動と名く。下の五相皆此に準ぜよ。各下中上有り、亦は小中大と名く、故に十八有るなり。起は是れ搖起にして、颯起の如し。『同性經』の中には、名けて搖と作す。『大般若』の中には擊と名く、謂はく、加打なり。覺は是れ大聲にして驚悟す。『同性』の中には聲と名け、『大般若』には爆と名く。『地論』に釋して上去に名くと。振は是れ下る聲にして、隱隱たり。『地論』には下去に名くと。吼は是れ平聲。哮吼、涌は是れ涌出峰涌、泉の涌く等の如し。又六方踊沒す。謂はく、東踊西沒等と。又動と起と涌の三は是れ色、餘の三は是れ聲なり。此六は皆動と名くることは、初の一は勝るるに就きて、通じて名く。餘の五は別に從へて

【第三に：故なり】
三に動する所以を明す。

【第四：振動す】
四に動する時を明す。

目と爲す。十色處を、同じく色處と名け、初の色處を亦色處と名くるが如し。

第三に動の所爲を問さば、『勝思惟梵天經論』の説に依るに、一には、諸魔に驚怖を生ぜしむるが故に。二には、説法の時、大衆に散心を起らざらしむるが故に。三には放逸の者をして、覺知を生ぜしむるが故に。四には、衆生に法相を念ぜしむるが故に。五には衆生に説法の處を觀ぜしむるが故に。六には、成就する者に、覺悟を得しむるが故に。七には隨順して正義を問はしむるが故に。八には『智論』に云はく、『衆生をして一切法空にして、無常なることを知らしめんと欲するが故に』と。九には古徳の云はく、『其所觀を動するが故に』と。十には、大法を説くことを表さんとして、微細の事を現するが故に。又『地論』に依るに、四種の衆生に依る。一には、不善の衆生に依り、二には、種種の天を信する衆生に依り、三には、我慢の衆生に依り、四には、呪術の衆生に依る等の故なり。

第四に汎く動の時を明す。『智論』の説の如きは、八時有り。『長阿含』の説の如きは、一には大水、動するの時。二には尊神、神力を試みるの時。三には如來入胎の時。四には出胎の時。五には成道の時。六には轉法輪の時。七には教を息むるの時。八には入涅槃の時なり。九には、若し『増一經』の、第二十八の中に依れば、更に大神足を加ふ。比丘の心に自在を得、乃至地の無相を觀するが故に動するなり。十には、若し『智論』の第十に依れば、『諸の菩薩に記を授け、當に作佛することを得、天地人の主と爲るべしと。是時地神大いに喜

【第二：明す】 供養をなす相を明す下。經に「又一切世界」といふ文。

【三八】 第二大段に上來此土の序分を釋し已りて、次に十方に類通する一段の釋なり。經に「此世界中」等以下の文。

ぶ。我今主たるを得たりと、是故に地動す」と。王の初位に臣民慶喜して、萬歳と稱し、歌備する等の如きなり。又「涅槃經」に依るに、菩薩、閻浮提に下生する時を、大地動と名く。菩薩の出家成道、轉法輪、般涅槃には、是れ大地六種に振動するを以てなり。何を以ての故に。菩薩下生すれば、欲色の諸天、及び諸の菩薩等、悉く來りて傳送し、大音聲を發して、菩薩を讚歎す。口の風氣吹くを以ての故に、大地をして振動せしむ。又菩薩は、是れ人中の象王、龍王なり。龍王初て入胎の時、諸の龍王有り。地下に在りて或は怖れ或は怯づ、是故に大地六種に振動す。

【第二に興供の文の中に二有り。初には此土、後には結通なり。前の中の世界の諸王に、二義有り。一には是れ、前に列する所の王衆なり。二には是れ、餘の十方世界中の王なり、是二に通ず。中に於て、初には總、次には別、三には結なり、知んぬべし。上來は唯一世界の三世間、自在の相の意を明す。

【第二大段は十方に類通することを明す。一會即一切會なるを以て、教の圓滿を顯し、主件を攝するが故に。中に於て二有り。初には此土の三世間の相を顯し、後には正しく結通す。前の中に佛生道場とは、智正覺及び器を牒す。此二の果徳、十方に融遍するは、義相顯るるが故に別釋せず。衆生世間の、果に普遍するに同じ、義相顯るるが故に、是故に別釋す。何が故に此衆は、能く佛果に同じて普く遍するや。釋の中に二有り。初には、其所因を辨じ、後には正しく果に同じて通す。前の中に三あり。初には定慧力の故に、二には

法門力の故に、三には如來力の故に。初の中に各己が得る法門の分齊に隨ふが故に、境界と名く。三昧門に依り定に味せざるが故に。用を廢せざるが故に。巧に法門を攝して、普遍せしむるが故に、方便と名くるなり。欣厭は是れ慧なり。二に法門の中は、圓の法は法爾として、速に諸方に遍して、速に果に至らしむるを、勇猛法と名く。菩薩此を證して、法の普周に隨ふ、故に通達と云ふ。此は、上の文の解脫力に乗じて、如來海に入る等に同じ。三に佛力の中は、佛力をもつて、佛境界の中に入らしむ、故に能く遍するなり。下の句は、果海に同ずることを結す。度は是れ到なり、徹なり。此等は並に是れ、上の文の一一の所得の、一法門なり。但前は徳を顯さんが爲に、別に據りて廣く陳ぶ。此は牒結の爲に、通に就きて略して擧ぐ。下は類通なり、知んばべし。

華嚴經探玄記

卷第三

此れ第一の會を盡す。

魏國西寺沙門法藏述す

【一】此品は、信の對境たる、果上の因果を明す。初に盧舍那の名を釋す。

盧舍那佛品第二。自下正宗を明す。將に此文を釋せんに、四門分別す。一には釋名、二には來意、三には宗趣、四には文を釋す。初に名を釋する中に、盧舍那とは古來譯して、或は三業滿と云ひ、或は淨滿と云ひ、或は廣博嚴淨と云ふ。今更に梵本を勘ふるに、其には毘盧舍那と言ふ。盧舍那とは、此に翻じて光明照と名く。毘とは、此には遍と云ふ、是光明遍照と請ふなり。此中の光明に二種有り。一には智光、二には身光なり。智光に亦二義あり。一には法を照す。謂はく、眞俗雙べ鑒む。二には機を照す。謂はく、普く群品に應ず。身光に亦二種あり。一には是常光、謂はく、圓明無礙なり。二には放光、謂はく、光を以て警悟す。此中の遍とは、亦二種あり。一には平漫遍、無礙普周の故に。二には重重遍、帝網の如く重現するが故に。此二の圓融各全體遍にして、是分遍に非ず、是故に、下の文に云はく、「佛身、諸の法界に充滿して、普く一切衆生の前に現す。是の如き等無量なり」と、文に説くが如し。此中に身智無礙なるが故に、身光即ち智光なり、二遍無礙なるが故に、平遍即ち重重なり。光遍無礙なるが故に、光明即ち遍照にして、遍く性闇を照して覺る、是故に、名けて佛と爲す。此は下の文の、世界海等の諸事の一一

【器等の三種世間】一、器世間、又國土世間といひ釋尊所化の境のこと。所化の衆生世間、所化の機類を云ふ。二、智正覺世間、佛大智慧を具へ世出世間の法を覺了し衆生教化の爲の種種差別の身を云ふ。

【十身】一、衆生身、二、國土身、三、業報身、四、經開身、五、獨覺身、六、菩薩身、七、如來身、八、智身、九、法身、十、虚空身。

【依正無礙】國土と佛身の無礙を談ず。

【一】來意を明す

【二】宗趣を明す

【三】内證の法智を明す

【四】佛果菩提の大智、佛加護を用とす

【五】第二七日普賢等を加威して本經を説かしむるをいふ。

に、皆是稱性緣起無礙にして、闇を離れて覺照するを光と稱し、法界に普周せざること無きを、遍と名くることを明す。此舍那佛は、報身に局るに非ず、器等の三種世間に通じて、十身を具するを以ての故に。問ふ、「下の文の中の如きは、略して五海を明し、廣く世界を攝す。何が故に、世界品と云はずして、乃ち佛の名を題するや。」答ふ、「古德釋して云はく、「主に従ひて名を爲すを以ての故に。主勝を以ての故に、土主を擧げて以て之を攝く」と。今釋すらく、佛、三世間に通ずるを以ての故に。下の文の土等は、即ち是舍那佛なり、十身の中の國土身等の如し。又、依正無礙なるを以ての故に、標して、五に擧げて文綺なるのみ。又、五海の中の佛海は、即ち餘の四海を具するを以てなり、餘も亦爾り。佛勝るるを以ての故に、獨り標して軌と爲す。故に以て名と爲し、餘は説かざるなり。」

二に來意とは、前に既に序し已んぬ。次に正宗を顯す、義次第なるが故に、是故に次に來る。

三に宗趣とは、二有り。一には人に約し、二には法に約す。人に亦一あり。一には化主、二には助化なり。各體、相、用有り。主の中に、内證の法智を體と爲し、七日思惟解脫を相と爲し、加護を用と爲す。此三は不二にして唯是一の果なり。助化の中に、入定を體と爲し、加を蒙むるを相と爲し、説を起すを用と爲す。此三は不二にして唯是一の因なり。此上は因果融攝不二にして、唯是一の人なり。法の中に亦二有り。一には義理に約し、二

【四】以下文を釋す。初めに通じて經論の解經の分齊生解の方便を辨ずるに、十門を分つ

【五】一、解釋決擇。

【廣】は云云【攝】釋門、攝事門、總分別門、後後開引門、遮止門、轉字門、壞不壞門、安立數取趣門、安立差別門、理趣門、遍知等門、力氣門、引義門、別別引門、引義門、今は初一を出す。

には教事に約す。亦各に體、相、用有り。義理の中に、性海を體と爲し、別徳を相と爲し、應教を用と爲す。此三不二にして唯一の義理なり。教事の中に、自分の内に、五海十智を體と爲し、十世界及び華藏界を相と爲し、益機を用と爲す。此三は不二にして、一の教事に爲る。此上の教義融攝不二なるを、一の法と爲すなり。又、上の入法復圓融不二なるを一の宗趣と爲す。此四義の各の三、一緣起相即無礙と爲す。是故に、或は唯果なり、俱に是佛なるを以ての故に。或は唯因なり、俱に是普賢なるが故に。或は教、或は義、或は人、或は法、或は體、所は用、或は主の體、乃至或は教用共に皆攝し盡す、準思して見るべし。下の諸會の宗は皆此相有り、但法に隨ひて異なるのみ。

第四に文を釋する中に二有り。一には通じて、經論の解經の分齊、生解の方便を辨ず。二には別して本文を釋す。初の中に略して十種の方便有り。一には解釋決擇、二には釋文の方軌、三には四種の悉檀、四には四の意趣、五には四の祕密、六には四の道理、七には五力、八には六相、九には六釋、十には八聲なり。

第一に解釋決擇とは「雜集論」の第十五に依るに、云はく、「釋決擇とは、謂はく、能く諸經の宗要を解釋して、彼義を開發するが故に」と。案するに、彼中に略して六種を開き、廣くは十四有るといふ。具には彼に説くが如し。今略して一門を擧ぐ、論に云はく、「攝釋門とは、謂はく、若し是處に於て、諸經の緣起の所以と、句義の次第と、意趣と、釋辭とを宣説す」と。案するに、云はく、緣起の所以とは、教起の所因を顯すなり。句義の

【六】二、釋文の方軌を示す。

【轉義】第八識によつて轉起せられたる識即ち第七、第六、眼、耳、鼻舌、身の前五識をいふ。

【七】前二は解釋の分齊を辨じ、下は生解方便を顯す。

次第とは、品會の文義の相生の次第なり。意趣とは、經の宗趣を顯すなり。釋難とは、外の妨難を釋するなり、餘は彼論の如し、煩を恐れて述べず。

第二に釋文の方軌とは『攝論』の第五に云はく、「若し大乘の法釋を造らんと欲すること有らば、略して三相に由りて、其釋を造るべし。一には緣起を説くに由る。二には從緣所生の法相を説くに由る。三には語義を説くに由る」と。無性釋して云はく、「諸の釋を造る者を開曉して、道理を解釋せしめんと欲するが爲の故に、略由三相等の言を説く」と。世親釋して云はく、「此三相に由りて其所應に隨ひて、一切の大乘の法釋を造るべし」と。案するに、云はく、初には廣く自性緣起を説いて、所依の本と爲すに由る。即ち阿賴耶識、諸法と互に緣起と爲る。二には此所生の轉識の諸法に依つて、上に於て三性の道理を分別す。謂はく、依他所執の無と、圓成の有とに於て、得と不得と、見と不見と、同時等となり、論に具に釋するが如し。此二門は道理を觀じて解釋す。三には語義を説くに由る。謂はく、例言の下の義意を顯す。此に二種有り。一には徳處。謂はく、佛果の二十一種の殊勝の功徳を顯す。無性釋して云はく、「已得は已に在りて圓滿饒益す、故に名けて徳と爲す」と。二には義處。謂はく、菩薩の三十二の行相を顯す。無性釋して云はく、「未得は已に在りて隨順趣求す、故に名けて義と爲す」と。此二の所説は皆初の句を以て標し、餘の句をもて釋す。此は是、說者の意を觀じて解釋す。

第三に四悉檀とは、『智論』の第一に云はく、「四悉檀有りて、總して一切の十二部經、八萬

【悉檀】新譯の悉義に同じ、成就の義なり。佛の説法は四悉檀を出でず【世界悉檀】淺近の事理を説き、聞者をして悦ばしむるをいふ。

【各各爲人悉檀】佛の大小、前種の淺深を見て所應の法を説き、各各得るところあらしむるをいふ。

【對治悉檀】種種の法藥を施して、衆生の惡病を對治するをいふ。

【不淨・爾り】貪欲深きものには、下淨觀を説くをいふ。

【第一義悉檀】諸法の眞實相を説きて、悟道に入らしむるをいふ。

四千の法藏を攝す、皆悉く是實にして、相違有ること無し。一には世界悉檀とは、法有り、因縁に従つて和合するが故に、有り、別の性無し。譬へば、車の輻輳轉轉等、和合の故に有にして、別の車無きが如し。人も亦是の如し、五衆和合するが故に、有にして別人無し。若し世界悉檀無くんば、佛は是實語の人なり、如何が「我天眼を以て、諸の衆生を見るに、善惡の業に隨ひて、此に死し彼に生ず」と言はんや。當に知るべし、是人、世界悉檀を以ての故に。第一義悉檀に非ず。二には各各爲人悉檀。人の心行を觀じて、爲に法を説くに、一法の中に於て、或は聽き或は聽かず。斷見の人の爲には、雜業の故に、世間に雜生して、雜觸を得て、雜受を得と説くが如し。常見の人の爲には、人の觸を得ること無く、人の受を得ること無し、是の如き等を説くが如し。三には對治悉檀とは、對治は則ち有なり、實性は則ち無なり。酸鹹等の、風病に於ては藥と名け餘病には藥に非ざるが如し。不淨等の、貪等に於るも亦爾なり、之に準ぜよ。四には第一義悉檀とは、一切の法性、一切の言論差別、皆悉く平等一味なり」と。解して云はく、或は世界に約しては有と説き、勝義には無と爲すこと、第一の説の如し。或は勝義には有と爲し、世界には無と爲すこと、第四の説の如し。或は異機に對しては有と説き、餘機に對しては無と説くこと、第二の説の如し。或は此病を治するを要と爲し、餘病に於ては非と爲すこと、第三の説の如し。皆須らく其本意を得れば、法は悉く用有り、言に隨ひて混取すれば、意を失ひて、謗を成すべし。

【八】四に四意趣を明す。初に平等意趣。諸佛の所證の法平等なる邊より、我即ち彼、彼即ち我と説くといふ。初に本論の文を引く。

【二】一に以てなり。次に別時意趣。今直ちに得るに非ざるも、別時に於て益ありと説くをいふ。

【三】三には約して説く。三に別義意趣。言説と意義と別なるをいふ。例へば大乘の法を解すといふも、それは單に義理を解するに非あらで、意は反つて實理を證得するにあるが如し。

第四に四意趣とは『華嚴論』の第十二に云はく、「此四意趣の故に、方廣分の中の、一切の如來の有ゆる意趣、隨ひて決了すべし」と。又『莊嚴論』の第十三に云はく、「諸佛の説法は、四意を離れず」と。『攝論』の第五に云はく、「此を以て、一切の諸佛の言教を決了せり」と。一には平等意趣、謂はく、説きて、「我昔曾、彼時彼分に於て、即ち勝觀、正等覺者と名くと言ふが如し」と。無性釋して云はく、「謂はく、一切の佛、資養等互に相似するに由るが故に、彼は即ち我と説く、昔の毘婆尸佛は即ち今の釋迦には非ず」と。『楞伽』の中に四義に約して釋す、「一には字等し、二には語等し、三には身等し、四には法等しきが故に、即ち彼と説く、而も實には彼に非ず」と。二には別時意趣、謂はく、説きて、「若し多寶如來の名を稱せん者は、便ち無上正等菩提に於て、已に決定することを得、又唯し發願するに由りて、便ち極樂世界に往生することを得と言ふが如し」と。無性釋して云はく、「謂はく、懈怠にして、法に於て勤勵學すること能はざる者を勸むが故に、是言を作す。此意は、先時の善根を長養す。世間に、但一錢に由りて千を得と説くが如し」と。『莊嚴論』に釋す、「此は別時に生ずることを得るに由るが故に」と。解して云はく、後の別時に彼千を得るを以てなり。三には別義意趣とは、謂はく、説きて、「若し已に爾所の瓊伽沙等の佛に逢事して、大乘の法に於て、方に能く義を解すと云ふが如し」と。無性の釋意は、證相大乘に約して、教相大乘に就かざるが故に、是説を作す。『莊嚴論』に云はく、「佛、一切の諸法は、無自性の故に、無生の故にと説きたまふが如し」と。解して云はく、此は無生を

【四には：…なり】
四に捕持伽羅意樂
意趣。衆生の意樂
に從ひて種種の法
を説くをいふ。

【戸羅】(五三)戸
恒羅ともいふ、清
涼と譯したまは成と
もいふ。

【九】五に四秘密
を明す。無性に從
へば遠く他を觀じ
て、攝受せんと欲
するは意趣にして、
近く他を護じて、
必ず悟入せしめんと
欲するを秘密と
すともいふ。初
に令入秘密。

【二には：…知るべし】
二に相秘密。

【無體・清淨】通
計所執の相無性、
依他起の生無性、
圓成實の勝義無性
をいふ。
【三には：…説く】
三に對治秘密。

證するに約して説く。四には補特伽羅意樂意趣。謂はく、一りの爲に先づ布施を讀し、後に還りて毀誓するが如し。戸羅及び一分修も當に知るべし、亦爾なり。無性釋して云はく、「先づ慳貪の爲に布施を讀歎し、後に施を樂ふが爲に、布施を毀誓す。餘の戒修も亦爾り」と。『莊嚴論』に云はく、「少善を得て、便ち足れりと爲すに由るが故に、讀毀するなり」と。

第五に四秘密とは、『雜集論』に云はく、「是の如きの四種は、大乘の中に於て、略して如來の一切の所説の、秘密の道理を攝す」と。梁の『攝論』の第六に云はく、「如來の所説は四意四依を出でず。依は即ち密なり」と。無性の『攝論』の第五に云はく、「四種の意趣、四種の秘密あり、一切の佛の言は、隨ひて決すべし。一には令入秘密。斷を怖るる有情を化せんが爲に、世俗の道理に依りて、聲聞乘の中に於て、化生等の諸の有情有りと言き、大乘の中に於て、心常等と説く」と。此則ち大小乘に於て、入法有りと説く、並に是れ秘密なり。『莊嚴論』に云はく、「應に知るべし、諸の聲聞に教へて、法義に入り、怖ざることを得しむ、色等は是れ有なりと説くが故に」と。二には相秘密。謂はく、是處に於て、諸法の相を説くも、三自性を顯す。無性釋して云はく、「所知の相に悟入せしめんが爲の故に」と。解して云はく、此れ法相を説くと雖も、意は三無性を顯すが故に密と爲るなり。又、『莊嚴論』に云はく、「應に知るべし、分別等の三種の自性は、無體、無起、自性清淨」とに於て、一切の法を説くが故に」と。解して云はく、此三性を説くと雖も、意は三無性を顯す。次の如く知るべし。三には對治秘密。謂はく、是處に於て、對治行を説く

【四に：知るべし】
四に轉秘密

【四顛倒】 四種の
顛倒安見なり。生死
死界の無常無樂無
我無淨なるを、凡
樂我淨なるを、常
常樂我常なるを、
無常等と執するに
乘の四倒）るとあり。

こと八萬四千なりと。解して云はく、謂はく、無に於て有と證き、同に於て異と説く等は、
皆是密意なり。所化の有情の障を對治するが故に、此八萬四千等を説くなり。四には轉變
秘密、謂はく、頌に曰ふが如し、「不堅を堅と爲すことを覺するを、善く顛倒に住し、極て
煩惱に惱されて、最上の菩提を得」と。無性釋して云はく、「剛強流散するを、説いて名け
て堅と爲す、此れ堅に非ざるが故に、説いて不堅と名く。即ち是れ調柔にして、散亂無し。
定れば即ち此中に於て、堅固の慧を起して、彼を覺するを堅と爲す」と。解して云はく、
散心流動するを、顛に不堅と名け、散心剛強なるを、密に覺きて堅と名く。定心、境を守
るを、顛に名けて堅と爲し、定心調柔なるを、密に不堅と名く。若し顯了を取らば、散亂
に於て、堅固慧を起すときは、則ち菩提に遠ざかる。今は秘密を取りて、定心に於て、堅
固の慧を起すときは、則ち菩提を得るなり。無性の云はく、「謂はく、四顛倒に於て、善能
安住して、是れ顛倒なりと知り、決定して動すること無し」と。解して云はく、若し顯了
を取らば、則ち無常等に於て、常等を計する四倒の中に住す、豈菩提を得んや。今秘密を
取りて、此常等は無常等に於て、横に計して起ると知り、決定して此を知るを名けて、善
く顛倒に住するが故に、能く菩提を得と爲すなり。又世親釋して云はく、「是れ顛倒能顛倒
の中に於て、善く安住する義なり。無常等に於て、是れ常等と謂ふを、名けて顛倒と爲す。
無常等に於て、無常等と謂ふは、是れ能顛倒なり。此義は則ち彼所計に倒すれば、義にお
いて顛倒と名く。此に於て安住するが故に菩提を得」と。極煩惱所惱と言ふは、無性釋し

【二〇】六に四種の道理を明す。これ能解の規則を示すに、まづ察理の規範なり。

【觀待】諸法生ずる時、必ず衆縁を待つ如きこれ。

【比量成立】成ずべき義を證成せんために、諸量不相違の語を説く、即ち俗諦縁起は比量得なり。

【現量成立】眞諦を證する智は、これ現量得なり。

【七に五力を明して】觀文の法則を示す。

【思益經】梵天思益經如來五力説品の文。

て云はく、「所化の有情の爲に精進劬勞し、疲倦せらるるが故に」と。解して云はく、若し顯了を取らば、貪瞋等の、行者を惱亂するが爲に、名けて煩惱と爲す、此れ則ち菩提に遠ざかる。今秘密を取りて、精進勤苦して行者を劬勞するも亦煩惱と名く。此れ則ち菩提を得。頌の「生死に處して、久しく惱され、但大悲に由る」といふが如し。梁魏の「攝論」及び世親の「莊嚴」對法等の論、並に準じて知るべし。

第六に四種の道理とは、雜集の第十一に、「因に契經等の法を觀察して、應に諸法の道理を解釋すべきことを辨ず」と。道理に四有り。一には觀待の道理、二には作用の道理、三には證成の道理、四には法爾の道理なり。案するに、云はく、觀待に二有り。一には俗諦の縁起は、要す相待して、生ずる因、此れ染淨に通ず。二には眞諦の理は、了因を待ちて顯る。此は唯淨に約す。二には作用に亦二あり。一には縁起の諸法に各業用有り。二には、眞如法界依持等の用。三には、證成に亦二あり。一は比量成立、二には、現量成立なり。四には、法爾に亦二有り。一には、諸の縁起の法、有佛無佛の性は緣より起る。二には眞如法界の性は、自ら平等なり。

第七に五力とは、思益經の第二に、「若し人能く如來所説の文字、語言、章句に於て、通達し隨順して、違せず逆せず、和合して一と爲し、其義理に隨つて、章句、音辭に隨はず、而も善く音辭所應の相を知る。如來何の語言を以てか説法し、何の隨宜を以てか説法し、何の方便を以てか説法し、何の法門を以てか説法し、何の大悲を以てか説法すと知る。

梵天、若し菩薩能く、如來是五力を以て、說法すと知る、是菩薩は能く佛事を作すなり」
 と。案ずるに、云はく、下の經に、次第に廣く釋せり。初に言説とは、如來、三世の法、
 垢淨の法、世、出世、流、無流等の法を説きたまふ。是言説は幻人の説の如し、決定無き
 が故に、乃至説くこと虚空の如くにして、生滅無しと云ふが故に。當に知るべし、是言説
 は所説無しと爲す。乃至、是を如來の言説と名くと云ふ。二に隨宜とは、如來、或は垢法
 を淨と説く、法性を垢すことを得ざるが故に。或は淨法を垢と説く。淨法に貪著するが故
 に。乃至生死は是れ涅槃なり、無退無生の故になり。涅槃は是れ生死貪著するを以ての故に。
 實語は是れ虚妄なり、語見を生ずるを以ての故に。虚妄は是れ實語なり、増上慢の人の爲
 の故にと云ふ。如來、宜に隨ふが故に、或は自ら、我は是れ常邊を説く者と説く、乃至
 廣説せり。三に方便とは、如來實に我人衆生諸著を得ず、亦施を得ず、亦慳を得ず等、乃
 至方便をもて、諸の衆生の爲に讚じて、布施は大富を得等と説く、乃至廣説せり。四に法門
 とは、謂はく、六根等の諸法は、皆是れ解脫門なり、空にして我所無きを以て、性自爾の
 故に、乃至文字も亦爾り。五に大悲とは、佛、三十二種の大悲を以てす。謂はく、一切の
 諸法は無我なり。而るを衆生信せず解せず。如來此に於て大悲を起すと、乃至廣説せり。
 案ずるに、云はく、此上の五種、初の一は能説に約す、不言の言を以て説くが故に。二に
 は、所説の法に約す、迷悟に隨ひて、是非を辨するが故に。三には、所爲の機に約す、巧
 方便を以て、無に於て有と説くが故に。四には、法の自體に約す、本來自空を解脫門と爲

【二三】 八に六相を明す。これ本經本論の所談、別門不共の説なり。

【二三】 九に六合釋を明す。佛教を學ぶための釋名の法これなり。

【藏識】 第八識のこと。諸の種子を藏する識の意。

すが故に。五には、能説の心に約す、物の迷を惑まんが爲に、説を起すが故なり。
第八に六相とは、一、十地論の第一に云はく、一切の所説の十句に、皆六種の相門有り。
一には總相、二には別相、三には同相、四には異相、五には成相、六には壞相、具に釋すること、下の十地品の中の如しと。

第九に六釋とは、亦六合釋と名く。一に依主釋とは、亦依主と名く。謂はく、兩法相望して、假に彼主に依りて、此名を立つ、眼識と説くが如し。眼即識に非ず、眼に依るの識なるを以て、名けて眼識と爲す。若し離して言はば、眼は是れ能見の義、識は是れ了別の義なり。今此に合して辨するが故に、合釋と名く。若し單法を名と爲せば、六釋の所收に非ざるなり。二に持業釋とは、亦は同依釋と名く。謂はく、其業用を擧げて、以て自體を顯す。藏識と説くが如し。藏は是れ業用、識は是れ其體、藏、即ち識なるが故に、用を持つて體を釋す、是れ別體相依に非ず。既に二法に非ず、何んが合釋と名けん。體用離れざるを以ての故に、合と名くるなり。三に有財釋とは、亦は多財釋と名く。謂はく、所有の物に従ひて、以て其名を立つ、佛土と説くが如し。土は是れ佛の所有なれば、名けて佛土と爲すなり。四に相違釋とは、謂はく、一句の中に多の名言有りて、各別に義を詮するが如し。偈に、佛及び法僧等と説きたまふが如きは、依主、持業等の多言有りと同じく一義に目くるが如きには非ざるなり。五に鄰近釋とは、謂はく、所近に従つて、以て其名を立つ、四念處觀の如し。實には慧を以て體と爲す、念と相近きを以て、名けて念處と

【十】十に八轉聲を明す。これ讀文の法にして、梵語にては蘇漫多聲(Yubara)といひ、是に八種の語格あるをいふ。一、體聲。主格にて物體を汎説す。人は「實格即ち目的格にして、人を一の如し。三、具聲。能作者の具となるものを示す。國は人に由りて一の如し。四、所爲聲。與格にて

爲すなり。六に帶數釋とは、謂はく、數を以て義を顯す、十地等と説くが如し、皆數に從ひて、以て義別を顯すなり。問ふ。此六釋は法を攝し盡すや不や。答ふ。凡そ諸法の名を得るに、略して五例有り。一には、離合に名を得、此六釋の如し。二には、單法當體に名を立つ、信等の如し。此は直詮に約す。三には他を無するに稱を受く、無明等の如し。此は遮詮に約す。四には、譬類に名を得、華嚴等の如し、喩に從ひて名を彰す。五には相形して號を立つ、大乘は小に形らへて以て其名を立つ等の如し。是故に、六釋は但、初門に緣る。若し前の六に於て、後の四釋を怙へば、總じて十釋と爲す。略して諸法の得名差別を攝す。

第十に八聲とは、西國の法に依るに、若し内外の典籍を尋讀せんと欲するには、聲論の八轉聲の法を解せんことを要す。若し明かに知らざれば、必ず文義の分齊を知ること能はず。一には補盧沙とは、此は是れ、直に指陳するの聲なり。人の樹を斫るに、指して其人を説くが如し。二には補盧衫とは、是れ所作業の聲なり。所作をもて、樹を斫るが如し。三には補盧患拏とは、是れ能作の具の聲なり、斧に由りて斫るが如し。四には補盧沙耶とは、是れ所爲の聲なり。人の爲に斫るが如し。五には補盧沙頰とは、是れ所因の聲なり。人に困りて舍を造る等の如し。六には補盧婆とは、是れ所屬の聲、奴の主に屬するが如し。七には補盧叢とは、是れ所依の聲、客の主に依るが如し。【瑜伽】の第二に、上の七種を名けて、七例句と爲す。是れ解を起す、大例なるを以ての故に。【聲論】の八轉は、更に

能作者の所對を示す「人」に「人へ」の如し。五、所從聲。聲格にて、物の從來する所を示す。「人より」の如し。六所屬聲。物の主をあげ所屬を示す。「我が家」の如し。八、呼名。物を呼指する格にて、「君よ」と云ふ如し。【五】以下、別して本文を釋す。

徼補盧沙を加ふ、是れ呼召の聲なり。然るに此八聲に其三種有り。一には男聲、二には女聲、三には非男非女聲なり。此上は且く男聲に約して、之を説く。梵語に丈夫を名けて、補盧沙と爲るを以ての故に。又、此八聲に復各三あり。謂はく、一には聲、二には聲身、三には多聲身なり。則ち二十四聲と爲る。丈夫を喚ぶに二十四聲有るが如く、女及び非男女聲も亦各二十四有り。總じては、七十二種の聲有り。以て諸法に口くること、以て準知すべし。然れども此方には多く此例無し。

【五】に文を釋すと、此品に二分有り。初には大衆疑請分、二には爾時世尊の下は、如來現答分なり。前の中に二に分つ。先に諸會の請問を明し、後に此文を釋す。前の中に四門を作る。一には有無を明すと、八會の中に於て初の二と、後の二とは有り、餘會は皆無し。何を以てか爾るとならば、謂はく、初會には果を標し因を起すが故に問ふ、第二會の初には因を尋ねて、果に至るが爲の故に問ふ。但因位は昇沈を五會に寄せて、以て果位の差無きを答と爲すが故に、當會に答ふ。然るに五會の中間の諸品の内に、更に餘問有ること、並に是れ當會所説の法の中の差別を顯さんが爲に、説に隨ひて問答す。是れ別位大位の相を問ふに非ず。第七會の中には因果の純熟を明すが故に問有り。謂はく、行修無礙にして、六位頓成の故に、當會に答ふるなり。第八會の中には、稱性の因果を明すが故に、問有り。謂はく、俱に法界に入りて、差別無きが故に、亦當會に答ふるなり。二に所問の法の不同とは、初會と第八とは、唯果分に因有り。但所信と攝化とを異と爲す。

【四句を成す】一
問一答、二問一答
二問二答、一問二
答。

【三慧有り】言
是は開法を成じ念
示相は修慧を成じ
自ら交際相互する
は思慧に當る。

【二六】正しく本文
を釋するに、長行
と對頌ある故にそ
の所以を明す。初
六は諸文の頌に通
じ、後四は本經頌
に就いていふ。

第二と第七とは唯因分に果有り。但位と行とを異と爲す。三に能問の人の不同とは、初と及び第八とは各同異の二衆を具して、齊く問ふ。所問の法衆同依なるを以ての故に。第二は唯同生衆の間、所入の位同生勝なるを以ての故に。第七は唯一人問ふ、造修の行、各別に成するが故に。四には請問の儀式とは、二有り。一には言念に約し、二には通別に約す。初の中に、汎く請を論ずるに二有り。一には言請、二には念請なり。答に亦二あり。一には言設答、二には示相答なり。此二の問答は、次の如し、及び交結して四句を成す、知るべし。三慧を成ぜんが爲に斯二例有り。初の二會と及び第八とは唯念請なり、答は二に通ず。謂はく、佛は示相答、菩薩は言を以て答ふ。佛に對して請を興すこと、言を行ざるを以ての故に。佛智は疑を領し、身相に現答自在なることを明すが故なり。第七は唯言請言答、行法を以て言に約し、明了に顯すが故に。又、普賢に對して問を興すに、濶りて普賢答るが故なり。二に通別とは、初會と及び八とは、別問通答なり。第二と第七とは別問別答なり。皆知んぬべし。

二に文を釋せば、此中に二有り。初に長行、後に重頌。此二の差別に大儀十有り。一には利鈍に約す。謂はく、鈍根未だ悟らざれば、更に重ねて頌を爲る。二には前後に約す。後來未だ聞かざるを以て、之が爲に重ねて頌す。三には生熟に約す。熟人には直に説いて、便ち悟らしめ、生類には曲巧にして方に知らしむ。故に重ねて頌するなり。四には文と質とに約す。或は質を愛すること有らんには、直に長行を示し、或は文を樂こと有

【同教】一乗教中三乘を以て同教一乗と名け、然らざるを別教一乗といふ

【祇夜】(一) (二) (三) 重偏偶、總類といふ。經文の意を更に類を以て重説するもの

【七】本經の初、長行の文を釋す。

【所請の法云云】二に所請の法を釋す。

らんには、頌言の美妙を示す。五には二持に約す。論に云はく、「長行は散説して、正解を生ずるが故に義持成歎す。偈頌は總攝して、受持し易きが故に文持成歎す」と。六には資成に約す。謂はく、更に偈頌を以て、長行を資け顯し、義明了なるが故に。此上は諸文の重頌に通ず。七には成圓に約す。頌の中には、長行の闕無を兼ね顯すを以て、前の所説を成じ、義圓滿するが故に。發心功德品の偈等の如し。八には體と相とに約す。門に従ひ相に約するを以て、長行に直に説く。此は同教及び三乘に約す。體に就いて闕融するを以て、偈頌、巧に顯す。此は別教に約す。此は十行品の、偈等の如し。九には通別に約す。長行には別に指的し、重頌には通じて該攝するを以て、此品の世界等の頌文の如きは是れなり。十には心言に約す。謂はく、長行には、直に心所念の法を顯し、偈頌には宣示して、講をして圓滿ならしむ。此は唯此文なり。又有る義は、凡そ佛の說法に法爾に「相有り。謂はく、直ちに契經を説くは、必ず祇夜重誦有り」と。下の諸品の中、重頌は、皆此十例に約す、之に準せよ。

此長行の中に就いて三有り。初に能問の人を標す。謂はく、同生異生俱に法界に在り、故に咸と云ふなり。言説は事彰にして奇を顯すに非ざるが故に。念心は法に入りて深細を顯す、故に念と云ふなり。二に所請の法を明す。三に唯願の下は講を顯す。所請の中に、古説に云はく、此に二十三句有り、二に分つ。先づ果法を問ひ、後の二句は因行を問ふ。前の中に、下の答の中、五海に準ずるに、此文を五と爲す。初の十二句は佛海を問ひ、次

の三句は名の如く三海を問ふ。後の六句は下に準ずるに、是れ根欲性海に當る。但根欲の不同に前りて、能彼の縁を差異あらしむることを致す。此中には縁を擧げて根を顯す。下の文は根を擧げて縁を顯す。斯左右有り、今更に釋す。此中に三十五句有りて二に分つ。初の三十句は果法を問ひ、後の一切菩薩の下の五句は、因行を問ひ、前の中に就いて三に分つ。初の十句は佛の内徳盈滿の徳を問ひ、二に示現菩提より下の十句は、佛の外相顯著の徳を問ふ。三に世界海の下の十句は化用普周の徳なり。

【六】 別して釋するに、果の三十句の中、初に内徳盈滿の徳を明す文を釋す。經の「何等か是れ一切」等の十句。
【佛地と云ふ云云】 以下、別して十句を釋す。初に佛地を釋す。

初の中に就いて、初の一句は總、縁の九は別、中に於て、何等是の三十三は三十五句と貴く。一切諸の三十三は、前の三十句果問に通ず、應に知るべし。何が故に此經は、最初に佛の果法を問ふ耶。謂はく、標幟の故に、宗歸の故に、爲本の故に、顯徳の故に、生信の故に、指南の故なり。經の首に佛華嚴と顯すと、義此を存す。佛地と言ふは、佛地論の第一に云はく、「清淨法界、及び彼妙智、受用相合、一味平等なるは、是れ佛の所依所行所攝の故に佛地と名く」と。解して云はく、即ち淨法界を以て所依と爲し、妙智を所行と爲し、餘の功德等は皆所攝と爲す。即ち眞理と妙智無礙なるを以て體と爲す。大乘同性經に依るに、「佛に十地有り。一切の菩薩、二乘は行くこと能はざる所なり。何等をか十と爲す。一には甚深難知廣明智徳地と名く、乃至第十に毘盧遮那智海藏地」と。下の十地の章に具に釋すが如し。二に佛の境界とは、下の九は皆是れ佛地の中より開出するが故に、是れ別句なり。謂はく、清淨法界を聞くは、是れ佛所證の境、或は總じて所知を擧ぐる

は、眞俗に通ず。下の性起品に云はく、「一切衆生は是れ如來の境界なり。乃至第十に非境界の境界は、是れ如來の境界なり。又亦是れ分齊境界の故に」と。明難品の中に、十種の佛境を明して云はく、「如來の深境界は、其量虚空に齊し」と。又釋す。通じて所知及び分齊の境有り。下の不思議品の中に、佛に十種の不可譬喩、不可思議の境等有り。譬に下の三處の文を尋ねよ、此に於て、具に辯すべし。三に佛持に四義有り。一には淨法界、一切の諸功德を任持するを以ての故に。二には大圓鏡智及び相應の淨識、各能く諸の功德を任持するを以ての故に。三には後得智の中の大陀羅尼門は、無量の諸法界を總持するが故に。四には是れ十佛の中の持佛隨順するが故に。又下の第十地の佛力持等の十持なり。又、羅世間品の中に、亦十持あり。初に佛持、乃至第十に智持なり。此二文の中に、皆初句を以て總と爲し、別を攝して總に入れて、俱に佛持と名く。又下の不思議品の如し、佛に十種の出生住持智等有り。並に應に具に尋ねて、之を辨すべし。四には、下の頌文に準するに、此中に佛無上智の一句を闕く。此れ則ち是れ、下の十智等なり。知るべし。五に佛行とは、是れ大悲攝生の行、又是れ大智造作の行なり。此れ並に不作の作、無思にして、事を成ず。性起品の無礙發行、如知行等は、是れ如來行なり。此は是れ、二乘の功德に異る。六に佛力とは、二義有り。一には他の爲に屈伏せらるざるが故に。二には能く魔怨を摧壞するが故に。別説に十有り。謂はく、是處非處智力等なり。又十種有り。不思議品の最勝力、大力、無量力、乃至第十の大力那羅延幢佛所住法等の如し。七に佛無量とは、

所説怯れざるが故に無畏と名く。是れ外道を伏する功德なり。或は四、或は十、離世間品に説くが如し。上來は大智の徳を明す。八に佛三昧とは、謂はく、獅子奮迅等の、微塵数の三昧海、擲略して十と爲す、不思議品の説の如し。此は大空の功德を明す。九に佛自在とは、定に依りて無盡の神通を發起す。所作無礙なるが故に自在と云ふ。不思議品に、佛の十種の自在正法あり。又、離世間に、十自在等有り、並に知るべし。此は神通の功德を明す。十に佛勝法とは、殊勝の功德、餘位に超過するが故に勝法と云ふ。亦十種有り、不思議品の説の如し。此は大輔の功德を明す。上の十句は内徳圓滿を明し竟ぬ。

第二に外相顯著の中に、初に示現菩提とは、謂はく、機に對して、大菩提を成ずることを示現す。性起品の成菩提處の證の如し。又、不思議品にも亦説く、並に應に對するべし。此は是れ總句なり、下の九は是れ別なり。六根三業は、皆とれ菩提の相を成ずるを以ての故に。下の不思議品、及び離世品に、此九門の一一に、各十門を以て講説す。彼の如く應に知るべし。佛の光明は是れ身業なり、餘は並に知るべし。上來は外相顯著なるを明し竟ぬ。

第三に化用普周の十句の中、初の世界海とは、是れ化用の處なり。染淨の上に通ず。即に入する十佛國土身の攝、略して十種を説く。此品の下の方に説くが如し。一に衆生海とは、是れ所化の機なり、靈妙空有等に通ず。亦十身の攝に入る。又、離世間品の十種の入衆生等の如し。應に知るべし。三に法界方便海とは、此に四義有り。一には理性法界、是れ前

【三〇】以下、佛の化用普きを問ふ下經の「世界海」壽量海の文を釋す

【二九】以下、外用の妙用の顯著なるを明す文の下。經の「示現菩提」佛智海の文を釋す
【六根三業】眼、耳、鼻、舌、身、意根と身、口、意の三業をいふ

【十度】 十波羅蜜をいふ。

【二】 因問の五句を釋す。總の一切菩薩藏なるや一の文の下なり。

の衆生及び世界等、所依の界なり。二には染事法界。謂はく、彼所化の衆生の蘊界の法等なり。三には無垢法界。謂はく、佛の所得の最淨法等なり。四には淨用法界。謂はく、佛の攝生の所用の、善巧の故に方便と云ふ。不思議品の如し。佛に十種の法界無量無邊等有り。應に知るべし。四に下の頌の中に準するに、此文に調伏海を闡く。調伏海は即ち是れ所調伏にして、是れ根欲性海の攝なり。但し頌と長行と文家互に存略有るが故なり。五に佛海とは、能化の佛の、一に非ざること海の如し。謂はく、一切處に遍じて、法輪を轉ずるが故に、六に波羅蜜海とは、二義有り。一には、是れ佛所説の行法なり。群機に授くるを以ての故に。二には、是れ彼所化の所行の行、即ち所化の成益なり、謂はく、十度等なり。七に法門海に亦二あり。一には、是れ佛の設くる所の教法、彼に通じて遊入するが故に。二には、是れ彼所化の行成じ、理を證して入る所の法なり。此に亦十有り。不思議品に説くが如し。八に化身海とは、異機、別に感じて現相多端なり。諸の毛孔より化身の雲を出す等と云ふが如し。又盧舍那佛、十方に遍じて、一切の化莊嚴身を出す等なり。又、雖世間品に十種の變化等あり。九に佛名號海とは、根の聞く宜きに對するに、名號一に非ず。名號品の、一一の世界に、百億萬等有るが如し。十に佛壽量界とは、機に應ずるに修短虧盈して萬差なり、略して十位有り。壽命品に説くが如し。上來は果の間竟んぬ。

第二に因問の中の五句、初の一句は總、下の四句は別なり。一には十住の初發心住等を

【二】 結請文を釋す。唯願くは「たまへ」の文の下。

【三】 偈頌を釋す

【前の中に云六】 別して釋す。初に歎德請、經の一如來：聞きたまふしの三頌を釋す。

【來際】 未來際の意。

【自ら本無き故に】 無住を本となすの意。

【第二に：結す】 次に學法請。經の「何等か、切」等の六頌を釋す。

明し、二には即ち十行の中の十度の行なり。三には願とは、即ち十廻向の大願なり。四には智悲藏とは、即ち十地の中に、智を以て性と爲す、合攝纏積するが故に。下の地品の、菩薩を同じく藏と名く等の如き是れなり。

第三に請を結する中に、唯願慈悲とは、佛に説因有りて、疲倦せんことを明すが故に。方便とは、佛巧に説きて、解し易からしむることを顯すが故に、悲に由りて發心し、巧に由りて解を得。

二には、頌の中に奇を顯すが爲の故に、常の口を以て説かず。依正無礙を表すが故に、供具の中に説く、即ち是れ、下の初説なるのみ。九頌を二に分つ。初の三は、徳を歡じて請し、後の六は法を擧げて請す。前の中に、初の二は佛を歡じて請す、説の、因を具することを明すが故に。後の一は、衆を歡じて請す、説の、縁を具することを明すが故に。前の中に初の一は佛の自徳圓なることを顯す。初の半は、因過去に盡れば、現果、功無きことを辨す。後の半は、未來際を究め、無思にして普く應ず。雲とは、法雨を灑ぐが故に、機縁を潤すが故に、自ら本無きが故に。後の一は、外化備ることを明す。謂はく、初の半は、縁を滅し善を生ぜしめ、後の半は、苦を離れて、樂を得しむ。又、初は涅槃を得しめ、後は菩提を得しむ。二に、無量の下は、衆を歡じて請することを明すが中に、一心とは、心に異念無きが故に。合掌とは、身に慢怠無きが故に。觀最勝は、念に任して佛に向ふが故に。下の半は總じて所念を擧げて、佛の開闡を願ふ。第二に、法を擧げて請する中に、

【二】に如來現答分を釋す。經の「爾時に世尊、品の」等の文。

【三五】初に面光集衆分を釋するに、初に放光を釋す。

三に分つ。初の三頌は、前の初の十句を擧ぐ。中に於て、初の一頌の内に六句有り。一に地、二に境、三に持、四に智、五に力、六に無畏なり。下の句は請を結す。次の一頌の中に三句あり。一には定、二には行、三には自在、即ち神力是れなり。下の句は説を請す。後の一頌は勝法を頌す。亦是示現菩提等知るべし。第二の一頌は、第二の十句を頌す。三業六根を離れざるが故に、同じく頌するなり。第三の二頌は、第三の十句を頌す。初の頌の内に五海有り。後の頌の中に二海有り。餘の三海、及び囚の問は、總攝なるが故に、無邊等と云ふ。下の句は請を結す。

第二の答相の中に、去來の諸徳亦此諸問を將て、下の諸會の中に之に答ふるに配すること有り。此判恐らくは謬れり。第二會等に自ら別に問有りて、別に答有るを以ての故に。

四番の間答交雜せざるが故に。是故に、總じて此品に於て、並に通じて答ふるなり。下の説分に果因の二説を具するを以ての故に。此文の中に就いて、長に分くるに十有り。一に面光集衆分、二に毫光示法分、三に法主入定分、四に諸佛加持分、五に大衆同請分、六に定中略説分、七に起定成益分、八に毛光讚徳分、九に許説令意分、十に正陳法界分なり。

初の中に二あり。先光を放ち、後に衆を集む。前の中に亦二あり。先は身光遍く覺す。二に光語呼召なり。此二は亦即ち上の佛の光明音聲の間に答ふ。初の中に亦二、先此光彼を照す。二に諸菩薩の下は、光を尋ねて此を見るなり。前の中に五有り。初に知念とは、疑を領するなり。將に答へんと欲するを以ての故に。即ち放光の所囚なり。二に

光の出處を明す。面門とは、諸徳に三の輝有り。一には、云はく、是れ口、一に云はく、是れ面の正容なり。別の口に非ざるなり。光統師の云はく、鼻の下と口の上との中間是れなり。と、下の鼻鼻の文に準するに、亦所説の如し。今の釋は、梵語に依るに、面及び口并に門を稱して、悉く目法と名く。是故に、此目法を翻じて面門と爲すなり。故に知んぬ、此中に通じて其事を擧ぐ。口とは、教道趣に被ることを表さんが爲なり。面とは、正しく機に對向するなり、門とは、法を開き生を攝するなり。齒とは、勝用なり。謂はく、法味を思順するが故に、惑鄣を治碎するが故に、緣起の具徳相差別するを以ての故に、一に各尊の光を放つといふなり。三に別に所出を顯すに十門有り。通じて論ぜば、一皆三世間等に通ず。別して明さば、初の六は佛海、次の二は器海、次の一は衆生海、後の一は法界方便海なり。又前の八は意業輪、次の一は身通輪、後の一は語業正教論なり。四に眷屬を攝す。五に所照の處、此中、放光に四意有り。一には、相を現じて實を表す。二には、信心を警起す。三には、照觸して苦を救ふ。四には、衆を集めて遠く召すが爲なり。是故に、彼衆、光に依りて此を觀て、所集の處を知る。

【頌の中に三知るべし】光語呼召を釋する一段にて、經の偈頌の下なり【初の二は身業】頌の初より、方便清淨の道云云までをいふ。

頌の中に九偈半あり。四義有り。初の六頌半は、通じて佛徳を擧げて、以て往を勸め、次の一は別して勝説を明して、以て諸を勸め、次の一は別して所説を標して、以て勸を勸め、後の一は、通じて佛徳を結して、深廣を顯す。此四は皆後を以て前を釋す。是を思ふて見つべし。初の中に二、先づ徳を擧げ、後に人尊の下は往を勸む。前の中に三、初の二

【次の二は意義】

經の「佛往昔古安住せり」の二頌。

【後の二】經の「微妙の音」等の一頌勸の中云云。

【勸の中云云】經の一人尊：聽受すべし」の句。

【次の半】經の「佛刹に等：詣てよ」の句。

【次の半】經の「各一切：觀たてまつれ」の句。

【觀音願説】經の「如來の所説は：往帝せよ」の句。

【九世の彌海云云】經に「三世の諸佛：觀たてまつるべし」の句。

【二に集衆を導するに、初に諸會に就いて示す】

【二に文を釋す云云】以下、經文を釋す。經の「佛時、蓮華藏」等の文なり。

は身業、一は體、一は用、次の二は意義、一は用、一は體、後の一は語業なり。勸の中に初の半は、法を爲すことを勸め、次の半は多衆を勸め、次の半は興供を教ふ。圓音願説すと雖も、九世の彌海、然も本法を壞せざるが故に、一念に非ざるなり。即ち下の所説の法門を標するなり。餘文は知るべし。

第二に集衆の中に、先づ諸會を明すに四義有り。一には有無、二には來處の遠近、三には本處等の名の不同、四には偈數及び前後なり。初の中に六七の二會無し、證位と行熟と俱に、皆離相なるを以ての故に。餘の六は皆有り。所爲知るべし。凡そ新衆を集むるに四意有り。一には攝機の爲、二には證法の爲、三には興供の爲、四には衆圓を明す。第二に遠近とは、初の二は十の刹、三は百、四は千、五は萬、位の微増に寄するを以ての故に。八に過不可説とは、證法の深を顯すを以ての故に、第三とは、一には是、二には是、三には菩薩、四には供の多少、並に會に隨ひて應に知るべし。第四とは、初の二會は偈願無し、修を起す始なるを以ての故に。餘の四は皆有り、法を顯す位増するを以ての故に。又、前の五は定前に集む、修により證に入るを以ての故に。第八は定後に集む、證に依りて用を起すを以ての故に。

二に文を釋する中に二有り。長行、偈頌なり、初の中に亦二あり、先づ衆集、二は顯徳。初の中に亦二あり、先づ集、後に結なり。初の中に十方を即ち十段と爲す。一一の方に皆七有り。一には器海の名、二には刹の名、十二佛國土等の如し。此二は是れ所依の法

【華嚴】佛は圓滿に證たり、菩薩は猶分證たり

【華嚴】華嚴多の義を以て合成するをいふ。

相なり。但通別を異と爲す。三には佛の名、四には菩薩、此二は是れ能入の智、但滿と分とを異と爲す。五には主伴俱に來る、具徳圓滿を明す。六には典供、佛に供するは順縁の義なり。謂はく、因、果に順するなり。七には、本方に依りて坐す。散を攝して靜に歸することを明す。何が故に、先づ東方を尋するや。謂はく、開明の始を顯すが故に、彼方に順するが故に。西域の方儀、東を以て上と爲すを以ての故に。其堂殿皆 向東に向ふ、其恒寺、菩提寺の如き、皆向東に向ふ。如來の説法も亦多分 向東に向ふ。故に南門 先出正しくは即ち東に向ふ。開ふ、下の文に此華嚴界無邊なりと、云何が此中に東等有らばや。答ふ、華嚴界は是れ、邊と無邊と不二なるを以ての故に、無邊と名く、下に説くが如し。無邊と邊と不二の故に有邊と名くと、此説の如し。是れ則ち邊を壞せずして互に無邊なり、無邊を破せずして互に邊なり。若し無邊の、邊に乖き、邊の、無邊に乖くと謂けば、是れ情計所變の法にして、正緣起に非ざるなり。此邊無邊は是れ一事なるを以ての故に、雙べて情計を超越るなり。其れ紫錦案の白線徹漏して、紫案に雜らざるがごとし。紫等も亦爾り。又、白案に紫有り、是れ錦なるに由るが故に。若し白中に紫無く、紫線至つてこれば、兩編即ち編にして、錦に非じ。白案に紫無し、是れ錦なるに由るが故に。若し白に紫有りて現せば、則ち文を壞して、錦に非ざるなり。是故に、白に由りて、紫成ずることを得ることあり、白無ければ紫も無きこと亦爾り。當に知るべし、此中の道理も亦爾り。思ふて以て之に準ぜよ。問ふ、若し爾らば彼十方世界に是れ華嚴なりや不や。答ふ、是れ

【即是…不是】こ
れ自在圓融無礙の
意を顯す。

【又此中の…思へ】
以下、供具を道釋

不なり。謂はく、即是に由るが故に不是なり。不是も亦爾り、上に準じて之を思へ。又、
何を以ての故に。是華藏の東等に由るが故に、即と不即となり。二問ふ、此十世界の外に更
に餘界有りや不や。二答ふ、無し。何を以ての故に。華藏を以て主と爲し、彼十を伴と爲す。
此主及び伴圓融して、普く一切の樂道に過し、重重なること、帝網の如くなるが故に。餘
も皆即ち此れなり、虚空の如くなるが故に。

又此中の諸供並に是法門なり。隨相に十有り。一には、妙寶、是れ可貴の義。二には、
須彌、勝高の義、雲は是れ潤益含雨の義、幢勝の義、三には、日、是れ除闇の義、輪は
是れ具徳の義、四には、鬘は是れ重成の義、正智の上に、悲等を起すが如し。五には華、
是れ淨の義、間敷の義、六には、香雲、是れ、戒等芬の義。七には、座、是、攝谷の義。
八には、蓋は是れ蔭覆の義。九には、幢は是れ獨出の義。十には、樹は是れ建立の義な
り、餘は並に之に準ぜよ。又、法に約するに亦十例有り。一には或は色法を以て云と爲す、
寶妙、色雲等の如し。二には、大聲を以て雲と爲す、妙音及び佛德等を歡するが如し。此
は事に約す。三には、無盡の佛土を以て雲と爲す。十種の不思議佛刹、雲等の如し。此は
依報に約す。四には、九世の理性を以て雲と爲す、三世佛の法身、光明雲等の如し。此
は體に約す。五には、佛の八相等を以て雲と爲す、十種の佛の變化、雲等の如し。此は用
に約す。六には、無礙解脫法門を以て雲と爲す、十種の解脫蓋、雲等の如し。此は不思議
解脫に約す。七には、佛所證の境を以て雲と爲す、十種の佛境界、雲等の如し。此は果

【眞理の妙行】 諸
虚中の供養、これ
能供の行

【雲・事】 これ所
供の物

【第二に結】 結文
にして、經の一是

の如き等、臥坐せ
り、の文を指す。

【七】 長行の中、
第二に徳用を顯示

する下の釋なり。
經の「彼諸の菩薩

次第に坐し、一等の
文。

【一念の中、亦前
り】 以十六無礙を

逆推して釋す、即
ち初は化用無礙一

に約す。八には、一切菩薩の行を以て雲と爲す、十種の菩薩所行示現、雲等の如し、此は因に約す。九には、一切衆生の欲樂を以て雲と爲す、十種の一切衆生樂不可盡示現雲等の如し、此は法器に約す。十には、現佛の大願を以て雲と爲す、十種の一切諸佛の、所願示現雲等の如し、此は赴機に約す。此等の一一に、皆十門を以て説くことは、無盡を明さんが爲の故なり。此上の十義、皆一一の中に、一切の法有りて、緣起無礙なり。是故に或は人、或は法、或は理、或は事、或は境、或は行、或は依、或は正、或は因、或は果なり。此中の一一の供具、皆滿虚空と云ふは、本性の空に稱ひて、參へて而も雜せざるは、緣起の如きの性なるを明すなり。是故に眞理の妙行は、事に即して成ずべし。雲華寶等の事は、理に即して法爲るべし。此は別教に約す、之を思へ。第二に結の中に、一には土を結し、二には下、三には作、四には供、五には坐なり。

【七】 第二に徳用を現す。次第坐とは、緣起無礙にして集れども而も雜らざるなり。中に二あり、先づ徳體無礙を明し、後に念念の下は妙用勝益なり。前の中に、用の中の體の句に通じていはば、總じて六重の無礙有り、並に倍倍して前より多し。一には身光無礙、二には光人無礙、三には人法無礙、四には摩刹無礙、五には依正無礙、六には化用無礙なり。一念の中の如き、一世界に於て一佛刹の摩數の衆生を化す。即ち此念の中に、一切の世界に於て、亦是の如く化す。一念既に雨り、餘の一切の念悉く皆然り。一刹の中に、此盡念三世の諸佛を現するが如し、餘の一切の刹に、各別に現せらるるも亦是の如し。一塵の中に、

刹の下依正無礙、
 一、塵の下、卑刹無礙、
 一人法無礙、一光此人法無礙、
 一毛孔の下、身光無礙なり。

【二に用益】次に用益ハ準ぜ
 【三に蒙益】三に蒙益ハ云云

此一切現佛の刹有るが如く、餘の一切の塵、各別なるも亦爾なり。一菩薩の法門、此一切に遍じて、刹摩道に現するが如く、餘の一切の菩薩の法も、別に遍すること亦爾なり。一光此一切遍塵の菩薩を出すが如く、餘の一切の光、別に出すも亦爾なり。一毛孔より此一切出菩薩の光を放つが如く、餘の一切の毛、別に出すも亦爾なり。上來は總じて一菩薩身中の事を辨す。一菩薩の如く一切も亦爾り、主の如く伴も亦爾り。是即ち重重無盡にして、心言の能く及ぶところに非ず。此は一乘法界法爾緣起の實徳にして、變化に非ざるなり。此等は並に是れ普賢位の徳なり。菩薩既に爾り、佛果の徳用、此れ能く比するところに非ず。準思して通すべし。

二に用益の中に三あり。初に所化を標し、二に以夢の下は、能化の法を明し、三に於一念の下は、化益を辨す。能化の中に十句あり。初の九は別して辨じ、後の一は總じて結す。九の中に、一に夢自在とは即實即空の故に。一念に多法を現するが故に。二は淨の故に。化の故に。三は教義の故に。四は勝神通を顯し歸依せしむるが故に。怖れて法に入らしむるが故に。相を動じ眞に歸するが故に。五は願力攝生の故に。六は深普性離の故に。深普淨用の故に。淨普普なく收むることを顯すが故に。七は圓音普降の故に。法界眞口等の如し。八は體用、機を警むるが故に。九は圓因を建つるが故に。三に蒙益の中に六句有り、釋するに四重有り。文に多勢を含むを以ての故に。一には、重苦を離れしむ。二には、出世の器と成るに堪へたり。三には、二乗解脫の、果向の十位を得しむ、此れ大乘の中の二

三に化益を辨ず。經の一念の頃に等以下の云々。

【果位の十位】聲聞の四向四果及び緣覺の一向一果【五停心觀】五種の觀法を修して五遍失を修むるを【觀志を停む】因縁觀(思願)を停む。因縁觀(思願)を停む。因縁觀(思願)を停む。因縁觀(思願)を停む。

【頌の中云云】以下、偈頌を釋す。【初の五】一切の光明等の五句。

【後の五】經の「一光明中」等の五句。【二に毫光示法分を釋す。經の一爾時世尊の一切の大衆」等の文。【一には、故に】初は法門に約し、次は因位に約し、後は果佛に約す。【眉間は、毫毛】

【眉間は、毫毛】

乘なり、愚法には非ざるなり。又小乗の中の五停心觀の前、那定に在り、一處實に依らば、燭頂已上を悉く正定と名く、永不退の故に。毘曇に依らば、忍心已上の方に不退を得、若し一地論に依らば、見道已上を方に正定と名くるが故に。彼に云はく、「正位正定とは、見道已上は正に是れ正位なり。不定と言ふは、此二の中間を不定と名くるなり」と。四は大乗の三賢の位に入り、五は十地を證し、六は佛果を成ず、此は同教に約す。又、初の三は前に同じ、四は初教に入り、五は終教に入り、六は頓教に入る。此は稱盡の處に約して三を説く。又、初は人天、次の二は小乗、四は是れ漸教、五は頓、六は圓なり。此は果に約して圓を顯す。四を説く。又、初は人天、次の三は三乘、後の二は一乘にして、因果を二に分つなり。此上は並に是れ一念の中の益、餘の一切の念之に準じ。

頌の中に十偈あり。初の五は總じて菩薩の徳を敬じ、後の五は前の法門を顯す。初の字に、前の三は自分の徳を明す。一は自利、二は化他、三は得法なり。後の二は勝進にして、一は外益、二は内圓なり。後の五の中に、一は現法、二は動轉、三は身證、四は入地、五は說法にして、此等は並に是れ上の毛孔の中の事なり。頌の文、巧略なるが故なり。

第二に光示法主分の中に二あり。初に此界、後に結通す。前に亦二、初は主を示す、是れ教義の源なるが故に。二に於彼の下は法を示す、是れ教義の相の故に。初の中に四あり。初に光の意を明す。無邊佛境と言ふは三意有り、一には、所證の法を知らしむるが故に。二には、即ち是れ普賢の故に。三には、佛能證せざるに非ざることを顯すが故に。二

初に眉間の白毫を
釋す。

【毘佛三昧海經】

陀跋鞞羅の釋、佛
相好及び功徳を
觀することを教へ
たるもの。

【寶色燈明を釋す】

【摩尼】(Muni) 寶
珠、如意といひ、
離、離名。

【勝用云】此光は
遍、等の文。

【廣の故】此光遍
く、利を照し、の
文。

【深の故】深の故
に、經の「一念照
し」の文。

【法門を故に】
經の「普賢…巴り
て」の文。

【用を備へ入る】
經の「還りて…入
れり」の文。

【象】白毫のこと
ならん。

に光の名相を顯す中に、二あり。先づ光の相を明す。眉間は、中道一乘の法を顯すなり。

白毫は、無流證道、白淨の法を表すなり。又、白は衆色の本なるが故に、此一乘は諸教の

源たることを表すなり。又毫とは是長毛なり。又是毫毛なり。【毘佛三昧海經】に依る

に、云はく、「太子たりし時に、爺れば長さ五尺、樹下のとき、長さ一丈四尺五寸、成佛し

ては、已つて之を放つこと、長さ一丈五尺なり。圓に卷げば秋の滿月の如く、分明にして珂雪よ

り皎淨なり」と。寶色といふは、光の體なり、燈明とは、光の用なり。又理貴ふべきが故

に寶色と名く、智普く照すが故に、燈明と名く、境智遍く益するが故に、雲と名く、るなり。

又、摩尼の諸色に同するが如きの故に。二に光の名を立つ。因人を顯さんが爲の故に普賢

と名くるなり。三に光の勝用を辨する中に、一に事の故に、遍の故に、廣の故に、二に理

の故に、正の故に、深の故に。三に説因を辨するが故に、大願力に依りて方に説くこと有

り。四には法門を現すが故に、衆をして法を知らしむ、普賢門の中より出づるが故に。上

の文に、既に別して普賢を照すと云はず、何が故に乃ち顯して衆に示すと云ふとならば、

上の所照は即ち是れ普賢なるを以ての故に。四に用を攝し本に歸する中に、毫より出でて

是より入るとは、上の法、下に傳ふべきことを長す。下に傳ふるは、本を失はざるが故に、

還りて入るなり。眉間と足下と處別なり、何が故に還り言ふとならば、上下無二なること

を顯すが故に。又、毫光、普賢を照すことは果、因を垂るることを明す。還りて足下より

入るは、因の果を成ずることを明すなり。

【九】二に示法の文を釋す。經の「彼に於て復等の文、

【九】二に示法の中に、初には、蓮華は是れ所詮の義なるを辨す。二には、勝音は是れ能詮の教なるを顯すなり。華に坐すとは、義に稱うて教を處すなり。初の中に一句は總なり。於彼と、場地なり。又是相輪なり。蓮華とは聞教の故に。三乗の水を出す故に。不染の故に、微妙の故に、衆寶の蜂の、探り證する所なるが故に。二に寶華とは可貴の故に。堅固の故に。三に華とは含攝の故に。出生の故に。具徳の故に。四に華とは覆蓋の故に。廣大甚深なるを以ての故に。法界に遍するなり。五に香鬘とは、氛氳たる香の故に。六に鬘浮檀金は、是れ寶中の上の故に。金は是れ、貴相顯の故に。臺は是れ高出の故に。七に結なり。此等は並に法門なり。若し三乗に約せば、此事に託して別に法を表す。然るに、彼に事にして即ち法に非ず。若し此一乘は、彼事に即して、是れ此法なり、仍り此事、顯現すること有り。

【二】に能詮を顯す云云。次に勝音を顯す下。經の「衆の眉間より」等の文。

【菩薩を出す云云】出菩薩を釋す。

【二は義明す】

【二】に能詮を顯す中に二あり。初には體を標し、二に偈頌をもて設相を明す。前の中に三あり。先づ教を擧ぐ、佛の眉間より出づとは、證に依て説を起すことを表すが故に。教、佛より出づるの故に。勝流法界の如し。又【二】に云はく、「最清淨界より流るる所の法なり」と。菩薩を出すことは、因人に被るが爲の故に。諸法は是所詮、勝音は是れ能詮なり。【論】に云はく、「契經は文義を以て體と爲すと、若し一乘に依らば、此菩薩は、名に即して教體を見ず。人法無礙の故に、教回なるを顯すなり、故に主伴を具す。理に順するが故に、敬繞するなり。二は義に稱ふが故に臺鬘に坐することを明すなり。三に義に稱ふに

經の「退きて蓮華
三鬘に坐す」の文
【三に義：歎す】
歎徳の下。經の「一
切諸法勝音：往詣
せり」の文。

【二に説相の中云
云】初に勝音、中
の聲徳を顯す一段
なり。經の「爾時に
勝音」等の文及び
偈頌なり。

【一佛法界に：顯
す】菩提樹下を動
かすて身一切に
遍ずる意。

【二に教威云云】
次に炎光、教の威
用を明す一段なり
經の「爾時に師子
炎光」の文。

【頌の中：：：なり】
正しく頌文を釋す
【一に：釋なり】

十門の中、初に名
を釋す。

由るが故に、教をして誠實ならしむ、故に徳を數するなり。徳の中に四句有り。一には下
群機に懷ひ、二には上佛境に順じ、三には茲に義海を窮め、四には佛果に歸せしむ。

二に説相の中に二、初に勝音、教體の殊勝を明し、二に炎光、教威の勝用を明す。初の
中に三頌あり。一は一佛、法界に遍じて、而も道樹に在ることを明す。二には多箇各法界
に遍ずるの佛、同じく一毛孔に坐す。三には一毛の如く、一切も亦爾なり、各主伴を具
す。此三、是の如く漸く増廣なり。又釋す。初の一は、舍那の身、法界に滿つるを明し、
後の二は、毛孔の中に無量の三世間を現じて、重重無盡なるを明すなり。二に、教威の中
の師子とは三種有り。一には理深きを畏れざるが故に、光照すなり。二は不益を畏れざる
が故に、炎惑を燒くなり。三は異學の、降らざるを畏れざるが故に奮迅す。同く是教の故
に亦首と名くるなり。

頌の中に、初は法輪の義を明し、後は文を釋す。前の中に、轉法輪の義に、略して十門を
作る。一には名を釋し、二には體を辯じ、三には種類、四には轉相、五には分齊、六には
轉處、七には轉時、八には轉人、九には轉機、十には諸門なり。一に名を釋すとは、法は
是れ軌持の義、通じて四種有り。謂はく、教理行果なり。輪は是れ所成の義、亦四有り。
一には圓滿の義、缺減を離るるを以ての故に。二には是れ具徳の義、轂輻輳等悉く皆具
するを以ての故に。三は有用の義、謂はく、惑障を摧輦するが故に。四には轉動の義、謂
はく、此より彼に向ふ、即ち佛より衆生に至るが故に。亦彼より此に向ふ、即ち衆生より

【二に體性約す】二に體性を明す。

【無分別智】眞如を體得する智。これ分別の智を以ては、眞如の體性に適はざるを以てなり。

【三に種類】休息無し。三に種類を明す。

【眼とは】類智なり。見道の十六心の中、四法智忍を眼、四法智を智、

佛果に至るが故に。法は即ち是れ輪の持業釋なり。又、輪は是れ喻況なり、聖王の輪寶の如し。即ち法の輪、依主釋なり。二に體性とは、通じて論せば、教等の四法を性と爲す。性を體すれば唯八正道を性と爲し、戒を以て轂と爲す。謂はく、正語、正業、正命なり。慧を以て幅と爲す。謂はく、正見、正思惟なり。定を以て輞と爲す。謂はく、正定は餘の正念、正精進を莊飾と爲して輪を成す。此は小乘に約す、初教も亦同じ。又、唯無分別智を以て法輪の體と爲し、又、唯眞理を性と爲す。此は終教に約す。或は理智俱に泯じ教果も亦亡し、言を離れ慮を絶するを、法輪の體と爲す。此は頓教に約す。或は通じて無盡法界を攝す。謂はく、人法、教義等の一切の自在法門海を、並に法輪の體と爲す。帝網の、重重に主伴を具足するが如き等は、此圓教に約す。亦即ち前の諸位を攝す。此中に皆具すとは同教に約す。三に種類とは、三有り。初に小乘の四諦の下に、各四義有り。謂はく、苦、空、無常、無我、此四は苦諦なり。因、集、有、緣、此四は集諦なり。滅、止、妙、離、此四は滅諦なり。道、如、迹、乘、此四は道諦なり。此上の十六は、所知の諦に約す。若し能知に約せば、亦各四有り。謂はく、眼知明覺なり。眼は謂はく、總じて苦等を觀じ、智は謂はく、別して過去の苦等を觀じ、明は謂はく、別して未來の苦等を觀じ、覺は謂はく、別して現在の苦等を觀す。是故に、四諦各四あるが故に十六を成す。新大毘婆娑論等の七十九に云はく、「眼とは謂はく、法智忍なり。智とは謂はく、諸の法智なり。明とは謂はく、類智忍なり。覺とは謂はく、諸の類智なり」と。又眼は是れ觀見

四類智忍を明、四類智を覺とす。【三轉】示轉、勸轉、證轉にして、四諦の四相を示す。【四轉】四諦の修行を勸むるを勸轉、四諦に就いて、佛自ら知り、斷し、證し修せることを擧げて證するを證轉といふ。【十六四十八行法】能知所知共に十六なるをいふ、四十八行法とは三轉に各各眼智明覺の四智を生ず、これを四諦各別に論ずれば、四十八行法を成ず。

【四に轉相】謂ひなり。【四に轉相を明すに、初に小乗次に三乗、後に一乘に就いて示す。】【陳如】橋陳如。五比丘の一。

の義、智は是れ決斷の義、明は是れ照了の義、覺は是れ警察の義」と。三十六を轉ずれば四十八行法輪を成ず。此は小乘に約す。『毘婆沙論』に具に説くが如し。二に三乗の中の法輪を明す。然も三義有り。一には小乗の三轉四諦に同じ。通じて三機を益す。『密迹經』に辨ずるが如し。此れ則ち四諦を説き三乗を具す。又三轉は即ち空、常淨なり。『維摩經』に云はく、「三法輪を大千に轉じ、其輪本來常に清淨なり」と、此謂なり。此は初教に約す。二には唯大乘を説くに亦、三根に通じて大小の果を得、諸大乘經の中の所説の如し。或は相を分ちて三を聞く、轉照持等の三種の法輪の如し。或は合して一と爲す、謂はく、唯一實諦なり。上は終故に約す。三には離言法輪、轉不轉無く、四三一に非ず、不可説の故に。此は頓教に約す。三に一乘の法輪なり、下の文に準ずるに、十諦の差別有り。謂はく、誠諦等の諦、各十行を説くに、謂はく、清淨、四無畏等を具足す。是故に總じて一十行の法輪有り。下の文に準ずるに亦十輪有り。謂はく、過去願力の故に等と。即ち十百行を轉じて、千法輪と爲る。並に下の文を尋ねて、廣く具に顯すべし。何を以てか皆十と言ふとならば、無盡を顯さんが爲の故に。此れ則ち無盡法界を大法輪海と爲す、常に轉じて休息無し。

【四に轉相とは、小乗の三轉に二有り。一には白の爲に轉ず。初轉は見道に在り、印相轉と名く。次轉は修道に在り、應作轉と名く。後の轉は無學道に在り、已作轉と名く。二には、他の爲に轉ず。初は示相轉と名く。謂はく、此は是れ苦等と、陳如等をして見道に入

【大品】 大品般若經。
【鹿園】 鹿野園。

【五に法輪】 準ぜよ。五に法輪の分齊を明す。

【維摩經】 同經菩薩行品。

【六に轉處】 處と六に轉法輪の場地を明す。
【化境】 教化せらるる境界の意。

【七に轉時】 所轉

らしむ。次を勸知轉と名く。謂はく、苦は知るべし、集は斷すべし、滅は證すべし、道は修すべしと、彼をして修道に入らしむ。後に引證轉と名く。謂はく、苦は我已に知り、乃至、道は我已に修すと、彼をして無學道に入らしむ。若は三乘の法輪にも亦二あり。前の説に同じ。但し義理差別す。菩薩の人に約すとは、「大品」等の經に準ずるに、既に鹿園に法輪を轉するの時、無量の衆生、菩提心を發す等、無量の菩薩初地を得る等、無量の一生の菩薩、一時に成佛すと云ふ、此も亦彼三轉に同すべし。是は通にして別に非ず、別に配すべからず。若し一乘に依らば、無盡の稱法界の法輪を轉じて、所彼の機と同一法界無二無別、法爾常住にして、新に辯ずるの益無きの謂なり。五に法輪の分齊を明さば、若し小乘の中に一義有り。佛、四諦を説くに、苦無常等の語音、法輪の機に入る、阿難に、天雨のやと問ふが如き等なり。是の如きの世語は、皆法輪に非ず。若し三乘の中は、佛の一切の語、及び身の威儀、皆法輪に入る、生を益せざること無きを以ての故に。維摩經一に云はく、「諸佛の威儀進止、佛事に非ざること無し」と。此を以て之に準ずるに、若し一乘の中は、三世間に通じて、俱に法輪に入り、一切衆生の語言音聲も亦法輪に入る。國土法輪は利説等の如し、之に準ぜよ。六に轉處とは、小乘は唯一娑婆百億摩國等の處なり。三乘は或は一百億、或は千百億、或は恆沙の如き、一佛の化境と爲る。一乘は遍く樹形等の界、乃至華藏に通ず。猶し帝網の如く重重の主伴あり。經に云はく、「此は是れ、盧舍那佛常に法輪を轉じたまふ處」と。七に轉時とは、小乘、三乘は或は二七日、或は三七日の

なり】七に轉法輪の時を明す。

【八に轉人：準ぜよ】八に能説の人を明す。

【九に轉機：準ぜよ】九に所彼の機を明す。

【十に諸門：準ぜよ】十に諸門を明す。

【念處】四念處。二障。煩惱、所知の二障。

【文を釋す云々】以下、正しく偈頌の文を釋す。

【初の一句】經の「一切法の方使」の句。

後、或は六七日、或は七七日、或は八七日、或は五十七日、或は一年等、此並に是れ、未
教なるを以て、機に隨ひて見聞異なるのみ。亦前後相攝等の事無し。一乘は、本教要す初時
に在り。第二七日に更に異説無し。仍ほ前後を攝す。各無量劫に、念念無間にして、一
一の念の中に、亦各彼前後際劫を攝す。亦帝網の如く、重重無盡にして、九世十世の所
轉なり。八に轉人とは、先は主、後は伴なり。小乗の主は、謂はく、釋迦の生身、及び化
身の佛にして、聲聞の弟子を伴と爲す。三乗の主は、即ち三身の佛にして、聲聞、菩薩を
伴と爲す。謂はく、舍利弗等なり。一乘の主は、謂はく、盧舍那の十身にして、普賢等の
菩薩を伴と爲す。亦帝網の如く重重に現す、之に準ぜよ。九に轉機とは、初は唯し小機の
爲にし、次は通じて三機に被る、後には唯一の普機なり、之に準ぜよ。十に諸門とは、一
には、教及び念處等を、法輪の因と爲す。此に由りて、聖道を得るが故に。二には、福慧
萬行を、法輪の眷屬と爲す。三には、眞俗二諦を法輪の境と爲す。四には二障の使習、是
れ法輪の所斷なり。五には、菩提涅槃は法輪の果なり。諸宗之に準ぜよ。
文を釋すとは、頌の中の十偈を四に分つ。初の三は佛の法輪清淨廣大なるを明す。中に
於て初の句は教主を標し、次の句は法輪清淨を明す。清淨とは惑染を滅するが故に。
淨理を現するが故に。法輪清淨なるが故に。梵輪の如し。下は法輪の廣大なるを明す。自ら
六門有り。初の一句は巧説廣し、二に一句は説人廣し、三に二句は説處廣し。中に於て國
土海と世界海と雙べて學ぐとは、此二相成するが故なり。四に二句は説因廣し、謂は

【二に二頌】經の「盧舍那佛の神」等の二頌。

【三に三頌】經の「無量無數」等の三頌。

【四に末後の二頌】經の「三世の無量」等の二頌。

【下は「竟んぬ】經の「此四天下」等の文を指す。

【三〇〇】法主入定分

經の「爾時に普賢」等の文。普賢の入定を明し、當會の法體、如來淨藏三昧、正しく示現する一段なり。

【華嚴は：故に】華嚴の二字は、因行を以て果を嚴るの意を示す。

【物】所化の機類

く、大願力に由りて説き、來際を盡すが故に。亦説時廣しと名く。五に二句は説機廣し、六に二句は言音廣し。二に二頌有り。普賢の能く遍して説法するを歎す。一に佛力加之故に語業を普遍ならしむ。二に身業、理に稱ふ。亦遍して法を雨ぐ。三に三頌有り。舍那佛の説法を歎す。一には語業、二には意業、光を出すなり。三には身業。四に末後の二頌は、三世の佛も亦同じく法を説くことを歎す。一には説法を見しめ、二には説法を聞かしむ。下は結通に二義有り。一には上の集衆、十方界に通ずることを結す。二には、既に示法の後に在りて結するときは、則ち知んぬ、示法も亦十方に通ずることを。示法主分竟んぬ。

第三に法主入定分なり。中に於て二行り。先づ諸會を料簡する中に四行り。一には有無とは、唯第二會。無とは、所表の法、未だ位を成せざるを以ての故に。餘會は所表の法、位を成ずるが故に。二に出、不出とは、第八は出でず。一たび法界を證すれば、退失無きことを表すを以ての故に。餘は起化を表するが故に。三に因果とは、初及び七八を果定と爲す。初に果を説くを以ての故に。七は行深の故に。八は證玄の故に。餘は皆因を説くが故に。又釋す。第七の中に、亦通じて因の義行るを以てなり。華嚴は是れ因行、嚴を成ずるを以ての故に。若し此判の如きは、通じて四句有り。或は唯果、謂はく、初及び八なり。或は唯因、謂はく、三より六に至る。或は亦、果、或は亦、因、謂はく第七なり。或は非因果、謂はく、第二は總じて無し。四に能入の人とは、唯第八は佛白入して、法界解脫自在なるは、唯し佛のみ窮むることを表すが故に。初は果を説くと雖も、物をして信ぜし

【二に文を釋す云】以下、經文を釋す。

【果定】 淨藏三昧

【淨といはば云云】以下、淨藏三昧を釋す。

【淨が藏云云】淨藏三昧の四字を釋するに、依主、持業釋の交際あるを示す。【結通云云】本經の文一普賢此世界に於て」等を指す

めんが爲の故に。七は行深しと雖も、然も是れ因人の行の故なり。

二に文を釋すとは、中に於て二、先づ此土、後に結通す。初の中に、佛前に於て坐すとは、因果、相離れざることを顯すが故に。何が故に定に入るとならば、證するに非ざれば

説かざることを顯すが故に。加を受くるが爲の故に。乘の疑を除くが故に。何が故に果

定に入る。果法を説かんが爲の故に。何が故に因入る。因人に被らしめんが爲の故に。

淨といはば四義有り。一には自性淨、二には治惑淨、三には善根淨、四には益用淨なり。

藏に四義有り。一には合攝、二には蘊積、三には出生、四には無盡なり。三昧とは此に

等持と云ふ、沈浮を離るるが故に。定慧均きが故に、等と名くるなり。心散ぜざるが故

に。一境に住するが故に、持と名くるなり。法を納めて心に在るを名けて正受と爲す。此

中は、淨が藏と淨即藏と、如來が淨藏と如來即淨藏と、淨藏が三昧と三昧即淨藏と、皆二

釋あり。之を思つて見つべし。下は其義を釋顯す。初の句は如來を釋し、後の句は淨藏を

釋す。離垢は淨なり。満足は藏なり。虚空は、上の二に喩ふるなり。結通とは此經は一切

處に説きて、續じて一部を成ず。謂はく、一部即一切部なり。今且く此一方の中の事を擧

ぐ。其本部を斷ずることを恐るるが故に、數文の末に於て一切を釣取し、本部を結成し

て、以て無盡無盡を明すなり。此に因りて、略して所入の三昧の、分齊差別を明すに十重

有り。一には、一切定の無礙に約す、故に起分の中に、普賢菩薩、彼三昧より起ち、世界

摩數等の三昧より起つ」と言ふ。解して云はく、此に二義有り。一には此定に多の三昧を

【三際】前際（過去）後際（未來）中際（現在世）をいふ。

【三】四に諸佛加持分を釋す。經文「一賢菩薩此三昧に入り已りて」等の文。

合攝するが故に。二には此定、過く多の三昧に入るが故に。是故に此定は即ち是れ塵等の三昧海なり。二には一切處無礙に約す。此文に「普賢菩薩、此世界に於て三昧正受す。盡法界虚空界等の一切の佛刹も、亦復是の如し」と言ふが如し。此に亦二義あり。一には定中に十方の刹を包含するが故に。二には此定諸の塵道に遍するが故に。三には一切時無礙に約す。起分に「普賢一切三世の三昧より起つ」等と言ふが如し。此に亦二義あり。謂はく、定は三世を含み及び三際に遍入す。四には、此上の三重融含して、一の普賢三昧無礙自在と爲る。此三義は是れ、一定なるを以ての故に。相離れざるが故に。五には上の塵等の三昧海の中に於て、一に隨ひて即ち一切の諸定を具す。各十方を包み、三世を盡すが故に。六には、一三昧の如く、一切も亦爾り。七には、一塵の内に隨ひて、即ち普賢圓明の三昧を見るに、各十方を攝し亦三際を盡す。八には、一塵の中の如く、一切の塵道も皆亦是の如し。九には、一念の中に隨ひて、即ち普賢有り。塵等の定に入る。各寧道を包み、十方の刹を盡し、及び九世十世等を窮盡す。十には一念の中の如く、餘の念念の中に前後際を盡す。一切の劫海も皆亦是の如し。此の如きの十重を則と爲して、餘の一切の位の中、及び教義理事等、此に準じて之を思へ。入定分竟んぬ。

【三】第四に諸佛加持分の中に二あり、先づ諸會を辨ずるに二有り。初に有無とは二七八の三會は無し。二は位未だ成ぜざるが故に。定無きを以ての故に。七は行、舊法に依て、前に異らざるが故に。八は佛自ら定に入りて、加を假らざるが故に。餘會は此に非ざるが故に、

【初に有無】本經八會の中、諸佛加持の有無を辨ず。

【二に文を釋す云】正しく文を釋す。初に口業の加持の下。

【加讚云云】諸佛の加持と讚歎とに四句分別をなす。

【彼即ち・故なり】本刹の身此土に顯るるも、彼を没して現するに非ず。融通無礙なるは法界緣起の特色たり。【所爲を釋す云云】經の一謂ゆる一切諸佛の法輪」等の文。

【別の中云云】經の「一切如来の智慧海」一切の文の下因みに巧轉以下の九は、經文の中に九故あるを以て知るべし。

皆有るなり。二に佛の遠近多少名異るなり、皆文の如く之を知るべし。

二に文を釋する中に三、先づ口加及び所爲、二には意加、三には身加なり。又初は説を

勸めて以て辯を益し、次は冥に被らしめて、以て智を増し、後は摩頂して覺す。然るに、

加讚互に成するに、四句有り。一には、加にして讚に非ず。佛の意と身の二加の如し。二

には、讚にして加に非ず、諸菩薩の偈讚等の如し。三には亦是は加、亦是は讚、佛の口業の如

し。四には、非加非讚、餘文の如し。口の中に二あり。初には加讚を明し二には所爲を釋

す。初の中に三、初には、諸佛本刹を移さずして、身を此に現するを明す。彼は即ち此

にして、而も彼を壞せざるが故に。遠は即ち近にして、而も遠を壞せざるを明すを以ての

故なり。緣起性の如く之を知れ。二には深定を得ることを讚す。三には定の因を明す。初

は他力にして後は自力なり。又果力、因力の緣起合成するなり。又佛の本願とは、佛、往

昔曾て是事を見ることを明す、因に即ち願を發し、願今成するなり。所爲を釋すの中に、

何の義の爲の故に加するや。此法を説かしめんが爲の故に。中に於て十句あり。初の一は

總なり。謂はく、一乗の法輪、最初に轉するが故に。是れ果法輪なるを以ての故に佛と云

ふなり。別の中に、一には所轉の義、法輪の體なり。開は猶し現のごとし。二には巧轉源

を盡す、法輪の相なり。及十方とは、是れ處を結通す。三には妙に惑障を除く、即ち法輪

の用なり。四には十方齊く轉するは法輪の處なり。又土海を窮むるなり。五に因を轉じ果

に入るは、法輪の分齊なり。六には一門一切の果を攝す、法輪の徳なり。七には巧に果を

【二に意加云云】
普賢に十智を興ふ
る下。經の「爾時、
一切諸佛」等の文。

樂はしむ、即ち法輪の境なり。八には巧に世俗に隨ふ、法輪の方便なり。九に根を密にして法を授く、即ち法輪の所被なり。同異成壞、準思して之を知れ。

二に意加の中に二あり。先に加し後に釋す。初の中に一は總、餘は別なり。別の中に一は法智を得、謂はく、五海智一に非ざるが故に無邊等と云ふ。二に盡遠智、謂はく、五海を窮め盡し三際の佛を該ぬ。三に成壞智、謂はく、五海の集散亦世界海なり。四に所化智、謂はく、五海を樂に約すれば亦衆生海なり。五に理智、謂はく、五海皆深し、亦法界海なり。六に三昧智、謂はく、五海皆定境なり。七に根欲の智、八に謂はく、佛智、九に身遍智、十に圓普智、此皆五海等に通ず。之に準するに下の十智と大いに同じ。釋の中に先に徴し後に釋す。問ふ、「諸佛に力有り非有り。何が故に普賢に加して餘に加せざるや。」答ふ、「長子たるを以ての故に。衆の首なるが故に。佛の圖底を盡すが故に。本願の故に。普徳具するが故に。定法を得るが故に。餘人は得ざるが故に。又、凡そ此定有る處には、諸佛法爾として皆彼に聚る。海の、法爾に彼衆流を攝するが如し、故に法と云ふなり。緣起の法門理數斷なり。是故に諸佛の智斷の二徳を人に興ふ。」問ふ、「佛何ぞ自ら説かざるや。」答ふ、「二の意有り。一には、所説既に玄なり。因人、分を絶することを恐るるが故なり。若し爾らば、何ぞ餘人説かざるや。普法を説くが爲の故に。二には凡そ此法を説くには、必ず一切の諸佛を具して、共説するを明す。若し佛自ら説くときは則ち理加授無し、便ち共説に乖く。此故に普賢の一説は即一切の佛説なり。」

【三】には身加云云
以下、諸佛の佛身
佛手、十方同時自
在無礙の意を述ぶ
經の一節時十方の
佛一等の文及び偈

【三】五に大衆同
請の下、經の一節
時に一切菩薩一等
大衆一同、普賢に
說法を請ふ、文を釋

【十頌を云云】以
下偈頌を釋す。

【生海】衆生海即
ち一切衆生をいふ

三には身加の中に、何が故に摩すとならば、覺らしむるが故に。佛の威徳を具せしむるが故に。此中に、佛身未だ必ずしも此に來らず、手を申ぶること、未だ必ずしも脩くして延べず、各一頂に觸れしむとも、未だ必ずしも相妨げず。悉く同時に摩すれども、未だ必ずしも前後にあらす。皆是れ縁起自在無礙なり。之を思うて應に知るべし。加持分竟んぬ。

第五に大衆同請分の中に二あり。初に長行。即ち説かざることを怪んで以て、後の請を生ず。亦是れ身意二業の請を具す。謂はく、恭敬は身なり。觀察は意なり。二俱に專注するは一心なり。後に正しく語業請の中、上の請と何の別かある。謂はく、此別に普賢を請するが故に。是れ説法の主なりと知るを以ての故に。又、此には新舊二衆を具す、故に前に同じからす。所問の法、前に異らざるが故に、別に列ねざるなり。

十頌を三に分つ。初の八は法主を數じて請す。二には一頌有り、所説を擧げて請す。後の三は、別して説法の徳を數す。亦、即ち前に説因有ることを數じ、後に説果有ることの數す。前の中に、略して普賢十種の功徳を顯す。一に因行願滿、二に果徳平等、初の一頌は之を顯す。三には色身普く遍じ、四には福智深廣、第二の一頌に顯す。五には普く佛海を見る。六には能く應利を現す、第三の一頌に顯す。七には廣く時處に遍す。八には深定常に現す。第四の一頌に顯す。九には體、法界に充つ。十には用、生海に遍す。亦

【下は別して六云】
經の「永く無量な
る」等の句以下。

【下の二頌】 第四
頌。

【下の句】 經の「應
の如く…説きたま
へ」の句を指す。

【下の句】 經の「願
くは清浄なる」の
句を指す。

は是れ前は智、後は悲、第五の頌に顯す。又、此十德攝して五對と爲す。一には因果、二には身智、三には見現、四には深廣、五には體用なり。下は別して、說德を敷する中に、初の頌は證斷を因と爲し。普周廣說することを敷す。謂はく、初の句は證理、次句は斷障、次句は普周、下の句は廣說なり。二に一頌は内外を因と爲して能く益し、妙に説くことを敷す。謂はく、初の句は普賢の内證を敷す。謂ゆる一切の佛德海より生ず。次の句は外能く普く説法の光雲を放つことを敷す。次の句は能く衆生を益し、其淨行を堅くすることを敷す。下の句は此に由るが故に、能く妙に佛境を説く。三に一頌は深行を因と爲し、能く雲雨のごとく、説法することを敷す。此上の三の中に、若し佛説の辯に約す。一には廣說、二には妙說、三には頓說なり。若し所說に約すれば、一には佛法、二には佛境、三には法界なり。下の二頌は所說の法を明す。初の一句は、總じて下の文の華藏界等を擧げ、次の句は、下の文の佛嚴淨等を擧ぐ。次の句の中に、能入は是れ佛海、法界海、所入は是れ衆生海、及び根欲海なり、下の句は結請なり。末世の一頌は、衆に二徳有りて聞くに堪ふることを敷す。一には樂欲、二には根器なり。前の中に亦二あり、一には身、慢怠を離るるが故に恭敬と云ふ。二には心、異想を離るるが故に觀普賢と云ふ。二に根器の中に、一心に聞かんと樂ふと雖も、若し智慧無くんば領受すること能はず。此れ亦二有り。一には深智、深理に達するが故に。二には廣智、廣事を鑒みるが故に。下の句は說を願ふことを結請す。同請分竟んぬ。

【一】定中略説分の下。經の一爾時に在りて、前門に答ふる文を釋す。【雙行の故に】定中と起定を指す。

【所依の義：華す】世界海は因果依正の所依。今別しては世界海を指せども、通じては五海なり、當段の義相は通別二意を含むことを知るべし。

【二には前後：義】初義は生の字に依り、次は衆の字に依る。別なれば一切海、通なれば一切なり。

【三に軌用の義】法は軌の義、業は用の義。亦通別あり。【四に行列：義】樂欲は行、諸根は性。通別あり。【五に覺圓の義】

第六に、定内に、略して本分を説く。中に二あり。先づ五海を觀じ、後に十智を説く。又前は是れ所觀の境、後は能觀の智を説く。又、前は是れ證の本、後は是れ教の本なり。何が故に定を起たすして説くや。謂はく、定は用を礙ざること明すが故に。法の深きを寄顯するが故に。雙行の故に。初の中に二、先づ境界深きが故に。觀自力に非ざることを明す。二に正しく法を觀じて審にす。五海に略して十門を作る。一には義相を辨ず、謂はく、無盡圓明性海藏の中に於て、茲に五義を分つ。一には是れ所依の義。一切に通ず。之に準ぜよ。二には萌發の義。亦積聚の義。三には軌用の義。四には行別の義。性別の義。五には覺圓の義なり。此五は皆一に即ち餘の四を具す、竝に深廣無盡、具徳難思の故に海と云ふ。二には染淨に約するに二有り。一に別とは、或は唯淨、謂はく佛海なり。或は唯染、謂はく、衆生海なり。或は俱、謂はく世界、及び根欲なり。或は俱ならず、謂はく、法界なり。二に通とは、或は俱淨、衆生等も亦返流するを以ての故に。本淨の故に。或は俱染、佛等も亦隨緣を以ての故に。或は俱、或は不俱、思うて之に準ぜよ。三には、理事に約するに、亦四句含攝す、知るべし。四には人法に約するに二有り。先に別とは、衆生、及び佛は是れ人、法界は是れ法、根欲は亦は人、亦は法なり。世界は人に非ず、法に非ず。二に通とは、亦四句を具す、含攝すること知んぬべし。五に因果に約するに、亦二あり。別の中に、世界は俱、法界は不俱なり、餘の二句は知んぬべし。通の中に、亦四句あり、思準せよ。六には三世間に約す。七には境智に約す。八には依正に約す。九には三寶に約

諸佛海を指す、亦通別なり。

【佛等も亦隨緣云】隨染幻の一而より言へば、佛海と雖も染といふべし。

【或は不俱】果分不可定なるをいふ。

【十に離染に約す】今世界海衆生海に二に約して示すも法界即衆生、根欲即衆生、佛海即衆生をも例同して明すなり。

【二に智に故に】二に説智を釋す。先づ境智の二、二にして不二、不二にして二、融會無盡なるをいふ。

【境智別なり】境智の二、二にして不二、不二にして二、融會無盡なるをいふ。

【問、既に云云】觀説の分齊を示す初は觀海説智の問答、次は定説更起す。

此上の四門は皆通別の句等有り、思準すべし。十には融會に約するに二有り。先に世界海に約す。謂はく、世界即衆生、下の衆生形世界の如し。世界即法界。法界不可壞蓮華世界海の如し。世界海即根欲。心作世界の如し。世界即佛國土身の如し。二には衆生即世界に約す。前に説くが如し。亦即ち法界は經の如し、即ち此法界、五道に流轉するを名けて衆生と爲す。亦即ち根欲は心心の所作の如きが故に。亦即ち佛は是れ十身の中の衆生身なり、又衆生即ち眞の故に。後の三海は一一に即ち餘なり、皆思うて見つべし。

二に智に約する中に亦二あり。先づ別していはば、初の三智は是れ、前の三海智なり、後の七智は是れ後の二海智なり。二に通とは、謂はく、一智に五海有り、二海に十智有り。鑿融思攝す。五海は深玄なり。十數に寄せて説くとは、信じ易からしむるが故に。十智は稍難なり。十數に寄せて説くとは、其本を會するが故に。是故に境智殊らず、巖妙恆に別なり。此は一乘に約す。又『解深密經』に云ふが如し。「如來の所行、如來の境界、此れ何が差別する。佛、言はく、「如來の所行は、謂はく、一切種なり。如來共に無量の功德有り。衆に莊嚴せらるる清淨の佛土なり。如來の境界は、謂ゆる一切種の五界の差別なり。謂ゆる有情界、世界、法界、調伏界、調伏方便界なり」と。地持、一瑜伽。亦此五を名けて、五無量と名く。此五は既に是れ如來の境界なるが故に。後に智を説きて廻觀智と名く。此は三乘に約す。問ふ、『既に海を觀ず、何んが海を説かずして智を説くや。』答ふ。『海は是れ證の境なるを以ての故に、證して彼を説かんと欲す、即ち是れ智を説くなり。』

【問、既に云云】觀説の分齊を示す初は觀海説智の問答、次は定説更起す。

の問答なり。

人、寺に至りて塔を觀れば、自心に熏在して、後に家に歸りて塔を説く。即ち是れ心を説きて、彼塔に非ざるが如し。』問ふ、『既に定に在りて説くことを得ば、後に何んが起つを須ひんや。』答ふ、『法に寄せんが爲の故に、何んとならば、謂はく、定に在りて海を觀るは、此れ心中に在りて最も細なり。十智、海を觀じて定中に在りと雖も、然も言に寄在するが故に。次に細なり。説分は最も麤なり。機に就くが故に、出定の表示なり。是れ則ち説は智を以て本と爲し。智は海を以て本と爲す。説は智に依りて成じ、智は理に依りて起るを以ての故に。』

【文の中に三あり、初には智を標し、二には説を許し、三には説の意を明す。此中、佛子を釋す。正しく當文を釋す。佛子云云】 智を標する中、初に佛子を釋す。

【十智とは云云】 十智を釋す。

【根欲は云云】 根欲の通局分別し、

文の中に三あり、初には智を標し、二には説を許し、三には説の意を明す。此中、佛子に五義有り、『攝論』の如し。一には、大乘を願樂するを種子と爲す。二には般若を母と爲す。三には定を胎と爲す。四には大悲を乳母と爲す。五には諸佛を父と爲す。又十義有り、下の彌勒、知識の處に説くが如し。十智とは、一には成即、敗に由るが故に淨を成ず、敗も亦爾り。此に由りて即ち餘の九等を具す、故に不思議と名く。此不思議の句は下の九句に通ず。二の中に、衆生の空有、不二なるを以ての故に。類多の故に。相即の故に。相入の故に。一切の法を具するが故に。根性多きが故に、故に亦不思議なり。又、界は是れ如來藏なり。隨緣して衆生と作るを起と名く。又、起は智の中に在り。三の中に四句あり。一には有爲に約し、二には無爲、三には俱、四には不俱なり。各染淨に通ず、思うて之に準ぜよ。根欲は上の二智の中に攝在す。亦下の七に在り、上の問の中に辨するが如し。下の七は佛

十智の分齊を知らしむ。

【四には無礙云云】第四の一切如來の自在智等を指す。

【八には三輪攝の故に】今は能化の三輪攝益を取る、若し所化に約せば根欲海に當る。

【九には「不壞】相卽は定の多に約し及び各定の體用相卽するが故に不壞といふ。

【三四】七に起定成益分なり。經の「爾時三昧より起ち」等の文の下。

【三五】大に毛光讚徳分なり。經の「一切如來の毛孔」等の下。

海を明す。四には無礙の故に。五には根に稱うて授くるが故に。普く轉ずるが故に。六には徳を顯すが故に。七には光音の故に。八には三輪攝の故に。九には深定の故に相卽す、及び體用は皆不壞なり。十には總を以て別を結す。本分

第七に、起定成益分の中に二あり、先に主伴の定を起つ。前には定の用を礙へざるを明す。故に十智を説く。此は用の定を礙へざるを明す、故に不壞と云ふ。彼定を壞せざるが故なり。云何が壞せざる。方便智に由りて釋し顯すを以てなり。二に起益の中に二あり。先に内益に亦二、初は此業を益するに四有り。一には法體を證す。二には證に依りて巧智を起す。三には智に依りて妙辨を起す。四には斷絶する無きことを説く。謂はく、願力に由るが故なり。二に結通して圓を顯す。二に外益の中に三あり。初に動、二に益なり。謂はく、動の時は恐れしむ。此に返するが故に樂なり。又安んじて善なるは因、授業は果なり。又動の時は壞せしむ。此に返するが故に寶をもて嚴る。三に雨寶。謂はく、是れ法雨なり。是を以て十を減するが故に、十を標して七を列するなり。

【第五】大に毛光讚徳分なり。經の「一切如來の毛孔」等の下。

【第六】八に毛光讚徳分の中に二、初に一切如來の毛孔及び光等は、是れ上の能加の佛なり。普賢の徳を讚じ、具徳説法を顯して、衆をして尊重し、渴仰を生ぜしむるが故なり。是は上の光明。讚歎音聲智なり。二に十四頌の中、二に分つ。初の八は、普賢廣大の三業、佛の願底を盡すことを歎す。中に於て、初の三は身、次の半は語なり。次の二半は意の中に、初の二半は定、後の二半は慧、次の二は佛の願底を盡す、後の六は、體用普遍無礙應機を歎

【第七】七に起定成益分なり。經の「爾時三昧より起ち」等の文の下。

【第八】八に毛光讚徳分の中に二、初に一切如來の毛孔及び光等は、是れ上の能加の佛なり。普賢の徳を讚じ、具徳説法を顯して、衆をして尊重し、渴仰を生ぜしむるが故なり。是は上の光明。讚歎音聲智なり。二に十四頌の中、二に分つ。初の八は、普賢廣大の三業、佛の願底を盡すことを歎す。中に於て、初の三は身、次の半は語なり。次の二半は意の中に、初の二半は定、後の二半は慧、次の二は佛の願底を盡す、後の六は、體用普遍無礙應機を歎

【云】九に許説全喜分なり。經の一爾時、普賢菩薩、大衆をして「等の文菩薩説法を許して喜ばしむる段なり

【第二に五頌半】經の「衆生は悪を」等の下。【法器】法を受くるに適する機類のこと。

【次の一頌】經の一諸の詔曲：是り無しの一頌。

す。中に於て、初の一は體遍なり。謂はく、普賢の身、此會に在りて坐するに、即ち十方無邊の世界に於て、一一に皆、常に彼處に在るを見れども、本來當處にして身を分たず、亦來去無し。一切の塵中、一切衆生の身の中も、皆亦是の如し。衆生等即知なるを以ての故に。是れ普賢なり。而も實には、一乘は佛國も亦普賢に同じく圓遍す。即ち勝に就いて、解し易きが故に。土を簡び、理に約して、三乘に寄せて一乘を顯すのみ。之を思うて見つべし。後の五は用を明す。一には現身、二には現法、三には淨願、四には衆生、五には現知なり。

【第九に、許説全喜分の中に亦二あり。先づ長行は意を標す。謂はく、前に本分を聞きて、已に歡喜を生ず。今更に許説分の故に重喜と云ふ。二に頌は喜事を顯す、中に於て、十頌有り、三に分つ。初の二頌半は、佛化の徳の、情に超えて不濁なることを擧ぐ。中に於て、一には深智説法、二には嚴士調生なり。後の半は通じて能化、所化の無盡難測を結す。第二に五頌半有り、衆を説いて淨ならしめ、法器と爲すに堪へたり。中に於て、初の半は、聞くに堪へざるを簡ぶ。樂惡と言ふは、惡趣の因を作るなり。著見とは、設ひ善業を作せども、出離を求めず。下の句は非を結す。謂はく、不能了等は非器を顯す。次の一頌は三月を具して、方に器と爲るに、堪ふることを明す。一には宿善根の力、二には近善友の力、三には佛護念の力なり。下の句を結して、是等の衆生は能く上智を得と云ふ。次の一頌は七心を具して、方に法を聞くに堪へたり。一には直心、詔曲を離るるが故に。

【次の二頌】經の「普賢菩薩の諸地」等の二頌。

【第三に二頌】經の「一切の刹土」等の二頌。

【七】十に正陳法海分なり。新の爾時、普賢菩薩、諸菩薩に一等の交初に諸會の説主要ることを述べ。【名句】體を顯す

二には淨心、求過等を離るるが故に。三には惡心、物を益するが爲の故に。四には悲心、生を救ふが爲の故に。五には深心、修行の爲の故に。六には信心、深法を受くるが故に。七には無足心、渴心滿つること無きが故に。下の句に結して、彼聞此法喜無量と云ふなり。上來の二頌、十門は、通じて一切の法を聞くに堪ふる器を辨す。次の二頌は、別して此衆を擧ぐ。初の一は四徳を具して、佛境を知るに堪ふることを明す。一には普賢地に住す。二には普賢の願を具す。三には普賢の行を行す。四には法界空を證す。下の句は佛境を知ることゝ結す。次の一頌は此大衆の、現に二利を得ることを歎す。一には現前に佛を見たてまつる。二には普賢の方便を得。後の一頌は通じて、但諸の衆生の佛法を聞くことを得るは、皆是れ佛力なることを結す。第三に二頌有り、法を擧げ説を許し、觀を勤めて樂はしむ。一には法を擧げて觀を勤む。佛と及び刹は身内に在るを以ての故に、樂を勤めて毛孔の中に於て觀せしむ。後の一は普眼を具して、方に此法を觀ることを明す。下の句は説を許し、聽を誠しむ、知るべし。下の十眼の中の第十の普眼とは平等の法門、法界を見るが故に。若し通じて論ぜば、總じて十眼を具するを、名けて普と爲すなり。

【第十に】正陳法海分の中に、先づ諸會の能説の人の異なることを明さば、唯偈紙と小相との二品は、是れ佛説、餘は竝に菩薩の説なり。所表下に釋するが如し。又一智論に依るに、五の説有り。一には佛説、二には弟子の説、三には神仙の説、四には諸天の説、五には變化の説なり。此は聲、名句を出す等に據る。若し授與に望むれば即ち情、非情に通

は名、義を詮するは句なり。諸行といふは名、諸行無常といふは句なるが如し。

【情、非情】生物と無生物のこと。

【華藏界】蓮華藏世界の略、寶蓮華所成の國土をいふ。

【初には云云】說世界海をいふ。

【下の緣生】探玄記十三、因緣縛說の下。

【今通じて云云】以下、通じて諸海を釋するに、十門あり。

す。此は三乘に約す。又五說有り、下に云ふが如し。佛說、菩薩說、刹說、衆生說、三世一切の説なり。此は三世間等の、一切の法に通ず、一乘に約す。文の中に二。

初には、廣く世界海を辨じて、前の果問を答ふ。二には、乃往過去より下は、前の因問を答ふ。初の中に二、先に散說世界、後に偈頌總持。前の中に二、初には通じて十世界を論じ、後には別して華藏界を辨ず。亦是れ第十の壞世界を釋す。成即ち是れ壞なるを以ての故に。前の中に二、先づ章門を標列し、二に門に依りて別解す。初の中に三、先に總じて告げて證を引く。二に正しく十名を列ぬ。三に其無盡を結す。此十の中に、初には四

義有り。一には土體總相、言に由りて方に成ずるを以ての故に、說世界と云ふ。四の堪智の中に成ずるが如く、下の緣生の中に説く縛觀等の如し。二には名言、識に熏じ、土を現するに由るが故に說と名くるなり。三には土中の言音は、下の頌の中に辯ずるが如し。四

には世界の立名、不同の故に說と云ふ。初の一は說即ち世界、後の三は說の界なり。二には攬緣界、三には依の故に久しきを得。四には外狀區分、五には内體盈滿、六には德相嚴麗、七には離垢用淨、八には器淨ければ佛興る。九には時を經るの多少。十には緣散じ、

作を離れて、皆繁多深奧なれば、同じく海と名くるなり。凡そ一世界に即ち此十を具す。今通じて諸の世界海を釋するに、略して十門を作る。一には種類、二には居人、三には名體、四には染淨、五には漏、無漏、六には共、不共、七には世間、涅槃、八には依正、

九には人法、十には無礙なり。

【初に：海なり】
一に種類を明すに
初は小乗、次は三
乗、後は一乗に約
して説く。

【變染土】 雜染土
に淨土を變成し、
小機馬引の爲の方
便とす。
【初の中に云云】
化身の土をいふ。

【報化】 報上、化
土。
【三には一乘云云】
一乘家の説なり
【樹形：界海】 皆
これ無量雜類界の
形。

初に種類を明すとすは、小乗は唯一類の娑婆等の界有りて、別の淨土無し。三乗の中には二有り。一には佛の自任の處に約するに三有り。一には法性土、二には寶徳土、謂はく、行等。三には色相土、謂はく、勝寶等なり。後の二を自受用の土と爲す。此三は是れ攝化の處に非ざるが故に此中に辨せざるなり。二には佛の攝化の處に約す、亦三有り。一には化身の土なり。此に二有り。一には染、謂はく、此娑婆等あり、此は釋迦に約す。二には淨、謂はく、餘方の化土、此は餘佛に約す。二には變染の土、謂はく、是指樂地等なり。三には他受用の土、謂はく、十八圓滿等なり。初の中に二あり、始教に依らば、唯百億の閻浮、百億の釋迦有りて攝化の境と爲す。若し終教に依らば、二智論一の中の如し。三千大千世界を以て一數と爲し、此を數へて恆沙に至るを、一の世界性と爲す。此性を數へて復恆沙に至るを、一世界海と爲す。此を數へて復恆沙に至るを、一の世界種と爲す。此を數へて復無量恆沙に至るを、一世界所化の分齊と爲す。其受用の土は、若し始教に依らば、色界頂に在り、小乗を引かんが爲に、阿界に在りて説く。若し終教に依らば、三界に在らず、涅槃に云ふが如し。西方此を去ること三十一恆河沙の佛土に世界有り、無勝と名くと、是れ釋迦佛の實報の淨土なり。又一切の須彌樓山世界の瞬間に於て、往往に一淨佛土を安んず。此は報、化に通ず、衆生を引かんが爲なり。三には一乘に依らば、二有り。一には果分に約し、十佛の自體、國土海なり。此は不可説に當る。緣に寄せて十を説く、第二會の説の如し。二には攝化の處に約するに三類有り。一には須彌山界、及び樹形等より

【十世界】此等は解行以上の境界ある故に、別相を説かず。

【二に所居の人】諸の世界海を釋する十門のうち、所居の人を明す。

【有餘依】無明未だ盡きずして、存するをいふ。

【初の一は通じて】化身土、變染土をいふ。

【後の一】他受用の上。

【起信論】同義記下本廿九有。
【一乘】別教一乘
【三に名體云々】
十門の中、三に名體を明す。

已去、乃至一切の衆生、形世界海を第一類と爲す。二には三千界の外に別に十世界有り、一には世界性、二には世界海、三には世界輪、四には世界圓滿、五には世界分別、六には世界旋、七には世界轉、八には世界蓮華、九には世界須彌、十には世界相なり。此等は萬子已去、輪王の境界に當る、第二類と爲す。三には十蓮華藏莊嚴世界海は、主伴を具足すること帝網等の如し。是佛境界を第三類と爲す。此上の三類通じて十事有り、首と爲して世界を成す。一には說世界海、二には起具因緣世界海、三には住世界海、四には形世界海、五には體世界海、六には莊嚴世界海、七には清淨世界海、八には如來出世世界海、九には劫世界海、十には壞方便世界海なり。

二に所居の人とは、若は小乘は、唯、有餘依の聖、及び凡位有りて居す。三乘は三の中に、初の二は通じて凡夫二乘、及び地前の菩薩並に佛の化身有りて居す。後の一は初地以上の菩薩、及び佛の報身居せり。『解深密經』の中に、「三地の菩薩、佛の淨土に生ず」とは、彼は七地に約して義を明す、即ち初地は彼第三に當る。又『起信論』の中に、「地前の菩薩、報身の佛を見ることを許すは、彼は終教に約し、三昧に依りて少分を見るなり。一乘は、三の中には、多分に時を論ぜば、初は見聞の位、次に解行の位、後に得果の位なり。通は即ち知るべし、三處の佛身は同じく是れ上佛なり。」
三には名體とは、世は是れ時なり、界は是れ分齊なり。謂はく、時の中に於て分齊顯現す、相に従ひて名を得たり。繁多與積深廣にして、竝め難きをもつて、同じく海と名くる

【色等の四塵】 色香味觸。

【能造の四大】 地水火風の四をいふ。

【四に染淨云云】 十門の中、四に染淨を明す。

【初の中に四對あり】 唯心家の通談により、菩薩位の高下に約し、四對を作る。
【金剛已還】 菩薩の最後心、等覺までの意。

なり。世界即ち海にして、喻に從ふ、持業釋なり。若し小乗は、子母七徴、及び色等の四塵、並に能造の四大の實色を以て體と爲す。若し、三乗の中には、凡小、地前は俱に頼耶識を以て體と爲す。地土は二義、報土も亦同じく頼耶を體と爲す。若し二智の所現は、即ち唯識智を以て體と爲す。故に『攝論』に云はく、「菩薩、及び如來の唯識智、乃至淨土の體と爲すが故に」と。若し終教に依らば、俱に如來藏眞如を以て體と爲す。若し、一乘は無盡法界、三世間に通するを以て、人法、理事等の諸門、相即して互に其體と爲る、準思して知るべし。

四に染淨とは、若し小乗は唯染なり、三乘に二有り。一には位に約し、二には法に約す。初の中に四對有りて、其染淨を顯す。一には因果に約す。謂はく、金剛已還の菩薩の所住を果報土と名け、淨土と名けず。過患未だ盡きざるを以ての故に、唯佛一人のみ。使習都て亡すれば、所居を淨と名く。是故に『仁王經』に云はく、「三賢十聖は果報に住す、唯佛一人のみ淨土に居す」と。二には一向非一向に約す。謂はく、八地已上の菩薩の所住を、淨土と名くることを得。一向に三界の事を出るを以ての故に。四句の一向の義を具足するが故に。謂はく、一向淨と、一向樂と、一向無失と、一向自在となり。七地已還を未だ淨土と名けず、一向に三界を出るに非ざるを以ての故に。縦ひ願力に由りて出ることを得るも、四句の一向具足せざるが故に。謂はく、無流の觀智、間斷すること有るが故に、無失等に非ず。此は『攝論』に依りて辨す。三には純雜に約す。謂はく、凡夫、二乘雜居の

【那落迦】(Naraka) 地獄をいふ。
【傍生】 舊に畜生
新に傍生といふ。
梵名、帝利耶羅輸
泥連(Tiryakoni)

【起信論】 同義記
中本十二左。

處は淨土と名けず、地上の菩薩の生處を淨と名く。故に『瑜伽論』に、世界の無量を説くに、其二種有り。謂はく、淨と不淨となり。清淨世界の間に、那落迦、傍生、餓鬼無く、亦欲界、色、無色界無し。純菩薩の衆、中に於て止住す、是故に説いて、清淨世界と名く。已に第三地に入りて、菩薩願力に由るが故に、彼に於て生を受く。異生、及び非異生の聲聞、獨覺有ること無しと。解して云はく、此第三地を既に、淨意樂と名く、即ち是れ歡喜地なり。七地に約して辨ずるを以ての故に。四には退不退に約す。謂はく、十住に入りて已去、不退位三賢の菩薩の生處を、名けて淨土と爲す。中に於て、亦四果の二乘等有り、阿彌陀の土、彼に生じて正定に住する等の如し。堪任已還、輕毛の退位と三聚の衆生、共生の處は淨土と名けず。此四對八義の中に、初は果に約して唯淨、後は退に約して唯染なり。中間は相形して皆染淨に通ず。二に法に約する四句とは、或は唯淨。謂はく、上の四門の中に於て、相形して淨を取るが故に。退位の所居、自性淨の故に。或は唯染。謂はく、四門の中に相形して染を取るが故に。佛果は、緣に隨ひ機に約して説くが故に。

『起信論』の中に、隨業業幻の所作と名く。或は俱なり。前の二義相離れざるに由るが故に。或は俱非なり、二義互融し、定んで一に非ざるを以ての故に。二相盡くるが故に。一乘に亦二あり、初は類に約する中に、初類は染、後類は淨にして、申類は二に通ず。二に法に約する中に、或は俱に淨なり、佛に即するを以ての故に。或は俱に染なり、即ち衆生なるが故に。或は二を俱す、前の二義相離れざるに由るが故に。或は不俱なり、二相融じ、

【第五漏六六】十門の中、第五に漏無漏を明すに、下の三は土徳に約す

【苦道二二】苦諦道徳をいふ。苦に墮きざるが故に、漏に非ず無漏に非ざる世界はこれ法界の攝にあらず。

【二には融通の中】大般若經。二には融通の中云々。終身の縁起事理を攝するを以て同句を説く。

【前の句に融通に】相即の意を述成す【新】中論。

【第六共不共云云】十門の中、六に共不共を明す。

二相攝くるを以ての故に。上の三類の中に、一に皆此四句を具す、準思して之を知れ。

第五に漏無漏とは、若し小乗は唯有漏、三乗は二門有り。一には隨相門、二には融通門

なり。初の中に四句あり、一には唯有漏。謂はく、凡小の地前、所變の土なり。二には唯

無漏。謂はく、佛所現の土なり。三には俱。謂はく、地上の菩薩の二智所變と、及び頼耶

所現となり。此二は苦道二諦の攝と爲すと雖も、然も別の二體無し、但し義の異なるに隨ひ

て攝す。四には俱非。謂はく、皆即空の故に、兼に墮せざるが故に。此上は始教に約す。

二には融通の中に亦四句あり。一には、或は一切皆無漏、乃至凡位も亦有り。諸漏の性を

離るるを以ての故に。經に云ふが如し、「色は無漏無繫、受想行識も無漏無繫なり」と。乃

至廣説す。二に、或は一切皆有漏なり、乃至佛も亦有り。漏法を離れざるを以ての故に。

經に云ふが如し。「諸佛は三毒四倒五欲等の中に安住して、阿耨菩提を得」と。乃至廣説す。

前の句は漏に異らざるの無漏なるが故に、漏は即ち無漏なり。後の句は、無漏に異らざる

の漏なるが故に、無漏は即ち有漏なり。三には俱。前の二義、相離れざるを以ての故に。

四には俱非。皆縛脱の性を離るるを以ての故に。經に、「色は無縛無脱、受想行識も無縛無

脱なり」と言ふが如し、乃至廣説す。一乗の中には、縁起法界の如し。若し一無くんば即

ち一切成ぜず。五融無礙も亦四句を具す、全攝して知るべし。之を思へ。

第六に共不共とは、中に於て二有り。先に分齊を明し、後に義相を顯す。初の中に、一世界に隨ひて皆是れ有情なり。謂はく、異熟識は共相の種を成熟する力に由るが故に、

【異熟識…故に】
各自の第八識が世
界を變現するに當
り、同一物を現す
るは、其相の種子
を成熟するが故な
り。

【唯識論】 述記三
末六十二右。

【初師の説云云】
自下護法假りに三
計を叙す、三難あ
り。一、界壞無因

の難、二、已厭無
用の難、三、有身
無益の難。

【一切の有情】 凡
聖五趣の有情、自
他界、已及び外身
に通ず。

【器】 器界即ち、
有情所居の國土。

變じて色等の器、世間の相に似る。問ふ、凡そ一世界に、幾くの有情の、異熟の識變有りや。答ふ、『唯識論』の中に三師の説有り、初師の説に云はく、「一切の有情なり、契經」に、一切有情の業増上力の、共起する所と説くを以ての故に一次の師破して云はく、「若し爾らば、諸佛菩薩は、實に此雜穢土を變爲すべし、諸の異生等も、實に他方と此界との、諸の淨妙土を變爲すべし、又、聖者は有色を厭離して、無色界に生じて必ず下生せず。此土を變爲すること、復何の所用ぞや。此三種の大なる過失有るが故に、明けし、一切有情に通ずることを得ず。應に説くべし、現に居せるものと、及び當に生すべき者は、彼異熟識此界を變爲す。經は少分に依りて一切の言を説く。諸の同業の者、皆共變するが故に一後の師第二を轉破して云はく、「至し爾らば、器の將に壞せんとする時、既に現に居するひと及び當に生るるの者無し、誰が異熟識、此界を變爲するや。又諸の異生の、有色を厭離して無色界に生ずるは、現に色身無し、預め土を變爲すといふこと、此れ、復何の用ぞ。設ひ色身有るも、異地の器と器細懸隔して相依持せず、此れ彼を變爲すること亦何の所益ぞ。亦此の如きの三種の大過に由りて、是故に、現に居するもの及び當に生るる者、皆變ずることを成ぜず。謂はく、初は器の將に壞せんとするや、當に生ると現に居するとは俱に受用無し。二に、若し現に無色界の身を受くれば、此土に於て受用の義無し。三には、設ひ色界の身、此と器細異なるも、亦依持受用無し。是故に此三は俱に變の義無し。」若し爾らば誰が識の變するや。『正義は應に云ふべし。凡そ所變の土は、木色身を

【第二に共云云】
以下は義相を顯す

【四微】色、香、
味、觸の四微あり
て、四大を攝成す
といふ。

【共業】各人共同
して善惡業を造る
をいふ。故にその
所感また同じ、由
河大地等これなり

依持し、受用せんが爲の故なり。若し身に於て持用有るべくば、設ひ他方自地に生在せしむる彼識も、亦此土を變爲することを得るが故に。器世界も將に壞せんとするに、初に成有情無しと雖も現に土有り。此土竝に『唯識論』に依りて辨す。

第一に共不共の義相を顯さば、若し小乗の中には、既に是れ極微の共合して、成ずる所なるが故に唯是れ共なり。若し三乘の中には四句有り。初に、或は皆唯共なり。謂はく、彼依報、識を離れずと雖も、而も識は、是れ別なり、土相は是れ一なり。彼彼の識の中の共相の種子の、共じて現する所に由るが故に。四塵を攬りて、共して一柱を成ずるに、一柱の相は四微を離れず。四微に隨ひて四柱有るに非ざるが如し。當に知るべし、此中の道理も亦兩り。若し自受用土は、佛と諸佛と共に、一土有り、猶法身は諸佛の共依なるが如き故に。是れ同じく法性の土なるを以ての故に。若し他受用土は、亦佛と菩薩との共有する所、王と臣と共に一國有るが如し。諸の雜染土は亦是れ有情共業の所現なるが故に別無し。二に或は不共とは、是の如きの依果、實は皆不共なり、各自の本識の中に於て現するを以ての故に。論に云はく、「俱に是れ有情の異識、各變じて同處相似して相障礙せず、衆の燈明の如し、多の夢みる所の如し。因類は是れ別なるも、果相は相似して處所別無し、假に名けて共と爲す。實には各異ること有り。諸佛の淨土も、亦復是の如し。各別の識變、皆法界に通し、同處相似するを、説いて名けて共と爲す」と。解して云はく、若し一土有るも、識に隨ひて別ならず、則ち心外に法有らば唯識を成せず。論に云は

く、「我説く、識の所縁は、唯識の所現の故に」と、是に由りて當に知るべし、皆自識變の故に、各同じからず。三に亦共亦不共とは、前の二説相離れざるに由るが故に「瑜伽」に云はく、「外等の諸物、或は不共分別を因と爲すに由る、或は復、共分別を因と爲すに由る。若し共分別の所起は、分別無しと雖も、他の分別の任持せらるるに由るが故に、永く滅せず。若し爾らずんば他の分別、其果無かるべし。彼滅せずと雖も清淨を得る者は、彼事の中に於て、正く清淨を見る。譬へば、衆多の觀行を修する者の、一事の中に於て、定心智に由りて、種種の異見を得べきが如し。彼も亦是の如し」と。解して云はく、此は、依報は共分別に隨ふと説く、其不共分別は、前の第二に同じ。是故に外の器世界は、皆是の如き二義を具するに隨ひて、成ずるが故に變存す。四に非共非不共とは二義有り、一に前の二説互に形奪するに由るが故に、定んで一を取るに隨ひて、不可得の故に、是故に俱非なり。二には、土は識に依る、土の相盡くるに由るが故に、識は緣從り起る、自性無きが故に、是故に共と不共と性相皆離ること、不可説なり。

此上は、若し果報に約せば、賴耶識の所變等、即ち是れ初教なり。若し如來藏賴耶の所現は、即ち終教に屬す。若し一切の相盡き、唯、一淨心平等平等にして、言を離れ、慮を絶するは、即ち頓教に屬す。若し圓教に依れば、二義有り。一には前の諸教の所説の如し、即ち無盡法界に同じく、帝網重重、即入無礙にして、主伴を具足するは、即ち此攝に屬す。二には義を以て求むるに、亦四句有り。一には、或は唯共。同一法界なるを以ての

【第七世間六六】
十門の中、第七に
世間涅槃門を明す

【寶性論】 寶性論
起信論を、寶性論

【無流】 流とは三
界に漂没せしむる
意にて、見、欲、

有、無明の四惑を
有、無明の四惑を
有、無明の四惑を
【意生身】 (Māno
manu) 初地以上の
菩薩身、意の儘に
度生の爲に受生し
得る身。

【雙林涅槃】 釋尊
沙羅樹の並木ある
ところにて入涅槃
したまひしをいふ

【理事無礙】 平等
の眞體を理といひ
有爲の形相を事と
いふ、二者は水波
の如く、理に即し

故に、相即の故に。二には、或は唯不共、緣起各別なるを以ての故に、相離せざるが故に。三には、或は俱、上の二義、相離れざるを以ての故に。全體相即して壞せざるを以ての故に。四には或は俱非、二相混するを以ての故に、形奪盡するが故に。

第七に世間涅槃門とは、二あり。初に隨相、二に融通なり。初の中に四句有り。一には或は唯世間。謂はく、地前及び凡位の所居なり。二には、或は唯涅槃。謂はく、諸佛の果位の所住涅槃。設ひ自受用の土も亦是れ彼大涅槃の攝なるを得。三には、或は亦是世間、亦是涅槃なり。【寶性】等の論に依るに、無流法界の中に、三種の意生身有るに依る。應に知るべし、彼無流善根の所作に因るが故に。名けて世間と爲す、是れ有漏業、煩惱の作に非ず、亦涅槃と名く。此義に依るが故に、勝鬘經一に云はく、「世尊、有爲世間有り、無爲世間有り、有爲涅槃有り、無爲涅槃有り」と。解して云はく、有爲世間は是れ凡位、無爲涅槃は是れ佛果、有爲涅槃、無爲世間は是れ變易の報なり。所望異なるが故に、俱句に屬す。四に、義淨するに、諸佛の清淨法界は是れ世間に非ず、涅槃に非ず、是れ二乘の涅槃に非ざるを以ての故に。又亦雙林涅槃に非ざるが故に。二には融通とは、亦四句あり。一には、或は唯世間。設ひ佛の淨土も、亦悉く是れ器世間の攝なるが故に。二には、或は唯涅槃。設ひ衆生の樂土も、亦相盡くれば、同性の故に。三には、或は俱。理事無礙を以ての故に。論に云はく、「世間と涅槃とは毫釐の差別無し、別無きを以ての故に、無二にして二なり、雙べて現前するなり」と。四には、毫の分別も無きを以ての故に、二にして

て事、事に即して
理なるをいふ。
【此經】雲集品。

【第八に依正云云】
十門の中、第八に
依正門、自下、土
相に就きて明す。

【第九に人法云云】
十門の中、第九に
人法門を明す。小
乗は世界は人法に
非ず、三乗は是れ
法と、一乗は人法
俱なり。

【第十に無礙云云】
十門の中、第十に
無礙門を明す。
【然るに、爲す】
終教によれば、舉
體融融、眞に無障
礙なれ共、今通じ
て非一非異といふ。

無二なり、形奪俱に盡くるが故に、俱非なり。經に云はく、「如來生死を見ず、涅槃を見ず」と。又、此經に云はく、「世間と涅槃と二俱に不可得」と。此謂なり。

【第八に依正門とは、若し小乗は是れ唯依報、三乗の中には、器世間は是れ、本識及び鏡智の所現なりと雖も、而も唯依報の攝なり。若し圓教の中に依らば、三世間に通ず。舍那佛、國土身等有るを以て、是故に世界は悉く是れ佛身なり。又衆生、形世界等有り。是故に衆生、即ち世界なり。此れ竝に依正混融無礙の故に。相即自在の故に。】

【第九に人法門とは、小乗は人法に非ず、三乗は是れ法門の義有るべし、一乗は其に有り。是れ佛、普賢、及び衆生等の故に。唯是れ人。或は諸の世界、竝に是れ法門の故に。文に云ふが如し、「清淨の妙形、無量正法の門に入る」と。此は世界等悉く是れ法門なることを明す。】

【第十に無礙門とは、小乗は、世界は唯是れ事相なり。上に於て但苦無常、空無我等の理有り。三乗の中の法性土は唯理にして、餘は皆是れ事なり。然るに上の二宗の理と事と一に非ず。異に非ざるを、名けて無礙と爲す。若し一乗の中には、略して十重有り。一には情事無礙。謂はく、情に應じて顯現し、事は情の外に超えたり。文に云はく、「喻へば幻の無方にして、皆妄想従り生ずるが如し」と。二には理事無礙。謂はく、全く同じく眞性に

して、而も利相宛然たり。文に云はく、「法界は壞すべからず、蓮華世界海等」と。三には相入無礙。謂はく、文に云はく、「一佛土を以て十方に滿し、十方は一に入りて、亦餘無し」

【因陀羅網】梵漢雙舉の名。漢語にて帝網といふ。帝釋天の寶網。

【八】第二に依門別解を釋す。九縁ある中、初に因縁より起る世界を明す下、經の一諸の佛子、當に知るべし」等の文。

等と。四には相即無礙。謂はく、文に云はく、「無量の世界即一世界等」と。五には重現無礙。謂はく、塵中に於て一切の刹を見、刹内の塵中に、刹を見るも亦爾り。是の如く重重にして因陀羅網の如し。六には主伴無礙。凡そ一世界に必ず一切有り、以て眷屬と爲す。七には體用無礙。謂はく、一刹海に必ず大用有り、機に赴きて法を説く。八には法顯無礙。謂はく、華淨隱顯、異類隱顯等、縁に約して之を定む、知るべし。九には時處無礙。謂はく、或は一刹に於て三世劫を現じ、或は一念の中に無量の刹を現す、是の如く無礙なり。十には成壞無礙。謂はく、成即ち壞、壞即ち成等、無礙顯現、自在にして知り難く、情慮を超過す。此十無礙は、同時に具足す、應に六相方便を以て之を會融すべし。十世界の義、略して辨すること是の如し。諸餘の義相、文に隨ひて當に顯すべし。

第二に章に依りて別釋する中に、十の内、初の一をば釋せず。餘の九を釋して即ち説とするを以ての故に、文の中に、初には前の八を釋し、後には第十を釋す。前の中に、初の七には各二あり。謂はく、長行と及び頌なり。劫の文に缺無し。初の中の長行の内に四あり。一には標、二には成、三には辨、四には結なり。一切世界海とは是れ彼三類、各各一に非ざるが故なり。已成等とは、一には此諸縁を以て、通じて三世の一切世界を成じて、而も諸の世界の、已未等異なるなり。二には一世界を成ずること、即ち三世に通ず。前には縁は通じ界は別なり、後には界は通じ縁は別なり、之を思へ。此は一乘に約す。八縁の中に、一は後得の通慧、二は縁起法爾、三は所化の業力、四は菩薩の行滿は、應に

彼界に於て成佛するを得べし。則ち此力に由りて、彼界、成ずることを得。五には普因成ず。六には菩薩、無餘の刹を嚴淨せんが爲の故に、願行を修するに、刹、願行に隨ひて無礙容持す、故に解脫自在と云ふ。七には大覺の正因、八には普願攝成す。然るに此八の中に、初の四は是れ權成なり。其麤相の故に、亦染に通ず。後の四は實成に約す、其細相の故に、唯是れ淨なり。經の「我此土、常に安穩なり」等の如し。而るに、一世界、即ち麤細を具するが故なり。又、此八の中に、總じて四對有り。一には、初と及び第七とは、佛に約して權實を明し、二には八と及び第五は、普賢に約して權實を明す。第八は是れ總爲るを以ての故に。三には四と及び第六は、通じて、一切の菩薩に約して、權實を明す。四には、第二と及び三は、理事に約して權實と爲す。業行は緣成不實なるを以ての故に。何が故に、要す此の如きの四緣を具するや。謂はく、佛は教主爲り、普賢は是れ助化なり。菩薩及び衆生は所化なり。初の二の中に、若し權無ければ、以て生に就くこと無し、若し實無ければ、以て眞に應ずること無し。後の二の中に、衆生の業報緣虛にして、復必ず所依の眞性有り。此の如きの八種等の、塵數の因緣、一世界を成じ、皆互に障礙無く、全體遍收す。又、諸緣の作、不作等、緣起の性の如くなるを以て、即空、即有、即一、即多、融じて分別無し、之を思へ。餘の一一の界も之に準ぜよ。

頌の中に二十有り、七に分つ。初の四頌は、前佛の神力。中に於て、一には刹、鏡智に依りて現じ、二には土、行を以て修成す。三には菩薩を化す、四には衆生を悟らしむ。次

【頌中に云云】以下、偈頌を釋す。

【次の四】經の「一切の菩薩…行す」の四偈。

【次の二】經の「衆生の心境…同じからず」等の二偈。

【次の二】經「諸佛の…淨む」等の二偈。

【次の二】經の「若し菩薩…出す」等の二偈。

【次の四】經の「一念の…示現す」等の四偈。

【三九】二に世界の依住處を明す下。經の「爾時、普賢」等の長行及び偈頌これなり。

【知入論の中…約す】序詞那伽を得ず。

【六に五頌…略す】經文「或は寶刹…淨土の化なり」の五偈なるが、長行中に略せし國土の詳細を盡せり。

の四は菩薩、應に道力を得べし。中に於て、初の上半は行因を明し、下半は智果を明す、度は猶し到のごとし。二は上半は土の因を明し、下半は土の果を起す。三は上半は依正の因成じ、下半は依正の果境に證入することを明す。四は上半は果廣く、下半は因久し。次の二は業生の業力を頌す。次の二は菩薩の、佛土を嚴淨するの、願行力を頌す。次の二は普賢の善根力、次の四は普賢の自在願力、次の二は佛の依果の故なり。此頌は總じて緣起の異義に通ず、即ち法是の如きが故にと爲す。別に頌せず。

第二に住の中、長行の内に二あり。先に具に數を標す、謂はく、凡そ一世界、即ち是の如きの剎塵の所依を具す、故に一切と云ふなり。二に略して七事を列ぬ。一には善淨力に依りて住し、二には無礙に依り、三には如意寶、或は一切寶に依り、四には通明に依り、五には緣起力に依り、六には法身持に依る。智論の中に依るに、摩訶を大と名け、那を無と名け、伽を罪と名く。此は無失の義に約して釋す。又云はく、或は大象と名く、即ち陸行の中に、力大なり。或は大龍と名く、即ち水行の中に、力大なり。又、初は善き調象の、能く軍敵を破るが如しとは、自利に約す。後は大龍の雨を降すが如しとは、利他に約す。七には法界、願に依る、願の中に十八平有り、九に分つ。初の一頌は莊嚴に依りて住し、二に一頌は虚空に住し、三に二頌は寶に依りて住す。四に一頌は佛の光、謂はく、威神是なり。五に一頌は力士、六に五頌は、上の標の中の剎塵は、此頌の中に依るに、猶略す。七に二頌は幻業、八に一頌は普賢の願力、九に二頌半は通じて因陀羅網安住の相を顯

【三】三、世界の形状を明す下。經の一爾時：種種の形あり」等の文。

【後の十四半】經の一録りたる眞金より終に至る例頌【摩尼珠】(Mani)譯して、珠、寶、摩尼、如意といふ珠の總名なり。

す。初の偈は一塵の内に依正を現す、後の一半は多塵に類す、知んぬべし。

第三に形の内に、長行の中に、別して七種を列ぬ。初の四と及び七とは、當相に形を辨す。六と五との二種は、喩に約して狀を顯す。一には、方にして斗の如し。二には、圓なること珠の若し。三には、非方は是れ四維形。四には非同、是れ八隅形。五には、水の洄

復形。六には華形、七には、衆生形とは、謂はく二義有り。一に、世界は衆生の形に似たる有り。二に、即ち種種の衆生は、皆是れ世界身中の、八萬戶の蟲の如し。各九億の

蟲等有り、此は即ち是れ世界なり。下の文に準ずるに、亦是れ、舍那佛轉法輪の處なり。是故に、文の中に、但衆生形と言ひて、衆生形の如しと言はず、故に知んぬ、即ち衆

生を以て界と爲すなり。此等の一一の形類、皆法界に遍す。頌の中に十七半有り、二に分つ。初の三は正しく前の文を頌す、後の十四半は刹の徳用を明す。前の中に、初の一は上

の總數を頌し、次の一は上の別形を頌す、但し頌の初の四を頌す、略して後の三無し。地論に依るに、摩尼珠に八楞有り、此隅形に喩ふるなり。後の一の上半は因異を顯し、下

半は果相を明す。二に徳用を二に分つ。初の六半は徳の自在を明し、後の一毛孔の下は、用の自在を明す。前の中に初の三は佛に約して刹を顯し、機に應ずるに堪ふるを明す。一

には、體法門を成す。二には相顯れて機に臨む。三には舍那の光照す、是れ佛の所有なり。後の三半は機に約し、正しく應ずるに差別を成ずることを顯す。一には、機の心業異

なれば、土を感ずること多形なり。二には、佛土自在にして、能く感に隨ひて異を現す。

三には、應染淨を成ずと雖も、法流斷ぜず。四には、下の半は業の多を結し、感現の測り難きを明す。二には、刹自在を明す中に三有り、初の四は依正自在を明し、次の二は其所因を出し、後の二は用を結し、主に歸す。初の中に、初の二は毛孔に刹を現す、佛彼中に於て、衆の爲に法を演ぶ。毛孔は、即ち止報に依を攝し、佛還りて自の毛孔の内に在ることを明す。後の二は、塵内に現す所の種種の形界にして、佛も亦中に在りて尊法輪を轉す。塵は是れ、依報に正を攝する等なり。二には所因を出す中に、何に由りてか此自在の容持を得るや。一には佛の誓願自在力に由るが故に。二には衆生の心業の不思議に由るが故に。幻は土の相に喩へ、空は無礙に喩ふ。是故に、二喩は一事の相容に喩ふるなり。三に結歸の中に、初の一は塵内の佛を擧げ、次の半は塵内の刹を擧げ、下の半は正しく結して主に歸す。

【四】 四、世界の體を明す下なり。經の「爾時：種種の體あり」等の文。【五塵】 色聲香味觸の五境。眞性を汚すが故に塵といふ。

第四に體。長行の中に別の内に五有り、並に事に約して顯す。凡そ土の體を論ずるに五重有り。一には眞如、二には眞智、三には本識、四には五塵、五には諸事。諸事は即ち法門なり。將に數ぜんと爲るが故に。是を以て文の中に辨す。頌の中に十行有り。一には寶華體、二には炎空體、三には光明體、四には電光、及び願體、五には日珠體、六には寶炎、及び化體、七には佛化體、八には心業體、或は業、心海を起して土を成ず、或は心業、土を起し、或は妄念を體と爲す。九には佛身の光體、十には普賢の化願體なり。此等は並に是れ任放の辯才の説、次を待たざる故なり。

【四三】五に世界の莊嚴を明す下なり。經の「爾時：微塵に等しき莊嚴」等の文。

【依を：正を嚴る】國土の莊嚴と、其處に住する無量の菩薩。

【六に世界の清淨を明す下。經の一爾時：…塵數の清淨一等の文。】當體清淨。清淨世界の當體清淨なるをいふ。

【淨識】唯心家の通談によりていふ。【主淨】能化主淨なれば、土また淨

【四四】七に諸佛の出世差別を明す下なり。爾時：世に出興したまふ」等の文。

第五に莊嚴の長行の内、別の中に四有り。一には雲の通相、二には染の業行、三には淨の因果、四には結なり、知るべし。頌の中に十偈有り、五に分つ。初の一頌は上の總數、次の二頌は上の雲嚴、次の一頌は上の樂生業嚴、次の五頌は上の佛嚴なり、中に於て、初の二は依を嚴り、次の一は正を嚴る。謂はく、佛の數は衆生に等しきが故なり。或は衆生の數、佛に等し。次の二は雜嚴、後の一頌は上の普賢嚴なり。

第六に清淨、別の中に五有り。一には行緣淨、二には自利淨、三には利他淨、四には行滿淨、五には得位淨なり。皆前從り後を起す。知るべし。汎く土の淨を論ずるに七有り。一には當體淨。謂はく、淨識を以て相と爲す等。二には事相淨。謂はく、淨寶の等の故に。三には受用淨。謂はく、此土を受用して、惑を滅し、徳を成ずるが故に。四には住處の衆生淨。謂はく、有徳の衆生、此世界に滿ずるが故に、淨と云ふなり。五には主淨。謂はく、佛の土等なり。六には淨行の因より生ずるが故に。女の如く、無量の行海の修集する所の等し。七には淨行。即ち土の故に清淨なり、行を以て依止と爲すが故

なり。文の如く知るべし。偈の中の九頌を、六に分つ。初の一偈は上の總數を頌し、次の一頌は善友に親しむ。次の二頌は上の自利、謂はく、一には三昧行、二には信忍行なり。次の一は上の利他を頌す。次の二頌は上の二行滿、次の二頌は上の得位の益なり。

【四四】第七に佛の出世。別の中に三句有り。初は現身普遍に約す。謂はく、一身一切の差別法界に遍滿するを以て、一一の處に皆身全現す。亦身分たす、亦限分無き故なり。壽の長

釋する下。經の「爾時……分別し開示せん」等の文。初に壞に性壞と事壞の二種に分ちて明す。
【三災】劫末に起る火水風の三災。

【四七】此より下、本文を分釋す。

【初の中に云云】第一に主を擧げて因を辨ず。

【末して塵と爲す】經末にして微塵とする事。

なり。今此文の中には、初の義を辨ず、下の重頌の偈の中には、後の義を明すが故に。又釋す、初は壞に即して成なり、後は壞に即して壞なり、故に方便壞と名く。又、後の壞も亦、縁に従ひて無性なるを以ての故に。何故に俱壞を須ふとならば、見心をして盡さしめんと欲するが故に。成壞圓通の故に。問ふ、「若し爾らば、亦初は不成に即するが故に成を成じ、後は不壞に即するが故に壞を成ずることを得ば、此れ則ち壞成俱に成ずること、何んが爾らざるや。」答ふ、「理實に應に爾るべし、但、此文は第十の壞の義を釋せんが爲なり。成を釋するに非ざるが故に、辨ぜざるなり。」

(四七) 文中に二有り、先に意を擧げて總じて告ぐ。謂はく、華藏を分別し、群機を開示す。二に正しく所説を明す。説の中に三有り。初に主を擧げて因を辨ず。二に有須彌摩等の下は因所成の果を明す。三に是佛常轉法輪處は、果を結して主に屬す。

初の中に二、先は總じて辨ず。謂はく、初發意從り即ち此因を修し、因深く果厚きことを明す。問ふ、「二瑜伽論」に説かく、「一切の諸佛は要す三阿僧企耶劫を経て、修行成佛して、増無く減無し」と。何が故に此中に、乃ち阿僧祇箇の世界有りて、一一の世界並に末して塵と爲し、一塵を一劫と爲すと説くや。此に據るときは則ち不可説箇の阿僧祇劫有り、何が故に不同なるや。答ふ、「彼は三乘に約し、一方の化儀に據りて、唯此須彌極山世界に就きて説く、是故に『寶雲經』に云はく、「我淺近の衆生の爲に、三阿僧企劫修行すと説く、然れども我實に無量阿僧祇劫に於て修行する所なり」と。此は是れ三乘を會して、

【別の中に云云】
別して明す。經の
「一」の劫に於て「
等の交。

【鏡智】大圓鏡智
即ち顯教四智の一
凡夫の第八慧、如
來に至りて此智と
なる。今は衆生の
諸の善惡業の、如
來の淨智中に顯現
する邊を喻ふ。

一に歸するに約して説く。此文は一乘、十方に該通して、因陀羅網等、及び樹形等の諸類の世界に約して説く。又、法に約して時を辨せんと爲るに、法無盡なるが故に、時も亦無盡なるを以ての故に、文の中に且く、十大數の中の初數を擧げて則と爲す。亦即ち帝網の喻に通ず、故に亦無盡なり。問ふ、「若し兩らば一劫即無盡なり、何んが但一劫と言はざるや。」答ふ、「此中は無盡無盡の故なり。又徳として備らざること無きを嚴と曰ひ、垢として盡さざること無きを淨と曰ふ。又、初は即ち福智交飾し、後は斷徳離染なり。又亦、嚴は即ち是れ淨嚴なることを得るが故なり。」

別の中に汎く土の因を論ずるに二種有り、一には依因、謂はく、眞如、淨識、及び鏡智なり。二には生因、謂はく、諸の妙行願なり。今は後の義に約し、略して三種を陳ぶ。一には廣福、二には大願、三には妙行なり。初の中に一一の劫とは時廣なり。一一の劫の中に摩等の佛を供することは、因廣なり。又是れ佛の故に因深勝なり。下の地品に準ずるに、應に一切の供具有るべし、即ち供具廣なり。以上は心深なり。心は即ち供心廣なり。此文は略を存するが故なるのみ。『地論』に準ずるに、恭敬供養に各三種有り、應に彼文を尋ぬべし。『新金剛般若論』の上卷に、亦三種の供養有り。一には左右に給侍す。二には所須を嚴辦す。三には法要を詢承す。二に、願の中に、一一の劫は時廣なり。一一の佛所とは勝緣廣なり、摩等の願は願廣なり。謂はく、大誓を以て、自ら要す此果を成ぜんとするは、即ち要期の願なり。又、所修の福行、此果を成せんことを怖ふは、怖須の

【又三の中云云】
總じて料簡するに
初に二利に約し、
次に四修に約す。

【四心】 第二に因所
成の果を明す。

【蓮華藏】 無盡な
相を説くに、初は
同教一乘の分齊を
以て説き、後には
正しく本經の説
に約して説く。

願なり。佛に對して弘を發すを修と爲し、眞實離染を淨と爲す。又、十大願の中に、淨國土の願、及び餘の諸の願、應に尋ねて之を論ずべし。三に妙行の中に、修時廣と緣深廣と行事廣と、知んぬべし。亦對緣進造を修と曰ひ、修成離染を淨と爲す。謂はく、十度六度等の行、乃至一切の行、之に準ぜよ。又三の中に、初は自利、後は利他、中間は二利に通ず、又亦は四多を具すべし、即ち四修なり。一には摩數劫、即ち時多なり、長時修と爲す。二には、摩數の佛所は、即ち供佛多なり、恭敬修と爲す。三には、一の佛所の發願は、即ち願多なり。無間修と爲す。謂はく、願心相續なり。四には摩數の行は即ち起行多なり、無餘修と爲す。

（同八に）
第二に所成の果を明す中に、二に分つ。先づ此主の世界を明し、後に結通を辨ず。前の中に三有り。初には本世界を依持處と爲すことを顯す。二に此香水海上有世界性住従り下は、次の重を明し、雜類世界の性を顯す。三に香水海名樂光明従り下は、更に重ねて十二佛國土、七世界性を辨す。然るに此本師の佛の攝化の境界、諸教所説の分齊不同なり。若し小乘の中には但此一娑婆世界有り。若し三乘には二有り。一には化身化境。謂はく此娑婆等なり。二には他受用身の化境。謂はく、十八圓滿の淨土等なり。若し一乘に約せば、十佛の化境なり。蓮華藏莊嚴世界海に三種有り。一には蓮華臺藏世界は、法界に遍すと雖も、地上の菩薩の機に對するに、現に増減有り、色頂に寄在して唯一界を説く。二には此遍法界の華藏に即して、十を説きて無盡を顯す、即ち無盡箇の華藏、一一に、皆法界に遍

【四九】此より下、隨科別釋す。

【五〇】本文六段ありて、本世界の莊嚴相を顯すに、初に風水華地を根本所依たることを辨ずる一段なり。經の「佛子、當に」等の文。
【初の文に三：持す】隨釋五段ある中、初に風輪無礙經の「佛子：風輪あり」の文。

す。三には樹形等の雜類世界なり、一に皆蓮華藏有りて、並に彼界に似たり、悉く法界に遍す。各十有り、無盡無盡なり。此三の中に、初は同教一乘に約して辨じ、後の二は別教に約して顯すのみ。今此文の中に、須彌山世界の中に據りて、華藏を辨ずるが故に、是故に風輪、水輪遣つて彼に似たり。信解し易きを以ての故に、橋を印して成ずるが故に。

【初の文の中に二に分る、初は別して嚴の相を顯し、後に一一の下は總結す。前の中に六有り。初には風水華地を根本所依と爲すことを辨じ、二には地出上海の嚴等を明し、三には地能く映現する嚴、四には地上の香海の嚴、五には海間の香河の嚴、六には河間の寶樹の嚴なり。此六段の中に各二有り。謂はく、長行、偈頌なり。

【初段の長行の中に就きて五有り。一には風輪無礙持。二には風に依りて香海有り。三には海に依りて蓮華有り、四には華に依りて世界有り、五には界に依りて圍山有り。初の文に三有り。初に總、次に別、後に結なり。別の中に、前の七は各寶地を持する中に、此に二義有り。一には謂はく、一の風輪の上に一の寶地有り、是の如く次第す。二には、其諸の寶地は、皆遠く蓮華の上に在り。然るに此風力は、緣起門に隨ひて各別なるも、主屬無礙にして任持するが故に、是れ法性の風なり。此中の風に二義有り、一には無礙の義、二には有力の義、故に緣起を成ず。寶地にも亦二義有り。一には可貴の義、二には依持の義なり。人法解行等の法門、之に準す。八に時を持すとは、時は法に依りて立ち、自

【三有】欲、色、無色界の生死をいふ。

【又此中最下】いふ。二に風に依て香海有るを示す下經の「最上の風輪……香水海を持せり」の文。

【華の中……準ぜよ】三に海に依て蓮華有るを示す下經の「彼香水海……莊嚴と名く」の文。

體無きを以ての故に、持と説くなり。須彌山地は是れ、下の文の、所持の雜世界處の事、遙に所主有るが故に。一切有とは、一には、是れ諸の世界の中の、三有等なり。二には亦是れ寶地の上の、諸の莊嚴の事に通じて、一切有と爲すを得。又義を以て求むるに、前の七は次第に細從り巖に向ひ、但諸の寶地を持するに屬す。後の三は漸羅にして、下の文の所持の諸の世界性、四時三有等を持す。又、此中の最下の風輪は、超越して華上の寶地を持し、最上の風輪は鄰次に、華下の香海を持することは、上下鎔融自在無礙を顯す故に、彼染土の鹹烈海に異らんが爲の故に、香水海と云ふなり。香に二義有り。一には普熏の義、二には芬馥の義なり。水に亦二義有り。一には清淨の義、二には洗濯の義なり。海に亦二義有り。一には深廣、二には具徳なり。又十義有り、下に説くが如し。自作を具するを以ての故に一切と云ふなり。

華の中に二。初の句は義を辨す。大蓮華とは梁の『攝論』の中に四義有り。一には世の蓮華の、泥に在りて汚れざるが如し。法界眞如の、世に在りて、世法の爲に汚れざるに譬ふ。二には蓮華の性自ら開發するが如く、眞如の自性は、衆生を開悟して、若し證すれば則ち自性開發するに譬ふ。三には蓮華の、群蜂の爲に採せらるるが如く、眞如の、衆生の爲に用ひらるるに譬ふ。四には蓮華に四徳有るが如し。一には香、二には淨、三には柔濡、四には可愛なり。眞如の四徳に譬ふ。謂はく、常樂我淨なり。此の如き等、並に依止の義と爲す故なり。彼論に、又一の復次に約して釋す。謂はく、如來の願力の感する所の

【下に所持：故に】四に華に依て世界を持するを示す下經の「此蓮華藏莊嚴世界海を持す」の文。
 【下の句：增長す】五に界に依て圍山あるを示す下經の「此世界：圍繞せり」の文。

【後の十三偈】經の一堅固に善く安住一等の偈なり。

大寶蓮華王を、淨土の依止と爲すなり。華藏の名は此に因りて立つ。下の句の香幢等とは、義に依りて名を立つ。名に四義有り。一には、香に二義有り。一には體に約す、是れ氛氳の義。二には用に約す、普熏の義なり。二に幢に亦二義有り。一には體に約す、是れ獨出の義なり。二には用に約す、是れ降伏の義なり。帝釋の幢等の如し。三には光明に亦二義有り。一には是れ照闇の義、二には現法の義なり。四には、莊嚴に亦二義有り、一には是れ其徳の義、二には交飾の義なり。此中は香即ち幢、香幢即ち光明、光明即ち莊嚴にして、皆持業釋なり。亦依主に通ず、之に準ぜよ。下に所持を明すに二句有り、初の句の中に、華の義は前に同じ。藏は是れ含攝の義、出生の義、具徳の義なり。此中を通じて論ずるに二義有り。一には此土の内に一切の人法等の、諸の法門を入自攝するが故に。二には一切諸餘の利を含攝するが故に。下の句の金剛に亦二義有り。一には是れ堅の義。二には利の義なり。由に亦二義有り。一には是れ高の義。二には是れ靜の義なり。圍遶に亦二義有り。一には是れ内の攝益の義。二には外の防敵の義なり。謂はく、金剛を以て外の敵障、侵す能はず、内徳增長す。

偈の中に、二十頌有り、二に分つ。初の七は略して前の文を頌す、後の十三は勝用利益を明す。前の中に五を分つ。初の一頌は果の體用を擧げ、次の一は前の因中の供佛淨福を頌す。次の二は前の大行を頌す。次の一は前の果の内風、寶地を持するを頌す。次の二は土因大願を頌す。是れ任放の辨を以ての故に、説次を待たざるなり。第二に勝用の中に二

【後に正報の用益云云】經の一切の諸佛雲は「等以下なり」。

【下に益用を明す】經の「釋梵諸人の衆」等の文を指す

【五二】二に山下の地海莊嚴を明す下經の一佛子：金剛圍山は「等の文」。

有り、先の六頌は依報の用の益を明す。後に七頌有り、正報の用の益を明す。前の中に二有り。先に勝用を明す、四頌有り。一には世界光、二には菩薩光、三には華色光、四には淨寶光なり。並に是れ智等の法光の故に。能く法界を充照す。後に二頌有り、益相を明す。初の一是惑を滅し徳を成す。二に帝網法界を觀る。後に正報の用益の中に亦二有り。先に勝用を明すに二頌有り。一には利外の佛用を明し、二には華内の佛用を明す。又、前の珠の中の菩薩は十方に遍す、此は則ち華中の諸佛、衆生界に等しく、依正無礙の故なり。下に益相を明す、中に於て五、一には所益の機を擧げ、二には普教を興し、三には巧に機を調し、四には自分に住せしむ、斷徳なり。五には聞きて勝進せしむ、智徳なり。問ふ、「何んが佛の等語をもて說法せずして、光雲等に於て説くや。」答ふ、「此れ利用を明すを以ての故に爾なり。」問ふ、「若し爾らば、何が故に、佛光等を辨するや。」答ふ、「依正圓融するを以ての故に、佛も亦是れ利なり。」問ふ、「此中の意は、華藏界を辨す、何が故に、乃ち諸の雜化の用を説くや。」答ふ、「二義有り。一には、此は是れ利用なるを以ての故に、用を辨じ體を顯す。二には、即ち此化用、依正と爲るが故に、即ち是れ利なり。問ふ、「何が故に長行と同じからざるや。」答ふ、「長行は略して標し、頌の中には、廣く顯すが故なり。」

第二に續じて山下の地海莊嚴を明さば、長行に五句あり。初の二句は、地の名を顯す。謂はく、蓮華臺の面を寶王地と爲す。二には、地の鎮海を明し、三には、地相の具徳、四には、地體堅固、五には、地の勝用を明す中に於て、初の句は法寶を出し、後の句は智を起

【衆德嚴】體に衆德を備ふること。【法行嚴】自在の妙用あるをいふ。

【第二段の中に四例】經文の一種種の華香一等といへる以下四例。

し照す。頌の中に十偈あり、二に分つ。初の六は衆德嚴を明し、後の四は法行嚴を明す。又、初は是體衆德を備へ、後は妙用自在を明す。又、初は依、後は正なり。又、初は事相の嚴、後は法理の嚴なり。又、初は法、後は人なり。又、初は前の文を頌し、後は異義を明す。竝に知んぬべし。初の中に、先の一は總じて嚴因を辨し、次の二は上の山地を頌す。中に於て、初の一は標なり。謂はく、寶輪、香輪を山上の嚴と爲し、珠輪衆寶を山下の依と爲す。後の一は釋なり。謂はく、初の二句は上の寶輪嚴を釋し、次の一句は上の香輪を顯す。下の一句は莊嚴の義を辨す。梵には研迦羅と云ひ、此には輪圍山と云ふなり。次の一偈は、上の體相の二嚴を頌す。謂はく、初は體、後は相なり。次の一偈は上の香水海を頌し、次の一偈は上の地の勝用を頌す。亦是れ海岸邊の寶地の上に、即ち寶樹有り。樹下の座に佛菩薩の身有るなり。第二段の中に四偈あり。初の一は總じて身語法輪を明し、次の二は別して身色依正無礙を辨す。中に於て、初は一偈、多の嚴具の中に現す。次は多佛、一の嚴具の内に現す。即ち物を調するを法輪と爲るなり。又前は華香、旛蓋の中に、菩薩、法界に充つ。此は則ち寶輪寶樹莊嚴の中に、諸佛の身雲、十方に滿つ、竝に正を以て依と爲るなり。後の一偈は別して上の語法輪を顯す、此れ即ち和說なり。此上は三世間に通じて圓融無礙なり、隨ひて一門に入れば、皆一切を具するが故に、然ることを致すなり。又此等の諸文は、長行の所説は則ち其次第を編し、事に隨ひて解を生ぜしむ。偈の中に頌する所は、則ち其始終を融じ、圓通無礙にして法性に順す。長行は法を以て、機に就き、偈

【五】三に寶珠の莊嚴を明す下。經の「彼大新迦羅…」等の文。
【居】恐くは尼の字の誤か。

頤は機を會して法に歸す、文家は綺へ互にす、善巧の相、應に知るべし。

第三に寶珠嚴の内、長行の中に六句あり。初の句は寶の名を顯す。謂はく、山を外樹と爲して、世界中に居す、故に内と云ふ、山中に在るを内と爲すに非ず。不可壞と名くるに四義有り。一には體壞すべからず。謂はく、金剛末居の故に。二には德壞すべからず。謂はく、衆寶を藏攝し、同じく自の中に在るも、衆寶は相破せず、相として相形奪せざるごと無きを以ての故に。自ら亦壞せず、無二なるを以ての故に。三には用は壞すべからず。謂はく、物を雨らすこと多端にして、互に奪破する無し。四には映すること、壞すべからず。謂はく、多身を映現して奪破すべからず、現處に重ねて現じて、相礙せざるが故に。二には珠の勝用を辨す。謂はく、洞徹明煥の故に能く現す。此中に、映は是れ能現、影を所現と爲す。何が故に、佛等、及び餘の刹を現ぜざるや。謂はく、彼は所化に非ざるが故に。若し爾らば何んが心念を現ぜざるや。謂はく、色法に非ざれば、現の義無きが故に。三には寶華嚴地の中に、以て莊嚴と爲すことは、上の二句に通じて、同じく大地を嚴る。四には雲嚴、五には香嚴、六には三世嚴とは、謂はく、三世の諸佛の華嚴界を嚴ること、皆此と同じ。又亦此嚴は、三世に同じきが故なり。又、所嚴の藏體は、三世に通ずるが故に。縦ひ現在に於て一華を何て嚴るも、所嚴に同じきに由るが故に、即ち三世に通ず。是に知んぬ、一華一鬘皆三世に過す、三世俱に現じ、各過未を具して、即ち九世を該ぬ。又、以は、猶し用のごとし。縦ひ所嚴の刹、唯一念に在りとも、三世一切の嚴具を用ひて

【初の一偈半】 偈頌の初より、上は無覆せりまでをい

【次の二偈半】 經の「種種…長養せり」の頌。

【次の五偈】 經の「悉く一切の佛以下なり。」

【五三】 四に地上香水海の莊嚴を明す下。經の一彼大地の處…等の文。長行を十四句となすこと、本文の如し。

【五四】 香水河の莊嚴を明す下。經の

莊嚴するが故に、即ち所嚴は能嚴に同じて、三際に遍するなり。又亦能所一念に、即ち九世を具することを得、相即入に通ずる故に、十世を具す、無盡を顯すを以てなり。上の四の釋に於て後の三を勝たりと爲す。頌の中に十偈あり、四に分つ。初の一偈半は上の不壞摩尼を頌す。次の二偈半は寶華嚴を頌す。次の一偈は雲嚴を頌す。次の五偈は三世刹の嚴を頌す。中に於て、初の一は地に三世の行を現じ、次の一は地摩に俱に刹入る。次の一は菩薩受用の嚴、次の一は佛法體用の嚴、次の一は普賢の願、及び佛智を得れば、能く多刹に入るなり。

第四に香海嚴の中、長行の別の内に、十四句あり。一には香寶岸、二には寶網覆、三には寶水滿。四には寶華敷、五には末香、其水を香くす。六には佛音を出す。七には香普く重す。謂はく、教法の及ぶ所なり。八には寶階道。謂はく、入法の階梯なり。九には珠の欄楯。謂はく、外非を防ぎ、内徳を守る。十には波浪の聲。十一には華鬘圍。十二には華城外を周る。十三には香華、水を布く。十四には香樹を嚴と爲す、竝に事に即し法に即す、之を準思すべし。頌の中に十偈あり。初の一は海を頌し、二は岸を頌し、三は水及び佛音を頌し、四は階及び欄を頌し、五は寶樹を頌し、六は華布を頌す。分陀利、此には白蓮華と云ふ。七は寶網を頌し、八は華城を頌し、九には以周其外を頌し、十には因を擧げて結成す。

第五に香河嚴の内、長行の別の中に三句あり。一には華覆、二には出處、三には隨流な

「一」の香水海に「**【別の中】**一種種の寶華」等の文。**【依正無礙：出づ】**今の文は、法性に種子の教門流布するを表示するなり

【五五】寶樹の莊嚴を明す下。經の「彼香河の中間」等の文。

【第二に總結】經の「佛子：莊嚴あり」の文。

【五六】第二に重ねて雜類の世界性を明す一段なり。經の「諸の佛子：此香」等の下。**【所依住を辨ずる】**六文に一或は

り。依正無礙なるを以て、佛從り出づ。正を表すが爲の故に眉間より出づ。謂はく、教河流潤なるは、證知從り出づるが故なり。然るに教に眞義を帶ぶるが故に、寶王、流に隨ひて眞性を失はず、即ち隨縁と不變と無二なるは是なり。頌の中に十偈あり。一には總じて河相を明す。二には涯岸の莊嚴、三には香水流浪、四には河旋所至、五には歸寶自然、六には河體普周、七には網因の修を演ぶ。八には岸果行を聞く。九には河周因を舒ぶ。十には河源果に従ふ。

【五六】第六に寶樹の中、長行の内に五句あり。一には樹體を明す。謂はく、無漏の法林樹等は即ち衆德建立の義なり。二には寶幔覆ふは、即ち大慈普覆なり。三には因力の所起。四には果德加成す。五には極めて嚴の際を盡す。頌の中に二偈あり。初の一は、果行自在を頌し、後の一は因行所起を頌す。又此二頌は即ち是れ樹なり。人法無礙なるを以ての故に。

【第二に總結の中に、分齊の境多し。別說すること盡し難きが故に、總じて一一と云ふ。然るに一の中に於て嚴事猶多きが故に、總じて摩數と云ふ。又嚴は別に彰し難きが故に、通じて清淨と云ふ。知んぬべし。】

【第二に總結の中に、分齊の境多し。別說すること盡し難きが故に、總じて一一と云ふ。】第二大段は第二重を明す。前の蓮華臺の内の、諸の香水海の上に持する所の、諸の雜世界性に依る。長行の中に於て、初は總、後は別なり。別の中に、先づ所依住を辨ずるに六有り。後に能依の形を顯すに九有り。此中の世界性とは、謂はく、世界を積みて性と成す、性を積みて海を成す等、上の所引の『智論』の説の如し。又、此下の文は、世界海の

世界性有りて：摩尼寶王に依りて住し」とあるを指す【能依の形を顯すに九】文に「或は須彌山：網の形」といふを指す。

【二に三偈】經の一或は光明の身ありの偈。
【三に三偈】經の一種種の門は：爾なり」の偈。

【五七】三に重ねて十二佛國七世界性を辨ず。

中に於て世界性有り、世界性の中に、一世界等有り。故に知んぬ積成するなり。何が故に、性と名くとならば、二義有り。一には、前の諸界に望めて、諸の流類を攝し、積結して性と成るは、久しく習ひて性と成る等の如し。二には、後の海等に望めて因と爲るの義あり、故に亦性と名くることを得。問ふ、「界を積みて性と成る、界もまた因の義、何んが性と名けざるや。」答ふ、「融結無きが故に、初の義を闕くなり。」問ふ、「十世界の中の海、後に望めて亦餘界を積成す、何んが性と名けざるや。」答ふ、「初は積結して攝するに、已に性の名を得。後は異義を開き、轉じて別の號を立つ、故に性と名けざるなり。」後に能依の形を顯すに凡有り、知んぬべし。頌の中に十偈あり、四に分つ。初の二偈は上の佳形を頌す。二に三偈有り、刹に色聲莊嚴有ることを明し、體徳圓備を顯す。三に三偈有り、諸の刹土、即入無礙を明し、妙用自在を顯す。四に二偈有り、三世間の自在を明すは、即ち攝化の勝用、依正無礙を顯すなり。

第三大段は、上に向ひて廣く諸刹を持つることを明す。中に於て二あり。初は上の海及び海上の華を標す。二に持刹及び性を辨す。此中に十二の佛土、七の世界性あり。諸徳の釋有り、華藏界の外の十方國土と爲す。其文を詳にするに、恐らくは然らず。既に華藏の内の、香海の中の蓮華を取りて持す。故に知んぬ、外に非ず。況んや下の文に、舍那に結屬する故に、亦外に非ず。但、此中の大意に、衆の香海を明す中に、略して一海を擧ぐ。一海の所持の十方刹の中に、略して一方を擧ぐ。一方既に爾り、説くとも盡すべから

【又汎く佛云云】
此下汎く立名の所
由を論ずるなり。

す、餘方は例準せよ。一海の所持の十方無盡にして、皆法界に遍す。餘の一一の海皆十方
を持して、各法界に遍じ、無礙圓融無盡自在にして、即ち不可説不可説なり。大意此の
如し、之を思へ。二は所持の中に二あり。初は一方、後は十方を結す。前の中に二あり、
先に十二重の佛土を明し、後に七世界性を辨す。此十二佛土は、有人は、用て十二因縁に
配す。有人は、菩薩の十二住等に配して、一一に之を釋す、義恐らくは然らず。豈十二數
の同なるを以て、即便配せんや。但、此經の明す所は、皆、應に十數に應じ、以て無盡を
顯す、縱ひ十二七八等の數有れども、皆是れ増減の十なり。『地論』の釋の如し、還りて是
れ十數なり、豈配することを得んや。況んや義理又別なるをや。又此經の所説、一事一土
皆法界に遍じて、一切の入法、教義、因果、理事等の一切の法門を具足す。適一相に非ざ
る故に、一門を以て釋すべからざるのみ。上下の諸文皆此に準じて知れ。問ふ、若し爾ら
ば、上來の諸文、何が故に、皆一二義等を以て釋するや。一答ふ、一還りて一切の一を以て
釋するに過無し。是故に、或は一にして少ならず、或は多にして増せず。文を成せんが爲
の故に、之を前後に布く。深く意を得べし、多少無礙なり。又汎く佛、及び利を論ずるに、
立名同じからず。略して五相に由る。一には、或は機感に因る。一には、或は佛の本願に
由る。三には、或は本行に依る。四には、或は先佛の記別。五には、或は法門を表示す。
此中に佛及び利土、依正圓融するは、法義を以て之を消息すべし。應數の香海及び世界性、
準釋して知んぬべし。又有義は、此上は總じて二重と爲す。初は此佛の華藏の土、及び

【結通…知んぬべし】經の「一方の如く十方も…處なり」の文を指す。

【第二に十海を頌す】經の「不思議の佛刹」等以下の偈。初め十一は因縁を以て起る世界を頌す。
【七因縁】神力因、業種因、願力因、幻業因、心盡因、妄想因、心行因。

所持の世界性を辨じ、後に十二佛土従り下は、他佛の土を辨じ、亦世界性を持するに、總じて二對と爲す、須らく之を思ふべし、結通及び結屬、竝に知んぬべし。

第二重の頌の中に七十偈有り。但、次前の長行の中の事を頌す。是れ前の十世界海及び華藏等を頌するに非ず。彼は各偈有るを以てなり。重頌訖んぬ。前の十二佛國、七世界性は、皆通じて此十海の義有るに由るが故に、是故に偈の中に頌して其狀を顯す。彼長行と綺へ互に廣略すれば、亦前の諸文に同じ。中に於て二に分つ。先に九頌は總じて前の文を頌す。二に餘頌は別して、前の中の十海を頌す。初の中に四有り。初の一は根本所依の華藏の土海を顯す。次の三は總じて能依異類の諸刹を辨す。次の三は別して略して能依の刹の形を顯す。後の二は通じて佛刹の不用を擧ぐ。第二に、十海を頌する中に、文は則ち十と爲す。初に十一偈有り、起具因縁世界海を頌す。中に於て七因縁有り。初の三は神力の因を頌す、此中に、初の一は本に就きて壞無し。後の二は末に隨ひて、虧盈す。二に如依種種の下の二頌は、業種の因を頌す。初の一は報異り、後の一は業殊る。三に譬へ如意寶の下の二は願力の因を頌す。初の一は寶珠現色の喩、後の一は龍現空雷の喩なり、四に猶如工幻の下の一は、幻業の因を頌す。五に如見彩畫等の一頌は、心畫の因を頌す。六は衆生心不同等の一は、妄想の因を頌す。七に猶如見導等の一は、心行の因を頌す。此七何の別とならば、初は是れ威神を現す、二は是れ種子の力、三は是れ宿願力、四は是れ現行、五は是れ本識現、六は是れ轉識想、七は樂欲の器の故に別なり。二に無量眞珠の下

現行、五は是れ本識現、六は是れ轉識想、七は樂欲の器の故に別なり。二に無量眞珠の下

【五】 上は果問に答ふる一段終り、以下第二段に得果の因を辨じて因問に答ふる下なり。經の一諸の佛子乃往久遠」等の文なり。

の二頌は、莊嚴世界海を顯す。三に或有佛刹地の下の四窟は、清淨世界海を顯す。中に於て、初の一是唯染、次の二は亦染亦淨。後の一是唯淨、初の一是衆生、次の二は菩薩、後の一是諸佛なるを以ての故に、所居の土をして染淨有らしむ。此三は漸次に淨に向ふが故なり。四に一佛國土中の下の四窟は、壞方便世界海を顯す。亦初の一是唯壞、次の二は亦成亦壞、後の一是唯成にして壞無し。染は壞すべく、淨は常に存するを以ての故に。五に或有佛刹起の下の二十頌は、體世界を顯す。中に於て、初の六は純染苦の體、次の四は雜苦樂の體、後の十は純淨樂の體なり。中に於て、初の五は事に隨ひて體を辨ず、後の五は妙用自在なり。六に或無量佛土の下の三頌は、住世界海を顯す。中に於て、初の一是能依の形を擧げ、後の二は所依の住相を顯す。七に或如師子座の下の三頌は、形世界海を顯す。八に或壽命一劫の下の二頌は、劫世界海を顯す。九に或國土無佛の下の五頌は、佛出世世界海を顯す。中に於て、初の一是總じて標し、次の二は化身示現を明す、次の一は、機熟すれば時として現れざるは無し、後の一は非器、時として現すること有ること無し。十には或利極濁惡の下の七頌は、說世界海を顯す。中に於て、初の二は惡道の聲、次の二は善道の聲、後の三は法輪の聲なり。上來は總じて相通じて、前の果問を答へ竟んぬ。

【五】 自下第二段に、得果の因を辨ず。前の問の中の、一切菩薩所修行海等の間に答ふるなり。又釋す。亦是れ前の諸世界性の中に於て、一世界性を開きて、内所有の三種世間及び五海等を顯す。文の中、四に分つ。一には往の時處を擧げて、佛の世に興るを辨じ、修行

【初の中に四：利益なり】別釋四ある中、一往時の處を舉佛の興世を修行の縁とすることとを辨ず。

【第二に：如し】二、修行せし普莊嚴童子を明す。經の一語の佛子、時に彼炎光」等の文。

【又王及び云云】此下、二子を辨じて童子の名を釋す

の縁と爲す。二には彼炎光城、從り下は、普莊嚴童子能修行の人を明す。三には童子見佛の下は、對縁を辨じて、正しく自分の行を修成す。四には彼佛滅後の下は、復更に佛を見て、勝進の行を成ずることを明す。

初の中に四あり。一には往時を擧げ、二には往處を明し、三には處の中の間、四には場上の佛出なり。今は即ち初の、第二の往處の中に四あり。一には海中に性を取る。二には性内の山林。三には林東の勝城なり。中に於て、初に依報勝、後は人衆勝なり。四には眷屬城嚴なり。第三に場の内に、初は場地、後は華座なり。第四に、佛興の中に、初は佛出、後は放光利益なり。

第二に能修行の人を擧ぐる中に、王とは、順理の善慧有りて、物をして愛見せしむ。問ふ、『涅槃』の中に、一切の輪王、皆定んで千子あり、増せず減せずと、何が故に、此中、乃ち同じからざるや。答ふ、『彼は是れ四天下に王たるの輪王なり、三乘に約して説く、此は是れ世界性に王たるの輪王なり、故に寛大にして彼より深細なること、白淨なる寶網等の如し。恆沙の金輪王の福の、感ずる所なるを以ての故に。此は一乘に約す。説同じからず。』又王、及び長子は、是れ福分、童子は、慧分と爲す、是故に、入道の器を成ず。徳、法界に周きを普と曰ひ、普徳交飾するを嚴と爲す。普即ち嚴、普嚴の童子、普嚴即ち童子なり。竝に二釋に通ず、離染貞潔は道器と爲ることを表すが故に童子と云ふ、文殊等の如し。

【第三に：眷屬なり】三、位分の行を成ぜしことを辨對す。經の「時に彼童子」等の文。

【二に佛：得しむ】これ、緣力、因力、因緣具力の三を以て釋す。

【此十定云云】以下別して述す。

【二に普觀云云】初は偈を説く。

【偈聲の分齊】經の「時に彼童子：聞かざるなし」の文を指す。

【三に王云云】經の「爾時、愛見善慧」等の文及び偈頌を指す。

【第二に開經云云】開經得益を明す下なり。經の「爾時、

第三に、自分の行を修成する中に二あり、初に佛を見て定を得て、自分の始と爲し、後に經を聞き定を得て自分の終を成す。前の中に四有り。一には自利得定、二には偈をもて勸めて、他を化す。三には王喜びて、偈をもて告ぐ。四には俱に共に佛に詣る。初の中に、佛を見たてまつる、功德善根の因緣の故にとは、三釋有り。一に、佛を見る功德善根の、因緣力に由る、此は則ち唯境力に屬す。二には、佛の功德を見て、生ずる所の善根の因緣力に由るが故に定を得。三には外に佛を見るの功德を緣と爲し、内に自ら宿せし、善根有るを因と爲すに由る。因緣具するが故に、定を得しむるなりと。此十定の中に、初の五は他利を成せんが爲に。一には果法を具し、二には普巧に入り、三には巧に器を成す。四には正しく機を益す。五には益の分齊なり。後の五は自利を成せんが爲に。一には加行を成じ、二には正證に入り、三には廣後智、四には涅槃に順じ、五には菩提に順す。又初のいは總、餘の九は別、順釋すること知んぬべし。二に普觀の中に、初は偈を説き、後は偈聲の分齊なり。偈の中に、初の四は佛徳の遇ひ難きを歎す。次の三は遇ひて勝益を成ずることを明す。後の一は興供を結勸す。三に王喜びて、偈をもて告ぐる中に二。初は王聞きて歡喜し、後は偈勸して告令す。中に於て三あり。初の一は告を擧げて宣告す。次の七は、嚴りて勝供を辨ぜしむ。後の一は、念を興して佛に詣らしむ。四に俱に共に佛に詣る。中に於て二あり。初は王及び内の眷屬、後は八部の外の眷屬なり。

第二に開經得益の中に三あり。初に說經の名を明す。謂はく、行能く果を現す、果を擧

如來：故なり一の文。

【一には：該ぬ】

【二には：歸心す】

【三には：契法無畏】

【四には：圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

【三に如來：記す】

【四に法界圓明】

ば、因を取るが故に、現等と云ふ。若し此義に従へば唯因に據るなり。又此佛の集會は即ち顯現と爲す。此れ則ち唯果なり。此中の三世は、是三の現在の故に、即ち九世、十世を具するなり。爾らずんば、過未は既に無なり、如何が現と證かん。是れ一乘圓教の故に、眷屬を攝するのみ。二に童子獲益の中に二あり。初は得定自利の益、二には善備化他の益なり。初の中に四定あり。一には普く境法を該ぬ。二には攝入して歸心す。三には契法無畏。四には慧眼圓明なり。二に利他の中に二あり。初は證傷、後は得益なり。傷の中に三あり、初の一は總、謂はく、上半は前の法限定を頌し、下半は總じて眼所見を擧ぐ、次の七傷は、別して佛の本生を辨ず。佛に由りて見ることを得。後の二は別して諸佛を見て、物の修因と爲す。益を獲ること知んぬべし。三に如來を讚述す。九傷の中、五に分つ。初の一は總じて童子を歎じ、次の二は別して正報を記は、次の二は別して依果を記す。次の二は其苦行を歎じ、後の二は總じて依正を記す。

第四大段は、勝進行を成ずる中に二あり、初に佛を擧げて行の所依の縁と爲す。中に於て、先に佛の滅後に、佛興るとは、行異り、緣別なるが爲の故なり。童子報命猶存することば、行相續の爲の故なり。二に縁に依りて、益を成ずる中に於て、二あり。初に佛を見て、四定を得るを、勝進の始と爲す。一に念佛とは『地論』に云はく、「佛の所得の如く、我も亦當に得べきを、念佛と爲す」と。二には普門に入り、茲に海藏を窺む。三には智持を能轉と爲し、智法輪は正しく所轉を成ず。四には、深法は神を悅ばすが故なり。二

三昧をいふ。次の念佛已下の四禪釋なり。

【經名】一切法界自性離垢淨殿。

【二に定に約す】經の一普莊嚴童子是經を三昧と名

【五九】童子の得法を明す。この一段

【五九】童子の得法を明す。この一段

【五九】童子の得法を明す。この一段

【餘相に故に】今二放を以て、本天成佛の義趣を示す

【亦應に：竟る】以下、經の來ることの盡不を明す。初に經來未盡を辨

【亦應に：竟る】以下、經の來ることの盡不を明す。初に經來未盡を辨

に經を聞きて定を得るを、勝進の終と爲す。經名とは、謂はく、法界自性清淨の故に離垢と云ひ、恆沙の功德を具ふるが故に莊嚴と曰ふ。前の經は果相に就き、此中は果體に約することは、自分と勝進、漸く深きが爲の故なり。二に定の中に、初は自利に約し、後

は利他に約す。又、此中の童子の得法、是れ何の位とならば、義、上下の經の意に準ずるに、三種の成佛有り。一には位に約す、六相方便を以て、即ち十信の終心、勝進分の後、十解の初位に入りて即ち成佛す。此は是れ三乘終教、不退の位なるを以ての故に。一乘は六相融攝して、即ち諸位を具するを以て、佛果に至るなり。是故に此中の童子、初の佛を見るを信位の自分と爲し、初の經を聞くを信位の勝進と爲す。後の佛を見るは、解位の初の自分に當る。

後の經を聞くを、解位の初の勝進と爲す。諸位を攝して皆具するを以ての故に。二には行に約して、總じて位に依らず。但自分勝進究竟して、即ち佛果に至る。三に理に約す。則ち一切衆生、竝に已に成じ竟んぬ、更に新たに成ぜず、餘相皆盡くるを以ての故に。性徳本滿し、相皆盡くるが故に。此後に、應に結會有るべし。謂はく、彼童子とは、今の某甲是なり等と。亦應に動地雨華し、他方來證し、及び十方を結通し、并に偈をもて重頌する

等有るべし。但、經の來ること盡きざるが故に、未だ有ざるなり。問ふ、「此會、既に了りぬ、何んが衆中に、人の、益を得ること有らざるや。」答ふ、「略して四意に由るが故に別の益無し。一には、前の三義の中に於て、初の二義に由るが故に、童子の益相を説く。後の

【逐機の教】小乘
三乘教をいふ。
【逐法の教】同教
一乘をいふ。

一義に由るが故に、衆の中に別の獲益無し。二には光統釋して云はく、「此經は佛、初成道の説にして、但一乘圓教法輪の體を、諸教の本と爲ることを顯す。諸教の益相を、此益と爲すが故に、辨ぜざるなり」と。三には但教に二種有り。一には逐機の教を説く。法を攝して機に隨ふに、機に増進有り、分に隨ひて益を辨ず。二には逐法の教。機を攝して法に同するに、法に増損無きが故に、差別の益無し。四には此經は猶し日出でて、先に高山を照すが如し。既に中下の機無きが故に、隨分の益無し、下の文の諸會、竝に此に準じて知れ。第一會を釋し竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第三

本品以下六品は、第二普光明會にて説かれたるもの。今はその第一文殊佛力をうけて如来の名號を説く品なり。

【一】釋名の下、三に分つ、第一分の名。

【普光法堂會云云】會名を釋するに五義を擧ぐ。

【無礙：普と爲す】一塵のうちに法界を入れ、一行のうちに萬行を收む、相即相入して障礙するなきをいふ。

華嚴經探玄記

卷第四

此れ第二會初より此會を盡し竟る

魏國西寺沙門法藏述す

如來名號品第三。亦四門を作りて分別す。初には名を釋し、二には來意、三には宗趣、

四には文を釋す。

初の中に三あり。先に分の名とは、白下は第三の修因契果生解分を明す。謂はく、此れ從り第六會に至る來は、所修の五位の圓因を説きて、十身の滿果を成ずるを辨じ、諸の菩薩をして此義相を解せしむる故に、以て名と爲す。二には會の名とは、普光法堂會と名く。然るに釋に五義有り、一には事に約す。謂はく、佛、堂内に於て光を放ちて、普く照す、故に此堂を名けて普光と爲す。中に於て法を説くを、又法堂と名く、此れ依主釋なり。二には法に約す。謂はく、眞俗趣かに周きを普と曰ふ、妙智照達すれば光と云ふ、境智玄軌を法と爲す、此れ普光即法なり。又普光の法を詮す。堂の内に之を説く、依主を名と爲す。法は二釋に通ず、堂は唯依主なり。三には境に約す、謂はく、普は體、光は用なり、法は教義に通ず。四には唯智に約す。亦境に説くが如し。五には實に約す。謂はく、無礙法界、一塵一行、皆遍く因陀羅網、重量に顯現す、故に稱して普と爲す。即ち普く圓明煥曜せり、故に復光と云ふ。正軌にあらずといふこと無し、故に亦法と云ふ、即ち法

【三空】 有爲空、無爲空、畢竟空。

【十號】 佛の十號

【二】 前會に次いで今會の來る所由と、品の來由を述べ。

【名號等】 四諦、光明覺二品を等す

【二は攝し、氣き】 前品は依報、これ所信の境法、自下三品は正報の三業攝從心の表あらばたり。

【前の會】 寂滅道場會。

【問ふ等しく云云】 これ依正前後の問答なり。

は縁に應じて、陰を成すれば堂と爲す、皆持業釋なり、三空を以て門と爲す等の如し、例準して知んぬべし。又、信は六位を該ねて普と稱す、惑を滅し、理を顯すを光と爲し、機を除すを堂と爲す。三に品の名とは、如來の名號の、依主釋なり。或は如來即ち名號なり、十號の中に、如來を一と爲すを以ての故に。中に於て、名は謂はく、釋迦等の別名、號は謂はく、十號、諸佛の通名なり。又、體を召するを名と爲し、徳を標するを號と爲す。又亦、名と號と別無し、文の内に説くが如し。

二に來意に亦三あり。先に分の來ることを明すとは、前に既に果を擧げて、信業を生ぜんことを勧む。今は彼果の能得の因を明して、正解を生ぜしむ、故に次に來るなり。二に會の來ることは、修因の中に、信最初なるが故に、次に來るなり。又謂はく、前の會には所信の境を明し、今は能信の行を辨す、義次第するが故なり。問ふ、名號等の三、豈能信に屬せんや、答ふ、信を成ぜんが爲の故に、同會に之を辨す。問ふ、前に豈信を成せざるや、答ふ、凡そ境に約して信を生ず、境に二義有り。一は境法を標擧して、所在有ること

【問ふ修因云云】
これ同會有果の問答なり。

【相の所依實を辨ず】前品には性海自體隨縁を明し、今は殊形隨縁に約し、果海の自體微妙にして思ひがたきを反顯す。
【三】宗趣を明す
【二周の因果】所謂差別と平等にして疏には修生修顯といふもの。

し、後に正報を辨ず。又亦無在なれば、擧ぐるに隨うて皆得べし。問ふ、修因を明すが中に、何が故に、此會と第六とは、皆果法有るや、同會の中間の諸會に、此例無きや。答ふ、此會は是れ修因の始にして、果と同會なり、果、會の初に在り、十地等は是れ因を成するの終、亦果と同會にして、果、會の後に在り。此等は、果海に依りて、以て圓因を起し、因滿は還りて圓果に融歸することを顯さんが爲なり。此れ乃ち文の中の宏致、始終の幟幟なり。三に品の來ることは二釋有り。一には云ふ、前の品には依果を明し、此は正報を明す。正報の中に、三業に過ぎず、此品には身業遍應するを明す。謂はく、名號は身に依りて立つるが故に。四諸品は佛の口業普周することを明し、光明覺品には、佛の意業遍應することを明し、三輪攝伏す、俱に是れ正報なり、然るに身業は最も顯なるが故に、先づ辨ずるのみ。二には釋して云はく、下の問答に準するに、又此品に國土海の義を明す、前の品は既に世界海を辨ず、即ち體の隨縁を明し、其果相を顯す、今は即ち縁に約して、反顯して其果體を明す、相の所依の實を辨ずるが故に、次に來る。各三世間に通じて之を思ひ見つべし。又前の會は華藏に約し、此は忍土に約す、意有り云云。
三には宗趣を明すとは亦三あり、先に分の宗を明し、通じて第六會に至る來、同じく是れ一翻の問答なるが故に、須らく同じく辨ずべし。謂はく、是れ二周の因果なり、初は相、後は體なり。前は是れ因果縁起、後は是れ理實なり。二には會に約するに亦二、謂はく、人法なり。人に亦二あり、謂はく、所信と能信となり。所信の中に、化主の内證する

【三】には品に約す。今は相實に約す。
 【四】以下正しく文を釋す。序、請分、説分の三ある中、初に序釋なり。
 【長】長行。
 【初】の中に三有り。序分を明す中、三世間あるをいふ。經の「佛摩竭國」等の下。

十海を體と爲す、七日思惟を相と爲す。又即ち其像の如きを相と爲し、加説を用と爲す、又、通を現し、及ぶ光照を用と爲す。助化の中に、文殊、信の中の妙慧を以て體と爲し、吉嚩の勝徳を相と爲す。又一切處に遍するを相と爲し、所説益物を用と爲す。謂はく、説偈等なり。二に能信の中に亦二あり、先づ因に約す、澄淨を體と爲し、具徳を相と爲し、殊勝の功業を用と爲す、竝に賢首品に説くが如し、檢出すべし云云。二には果に約す。信の中に顯す所の無盡法界を體と爲し、十身の勝徳を相と爲し、機に應じて化益するを用と爲す、亦賢首に説くが如し。法に亦二、先づ境に約す。謂はく、信の中の平等の十海を體と爲し、機に約して十と説き、及び勝徳を相と爲し、行教と相應するを用と爲す。二に行に約す。謂はく、信行の内證を體と爲し、諸位を融攝するを相と爲し、成佛益生を用と爲す。問ふ「未だ知らず、此舍那佛は是れ何の位の中の佛ぞや。」答ふ「若し信の法を説くは、即ち信の中の佛なり、餘位も亦爾り、之を思へ。」三には品に約するに亦二、一には相に約す。如來の身名普應して、廣く群生を益するを宗と爲す。二には實に約す。十佛の國土海を以て宗と爲す。

四には文を釋すとす、此修因契果、生解分の一翻の問答の内に於て、長に分つに三有り、初には序分、二には請分、三には説分なり。此中の序も亦第六會已來に通ず、請と説も亦爾なり、初の中に三有り、一に佛の所在を擧げて器世間を明し、二に善覺知の下は、諸徳を敷じて智正覺世間を明し、三には與十佛土の下は衆生世間を辨す。初の中に相傳す。普

【普光堂云云】佛の所在を明す下、普光堂を説明す。

【五】序の中第二に、智正覺世間の明す。經の「善覺智無二」：達す一の文【智正覺世間】。嚴宗三世間の一。如來大智慧を具し、永く偏邪の法を離れ、世出世間の法を證得したまふをいひ、釋迦の能化の智身を指す。

光堂は菩提樹の東南、三里許りの懸連河の曲の内に在り。佛初めて成道のとき、諸龍、佛樹下に露坐するを見て、遂に佛の爲に此法堂を造る。良に以みれば、諸龍、多く陰覆供養を爲すが故なるのみ。又、堂は樹に近きを以ての故に、場と同じく擧ぐ。又、此經に依るに、菩提樹を以て本と爲す、餘處は皆此を離れず。又此中の初に始得とは、信法に約して之を辨す。蓮華藏とは信行開敷して、染を離れ、徳を攝す、法に約すること之に準ぜよ。又『大集經』の中に、「菩薩、蓮華陀羅尼を得るが故に」と。凡そ說法の處に、皆蓮華座有り、餘義、竝に前の釋に同じ。

二に善覺智の下は、智正覺世間の殊勝を釋す。中に於て十句あり、文は「攝論」の受用身の二十一種の殊勝の功德の中の、初の十句に同じ。下の第七會の初の如き、二十一句總じて具す。今「攝論」及び「佛地論」に依りて此十句を釋せば、初の九は總、餘の九は別なり。總の中に、善覺智とは、彼には正覺と名く、謂はく、後の九徳を具するを善覺と名く、理に順じ、邪を離るるを以て、正と名け善と名く。開明照察を、覺と名け智と名く。別の中に、初に無二念とは、是れ一向無障の功德なり。謂はく、二障を離るるが故に。凡小に異なるが故に。又遠時方等の境に於て、知不知の二の現行無きが故に。是故に、二念無きに由りて、善覺智と名く。二に達法性とは、「論」には趣無相法と名く、此は是れ能く無二に入る功德なり。亦調化方便功德と名く。謂はく、自ら能く有無の相を離れたる、清淨眞如に入る、亦他をして入らしむるが故に。三に佛の所住に住すとは、是れ所調化を觀する

【二障】煩惱、所知の二障。

【三】序の中第三に衆生世間を明す。來集すの文。

功德なり。謂はく大悲に住して、常に世間を觀するが故に。又是れ任運無功に、有情を利樂して休息せざる功德の故に。又聖天、及び梵住に安住するが故に。四に諸佛に等しとは、謂はく、諸佛、相似の事業を得るの功德、法身の中に於て、所依意樂作業別無し、即ち理と智と益生の三法は別無し。五には至無礙趣とは、是れ所治を永斷する功德なり。謂はく、二障の對治道を修して成就し現前し、已に解脫一切障處の所依趣に到るが故に。六には具不退法とは、是れ外道を伏する功德なり。謂はく、證の教法。彼、轉ずること能はず、彼を伏して、己が正道の法を顯すが故に。七には無境界とは、是れ魔怨を伏する功德なり。謂はく、違順の中の境、心を礙ふること能はず、世間に在りと雖も、八法に汚されず、世境心を礙して、善を障るを以て魔と稱す、此れ彼を降すが故に。八には住不思議とは、是れ教法を安立する功德なり。謂はく、所説の勝教、一切の尋思の境を超過するが故なり。九には等遠三世とは、是れ三世を記別する功德なり。謂はく、去來を記別すること、皆現在に如し、分明にして別無し、故に等遠と名く。此九の別を具して、初の總句を成す、同異成境、準思して見つべし、

三に衆生世間に釋する中に二有り、先は其人を簡定し、後に其實德を數す。初の中に四有り。一には多を簡び、少に異す。謂はく、十佛の國土、微塵數の故に。二には大を簡び、小に異す。謂はく、大菩薩の故に。三には終を簡び、始に異す。謂はく、一生補處の故に。四には新を簡び、舊に異す。謂はく、他方從り來集す。然も此四位、前を以て、後に望め

【一生に三義有り】
一生を釋す。

【四種の變易云云】
梁攝論十に四の生死を明す。一、方便生死。二、因緣生死。三、有有生死。四、無有生死。

【攝論】 梁の攝論
六の九丁。

【因果】 世間生死の因果。

て展轉奇特なり、皆準知すべし。三の中に、一生に三義有り。一には人中に約し、二には天上に約し、三には下生の身に約す、此は化相に就く。若し實報に約せば、四種の變易報の中に、唯最後の無有生死の一位猶存する有り、故に一生と云ふ、此經の意は、前の義に約して辨す。二に數德の中の文に八句有り、義に七對有り。初の二句は藥病の一對なり。謂はく、初の句は彼機器の種性を了し、後の句は深く所授の法界を證す。二に常に善思す等は、染淨の一對を明す、謂はく、「攝論」の中の如し。依他起の上の遍計染分を、生死と名け、圓成の淨分を涅槃と名く、二分異らず、一の依他と名く、若し、一分餘分、性異らずと見る、是故に、經に説く、「如來は生死をも見ず、涅槃をも見ず」と。又一「中論」に云はく、「世界と涅槃とは毫釐の差別も無し、此を深淨無礙と名く」と、四句融攝す。或は本を以て末に従へば、唯世間なり、或は此に反すれば、唯涅槃なり。或は相融じて雙て現す、或は形奪して兩亡す、巧に此理を觀するを、名けて善思と云ふ、恆に觀じて息まざるを、名けて常思と云ふ。三には因果の一對。謂はく、諸の衆生の報果と業因、種種の差別あり、明かに此等は皆、衆生の諸識の心行に依りて、成立するを得と了す。四には教義の一對。謂はく、義は是れ所詮の諸法の義、味は、是れ能詮の諸法の教なり、則ち名句味身なり。五には縛解の一對。謂はく、彼世間の相、即空なりと觀するが故に、離世法と名く、世を壞するを待たず。六には理事の一對。謂はく、緣所起の法を名けて有爲と云ふ、無性の眞理を名けて無爲と云ふ、緣を會して、即ち眞、而も緣起を壞せず、是を究竟分別

無爲と名く、理を泯じ、唯事にして理を失せざるを、名けて究竟分別有爲と曰ふ。下の文に云はく、「有爲界に於て無爲界を出ず、而も亦有爲界を壊せず、無爲も亦爾り」と、之を思準すべし。七には三世の一對。謂はく、三の現在に、各過未を攝することを知る、及び相即入す、是を十世と爲す。塵は猶し無のごとし、貫は謂はく、通なり、此三世に於て、通達せずといふこと無し。上來序分竟んぬ。

【七】二に請分即ち諸菩薩、佛の説法を請ふ下。釋の「時に諸の菩薩成」等の文。

【先際：問ふ】過現未に通じて問ふなり。

【七】二に請分。此中に、通じて下の五會の文を請す。中に於て三有り。初に念請、二に念問、三に念現なり。問の中に、裕梵等の法師は、一百二十四の問を顯す。謂はく、初の十は法身自體の行を問ふ。中間の一百は報身起修の行を問ふ。後の十四は方便身平等の行を問ふ。又若し中間の九十の問を合して九問と爲せば、即ち總じて四十三の問あり。光統師は隨喜心等を合して一問と爲し、即ち三十四問と爲す。初の十は先際の佛法を問ひ、次の十は中際の佛法を問ひ、後の十四は、後際の佛法を問ふ。下の第六會に至る來た、之を答ふ。今此釋に依らば、總じて分ちて三と爲す。初の十は因所依の果を問ひ、次の十は果所起の因を問ひ、後の十四は因所得の果を問ふ。「攝論」に云はく、「此法身從り流せずといふこと無く、還つて此法身を證せずといふこと無し。因は果に依りて成じ、還りて能く果を剋し、果は能く因を垂れて、還りて因は果を成す、因果相成し、緣起無性にして、自性無きを明さんと欲するが故に」と。即ち眞法界の無性即體にして、緣起を礙せず、故に眞法界、因果を壊せず、因果緣起、理實の義、此に安じて立すべし。

【八】後に正しく答に配釋する三、初に先臨の十問の釋

【初】の十問に二の釋なり。初に依正に約するうち、初二を通問、後八を別問にす。

【二】には唯土海等。初に前五後五に分ち次に總別に約す

【土に九の義】土に就いて九義あるを示す。

【八】の十問は、此會の初の三品の内に、通じて之に答ふ、若し別の分は、四諦は説法の
一問を答へ、光覺は勢力と正覺との二問を答ふ。此品は餘の問を答ふ。通答は文に順ぜり。
明難より下の三品は、別して白ら問有り。信は位を成ぜざるを以ての故に、懸に十信を問
ふの言無し、十住等には同じからず。此初の十問に二の釋あり、一は依正の二果に約して
問を爲す。謂はく、初の一是通じて淨土の依報を問ひ、二是通じて法身の正報を問ひ、三
は土の嚴具を問ひ、四は法身の所證を問ひ、五是土の離染を問ひ、六は證後の説法を問ひ、
七は前の土の體を問ひ、八は正報の光輪を問ひ、九は縁に應じて土を起すことを問ひ、十
は正等覺の八相等の事を現するを問ふ。二には唯土海に約して問を爲す、下の文、及び「璣
瑠經」に準ずるに、此會には國土海の義を明すを以ての故なり。十の中に、前の五是土の
衆德具足することを明し、後の五是土の體用圓備を明す。又初の一是是れ總なり、餘の九は
是別なり。別の中に、土に九の義有り、一には別住の義。謂はく、紅蓮華等なり、「攝論」
に説くが如し。二には具徳の義。謂はく、理事事等、各校節有り。三には軌持の義。謂
はく、土法の比證の所得同じからず。四には離染の義。謂はく、自性と相及び用と等く淨
なり。五には成教の義。謂はく、言に約して土を顯す、世界等と説くが如し、六には自體
の義。謂はく、理智識事皆體有るが故に。七には妙用の義。謂はく、威光攝伏等なり。八
には縁起の義。謂はく、衆生の機に隨ひて佛刹起るが故に。又利に隨ひて因行を起さしむ。
又利に隨ひて佛出づるが故に亦起と云ふ。此は「兜沙經」に順ぜり。又因緣具るに隨ひて

【九】中深の十問を釋す。初に總じて答處を辨ず。

刹起ることを得、起具因縁世界等の如し。九には現覺の義。謂はく、諸の刹海、現に正道を成す、依正無礙なるを以ての故に。餘義は下の答の中に準じて之を知れ。

次に因中の十問、昇須彌從り下、菩薩住處に至る來之を答ふ。初の九は位に約する自行を問ふ、後に隨喜の下は隨緣化物の行を問ふ。初の中の十藏は、何が故に、問は廻向の後に在りて、下の答は廻向の前に在るとならば、藏に二義有るを以てなり。一には是れ出生の義の故に。廻向の後に在り、生地上の證智を出すが故に。二には是れ收攝の義の故に、廻向の前に在り、諸行を收攝して、廻向を成せしむるが故に。此二義に由りて、二處に互に顯す故に、相違せず。十願は初地の内に答ふ、十定は十忍品に答ふ。觀心、理を納むるを忍と爲す、止心、散ぜざるを定と爲す、止觀無礙にして、唯是れ一心なるを以ての故に、二處に各一義を顯す。諸の菩薩、眞俗の境を緣するに、皆二義有るを以てなり。一には顛倒せず、二には散亂せず。具には『梁論』の説の如きのみ。十自在は十明品に答ふ、作用明かに委きを以ての故に、二名を立つ。別翻の『菩薩本業經』の彼問の中に、亦十明と名くるを以ての故に、『兜沙』の中には十乘法と名けたり。又十願は別の答を見ず。古の人『梵網經』を將て、此に於て會を計して、此れ脱錯せりと云ふ有り、恐くは依用し難し。今彼經を尋ぬるに十一處にして説法す、六處は此に同し。彼に云はく、『化樂天』にして十禪定を説く、初禪にして十金剛心を説く、二禪にして十願を説く、三禪にして十忍を説く、四禪の摩醯首羅宮にして、心地法門を説く」と。重會普光及び紙洄重閣を云はず。又

【梵網經】華嚴經と同部の經、百二十卷六十一品ある中、羅什は菩薩心地戒品第十のみを譯す。梵網とは一部重無盡なること梵王の網の如きに譬ふ。

【摩醯首羅】大自在と譯し、色界の頂上に位する天神なり。

此問、彼と不同有るが故に用ひ難きのみ。有が云はく、「不思議品に答有り」と、但、不思議品等に既に後の果問を答ふ、此に屬す可らず。又僧祇品に十大數を明す。因位窮終して數の中の極なり。故に亦、十頂と云ふことを得と。但、此品の初に、自ら別に問有るが故に亦屬し難し。壽命品の中の十重の佛土、上は窮終に至る、賢首佛刹は最極なるが故に、稱して頂と爲す。然るに十重有るが故に十頂と云ふこと、亦傷無きことを得。彼品の初に、既に別の問無きを以ての故に、答を爲すことを得。此中には、下に望めて尊高なるに約して問を爲す。下の文は當處に就いて、相續して答ふ。又但此經の下の文に、別に問有らば、即ち此に於て問無けん。下に若し問無くして説有らば、即ち是れ此問を答ふるなり、故に須らく之を知るべし。隨喜心より下は、菩薩の隨緣起行を問ふことを明す。即ち菩薩住處品に之を答ふ。彼文の中に、菩薩、機に隨ひて普く諸處に應じて、勝行を起すことを明すを以ての故に、此は能依の行に約して問を爲す。下には行所住の處に就いて答を爲す。此に依りて判するに、中際佛法の中に、問答相屬、亦極めて明かなるのみ。下は隨緣化他を明す。中に初は他の少善を見て心に隨喜す。二は衆生を化して佛種を紹がしむ。謂はく、佛種子を衆生の田に下す等なり。此二は是れ化他の心、下は化他の行を明す。謂はく、云何が斷ぜざる、救度を以ての故に。何れの處にしてか救ふや、煩惱妄想の中、如何が救ふや。根行を知るが故に。何を以てか救ふや。法業を解するが故に。云何が救度成る。謂はく、集垢を離れ、苦難を超え、道疑を決し、愛滅を證せしむ。次の如く四句應に知る

【三】後際の十四問を釋す、初に答處を辨定す。【中に於て等】難に隨ひて別釋す。

【二】説分の中に二。初に通じて問答文の處を述す。

【初の中に就いて二】別して當會の所答を釋す。

【初の中に二の意あり】次に隨釋。【即ち満つ】所問を領解してその所念の如くに顯現するが故に、自ら五會の答を成す。

【五會…促せず】能現に約す。【六位…縛せず】所現に約す。

べし。

後際の中の十四問は、不思議品より普賢品に至るまで、通じて之を答ふ。中に於て勝法とは、是れ菩提の勝法、上の文に同じ。不動轉は是れ無功用の故に、餘義多く前の會に釋するに同じ。

第三に、説分の中、下の五會に通じて、前の所問を答ふ。中に於て三に分つ。初は此會の中に、前の初の十問の、前際の佛法を答ふ。二に第三會従り下は、中際の佛法を答ふ。

三に不思議品従り下は、後際の佛法を答ふ。初の中に就いて二、先に衆を集め圓を顯し、後縁に對して正しく説く。前の中に二、先に能集を明し、後に所集を明す。初の中に、

二の意有り。一には前に望めば、問を答へんが爲、二には後に望めば、衆を集めんが爲なり。前の意の中に、心念とは所問を領す。又受法の心の器量を擧ぐるなり。即ち其像の如し。神力を現すとは現像の答なり、其器に満つるなり。謂はく、其所念の如く、上の一百

二十四の問の如き、及び下の第六會に至る、來、説く所の法門、此問を答ふことは、皆如來の法界身の中に於て、圓明に傾に、其像を現ぜずといふこと無し。是故に、後の五會

を展べて而も延びず、一身に傾に現すれども而も亦促らず。又六位歴然として殊らず、圓融即入すとも、而も壞せざる者は、良に此に由るなり。衆をして此を觀て、以て靈襟に沃

がしむるときは、則ち答と爲すのみ。彼念じて、願くば、我爲に現ぜよと云ふを以ての故

に、今之を現するなり。下の經に「清淨法身の中に、像として現ぜずといふこと無し」

【機に應じて】：以神通力を釋す

【三】所集を明す初に總じて文段を判ず。

【三】別して所要を釋するに四、初に上の佛菩薩の名を釋す。

と云ふ故に。又、像とは、緣集の所成、無礙の義なり。機心の器量に、佛身を印するを以て、此像を成す。又佛身、機に應じて此像を現するを以て、各空有の二義、及び有力無力の義有り、四句融攝し、分別の義無し、之を思へ。又、機に應じて現するを以て、像動きて功能を攝するを神通力と爲す。

二に衆を集むるが爲とは、世尊、衆人を集むることを擧ぐ。心念を知るとは、衆を集むる所由を辨す。其像の如しとは、法に稱ひ、機に合することを明す。神通力を現すとは、正しく衆を召して、集めしむることを明す。又、所説の像の如くにして、神力を現し、他方の菩薩をして、此道光を見しめ、某の法を説くを知りて、此に來集す。亦此衆をして、佛の此像を見しめ、定んで我所問の法を説くと知りて、歡喜して住す。何を以てか知るとならば、如來の身光に、其二種有るを以てなり。一は密の故に知り難し。二には顯の故に知らしむ。知らしむるが中に、其所應に隨ひて、將に何の法を説かんとする、佛の身光、先に彼像を現じ、衆見已りて、某の法を説くを知らしむ、般若を説く時の如し、智論を勸法華を説く時の如し云云。故に「其像の如し神通を現す」と云ふなり。二に所集の中に、十方の内、一一の方に、各三世間有り、知んぬべし。又、各八義有り。一には遠近、二には土の名を出し、三には佛號を標し、四には主の菩薩、五には眷屬を攝し、六には此に來りて敬を致し、七には座を化作す、八には本方に依りて坐す。

世界を同じく色と名くることは、信位の法相、顯顯著なるを表すが故に。佛を同じく智

【前覺本覺より起る】衆生の本性たる自性清淨心へ本覺の内熏と、漸教の外縁ありて漸次に覺悟するをいふ。

【二に出處】文殊の出生地を明す。

【三に師資】文殊の師資を明す。

【四に位】文殊の階位を明す。【首楞嚴三昧】新譯に首楞伽摩といひ佛所得の三昧の名。

【五に徳用】文殊の徳用を明す。【光覺品】五の八右一切處に文殊偈を説いて前説に

と名くることは、信の中の最初の始覺、本覺從り起るを表すが故に。菩薩を同じく首と名くることは、信は是れ因の初なるを表すが故に。其文殊の名義、略して五義を叙ぶ。一に名とは、文殊師利、或は尸利と云ひ、或は漫殊室利と云ふ、或は翻じて敬首と爲し、或は薄首と云ふ、又薄首と云ふ、又は妙徳と云ひ、又は妙吉祥と云ふ。此中の十菩薩、梵本に依るに、同じく室利と名く、「兜沙經」の中も亦同じく師利と名く。又梵語に、頭を喚びて室利と爲す、吉祥徳等も亦室利と爲す、故に翻譯同じからざることを致すなり。二に出處とは、若し「文殊般若涅槃經」に依らば、「是れ此土の婆羅門家に、佛滅後四百年に生る。香山の頂に於て、已に涅槃樂に入る」と。若し此經に依らば、是れ東方の菩薩、現に清涼山に在り。「寂調音經」に亦云はく、「是れ東方、此を去ること萬佛世界にして、國を寶住と名け、佛を寶相と名く、彼土の菩薩なり」と。三に師資を明すとは、「放鉢經」に依るに、「昔は釋迦の師爲り」と。此經に云ふ、「是れ三世の諸佛の母、一切の菩薩の師なり」と。四に位を明すとは、若し因に約すれば是れ十地の菩薩、常に首楞嚴三昧に住するを以ての故に。若し果に約せば、「首楞嚴經」に依るに、「南方平等世界に於て成佛し、龍種王と號く」と。五に徳用を明すとは、「如幻三昧經」に、降魔場等は、是れ調生の力なり。「現寶藏經」に依らば、迦葉揷せる等は是れ勝通力なり、空に従ひ、決定して論ずるに、匹當し難きは慧力なり。此は三乘に約す。下の光覺品の一切處等の如きは是れ一乘なり。諸方の菩薩、皆頭面に佛を禮すとは、禮佛の義に略して三門を作る。一には禮の數、二には敬の

起異す」の文。
【諸方の菩薩云云】
三に禮佛の儀を釋す。

【二四】縁に對して正しく説くうちに二、先に總じて六品の科を立つ。

【二五】別して三品を科する初に總じて五段を分つなり。

【初の中に云云】次に五科を隨釋す初に衆の希有を歎す。

儀、三には得果を明す。初の中の三業禮に、二の意有り。一には三處に禮すること有るを以ての故に。二には佛に天眼、天耳、他心有ることを顯すが故に。二に敬の儀に七有り、孔目の如しと云。三に得果とは二有り。一には近は五果を得と云。二には遠は佛果を得、賢首品の説の如しと云。方に依りて坐すとは、「智論」の第十二に依るに、外道は他法、佛を輕んずるが故に坐す、白衣は客の如きが故に坐す。一切の五衆は身心佛に屬す、是故に立つ。若し大阿羅漢の事、已に辨ずる者は、坐することを許す、餘の三果は坐することを聽さず、大事未だ辨ぜざるが故に。王の、重臣は坐し、餘は皆立つこと有るが如し、今此は城に是れ、大菩薩なるが故に、是を以て坐するのみ。

【二四】縁に對して正しく説く中、二に分つ。初の三品は正しく通じて前問を答へ、後の三品は論に因りて論を生ず、別問別答す。又釋す。前の三は是れ能發の行縁、後の三は是れ所發の行相なり。又釋す。前は是れ所縁の果境、後は是れ能縁の因行なり。此信行は是れ住の方便にして、自ら別位無きが故に、初に問無し。

【二五】別して三品の中に就いて、五有り。初に衆の希有なるを歎す。二に問を牒して總標す。三に標を徴して體を顯す。四に體を徴して相を辨す。五に相を徴し、用を明す。初の中に、何が故に、佛に問うて、文殊答ふとならば、即ち佛慧に同ずるを以ての故に。吉祥の妙慧、土海に達するが故に。諸の菩薩の踊悅の心を増すが故に。何んが入定せざるとならば、信は位無きを以ての故に、前の會、豈位有らんや、是果徳深細なるを以ての故に。此中に

【二に問を牒す云】隨釋第二に牒問總標初に略して文意を述ぶるうち初に牒問の有無を辨じ、次に解釋す

【不思議とは云云】總じて大意を辨ず

【不思議の義に三種有り】別して不思議の義を明す。

【第三に標…中に】隨釋第三に徵釋して體を顯す。

豈果法無からんや、因を成ぜんが爲を以ての故に。通じて廣因を具するが故に。希有なりと歎ずることは、略して二義に由る。一は此一會に、是一切の虚空法界等の處會有るを以ての故に。二には此れ即ち法門なるを以ての故に。竝に光覺品の説の如し。二に問を牒する内に、佛出とは、是れ前の七八二問を牒す。阿耨菩提は、前の示成正覺を牒す。或は佛出は示成正覺を牒し、七八二問は略して牒せず。阿耨菩提は是れ通結、餘の句は前に同じ、知んぬべし。總標の初の句に、不思議とは諸句に貫通す。故に結して皆不思議と云ふ。不思議とは、此中の大意は、一味の法界に於て、義をもて分ちて二と爲す。一は能隨の土海、二は所隨の機縁なり。此二は無二にして、通融無礙なり。若し縁を以て體に従へば、即ち當相圓融して、別として別すべきこと無し、言説及ばざるなり。若し體を以て縁に従へば、即ち復、差別縁起を印成す。此殊形の縁起に約して、土體の妙極難思なることを反顯す、是れ其意なり。此義に由りて、不思議の義に三種有り。一には縁に寄するの詮、土體の、縁を絶するの義を反顯す。此れ則ち言は縁の中に在るも、意は縁の外に居す。故に不思議と云ふなり。二には既に縁に約して土を顯す、縁起塵等なるを以ての故に、土の體をして縁に従ひて差別を印成せしむ。此れ則ち土の、無別の別にして、別而も別ならざること明す、故に不思議なり。三には縁に、別の縁無し、體即縁なるを以て、是故に、差別の縁起即ち是れ、甚深の土海なり、此を、理は至近なれども識り難しと謂ふ、故に不思議なり、之を思へ。第三に、標を徵して、體を顯す中に、先に標を徵して云はく、何を以てか

【二門雙べて融ず】能隨の土海と所隨の機縁の二雙融ず【實際無きが故に】虚空法界と等しく不可説不可説の自體なるをいふ。【第四に：辨ず】隨釋第四に、體を徴して相を辨ず。【娑婆は云云】文に隨ひて廣く釋す

【十句の中に於て】十句とは本經の文に、種種の身、種種の名、處所、形、色、長短の壽命、諸得、業報といふを指す。

不思議なりと知るを得るとならば、後に體を顯して云はく、「諸佛の法は彼所化に隨うて、法界に等しきを以ての故に」と。二門雙べて融ずるが故に。實際無きが故に。此は體に約して、略して釋す。第四に、體を徴して相を辨ずる中に、先づ體を徴して云はく、「何を以てか、差別無邊にして法界に等しきが故にと知ることを得」と。後に相を辨じて云はく、「未だ十方盡空世界を論ぜず、且く此一の娑婆界に約して、説いて略して十種を辨じ、以て無盡を顯す、餘の無邊界は、應に準じて之を知るべし」と。娑婆は、此には堪忍と云ふ。『悲華經』に云はく、「此中の衆生、貪瞋癡等の過、梵王之を忍ぶ故に名と爲すなり」放鉢經に云。此種種の身等、諸徳有り、釋して佛身等と爲す、是故に下に名號の不同を辨じて、則ち種種の名を釋するなり。今細に此文を尋ね、及び『兜沙經』に準ずるに、此は乃ち是れ所化の衆生にして、是れ能化の佛には非ず。此句は長し、是れ西國の語法なるを以て、應に一切種種身等、乃至不同の衆生を教化すと云ふを一句と爲し、所見亦異なるを別して一句と爲すべき義、即ち解きつべし。但、佛土は平等にして、別として別すべきこと無きが爲の故に。所化の衆生の差別に寄せて、以て土海の差別の相を辨ず。十句の中に於て、初の一は、總じて五蘊身の差別を擧げ、二には、身に依りて、名を立つること同じからず。三には、身一切處に在り。四には、種種の處に隨ひて種種の形有り。色は謂はく白黑等なり。五には、身形有るに隨ひて命に脩短有り。六には、識體取得の諸境、或は修行證得の分齊なり。七には、境體、根に入る。或は智能、法に入る。或は悟入の門異なり。八に

【第五に辨ず】
釋の第五、相を
一段にて用を辨ずる
一四天下にて佛號
不同なり。等とい
ふを釋す。
【又二分つべし
云云】文殊、佛身
佛號を説く下なり

は、略すれば唯六根、廣すれば二十二根、或は信等の五根、或は利鈍生熟等、下の第九の廻向諸根海の處の説の如し。九には諸趣の差別、或は四生五趣、生行稠林等の如し。十には、業、異にして報殊ること、業行稠林等の如し。梵本及び「兜沙經」に依らば、此一一の句に、皆種種の言有り、略を存するが故に爾り。是故に、結して種種不同衆生と云ふなり。所見亦異とは、直業報依正差別無邊なるのみに非ず、心中の懷見怖望各異なり。「兜沙」の中には、一名は各各に聞佛の聲有り」と。又亦前の九句は報の差別を辨じ、第十は業の差別を明す。此は見の差別を顯す。又此衆生の差別分齊を説いて土海の相と爲すことは、三義有りて、釋す。上の標の中の、不思議の處に辨するが如し、此に於て、之を思うて用ふべきのみ。第五に相を徴して用を辨ずる中に、先づ相を徴して、所隨の根器の差別は爾るべし、能隨の差別は云何が見るべきと云ひ、用を釋して、異機に印現する佛法多門にして、具に説くべきこと難しといふ。異に就いて三を論ず、初に身名普應の用、二に言教遍周の用、三に光輪窈照の用、竝に下の與に則と爲る。又二分つべし。一には佛、二には法なり。佛の中に亦二、一には身、二には名なり。法に亦二、一には實、二には權なり。中に於て、佛身及び實教の差別明し難し。光覺品に同じく説けり、佛名權教は差別を辨じ易し、此二品に別して論ず。又釋す。此初の二品は、文殊、義を擧げて、前の所問に答酬す、後の一品は、如來、事を擧げて、答釋して前の義を成するが故に、前の二品の中に就きて、名教の二法を辨ず。既に此差別、上の所問の如し、佛利等の義、差別思ひ

【問ふ、此中云云】
以下問答して通釋す。初に佛名の通立。次に世界の安

【海印】海印三昧
大海中に一切の事物印現する如く、佛智海に一切の法現するが故に名く

【名と無名と俱に離す云云】絶對界にありては名も無く無名もなく、一切の名句文浪絶なるが故なり。
【大圍山】大鐵圍山。

難し。法界と等しきこと、意此に存せり、即ち通答と爲す。初に名の別を釋するに就きて二あり。先は名の別を顯し、後に皆是下は別なる所由を釋す。前の中に二。初に徴して後釋す。釋の中に三、初に此界を辨じ、二に十方界、三に盡窮法界なり。問ふ、此中の名號は、唯是れ舍那佛の名とや爲ん、餘佛に通すとや爲ん。答ふ、若し三乘に約せば、唯此界の内の百億萬は、是れ釋迦の名なり、餘の十方界は是れ別佛の名なり、若し一乘に約せば、盡法界總じて是れ舍那の名なり。問ふ、若し爾らば、何が故に上の文に、十方の諸佛の說法、彼心行を知る等と云ふや。答ふ、皆此佛の所化の處なり、故に別佛無し、又是れ釋迦海印の中に現するが故に別佛無し。又釋す、一佛の名、既に十方に遍するが如く、餘の十方の佛、皆各是の如く、十方に遍す。又若し三乘の機は、諸の四天下の中に於て、各彼當處の佛の號を聞くに隨ひて、未だ必ずしも餘處の佛の名を知らず。若し一乘の機は、一時に頓に一切の名號を納む。一切の機に應ずるの名なるを以て、一機能く受くる者、是れ普賢の機なるが故に。一機即ち是れ一切機なるが故に。又此名號、若し小乘に依らば、是れ實の名なり。三乘の初教は即假即空即名なり、終教は此名即ち平等にして、同じく眞如なり。經に云はく、「名字の性離す、是を解脫と名く」と。頓教は一切皆絶し、名と無名と俱に離す、圓教は亦俱に離るれども、名を礙へざるが故に。今一名即一切名なり、一切名は一名に即入して、壞せず礙へず、一切の法界を攝し盡す、因陀羅網の名なり。問ふ、此大千界は餘の經論に依らば、大圍山の内の平滿にして、百億の四天下有り、上方下

【須菩提】西北方四天下の名。
 【訶尼】東北國土の名。
 【婆伽婆伊那婆那】北方四天下の佛名

【六】別なる所由を釋す。機を躒し來るに、初に佛自らに約し次に機縁の處に約して述す

方に、更に四天下有ることを得ず。若し上下に、皆有らば、則ち一一の四天下に、皆上下有るが故に、應に三百億有るべし、云何が仍唯百億と説くや。答ふ、若し小乘は、實處なれば、理改動すること無し、若し三乘は、即空眞如等と雖も事を礙へず、故に本事を壞せず。若し此一乘は、事即無礙、圓融自在なり、是故に、此中に處を明し、教に隨うて圓融して、十數に應じて無盡を顯す。此娑婆の一界に二種有りて融ず。一は法を説くの處を以て、即ち當中と爲す。主伴を成ずるが爲に、彼百億を融じて上下有らしむ、便ち圓なることを得るが故に三百無し。二には、縱ひ最東の、圍山に近き邊の一四天下に於て、説法の主と爲すも、即是の當中に、彼餘の四天下を融じ、還りて十方の眷屬具足する有るは、諸の四天下、皆他に望めて伴と爲り、自に望めて主と爲るを以ての故に。是れ則ち圍山も亦隨うて融じ、移改するなり。餘の十方界等の融する義、之に準ぜよ。此は一乘教に約す。若し三乘に約せば此の如きことを得ず。餘經論に之を説くが如し。須菩提、此には善實と云ふ、訶尼、此には、或は捨義と云ひ、或は生滅と云ふ、本語定め難きを以てなり。婆伽婆に六義有り云。伊那婆那は、此には王林と云ふ。謂はく、佛、太子爲りし時、此林中に在りて生ず、故に此名を立つ。

第二に、別なる所由を釋する中に三有り。初に機を躒し、二に化を施し、三に化の意なり。初の中に二の意あり。一には云はく、此等の名號、法界に遍することは、猶自ら目く佛に於て、縁有りて化すべき衆生に依るに、此差別有り、一切を謂はんとには非ず。二に

【化を施す中に】
施化の五句。

【三輪】身、口、
意の三を以て説法
するなり。

【四諦品】機類の
不同により、教法
の名字不同なるを

明さんとし、一切
世界の四諦名稱を
列舉し、佛の語業
の勝妙なるを示す

【一】四諦の名を
釋す。
【二】當品の來由
を述べ。

【三】宗趣を明す
【無邊…爲す】こ
れ相に約す。
【及び…同ず】こ
れ實に約す。

は云はく、此機、何んが佛に於て縁有ることを得るや、謂はく、佛、往昔、多劫に修せし時、見聞隨喜等の故に縁有り、更に逆順有り云云。二に、化を施す中に五句あり。初の句は、總じて三輪攝化の善巧を説く。二に語業の方便、三に身業の方便、四に意業の方便。五に施化、根に稱ふ。又釋す。初の句は身に威儀を現じ、生を攝するを以ての故に、種種の方便と云ふ。二に語業梵音等。三に所説の法。謂はく、人天の爲に業報等を説き、二乗の人爲に權道を説く、即ち四諦はなり。三に化意とは、謂はく、隨ひて人天二乘等の法を説く。意は、其をして如來の法を知らしめんと欲するなり。

四諦品第四。四門は前に同じ。

一には名を釋すとは、四は是れ數なり、諦は是れ義、謂はく、理實の故に、能く無倒の解を生ず、故に俱に諦と名く、即ち帶數釋なり。此品は是れ四諦の義を解するに非ず、但四諦の名字の不同を明す、故に四諦品と名く。

二に來意の中に五あり。一には前品の末の、權道の義を釋成せんが爲に。二には前は身業に依り、次に語業を辨するが故なり。三には、前には能説の人の名字の不同を明し、此は所説の法の名字の不同を明す、故に來るなり。四には、前の問の中の佛の説法の問を答ふるが故に。五には前の機の印成する所の差別の法の中なる、權教の異相を釋成せんが爲の故に、次に來れり。

三には宗趣とは、無邊甚深の諦海を以て宗と爲す、及び上の土海に同す。四諦の義、略

【四】文を釋するに三門あり、初に此土の諦名を明す

【先】初に名を列ね、立つ、初に文殊佛

子、所説の菩薩とは一と列名し、次に四諦の名、四十億百千那由陀有

りとは數を結す。一諸の樂生の、應

に調伏すべき所に隨ひて是の如き説

を作す一とは意を辨ずるなり。

【本執を失はしめ】故に四諦有る

無盡の法門あるを知らざるの執見を破し一乘教に入れしむ。

【一乘共教】故に三乘に同じて四諦

を説く、一乘共教【通じて下位を收

む】別教一乘該攝

して五門を作る。一には名を釋し、二には相を辨じ、三には體性、四には業用、五には種類なり。別時に作すべし。

四に文を釋する中に三、初に此土の諦の名を明し、二に娑婆の外の十世界の中なる諦の名を辨じ、三には十界外の盡空世界の諦の名を顯す。初の中、四諦の内に、一一に各三

あり。先に名を列ね、二に數を結し、三に意を辨す。謂はく、機に應じて調伏せしめんが爲の故に、此名を立つ。調とは調和、伏とは制伏なり。謂はく、身口意業を調和し控御し、

諸の惡行を制伏し、除滅するが故に。何が故に文殊説くとならば、妙慧、善く實諦の義に達するを明すが故に。又何が故に、唯、四諦の差別を顯す。謂はく、是れ權教の差別、

知り易きが故に。又法と寄顯せんが爲の故に。何んとなれば、謂はく、此小乘は局處の法、尙此の如きの遍空の世界の差別異なること有り、則ち知んぬ、一乘通方の法の差別、無

邊なること、理として疑はざるが故なり。又、計を破し機を引かんが爲の故に。何んとたれば、謂はく、彼小乘の局法を演べて、過ぜしむるが故に。本執を失はしめ、便ち一乘の

無邊法界を顯し、其をして趣入せしむるが故に。又此は一乘共教に約して則と爲す故に。通じて下位を收むが故に。苦を生ずるの集なるが故に、苦集と云ふ。苦盡るの滅を苦滅と

名く。苦滅に至るの道の故に、苦滅道と云ふ。單に苦道と言ふことを得ず、道は苦を生ずるに非ざるを以て集に同じからず、又苦を滅するに非ざれば滅に同じからず。但、能く滅を證するを、應に滅の道と云ふべし。滅は是苦滅するを以ての故に、苦滅道と云ふ。餘文

門の意を以ていふ
【苦を生ずるの集】
此下經中の集滅道
の名を釋す。

【如來光明覺品】
佛の意業自在を顯
さん爲に、總じて
二十五重の放光を
叙ぶ。

【四門】 初に釋名。
二に來意、宗趣、釋
名、來意、宗趣、釋
釋名の四。

【體に依りて用を
起し】 如來の光明
をいふ。

【用に依りて益を
成す】 光明により
て開覺するをいふ

【二】 來意を述ぶ
【四には云云】 長
行偈頌を以て身、
教に配す。

【六に：來れり】
如來更に事の體遍
を擧げ給ふを示す

【諸名】 四諸名の
こと。

【七に：來るなり】
初は權實を以て別
遍闡遍を示し、更
に、差、無差別を
以てし來由を示す

は知んぬべし。

如來光明覺品第五。四門は上に同じし。

初に名を釋すとすは、謂はく、如來の光明、光明の開覺。謂はく、體に依りて用を起し、用に依りて益を成す、皆依主釋なること知んぬべし。

二に來意とは七有り。一には、前には身語を明し、今は意業を明す、故に來るなり。二には、別して前の功德勢力等の間に答へんが爲の故に。三には、前の二品には、別して人法遍を明し、此には變べて二遍を顯すが爲の故に。四には、前は但、佛名普遍なることを論ぜんが爲なり。此は佛身の實徳も亦遍することを顯す、前は四諦の權教普遍なることを説く、此は十偈の實教も亦遍することを辨す。謂はく、長行及び頌二處是れなり。五に

は、疑を斷ぜんが爲の故に。謂はく、前の品には、交殊、佛名法名の差別、普遍することを説くも、衆の疑ふことを恐るるが故に、佛、身光、彼事を照現するを以て、衆をして目に靦て、疑網自消せしむる故に來る。六には、直に前の如く、但佛名、諸名の虚空法

界等の世界に遍するのみに非ずして、今如來即ち此に華嚴を説きたまふ時も亦是の如し。一切の盡空世界に遍して、一一に皆、時同、處同、衆同、説同なり。即ち目に驗に見て、下の軌則と爲るが故に來れり。七には、前の佛名、諸名は、則ち多名別別に遍す、是れ權

なるを以ての故に。今は一法一會、即ち圓融して遍することを明す、是れ實に約するを以ての故に。又前は是れ差別遍、此は是れ無差別遍の故に、次に來るなり。

【三】宗趣を辨じて一品の綱要を提示す。

【各二有り】光に身智二光、境に事理二境、覺に事覺理。

【良に：壞せず】

一境を合す。

【境無二：見るなり】二光を合す。

【又亦：一覺なり】二覺を合す。

【又此光：故に】

覺じて光境覺の三を融す。又曰く、以上四の中、初三は總じて事理無礙を述べて、後一は平等無障礙なるを結するなり。

【一會即一切會】法界一切道場なる意。

【四】文を釋す。初に總じて述意を分つ。

三に宗趣とは、先は宗、後は趣なり。宗に二有り。一は開、二は合なり。開の中に三、一には能照の光、二には光所照の境、三には照所成の覺なり。此三に各二有り。一に身光、事境を照して、衆をして覺見せしむ、事に限礙無し、即ち長行に辨ずる所なり。二に智光、理境を照して衆をして覺見せしむ、理に差別無し、即ち頌の中に明す所なり。二に合とは、良に理事俱に融じて、唯一境なるを以ての故に。故に一事即ち遍ずること無礙なることを得て、本相を壞せず。境無二なるに由るが故に、身光即智光は唯一無礙光なり。法華經に云ふが如し、「是光は根無し、青に非ずして青を見るなり」と。又亦即ち事覺即理覺にして平等唯一覺なり。又此光は覺境に異ならず、三法回融して唯一法界なるを以て、平等にして相を絶すと雖も、而も一切を具して恆に雜亂せず、無障礙なるを以ての故に。二に意趣を明すとは、此無礙の理事を顯すに多の意趣有り、略すれば、謂はく五種なり。一は近くは信の中の菩薩の與に、所信の境と爲るが故に。二は遠くは下の文の一部の與に則と爲る、以下の諸會等の中に、皆結通して、一切世界亦如是説と云ふは、此文を指すなり。三には如來の出世は一乘圓教を以て、須彌樓山等の一類の世界に於て、化を施す分齊を顯さんが爲の故に。四には、一會即一切會なることを顯さんが爲の故に。第一卷に、其身遍して一切の道場に坐すと云ふは是なり。五に理事俱に無障礙なることを顯す。衆生をして、執を捨て、法に依らしむるが故なり。

四に文を釋せば、此光の所照、處に隨ひて限り無し、大いに總數に約して二十五重有り。

【五】隨釋するに十段ある中、今初なり。

【初】に能照の光；二に所照の境；長行の所明なり。

【一】には人界を現す。經初に「遍く三千：：金剛圍山」の文の下を指す。

前の九は別して説き、後の十六は同じて辨す。則ち十段と爲す。此中では是れ二十五度に光を放つに非ず、亦一たび放ちて、次第に漸く二十五處を照すに非ず、但し一たび光を放てば、則ち普く頓に照し、同時に顯現す、機を引きて、法に入れ、漸く觀見せしめて、近きより遠きに及ぶを以ての故に、次第有り。

初段の中に於て二有り。先には、佛、身光を以て事を照して、衆をして見ることを得しむ。後には、文殊、智光をもて法を説き、衆をして聞くことを得しむ。前の中に二、初に能照の光を明し、二に所照の境を明す。前の中に、初に放光の人、次に光の出處、後に光の數を顯す。足下の相輪より光を放つことは二の意有り。一は初の義。信は萬行の首爲ることを表すが故に。二は卑の義。信行最微なることを表すが故に。三は本の義の信は萬行の本爲ることを表すが故に。『智論』の第九に云はく、「足下より光を放つとは、身の住處を得ること、皆足に由る」とは、此れ之謂なり。百億の光明とは、所照は世界復無邊なりと雖も、皆是れ須彌樓山世界なるを以ての故に、各百億の四天等有りて、所照と爲るが故に、是故に光明亦唯百億なり。二に所照現の中に二、先は大千世界の中の染淨等の事を照現することを明し、二には如此見佛の下は、白の法會の普遍の相を照現することを明す。前の中に四。一には人界を現す。此海の邊に大樹有り、閻浮提と名く、樹に因りて此洲の名を立つ。弗婆提、此には勝身と云ふ、彼に生るる者は、身皆殊勝なるを以ての故に。狗伽尼、此には牛貨と云ふ、彼牛を以て貨易を爲すを以ての故に、鬻單越、此

【二に佛興を現す】經初「百億の菩薩の生」如來般泥洹の文の下を指す。

【三に諸天を現す】經の初「百億の須彌山王」色究竟天一の文を指す。
【二に二中に二】所照の境を明すの第二段なり。經に「此に佛、蓮華藏」等以下の文。

には勝生と云ふ、定壽千歳にして衣食自然なるを以ての故に。二に佛興を現す。八相の中に於て、初の三は未だ是れ出現の相にあらず、故に此には論ぜず。問ふ、佛の初成道第二七日に、此光明を放ちて、如何が却りて菩薩の生等を現する。又佛始めて出生す。

何に因りてか乃ち般涅槃有ることを現するや。答ふ、下の文に云はく、一念の中に於て、三世一切の佛事を顯現す、此は現在に過未を攝することを明すなり。問ふ、若し爾らば、何んが彼無量劫の事を現せざるや。答ふ、此中の文の意は、但此世界の中の佛興の事を論

ぜんが爲の故に、餘を説かざるのみ。二に諸天を現す、知んぬべし。四に此世界等の一句は、總じて悉現を結す。二に自の法會を現する中に二、先は本會を現じ、二には以佛神力の下は、新業の來集を現す。中に於て佛神力とは、是れ前の即如其像現神力といふ是なり。

所集の中に三世間等有ること、知んぬべし。又此處の光、無邊界を照すが如く、一一の衆會に皆悉く顯現す。彼一一の會も皆亦是の如し。光、無邊を照し、法無二なるを以て、此と別ならず。又、諸光交往いて相突礙せず、各當處の光、他を照すを見て、他處の光、自を照すを見ざるを以ての故に。何を以ての故に。主主及び伴伴、皆並せざるが故

に。主の伴、伴の主、皆違せざるが故に。問ふ、「此諸會云何が相顯す。答ふ、「二相有り。一には此光、彼を照し、彼をして此に現じ、攝して一會を成ぜしめ、彼處も亦爾なるを以て、此は法華の分身の諸佛に同じ。二に即ち此一會の佛及び文殊等、融じて法界に遍す、

是れ一切會なり。圓教の中に、未だ一法として一切に即せざる者有らざるを以て、是れ故に、

【六】以下偈頌を釋するに、初に文を分ち總じて判じ後に隨難追釋す。【法的情謂を離るる意は情慮を超越する意】

【有流】有とは三界の果報、流とは四種の惑(見、欲、有、無明流)人をして三界の生死界に漂はしむるを以て名く。

【七】隨難追釋するなり。初に八頌を略釋す。

一の文殊、東より來るときは、則ち是れ一切處の文殊一時に來る。縱令西方、無邊の世界を過ぎて華嚴を説く處なりとも、亦文殊、東十刹の外より來るを見る、東方も亦爾り、未だ彼を過ぎて西に向ふを見る者有らず、乃至賢首も亦然り、是れ一乘緣起門、雜せざるを以ての故に。之を思へ。」

二に智光覺の中に二、先は此處、後に結通す。此中の頌の意は、只前の光の照す所の諸事を融會す。中に於て二義有り。一には境に約するに三有り。初の一頌は、法の、情謂を離るることを明す。二に八頌有り、事を會し、理に同す。三に末後の一頌は、事無礙を顯す。皆前に依りて後を起す。二に心に約すとは、一には衆、前の光の照す所の事を見て、相に隨ひて執取せんことを恐る、是故に初の偈は佛に約して之を遣し、衆をして、相を捨し、理に乖くの失を離れしむ。又『涅槃經』に云はく、「如來は無流に非ず。何を以ての故に。如來は常に有流の中に行するが故に」と。又『佛地論』に明す「佛は流に非ず、無流に非ざる故なり」と。二に恐らくは衆疑を生ぜん、何に因りてか、此事而も普遍することを得んと、故に次の八偈は、事を會して理に同じ、衆をして眞を見、法に順するの得を顯はさしむ。三に疑ひて云はく、「事既に理に同ずるときは、則ち平等無二なり、何に因りてか事事普遍すること有るを得ん」と、故に後の一偈は、理に即するの事なるが故に、而も一事を得つれば、則ち無量の事なることを明す。

八頌の中に、初の一は前に既に、佛は是れ無流の法と知るを、便ち過失と爲す、未だ知

本經文「我なく衆生なく一等の一行」
【八】廣く後の一行を釋する中、初に總標して文を分つ。

【九】隨釋するに三段なり、初に標を釋す。以下の文は一多相容の義を顯はすも十玄を合むや明けし。

【一】「述釋するに二、初に文に依て廣く釋す。」
【初の門】二義有り「展轉生を釋するに應じて開の義を標す。」

【見故に】一、有相、事相相望するに約體約用の義あるをいふ。
【一は體に約す云】別して體用を釋す。

【二に、は用に約す】用の力無力の義に約す。

（八）「一の中に無量を解す」等とは、此一會等の中に、無量の會等有り、無量の會等の中に、一會有ることを明さんと爲す、是れ前の光、所照の處なり。中に於て、初の二句は標、次の三句は釋、後の三句は益なり。

標の中に、通じて論ぜば、此に同體異體有り、各相容相即有り、上の釋に準じて應に知るべし。此文は且く相容を明すが故に、一中無量等と云ふ。然るに同異體に通ずるなり。

二に釋の中に、略して二因を擧げて以て釋す。一には展轉生に由るが故に。二には非實に由るが故に、初の門とは、總して此の如きの、盡窮法界差別の縁を攪りて一縁起を成す、是故に、一一の諸縁相望して各二義有り。一は體に約す。空有の義を具する故に相即有り。謂はく、若し一無くんば即ち一切の縁、全く自體を失ふ。何を以ての故に。一無き時は多は所成無し、所成無きを以ての故に、是れ縁にあらず。是故に、一有れば即ち一切有

り。一を却すれば即ち一切を却す。此れ即ち一切是れ空の義なるが故に。自を泯じて他に即す、一は是れ有の義なるを以ての故に。他を攝して自に即するは上に返す、即ち一は是れ空の義なるが故に。亦自を泯じて他に即す、多は是れ有の義なるが故に。他を攝して自に即す、二空二有、各俱ならざるに由るが故に、相即せざる時無し。一空一行、相礙せざるが故に、恆時に相即有り。又一一の縁の中に、空有不二なるに由るが故に、自を壞せずして他に即す、妙義之を思へ。二には用に約す。有力無力の義有るが故に相入有り。謂はく、諸の縁起、各少力にして共生に非ざるが故に、即ち一一の縁、各全作

【二に非實の故に】
此中、相即相容二
門あり、初に相即
門の中、初に即一
即多を標し、義
は同體異體を兼ね
また相攝相即を該
ぬ。

【二に相容門】相
容門の中、初に總
じて標す。上來は
一多に約するも今
は理事に約す。

の義と全不作の義と有り。何を以ての故に。若し一縁無くば、餘は全く作さず、則ち一は有力、餘は皆無力、餘縁も亦爾なり。是れ即ち一は有力なるが故に、能く多を容れ、多は無力なるが故に。潜に一に入る、多有力等も亦爾なり。亦二力、二無力俱ならざるに由るが故に、相入せざる時無し、一有力一無力、無礙なるが故に、常恆に相入するのみ。又一の縁の中に於て、各有力無力不二なるに由るが故に、外に在ることを壞せずして、而も恆に相入す、之を思へ。縁起門の中に、此相作等の義有りて、一多を成ずるに由るが故に、展轉生と云ふなり。此れ即ち一多。更に互に展轉相生す、故に一の中の無量、無量の中の一を得るなり。二に非實の故にとは、亦二門あり、一に相即の義。謂はく、一は實の一に非ず、故に能く多を攝す。多は實の多に非ざるが故に、能く一に即す。又多は實の多に非ざるが故に、能く一を攝す。一は實の一に非ざるが故に、能く多に即す。又多に即するの一は一に非ず、一に即するの多は多に非ず。何を以ての故に。不實を以ての故に。又、多に即するの一を方に一と名く、一に即するの多を乃ち多と名く。何を以ての故に。是れ實の一にあらざる故に、多も亦爾なり。又是れ一も亦一ならず、亦は多、亦は不多ならず。何を以ての故に。不實なるが故に、二義を具す。又一に非ず、不一に非ず、多に非ず、不多に非ず。何を以ての故に。不實なるが故に、二相を絶するなり、之を思へ。二に相容門とは、謂はく、一事是れ實にあらす、無性なるを以ての故に。無性と眞理とは既に分限無し。是故に、一事の上に於て無性を觀る時、圓に法界眞如を盡さざること無し、若し一の

【又前の展轉生：雜らず之を思へ】據實分別の一段にて、初に同異二門に約し、二に緣性に二門不別に約し、三に二門不別に約し、四に即入不別に約す【此下の文：知るべし】後に餘を例して結示す。

【一】隨釋の第三益を釋するなり。【二】に結通：非ず一娑婆界の百億世界の結文なり。【三】第二重は十方各十世界に互る故に初段長行にまさり。

少事、自性無しと觀する時、圓に法界の眞を盡すことを得ずんば、即ち眞如に分限有り、便ち有爲に同ず。是故に、一事無性にして即ち眞を攝し盡す、眞を攝し盡す時、餘の一切の法、既に存することを礙せず、而も眞に即するが故に理に同じ、俱に一事の中に在りて現す、多の中も亦爾り、之に準ぜよ。又俱に本事を壞せざるに由るが故に、是れ相即門にあらす。不實の事、眞理を攝するに由るが故に、相入するを得るなり。又前の展轉生は異體即入に約し、此門は同體即入に約すべし、之を思へ。又、但、此經の中の相即相入の義釋に皆二門有り。一は緣起相由門に約し、二は法性融通門に約す、故に是れ此二文なり。又展轉生に由るが故に實ならず、即ち二門別ならず。又相即容の二門に、各法を攝し盡すに由るが故に、亦別ならざるなり。然るに義恆に雜らず、之を思へ。此下の文、此と同じきことは、應に此に準じて知るべし。此文は且く相容の義に約して説くが故に、一中無量等と云ふ、之を知るべし、

(一) 觀益とは、此正理を達すれば、緣に於て懼れず、故に無所畏と云ふなり。境法無礙なるを以ての故に、智をして畏無からしむ。二に結通の中に、唯此一娑婆界の中の、百億の閻浮處を結す。是れ後の文の、盡空界等に非ず。

(二) 次の第二重には、一切處の文殊と云ふことは、但、是れ十方の十佛國上に、各百億の處あり。是れ第三重の處には非ず、乃至末後に方に盡法界と爲す、文の意此の如し、應に知るべし。第二重に、十方各十世界を照す、長行は前に同じ。偈の中に二分つ。初の

【三】第三重。十方各百世界を照す下。

【二】には釋：別な【二】別途の法門を述べ。

【中】に於て或見：有【中】に於て或見：或見あり經に十二の義を以て辨ず。

六は佛を歡じ、後の四は菩薩を難す。初の中の一は、佛の求道の因を顯し、二は正法輪を轉す。初の句は標、次の句は不常を釋す。下の二句は不斷を釋す。三に太誓を本と爲す、四には慈力、魔を伏す。五には内智の顯證。六には外智の化益なり。菩薩を歡する中に、一は初に遊び、二は佛を念じ、三は苦を救ひ、四には法を護る、皆下の句は因果を結す。

【二】第三重に、十方各百世界を照す偈の中に、二の釋を作す。一には初の一偈は報身の徳を歡じ、餘の九は化身の徳を歡す。前の中の初の二句は、大智の徳を明し、次の一句は大定の徳、下の一句は大悲の徳なり。又釋す。理智、眞を照すを以ての故に。諸法空の如しと覺し、心淨無礙を得るなり。量智、俗を了するを以ての故に。諸法の如幻を覺し、群生を調することを得るなり。二には釋す、初の一は是れ總、餘の九は別なり、總の中に、機に應じて、現起するに由るが故に。如幻の故に。差別を見しむ。不起に由るが故に。如空の故に、平等一味にして起不起無二なるに由るが故に。衆生を調伏するときは、則ち常に心淨なるが故に、無障礙と云ふ。下の九偈の中に、各此無二の義を具す、故に用は常に寂なり。又前の三句は、淨緣起の體を明し、下の一句は起る緣を明す。下の九偈は體を以て緣に従ひ、正しく緣起の相を明す。中に於て、或見とは三義有り。一は一人の異時に見るに就く。謂はく、初時に初生を見るが如し、乃至後時に涅槃を見るは、次第にして見るなり。二は多人の同時に見る。謂はく、人有り、正しく法を説くを見る時に、則ち彼の上に於て涅槃を見ること有る等、皆障礙無し、互に相見ず。三には一人同時に見る。謂はく、

【四】第四重。三徳を以て分つ。【理、縁に應じて起る】法身の體に衆生顛倒の機縁に應同して種種の法門身を現起す。

【苦縛を離る】三界の果報たる分段生死を離るること【變易を離る】見思の惑を斷じたる阿耨多羅三藐三菩提の受くる。變易生死を離ること。【業縛を離る】内根外境本來自ら空寂、虚妄の業を解脱するなり。【五】第五重。

初生を見る時、中に於て則ち涅槃を見る等なり、下の文の、八相微細等の如し。良に淨心無礙なるに由るが故に、圓融普く應ずることを得。中に於て、一には初生、二には七歩を行くの時、三には十方を顧眄する時、四には師子吼の説、天上天下我獨尊の時、五には出家、六には成道、七には轉法輪、八には神力を現す、九には涅槃に入る。

第四重に千世界を照す偈の中に、三に分つ。初の二は法身を明し、次の四は解脱を辨じ、後の四は般若を明す。法身の中、初の二は理、縁に應じて起ることを明す。謂はく、初の句は深を標し、下は所取の相無く、亦能取の智有ること無きことを釋す。然も此に住せざるが故に、機に應じて現するなり、後の一は、現即不現なることを明すが故に、諸塵を離るるなり。二には解脱を明す中に三あり。初の二は何者が解脱する。謂はく、初の句は脱の體を明し、下の三句は脱の用を明す。謂はく、機械相應するを和合起と名く。次の二偈半は何の處の解脱を辨す。謂はく、初の二は苦縛を離る。分段を離るるが故に、世間に在らず、變易を離るるが故に、人師子と號す。次の二は業縛を離る。謂はく、根境本空虚妄の業盡く、故に俱脱す。次の一句は煩惱の縛を離る。次の一句は、通じて永く盡くるが故に、長流轉せざるを結す。下の半偈は、何に由りてか解脱することを明す。謂はく、二利圓滿するに由るが故に、文の如し。三に般若を明す中に三あり。初の二は眞を照し、次の二は俗を了し、後の一は變べて眞俗融して無礙なるを結す。

第五重に萬世界を照す偈の中に、諸の菩薩を勧めて十種の業を修せしむ、一は慈悲業、

【二六】 第六重。

【色を執して】如來の三十二相端嚴なるを執する。こと【相即ち非】諸法は合散無し。諸法は隨緣所現の故に合なく、而も其體眞如なる故に諸相見るべきなく、また散なし。

【身感に赴きて】諸衆生の性を知らて後、化用自在なること。

二には信心、佛を念ずる業、三は善慧業、四は無間業、五は長時業、六は身の實相を觀するの業、七は心の實境を觀するの業、八は神通業、九は佛土を分別する業、十は多佛を了知する業なり。此十の中に於て初の二は衆生を緣する行、次の四は佛を緣する行なり。一は信、二は慧、三は觀、四は求なり。次の二は觀行に入る。一は白、二は他。又一は身、二は心なり。後の三は起用の行。初の二は通用、下の二は智用、一は土を知り、二は佛を知る。

第六重に十萬の世界を照す偈の中、梵本に依るに、各の四句を一頌と爲して、總じて十一の偈有り。中に於て二。初の七言の六偈は、佛の體性寂滅なることを明す。後の五言の五偈は、妙用自在なることを明す。前の中に、初の二は、色を執して眞に乖くことを明す。二に妙相は情を超ゆ。三に超情の所以を顯す。非相を以て相と爲すと謂ふが故に。四には相即ち非なるが故に、合散無し。五には佛に五蘊無きことを明す。若し小乘に約せば、佛に有漏の五蘊有り、婆沙等に説くが如し。若し始教に約せば、佛に無漏の五蘊有り、成唯識等に説くが如し。若し終教及び頓圓等は、佛に無漏の五蘊無し、佛地論に云ふが如し。如實義とは如來の身土、甚深微妙なり、乃至蘊界等の法門の所攝に非ず。但し所宜に隨ひて種種に異説す。六には佛の外身心異らざることを明す、俱脫を以ての故に、無二の故に、色心を絶す。二に妙用の中に三。初の二は智光照なり。二は身、感に赴きて無礙なり。初の二は一多無礙、後の二は理事無礙、後の二は妄を擧げて眞を顯す。初

【初の一】經文「一切諸の世間」等の一偈。
【後の一】經文「是の如きの眞實相」等の一偈。

【七】第七重。

【不轉法輪を轉ず】眞如の妙境は不可説なるも、緣に隨ひ方便して説き給ふ。

【四句有り】相容壞の中、一多壞不壞を以て四句を作る。

の一是妄を擧げ、後の一は眞を顯す。如是眞實とは是れ前の妄想なり。迷人は妄を謂うて實と爲す、妄の實を見ず。悟人は妄は實無しと見るに由りて、即ち妄實を見る、妄法に稱ふを以ての故に。又迷人に妄有り、妄を識らざるが故に、妄の實無し。悟人に妄無きが故に妄を識る、妄を識るが故に實を得、之を思へ。

第七重に、百萬世界を照す頌に十偈あり。初の一は獨拔、世を超す。二は妙に心境を絶す。無依とは無境なり。三は性治離染、上の句は性離、次の句は治離、下の二は釋成なり。四は妄を離れて眞を解す。五には不轉法輪を轉ず。六には有無の想を離るるを、正意思と名く。七には眞諦に約す、法は一多を絶す。八に俗諦に約す。中に於て、初の二句は一多無雜、後の二句は了知の益を顯す。問ふ、「上に云はく、一の中に無量を解す等と、此と相違せり、如何が會釋せん。」答ふ、「此中の緣起に四句有り。一は一が中に多有り、一は無性なるを以ての故に。二は一が中に多無し、一は壞せざるを以ての故に。三は一が中に、亦是多、亦是不多、一を壞せずして、而も無性、無性にして一を礙せざるを以ての故に、二義を具す。四は一が中に、多に非ず、亦不多に非ず、二義全奪、融じて雙泯するを以ての故に。又初に由るが故に二有り。若し無性に非ずんば、即ち一を壞するを以ての故に。二に由るが故に初有り。若し一を壞せば、無性無きを以ての故に。是故に、二義は唯一事なり。是は不壞に約し、前は無性に約す、故に相違せず。是れ即ち一の中に、多無きに出るが故に、一の中に多有るなり。上に返して亦爾り。第三の句と。第四の句とは、俱と不

【二八】 第八重。

俱と相順じて亦爾り、竝に無礙成立す、之を思惟せよ。「九には三法の相盡くるを觀するを、善提を念ずと名く。一は諸法、二は衆生、三は國上なり。十には三法、性の如しと觀するを、佛法の義を了すと名く。」

【二八】 第八重に十億世界を照す。西國の數の法に三種の億有り。一は百萬なり、二は千萬、三は萬萬なり。下の文の百千は、百千を一俱胝と名く。俱胝とは此には億と云ふ、是は千萬を億と爲す。此中には千萬一億に據る『對法論』に云 偈に二十あり、佛の善巧力を歎す。二頌を一義と爲す、皆先に所作を擧ぐ、未後の一句は巧力に由ることを結す。中に於て十有り。一には智斷圓滿力、二には大智樂境力、三には無功成事力なり。中に於て三法あり。一には衆生、二には化處、三には內禪、竝に著を離るるが故に巧力と云ふなり。四には理智入實力、五には示果攝生力、六には智入深密力、七には境智雙亡力、八には記事了處力、九には了達群機力、十には善達三際力なり。中に於て、初の一は俗に約し、後の一は眞に約す。

【二九】 第九重。

【二九】 第九重に十億世界を照す、二十偈あり。佛の利他の行を歎す。亦二頌を一事と爲す。中に於て、初の二は總じて化意を標し、次の十六は別して化事を辨じ、後の二は用を結して體に同す。初の中に師子吼とは、決定して度するが故に。別の中の八對は、皆初の一は所救を擧ぐ、後の一は能救を辨す。初對の中に、前の一は癡愛の衆生を救ふ。人の海に墮するに、四義に由りて脱し難し。一は水深、二は峻波、三は網繫せらる、四は黑暗の故に脱

【前に際無し】無始無終なる時、未來際無窮流轉をいふ。

【下結する中の二偈】經文「佛の深甚の法を聞き」等の偈。

第十重。

【三際】前、中、後の三。これ過、現未の三と同じ。

し難きが如し。衆生も亦爾り。此中に、愛に二義有り。一は已に多を得るが故に、海の如し。二は求むるも足らず、流の如し。癡に亦二義あり。一は過を見ざるが故に冥の如し。二は樂有りと見るが故に網を結ぶ、後の一は是れ能進の行、能救と爲す、即ち是れ佛の悲の境の故に、是佛境界と云ふなり。二は五欲の衆生を救ふ。謂はく、色等の五境、心を昏するを醉と爲す、實に無なるを有と謂ふが故に、興妄等と云ふ。三は善我の衆生を度す、慧者は是れ佛なり、本際とは、是れ我、我は是れ生死の本、故に佛能く滅するなり。下の三句は是れ所救、初の句は前に際無し、下の句は後に窮り無し、我法無きを寂滅と爲す。四は惡趣の衆生を救ふ。初の偈は是れ深苦、後の二句は是れ重苦なり。五は外道、邪見の衆生を救ふ。六には三有に著する衆生を救ふ。七には無明の衆生を救ふ。八には長因の衆生を救ふ。下結する中の二偈、初の六句は因圓、初の句は有縁、二は行本、三は行處、四は行廣、五は二句は行深なり。下の二句は果滿、同じく一切の三世間の身なるが故なり。第十は十六重有り、別説し盡し難きを以ての故に、總じて之を論ず。亦二十の偈あり。初の六は果を擧げて徳を數じ、後の十四は因の趣入を明す。前の中に、初の二は、内に皆眞に契ふ。中に於て、初の二句は一念に多劫を觀じ、次の二句は一念に三際を泯す。次の二句は縁起即眞なることを知る、次の二句は功畢りて果を具す。次に二偈有り、勝徳外に彰ることを明す。中に於て、初の二句は名遍じ、次の二句は身遍、次の二句は說遍、下の二偈は依正因果を明す。中に於て、初は福因、依果を得、後は智因、正

【初は別、後は總】
上は三性對望の意
あるも、今は正し
く一法中道に歸す
るをいふ。

【雙融に約せば】
雙融圓融無礙に約
するは是れ宗の極
致、本經の歸趣ま
たこれに在り。
【三には二偈】經
文「無量なる淨樂
心」等の二偈。經文
【四に二偈】經文
「佛の妙なる音聲」
等の二偈。
【五に二偈】經文
「如來は空にして」
等をいふ。

果を得。後は十四が中、通じて論ぜば、教へて七種の行を修せしむ。初の二偈は二利の行を修す。先に自利、初の句は福、二は忍、三は定、四は慧なり。後は利他、二には二偈、見伸の行を成す。初は應を見、後は眞を見る。一切有無の法了達す。非有無とは三門有り。一は三性に約し、二は三無性に約し、三は雙融に約す。初の中に復二。初は別、後は總なり。別の中に、三性に各二義有り、所執の中に、一は是情有、二は是理無なり。依他の中に、一は是幻有、二は是性空なり。圓成の中に、一は離相、二は是體實なり。此上の三、一一に各融じて、不二にして一性爲るが故に。總とは、所執は是れ無、圓成は是れ有、依他は是れ俱なり。眞妄を掃し、三相盡くるを以ての故に無二なり。二に三無性に約すとは、初に無相觀の境の中に、所執の有無皆虚なるが故に。又無にして有、有にして無の故に俱に離なり。依他の無生性の中に、無にして幻有、有にして性空、不二なるが故に俱に離なり。圓成無性の中に、二性無きと、眞理有ると、亦不二なるが故に俱に絶なり。三に雙融に約せば、三有と三無と、圓融無礙にして二相絶するが故に、俱に離なり。三には二偈、説法の行を教ふ。中に於て、初の二句は是れ所化の境、樂は是れ信樂、信樂は一に非ず、故に十方に満す。次の一句は化處、次の一句は正説、次の二句は化益、先は染を離れ、後に徳を成す、下の二句は功成なり。四に二偈、受法の行は即ち是れ正説の法身を見るなり、七覺を以て法輪と爲すが故なり。五に二偈は、相を捨し、眞を見るの行を明す。六に二偈は、佛、生界に等しき行。七に二偈は、生滅は本無の行の喻なり。上來通じて、前の初の

【六に二偈】經文「衆生種種の業」等をいふ。
 【七に二偈】經文「譬へば無量の刹」等をいふ。
 【一】明難品は縁起甚深より佛境界甚深に至る十種の甚深の義を説き信位の大解を明す。第一縁起甚深を明すに初に來意を釋す。
 【二】明難の名を釋す。

【三】料簡する一段なり。

十問を答へ竟る。

菩薩明難品第六。五門をもて分別す。初に來意に二有り。先づ分の來ること、前には所依の果法を明し、今は依果所成の因行を辯ずるが故なり。二に品の來ることは、所成の行の中に、位前の方便は信行最初なり。信の中に、解と行と及び徳とあり。明難には解を辨ず、初に居するが故に來る。

二に名を釋すとは、菩薩は是れ人なり、明難は是れ法なり、果法に簡異するが故に依主釋なり。明難に四義有り。一は心境に約す、難は謂はく、眞俗幽邃、明は謂はく、妙智朗照なり。二は教義に約す、難は謂はく十義甚深、明は謂はく往復顯暢なり。三は入道に約す。謂はく、難は問なり、明は答なり。通じて問答するを以ての故に、明難と名く。何んとなれば、但法を擧げて直に語ふを問と曰ふ、非理詰責するを難と爲す、問に隨ひて直に陳ぶるを答と曰ふ、委釋して顯煥するを明と爲す。四には賓主を分つ。賓に約すれば則ち長行の中に、明かに難を設く。主に約すれば則ち偈の中に、明かに難を釋す、故に明難と云ふ。

三に料簡とは、此因の中に就きて或は二に分つ。初は比位十地品より下は證位なり。或は三に分つ、初の三品は是れ位前の方便昇天品より下の十三品は、三賢の正位を明す。十地より下の六品は、十聖の眞位を明す。或は四に分つ。初は此より第三會を盡すまでを十解と爲す、信は是れ住が方便にして、正位無きを以ての故に、十住の中に攝屬す。二に第

【光】光統師。

【四】宗の旨趣を明すに、初は通じて三品を論じ、別して當品を明す。

【五】第一釋名第二出體を略し、第三發心を釋す。初は正しく始終圓の三を明す。

【六】第四、位を定むるに、始、終圓三教に就て明す【樂攝論】四十三初。

四會は十行なり。三に第五會は十廻向なり。四に第六會は十地等なり。或は五に分つ、信を開きて住に異するが故に。又光の云はく、義分に、或は三あり。初の三品は始め先勝を起すを明す。二は昇天より下は善く中際に修するを明す。不思議品等は終、後際に攝ることとを明す。或は四に分つ。初は末信の者を信せしむ。二には第三會より下は、已信の者をして入らしむ、謂はく漸行なり。三は十地品より下は已入の者をして純熟せしむ。四は不思議品より下は已に純熟せる者を解脱せしむ。

四は宗趣に二有り。初は通、後は別なり。通じて論せば、此三品は十信の行法を明す。中に於て八門を作りて辨せん。一は名を釋し、二は體を出し、三は發心、四は位を定む、五は行相、六は除障、七は進退、八は徳用なり。

三に發心とは、謂はく、始め具縛の、寶の名字等を識らざるより、創めて一念の信華を起す、此は始教に約す、本業經一の如し。云云。終教は起信論一の修行信心分の如し。云云。圓教は賢首品の何の如し。云云。小乘は此教に非ざるを以て説に約せず、頓教には位無きが故に亦説かず。云云。亦は小乘にも、亦初信の義有るべし、小論の如し。云云。頓の中にも亦信有り。云云。

四に位を定むとは、此十信の法は、始教の中に於て、自らは是位、乘の『攝論』に云ふが如し、須陀洹道の前の位の如し、謂はく、燻等なり、菩薩の地前の四位も亦是の如し。謂はく、十信、十解、十行、十廻向なり」と。又彼論及び『佛性論』等皆云ふ、地前に四行

はく、十信、十解、十行、十廻向なり」と。又彼論及び『佛性論』等皆云ふ、地前に四行

【彼論及び佛性論】攝論二十、五丁、佛性論二、十二丁、無上依經上、十一丁、實性論三、十四丁、助顯するに初に四行を修するに約す
 【又四重障云云】助顯の二、四重障を斷ずるに約す
 【又信には成ず】助顯の三、四徳因に約す
 【又仁王經云云】助顯の四、四輪報に約す。仁王教化品參照。
 【若し終教云云】以下終教の文。
 【故に本業經云云】以下引證。
 【又六種性云云】以下助證。初に六種性等に約す。
 【問ふ方便云云】以下問答す。

を修す」と。謂はく、十信には信樂大乘行を修す、十解には般若行、十行には三昧行、十廻行には大悲行なり。又四重障の正使を除かんが爲の故なり。謂はく、初は闍提不信障を除く。二は外道我執障を除く。三は聲聞畏苦障を除く。四は獨覺の捨大悲障を除く。又信には淨徳の因種を成じ、解には我徳の因種を成じ、行には樂徳の因種を成じ、廻向には常徳の因種を成ず。又『仁王經』に、四輪王の報に寄す。謂はく、鐵と銅と銀と金となり。此教義を以ての故に知んぬ、十信も亦是位なり。若し終教に約せば、此信は但是れ十住位の方便なり。自ら別の位無し。故に『本業經』に云はく、「未だ住に上らざる前に、此十心の名字有り。謂はく、一には信心、二には念心、三には精進心、四には慧心、五には定心、六には不退心、七には廻向心、八には護心、九には戒心、十には願心なり。是心を増修すること、一劫、二劫、三劫して、乃ち初住の中に入ることを得、信心に十有り、増して百法明門を成ずるを、習種性の中に入ると名く、故に知んぬ位無し、但、是れ方便行なり。又、六種性、六忍、六慧等の文に準するが故に、亦是れ證を成ず。又『仁王』に、但三賢十聖と言ひて四と言はず。又此經の中に、後の四位に皆入定有り、出し已りて十名を稱ね、十義等を辨す、唯信の中には此無し、故に知ることを得。問ふ、『方便に三賢の位を攝するや。』答ふ、『此に相攝有るが故に是の如し、何んとならば、義淨するに四句有り。一は本位を以て方便を攝するが故に、唯三賢のみ有り、則ち信の名を没して、唯住位を論ず、文を引くこと知んぬべし。二には方便を以て本位を攝するが故に、則ち十住を十信と名く、十住の

【若し圓教に約すれば云云】圓教を明す。

【七】行相を明す文中云云の言あるは、各下に至りて審にすべき意なり【八】第六除障を明す。

【九】第七進退を明す。

名を没するなり。故に『仁王經』に云はく、『十信十止十堅心』と。則ち十住を論ぜずして但十信と名く。三には方便を開きて、本位に異するが故に、則ち住前に此十心有るを方便と爲す等の如し。四には方便の處に於て、假に正位を説く、前の始教の如し。若し圓教に約すれば二義有り。若し普賢の自法に依らば、一切は皆位無し、若し寄法に約せば、則ち終教に同じ。然るに信滿入位の際、通じて一切の後の諸位を攝し、皆此中に在りて、具足せずといふこと無し、此れ則ち行に約して位を攝するが故なり。問ふ、『信既に實に正位無し、何が故に、始教に説きて位を爲るや。』答ふ、『始教は機體に智淺くして、行位を分たず、小乘に影似せるが爲の故に、四位を説けり。終教は機體にして智深し、實に剋して分異なるなり。』

五に行相とは、若し始教には信等の十心の行を行す云。若し終教に依らば、『起信論』の中の四種の信心と、五門の修行との如し。云。若し圓教は三品の所説の如し。云。六に除障とは、始教は前の如し、闡提不信障を除く。終教は論に云ふが如し、『深く煩惱を伏す』一等と云。若し圓教は文の如し、總じて百障を滅す等。云。竝に是れ滿心の時に滅す。

七に進退とは、信を修すること、未だ一萬劫を滿たざる已還、一切皆退す、是れ不定聚なるを以ての故に『本業經』に依るに、輕毛の風に隨ふが如し』等。云。設ひ第六に不退心有らば、但是れ此不退の心を作す、是れ位に非ざるを以ての故に、未だ不退を得ず。亦有

【亦有人解して云云】非を揀ぶ一段にして、今述するに三故を以てす。初は木業經、次は起信論、後は義に依て非を結す。【若し始教云云】以下教に約す。

【不退信…信忍等の如し】不退信とは因の當相に約す。若し果に隨へば信滿成佛なり。因みに信の忍は智、これに信の果なるが故に信忍を以て例同す。【一】第八成徳の隨要別釋の二、別して宗趣を明す。【二】本文を釋す。

人解して、此を將て信不退と爲すことは、義恐らくは不可ならん、經の中に、輕毛の如しと説くを以ての故に、位無きが故に。論に「信を修すこと、未だ萬劫を経ざる、皆退有り」と説くが故に。若し萬劫に至らば信便ち已に滿す、第六に非ざるが故に。若し始教に就かば、羸相に隨ふを以て、信を説くを位と爲す。是故に今後の三賢は、亦羸相に隨ひて説く、是故に十廻向以上に至りて、方に不退を得。『佛性論』の第一卷に説くが如し。問ふ、「彼論の中には、是れ薩婆多師の説を叙ぶ、豈是れ大乘ならんや。」答ふ、「是れ薩婆多の説なりと雖も、然も彼宗には非ず、十廻向の名位有り」と説くを以ての故に、小乘には此位無し。若し終教の中には、信滿入位を則ち不退と爲す。『起信論』の信成就發心不退の如きが故に、及び此下の文の深心淨信不可壞等と云云。圓を以て終に同す。故に入位已後、方に説きて不退信と爲るなり。因を以て果に従うて稱するが故に、信忍等の如し。【一】八に成徳とは、始教の中、淨徳の因を成ずる、及び鐵輪王の報を得て、亦能く進みて十解等に入る。終教は能く十住の位を成じ已りて、則ち能く小分、法身の佛を見て、八相成道等の事を現す云云。圓の中には、通じて後の諸位を成ず。若し因に約せば、普賢の三業を得て法界に遍周す。果に約せば、塵世界に遍じて等正覺を成ず、賢首に説くが如し。【二】二に品の宗を明すとは、十甚深の義を以て宗と爲す、信の中の解行を成ずるを趣と爲す。【三】五に文を釋せば、此中の三品即ち三と爲す。初の品には信の中の解を明し、次の品は解に依りて行を起し、後の品には解行具するが故に徳を成ずるのみ。又釋す、初は行、次は

【遷禪師】 曇遷。

【行法師】 曇衍。

【二三】 一、緣起甚深を明す。【諸法集起す】唯識の法相を以て起信論の義を述ぶるなり。

願、後は徳位なり。初の中に就きて一。初は正しく十義を辨じ、後は普見を結通す。前の中に、遷禪師の釋に依らば、十甚深の義と爲す。中に於て二に分つ。初に文殊の問、衆人の答。妙慧、衆行を導くことを明す。後は衆人の問、文殊の答。衆行を以て妙慧を成ずることを明す。又行法師の云はく、初は一人の問、多人明す、一の中に無量を解す、二は多人の問、一人明す、無量の中に一を解す。又、文殊を法主と爲すが故に、多人同じく佛境の深法を問け。初の一は是れ緣起甚深、二は教化甚深、三は業果甚深、四は佛の説法甚深、五は福田甚深、六は正教甚深、七は正行甚深、八は助道甚深、九は一乘甚深、十は佛境界甚深なり。

緣起とは、諸法は阿頼耶識の自性緣生に依りて、方に集起することを得るが故なり。何が故に、最初に此義を辨ずとならば、「攝論」に云はく、「菩薩初學に、應に先づ諸法の如實の因縁を觀じて、以て正信解を成ずべきが故に」と、此謂なり。中に於て先に問、後に答なり。亦是れ先に、明かに難を設け、後に明かに難を解す。前の中に二、初には總して告ぐ、何が故に、最初に覺前に問ふとならば、謂はく、創めて感求を發すること、初覺に非ざれば起さず、善財の初めて覺城を發すが如きが故に。又緣起甚深も亦覺に非ざれば達せざるが故に。二は正難の中に、此難何に因りてか生ずとならば、凡そ諸の菩薩、信解行等を起すこと、皆此の如きの唯心の道理に依りて、凡小に異にして正行を成ずることを得、故に「起信論」に云はく、「法有り、能く摩訶衍の信根を起す、是故に應に説くべし。言

【問の意の云はく】
經の問意を述ぶ。
初に本末相違の難
次に一多不應の難
を示し失を示す。
【心性】 唯識の實
性。

【二四】 文を釋す。

【初に心性一】こ
の下の初は理心に
約し、依主釋を用
ひ、後は第八に約
するも、二類なし
といふは、相、性
二宗に依らざる意
を顯す。
【中に於て五對】
經文、初に依報正
報に就て五對をあ
ぐ。

ふ所の法とは衆生心なり。是心に即ち一切の世間の法、出世間の法を攝す」と。是故に、
此に於て難問を起す。問の意の云はく、心性は是れ一果報種種なり、云何が一心にして多
報を生ずる。又、心性既に一ならば、果も亦應に一なるべし、果報既に多ならば、心も亦
應に多なるべし。設し爾らば、何の失かあらん。謂はく、心若し報に隨ひて多を成ぜば、
則ち唯識を失す、報若し心の如く一と爲らば、則ち業果に乖く。設ひ若し救うて言はん、
若し唯一心性を立て、能重有ること無くんば、所難の如くなるべし。今明す、心性は一と
雖も、善惡業等の能重に隨ひて轉ずるが故に、果報生ずること異なり、此に何の失か有ら
んと。後に此救を遮す。重ねて更に難じて云はく、「業は心を知らず、心は業を知らず等、
既に相知らず、何にして熏習を成ぜん。熏習の成ぜずば、何ぞ種種なることを得ん」と、
難の意此の如し。

【二四】 文の中に二あり。初は法を擧げて難を設く、後の五句は救を遮して重ねて難す。前の中
に三、初の一句は法を擧げて案定す、次の一句は正しく相違を顯す。後の五句は違相を釋
成す。初に心性一と云ふは、謂はく、心の性なるが故に、是れ如來藏平等一味なり、故に
一と云ふなり。又、心は即ち性なるが故に、是れ第八識二類無きが故に一と云ふなり。云
何が能生種種果報とは相違を顯す。此は是れ本末相違の難なり。三に或至善趣等とは違相
を釋成す。中に於て五對あり。初の一は依報に約す。善趣は是れ人天、惡趣は三塗なり。
二の對は正報に約す。善趣の中に於て、眼等の諸根に具不具有り。惡趣の中も亦爾り。三

【自下の五句云云】
經文、業は心一等の五句。救を遮して難ず。

【今重難の中云云】
五對を釋す。初にその一。
【業は是れ能依】
第六識相應の思の心所を作業因とする善惡業。
【心は是れ所依】
第八識心、根本所依にして所熏處たり。

對は重ねて依報に就く。根具の中に於て、屠獵等を惡處と爲し、戒施等を善處と爲す、根不具の中も亦爾り。四對は重ねて正報に約す。善處の中に就きて端正と醜陋と有り、惡處の中も亦爾り。五對は端正の中に就きて苦樂有り、醜の中も亦爾り。是の如く種種の差別あり、故に不同と云ふ。報既に此の如く不同なり、其一心の義何んが在らん、白下の五句、古人釋して云はく、「不相知に約して難を爲す。謂はく、心は覺知を以て性と爲す、能く業を生ずる心と業と、竝に相知ることを得べし、云何が經に、「業は心を知らず、心は業を知らず等と言ふ」と。此釋、恐らくは文に順ぜず、何んとなれば、此不相知等は、上の諸句と、同じく一難を成すとや爲ん、更に別の難を成すとや爲ん。若し同じく一難を成せば、前の上性とは一果報種種あり、正しく是れ相違なり。故に已に難を成す、此不相知、彼に於て何の用かある。若し別難を成せば、復何の義に因りてか此難生ずる、故に知んぬ、文の意少く別なり。是故に今の釋、古に同じからず。謂はく、此は即ち是れ救を遮し、重ねて難す。然るに救は文の外に在り、設ひ若し救うて言はん、心性は一と雖も、然も善惡業等の熏習の種子の功能有りて、果を生ずること別有らんも、所依の心性は一にして二無し、故に失無し」と。今重難の中に五對有り。初の一は能依所依不相知に約す、故に重を成ぜず。此中、業は是れ能依、心は是れ所依なり、所を離れて能無し、能は所を知らず、故に業は心を知らず、能を離れて所無し、所は能を知らず、故に心は業を知らず、既に相知らず、何ぞ熏習を成せん。熏習無きが故に、豈、業に因りて、心、多報を生ずることを得ん

【第二に果相に約す】第二對。
【因果相知らず】因果相生現行の上因果を談じ、受報を説く。

【第三：約す】第三對。種子に本有と新熏とある中、唯新熏に就いていふは、宗の實義に合する故なり。

【第四に親疎不相知】此下、第八識自體生起の因縁を親疎に分てば、名て言種子は親縁なし。然るに、業は識種なくば親體を辨生せず、識は業報なくば善惡の報を招かず、既に相対的存在ならば、各自性なからん。【第五に境智不相知】一の見相二分を用たる見相二分を

や。此等の相知は性力に約して説く、但し無性無力なり、故に相知らず、情智に約するに非ず、上は本識の因相に約して説く、第二に果相に約す。謂はく、因果相知らず、果は謂はく異熟なり。果報具に二義有り。一は能受報の心、是れ本識の種子識、二は所受報の相、是れ果報識なり。種は是れ果の因、自ら因ならざるを以ての故に。受は報を知らず、報は是れ因の果、自ら果ならざるを以ての故に。報は受を知らず、既に相知らず、因果斯に泯ず。心、種種を生ずる、其義安にか在る。第三に、新熏不相知に約す。謂はく、此報の上に於て、受は謂はく採納、則ち諸の轉識なり、以て能熏と爲す、受報に同じからず。心は謂はく集起、則ち第八識、以て所熏と爲す、互に自性無し、各相知らず、熏習既に亡ず、一心云何が能く種種を生ぜん。故に『瑜伽』に云はく、「藏住を見ず、熏習を見ず、是を菩薩と名く」と。第四に親疎不相知に約す。謂はく、種子を因と爲し、所依の本識を縁と爲す、相待無性なるを以て、謂はく、自ならず他ならず、共ならず等の故に、親疎の相盡きぬ、故に相知らず。既に因縁離る、心の生ずること何ぞ在らん。第五に、境智不相知に約す。智は謂はく能知、即ち諸識の見分、法は謂はく所知、即ち諸識の相分なり、俱に一心に依りて各自體無し、自體無なり、誰か共に相知らん、心境既に亡ず、能熏斯に寂せり、心、種種を生ずること、其義安にか在る。又釋す。境法は是れ心變の故に心を知らず、心は境に託して生ずるが故に法を知らず、境の外、心、能く心外の境を取ること有ること無し、是故に、俱に相知らず、相盡きずといふこと無し。

出し來つて、各無
自性といひ不相知
を釋す。
【一五】緣起深甚の
中第二に答を釋す
【後に十偈あり】
第二偈以下をいふ

【二六】正しく本文
を釋す。初に前五
偈を釋し、後の教
を遮する處に答ふ
【一は宗・結なり】
因明門の五分を以
て釋す。

【二に因云云】因
を釋す。初に總釋

第二に答の中に二。初の一は問を讀じ聽を勸む。上半は問、讚に會することを敷す、
下半は聽を勸めて聽を許す。後に十偈有り、義を擧げて正しく答ふ。中に於て、初の五偈
は、後の教を遮する處を答ふ。教の義若し成ずれば、本難は方に違するを以ての故に、須
らく先づ後の五偈を答へて、前の本法の難を答ふべし。此中の答の意は、藏識の緣起を明
すに、其二義有り。一は是れ不起の義、無自性を以ての故に。二は有起の義、此無性の緣
起有るが故に。此二不二なる、是れ一の無礙甚深緣起なり。此中に不起に由るが故に起を
成ず、是故に、只、諸緣の不相知に由るが故に、而も重智を成じて種種の法、生ずること
有り、後の教を答ふるなり。二は起に由るが故に不起なり、是故に只諸法種種生に由るが
故に、各自性無し、唯一心性に前の難を答ふるなり、又、前は即ち一心を讀せずして、
即ち是れ種種、後は即ち種種を讀せずして、即ち是れ一心なり、緣起の正理、無礙縁起せ
り、是れ其意なり。

前の五偈の中に、初の一は法護、後の四は喻況なり。或は長く五分と爲すべし。一は宗、
二は因、三は喻、四は合、五は結なり。諸法不自在とは宗を立つるなり。謂はく、諸法は
是れ有法、不自在は是れ法なり。法と有法と和合するを宗と名く。中に於て二義有り。一
は藏、緣起に任せて能所重起りて、多法を攝す、故に諸法と云ふ、互に因縁と爲るを以て、
更相に繫屬して各自自ら所在有ることを得ず。二は諸緣に従ひて起り自性無し、自性無き
が故に、自ら有るべきこと無し。二に因を出さば、何を以て不自在なりと知ることを得る

【此に二義有り】
以下別釋。初に性
相融會門に約す。
二義、四義、八句
を以て説くに漸次
甚深の所有なり。

【又釋す云云】縁
起相由門に約して
明す。初に起不起
に約し各相奪して
定んで實不可得不
自在の旨を辨ず。

【何を以て：故なり】
是れ華嚴一乘
縁起の甚深の奥旨
を示す。

や。因に云ふ、實を求めて得ざるが故にと。本識と諸法と、互に縁に依りて起り、更に相
形奪して、各自性無きを以ての故に、求實不得と云ふ。此に二義有り。一は本識に約し
て不自在を明す。諸縁に依仗して、自性無きを以ての故に、求實不得と云ふ。二は能重等
の法に約して不自在を明す。本識に依りて、自の能無きを以ての故に求實不可得と云ふ。
或は通論するに四義有り。一は諸法は識に依る、故に諸法に於て實有を求むるに得ず。二
は本識を依と爲す、故に本識に於て實無を求むるに得ず。三は諸法は識を起す、故に諸法
に於て實無を求むるに得ず。四は識は縁に隨ひて起る、本識に於て實有を求むるに得ず。
或は聞きて八句と爲す。謂はく、各に有と無と俱と不俱との四句有るが故に、準思して
見つべし。又釋す。此に四句有り。一は、不起は起に異らざるを以ての故に、不起を求む
るに實に得ず、是故に不起も自在ならず。二は、起は不起に異らざるを以ての故に、起を
求むるに實に得ず、是故に、起も亦自在ならず。三は無二を以ての故に、二を求むるに實
に得ず、是故に、俱も自在なること無し。四は二義を離せざるが故に、俱非を求むるに實
に得ず、是故に、俱非自在無し、何を以て此の如く不自在とならば、縁起自在なるを以て
の故に。何が故ぞ不實とならば、縁起理實なるを以ての故に。三に、是故に一切法の下は
結なり、結は法に隨ふを以て、宗因の後に在り、合は喩に隨ふことを明すが故に、喩の後
に在りて説く、二俱に相知らずとは、上の能可重の中に、各有無の二義有るが如し、二
有二無各俱ならざるを以ての故に、相知ることを得ず、一有一無、一無一有、各無二

【七】 喻況を釋す
初に總じて判じ次に別釋の中、流、燈焰、風、地の四喻あり今初なり。

【彼論】 唯識論卷三、八百、

【八】 細かに四義に分つ。初に流水に三相ありと示し佛敎の大本を開示す。

【九】 駛流喻の第二。

【江河競ひ注げども流れず】 肇論の文。
【唯識論云云】 文を引用し廣く釋す初に唯識論の文。

なるを以ての故に、相知るべきこと無し、正しく是の如くの不知等に由るが故に。一切の法有ることを得、故に一切不相知と云ふなり。此は直に平等一味にして、諸法を壞せざるのみに非ず、亦乃ち只平等に由りて諸法有ることを顯すなり。

四に喻の中に四喻有り。此藏識の四義、一は相續因果依他の義、二は五爲因果生識の義、三は受熏の義、四は相依持の義なり。初に駛流の如しと云ふは「唯識論」の中に、「阿頼耶識、恆に轉ずること瀑流の如し」と明すは、是れ此義なり。此中の無絶は是れ彼恆の義、

流流は是れ彼轉の義なり、故に彼論に云はく、「恆の言は斷を遮す、轉は非常を表す」と。若し細く別に分たば、凡そ水の流るる時に、要す四義有り。一は能流の水有り、曲にす

るに三有り。一は水能く清淨なるを本識に喩ふ、是れ如來藏本性清淨心。二は土雜して濁を成ず、如來藏自性清淨なるも、無明の爲に染せられて、其染心有るに喩ふ。三は遂に冷して氷を成ず。如來藏還りて妄識と俱に本識の緣起を成ずるに喩ふ。故に「楞伽」

に云はく、「如來藏を阿梨耶識と名く、無明七識と俱なり」等。
二は相岩の故に流る、以て本識の自性の義に喩ふ。謂はく、後の水推すが故に、前流る

ることを得。或は前の水引くが故に、後流るることを得。各有力無力等有りて、互に相知らずして流注することを得、此れ即ち不流の流なり。江河競ひ注げども、流れずと云ふが如き、此謂なり。經の中に、流注生滅と名く、「唯識論」の第三に云はく、「瀑流の水の、斷に非ず常に非ず、相續長時に漂溺する所有るが如く、此識も亦爾なり、無始より來、

【理數】 理趣か。
【又楞伽云はく】
次に楞伽經の文。

【二〇】 以下所引の
經論文を述釋す。
初に略評。
【論】 唯識論。
【經】 楞伽經。
【經は終教に約す】
「疑せず」以下廣
く述釋するに初に
決判門。
【又真心：應に知
るべし】 此下、融
會門の釋。初に經
論の同異を標し、
次に別して生滅に
就て述す。

生滅相續して常に非ず斷に非ず、有情を漂溺して出離せざらしむ。乃至謂はく、此識性無始の時より來、刹那刹那に果生じ因滅す、果生するが故に斷に非ず、因滅するが故に常に非ず、斷に非ず常に非ず、是れ緣起の理なるが故に。乃至應に大乘緣起の正理を信すべし。謂はく、此正理は深妙にして離言なり。因果等の言、皆假に施設す。現在の法の、後を引く用有るを觀じて、假に當果を立て、對して現因を説く、現在の法の、前に酬ゆるの相有るを觀じて、假に曾因を立てて、對して現果を説く、假は謂はく、現識彼相に似て現ず。是の如きの因果理數顯然として二邊を遠離し、中道に契會す、諸の有智の者、應に勤めて修學すべし」又「楞伽」に依るに、云はく、「刹那に煩亂を息むれば、寂靜にして所作を離れ、一切の法不生なり、我説く、刹那の義、初生に即ち滅有り、愚者の爲に説かず、無間相續して妄想の所熏を生ず」と。

【二〇】 解して云はく、前の論の中には生滅、念を隔つ、經の中には生滅念を同す、是故に則ち不生不滅の生滅なり。更に之 經は終教に約す、是れ不生滅と生滅と和合するを阿梨耶識と名く等の故に。論は始教に約す、唯生滅なり。是れ識細く剋すれば亦生滅を成せず、生なる時、滅無きを以て、應に有爲に非ざるべし。相具せざるを以ての故に、若し滅有らば、應に生を得ざるべし、相違を以ての故に。是故に終教の中には同念なり、各虚假たるを以ての故に、相礙せざるなり。又、真心に依るが故に同することを得、相に隨ふが故に異有り。更に之 過去の滅能く生を成す、當來の滅能く生を壞す、生法能く過の滅を壞し、

【實には：相知らざるなり】生滅の三轉を承けて遂に本經に結歸す。

【二】馳流喩の中第三に風に依て流を得ることを述す

能く當の滅を成ず。又、一の滅相を、前の生に望めば能く壞し、後の生に望めば能成するなり。一の生相を、前の滅に望めば能壞し、後の滅に望めば能成す、是故に相續して絶すること無し。更之 又、生は滅に由りて起るが故に、是故に生の中に、具に滅有り、具に滅有るが故に、都て生をして住せざらしめ、還りて後に滅を成ず。滅は生に由りて有るが故に、是故に、滅の中には生を含む、生を含むが故に、滅をして住せざらしめ、還りて後に生を成ず、是故に、生滅交到り、前後同時にして相障礙せず、流注不斷なり。又、一の生相の中に四種の滅の義有り。同時に具足せり。一は性成就せざるを滅と名く。二は滅に由るが故に起る、是故に滅を具す。三は能く滅を成ずるが故に滅を具す。四は生滅俱に是れ夢なるに由りて、妄の中、妄に前後有り、理實に照す時、皆前後無し、是故に、生ずる時還りて滅有り。實には前念の滅は流流して生に至る、後念の生は流流して滅に至る、生滅の二流なり、故に流流と云ふ。未だ治道を得ざる已前は、暫も停止すること無し、故に「絶え已むこと無し」と云ふ。二流各無にして等しく相知らす。

【三】風に依るとは、二義有り。一は風に依りて流を得、藏識の因相の義に喩ふ。謂はく、惑業の風に依りて、種子を重習して漂流するが故に。此は因相に約して辨す。二は風に依りて浪を起す、『楞伽』に云はく、「藏識の海は常住なれども、境界の風に動せられて、種種の智識の浪、騰躍して轉じて生ず」と。『唯識』の第三に云はく、「又瀑流の、風等に撃せられて、諸の波浪を起すと雖も、而も流は斷ぜざるが如し、此識も亦爾り、衆縁に逐ひて、

【三】 馳流喻のう
ち第四に、地の高
下に依りて流るる
を示す。

【唯識】 卷三、八
右。

【二】 四喻況の中
第二に燈焰喻。本
識と種子と六識と
の相依するを、燈
油と燈炷と炎を以
て喻況す。初に生
識の義を明す。

眼等の識を起すと雖も恆に相續するなり」と。此中に、一は風吹くが故に流る。二は水に由るが故に流る。故に流流と云ふ。互に依りて無性にして各相知らず。或は種子の流、及び所依の識の流等、相知らずと雖も流行り。上の文の、業は心を知らざることに準ぜよ。四は地の高下に依るが故に流る、本識の果相の義に喩ふ、種種の受生の地の報に依るが故に流る。人天の處を高と爲し、惡道の處を下と爲す、此は果相に約す。此中に、心と報とを二と爲す、無性なるが故に相知らず、上の文の、報は受を知らず等は之に準ぜよ。或は物を帶して流るるが故に。『唯識』に云はく、「又瀑流の水の上下に、魚草等の物を漂はせて、流に隨ひて捨せざるが如し、此識も亦雨り、内の習氣、外の觸等の法と恆に相隨轉するなり。」

【三】 燈焰を成依に喩ふとは三有り。一は生識の義、二は互爲因果の義、三は執受の義なり。初に生識とは、前の焰、炷を燒くに依るが故に、後の焰生ずることを得、明前の境を照すに、但一念なるが故に、暫も停らざるが如し六識も亦雨り、名言等、本の種子識に依るが故に、能く後の識を生じて境界を照す、前滅後生して、間に暫も停ること無し。此中に、本識は燈油の如く、識の中の諸の種子は燈炷の如し、所生の現行の六識は炎の如し、無體速滅なるを以ての故に相知らず。二俱不相知とは、古人の云はく「炎と爐と二と爲し、炷と油とを二と爲す、四法和合して生じ、各相知らず」と。此恐くは理無し。文の意は、前焰後焰を取りて二と爲すに似たり。速滅して住せず、體として以て相知

【二四】燈焰喻の中
 第二に、燈焰と諸
 法と互爲因果の義
 あるを明す。
 【攝論の第二云云】
 無著の本論と世親
 の釋論の文を擧げ
 て示す。

【三業の生滅】現
 行六轉識の身口意
 三業の生滅。
 【功能】種子。
 【彼法】現行の六
 識。

るべきこと無きに由る、六識、本に依りて無體なること亦爾なり、心、受を知らず等、之
 に準ぜよ。

二に同時互爲因果の義は、『攝論』の第二に云ふが如し。論じて曰はく、譬へば燈光と燈
 炷との、生じ及び燒燃する、一時に、更互に因と爲るが如し。釋して曰はく、炷の體、依止
 と作なり能く光炎を生ずるに由るが故に、炷は是れ光炎の生因、光炎は則ち此が生ずる利
 那の中に、能く炷を燒燃す、光炎を則ち炷の燒燃の因と爲す。乃至論に曰はく、「應に知
 るべし、本識は能重習と更互に因と爲る、其義亦爾り。識の、染汙法の因と爲るが如く、
 染汙法を識の因と爲す。釋して曰はく、此阿梨耶識を種子の生因と爲す、若し此識無くん
 ば、三業の生滅、依るべき處無し、體の謝滅するが如く、功能も亦爾り、故に此識に由り
 て諸法の體生ず、功能も亦爾り。是故に本識を彼生因と爲す、彼法も亦爾り。若し彼法、
 此識無くして、起りて現在に在らば、道理として、後を轉じて前に異らば、此變異は是れ
 彼法の果なること有ること無し」と。解して云はく、此中の前念の炎炷、同一刹那に更互
 に生じ燒く、各因果有りて亦同時に謝滅す、後炎も亦爾り、故に炎炎と云ふ。未だ治際
 に至らず、此法恆に起る故に、暫も停らず、一因二果俱ならざるを以ての故に相知らず、
 一因一果無二なるが故に知るべきこと無し。又亦能く炷を燒くの炎、及び炷所生の炎の故
 に、炎炎と云ふ。生の理、停らざるを以ての故に、則ち是れ燒なり、燒の理亦爾り、故に
 不暫停と云ふ、相知らざること上の如し。此中の互爲因果の義、略して二重と作す、各

【五】燈焰喩の第三、執受の義を述す。

【六】四喩況の第三、風喩。今有力無體の三義を開きて種子熏成の旨を辨ず。

【七】四喩況の中第四に地喩。【心の義云云】合

三門有り。一は過を護る、二は徳を顯す、三は過を示す、問答の中の如し云云

三に執受の義とは、此中、明燈に二の功能有り。一は内に炷を焼き焦す。二は外に光を發して照す。此本識、内外の執持有るに喩ふ。「瑜伽」に云はく、「此識の執受到二有り、一は内に種及び五根身を執受す。二は外に器世間を執受す、猶し燈炎の、内に炷膏を執し、外に光明を發するが如し」とは、此謂なり。此内外の二の故に炎炎と云ふ、恆に執して無間なるが故に不停と云ふ、内外を二と爲す、無性なるを以ての故に相知らず。

第三に、風を熏習の義に喩ふとは、此中の風に二義有り。一は有力能く他を動す、轉識能く種子等を熏成するに喩ふ。二は無體の義。謂はく、此風自ら動相を現すること能はず、要す物を吹きて動ぜしめ、方に風相を知る。此動は乃ち是れ物の動なるが故に、風に自體無きを知る。諸の能熏の法も自ら種子を成すること能はず、要す本識に熏じて種子を成す、已に方に能熏を顯す、此種は乃ち是れ識の種なり、故に知んぬ、能熏無性なり。二に俱不知知とは、風と物とを二と爲す、物に依るの動は、則ち風に體無く、風に隨ふの物は、物に自性無し。亦、二無と二有とは俱ならず、一無と一有とは能所無し、故に各知らざるなり。識の中も亦爾なり、之に準ぜよ、故に諸法も亦此の如しと云ふ。

第四に、地を相依持なるの義に喩ふ。地輪の、水輪に依り、水輪の、風輪に依り、風輪の、虚空に依り、虚空の、所依無きが如し、心の義も亦爾り。境界は妄心に依り、妄心は本識に依り、本識は淨心に依る、淨心に所依無し。又釋す、現行は種子に依り、種子は本

【不知とは：準ぜよ】 偈の後半を明す。

【三八】 本經の後五偈を釋す。

【前の中：轉す】 前偈を釋す。

識に依り、本識は眞如に依る、眞如に所依無し。不知とは、空は風の與に依と爲る、自ら體無きが故に風を知らず、風は水の與に依と爲る、自ら空に依るが故に、能く水を知るに力無し、水を地に望むるも亦爾り、識の中も亦之に準ぜよ。上來、後の教を遮する難を答へ竟る。

第二に、前の本難を答ふる中に五偈あり、二に分つ。初の二は、正しく前の難に答へ、後の三は便ち觀門を顯す。前の中に難じて云はく、「心性は既に一なり、云何が能く種種の果報を生ずる。今答ふ、諸の轉識の熏習なるに隨ふを以ての故に生ず、是れ一心自ら種種と作るに非ず、故に眼耳乃至因此轉衆苦と云ふ、前の或至善趣等の五對は、皆報に約して辨ず、故に通じて衆苦と云ふなり。此中の眼等の五識とは、知んぬべし。心は、是れ本識、集起の義有るが故に。意は是れ末那、思量の義有るが故に。情は是れ識、即ち第六是了別の義なるが故に。此八は各根有り、五根知んぬべし。意を第六の根と爲す、七八は五に根と爲る、皆生識の義有り、是故に情根と云ふ。此能所熏和合するに因りて衆苦を轉す。疑ひて云はく、「既に熏に隨ひて衆苦を轉す、則ち是れ多心を成す、云何が、仍唯一心と説くや。答へて云はく、「此能熏の諸法、若し是れ實ならば、熏に隨ひて一心を失はしむべし、衆苦既に虚假なり、故に一心實に轉ぜざるを得。疑ひて云はく、「若し實に轉ぜずば、云何が前に、熏に隨ひて衆苦を轉すと云ふや。答へて云はく、「但轉を呈現して、是れ實轉に非ず」と。疑ひて云はく、「法性に於て若し此示現有らば、亦相違なることを得ん。」

【疑ひて云はく】 以下、後偈を釋す初に多心一心の疑【答へて云はく】 隨重虚假の答【疑ひて云はく】 不轉轉苦の疑【答へて云はく】 示現非實の答。以上は前半頌の意。

【疑ひて得ん】
【現遣性の疑】
【答へて故に】
他有自無の答。以上は後半偈の意。

【三九】 五偈の中、
下三偈を釋す。初
に通計無相觀、次
に依他無生觀。

【後の一：分つべし】 第三偈を釋す
初二句は通計無相
依他無生の二觀、
此等有無相待觀よ
り、譬じて無性性
觀に入らしむ、こ
れ本宗の旨趣とす

【二】 十種甚深の
第二、教化甚深。

答へて云はく、「但他に隨ひて示現有り、彼法の中に於て此示無し、何を以てか無しとならば、示現は所有無きを以ての故に。」此偈の中に、上半は不染にして染なるを明し、下半は染にして不染なるを明す。

下の三偈は便ち三無性觀を明す。初の一は通計無相觀。謂はく、上の八識等、執に約せば但是れ虚妄にして都て所有無し、故に云ふなり。次の一は、依他の無生觀を明す。初の句は觀の方便尋伺等なり。次の句は、觀の境有とは、是れ前の眼身等なり。無所有とは、衆縁無性なるを以ての故に空なり。次の句は正觀にして、無所有の理を見るを以ての故に不倒と云ふなり。下の句に釋して云はく、「見法の眼を得て、無明を離せざるを以ての故に淨と云ふなり」と。後の一は眞實無性性觀を明す。中に於て、虚妄は是れ所執性、非妄は是れ無相性、實は是れ無生性、不實は是れ依他の性なり。二觀若し成ぜば是れ出世間、二觀若し無くんば是れ世間なり。觀智に約して説く。此等は有無相待にして不實なり、故に但假の言説のみ有りと云ふ。有無俱に亡じて、方に無性性觀に入るなり。此に應に廣く三性等の觀を説く、解に約し、行に約して之を分つべし。

第二に教化甚深、何が故に來るとならば、前は心を攝して理に入ることを明し、此は後智、生を救ふことを辨す。財は是れ法財なるが故なり。中に於て先に問ひ、後に答ふ。此中の問答、少く不同なるに似たり、答に準じて問を取らば、問の中に應に云ふべし、如來は既に十隨教化す、云何が復衆生は則ち衆生に非ずと説くや。答の中に、身命等、皆空な

ることを明すが故に、是十隨教化は則ち教化に非ず、衆生、衆生に非ざるを以て、教化も亦教化に非ず、此に何の失か有らん。又、問に準じて答を取らば、難の意の云はく、覺首の所説の如く、衆生既に空ならば、云何が教化なる。教化の時、若し聖智の如く、理に稱ひて空を見れば、則ち化を成ぜず、若し凡執に同じく横に計して有と爲さば、即ち化するのと能はず、此は是れ有無相違の難なり。答の意は、衆生は是れ空、空は是れ衆生なり。一品に云はく、一色を空するを以ての故に、空と名くるに非ず、但色即是空、空即色なるを以てなり」と。解して云はく、色に即するの空は、方に是れ眞空なり、斷空に非ざるを以ての故に、此は凡智の境に非ず、則ち此の如きの衆生の爲に、此の如きの十隨を以て、此の如きの法門を説くを、方に眞の教化と爲す。

【三】科に隨ひて別釋す。初に問を釋し次に答を釋す

【處…故に】八衆生の衆生、機の熟する時を待つ意

難問の中に二、初の一句は正義を擧ぐ、二に如來云何の下は相違を顯す。中に於て、古人は隨身を將て是れ總とす。今、初の一は是れ總、餘の十は是れ別なり。初の一は是れ發心の時に應なる、得道の時に應する等なり。論に云はく、一難處に生ずる者は時を得つが故に」と。二は其報命に隨ひて、或は長時、或は短時、應に化を受くべきが故に、則ち彼時に於て之を教化す。三に其所受身の時に隨ふ、人身を得るを待ちて方に教化する等の如し。四に所作の行業の時に隨ふ、惡行を作すを待ちて、方に法忍を得るが如し。淨諸業障經に説くが如し、善行等之に準せよ。五に當に何の欲樂を起して、化を受く時に隨ふ。六に何の誓願を起して化を受くる時に隨ふ。七に何の意を起し何の事を念する時に隨ふ。八に

【三三】經文に「爾時財首菩薩」等といふ答を釋す。

【後九偈】：七問を答ふ。義を擧げて正しく答ふるを釋す。

【三三】以下正しく前問を答ふる七偈の釋。初に隨身の下。

【界分別觀】我に執する時、十八界等中、我を求むるもなしと觀するなり。

【内を以て外に類し】身の無我を知ると共に萬法また虛妄と知るをいふ。【隨命を】一切相

何の方便を起して造修せんと欲する時に隨ふ。九は何の思惟を起して、照察する時に隨ふ。十に何の籌量を起して、計度する時に隨ふ。十一に何等の見を起す時に隨ひて、應に化をうべくべき、故に如來爾時に則便ち之を化す、既に此の如し、機に隨ひて屈曲教化する、而して衆生則ち衆生に非ずと説く、其理安にか在るや。

【三三】に答の中に二あり。初の一偈は徳を讚じ聽を勤む、上半は文殊の徳を嘆ず、智の中に、無明を雜へざるが故に明智と云ふ、能く唯心の理を照すが故に境界と云ふ、何故ぞ恆に此境を照すとならば、常に寂滅の行を樂むを以ての故に。後の九偈の中に二、初の七は正しく前の問に答へ、後の二は、難を遮して重ねて答ふ。前の中の隨時の一間は答無し、總は別を離れざるを以ての故に。初の三偈は隨身の一間に答へ、次の二は隨命の一間に答へ、次の一は隨行の一間に答へ、後の一は通じて餘の七問に答ふ。

初の中に、先の二は人空を明す。初の一は昔より來、我は身中に在りと謂へるが故に。今身無ければ我も亦無きことを明す、則ち界分別觀を以て、是身不可得なりと覺るが故に、則ち所執の身中の我、有即是れ無なりと達す。次の一は、昔より來、身、我に依止すと謂へり、今我無ければ身も亦無しと明すときは、則ち能依の身分を尋ねて、所依の我も不可得なりと覺るが故に、身に於て著せざるなり。次の一は、内を以て外に類し、法無我を明す。中に於て初の二句は標、次の一句は釋、下の一句は益なり。此の如く身に隨ふは則ち隨ふに非ざるが故に、衆生は則ち衆生に非ざるに異ならず、是故に失無し。隨命を答ふる二偈

を離る。經文「身命相隨順」等の二偈、隨命の一問を答ふる下なり。

【前の中の身云云】初偈を擇す。今十二因縁中の識名色を身命に配して互爲因果の旨を述す。【此義：離る】後偈を擇す。

【法如智】根本正智。

【常住の法：故に】宛然不變なる眞理の邊にていふ。

【隨行：異なること】無の經文、因縁所起の法は、因縁無しの一偈、隨行の一問に答ふる下。

【諸の熏習の法】相宗に同じからず今本諸意識をいふ。【業の功能】業種子。

【唯業行：故に】熏習の因と所得の果報に就いていふ。【次の一偈：非ず】經文「一切世間の法」等の一偈餘の

の中に就きて、初の一是觀の境、後の一是觀の智なり、前の中の身は謂はく名色、則ち果報身なり、命は謂はく、正しく受生の識、則ち是れ本識なり、本識と身とは、始より終に至り、更互に因果にして、和合して無二なり。輪說知んぬべし。此互爲因果は二乘、愚夫の凡識の境に非ざるが故に、不可知と言ふ。此義、誰か能く知らん、智者、能く觀察するを以ての故に、則ち佛菩薩の法如智なり。身命更互に因縁と爲ると知ることを得る所以は、分別と依他との無常の法、更互に因と爲るを以ての故に身命有り、常住の法は因と成らざるを以ての故に、既に無常と云ふ。有に即して有に非ず、各自性無きが故に空無我と云ふ、及び増益損減等の一切の相を離る。隨行を答ふる一偈の中に就きて、本識と意識と、諸の熏習の法、更互に因と爲るに由るが故に、業の功能の生にして、人法等有るに非ず、故に無我猶如夢と云ふ。唯業行獨、二我を絶するのみに非ず、業所得の報果の我性も亦寂なるが故に、其因果前後異なるに似たれども、無我の義は同じて曾に異なること無し。次の一偈は後の七問に答ふ。隨欲樂等の七は皆是れ心數なり、心王に依りて自在ならざるを以ての故に、故に心王を擧げて、總收して通じて答ふるが故に。以心爲主と云ふが故に。又、一切世間の法は、唯是れ自心變異の所作心を其本と爲す、故に主と云ふなり。然るに愚夫、唯心の義を了せざるが故に、妄に分別に隨ひて、此欲樂等の七種の心念を起す、皆相を取るを以ての故に、悉く是れ顛倒なり。是れ顛倒なるが故に、則ち空にして所有無し、是故に、之に隨ふときは則ち隨に非ず。

七問に答ふる下。釋に二義あり、初は以敷從王に約し、後是不了唯心に約す。

【三四】 經文「世間の有ゆる法」等の二偈。遮難を釋する下なり。今は後の半偈に答ふるを主とす。

【三五】 十甚深の第三、業果甚深。

【此難の意：難す】 外計を以て内道を難す。

【重ねて難じて云はく】 此下、大乘の法空の實義を以て、小乗の無我は無我を感じざるを難す。

【前の中に云云】 次に別釋するなり

(三) 下は遮難を釋す。恐くは有が難じて言はん、若し衆生、此の如く即空ならば、自ら是れ法門なり、隨も亦爾らば、何んが更に化することを須ひん。釋して云はく、諸法即ち是れ無二なりと解すること能はざるを以ての故に、是故に之を化す。又更に難じて云はく、即ち此れ眞實を解せざるの衆生、豈即是空にあらずや。釋して云はく、緣より起るを以ての故に無に非ず、遮滅して住せざるが故に有に非ず、此二不二なる、是れ衆生なるが故に無異相と云ふ、是故に教化することを得。前の偈は化を須ふることを明し、後の偈は化を成ずることを明す。

第三に、業果甚深の内に、先に難じ、後に明す。難の中に二、先に法を擧げて正しく難す、後に然法性の下は、救を遮して重ねて難す。此中の難の意は、若し四大の中に我無くんば、誰か善惡を作し、誰か能く報を受けん。此中に作用有りと執せば、應に作者有るべし、是は用を以て體を徴して難す。設し小乗救ひて言はん、「我人作者無しと雖も、然も善惡因果の法有るが故に、此の如きことを得るなり」と、猶是れ法執なり、故に重ねて難じて云はく、「然も法性に於ては、善も無く惡も無し」と、此は法空を顯す。既に法性に於ては空にして善惡無し、若し作者無くんば、更に何の法に因りてか業果有らん、故に知んぬ我有るべし、我既に實有ならば、無私の理安にか在る、難の意此の如し。前の中に二、先の一句は正義を擧げ、下に相違を顯す。中に於て五對十句あり。初の一は、受報に受者有り」と計するに約す。二に作業に、作者有りと計するに約す。三に報の中の差別に約す、内

【下は教を遮して】經文の「然も諸法の性一等の句。」

【覆却して重徴す】教誨を覆ひすして直に正業を覆却して重て徴する意【云】經文の下【苦陸】等といふ【多寶】無盡を顯す。

【七】別して九喻を釋するに、初に總じて釋す。

は行に約し、外は身に約す。若し作業の者無くんば、何に囚りてか此別有らん。四は多少の報に約す、經の中に説くが如し、能く多業を作らば、報を受くことも亦多し、少も亦爾り。故に我有りと知る。上は生報に約す。五は現後報に約す。下は教を遮して離す、知んぬべし。亦是れ覆却して重徴す。

第二に答の中に、何が故に寶首答ふとならば、謂はく、事の中に貴ぶべき多寶を得ることを顯す。中に於て二有り、初の一偈は法説、下の九は喻説なり。前の中に二義、一は義を擧げて正しく答ふ、二は佛を引きて義を證す、已に能く知るに非ず。初の中に、上の二句は業を壊せざることを明す、下の一句は作者無きことを明す。謂はく、其所作の諸の差別の業に隨ひて本識に熏す、本識は依他、其業所起の果報を譬似す、故に多報等の種種の不同有り、是諸縁起して、互相に集成して、自性無きが故に、業果有ることを得。實に四大の中に、別に人我有りて、能く業を作りて果を受くるに非ず、故に造者無有と云ふ。此れ則ち無性の理に由るが故に、法性に善惡無し、無性によるが故に、因果を成ずるが故に、業果の差別有り。此は但無性の因果のみ有り、何ぞ我人有るに關らん。故に四大の中に、我非す等と云ふなり。此の如きの正法の理趣決定せり、三世の諸佛の、同じく説く所なり。故に諸佛説と云ふ。『楞伽』の第一に云はく、「我常に空法を説きて、斷常を遠離す、生死編し夢の如し、而して彼業を失はず」と、此れ之謂なり。

下の九喻の中に皆二義有り。謂はく、業果歴然として所有無きが故に喻を成ずるなり。

【一は依他云云】
別釋の中、九あり
一依他離性の喻。
經文、猶し明淨鏡」
等の文なり。

【起信論】同義起
中末五左、四鏡の
文。

【第二に無知云云】
二、無知成因の喻
經に「田の種子」等
これなり。初は本
識緣起に約す。

一は依他離性の喻を明す、謂はく、本識は鏡の如く、熏に隨ひて現する所の業果は像の如し、此は是れ依他の義。内外無所有とは、自性を離るる義を明す。此に三重の四句有り。一は像に約す。謂はく、質無ければ現ぜざるが故に。内に所有無くれば、鏡に非ざれば現すること無し、故に外に所有無し。是一の像に由る、故に俱に所有無し。是像に由るが故に、俱に所有無きに非ず、凡そ是像の義、必ず内外に由りて、方に現することを得るを以ての故に。二は質に約す。謂はく、面は南、像は北なるが故に、質の内に所有無し、面の如くにして現するに由るが故に、質の外に所有無し、俱不俱知んぬべし。三に鏡に約す。謂はく、鏡は鐵、堅密にして間に空處無し。物を受けざるが故に、像内に非ず。凡そ像を觀せんと欲せば、皆鏡に臨みて之を觀ず、所以に外に非ず、俱不俱等之に準ぜよ。此の如く無所有にして、而も影像歷然たり。業は像の如く、性は鏡の如し、故に亦如是と云ふ。起信論に云はく、「二は因熏習鏡、謂はく、一切の世間の境界、悉く中に於て現す、出でず、入らず、失せず壞せず、常住一心なり、一切の法は即ち眞實の性なるを以ての故に」と、此れ之謂なり。第二に、無知、因を成ずるの喻を明す。謂はく、本識は田の如く、業等は種子の如し、多類の種子、同一本識の故に、各自體として相知ることを得べき無し。然るに識の功能、失壞せざるが故に、能く因と爲る、純淨の土、雨を得て草を生ず、此多草の種、彼土の中に於て求むるに、各々の性皆不可得にして能く因と爲る、縦ひ深く地を掘りて得る所の土も、雨を得て草を生ず、草種は土に同じ、多年なりと雖も失せざるが

【又水土云云】 經

【第三に云云】 三

【第四に云云】 四

【第五に云云】 五

【第六に云云】 六

【第七に云云】 七

【第八に云云】 八

【第九に云云】 九

【第十に云云】 十

【第十一に云云】 十一

【第十二に云云】 十二

【第十三に云云】 十三

【第十四に云云】 十四

如し、此も亦爾り。經に云はく、「業は百劫を經と雖も終に失壞すること無し、遂に衆緣合

する時、要す當に彼果に酬ゆべし、故に業性亦如是と云ふなり。又、水土を疎縁と爲し、

種子を親因と爲す、各全く有無を奪ふが故に、是故に相知らず、識の中、此に準じて之

を知れ。第三に、因能く果を現するの喩。謂はく、業性は幻師の如く、現果は幻色の如し、

有に似たりと雖も而も有に非ざるが故なり。第四に、果法無念の喩。謂はく、咽喉等の因縁

和合するに由りて聲を出す、實に我的能無し、但、名言熏習に従ひて、生じて言説に似た

り、木人の、聲を出すに、自ら念じて我能く聲を出すすと云ふの念無きが如し。又、木は藏

性の如く、匠は妄想の業等の如し、木人は業生の報相の如し、故に我無く、我に非ず。第

五に、因能く雜する無きの喩。謂はく、鳥の、轂に在る時、未だ音相を辨ぜず、轂を出づ

るに、類に隨ひて方に異音有り。口業の種子、本識の中に在りては、同じく無記性にして

若干の相無し、受生の處、報熟の時に至りて、能く衆聲を出す。又、功能生果不同なるこ

とは、鳥の轂を出づるが如く、業體性空にして別無きことは、鳥の轂に在るが如し、此れ

乃ち喩は是れ前後なれども、法に約せば同時なり。第六に、現果無來の喩。謂はく、父母

を縁と爲し、受生の識に煩惱業等の種子有りて因と爲る、此識、赤白と和合する時を因

縁會と名く、即ち此を受生と名く。別の來處無く、來者無しと雖も、而も報漸く長じて、

諸根各別なることを妨げざるが如し、業も亦爾り、思、身等を動じ、業を造して別の來

處無し、後に若し熟する時、報を感ずること差別せり。第七に、苦報無本の喩。謂はく、

經の「大地獄中の」等の一偈。

【第八に云云】勝果無根喻の「轉輪王の」等の一個

【第九に有無云云】九、有無同性論。經の「亦諸の世界に」等の一個。

【三八】十甚深の第四、佛說甚深。【謂はく十種の相違なり】教義相違を述する中、初に總じて辨ず。【難の意云云】別して述する中初に證教相違を示し教を以て證を難ず。【善若し云云】相違の難意を述ぶるもの、證を以て教を難ず。

惡業、自心に熏ずるを以ての故に、心をして種種の苦具を變作せしめ、還りて自ら惱害す。然るに彼苦具、外に來處無しと雖も、然も惱害の事壞せず、業も亦是の如し、自性無しと雖も、然も感報滅せず、故に業性亦如是と云ふ。第八に、勝果無根の喩。謂はく、善業、心に熏じて、心幻果を現することも亦根本無し。小乘に、輪王滅して後、七寶貯へて鐵圍山の中に在り、後に聖王出づるに、七寶還りて復王の前に現すと説く。今此は爾らず、但業、自心に熏ずるに由りて變現す、別の寶體ありて、之をして來去せしむること無し、業性も亦爾なり。論に云はく、「善惡、心に熏ず、何が故に、心に異にして説く」と。第九に、有無同性の喩。謂はく、有漏の業未だ果を得ず、及び治道の前は本識の爲に攝持せられ、功能滅せざるを、名けて成と爲す、其果を得るに及び、治道を得るに及ぶ時、業の功能盡くるを、名けて敗と爲す、其成の時を尋ぬるに、從來する所無し、其敗の時を求むるに、亦所趣無し、此れ竝に世間を壞せずして第一義を説くなり。

第四に、佛の説法甚深。初の難の中に二。先に法を擧げて正しく難ず、後に教を遮して重ねて難ず。前の中に二、初に正義を擧げ、二に正しく難を設く。謂はく、十種の相違なり。一法は是れ一味の眞如なり。難の意の云はく、所覺既に一なるに、教を設くること種種なり、善若し一に非ずんば、言に隨ひて竝に實ならしむべし、即ち一味に乘き、應に所證を失すべし。善若し一味にして、言に隨はざらんか、即ち諸教の種種、皆應に虚妄なるべし。此は是れ教義相違の難。彼若し救ひて言はん、我此所證の一味の理の中に、多徳

【重ねて兼じて云はく】經文に同じ見るべし。
【又釋す】此下、體用相違の難にして法に就いて相違を示す。

【二に正しく云ふべし】體別の別を追釋す。

【元】以下分文釋

【一味法界：義と爲すなり】理事無礙を以て教義相違の難に答ふ。
【又釋す】體用に約して述す。一多相即の一多を以て所覺所說と爲すは事事無礙に約するなり。
【求功德：智者と名く】初偈の後半を釋す。

を具するが故に、是故に諸教各一徳を顯す、故に相違せずと、此教を遮せんが爲の故に、重ねて難じて云はく、而も法性の中に於て、此多種を分別し、推求するに、實に不可得なり、不可得なるが故に、教は便ち義に乖く。又釋す、此は是れ體用相違の難なり。謂はく、一法を覺するは、是れ體なり、機に應じて多を現するは、是れ用なり。若し體を以て用に從へば、應に一法を乖失すべし。若し用、體に同ぜば、種種便ち虚ならん。若し、一法の内に種種有るが故に相違せずと言はば、法性の中に種種を求むるに不可得なるが故に教を成ぜじ。二に正しく難を設くる十句の中に、初の一は總、餘の九は別なり。別の中の一は教聲普遍、二に教力生を攝す、三に聲聲差別、四に身業、五に意業、六に身用、七に依報、八に叢土、九に分齊なり。若し具に説かば、應に一一の句初に皆唯覺一法云何無量と云ふべし。

答の中に、徳首、答ふとは、法理徳深を顯すが故に。中に於て二、初の一偈は問を數じて略答す。答の意の云はく、一味法界、是れ無分別の義なるを以て、是れ一數の一に非ず、是故に、縁に隨ひて多を成すれども、一味に異らず、一味湛然にして種種を礙せず、此れ二無二なり、是故に、諸教竝に實にして一味の理存す、此の如く無礙なり、是故に名けて甚深微妙の義と爲すなり。又釋す、此は多に異らざるの一、是れ如來の所覺なり、一に異らざるの多は、是れ如來の所說なり。是故に、一を甚深と爲す、多に異らざるを以ての故に。多も亦爾なり、上に反して知んぬべし、故に甚深微妙と云ふ。求功德とは、一を知れ

【下半の偈云】
德首の名、法に約する意を明す。

【九喻並に云々】
後の九頌を釋す。

【二に緣・喻・緣起の法門衆惑を滅する意】

【入器無變】佛敎機類に應じて説くもその根本無變の意。

【種子を重成し】如来藏眞如の重力願求を生ぜしむ。

【四】十甚深の第五、福田甚深。初に總じて標し難を釋す。

【三念處の法】佛心無常、空、無我に住するをいふ。

ば多を起し、生を攝するに堪ふるを以ての故に、此一を求め得。又多を知れば一に歸し、理を證するに堪ふるが故に、此多を求め得、故に智者と名く。下半の偈は、德首自ら法に約して名と爲すことを顯す。九喻並に一を改めずして、無分別にして事の差別を成ずることとを顯す。一は法能く萬機を荷載するの喻を明す。二に緣、衆惑を滅するの喻。三に入器無變の喻、謂はく、法界勝流の義等の如し。四に諸根を拂動する開覺の喻。謂はく、種子を重成して、動じて厭求せしむ。五に欲に應じて隨ひて潤すの喻。龍は佛身の如く、雷は梵音の如く、雨は正敎の如し、無分別なるが故に、一に異ならず。六に緣、衆徳を生ずるの喻。謂はく、淨法界に依りて、修生の諸行を成ずる等なり。七に無垢照機の喻。八に應機無往の喻。九に隨緣不變の喻なり。此上の諸門、皆一に異ならず、無分別にして多種利益の事を現す、梵の、大千に應ずるが如し、佛、無量を説くに喩ふ。身無異は一味常存に喩ふ、餘門並に準ぜよ。

第五に、福田甚深の難の中に、初には正しく難じ、後には救を遮して重ねて難す。難の意は、上に既に佛徳無異と云ふ、則ち投施得果、殊ならざるべし。如何が今、報を得る差別なるを見る、此は是れ緣果相違の難。恐くは彼救ひて言はん、佛の田は一と雖も、若し人、佛に於て上妙の供を興さば、佛、此人に於て親愛の念を生ず、故に勝報を得、弊惡は之に返すと。此救を遮せんが爲の故に、後に「如来は平等にして怨親有ること無し」と云ふ、此は是れ三念處の法なり。正しく難ずる中に、初は正義を擧げ、後に相違を顯す。中

【四姓】印度の四姓、五種姓は釋氏を加へたるものなり。

【白疊云云】付法藏經の説。

【答】別して答の文を釋するなり。初に、總標して意を述す。

【十喻を引きて示す】別して十喻を釋す。

に於て初の句は總、十句は、別にして、上の總の中の不同の言を釋す。一は色相の好醜、二は人中の四姓。及び五種姓等、三は貴にして富に非ず、富にして貴に非ざる等の如き、四句是れ家あり。四は眼等の根の具同好惡、及び根機の利鈍等、五は資生の財、金粟等なり、六は第一布施、奇特の財物を得ること有り、樹提伽が白疊、釘を以て地に入ること七寸なるに、穿たざる等の如し。七は眷屬善惡等、八は既に各己を卑うして施を行すに、應に同じく自在を得べし。今乃至或は一人に於て自在を得、餘處は得ざる等、各分齊有り、階降不同なり。九は福德の多少、十は智慧の淺深、救を遮すること知んぬべし。答の中自首とは、此法を見ること明白なるが故に。

答の意は、凡そ佛に施すは二因に由る。一には施者の用心等からざるに由るが故に。遂に報を得ること千差ならしむ。『溫室經』の説の如し、皆、用心等からざるに由るが故に。二は佛の大悲不思議に由るが故に、究竟して皆悉く解脱を得しむ。故に『大悲經』の第一に云はく、「下畜生に至るまで、能く佛を念ずる者、悉く最上涅槃を得て涅槃の際を盡す、況や人等をや」と。又下の性起見聞の益等の如し。是故に、偈の中は、衆生の故に異なること有り、是れ初の義なり。能く一切の有を燒くは、是れ後の義なり。此二無二なり、同一報の故に、相違せず。十喻を引きて示す。一は縁、能く果を現するの喻、二は應機隨解の喻、三は善巧隨順の喻、四は應機令喜の喻、五は物、現形を感ずるの喻、六は善く惡障を除くの喻、七は殄滅智障の喻、八は悲情普被の喻、九は動して厭を生ぜしむるの喻、謂はく、

【四三】十甚深の第六、正教甚深。初に總標釋難。

【答】答の意…之に答ふ。別して答を釋す。

【四三】正しく尙顯を釋す。【三は八偈あり】懈怠なれば教法に違背することを示す。懈怠の八とは一多聞。二無力。三編修。四倒修。五過求。六少力。七小治。八無求出意。

堅樂ならしめざるなり。十は焚燒して盡く滅するの喩、謂はく、涅槃を得しむるなり。

第六に、正教甚深の難の中に三、初は教力を擧げ、二に爲知の下は行力を擧ぐ。中に於て十法を三に分つ。初は總じて五蘊を知り、二は三界染淨の別を知り、三は癡愛是れ報縁

なることを知る。三に若知の下は、行を以て教を難じて、教の無力を顯す。難の意は、教法に因りて、惑を斷すとや爲ん、諸法を勤觀するに因りて、惑を斷すとや爲ん。若し教に

因りて能く斷ぜば、則ち精進を須ひず。若し勤行に因りて能く斷ぜば、則ち教に増損無し。謂はく、此教法、徳に於て増せず、惑に於て損せじ。又釋す、教を得とも増せず、教を失

ふとも損せじ、無用なるを以ての故に。此は是れ教力相違の難なり。答の意は、教は是れ精進の縁なるを以て、勤觀、教を扶けて方に能く惑を斷す、是故に速に出づ。教に勝力

有れども、懈怠にして教に乖くときは、則ち教力無し、是故に脱し難し。難者は行力を以て教力を奪ふ、答者は行は教力に由ることを顯すが故なり。教に應ずれば懈怠を離るるを

以ての故に、進首之を答ふ。

【四三】偈の中に三、初の一は聽を勧めて總じて説き、二章門を開く。次の一偈は精進、教に順

ずることを辨じて、速出門を釋す。三に八偈有り、懈怠、教に違ふことを明して、難脫

門を釋す。一は多聞懈怠の喩、是人先に已に小く聞きて尙領悟すること能はず、小火の如

し、今更に強て求めて廣多聞誦す、濕たる薪の如し、新舊俱に失して、都て益を成ずること無きを以ての故に、懈怠と爲す。又此人、少時を以て頗に多法を學せんと欲して、學既

【多聞懈怠】初は小聞多聞に約し、後は小多法に約す。

【無力懈怠】初は少心廢習に約し、後は多時數斷に約す。

【偏修懈怠】初は偏習、後は缺縁に約す。

【倒修懈怠】初は倒倒に約し、後は舉倒に約す。

【過求懈怠】初は外縁缺けて窮過求す、後は内因缺けて過求す。

【少力懈怠】初は求めて得ずして懈怠を生じ、後は興聞して得たりと謂ひ懈怠するなり。

【小治懈怠】自己の分齊を知らず、教は無用といふ輩これ。

【無求出意】執我慢高、衆人を誑惑する愚輩をいふ。

に成ぜず、遂に懈怠を成す。二は無力懈怠の喻。是人薄福にして心力少く、復數習を廢す、成ずる所無きが故に懈怠と爲すなり。又此人亦多時なりと雖も、然も數聞斷す、故に業成ぜず、懈怠と名くるなり。三は偏修懈怠の喻。是人善知識に背きて、徧く經卷に於て聞慧を求習す、得る所無きが故に懈怠なり。又此人聞斷無しと雖も、然も縁を闕くが故に、業亦成ぜず。四は倒修懈怠の喻。是人經卷を書持して便ち解脫を證すと説くを聞き、別時意を知らざるを以ての故に、久しくとも而も得ざれば、便ち懈怠を生ず。又此人、外縁有りと雖も、竝に是れ錯て學するの人、妄に取りて倒求す、故に顛墮す。五は過求懈怠の喻。是人自ら聞慧無きことを知らず、但總じて一切の佛法に達せんと望む、既に法に達せざれば便ち懈怠を生ず。又此は外に良縁有りと雖も、内因闕くこと有り、謂はく、信心の手無く、持戒の足無し、定の弓を撃かず、智の箭を茹らず、云何が能く煩惱の大地を射ん。六は少力懈怠の喻。是人、利那の意識を以て、則ち佛法の深海を究盡せんと望めども、既に入るを得ず、便ち懈怠を生ず。又一念に佛を稱して、多の重罪を滅すと聞きて、但一句を稱して則ち休みて、我罪、已に滅すと云ふ等なり。七は小治懈怠の喻。是人佛教能く煩惱の火を滅すと聞きて、則ち小聞を以て盡く之を滅せんことを望む、久うして如し盡さず、則ち佛教無用なりと謂ひて、併せて皆棄捨す、故に是れ懈怠なり。八は無求出意の喻。亦執我慢高の喻と名く。是人、衆生、則ち眞如なりと説くを聞きて、迷悟を解せざるを以ての故に、則ち我既に是れ眞如なり、則ち是れ已に法界を證得せり、更に何の修

【四四】 正行甚深。上に正教を明すも教意行にある故に今正行を示す。
【十種の垢法】 嫉、忿、慳、嫉、慢、愛、怒、慳、嫉、慢、愛、詭曲。

【今重…能はず】 難意は、心に所行あると所行なきの道理を以て之を難ず。

【四五】 別して答明を釋す。初に總じて辨じ問を釋す。

【十偈の初…生を利するが故に】 正しく偈頌を釋す。

する所かあらんと云ひて、則ち懈怠を生ずるが故なり。

第七に、正行甚深の難の中に三、初に佛の語を引き、正義を擧ぐ、二に云何の下は難を設けて違を顯す。中に於て初の句は總、次は十種の垢法に隨ふ、是れ別なり、恆に上の心現行するが故に、心を離れずといふなり。三は心無所等は是れ難を結して返徵す。謂はく、正法を聞くとも、心依行して斷惑せんと欲する無し、故に知んぬ。佛、法を聞きて能く斷ずと説くも、其義何にか在る。又釋す、此は是れ、救を遮して重ねて難す。謂はく、若し救ひて言はん、若し教に依りて行すれば、即ち能く惑を斷ず、故に法を聞くは、能斷の義還りて存す。』といはば、今重ねて難じて云はく、此は教に依りて行す、即ち是れ心に所行有れば、何ぞ能く惑を斷ぜん。若し道理に依らば、要す須らく心に所行無くして、方に能く結すべきが故に。是故に聞法終に斷ずること能はず。

答の意は則ち此心、所行無きを如説行と名く、故に能く結を斷ず、若し但唯聞くのみならば、實に斷の義無し、聞きて行ぜざるは有るべし、行じて聞かざるは有ること無し、故に一切の佛法、聞法を以て本と爲すと曰ふ故なり。此と前の正教甚深と、何の別かあるとならば、前は行を以て教を徵するの難にして、教力、行を攝する答、謂はく、若し教無くんば勤行成ぜざるが故に。此中には教を以て行を徵する難にして、行、能く教を行する答なり。謂はく、若し行ぜざれば、多聞無用なるが故に、教は行を成すと執するが故に。法首の答なり。十偈の初の一は、聽を勸めて總じて答ふ。但、多問を積むのみに非ずとは、

【牛王目比丘】智度論十一卷二三丁二あり。
【智度論に在り】問云云云 妨難を通ず。

【四六】十甚深の第八、助道甚深、檀、尸羅、羼提、毘梨耶、禪、般若の六波羅蜜と慈悲喜捨の四無量心。

多聞は是れ過患にあらざることをも明す、但は是れ唯なり、行を闕くを以て失と爲すが故なり。後の九は喻を擧げて失を顯す。一は説の如く行せざるの喻、二は説に隨ひて思を廢するの喻、三は文を計して行に迷ふの喻、四は自ら分に非すと謂ふの喻、亦、文に耽りて行を失ふの喻と名く、五は惡業障礙の喻、六は自を解せずして説くの喻、七は自を見ざる義の喻、謂はく、前は教に約し、此は義に約す。八は正を廢し助を成ずるの喻、謂はく、牛王目比丘の、八萬の法聚を誦し、多億の衆を度して得道せしめ、自身は地獄に墮することと免れざる等の如し。九は非を隠して是を現ずるの喻、謂はく、調達善く法を説くも、内に朽爛を懐く等なり。又此説に倚恃して、分に非ずして自ら高ぶり、返りて害せらるる所と爲る等なり。問ふ、何が故に、此中は多聞を訶毀し、十住品の中には、乃ち多聞を讚するや。答ふ、信の中には行劣にして、文に滯ることを恐るるが爲の故に。又是れ聞熏の初、一心に無倒に聽聞するを成せしめんが故に。十住已去の行勝るるが故に。滯著せざるが故に。能く廣く生を利するが故に。〇二

第八に、助道甚深難の中に三、初に正義を擧げ、二に何故の下は難を設けて違を顯す。中に於て六度四等を十と爲す、此は行に約して辨す。若し位に約して論せば、則ち方便等の四を加へて十と爲す、此中、般若は應に是れ世間の慧の攝なるべし、爾らずんば、難に非ざるが故に。三に此一の法の下は、難を結して反徴す。難の意の云はく、智慧は衆行の主爲り、何を唯此を讚せずして餘行を敷する、餘行は慧を離れては、皆菩提を得ず、何

【答の意：樂なり】
別して答を釋す。
【十偈の中云云】
正しく偈文を釋す

【四七】 十甚深の第
九、一乘甚深。

ぞ之を讀することを須ひん。此即ち助を以て正を徴するの難なり。答の意は、正助相資を以て答ふ。能く助を會して正に同するを以ての故に、智首之を答ふ。十偈の中に三に分つ。初の二は問を嘆じ聽を勸む。次の二偈は、二章門を聞く。謂はく、初の偈は、果は一行をもて成するに非ず、正しく要す助を待ちて資とするを明す。後の偈は衆生の樂欲別なり、根に隨ふが故に、別に讀することを明す。三に二章を釋す。初の三偈は根に隨ひて別に讀することを釋す。又涅槃の中に、慳等の人の前に於て、施等を讀することを得ずとは、根の未熟なるに據る、將護せんが爲の故に。此文は根熟に約するが故に、餘も亦爾り。後の四偈は法喻に約し、初の相須の章門を釋す、施は他を攝せんが爲、戒は自攝の爲なり。此二は通じて衆行の本と爲る。已修の善根には忍防きて失せず、未生の善をば進の故に生ぜしむ。又忍は外煩を防ぎ、進は内慢を防ぐ、故に防護と云ふ。禪定をもて伏除し、智慧をもて斷を求む、故に安穩と云ふ。又、禪は外散を攝し、慧は眞理を證す、故に安穩と云ふ。四等は生を益し、自の意を稱悅す、故に安樂と云ふなり。

第九に、一乘甚深の難の中に三。初に正義を擧げ、二に難を設けて違を顯し、三に難を結して反徴す。難の意は、一切の諸佛同じく一乘を修す、因行既に同じ、得果應に一なるべし。云何が今、諸佛の世界種種の不同なるを見る。乃至作法、是の如く十種各不同なる、是の如く一切の差別の佛法を具せざること有ること無し。而も唯以一乘と言ふ、其義安にか在ると。此は是れ、因を以て果を徴するの難なり。謂はく、因同ならば果も亦同な

【明かに一乘に達し】因果同なるを證する故に。【十偈を二に分つ】以下正しく偈頌を釋す。
 【因一】因の中、二一を明す、一は所依の法性一、能依の行修一。
 【果一】果の中、また二一あり、即ち所證の法身一、即修生の勝德一。因果合して四一あるはこれ一乘なり。

らん。亦是れ果を以て因を徴するの難なり、謂はく、果異ならば因も亦異ならんと。答の意は、理實には、因同なれば果も差別無し、但し衆生の感見に隨ひて差別す、是れ諸佛に自ら優劣有るに非ず、明かに一乘に達し、相に順するを以ての故に。賢首之を答ふ。十偈を二に分つ。初の二偈は實に就きて以て因果俱に一なることを明して、上の唯一乘をもて出ることを得ることを明す。中に於て、先是因一を明し、後は果一なり。因の中に、初の半は所依の法性、一なることを明し、下の半は能依の行修の一なり。後の果一の中に、初の半は所證の法身の一なり、下半は修生の勝德の一なり。心は是れ大定齊し。次は是れ大智齊し。此二は是れ内用同なり。力無畏等は是れ外化用齊し。通じて論ずるに三有り。初は體同、次は德齊し、後は用等きなり。二に八偈有り、體を以て縁に従ひ、現に種種有ることを明す。上の世界等の不同を明す、是れ機見に隨ひて異なるなり、佛に別有るに非ず、則ち展轉して疑を釋す。中に於て初の一は、佛機に隨ひて現する差別を明す、二に疑ひて云はく、何が故に現すること異なる。釋す。衆生の業、異にして、見ること差別あるを以ての故に。三に疑ふ、何を以てか、衆生は但自業に依りて、見ること異なることを、知ることを得る。釋す。衆生既に諸佛法身衆等を見ざるを以ての故に、知んぬ。是れ但自心の所現を見るの差別を明すなり。是れ佛體に若干有るに非ず。此は報佛の身土は、地前二乘俱に、見ること能はざることを明す。四に疑ふ、眞佛は平等なる衆生見ず、誰か能く見るや。釋す。本行廣淨等の者、見ることを得るが故に。此は地上の菩薩、實報の身土を見ること

を明す。五に疑ふ、地前の衆生既に見ることを得ず、何に由りてか眞に入ることを得る。釋す。佛力自在にして、各分に見しめ、後に還りて入らしむるを以てなり。六は疑ふ、佛力既に自在なるに、何ぞ則ち衆生をして、一種に見せしめざるや。釋す。佛に憎愛無し、彼自心に依るが故に見ること差別なり。七に疑うて云はく、我今現に見るに、佛自ら差別なり、豈我心に關せんや、是故に、差別の過は佛に在り。釋して云はく、若し唯汝が心ならずば、責むる所の如くなるべし、既に實に是れ汝が自心變現するが故に、佛の咎に非す。八に疑ひて云はく、若し佛、自ら差別して現すること有らざれば、何が故に、常に佛を見るもの有り、見ざる等有るや。釋して云はく、心器を淨くする者は自心に感見す、佛は是れ、心として法として、是の如くなるを以ての故なり。

【四八】 十甚深の第十、佛境界甚深。

【又佛境界云云】
以下、佛境界を明す。初は二種境に約す。【又三乘等云云】
因果門に約して佛境界を明す。

第十に、佛境界甚深、上來、文殊多人に問ふ、今は多人、文殊に問ふ。首件互に彰すが故に。上は餘の菩薩の説を論ず、今は佛境界を辨す、同じく文殊を請ふことは、久しく已に成佛して智深きことを顯すが故に。又文殊の問は皆理を以て相違を反徴して結難し、今は但、諮請して敢て難ぜざるとは、尊の故に、長の故に、衆首の故なることを顯さんとす。又、此佛境界は二種に通ず。一は所證の境、謂はく、眞俗等なり。二は分齊の境、謂はく、小乘に依らば、三十四心以去は是れ佛境界なり。若し三乘は十地滿の後、是れ佛境界なり。若し一乘は十信滿の後、是れ佛境界なり。則ち此に辨するが如し、信の中に在る者は是れなり。又、三乘等は因位に通ぜず、一乘は因果同じきが故に、亦是れ普賢の境界なり、餘

【亦是れ普賢の法界】因果不二の法なるが故に普賢の境界といふ。【文の中に二云云】以下、分文作釋の一段なり。

【此三問は】八九十の三を合して云ふ。【答の中に云云】以下、偈頌を別釋す。

【二に因を答ふ】經の「如來境界の因」等の一偈。

義は性起の説の如し。文の中に二、先に問、後に答なり。問の中に四、一は總じて告ぐ、二は巴説を結す、三は文殊を歎す、四は正しく請を陳ぶるに十一句有り。初の二は自利の徳體を問ふ、次の五は利他の徳用を問ふ、次の三は所益の衆生を問ふ、後の一は其廣大を結す。又、初の一は是れ總果體なり、二は因を以て果を成す、體の境を證する因を問ふ、三は入處、謂はく、因圓果滿、化に乗じて普く世間に入る等なり、四は所度、謂はく、世間に入りて所度の生を辨す。五は度生の法を知るの智を辨す。謂はく、法界法門を知るの智なり。六は散る所の法藥、七は機の差別に應じて説く。八は機の法に入ることを明す。謂はく、染識の識る所に非ず。九は既に染識の境に非ず、云何が知ることを得しめん。十は既に知ることを得已りて、何法をか照除する。又釋す。此三問は、所化をして次の如く三慧の益を得しむ、應に知るべし。十一には、總じて佛境廣く何の處にか廻すと結す。答の中に、十偈の内、第八の一偈は、八九の二問を答ふ、餘偈は次第に餘の九問を答ふ。初偈は境界を答ふ、上半は所入の法を擧ぐ、此は二義に通ず。一は、齊とは等なり、謂はく、虚空に齊等なり、則ち是れ眞如を所緣の境と爲す。二は齊とは分齊なり、謂はく、法性眞空に齊き已去、是れ佛境なり。又上の句は深、下の句は廣なり。下半は衆生證入を明す。無所入と言ふは、衆生即ち是れ法身なるを以ての故に、更に入ること無し、常に虚空に在るが如し、豈、更に虚空に入ると言ふことを得んや。二に因を答ふことは、一は他分の因、唯、佛のみ能く分別す。二には自分の因、説くとも盡きず、多劫修を以ての故に。

【和して同ぜず】和の字、悉く知の字か。或は今は和合の義なるべし。

【四に度を答ふ】經の諸の群生、等の一偈にして、衆生を濟度する一面を答ふ。

【度】一得一切の意。

【七は：答ふ】經の「一切諸の世間」等の一偈を指す。

【八に識に答ふ】識と心との二に分ちて答ふるなり。經の「誰の能く識る」等の二句。

【四依：依らしめず】行四依、法四

又多の故に説くとも盡きず、佛に等しきが故に、唯、佛のみ能く分別す、唯、佛のみ能く分別すと、深を顯す、説くとも盡さずとは廣なり。自餘とは佛を除きて以外の餘人の説、盡すこと能はざるなり。三に入を答ふとは、上半は隨緣を明し、下半は不變を明す。謂はく、寂にして常に用なり、故に普入なり。用にして常に寂なり、故に寂然なり。和して同ぜず、故に不同世見と云ふ、正しく能入に由るが故に不同なり。四に度を答ふとは、謂はく、世間に入在して何等の事をか作す。謂はく、衆生を度す、上半は度生を擧げ、下半は度數を明す。五は度生の法を知るの智を答ふ。謂はく、上半は是れ能知、下半は所知なり。六は法藥を答ふ。謂はく、初の句は法體を明し、次の句は法用、下半は用の體に異らざるが故に、唯、佛のみ知ることを明す。具分別に二有り。一は法界に異ること無く、機多なるに隨ひて説も多なるを以ての故に知り難し、若し具に分別せば、唯、佛のみ知る。二は此多説則ち異なること無し、異なること無きときは則ち多説なり、此れ各二門を處せずして、即一を處へず、此分析し難し。若し具に分たんと欲せば、唯、佛のみ能く知る。七は知音、説法智を答ふ。上半は所知、下半は能知なり。謂はく、衆生の言音を了知して、以て法を説くと雖も、然も常に無作の故に分別無し。八に識を答ふる中に二句。初の句は識るべからざるが故に、言語道斷にして、耳識等の所識に非ず、下の句は思ふべからざるが故に、心行處滅にして、心の思量に非ず。又業識に非ず、亦業心に非ず。一偈偈に、相を取るを識と名け、相を取らざるを智と名くと云ふを以ての故に、四依の中に、識に依らしめざる

依、人四依、説四依ある中、今は法四依に約す。即ち法識は妄想の心、六塵の境に對して起り、これを恣にせば妄惑を増す、智は本心照覺の徳、法性に契ふ、故にこれに依るべし。

【九に二句】經の二句。

【十は答ふ】經の一業に非ず、等

【十一に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十二に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十三に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十四に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十五に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十六に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

なり。九に決定知を答ふる中の二句、初の句は法を擧ぐ。謂はく、自性清淨如來藏の法なり。下の句は決定して知らしむることを示す。十は照を答ふる中に、上半は煩惱障を照除して、寂滅涅槃を證す。下半は所知障を照除して菩提を得、平等に世間に行ず。又、無明とは能照無きなり、無所行とは所照無きなり。平等に世間に行ずとは、能所を絶して照す故に、平等行と云ふ。行は猶し照のごとし。十一に廣を答ふる中に、上半は所知の廣、下半は能知の廣なり。

【九に二句】經の二句。【十は答ふ】經の一業に非ず、等

【十一に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十二に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十三に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十四に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十五に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十六に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【十七に答ふ】經の一切衆生の心一等の偈。孔

【餘方に類す】十方のうち、東方のみをあげし九方を例同せしむ。
【室】前品所明の火増により、大行を成ずることを明さん爲に、百四十願を發し、自分勝進の二行を成滿するを説く。初に釋名。

【五一】今品の來意を述す。
【五二】宗を明す。

【五三】以下、文を釋す。
【釋】縁に：答ふるなり。【釋】縁に：初願の相徴にして、智に非ざれば受けず、隨相の發願妙慧に非ずんば明ならず」といふ、今これを述成す。

九十は是れ賢首の一乘、文殊の佛境、知るべし。餘方に類する中に、是れ前の光覺品に、辨ずる所の者は是れなり。

淨行品第七。此品を釋するに四門あり、上に同じ。一に名を釋すと、梵本に依れば圓淨

行品と名く、無性の『攝論』中には、『清淨所行經』と名く。謂はく、三業に過無きを

清淨と云ふ、心に願を起すを、行と稱す。行、善法に順ずるを圓と名く、此れ持業釋な

り。又、淨は是れ理、行は是れ智、理智無礙なるを圓と爲す、依主釋なり。又、願は是れ

能淨、行は是れ所淨、行をして光潔ならしむ。性に稱ふを圓と稱す、是れ普賢の願行な

るを以ての故なり。又、願は垢無きを淨と名く、則ち願は是れ行の故に淨行と云ふ。

二に來意とは、前は解、次は行なり、又前は行、次は願なり、義次第するが故に來る。

三に宗とは、願海を以て宗と爲す。但し願に四種有り。一は誓願。謂はく、行前の要期

等。二は行願。此に二種有り。一は行と俱に起る、二は但事に對して願を發す、則ち此

れ是行は、心を防ぎて散ぜざらしむるを以ての故に。三は行後の願。謂はく、行を以て廻

向して菩提を得んと願する等。四は自體無礙の願。謂はく、大願究竟して法性海に同じ、

任運に一切の諸事を成辦す。此中は唯、行願を論ず、餘は義通すること、知んぬべし。

四に文を釋する中に二、先は問、後は答なり、縁に對して巧願、智に非ざれば熱せざる

を以ての故に、智首問ふなり。事近くして趣遠く、微妙にして知り難きを顯すが故に文殊

答ふるなり。問の中、相從して十一と爲し、二に分つ。初の七は自分の因行を明し、後の

【前の中に九種の業あり】三業あり。二業の行因を成ずるに、修徳、修徳、修徳の三に分つ。

【一は果の中に二以下、二は果を明す。初に福業を明す。】

【如来の家に生ず】楞伽に「三寶を信向すれば善喜の家に生ず」と、今は究竟に就いて如来の家といふ。【悲観】 智慧觀察

【福業を明す】 福智二果の中、今は福業を明す。

四は他分の果行を明す。前の中に二あり。初の三は、三業は福智を成ずることを明し、後の四は因力諸行を成ずることを明す。前の中に三、初の二は三業の行因を成じ、後の二は福智の果を明す、前の中に九種の三業あり、三に分つ。初の三は過を離る、是れ創て修するが故に。謂はく、三毒を離るるなり。次の三は三行を成ず、是れ次に修するが故に。謂はく、一は自ら得して失はず、二は他、動ずること能はず、三は能く他を攝得するが故に説せしむ。後の三は三徳を顯す、是れ徳の終なるが故に。謂はく、一には斷徳、二には斷徳、三には智徳なり、皆後を以て前を攝す、知んぬべし。二は果の中に二、初は福業を明す中に十句あり。一は依果勝る。『涅槃』に説く、「常に中國の佛法有る處に生ず」と。二は種姓勝る。『地持論』に説く、「上族に生ず」と。三は富みて而も貴し、是家勝る。亦是れ如来の家に生ず。四は身に善色有り、亦是れ諸根完具なり。五は身に福智有り、亦是れ相好具足す。六は念定亦是れ勝る。念も亦是れ總持不忘なり。七は悲観も亦是れ報生の智、法に於て能く解す。八は意趣。謂はく、理に向ふ等。九は威徳勝る、亦自在勝る。謂はく、情に怯懼無し。『智論』に依れば、菩薩に別して四種の無畏有り。一は總持無畏。法に於て記持して忘失を懼れず。二は俱を知る無畏。根を知りて法を授け、差失を懼れず。三は疑を決する無畏。問に隨ひ能く答へて、堪へざることを懼れず。四は難を答ふる無畏。難有らば皆通じ、屈滞を懼れず。十は常に自ら開覺す、亦是れ他を覺せしむ。謂はく、生死を覺知し心に厭離を生ず。二は智果を明す中に九句あり。初の二は凡夫に勝る、次の二は二

【五】以下因力、諸行を成ずること、明す。

【識中の解性】自性清淨の心解、謂ゆる靈知心。

【唯智の二種】解性、自性清淨の心と多聞熏習と相合して、唯智の二種を起す、これ出世無漏徳。

【思惟は是れ意】悟察思惟するは意識の特徵なり。

【三昧】受三昧のこと。

【第二に成行云云】因力を以て成ずる諸行を明す。經の「除界入を知り、現在を知る」等の句。
【前の諸力】近くは前述の八力、遠くは福智力をいふ。

乘に勝る。五は深きが故に不可量、六は功能廣きが故に不可數、七は分別を離るるが故に、情思ふこと能はず。八は體實の故に不可稱、九は離言なるが故に不可說なり。

（五四）第二に、因力、行を成ずる中に二あり。初の一は能成の力、二に善知の下は所成の諸行なり。前の中に八力あり。一に因力とは、梁の『攝論』に云ふが如し、多聞熏習、阿耨耶

識の中の解性と相合して、一切の聖人、此を以て因と爲す、則ち是れ性智の二種は備るが故に具足と云ふ。二に現行勇意。是れ『攝論』の中の正思惟力なり。謂はく、思量は是れ

意の義なるが故に。三に巧便入法。亦是れ思に依りて身口を動じて、行を起すが故に方便と云ふ。四に善友助成。是れ『攝論』の善知識力なり。五に所觀現前して、觀智を引起するが故に。六に機根已に熟す、入法の器と爲すに堪へたり。又信進等の根を具す、又是れ

資糧の善根、『攝論』の福智二方に當るなり。七に心を防ぎ、理を照し、止觀俱行す。八は止觀熟し已りて深禪定を得。此上の八種は皆能く行を成じ、惑を滅し、果を得るの勝用なり、故に同じく力と名くるなり。初の菩薩に於て、云何が彼をして具足せしむることを得

と、故に問を爲す。第二に成行とは、謂はく、前の諸力に依りて、解行を成ずることを得。三あり。初に善く法相を解する行に十法有り。一は蘊、二は界、三は入、四は緣起、

及び三界、三世、各善く差別を知りて不可得なり等。二に念を攝して理に入る行、亦十法あり。謂はく、七覺と三空とは眞理を照すが故に。三に廣く十度を修するの行、知んぬ

べし。

【五】他分の果行を測す下なり。經の「云何が菩薩是處非處一等の句。【悲徳普く覆ふ】經の「云何菩薩衆生の舍：無上導」の句。

【四】智：起るが故に。經の「云何菩薩一切衆生：無等等と爲る一の句。因果に起は起の誤か。

【初の中云云】以下隨華別釋す、初に十力、次に悲徳後に智徳に就ぐ。

【四に智徳獨出】此七句は佛果に就いて釋す。

【又釋す云云】相從釋、即ち第一の二字を大勝二義を以て釋す。

第二に勝進果行を問ふ。中に四あり。一には内、謂はく、十勝徳を具するが故に。二には外、謂はく、十王敬護するが故に。三に悲徳普く覆ふが故に。四に智徳獨り起るが故に。初の中に十力、略して三門と作る。一は名を釋す、二は體を出す、三に建立するのなり。別に三に悲徳の中に九句あり。一は善友と作りて覆護す。二は其現苦を救ふ。三は其怖を離れしむ。四は樂を得るの處と爲す。五は炬は惑闇を除く。六は大智の明を興ふ。七は燈照して理を現す。八は引きて方便道に至る。九は引きて究竟處に至る。又釋す。九句相從して四と爲す。初の二句は生を化し、障を除く。謂はく、衆生を覆護して、外惡をして干さざらしむるを舍と名く、善に在りて能く抜くを救と爲す、次の二句は物を化し、善を生ず。謂はく、始を物の歸と爲す、終を趣向と爲す。次の三句は教は智慧を生ず、謂はく、教法を解せしむるを炬と爲す、理法を見るを明と爲す、行法を知らしむるを燈と爲す、後の二句は、導きて以て福を起す。謂はく、福を生ずるの始を導と爲す、福を成ずるの終を無上導と爲す、更に別に解することは、下の第一の廻向の經の中に、自ら釋するが如し、之を尋ねて具に辨ぜよ。四に智徳獨出を問ふ中に七句あり、第一とは、位は世間に過ぐ。二に大とは、徳體待つこと無し。三に勝とは、行用殊妙なり。四に上とは、下及ぶこと能はず。五に無上とは、上は能く過ぐることを無し、六に無等等とは、餘は能く等しきことを無し。七に無等等とは、無等の大聖自相等きが故に、無等等と云ふ。又釋するに、第一に二義有り。一は大、二は勝、故に第一と云ふ。謂はく、化徳、人に過ぐるを大と名く、自徳、人

【五六】答を釋す。經に「爾時大殊」等これなり。

【又釋す云云】文に五段あり、一、世間出世に約し、二、善因果樂に約し、三、離惡攝苦に約し、四、拔苦與樂に約し、五餘義を例す。

【五七】通答を釋す。經の「佛子、菩薩は身口」等の一段なり。

【初に自分・明す】此下身口意三業の勝德を明すことを述す。經の「佛の正法」等これなり。【種智】如來一切種智のこと、一切種種の法を知る智慧。

に過ぐるを勝と名く。大に二義有り。一は上、二は無上の故に大と云ふ。勝に二義有り。一は無等。二は無等等の故に勝と云ふ。

【五八】答の中に二、先に問を敷じ、二に通じて答ふ。前の中に、多益は是れ因行を授く、多安隱は是れ果を得しむ、此二は標なり。惠利は、初を釋するなり、安樂は後を釋するなり。又釋す。初は益、出世の因果を成じ、後に哀愍の下は、人天の因果を益せしむ。又、「佛地論」の第七に云はく、「善因を修せしむるを、利益と名け、樂果を得しむるを安樂と名く。又、惡を離れしむるを利益と名け、共をして善を攝せしむるを安樂と名く。又、其苦を抜くを利益と名け、樂を施與するを安樂と名く。此世、他世、世出世等、應に知るべし亦爾り。

【五九】二に通答の中に三、初は意を標して答ふ、二に偈頌答ふ。三に益相を結す。初の中に二、先に意を擧げて總標す、謂はく、身口意を成熟す、是れ願を以て三業を淨むるなり。能得の下は所得の益相を明す。二に於佛の下は三業、妙功德を得ることを釋成す。中に於て二、初に自分の因行を明す。中に於て三、初に意業の勝德を明す。二に去來の下は語業の勝德を明す。中に於て、初は總じて辨ず。二に捨衆生とは、法輪、機に應ずることを明す。三に明達實相とは、法輪、理に應ず。四に斷惡とは、法輪、過を離る。五に具善とは、法輪の具德滿す。三に色像の下は身業の勝德を明す。第二に勝進果行の中、初に種智を具す、二に法に於て無礙なり、三に定德を辨じて佛を第一と爲す。佛に簡異するが故

【八】問を以て答ふる一段を問す。釋に「一、何等の身日、一等といふ下なり。」

【九】曰く、「百四下問の中、初一願を出して、餘を例出す。」

【十】謂の願は「轉成す」第一願に就いて六義を明す、其一に菩薩家にあつて家難を捨し、一切の諸法は自性なしと證をいふ。

【要期の善願】要期すべしと豫め期する善願。

に第二と云ふ。

第二に頌を擧げて正しく答ふる中に二、初は標起、後に正しく答ふ。答の中に「百四十願有り、通じて前の諸問を答ふ。何を以てか爾るとならば、一一の願の中に、皆六義有るを以ての故に、能く事に隨ひて木の所習を轉じ、三業を防淨し、巧に菩薩二利の行を成じ、能く善賢の法に契ひ、上の諸益を具す、是故に通じて彼諸問を答ふるなり。一は事を轉捨し、二は法を轉成す。三は他を轉じて過を離れしむ。四は他を轉じて法に入らしむ、五は自邊を轉離し、六は自行を轉成す。且く初の一願に約して之を作る、餘は一一に皆準じて知んぬべし。謂はく、初の願は所居の事の家を轉ず、是れ轉捨なり。二は願は所證の空法を成ず、是れ法を轉成するなり。淨名經に「畢竟空寂の舍」と云ふが如きは、斯謂なり。三に衆生、家難を離るることを願ふは、是れ他を轉じて過を離れしむるなり。四に空法の中に入らば、是れ他を轉じて法に入らしむるなり。五に自ら家に居すと雖も、此發願に由りて自見の家の心を轉じ、世間の家の解を作さず、故に過患をして自心に入らざらしむ、是れ自ら轉離す。六に既に世間を見ず、則ち見るを法と爲し、衆生を悲念して此空法に入らしむ、是れ自ら悲智の行を轉成するなり。此六の中、前の四は當成、是れ要期の善願なるを以ての故に。後の二は現熟、是れ則ち行願なるを以ての故に。此六義有る所以は、凡そ一願の上に必ず三義有るを以てなり。一は所依の事、二は所爲の衆生、三は自智、彼を緣す。此三皆世事を捨つると、法門を成ずるとの二有るが故に、六有るなり。此

【又此下云云】二に相從十勢。内、偈頌の文を擧げて説明す。

【佛塔：如し】經の佛頌に「佛塔を頂禮せば、頂を見ること無きが如くならん」と

【此文の中云云】以下、正しく頌文を釋す。

【三學】戒、定、慧。

如く、事に隨ひて心を防ぎ、世法に隨はずして、常に法理に遊び、正觀を失せずとは、是れ其意なり。又、此下の諸頌の中に、事に隨ひ、逆順差別相從して、略して十勢を辨す。一は事を轉じて理に入る、勢、初の偈の如し、事家を轉じて空理に入る等。二は染を轉じて淨を成ずる勢、若し五欲を得るは是れ染、功德具足は是れ淨なる等の如し。三は相似類轉する勢、布施して轉じて悉く一切を捨し、心に著無からしむる等の如し。四は因を轉じて果を成ずる勢、佛塔を頂禮する是れ行因、道を得、頂を見ることが無きは是れ果等の如し。五は世間を轉じて世を出づる勢、房室等に在るが如し。賢聖地を出世と爲す。六は依を轉じて正に同ずる勢、城郭を見るは是れ依報なり、金剛身等は是れ正報の如し。七は偈を轉じて眞に歸する勢、仙人を見る等の如し。仙は眞脱に非ざるを以ての故に、正眞の究竟解脱に轉向す。八は人を轉じて法に同ずる勢、疾病の人を見る等の如し、身空は是れ法、人の病身は則ち是れ眞空の法なりと知るを以ての故に、何の昔か脱れざらん。九は境を轉じて行を成ずる勢、袈裟を受著する等の如し。是境、三毒を離れて心に歡喜するは、是れ智斷の二行なり。十は虚を轉じて實に同ずる勢。若し伎樂に在るを虚と爲し、法樂を實と爲すが如し、餘の偈は皆各類して之を知れ。此文の中に就きて、長く分ちて十と爲す。初に、菩薩在家の時の願を明し、二に以信捨家より下は、創て出家する時の願を明す。三に受持淨戒より、下は、既に出家し已りて、禁戒を受くる時の願を明す。四に若敷床坐より、下は、既に具戒し已りて定慧の行を修する時の願を明す。出家の人は、三學

【五九】今品は、前
の行願に由りて、
普賢廣大の徳用を
成ずるを明す。初
に標問、次に隨釋
する中、初に釋名。

【信滿】十信の滿
位、是れ賢聖の初

は是れ其正所修なるを以ての故に。五に下床安足より下は、既に定を出で已りて、住所に於て進止威儀の時の願を明す。六は手執錫杖より下は、乞食利生の爲の故に、疾速に路に進む時の願を明す。七に見趣高路より下は、路に在りて諸事を見聞する時の願を明す。此中に二、初に依報の事を見る、二に見嚴飾人より下は、人物の事を見ることを明す。八に入里乞食より下は、聚落に行至して、乞食する時の願を明す。九に若入水時より下は、食し訖りて轉誦する時の願を明す。十に昏夜より下は、晝夜寢覺の時の願を明す。是の如く始終、事に隨ひて願を發し、空しく過ぐることを無し。『智論』の第十二に云はく、「智人に二有り。在家には婆羅門と名く、謂はく、七世清淨なり。生れて六歳に滿じ、皆戒を受く、出家には沙門と名く、此には息惡と云ふ」と。問ふ、「何が故に『瓔珞』には入理の願を明し、此經に多く事に對する願を明すや。」答ふ、「此經は一乘に願す、事に在りて益大なり、彼は三乘に約す、事に在りて昇らず、故に理に入りて辨するなり。」

賢首菩薩品第八。此品を釋するに四門と作す。一に名を釋せし梵本に依らば、跋陀羅と名く、此には賢と云ふ、室利此には吉祥と云ふ、或は徳と云ひ、或は首と云ひ、或は勝と云ふ。是故に、是れ初首の首に非ず、亦上首の首に非ず。此等の梵語、皆別名有るが故に。此は但、吉祥勝徳を超絶することを顯さんが爲に首と爲す、當體至願にして調柔なるを賢と曰ふ。賢は體性に約し、首は徳用に約す、是れ持業釋なり。此は信滿に於て普賢の位に入るに、具に二義有り。若し果に約せば則ち下の文の賢首佛刹等なり。此中には、因に

約するが故に菩薩と云ふなり。或は唯人に約す、賢首則ち是れ菩薩なるが故に。又、此人は是れ説法の者なるを以て、人に従ひて名と爲すが故に。或は唯是れ法、菩薩則ち賢首なるが故に、所説も亦是れ、賢首菩薩の法門なるが故に、或は人法合して曰く、則ち依主釋なり。

【六〇】 今品の依つて來る所以を明す

【六一】 一品の宗を明す。

【六二】 正しく文を釋す。初に文を分ちて問を釋す。

【六三】 以下、別して答の文を釋す。初に總じて標し、章を分つ。

二に來意とは、前の行願を收めて、普賢廣大の徳用を成ずるを以ての故に來るなり。
三に宗とは、普行位の體及び相用、廣大無邊なる始終、俱に括ることを明す。應に信門に在りて、諸位を該攝して佛の妙果を成すべし、是れ此所明なり。

四に文を釋せば、此中に二あり。先に問、後に答ふ。問の中に亦二、先に經家の序列。

何が故に文殊問ひ、賢首答ふとならば、信は萬行を收む、妙徳に非ざれば、以て發起すること無く、信は六位を該ぬ。賢徳に非ざれば、以て宣揚すること無きを以て。又、達深は慧を顯し、淨徳は福を彰す。二に頌を以て正しく問の中に二。一は前を結し、二は後を問ふ。此中に亦二。先に甚深の行を問ひ、後に廣大の徳を問ふ。何が故に此中の問答、皆偈頌を以てするとならば、釋に二義有り。一は始徳深廣にして窮終を該徹し、散說周きこと難きを以ての故に、偈頌を以て總攝す。二は圓徳勝妙なることを顯すが故に、美辭を以て讚述す。『地論』に云はく、偈頌は少字を以て多義を攝す、故に諸の讚歎の者、多くは偈頌を以てするが故に」と、是れ上の二義有り。

賢首の答の中に就きて、總じて三百六十三頌有り。前の十三は五言、後の三百五十は七

【六】隨章別釋す
る中八あり、初に
歎深業説分の釋す。

【起信論】 同義記
下末七右。

【三に説…同じか
らず】 第三を釋す

言なり。中に於て、總じて長く分くるに八分有り。一は歎深業説分、二は勝修行相分、三は異勝能分、四は持諸行位分、五は無方大用分、六は唯言旨分、七は控量觀發分、八は顯真證信分なり。

初の中に就きて七類有り、中に於て三に分つ。初の一は總廣にして總略なることを明す、知んぬべし。次の四は略説の所由を釋す、後の一は已が略相を結す。第二の釋の中に就きて、初の一は徳廣の所依を尋じ、二は心に依りて徳勝るることを明す。前の中に四種の難有り、故に是れ初心なりと雖も、此功德をして廣大無邊ならしむ。一は處難、二は時難、三は生、死の苦惱の處に於て能く發心す、此れ徳を生ずること廣し。二は時難、謂はく、久しく已に發心し、一向に動ぜず、未だ難と爲すに足らず、今は則ち此に反す、故に徳を生ずること多し。三は境難、謂はく、能く此無限の苦畏を求む、心を以て境に従ふが故に廣大なり。四は心難、謂はく、若し發心進退不定なれば、徳を生ずること廣からず、今則ち此に反して廣大なり。一頌四句、次の如く應に知るべし。此は是れ、起信論の三種の發心の中に、最初の信成就發心に當れり、故に初と云ふなり。下の文の十住の初發心住、及び發心功德品に同じ。此は信の邊に約し、彼は住の初に就く、故に無二なり。既に信滿入住を以て、方に信と爲す、何ぞ住滿入行を住と爲ざるや。釋して云はく、信は住を成せざるが故に例せず。二に所起の勝徳の中に、初の一は小を擧ぐるに猶盡すこと無し。後の二は多を顯すときは則ち言を亡す、何ぞ之を説くことを得ん、而れば略を示すのみ。三に説を結する中

【一念の功德】説く言はば、念劫圓融なるを以てなり

【性起品】 三十六十三左

【地論】 二十四右 智入を説く中の文

【問ふ云云】 以下問答して圓攝の所以を顯示す。

に、少分とは二重有り。一は多劫の所修、此れ辨じ難きが故に、且く一念の功德を論ず。二は則ち此一念の中の功德、猶自ら深廣にして唯佛のみ能く説く、菩薩は知らず、是故に復、佛の所説の中に於て、小き菩薩の所知を分取して今之を説く。又、此少分は、彼廣大と通融して四句有り。一は此少分、多に異らざるを以ての故に少を攝す、多に同ずるときは、則ち此所説亦是れ不説の説なり。鳥の履む所の空の、未行の處の廣大の空に異らざるが如し。是故に性起品に云はく、「鳥の、虚空を飛んで經遊すること百千年なるに、行處と未行處と、皆悉く不可量なるが如し。若し人、百千劫に如來の行を演説するに、已説及び未説、皆悉く量るべからず」と。二は或は多を攝して少に同ずるに、義亦圓備す、【地論】に云ふが如し、「如實満足攝取の故に」と。三に或は二俱に攝するが故に、亦是説、亦是不説なり。四に或は二俱に攝せざるが故に、説に非ず、不説に非ず、並に準じて之を思へ。問ふ、「何が故に、此中に信位の菩薩、此の如きの廣大の功德有ることを得る。」答ふ、「此は是れ、普賢法界の行徳、但信門に就きて、中に於て顯現するが故に、説くとも盡きず、若分別して論ぜば、總して其四句有り。一は或は唯、信門の當相の階階に約して以て辨ず、則ち此信は但是れ普越の位、輕毛等の如し。『瓔珞本業』及び『仁王經』の經に説くが如し、此は三乘に約す。二は或は唯、普賢當體の徳に約して辨ず、普賢行品に説くが如し。三は或は俱なり。謂はく、彼信門に約して、此普賢の徳を顯す、此品の所説の如し。此は一乘因分に約して説く。四は或は俱非なり、總じて不可説なり、此は果分離言の處に約す。是

【六五】二に略示行相分の釋。

【此中】因縁を釋する云、因縁を釋するに、初は性習二性に約し、後は三乗及び一乘に約す。

【起信論】義記下末七丁。

【智印經】三、二十丁。

【二に云云】所發の心相を釋す。

【俱に】義なるが故に、十義の第一が廣大功德因縁の義【十義心】第一を總とし、餘の九を別とす、別の中、深信三寶心、大悲心、遠難四過心、大願度生心、大悲心の所屬と、深心の別相たる後五心あり。

故に、圓教の中に明す所の信位、彼三乘の中の十信と、義別にして同じからず。

第二に、非是無所因より下の六頌は、略示行相分を明す。中に於て二、先の一は總じて

因縁を標して、發心廣大の所以を釋成す。此中に因とは、謂はく、如來種姓、縁とは、

謂はく習所成の姓なり。又【地持】「瑜伽」に、因に四種有り。一は種姓具足、二は佛菩薩

の善友の攝受、三は大悲心を起す、四は大苦を怖れず。縁にも亦四有り。一は佛の神變等

を見る、二は佛を見ずと雖も、然も法を聞くことを得。三は法を聞かず、法の滅せんと欲

するを見る、四は無佛法處の衆生、惡を造るを見る。又四力有り。一は自力、二は他力、

三は因力なり。謂はく、宿習大乘の聞熏等、四は方便力、謂はく、法を聞きて方に能く

善を修する等なり。又、四因四縁、及び自力因力は發心決定す、他力方便力發心は不定なり。

又、起信論「智印經」に、七の因縁有りて發心す。謂はく、三摩四退なり、彼の如く、應

に知るべし。此上は三乘に約す、若此經に依らば、十種の發菩提心の因縁有り、下の文に

説くが如し、此は一乘に約す。又、如來藏の内熏を以て因と爲し、所餘を縁と爲す。二に

所發の心相を釋す。此中に通じて論に十義有り、俱に是れ心心廣大功德の因縁の義なるが

故に、非是無所因等と云ふ。十義心とは、一は正直にして理に趣くの心なり。論に云はく、

「直心とは正しく眞如の法を念するが故に」と。二に次の一頌は、深く三寶を信するの心を

明す。三に一頌有り、四過を遠離するの心、四句各一なる、知んぬべし。四に一頌、大

願度生の心、五に二句は、大慈大悲心を明す。謂はく、拔苦與樂の故なり。六に一、佛

願度生の心、五に二句は、大慈大悲心を明す。謂はく、拔苦與樂の故なり。六に一、佛

願度生の心、五に二句は、大慈大悲心を明す。謂はく、拔苦與樂の故なり。六に一、佛

【六六】三に略示勝能分の釋。釋文深心の淨心は、九頌の偈より下、九頌の釋なり。

【父釋す云云】此下同く三寶に約すと雖、法寶に於て教行果法を分つが故に重複せず。

【此心已に住に入る】本宗にては十信は凡位、十住より聖位とするが故に、かくいふ。而

刹を嚴淨するの心、七に一句は、廣く諸佛を供するの心なり。八に一句は正法を建立するの心、九に一句は、正しく勝果を求むるの心、十に果因を淨修するの心なり。此上の十心は、並に所縁の境、限量無きが故に、心をして徳を攝すること、亦限り無し。故に下の文に云はく、「菩薩、一佛を供せんが爲に發心せず、百千世界塵數の諸佛を供せんが爲の故に發心せず、悉く一切の佛を供養せんと欲するが故に」と、是故に無限なり。佛を供養するが如く三寶を信じ、過失を離れ、生を度し、土を嚴る、悉く皆、限り無きが故に廣大なり。略示行相分竟んぬ。

第三に、深心淨信不可壞の下に、九頌有り、略示勝能分を明す。中に於て、初の二は信能く發心を成ずることを明す、是れ行の本なるを以ての故に。後の七は信能く餘徳を成ずることを明す、行の所成なるを以ての故に。前の中に、初の一は三寶の境に約す、不壞の信を成じて、方に能く發心す。一に三佛性の境に約す。初句は自性住佛性を信するに約す。次の句は引出佛性、次の句は至得果佛性なり。又釋す。初の句は佛及び教法を信す、次の句は佛及び修行法を信す、次の句は正しく向ひて果法を信す。下は此に因りて深信成就して、方に能く發心す。又、此中の信不可壞とは、信滿の心に不退を得るが故に不壞と云ふ、此信に依りて發心す、故に知んぬ、此心已に住に入る。然るに、能入の方便に約するが故に、信の終りに屬す。下は成徳を明す中に、直ちに前に、十住の初發心の徳位に、入ること成ずるに非ず、亦更に通じて、已後の位の中の、所有る行徳を成ず。是故に此中に、略

も信滿と初住とは實に同時なれども能入よりすれば信の終、所入よりすれば信の初なり、故に信滿成傳をも備ふるなり。

【下は成徳云々】

以下、信餘徳を成ずるを明す一段の釋。

【敬本】本頌に「恭敬の半」とあるを

【九に：妙覺の果を示す】經の「諸の善根を」等の三偈十二句を以て九以下の十二徳を示す。

【覺樹】菩提の果を樹に喩ふ。

【種智の門を長ず】頌に「最勝の智慧門を長養す」とあるに當る。

【下の二頌】頌に「是故に次第の行を」等とあるを指す。

【第六】第四能廣攝行位分の釋。

【前の中に云云】

して所成の二十の功徳を辨ず。一は能く福智を生ず。謂はく、覺道の元福徳の母なり。二に能く疑を斷じ、道を示す。三に能く垢を離れ心堅なり。謂はく、慢を除くとは離垢を釋す。敬本は心堅なるを釋す、上の三各一句あり、次の如く應に知るべし。四に信體、徳を具するが故に。寶藏の如し。五に法を納め、行を成ずるが故に。淨手の如し。六に能く染を捨てて著を離る。七は能く深玄を解す、上の四各一句、應に知るべし。八に轉進して、果を成ず、兩句知んぬべし。九に能く善根をして明利ならしむ。十に力用無壞、十一に能く惡業を滅す、十二に能く大果を得、十三に入法無礙、十四に八難の報障を離る、十五に能く魔境を越ゆ、十六に巧に脫因を示す、十七に大果堅固ならん、謂はく、佛地の一切の諸の功徳の法、皆不壞の信を以て、彼因種と爲さずといふこと莫し。十八に覺樹の果を生ず、十九に種智の門を長ず、二十に妙覺の果を示す。上初の八は自分の行、後の十二を勝進の徳と爲す。此等の功徳、並に是れ已後の諸位、乃至佛地所成の徳、俱に信の中に在りて、成就する所なり。下の二頌は結歎して、勝を顯す。是故とは是れ、前の信、能く彼二十の勝功徳を成ずるが故に所説の次第、所修の行の中、是故に信樂最勝にして得難しとなり。後の半は喩説、一は信體希有の喩、二は能く衆徳を出すの喩なり。

【第六】若信恭敬の下五十頌有り、能廣攝行位分を明す。中に二、先に行を攝し、後に若生無上菩提心の下に攝位を明す。前の中に、先に信敬三寶行を明し、後に信順三寶行を明す。前の中に、初に三頌有り、仰を信じて二行を成ずることを明す。初の二は持

九頌を分ちて信敬
信順三寶行の二に
分ち、また信敬三
寶行のうち信佛、
信法、信僧に分つ
こと知るべし。
【下は信順三寶行】
初二は信順、次の
一は順法、後一は
順佛にして各二行
あり。

【第二の攝位云云】
別して攝位を釋す
るに四段あり、即
ち十住以下四位を
攝す。經の「若し
無上菩提心」等四
十一偈頌下。

【十向の位】 十廻
向の行位

戒の行を成じ、後の一は供養の行を成ず。二に一頌有り。法を信じて二行を成ず。謂はく、
教を聞きて厭ふこと無き行、證を欣ぶ難思行なり。三に一頌有り、僧を信じて二行を成ず。
謂はく、信體無壞と及び信力無動となり。下は信順三寶行を明す中に、初の二頌は僧に
順じて二行を成ず、謂はく、利根は悪友を捨す、行、及び善友に近づく修勝の行なり。次
の一は法に順じて二行を成ず。謂はく、因縁を解する行法、解脫を成ずる果法なり。後の
一頌は佛に順ずるに亦二行あり、謂はく、果佛の護と、因の發心を起すととなり、上來、行
を攝して十住に入るの方便と爲すこと竟んぬ。第二の攝位の中に、後の四位を攝するとき
は、則ち四段と爲る。初に二頌半有り、十住の位を攝することを明す。謂はく、菩提心は
則ち是れ、初住の位に入る、勤修佛徳は是れ、治地と修行との二住の行なり。生佛家は是
れ生貴住なり。謂はく、佛家に生在し、種姓尊貴なるが故なり。無著は是れ五六二住の行
なり、深心妙淨は是れ、七八二住の行なり。殊勝無上心は是れ、九十二住の行なり。皆準
釋して知んぬべし。二に若得無上の下の三頌は、十行の位を攝することを明す。中に於て
波羅蜜は、總じて十行を擧ぐ、摩訶行は是れ小乘の行法に異す、供は是れ順理の行なり。謂は
く、是れ初の四行なり。念佛定は是れ離癡亂行、見佛常住は是れ後の五行なり、後の五は
俱に是れ般若の攝なるを以ての故に。三に若知如來の下の二頌半は、十向の位を攝するこ
とを明す。中に於て、行成じて理に備ふ、故に法永く存す。謂はく、是れ如相と及び法
界等となり。辨説と度生とは、是れ救衆生と、離衆生相等となり。前の七は廻向、亦是れ

【獨覺】緣覺ともいふ。常に寂靜なることを樂む、獨り修行し、無佛の世に出でて自ら證り生品を離るる地

【極喜地】歡喜の地ともいふ。菩薩修道位十の中第一位

【離垢地】菩薩修道位十の第二位。戒行を具し煩惱の垢染を離るる位

【五明】五明處ともいふ。聲明、工巧明、醫方明、因明、內明

【分段】分段身、即ち凡夫六道に輪廻して分段段の果報を受くるが故に名く

【善慧仙人】如し。過現因果經に説けり

諸門の廻向衆生の義なり。大悲は是れ、此位の中の所成の大悲行、獨覺の捨大悲障を對治するが故なり。四に若得大悲の下は三十三頌有り、十地を攝することを明す。中に於て、初の半頌は初地を攝す。謂はく、喜樂深法は是れ初の極喜地なり、所證の遍滿眞如を深法と名く。二は半頌は有爲の過を離る、是れ離垢地なり。犯戒の過失を離るるを以ての故に。三に一頌有り、第三地を明す。禪を得て慢を離るるを以ての故に。味著せざるが故に、能く發て衆生を利す。四に一頌有り、第四地を明す。道品の智を得るを以て、生死に處して憂無し。十度行の中、此れ進行に當る、故に精進無上と云ふ。五に一頌有り、第五地を明す。此地、禪度を成じて、禪に依りて通を起し、又能善世間の五明處業を解するを以ての故に、解衆生行と云ふ。六に一頌有り、第六地を明す。此地、悲智を得て般若に住せず、大智現前あるを以ての故なり。此中に、成就衆生は是れ悲、生智を成ず。七に一頌有り。第七地を明す。初の一は是れ有の中の殊勝行の故に、四攝、生を攝す。後の一は是れ空の中の方便智、相導くが故に、無上道に住せしむ。八に三頌有り、第八地を明す。初の一は四塵を越ゆ、謂はく、分段を捨つるが故に陰塵無く、捨命無きが故に死塵を離る、惑永く、現行せざるが故に煩惱塵無し。是故に、天魔も亦便を得ず。此第八地成就して四塵の因を越るが故に道と云ふ。次の一は得位及び忍なり。彼釋名分、及び淨忍分なり、後の一は授記位、善慧仙人の、第八地に於て授記を得る等の如し、現前前は、彼四種の一向佛土の中に在るが故に。九に一頌半有り、第九地を明す。謂はく、彼菩薩、大法師と作るが

【十に二十一頌半有り】第十地を明す一段にて、經に「若し佛功德を以て」等といへる下なり。

【三に若身の下の經の「若し身充滿して虚空に通く」等四頌を指す。

故に、佛の密教を解し、教法に順じ、佛をして護念せしむ。佛徳自ら嚴り、他の爲に法を説く。十に二十一頌半有り、第十地を明す。中に於て三有り。初の十三頌半は、殊勝の三業を明す。中に於て、先に五頌半有り、身業勝を明す。此中に、三頌は正報の勝、二頌半は依報の勝なり。次に四頌有り、語業の勝を明す。此中に、初の二は解深巧辯、次の二は智身説を明す。後の四頌は意業の勝を明す。一は他心智、二は斷惑智、三は證實智、四は十地の十自在等、位を結す。命自在等の十種は、此位を成就するが故に。二に若十地種の下は四頌有り、十地の終心受位分を明す。此甘露水灌頂等は、此信滿の中の受識なるを明す。三に若身の下の四頌は、結數して勝を顯すことを明す。初の二は入理深廣にして、天人、知ること莫きことを明す。謂はく、此法身、空に滿ちて十方動ぜず、是故に、此無等等界に於て、諸天人能く知るもの莫し。次の一は、行成し果滿じて、見聞廣益す、本行する所に於て、果さざる者無し、所求畢るが故に、遂げざることを無し。又、下の明法品に云ふが如し、「見聞供養とは皆不退地に住す、故に不空と云ふなり」と。次の一頌半は、威力護法、常に益して斷ぜず、「維摩經」に、「此經、世に住すること、皆彌勒の威神力」と云ふが如し。又、初は體、次は徳、後は用なり。下の半頌は結、上の句は慧を結し、下の句は福を結す、俱に無盡にして海の如し。又、此信門の中、展轉鈎鏤して、該攝すること此の如し。十地等とは、信は道の元、功徳の母と爲すを以て、諸位の行相、皆信じて成ず、故に、上に總じて、「信能く轉勝して衆行を成じ、究竟して必ず如來處に至る」と云ふは、

【一地…攝す】
 一地一切處を説く
 は一乘圓教の法門
 なることをいふ
 【六】無方大用分
 の體。無方の大用
 を顯すを述べたる
 下なり。

【六】十三昧門の
 中、初に海印三昧
 門を明す。

斯れ之謂なり。又云はく、一地に在りて普く一切諸地の功德を攝す、是れ此一乘圓教の法
 なり、三乘の中には、此の如きことを得ず。

第五に、或有利土より下、二百四十有り、無方大用分を明す、信滿じて此賢首の位を成
 ずるを以ての故に、普賢等の廣大の三業に同じ、因及び果を該ねて一切處に遍じ、一切時
 を盡し、常に無邊法界の大用を作す、此を恆式と爲す、當相にして論ぜば、評位に依らず。
 今、信門の中に顯現するに約するときは、則ち信に屬して收む。然も大用無涯にして、以
 て具に逃し難し。例に依りて十を辨じて、以て無盡を顯す、則ち是れ十三昧門の業用なり。
 一は圓印海印三昧門、二は華嚴妙行三昧門、三は因陀羅網三昧門、四は手より廣供を出す
 三昧門、五は諸の法門を現する三昧門、六は四攝、生を攝する三昧門、七は初ら世間に
 同する三昧門、八は毛光現照する三昧門、九は伴摩羅なる三昧門、十は寂用無涯三昧門な
 り。業用差別の主とする所、各異なるを以て、功能の純雜、門に依りて同じからず、故に
 三昧門を以て差別を辨す。水は一切處に定んで等しきが如し。又創めて大用を辨するの本
 なるを以ての故に。初に海印を顯し、後に用、體に異らざるを明す、故に末後は寂用無礙
 を辨す。

初の文の中に就きて五箇半有り、二に分つ。初に業用を明し、後に所依を顯す。前の中
 の五は、初の一箇は現佛說法を明し、次の二は、一箇は功無く事を成ずることを顯す、謂
 はく、功用を作さざるが故に隨希望と云ふなり。又釋す。因位滿するが故に、更に希求無し、

故に斷と云ふ。次の三は、一偈は八相を現することを明す。次の四は、一偈は三乘を現することを明す。次の五は、一偈は雜類を現じ、後の二句は用の所依を結す。海印とは、喻に従ひて名と爲す、修羅の四兵の、空中に列在して、大海の内に於て、其像を印現するが如く、菩薩の定心は、猶し大海の如し、機に應じて異を現することは、彼兵像の如し、故に『大集經』の第十四に云はく、「喻へば閻浮提の、一切衆生の身、及び餘の外色の如し。是の如き等の色は、海中に皆印像有り、是を以ての故に大海印と名く、菩薩も亦復是の如し、大海印三昧を得已りて、能く分別して、一切衆生の心行を見、一切の法門に於て皆慧明を得。是を菩薩、海印三昧を得て、一初衆生の心行の所趣を見ると爲す」と。解して云はく、此中の見の字は、亦現の字なり、謂はく、見に由るが故に現す、二に通じて應に知るべし。問ふ、「此中に既に、是れ十信の菩薩、成佛を現することは、是れ暫時の化現とや爲ん、實成とや爲ん。」答ふ、「若し三乘初教の中には、總じて化現成佛無し、未だ不退を得ざるを以ての故に。若し終教は、十信の滿心勝進分の上に、十住の初に入るときは、則ち不退を得るが故に、能く暫時に成佛を化現す、『起信論』に説くが如し、若し一乘圓教の中には、實に則ち位に依らず、終教の位相に寄せて、以て之を辨ず、信滿不退の際に於て、則ち彼普賢法界の行徳を得て、具に因果を攝し、圓融無礙なることを明す、若し因門を以て取らば、則ち常に是れ菩薩なり。若し果門をもて取らば、則ち恆に是れ佛なり、此に由りて鎔融に其四句有り。或は唯是れ菩薩、或は唯是れ佛、或は俱と不俱と等、之を思準せ

【七〇】十三昧門の
第二華嚴三昧門を
明す。

【七一】第三、因陀
羅網三昧門を明す
【因陀羅網】重重
無盡を談せんとす
る本宗に於ては、
帝釋天の寶網を譬
するなり。

【七二】第三に、因陀羅網土の故に、先に因陀羅網に入るなり。中に於て四頌有り、三に分つ。

よ。問ふ、「此中の果門の成佛と終教の化現と、何の別かある。」答ふ、「彼は但、一位に於て一世界に依りて一佛を化現す、此中、十地等を具して一切の位を攝するなり。十方世界と一切處なり、念念中とは一切時なり。問ふ、「此中に既に示現と言ふ、亦應に暫現にして上の終教に同すべし。」答ふ、「文の如く、掃雲の功用無し、能く一念の頃に十方に遊ぶ、斯の若きの徳は、因位窮滿するに非ずんば、孰れか能く此を具せん、故に知んぬ、定んで是れ實に行滿なり。彼は是れ、劣位の人なるには同ぜず。又一切の諸佛、諸の世界に於て、物の爲に成道するは、皆是れ示現なり。機を廢して自に約せば、成不成等無きを以ての故なり。又『大集經』第十四に云はく、「灌頂の正位を得、一切の諸菩薩の行に於て、次で佛の神力を判することを得、若し菩薩、是の如き等の法を成就せば、能く無佛の世界に於て八相成佛を示現す、乃至廣説」。

【七〇】次に、華嚴三昧。中に於て二頌半は、二に分つ。初に業用を辨す。中に於て七行有り。一は嚴土の行、二は供佛の行、三は光明の行、四は教化の行、五は智慧の行、六は説法の行、七は十度の行なり。後の二句は行所依の三昧を結す、行門無礙なるを以て、一切自の行法を説く等の如し。

【七二】第三に、因陀羅網土の故に、先に因陀羅網に入るなり。中に於て四頌有り、三に分つ。初の二句は定門を標す。謂はく、將に因陀羅網の土を現せんとするが故に。二に其業用を明

【七三】手出廣供三昧門を明す。十一は偶ある中、初一は總、後十は別。別の中、初一は所供後九は能供なり。

【七三】第五に現諸法門三昧門を明す

【七四】第六に四攝攝生三昧門を明す

す。中に於て二あり。先に一塵の内に現ずることを明す、後に一切の塵に類す。三に後の二句は所依の定を結す。法界縁起の理數、常爾なりと雖も、然も菩薩の不亂智力に由りて顯現することを得るが故に、自在力といふなり。亦名解脫とは是れ不思議解脫は、諸塵を脫離するを以ての故に。下の文の不思議品の末に、十種有りと言くが如し。謂はく、一塵の中に、三世の佛事を現する等なり。又、上の句は是れ定力、解脫は是れ智力なるべし、不亂は是れ定の作用、無疑は是れ解脫なるを以ての故なり。

【七四】第四に、手廣供を出す三昧。中に於て十七頌有り、三に分つ。初の二句は定門を標す。二に業用を辨する中に二あり。初は手の内より供を出す、二無量清淨の下は手光嚴の供を明す、是れ法界の手なるを以ての故に、差別の性を求むるに、了に不可得なり。然るに供具を出すこと窮盡すべからず。三に後の一偈は所依の定を結す、「涅槃」の中には、佛を名けて大仙と爲す。

【七五】第五に、諸の法門を現する三昧。中に於て八頌あり、四に分つ。初の二は定門、及び意を標す。二に業用を明すに二十二門有り、衆生を攝して通入す、故に門と云ふなり。三に二句有り、無盡を結す。四に一偈あり、所依の定を結す。

【七六】第六に、四攝、生を攝する三昧。中に於て十六頌一句あり、三に分つ。初の二頌は定門及び意を標す、二に業用を明す、三に末後の一句は無盡を結す。業用の中に就いて四あり。初に布施の攝を明す、二に以諸相好の下は受語攝を辨す。中に於て、初は愛色を示して脱

【迦陵】 迦陵頻伽鳥。

【齊輪】 脐をいふ

【初の八：具す】 已上掲げたる三の中、中間の佛の音體を除く。

せしむ、二に重敷の下は妙音説法なり。此八種の梵音の義略して三門を作る。初に種類、二に名體、三に業用なり。初の中に、諸の聖教を檢するに、四種の類有り。一に教義に約して辨ず、二十住經に説くが如し。如來に八種の音聲有り、一は謂はく見苦、二は謂はく向苦、三は謂はく見習、四は謂はく向習、五は謂はく見盡、六は謂はく向盡、七は謂はく見道、八は謂はく向道なり。此八は音を以て、所説に従ひて辨ず、佛音の用に約するを以ての故に。二は佛の音體に約す、亦二十住經に説くが如し。梵音に八種有り。一は不男音、二は不女音、三は不強音、四は不弱音、五は不清音、六は不濁音、七は不離音、八は不離音なり。三に佛音の徳に約するに、亦八種あり、『梵摩喩經』の説の如し。一は最好聲、其聲清雅にして迦陵等の如し。二は了了易き聲、音韻難了。三は調和の聲、大小、中を得。四は柔軟の聲、言に纏纏無き等。五は不誤聲、言錯失無し。六は不女聲、其聲雄朗。七は智慧聲、言慍怯無し、尊重の人の如く、勝慧の人の如し、言は畏るる所無し。八は深遠聲、齊輪より聲を發して、猶迅雷の震ふが如し。此上の三類は是れ佛の同音、體と徳と用と、三に分つのみ。四は通融に約せば、六十四種の梵音聲有り。此に二の釋有り。一は別數の六十四種、『密迹力士經』の中に、具に顯すが如し。二は諸徳、前の三類の中に於て、初の八を以て後の八の内に入れ、一一に八を具す、是故に、八八六十四を成するなり。二は名體、先に名とは、五義を具足するを、方に梵音と名く、『聞尼沙經』の説の如し。其に音聲五種の清淨有り、乃ち梵聲と名く、何等をか五と爲す。一は其音正直なり、二は其

【執受聲】俱舍論一の七に八種ノ聲ある中、有執受聲を指す。
【全表の韻】響をいふ。

【一乗・通ず】一乗は無盡なるが故に法界處に遍ねし。

【七】躬ら世間に同する三昧門を明

音和雅、三は其音清徹、四は其音深滿、五は周遍して遠く聞ゆ、此五義を具するを、乃ち梵音と名く。又梵は圓潔の聲、又梵天響應等の如きが故に名くるなり。聲とは、是れ執受聲、音とは彼に詮表の韻有ることを明す、是故に名くるなり。二に體とは、小乘には唯是れ色蘊の攝にして、是れ不可見有對の色、十二處の中には聲處に攝し、十八界の中には聲界に收む。初教には、聲處等は則ち空を性と爲す、又是れ十一識の中に、言說識を體と爲す。終教は此聲、佛の淨識を用て性と爲す。然るに此淨識、復眞如に異らざるが故に、則ち眞如を以て、彼自性と爲す。頗教は梵音、本性に稱同するときは、則ち不可說なり。圓教は彼無盡法界、無礙を以て性と爲す、是故に通じて一切を攝す、圓融自在は下の性起品の、如來の音聲の處に説くが如し。三は業川を明すとは、二有り。初は益生に約す。小乘は當會等の衆を益し、三乗は乃ち顯密等の衆を益し、一乗は無盡の密を益す。謂はく、重重無盡なり。二は分量に約す。小乘は唯人類の言音に同ず、三乗は、佛音は一切界に遍ず、日連尋ねて知らざる等の如し。一乗は因陀羅網法界處に遍ず、重重無盡無盡なり。三は衆生苦樂の下は同事攝を明す。中に於て、初は其事を同ず、二は若有不識の下は示法を明す、十行は是れ十度なり。四に或有衆生の下は利行の攝を明す。中に明て、初は生死の邊を示して捨せしむ。二は如來十力の下は佛徳を顯して求めしむ。三は如是方便無有量の一句は無盡を結す。

【七五】躬ら世間に同する三昧。中に於て十七頌一句有り。二に分つ。初の三句は意を

す。

標す、二に博綜の下は正しく大用を辨す。中に於て二あり。先に身業の用を明し、二に若見世間無正見の下は語業の用を明す。初の中に五有り。一は王臣等と作るの益、二に或於曠野の下は非情と作るの益、三に若見世界の下の悲匠と作るの益、四は咒術の下は仙人と作るの益、五は外道と作りて生を益し、皆得脱せしむ。二は語業の用の中に三あり。初の一偈は總じて擧ぐ、二は別して顯す、三は知一切の下の二句は、所依の定を結す、一心說法を三昧と名く。

【七〇】毛光覺照三昧門を明す。

第八に、毛光覺照三昧中に於て、八十九頌有り、四に分つ。初の一は門及び意を標す、二に所放光の下は正しく業用を辨す。三に是大仙の下は所依の本を結す。四は所修行業の下は、重ねて分齊を釋成す。第二の業用の中に二有り。初は一毛の光用を明し、二に如一毛の下は多毛を類顯す。前の一毛の中に復二あり。初は略して四十四門を辨じ、二に如是等比の下は廣く恆沙を結す。謂はく、此菩薩身は法界に同じ、九世を窮盡し、遍く塵道を該ぬ、常に此の如きの光明大用有りて休息する時無し、是故に、此光常に定んで恆に有、恆に無なり。謂はく、淨眼の者は、時として見ざることを無きが故に恆有なり。淨眼無き者は、時として暫らくも見ること無きが故に恆無なり。法光は常に定まり、廢興は緣に在るが故なり。前の中の四十四門の内に、一一に皆三義有り。一は光の名を出し、二は光の益を顯し、三は光の因を出す。初の光の因の内に、或は言説を以て三寶を顯し、或は事に約す。佛門を開きて塔形を現する等の如し。第二の中に、燈明は染闇を驅るるが故に淨

光を得。或は燈照は淨境を現す。三四の二因の内、各二、一は事因、二は法因なり。
 第五の歡喜光の因の内に、一は佛像を莊飾して、見る者をして喜ばしむ。二は佛徳を讚じ
 て、聞く者をして喜ばしむるが故なり。第六の因の中に、一には自ら三寶を樂しむ、二に
 は他を教へて樂しむ。寂靜光因の内に、十種の非法語を離るとは、惡語を以て人を惱し、
 他心をして安靜ならざらしむるが故に是れ障なり。燃燈經に依れば、十種の非法語あり。
 一は妄語、二は痛心語、三は讒語、四は苦惡語、五は不喜語、六は不樂語、七は不愛語、
 八は不入心語、九は惱他語、十は結怨語なり。又、見佛光の中に、西國の法に依るに、命
 を捨せんと欲する者あらば、面をして西に向ひて臥せしめ、前に於て、一の立佛の像を安
 す、像も亦西に向ふ。一旛頭を以て像の手の指に挂く、病人をして手に旛の脚を捉へて、
 口に佛名を稱へ、佛に隨ひて淨土に往生するの意を作し、兼て與に香を燒き、磬を鳴して、
 助けて佛名を稱す、若し能く此安處を作せば、直亡者、佛前に生ずることを得るのみに非
 ず、此人當に佛光を見ることを得べし。又樂法光因の中に七有り。一は聽、二は說、三は
 書、四は愛、五は護、六は施、七は行の故なり。此中に護法とは、通じて論ずるに四義有
 り。一には理法を護り見を帶せざるが故に。二には行法を護りて增長せしむるが故に。三
 には教法を護り、説きて倦まざるが故に。四には果法を護る、謂はく、惡王等に敵對して、
 護りて三寶を住持するが故に。此四處に於て、皆身命を惜まずして護を存す。第二に廣
 結の中に、業とは是れ光の往因なり、果は是れ現光なり。二に俱に同じく現すと、過去

【亂れずして明す】
細の一其行に「
ふ」等といへる文
意なり。

の因行、十世門に依るを以ての故に、亦此に在りて現す。第三に、所依を結する中に、亂れずして明すことは、定智二門を結するなり。第四に、重釋の中に何んが重釋を須ふとは、上に彼光、一切衆を覺悟すと云ふを以て、何が故に乃し衆生有りて見ざる。釋の中に三あり。初の二偈は法談、中に於て七種の衆生有りて、此光に遇ふことを得、縁有るを以ての故に。一は同業、二は隨喜、三は聞修、四は見行、五は多徳を修す、六に多佛を供す、七は大果を求む。二に三偈半有り、喻護、中に於て初の二偈は機眼の開閉の喩を明す。二に一偈半有り、機業の善惡の喩を明す。三に一偈有り、聞法の勝益を明す。

【七七】 第九に主伴
嚴麗三昧門を明す

第九に、主伴嚴麗三昧。中に於て六頌有り、二に分つ。初の二偈は、名及び意を標す、二に三千の下は、正しく業用を顯す、中に於て五偈あり。初の二偈は身座を化現する、則ち主なり。次の一は眷屬を攝し、次の一は眷屬勝を釋す、次の一は主勝を顯し、次の一は十方無邊の法界身を結通す。

【七八】 第十に寂用
無滯三昧門を明す

第十に、寂用無滯三昧。中に於て三十五頌有り、三に分つ。初の二偈は意を標す、中に於て往返は方に約し、出入は定に約す。二に或東方の下は、正しく業用を顯す。三に是名の下は無盡を結す。第二の業用の中に二あり。初に位に約して、總じて自在を明す。二に一切鬼神入正受の下は、微細差別自在を明す。前の中に三あり。初に器世間自在を明す。

【第二の業用云云】
業用を釋するなり

【凡て菩薩云云】
此下、初は依正無
礙に約し、後は智
力自在に約す。

二に東方世界の下の、智正覺世間に於て自在なり。三に眼根中の下は、衆生世間に於て自在なり。凡そ菩薩の三世間自在を論ずるに二義有り。一は菩薩の身、三世間と作るが故に

【七九】自在の義を釋成す。初に二世間に就いて述する中、先づ四重無礙を論ず。

無礙なるを得。二は菩薩、三世間處に於て自在を示現す。今此文の中には、初の二世間は後の義に約して説く、衆生世間は前の義に約して説く。文の中に互に擧ぐ、現實には遍く通じて此二義を具す。

初の二世間自在の中に就きて、何を以てか、東人西出等を成ずることを得るとならば、論文の中に通じて、四重の無礙有り。一は處無礙。謂はく、東方即西なるを以ての故に、是故に、東を移さずして常に西に在り。問ふ、文の中に移さずして至ると言はず、何んが必ずしも是れ東没西出ならざるや。答ふ、文の中に、既に常に東に在りとする、亦常に西に在りと見ると言ふ、故に知んぬ移動には非ず。二は佛無礙。謂はく、東の佛即ち是れ西の佛なるを以ての故に、常に東の佛の前に在る、即ち是れ恆に西の佛の邊に在り。三に身無礙。謂はく、東に在るの身、即ち是れ西に在る身なるが故に、是故に東の身を動ぜずして西に現す。問ふ、豈、是れ分身して、一身は東に在り、一身は西に在らざらんや。答ふ、若し多身、多處に在らば、何んが奇特を成ぜん、何んが名けて不思議の用と爲すことを得る。是故に當に知るべし定んで身を分たす。四には入出無礙。謂はく、入定即ち是れ出なるを以ての故に、是故に入定を壞せずして常に入出を見るなり。問ふ、何んが必ずしも是れ先に入り、後に出でざるや。答ふ、説きて常に入るを見、亦常に入るを見ると言ふ、故に知んぬ是即なり。現實には、義の中に斯四重を具す。然るに此文の意は、但彼菩薩の功力を顯さんが爲の故に、初の二種は、此に辨する所に非ず、初の二は即ち菩薩無力なる

答ふ幻…云云
答の中、初は如幻
不實に約し、次は
法性融通に約し、
次は所觀の境に約
し、次は能觀の智
に約して答ふ。

八〇 自在の義を
釋成するに、第二
に衆生世間に約し
て述す。經の偈眼
根の中に於て、等
以下十二頌の下。

を以ての故なり。問ふ、此刹那入定、何に因りてか即ち是れ出なるや。答ふ、二幻の中に鬼
を作るも、此鬼、生に即して是れ死なるが如し、何を以ての故に、有即は無なるを以ての
故に、入出等も亦爾り、準じて之を思へ。又此菩薩、法界を以て身と爲すが故に、是故に、縱
ひ東方百千界の外に見る法界は、是れ分限の法に非ず、故に顯現の處に隨ひて全く現ぜざる
こと無し、故に菩薩の身常に入定の中に在れども現じ、恆に出定の中に在りて現ず、無礙
圓融難思議なり。是故に若し出定門の中に向へば、出を見て入を見ず、亦出で竟る時を見
ず、此義は之に準ぜよ。又若し境に約して論ぜば、理數法爾に此の如く圓融す。若し智に約し
て説かば、菩薩の智、此法を了達し、廻動自在なるに由る。今此文の中には具に二に通ず。
衆生世間自在の中に就きて二あり、初は自身に約し、後は他身に約す。自の中に十二處
に約して辨す。中に於て、緣起無礙定等の圓融、一一に皆十事五對無礙の相有り。第一對
は根境無礙なり、既に根を觀じて定に入る、還りて應に根從り出づべし。此根即ち是れ境
なるを顯さんが爲の故に、境從り出づるなり。一心緣起無二にして二なるを以ての故に、
恆に相即して根境兩に分れたり。第二對は二定無礙なり。謂はく、理事の二定なり。境
事を分別せんが爲に、應に境定に入るべし。返りて根の中に入り、根の空寂を觀するが
爲に、應に根定に入るべし。返りて境の中に入り、境事を分別する智、即ち是れ根を觀ず
る無生智なるを以て、是故に二定無礙にして唯是れ一心なり。第三對は二境無礙なり。謂
はく、深廣なり。此に分別する所の廣事、即ち是れ無生無性の深理なるが故に、是故に眞

【二】に童子身云云
以上は自身に就き
今は他身に就いて
自他無礙を述す。

【六】此下、微細
差別自在を明すな
り。經の「一切の
鬼神」等七頌半の
下。

俗雙融して唯一法界なり、但、二義を礙へざるを以ての故に、俗を境に寄せ、眞を根に寄す、理實には遍通せり。第四對は入出無礙なり。謂はく、入定即ち是れ出なるを以ての故に、是故に定を起つと雖も念亂れず。第五對は體用無礙なり。謂はく自他なり、謂はく、境を現すと雖も廣なるが故に、人知ること能はず、恆に寂の故に、定を起つと雖も深きが故に、自心恆に散ぜず。是故に、此上の十義同じく一聚と爲る、法界縁起無礙相即なる故なり。又此中に復、三重の希有有り。謂はく、根より入り、境より出で已る、一の希有と爲す。復能く境の中に、更に無邊の分別を示す、天人の所知に非ず、二の希有と爲す。境從り出で已りて此分別を示す、已に甚だ希有なり。復、彼時に於て定心散ぜず、更に復希有なり。何を以てか此の如きとならば、三昧純熟することを顯すが故なり。文處知んぬべし。二に童子身の下は、他身上に於て無礙なり。此に二義有り。一は菩薩、彼身を化現して、轉變速疾なり。二は菩薩既に三世間の身を具す、即ち一切衆生の實報の身を以て、自身と作すが故に、是故に、彼身より入りて、此身より出づることを現す、彼遍計の衆生、覺らず知らず、應に度すべき者を除く、此は定用自在を明す、知んぬべし。

第二に、微細差別自在の中に、亦三世間皆分折顯示す。中に於て、毛孔毛端は是れ、衆生世間の差別なり。佛の光明を智正覺の差別と爲す、微塵等の餘は、竝に器世間の差別なり、悉く是れ菩薩の身、彼等の中より、定を出入することを現す、是れ彼を觀じて定に入る等に非ず、文の中に皆現すと云ふを以ての故に。現とは身を彼中に現するなり。第

【第三に：無盡なり】遠近の二意を承けて釋す。經の盡きざらんの一頌これなり。
【六】第六に喩說女旨分の釋。劣を擧げて勝を顯す。十八の大喩を以て佛は皆一一等の下これなり。

【三】以下別して十八の大喩を釋す。一聲開現通の喩乃至十八、龍王迴降の喩これなり。

【得八云云】經の「八解脱を得」等の一偈。
【後に現作云云】經の「現じて日月」等の一偈。

三に、結とは、二の意有り。一は近別して此第十定を結す、二は遠通して前の十門を結す、是れ略なり。實に約するときは則ち無盡なり。

第六は喩說玄旨分、亦是擧劣顯勝分と名く。上來明す所、正しく一乘普賢の行徳、佛境を窺むることを顯すを以て、然も位次の言は、蓋し是れ外凡十信の位なり。既に三乗及び視聽を越ゆ、滯情は教に對し信を取るに由無し。是故に斯近事を擧げて、以て玄趣を鏡にし、開悟せしむるのみ。中に於て七十七頌有り、二に分つ。初の一偈は總じて標す、中に於て衆生の業等とは、下の文の諸天修羅等は是れ正報なり、海風等を依報と爲す。次の句は是れ下の諸龍興雨等なり、下の句は是れ聲聞の三昧、及び梵天等なり。竝に世間に於て少にして不測なること有り、故に難思と云ふ、所以に喩況と爲す。

(八三)に別して辨する中に、十八の大喩有り。一は聲開現通の喩。菩薩の自在饒益衆生の力に喩ふ、中に於て三あり。初に意を標す。謂はく、理實に聲聞の通、菩薩に比するに、牛跡と大海と、螢燭と日光との如きが故に、喩と爲すべきこと無しと云ふなり。但今、螢燭を擧ぐるを以て尙爾り、矧んや曠陽をや。聰慧の者をして彌對して懸解せしむ、故に聰慧者、能解是義と云ふ。次に得八の下は近喩を擧げ後に現作の下は遠趣を顯す。二に水現四兵の喩。菩薩の海印三昧の徳に喩ふ。三に海天妙音の喩、菩薩の總持、巧に衆をして喜ばしむる徳に喩ふ。四に女授辨才の喩。菩薩の方便智、法を授けて喜ばしむる徳に喩ふ。五に幻師化術の喩。菩薩の不思議解脱の力轉變して、機を悦ばしむる徳に喩ふ。六に修羅入

【八四】第七に校量勸發分の釋。經の「我説く所の諸の譬喩」等の下。

【八五】第八に顯實證成分の釋。經の「賢者此品を」等の下。

絲の喩。菩薩の自在無礙の通に喩ふ。七に象王隨變の喩。菩薩の定用陰緣自在の徳に喩ふ。八に修羅大身の喩。菩薩の、法界等の身を現する徳に喩ふ。謂はく、上の文に、三千大千世界の中に、一蓮華を化して世界に満てしむる等の如し、之を知れ。九に帝釋破怨の喩。菩薩の、衆魔を降碎する徳に喩ふ。十は空聲説法の喩。菩薩の、無功用心の説法利生の徳に喩ふ。十一に空聲安慰の喩。菩薩の、慈音除惱の徳に喩ふ。十二に天王普應の喩。菩薩圓廻の身、應機無礙の徳に喩ふ。十三に魔王自在の喩。菩薩の十力、生を攝して、同行せしむるの徳に喩ふ。十四に梵身殊現の喩。菩薩、解脱の力を以て、遍く道場に坐し、一切の法を説くの徳に喩ふ。十五に摩醯數滴の喩。菩薩の、一念に一切衆生の心を了知するの徳に喩ふ。十六に風輪持散の喩。菩薩の大願、宿に成じて、無心無礙にして、辨説、機に應ずるの徳に喩ふ。十七に大海包含の喩。菩薩の、衆徳を蘊積し、群機に印現するの徳に喩ふ。十八に龍王過降の喩。菩薩の、法界を窮盡して、普く法雨を雨らすの徳に喩ふ。十九に校量勸發分。中に於て、十頌半有り、四に分つ。初の一偈は喩況の難、二に一偈は説者の難を明す。三に三偈半有り、信行者の難を顯す。四に若以三千の下の五偈は、易を擧げて難を顯す、各是一事、後に向ひて漸く難なること知んぬべし。第八に、顯實證成分の中、三偈有り。一は益を辨するに三有り。一は動地、二は降魔、三は滅苦なり。二に諸佛摩頂、三に逆讚隨喜なり。第二會竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第四

以下第三會に六品ある中、今品と次の菩薩雲集説偈品は本會の序説なること知るべし。

【一】 名を釋す。

【此には云云】長阿含經十一起世經の釋に由る。

【九山】 一、踰健達羅山。二、伊沙馱羅山。三、竭地梨迦山。四、蘇達濕縛羯拏山。五、頰毘那怛迦山。六、七、尼民達羅山。八、以上七金山。九、鐵輪圍山。十、蘇迷盧山（須彌）。

華嚴經探玄記

卷第五 是れ第三會盡す

魏國西寺沙門法藏述す

佛昇須彌頂品第九。將に此文を釋せんとするに、四門上に同じ。

一には釋名に二有り。初に會の名は、法に約すれば十住會と名く。處に約すれば初利天會と名く。釋、知んぬべし。二に品の名は、佛は是れ化主なり、動靜無礙、去らずして進む。故に昇と云ふ。昇りて何れの處にか至る。謂はく、須彌頂なり。此には妙高山と云ふ。謂はく、四寶の成ずる所なるを以ての故に妙と云ふ。謂はく、東は黃金、西は白銀、南は頗梨、北は馬瑙なり。餘の山は唯金なるが故に妙に非ず。九山に獨出するが故に高と云ふ。高さ八萬四千山句にして縱廣正等なり。亦是安明山と名く。頂とは山の巔なり。謂はく、此山の頂の中央に帝釋宮有り、四面に各八埵有りて臺の如し。釋を去ること三山句の中に別に宮城有り。三十二天、帝釋を輔弼す。釋を并せて三十三有るなり。今、釋の宮に趣くが故に頂と云ふ。處に約して法を表せば、十住に位不退勝を成ずることを明すが故に、山頂に居せり。則ち人、用及び處の三義に従つて名を立つ。問ふ、「何んが人間に在りて説かざるや。」答ふ、「行位漸く昇進することを顯さんが爲の故に、又位を成じ染を離るることを表すが故に、天に居するなり。」問ふ、「何んが四天王天に至らざるや。」答ふ、「三

【二】今品の依つて來る意を顯す。

【三】宗趣を明す

【十住】信を獲已りて進ん佛地に住する位。詳にせば、一、發心住。二、治地住。三、修行住。四、生貴住。五、方便具足住。六、正心住。七、不退住。八、童真住。九、法王子位。一〇、灌頂住。

の意有り。一には、彼は是れ雜思神の天なるを以て、法を顯すこと勝れたるに非ざるが故に、超過するなり。二には、法を寄せんが爲に、十信は是れ外凡の退位、十住は是れ内凡の不退、進退懸に殊ることを表さんと欲するを以ての故に、四天王處を越ゆるなり。三には、若し未だ山頂に至らずんば、進退有るべし。山の頂上に到れば、即ち安住して退せず。是故に彼山腹處の天を越えて、此頂處に至りて、以て法を表すなり。

二に來意に亦二あり。初に、會の來ることは、一には、前の十住の間に答ふるが故に。二には、前に已に信を明す、今は信に依りて、解を起すことを顯すが故に、次に來るなり。三には前の信は但是れ位の前方便なり。方便既に滿す、正位顯彰するが故に次に來るなり。二に品の來ることは、前の品には信の究竟を辨す。今將に後位に起かんとするが故に、來るなり。

三に宗趣に亦二あり。初に、會の宗に亦二あり。先は人に約す。謂はく、化主及び助化、各體相用有り、信に約する、住もこれに準ぜよ。二に法に約す。謂はく、十住の教義なり。義の中に平等法界を以て體と爲し、十住の行位を相と爲し、應教の所詮を用と爲す。教の中に六決定を以て體と爲し、十住の不同を相と爲し、機を益するを用と爲す。相即して無礙なり、上に準じて之を思へ。二に品の宗とは、處を嚴り佛を請するに、來りて感に起くを以て宗と爲す。

四に文を釋せば、此會の中に就きて六品有り、二に分つ。初の二は方便發起を明す、即

【四】以下、本文を釋す。
【此會の中云云】第三會中に六品ある中、前二は序説後四を正説とす。

【初の中云云】體用二融を明す中、今は體融を明すなり。經に「爾時如來威神力の故に」とあり。

【五】隨釋の中、初に化縁を辨ずるに、先づ體融を明す。
【下は融通の相を明す】經に「十方一切の」等の下なり。

【自謂在】經に、「自ら佛の所に在り」と謂へり」の句

ち序分なり。餘の四品は是れ、當會の正宗なり。前の中に二あり。初の品は是れ如來應感の序にして、果徳の備ることを明す。後の品は集衆光讚の序を明す。因徳の圓なることを明すは、即ち十住の位の中に因果を具し、宗圓備することを顯すが故なり。前の中に三あり。初には化縁を辨じ、二には爾時帝釋の下は、根欲を嚴る。三に爾時世尊の下は根縁の契合を明す。初の中に二あり。先に體融じて法界に遍周す。後に用の融を明す。謂はく、不動にして進む。

前の中に初の一句は、體融の所由を明す、謂はく佛力なり。下は融通の相を明す。中に於て十方各一一閻浮等とは、是れ上の光明覺品に辨する所の、十方各乃至不可説不可説の虚空法界等の世界の中に、皆菩提樹下の盧舍那佛有りて、各海會の菩薩衆と、並に文殊師利乃至賢首等と、悉く各法を説く。諸會の衆、各雜らざるを以ての故に、自謂在と云ふなり。今並に同時に衆を集め、各本界の天上に昇りて、本處を離れざるなり。若し小乘三乘等の中に、經を説り化を施すに約せば、但某の處等に在ることを論ず。此一説一切説等無し。今一乘の法を明さんと欲す、則ち主伴圓明の故に此の如し。中に於て、一には三世間融じ、二には依正の二融す。三には正報の中に於て三寶の相融すること有り。謂はく、種種を説くを法寶と爲し、菩薩を僧と爲す。如來に對するが故に。四には諸の菩薩に於て三業の融すること有り。謂はく、是身を顯現すると、法を説くを語と爲すと、自ら謂ふを意と爲すとなり。問ふ「何んが此に集むることを須ひん、答ふ、「主伴

【六】 化縁を明す
を釋す。經に「爾
時世尊威神力の故
に」といふ。これな
り。初に用の相を
明す釋に、まづ古
人の三釋を評し、
次に今解の八義を
述す。

【七】 今八義を以
て用融を釋す。
【樹王】 菩提樹を
いふ。

を具することを明すなり。凡そ一法起れば必ず一切を具するが故に。問ふ、「何が故に皆菩提樹を以て本と爲すや。」答ふ、「是れ得法の初の處なるを以ての故に、又は是れ覺の門なるが故に。」

第二の用融の中に、初の一句は用融の所由、次の不起等は正しく用相を明す。此中に此を起すして彼に昇ることは、古人に三の釋あり。一には云はく、「本釋迦の身、道樹を起たずして、別に應化を起し、以て天上に昇る。」と。若し此釋に依れば、昇天の身は是れ重化の身なり、既に深妙に非ず、恐らくは文の意に乖かん。一には云はく、「不起は是れ法身なり。昇天は是れ化用なり。」と。此れ恐らくは理に非ず、豈法身、道樹に坐すべけんや。一には云はく、「是昇天は是れ不往にして至る。往即不往なるを以ての故に、所以に不起なり。不往即往の故に、所以に昇天するなり。不來の相にして來るを善來等と名くるが如し。」と。若し此釋に依らば、但是れ昇相無くして天に昇る。是樹下に不起の身有るに非ず、故に亦用ひ難し。

(七) 今此文を解するに、略して八義有り。一には處に約す、即ちの門なり。謂はく、一處の中に一切處有るを以ての故に、是故に此天宮等は即ち本來彼樹王下の中に在り、故に不起と云ふなり。然るに、先に未だ此天宮の處を用ひず、今、中に於て法を説かんと欲す、用の故に説いて昇と爲すなり。又、相即の故に不起なり。門別の故に昇ること有るなり。二には佛に約す。謂はく、此樹王の下に坐する佛身、即ち法界一切處に遍するが故に、是故

【初利等の處】初利天等の意。初利天(Śarvāpura)は欲界六欲天中の第二。須彌山の頂闍浮提の上八萬由旬の處にあり。帝釋天の住處なり。【前後際】三世のうち過去と未來をいふ。

に佛身は本來、彼初利等の處に在るが故に、起つことを待たざるなり。今此初利門中の佛を、用ひんと欲するが故に、昇と曰ふなり。是故に若し起つときは則ち昇ることを成せざるなり。三には時に約す。謂はく、此樹下座上の佛身、即前後際等の九世十世一切の時に遍するが故に、是故に此佛、樹下に坐する時と、天に昇り去る時と、天處に到る時と、此一のの時、皆法界に遍じ、前後際を攝し盡す。即ち知る、樹下に坐する時、永く起つ時無きが故に、不起と云ふなり。若し正しく去る時も亦此の如し。故に唯去ること有りて餘無し。皆念念相至らず、各各法界を收む。是の如く緣起門無礙にして恆に雜らず。四には法界門に約す。謂はく、此昇去は自性無きが故に、即ち眞如法界を攝す。彼樹下に坐する等も、亦眞に異らざるを以ての故に、眞如と同じく去門に在りて顯現するが故に、不起にして昇なり。五には緣起門に約す。謂はく、坐は行に由るが故に坐なり。坐は行の中に在り。行は坐に由るが故に行なり。行は坐の中に在り。是故に行中の坐に由るが故に、昇天即不起なり。坐中の行に由るが故に、不起にして昇天なり。行坐無礙の故に、昇に即して常に坐、坐に即して恆に昇なるが故なり。六に佛の不思議の徳に約す。謂はく、即ち此坐を起たずして、即ち是れ行、即ち是れ臥、即ち是れ住、即ち是れ一切處に到り、即ち是れ一切の事を作す。並に下地の知る所に非ず。七には所表に約す。謂はく、前位の行成じ、究竟して堅固不壞なるを表するが故に、不起前座と云ふ。前も起機の用有るが故に、昇と云ふなり。八には成會に約す。謂はく後會は必ず前を具するが故に、前を捨せずして後を成す。若

【八】第二に根欲を嚴る下、經に「帝釋、遙かに佛の來りたまふを見」の文を釋す。

【先は總後は別】總とは經に「即ち妙勝殿乃至雜寶を以て之を莊嚴す」といふを指す。別とは「萬種の寶帳」等以下。

【内報】經文「一萬の天子」等をいふを指す。

【九】機類と緣正に契合せることを明す一段の釋。經に「爾時、世尊、請を受けし」等これにして、今昇殿昇座の二益に分ちて之を辨ず。

【益の中に二】此下別して益を成ずるを釋す。【銀の中に云云】隨處別釋す。

し捨なるときは則ち緣起を壞す。是故に前を起たずして後に昇るなり。
【八】第二に根欲を嚴る。中に、遙かに佛の來るを見るとは、佛に約すれば用は體より起る、機に約すれば境は心より現するが故なり。中に於て二あり、先に座を嚴り根を表す。中に於て先は總、後は別なり。別の中に、初には外報、後には内報なり。二に合掌の下は欲を辨す。

【九】第三、根緣契合の中に亦二あり。先に昇殿の益、後に昇座の益なり。前の中に二あり。先は感に赴き、二に益を成ず。此二に各二。謂はく、此界及び結通なり。益の中に二、初に寂然等は得定の益を示し、後に偈讚發慧の益なり。中に於て二、初に本行を憶し、二に德を頌す。頌の中に、理實には過去の一切の諸佛は、體同用融法爾無二にして、皆此殿に於て十住の法を説く。而るに今、却次に但十佛を説くことは、無盡を顯さんが爲の故に、十住を説かんが爲の故なり。迦葉は是れ姓なり、此には飲光と云ふ。拘那含牟尼は、此には金仙人と云ふ。拘樓孫は此には所應斷已斷と云ふ。謂はく、生死煩惱等なり。隨葉は亦毘舍符と名く。此には一切勝と云ひ、亦遍現と云ふ。謂はく、諸處に皆身現するが故に。尸棄は此には有髻と云ふ、毘婆尸は此には種種見と云ひ、新には淨觀と名く。弗沙は此には増盛と云ふ。闍減無きを以ての故に。亦是れ星の名なり。提舍は此には説と云ふ。謂はく、常に法を説くなり。亦光と名くるなり。波頭摩は此には赤蓮華と云ふ。錠光は是れ燃燈佛なり。此佛、太子として初生の時に、一切の身邊、燃燈の如し。故に燃燈太子と

【賢劫】過去の住劫を莊嚴劫、未來の住劫を星宿劫といふに對し、現在の住劫をいふ、現在の住劫二十増減ある中、千佛の出世あるを以て名く。

【一〇】第二に昇座の益を明す一段殿にして、經に「宮殿は忽然として」等の下これなり。

【一】當品は第三會序説の第二にて圓徳の圓滿せるを顯すもの。釋に四あり。初に釋名。【諸の菩薩・故に】雲を相とするに、二の因故を以て釋す。

【二】當品の本意を明す。

名く。太子成佛して亦此名を立つ。問ふ、「此中に後の七佛は是れ、過去莊嚴劫の中、の佛なり。何の因ありてか此賢劫の中の、切利天宮に於て、爲に法を説きたまふや。」答ふ、「此天宮等に龜有り細有り。龜は前劫に虜滅し、細は常に在るが故なり。經の、天人見劫盡我此土常安穩等の如し。又三乘に説く所は滅し、一乘に辨する所は常に在るが故に。」

【二〇】第二に昇座益の中に二。初に此土、後に結通なり。前の中に二。初に昇座、後に益を辨す。謂はく、其殿を廣くすとは、常の所見を改むるが故に、情を破するなり。天處に同じとは、同理を顯すが故なり。前には殿に昇りて人を益し、此には座に昇りて處を益すとは、依正俱に勝るることを、顯さんが爲の故なり。

【二一】菩薩雲集妙勝殿上説偈品第十。四門は上に同じ。釋名とは、菩薩は是れ體、雲は是れ相なり、諸の菩薩、法雨を含むを以ての故に、相斷斷なるが故に。集は是れ用、殿は是れ集の處なり。妙勝に三義有り。一には、佛衆を妙勝と爲す。妙勝者の殿なり。二には、中に於て此妙勝の法を説くが故に。三には、殿即妙勝なり。稱性を以ての故に。説偈は是れ語業、謂はく、法界なり。菩薩雲の如くにして集り、各妙辯を以て佛徳を宣揚す、故に菩薩雲集説偈品と云ふなり。

【二二】二に來意とは、前には如來の昇天を明す。將に説法せんと欲するには、必ず所被の機縁有るが故に、次に來るなり。又前には果徳の臨機を明し、今は因力、化を助く。先は主にして後は伴なり、義の次第の故に。

【三】宗趣を明す

【如来に影響たり】如来を形音とすれば、菩薩は將に影響たらざらんばあらず。

【四】正しく本文を釋す。初に集衆を明す下。

【分量を明す】經に「爾時十方各百佛世界乃至十世界あり」の句を指す

【二に正しく：顯す】經に「其世界を因陀羅乃至淨修せり」といへる下

三に宗とは、謂はく、衆を集めて光を放ち、偈をもて數するを宗と爲す。衆に三類有り。一には助化衆。謂はく、十方の菩薩、如来に影響たり。二には表法の衆。謂はく、諸首諸慧諸林諸幢等、各人に寄せて法を表示せんが爲なり。三には當機の衆。謂はく、教の所被等なり。此文は茲三に通ず。

四に文を釋する中に三あり。初に衆を集め、二に光を放ち、三に偈を説く。初の中に二。先に此土、後に結通なり。前の中に一。初に所從來の處を顯す。二に佛神力の下は、菩薩の集衆を明す。前の中に二。初に分量を明すことは、前の十と此百と、行位漸増することとを顯すが故なり。此中の意は、百佛世界を取り、抹して微塵と爲す。是の如く東方、爾許の塵數の刹を過ぎて、外に一の世界有り、因陀羅と名く。此間より東に復過ぐることに上の如く百摩利にして、外に土有り、蓮華と名く。是の如く東に向ひて十重世界あり、各各百塵界を相過ぎて外に、十重を説く所以は、無盡を顯すを以ての故なり。東方の十界の如く、餘の九方も亦爾り。世界と佛名と菩薩等と皆同じきが故に、一方各十界等と云ふは、並に同じく名を列ぬるなり。此は唯斯一の天宮會に據る、餘の十方界、皆各此の如く、法界無邊會と爲すのみ。謂はく、一會一切會等、結通の處に辨ずるが如し。二に正しく本處の三世間の名を顯す。其世界の名雜はることとは、所解の法相一に非ざることを表すが故なり。佛を同じく月と名くることは、是住の中の果相に、其三義有るを以てなり。一には、體に約すれば、是れ圓滿の義なり。二には、用に約すれば、是れ光照の義なり。三には、

【五】放光を明す一段の體は六あり。

【放光の人】世尊をいふ。

【光の出處】兩足の指なり。

【光の數】百千億

【光の相】妙色の光明。

【光照の處】經に「普く十方世界乃至妙勝嚴上」といふこれなり。

【六】偈讚を釋するに十段に分つ。これ偈頌に於て、十菩薩ありて讚ずるが故なり。今は初なり。

德に約すれば、是れ清涼の義なり。又、初は是れ正體、次は是れ後得、後は是れ大悲なり、月を用て表況す。菩薩を同じく慧と名くることは、是れ住の中の因相なり。謂はく、解は眞俗に達し、明了の義の故に。各本佛に於て梵行を修することは、因は果に依りて成ずることを顯すが故に、相順するが故に。二に正しく集來の中に二あり。初に此に至りて敬を致す。二に敬し已りて安坐す。皆佛力と云ふことは、是れ來坐の所由、果力の加威なればなり。充滿十方とは、是れ緣起無礙の義なり。

第二に放光の序の中に六あり。一には放光の人、二には光の出處なり。謂はく、足指地を距て、乃ち住立するを得るが如く、此十住の、位不退を成ずることを表す故に、住と名くるなり。三には光の數、四には光の相なり。謂はく、解相炳著の故に妙色と云ふ、亦是れ名なり。五には光照の處、謂はく、是れ上の光覺品に辨する所、又是れ諸文結通の處なり。前の品は佛力、菩提樹下の諸身を顯現す。今の光は樹下及び天上を照す。六には、如來大衆等は、照の顯現する所、通じて同じく一法界圓明の會爲ることを明すが故なり。又、樹下須彌頂と云ふも、之を知れ。

第三に偈讚の中の十菩薩を、即ち十段と爲す。初の一は總、後の九は別なり。是説法の主なるを以ての故に、法慧と名く。是故に總じて、此會の本末は、以て佛德を顯すことを叙す。後は皆、此總説の上に於て、差別の德を數す、是故に總別無礙なり。唯一如來の法界身は、中に於て或は即ち理、即ち事、即ち教、即ち義、即ち因、即ち果、即ち人、即ち

【初の偈云云】上は總じて十段の大意を示し今は正しく頌文を釋す。
【二に伏疑】菩薩まだ四位の人たり如何にして普遍なるを得べきの難に對し、佛德を同する旨を以て答ふ

【七】二、一切慧菩薩。初に能説の主名を釋するに一切法の眞實性を解了せることを示す【十偈を云云】以下頌文を釋す。

【能所を混ず】故に法性本來空寂なるが故に取もなく見もなし。

法、即ち心、即ち境、圓融自在にして衆體全攝す。此等は即ち是れ、十住の中の法なり。下の諸偈は、應に此意を準知すべし。初の偈の中、二に分つ。先に此會の事を叙し、後に疑を釋す。前の中に、初の二は昇天品の事を叙し、次の三は此處の集相を叙し、次の二は結通の事を叙す。中に於て先に所由を明し、後に其相を顯す。二に伏疑を釋す。疑うて云はく、佛果は自在なれば、一身にして一切會に赴くに、障礙有ること無く、思議違はざることを得べし。菩薩は因人、既に不足に居す、何に因りてか亦此の如きの普遍を得るや。釋の中に三あり。初の偈は初發心深く、二は修行深く、三は德を成ずること深きが故に、佛に同じて遍ずることを得るなり。

二に一切慧とは、一切の法の離相を解するを以ての故に。十偈を五に分つ。初の三は、佛は妄取の所見に、非ざることを明す。一は、小菩薩は相を取り佛を見て、眞法を記ざることを明す。二は、凡夫の妄染總じて佛を見ざることを明す。三は、二乘は觀ると雖も法執亡せず、假名の法に著することを明す。次の三は既に妄に取りて見ざれば、誰か能く見るや。謂はく、妄を離れて正しく解すれば、佛常に現前す。中に於て、一は眞佛を見、二は能所を混ず。所取も無く能見も無きを以ての故に。三は觀の益を顯す。三に一偈は、妄取は何の失ありて見ざるや、謂はく、癡冥の故なることを明す。四に二偈は、眞佛は何の德ありて妄を超ゆるや。謂はく、法界淨等の故に。中に於て初の偈は、佛に約して修生の功德の、不生滅の義を明す。謂はく、初の二句は相好の功德の、三世の生滅を離るること

【此功德：無住といふ】この下、初は緣起の本に約して釋す。

【始覺】衆生の本性たる自性清淨心體、無明の緣によりて動じて妄念となりても、本覺の内薰と師教の外緣とによつて厭求心を起し漸く覺證の智を生じたるをいふ。【八】三に勝慧菩薩の下。初に名を釋し、次に十偈の下は偈を釋す。【陰】五陰即ち色受想行識の五蘊のこと。陰は善法を陰覆する義と多法を陰積する義とあり。【初は云云】寶暗處にありといふ句にして、無明五陰の室内にありては眞諦を見る能はずと。

を明す。即ち宗を立つるなり。下の二句は、二因を擧げて釋成す。一は云はく、此功德、無住の本に住するを以ての故に、同じく無住なり。又、即無自性を顯すが故に、無住と云ふ。是故に不生滅に即して功德無くんばあらず。二に云はく、若し無明未だ盡きざれば、眞如を障隔して、修生の徳をして、未だ全く眞に同ぜしめざるが故に生滅有り。今は即ち此に返す。始覺は本に同じきが故に、悉淨と云ふ、故に不生滅なり。後の偈は、法に約して、緣起の法即ち是れ佛と見るを以ての故に、因縁生即ち是れ、不生なるを以ての故に、理佛を見ること、第四の偈の不生滅の見佛と同じ。五に、後の一偈は、功を推して本に在くなり。

【八】三に勝慧とは、淨慧の勝眼、佛の深智を解するを以て、深智を勝と爲るなり。十偈を五分つ。初の三は妄情の失を擧ぐ。一は佛の深智に迷惑す。二は妄取して佛相を障ふ。三は陰に迷ひて法身を障ふ。次の二は慧解の益を辨す。内に於て初の偈の中に、若し三乘に約せば、法の不實を觀じ、即ち理佛を見る。一乘は即ち舍那法界身を見る、理事に通ず。後には陰轉すれば我無く、是れ佛なることを明す。次の三は前の失を喻顯す。中に於て、初は因ありと雖も縁を闕するの失、二には、縁ありと雖も因雜るの失なり。謂はく、無明を雜ふるが故に、心不淨なり、亦是れ信心無きなり。三には、縁ありと雖も因を闕するの失なり。次の一は前の益を喻顯す、後の一は功を推して本に在くなり。

【九】四に功德慧とは、福を以て慧を莊るが故に。十偈を四分つ。初の四は迷の失を辨す。

【二】には縁ありと雖云云。翳眼の空華を見るが如く、惑と俱するが故に佛法を見ずと。

【三】には縁云云。盲者の明淨日を見ざる如く、心諛曲なる者は諸佛を見ずと。

【九】四に功德慧菩薩の下。初に釋名、次に偈釋なり。

【二】第五に精進慧菩薩の下。【所執の無相觀に約し】木を見て鬼と見るはこれ通計實は木の外に鬼なし、かく情有理無なる、これ相無性觀。

【依他の無生に約】依他とは他の四縁に依て起るが故に名く、陽焰、鐘像等のごとき、これ自性あるに非ず、全く無生なり。

【二】第六に善慧菩薩の下。今二故を以て自利他の善を顯す。

一は相を取り、二は見取、三は無明、四は法眼無し。又釋すらく、上の二は妄を起し、後の二は法に迷ふ。前の中に、一は虚を執じて實と爲し、二は劣を取りて勝と爲す。後の二の中に、一は自心に迷ひ、二は眞空に迷ふ。次の四は解の徳を辨ず。一は法眼を求め、二は心に著無く、三は淨眼有り、四は能所見を離る。上の二句は無見即ち見、下の二句は見即ち無見、次の一は佛の、法に順じ生を攝することを數じ、後の一は功を推す。

【二】五に進慧とは、妄想放逸を離るるを以ての故に。十偈を二に分つ。初の一は癡妄の失を明し、後の九は慧悟の得を明す。中に於て初の一は雙べて眞偽を了す。謂はく、妄偽は不實、眞理は是れ實なりと了す。次の二は偽を捨てて眞に歸す。謂はく、初は所執の無相觀に約し、後は依他の無生に約す。次の三は眞偽變融を明す、則ち圓成無性なり。一は俱眞、二は俱泯、三は不俱の所以を釋す、後の三は偽盡き眞圓なり。一は議すべからず、二は思ふべからず、三は觀の益なり。

【二】六に善慧とは、佛、害心を離るることを知るが故に、善く説いて淨道を明すが故に。十偈を四に分つ。初の三偈は佛の實徳を擧ぐ。一には二利圓妙、二には積徳方に見る、三には理に同じて情を超ゆ。二に四偈は佛の所説の法を辨ず。一は法の無説を顯し、二は無説の説は、説くとも盡くすること無きを明すなり。又亦前の偈は、無説の故に盡言なることを明す。此偈は盡言も亦離るることを明す、故に無盡と云ふ。三は前の大名稱を見ることを釋す。初の偈は無見の見を明す中に衆生は是れ見者なり、此も亦無なり。後の偈は見無

【二】七は法に迷ふ。前の中に、一は虚を執じて實と爲し、二は劣を取りて勝と爲す。後の二の中に、一は自心に迷ひ、二は眞空に迷ふ。次の四は解の徳を辨ず。一は法眼を求め、二は心に著無く、三は淨眼有り、四は能所見を離る。上の二句は無見即ち見、下の二句は見即ち無見、次の一は佛の、法に順じ生を攝することを數じ、後の一は功を推す。

【理に同じて情を起す】佛徳理に同じく凡夫の情量を起えたりと云。

【無説の説云云】佛の説法は無説の上の説なるが故にこれ無義なり、無義なるが故にまた言語を断ず。

【大名稱】法を以て人になづけていふ。

【無見の見】法の自性は見るものなきに、見るといふは、情に寄せて説くのみ。

【見識を待たざるが故に】破斥するを待たず、見即無見なるをいふ。

【二】第七に智慧菩薩の下。
【横に人法云云】人あり法ありと横さまに思慮を廻すこと。
【三】第八に眞慧菩薩の下。
【初の二は佛名の徳を歎す】前頌は

見を明す中、不壞とは、一は見、識を待たざるが故に。二は不壞の理を見るが故に。三は見の體即ち眞なるが故に。三に一偈半は、前の、佛を知ると及び説の益相を結す。四に一偈半は功を推す。

七に智慧とは、教を聞きて慧を生ずるが故なり。十偈を四に分つ。初の一は、自ら、教に順じ慧を生ずることを辨ずるが故に、其名を立つ。次の六は、衆生違理の損を明す。中に於て初の二は、横に人法を計するが故に佛を見ず。初は人、後は法なり。謂はく、身の實相を觀ぜざるが故に。後の四は、位に約して佛を見ざることを明す。初の二は凡位に約す。一は情適に就き、二は正理に就く。謂はく、生死涅槃相待の故に、俱に不可得なり。又是れ二乘の涅槃の故に。又、染分は是れ生死、淨分は是れ涅槃なり、變融の故に俱に不可得なり。後の二は二乘に約す。一は迷教に約し、二は取相に約す。菴提連、舍利弗を訶して、『我靜室の中に在るに、尊常に目前に現じ、仁を阿羅漢と稱し、常に隨へども見えず。』と云ふが如し。次の一は、勸めて理に順じ益を成ぜしむ。次の二は法を擧げて釋成す。謂はく、何を以てか有と執じ、佛を見ざるや。釋して云はく、法は實に是れ無なり、佛智を以て求むるに、不可得なるが故に。又云はく、明かに三世の一切の法空を了するを以ての故に如來と名く。是故に當に知るべし、若し相等を取れば佛を見ざるなり。

八に眞慧とは、法身眞理を見るが故に、又慧の、理に同ずるを眞慧と名く、十偈を二に分つ。初の二は佛名の徳を歎す。一は標、二は釋なり。後の八は佛の義の徳を明す。中に

【二】第七に智慧菩薩の下。
【横に人法云云】人あり法ありと横さまに思慮を廻すこと。
【三】第八に眞慧菩薩の下。
【初の二は佛名の徳を歎す】前頌は

見を明す中、不壞とは、一は見、識を待たざるが故に。二は不壞の理を見るが故に。三は見の體即ち眞なるが故に。三に一偈半は、前の、佛を知ると及び説の益相を結す。四に一偈半は功を推す。

七に智慧とは、教を聞きて慧を生ずるが故なり。十偈を四に分つ。初の一は、自ら、教に順じ慧を生ずることを辨ずるが故に、其名を立つ。次の六は、衆生違理の損を明す。中に於て初の二は、横に人法を計するが故に佛を見ず。初は人、後は法なり。謂はく、身の實相を觀ぜざるが故に。後の四は、位に約して佛を見ざることを明す。初の二は凡位に約す。一は情適に就き、二は正理に就く。謂はく、生死涅槃相待の故に、俱に不可得なり。又是れ二乘の涅槃の故に。又、染分は是れ生死、淨分は是れ涅槃なり、變融の故に俱に不可得なり。後の二は二乘に約す。一は迷教に約し、二は取相に約す。菴提連、舍利弗を訶して、『我靜室の中に在るに、尊常に目前に現じ、仁を阿羅漢と稱し、常に隨へども見えず。』と云ふが如し。次の一は、勸めて理に順じ益を成ぜしむ。次の二は法を擧げて釋成す。謂はく、何を以てか有と執じ、佛を見ざるや。釋して云はく、法は實に是れ無なり、佛智を以て求むるに、不可得なるが故に。又云はく、明かに三世の一切の法空を了するを以ての故に如來と名く。是故に當に知るべし、若し相等を取れば佛を見ざるなり。

損益を明し、後頭は昔を叙べて今説を成立す。
【偽和合する】等【二諦平等無二】を證る覺心、初めて起れば、眞安和合の相なく、唯一眞如平等なり。
【次の五は云云】經文の「實に於ては眞實」等を指す

【四】無上慧菩薩の下。
【境は龜妙云云】佛の所證の境は龜細を離るるをいふ

於て二あり。初の三は、佛の所知の二諦の境を會し、法身觀を成ず。一は標。謂はく、偽和合すること無きを以ての故に、俗は眞に等し。二は釋。三時に約して合相を求むるに得ず。三は觀の益を成ず。次の五は佛の境智を會し、能所行を絶することを成ず。中に於て四あり。一は境智を擧げ、二は能所を泯す。謂はく、境智の一も亦不可、二も亦不可なり。如を證して反つて望むに、如の外に智無し、故に覺も無し、亦智の外に法として取るべき無し、故に所覺も無し。是れ佛の所修の故に無一無二なり。三義有り。一は境に約して眞俗一二に非ず。二は智に約して虚照一二に非ず。三は境智に約して一二に非ず。準釋して知るべし。三は一二無きことを釋す。境智は合する無きを以ての故に。又上半は宗を標し、下は一法も自所依無きを以ての故に、衆と爲すことを釋す。一と爲すも亦闌り、兩ながら俱に無性なり、何んが縁合すること有らん。又藏性は縁に依れば、一を衆と爲し、亦諸法は藏に依れば、衆を一と爲すなり。五に無自性なるを無所依と名く。無所依なるが故に云何が縁合すること有らん。體用俱に泯するを以ての故に、作者及び所作俱に無と云ふなり。四に若能の下は觀の成益を明す。二句は標、四句は釋なり。謂はく、此不可得の處、是れ佛の所依なり。此中に能所を絶するが故に無依無覺と云ふなり。

(二四) 九に無上慧とは、慧は上相を離るるが故に。十偈を三に分つ。初は己が名を釋す。次の八は佛德を顯す。中に於て初の六は、佛の内證の德を辨す。謂はく、一は、境は龜妙を離る。修生の德は是れ龜なり。空に依るが故に不作なり。眞理は是れ細にして本有、悽望せ

【後の二】經の「諸佛は衆生を教へ」等の二偈。

【二五】第十に堅固慧菩薩の下。

【一】當品には廣く位相を明して解を生ぜしむることを知るべし。初に釋名。

【帶數釋】六合釋の一。帶數語の釋三の數を帶ぶれば帶數語、故に三種の藏なりと釋する

ざるなり。二は數無數を離る。此二は境に約す。三に照無照を離る。此は智に約す。四に一偈半は依無依を離る。五に一偈半は二の相を離る。此上は境智俱に融するに約す。後の二は佛の外化の徳を顯す。一は教へて法の無所住に住せしむ。二は眞身を見ることを得て、所見無きなり。後の一は功を推す。

十に堅固慧とは、神恩の境すべからざるを知るが故に。十偈を三に分つ。初の六は佛恩の深きことを擧ぐ。次の三は己が逢遇を慶ぶ。後の一は無盡を結數す。前の中に、初の一句は恩を標し、餘は恩の相を釋し顯す。一は物の爲に出現す。二は物の深苦を見る。三は苦を救ふことは唯佛のみなることを明す。四は樂を與ふるも亦佛。五は衆衆も亦能す。六は見聞して益を得。二に遇ふを慶ぶ中に三あり。一は己が益を慶ぶ。二は衆同じく益す。三は重ねて見智の益を慶ぶ。亦是れ己が所説を結ぶなり。後の一は是れ總じて上の九人の説を結す。

菩薩十住品第十一。初に釋名とは、菩薩は是れ人、十住は是れ法なり。謂はく、位不退を得るが故に住と云ふ。住法の圓なるべき依は、則ち十と説く、即ち帶數釋なり。又、此住法は是れ菩薩の所有、是れ有財釋なり。又菩薩の住、依主釋なり。又菩薩即ち住、持業釋なり。問ふ、「前の外凡の賢首品は、唯人の名に約し、後の十地の聖位は唯法の名に約す。此内凡三賢の中に於て、人法合して目くるは何ぞや。」答ふ、「前は位未だ成ぜざるが故に、人に就いて目と爲す。三賢は位劣なれば人法合せ稱す。聖位は顯著なるが故に、唯

を帶數釋といふ。
【内凡三賢】十住
已上の三賢の位を
凡とす。

【一】 當品の來意
を示す。
【二】 次に宗趣を
明す。
【三】 已上序説了
りて正説に入り四
品あるを以てこれ
を判ず。

法の名に約す。此も亦是れ施設漸く増すの相なり。『問ふ、』等く是れ人法合して曰けば、
何が故に十行十廻向は、別人の名を提し、此中には通の名を擧ぐるや。』答ふ、『賢位の中
に於て三有り。謂はく、下中上なり。此は下品に當る、劣なるが故に通名を擧ぐ。十行は
是れ中賢の次なるが故に、別名を提すと雖も、然も義の劣なるに約し、改めて華聚等と名
くるなり。廻向は是れ上賢勝るるが故に、本を稱して別して提して、金剛幢廻向と名くる
なり。』

二に來意とは、序の義既に彰る、正宗宜しく顯すべし、故に次に來るなり。

三に宗趣とは、十住の法を宗を爲す、此に依りて果を得るを趣と爲す。餘の義は本分の

中に説くが如し。

四に文を釋せば、正宗の中に就いて四品有り、二に分つ。初の三品は是れ當位の行徳、
後の一品は是れ勝進して後に越く。前の中の三品を即ち三段と爲す。初の品は位を明し、
次の品は行を明し、後の品は徳を歎す。又、初は是れ解、次は是れ行、後は徳を顯す。上
の明難等の三品に同じ。問ふ、何が故に前の會には、別して勝進して後に越くこと無く、
此中には有りや。答ふ、『此中に位成するが故に、前に勝るるが故に。又、前は信位無し、
總じて趣と爲す。作の方便なるが故に。今此には位成す、是故に別に後に進むの方便有
るなり。』問ふ、『若し爾らば何が故に廻向品の後に勝進無きや。』答ふ、『世間の位満する
を以ての故に須ひざるなり。又總じて前の諸位を攝して、證地の方便と作すが故なり。』

【五】正しく當品を釋す。

【初の中云】七分の第一、三昧分の釋。初に總じて入定の意を辨ず。

【文の中に四】以下經文を釋す。

【觀解善巧】觀解及び善巧の意。うち前者は眞理を觀念し解了するに名けたり。

【六】七分の中、第二加分の釋。

【七】十地論一四有並に諸佛能加の意を以て諸佛能加の由を示す。

此品の中に就いて七分有り。一は三昧分、二は加分、三は起分、四は本分、五は説分、六は顯實證成分、七は偈頌分なり。初の中に何が故に定に入るとならば、六の意有り。

一は三昧は是れ法體なることを顯すが故に、二は證に非ざれば説かざることを顯すが故に、三は此法は思量の境に非ざることを顯すが故に、四は機を察して藥を審にするが故に、

五は佛の加を受くるが爲の故に、六は諸佛の同説を顯さんが爲の故に。文の中に四あり。一に入定の人を辨ず。何が故に法慧入るとならば、是れ衆の首なるが故に、餘入るとき

は則ち衆を亂し、調伏せざるが故に。十住は法慧能く説くことを顯すが故に。二に己が力に非ざることを顯す。三に所得の定を明す。謂はく、佛果を簡ぶが故に菩薩と云ふ。觀解

善巧なるが故に方便と云ふ、即ち住法なり。方便多端なるが故に無量と云ふ、即ち是れ十種なり。四に法を納めて心に在くが故に正受と云ふ。

第二に加分の中に三あり。初に總じて能加を辨じ、二に加之の所爲を顯し、三に正しく加の相を明す。初の中に六あり。初に能加の佛の處所の遠近を顯す。二に能加の佛の數なり。

論に云はく、「何が故に多佛加するや。法及び法師の所に、恭敬の心を增長することを顯すが故に。又一切の佛、同じく説くことを顯さんと欲す」と。是を以て諸佛の神力を承けて、

此に於て法慧の説は、即ち是れ一切の佛の説なり。因果の二説に通ずるが故に。三に佛名の同きことを顯すとは、四意有り。一は得法の異らざることを明すが故に。二は彼菩薩、

諸の如來の己が名に固するを聞きて、重ねて歸悅を増すが故に。三は住中の因果、同

【乃能とは云云】
上地義記一本四九
右の文に「乃とは
是れ其希越の辭、
除悉く能はず汝獨
り堪へたり故に乃
能といふ」とある
による。

じきことを顯すが故に。四には但諸佛、此住門の中に於て、能加と爲りて顯現するを、皆法慧と名く、法力を以ての故に、法爾の故に爾り。四に此定を得ることを歎す、乃能とは是れ希越の辭、能く此三昧に入る者有ることを希ふを明す。問ふ、何が故に諸佛は、大衆の中に於て此定に入ることを歎する。答ふ、『彼法慧は默して斯定に入るを以て、衆所入是れ何なるを知らず、渴仰するに心無く、爲に説くことを得ざるが爲に、是故に諸佛は三昧の名を擧げて、衆に對して稱歎して、衆の欲樂を起すなり。五に善男子の下は、得定の所依を明す、謂はく、彼諸佛自ら説く、已に加を作す力に由るが故に、此定を得しむ。六に又盧舍那の下は、彼佛自ら加を作すの所由を釋す。三句有り。一は舍那の本願力に由るが故に、我をして加を作さしむ。『地論』乃釋に依るに、舍那過去に、曾て一の盧舍那佛有りて、一りの法慧菩薩に加して、十住の法を説かしむるを見る。當時能加の諸佛を、同じく法慧と名く。即ち願を發して、我成佛せば亦斯事有らんと願するに因りて、今本成の如し、是故に加するのみ。二は亦是れ舍那の現在の神力、相感じて同じく加す。三は是法慧自らの善根熟し、法を説きて衆を益するに堪ふ。上、諸佛を感ず、是故に同じく加す。略して大衆機感の力無し。後の會處に具に有り。又舍那の宿願、法根の深きことを顯す。謂はく、久遠より已來、此住法を修し、今時に於て、機の爲に宣說せんと擬するに、威神力とは正しく今時の傳授を顯す。此上は是れ化主の力、後は一に助化の力なり。因果俱に融じ、主伴合辨し、以て化の事を成ずることを顯すのみ。

【七】加の所爲を顯す。經に一汝をして廣く法を」といへる下。

【結とは】十住なり。【結文にて】菩薩の十住なり」とあるをいふ。【八】正しく加被の相狀を明す下。當經に一善男子、當

(七) 二に加の所爲を顯す。中に、初の句は總、次の九は別、後の一は結なり。同異成壞、準じて知るべし。別の中に、一は本有の佛性、眞慧を増長して佛果に向はしめ、不退を成ず。故に此は智に約するなり。二は在纏法界の眞理を開解して、顯現することを得しむ。此は境に約するなり。又、法界の理を開示し解釋するが故に。三に衆生の性類を剖析して、十住等の位に在りて、各差別あることを辨ぜしむるが故に、又、五性の差別を知らしむ。

此は後智に約す。又、衆生の界は即ち如来藏なり。分別とは、了因と爲すが故に、又是れ解釋の故に、又一衆生の處に、即ち一切衆生及び一切諸の法門等有ることを、分別するが故なり。四は一乘に約す。治滅の性に即して、三障四障使習等を滅するが故に。三乘は外道の我執上心の黑障を除く。此は斷徳に約す。五に無明の障盡きて智、眞境に冥するが故に、入無礙境と云ふなり。又因陀羅の境に入るが故に、無礙と云ふなり。此は驟進入果の境に約す。六に巧に果智に入り、相攝總持す、此は果智に入るに約す、即ち密智に入るなり。七に眞俗を照すを明す、此は智用に約す。八に衆の生熟多端なるを知り、又同如を知り、又一根即ち一切根なることを知る、根欲性海等の如し。九に根に稱ひて法を説き、根性を住持して差失せざらしむ。又、行を持して失せず、義を持して散ぜず、又法を持して滅せず等なり。結とは、謂はく、廣く何の法を説いて此等の事を成ずる、謂ゆる菩薩の十住なり。

三に加相の中に三業の加あり。口加は説を勧めて以て辯を増し、意加は冥被して智を益

に佛の神力一等といへるこれ。

す。身加は頂を摩して以て威を増す。何が故に先に口加する。前の語の便に因るを以ての故に。次に意加の中に二あり。初は加、後は釋なり。加の中に十句あり。初の一は總、謂はく、大家の中に於て說法無礙ならしむ、即ち無礙解なり。九句は別して無礙を顯す。同異成壞之に準すべし。一は住著無きが故に無礙、即ち無著辯才なり。二は説時不斷なり、謂はく、名義を忘れず、即ち任放の辯才にして説くに次を待たず、言辭斷せざる等なり。三は説時に無明を雜へず、正理に乖かざるを以ての故に。四は所説の理決定するが故に、又異論壞すること能はざるが故に。五は善淨にして過無きが故に。謂はく、名等の惡を求めざるが故に。六は一切の法に於て能く隨順して説くが故に。又一切の義に達するが故に。七は下位を超過するが故に。又餘は能越無きが故に。八は説くに厭倦無きが故に。又慢を離るるが故に。九は言に退失無きが故に。又言に退の理無きが故に。又言は退屈せざるが故に。下は偏加の所由を釋す。諸佛に力有り、慈悲有り、何が故に、唯法慧に加して、餘に加せずとならば、釋するに二因有り。一は得定の力を以ての故に。二は法爾の故に。謂はく、水の流れて法爾に下に趣くが如く、今此も亦爾り。凡そ能く十住の法を説く人有れば、理數此の如し、諸佛の神力、流聚して中に在り、故に云ふなり。身加摩頂とは、其威を増するが故に、定に従ひて覺らしむるが故に、安慰して説かしむるが故に。又彼諸佛等、此に來至せず、手も亦長からずして此頂を摩す。又諸佛の手皆其頂を摩して互に相礙せざらしむ、是れ法界緣起不思議の法なり。

【九】第三に起分經に「其頂を摩し下。已りて」等といふ

【一〇】第四に本分これ正しく十住を説く下なり。

【一】以下種性の義を釋するに、一釋名、二、出體、三、諸門分別の三門を作る。

(九)第三に起分とは、四の意有るが故に。一は已に内に證する法の故に。二は已に勝力を得るが故に。三は說時至るが故に。四は定に言說無きが故に。是故に須らく起つべきなり。前の初會は、普賢、果法深細なるが爲の故に定中に説く。又普賢の自在を顯すが故に。此は四行を明すが故に、出に寄するなり。

(一〇)第四の本分の中に二あり、先は證本にして後は教本なり。亦是れ先に體、後に相なり。初の中に、先に前後の諸位に對して料簡せば、何が故に信の中に、此義無しとならば、未だ位を成ぜざるを以ての故に、此は是れ位體の故に。何が故に此を種性と名け、乃至十地を善決定と名くとならば、此位は最劣なるを以て、種に約して名と爲す。十行は次に増すれば、種に依りて發する所の、業行に約して名と爲す。十廻向は更に増するが故に、行後の大願に約して名と爲す。前の諸行を廻して正證に向ふが故に、十地は已に眞證を得ること必然の故に、善決定と名く。此等は並に是れ位中の通體、位に隨ひて漸増して越階降有り、是故に十住十行に大善決定無きは、是れ劣の故なり。又、三賢の中、下なるを以ての故に、最劣の故に、未だ此大用を辨ぜざるなり。又自利増するを以ての故に、又種に約して未だ現行せざるを以ての故に。

(一)種性の義略して三門と作す。一に名を釋せば、種は是れ因の義、性は是れ體の義なり。又、性は是れ族の義、謂はく種族なり。又、姓は是れ類の義、謂はく種類なり。二に體を出すに二有り。一は性種性、二は名種姓なり。性種に二門有り。一は有爲無常門に就く。

【有爲…云云】始
 教門の義なり。瑜
 伽論三十五の四左
 の文。
 【無爲…云云】終
 教門の義、寶性論
 四の八の文。
 【習性の有無】唯
 識論二の十四左に
 述ぶる種子説、即
 ち本來具有、新に
 熏習、新古合成の
 三ありとするこれ

「論一」に云ふが如し、「六處殊勝無始より展轉して法爾に得る所なり」云云。二は無爲常
 住門に約す。「寶性論」に云ふが如し、「眞如性とは六根聚（經）の中に説くが如し」云云。習性
 の有無とは、一に護月に約せば唯本性。二に勝軍は唯習性。三に護法は俱に二。四に如緣
 起俱に難す。三には諸門分別に五門を作る。一は性習の前後に約し、二は五性に約し、三
 は六性に約し、四は位に寄せ、五は諸教並に別に説くが如し。又性起品に云はく、「菩薩摩
 訶薩、自ら身中に悉く一切の諸佛菩薩有り」と知る。何を以ての故に。彼菩薩の心は一切
 の如來菩薩を離れざること、自心の中の如し。一切衆生の心中も亦復是の如し。無量無邊
 にして、處として有らざる無く、破壊すべからず、思議すべからず」と。文中の六句の、
 初の一句は總、謂はく、五種性の中に、餘性を簡去するが故に、菩薩種性と云ふ。下の五
 句は別して種性の義を顯す。一に甚深とは是、幽遠の義、一は有爲性に約す、後際を徹窮
 するが故に。二は無爲性に約す、眞如法性は離相離性の故に。三は用に約す、勝徳を出
 生して、盡すべからざるが故に。四は佛果に徹同するが故に。又、照窮遠なるを深と曰
 ひ、畢竟して底無きを甚と曰ふ。幽玄窮無きが故に甚深と曰ふ。二には、廣大は是れ包
 含の義、普遍の義、無邊の義なり。前は則ち深くして底無く、此は則ち廣くして岸無し。
 此は有爲無爲能生、所生の因果等の法に通ず。準例して之を顯せ。三には、法界と等しと
 は、是れ勝善の義なり。謂はく、大白法界等の故に、又、人法、教義、因果、理事等の、
 一切法を具足するが故なり。四には、虚空と等しとは、是れ因善の義なり。謂はく、無常

【二】 本分の中、
 教本を釋す。經に
 「諸の佛子、菩薩摩
 訶薩の十住行は」
 等いへる下。
 【同説といふ】 經
 に「諸佛の説きた
 まふ所」といへる
 を指す。
 【三】 十住の義を
 釋す。

愛果の因を成ずるが故に、虚空の如し。地前に在るを以て無常の果因を略す。又亦上の深
 に由るが故に法界に等しく、廣の故に虚空に同じ。或は俱に二に通ず。或は上と別なり、
 知るべし。五には、是れ不怯弱の義なり。佛種の中より生ずるを以ての故に。亦是れ種性
 の名義を釋す。又亦諸因は、菩薩性の中より生ずることを得。又是れ上の諸句を釋す。謂
 はく、何を以て、深廣にして法界等に等しと、知ることを得るや。釋して云はく、是三世
 の種種性は、能く一切の菩薩等を、生ずるを以ての義なり。二に相を顯す中に三有り。初
 は數を標示して諒を引く。謂はく、三世の佛果、皆十住の因に由りて、感せざることを無し。大
 王の路は理として、岐徑無きが如くなるが故に、同説と云ふなり。二に名を列ぬとは、謂
 はく、一周の圓以て十種を明す。三に説を結す。

此中の十住の義、略して十門と作す。一に名を釋し、二に體を辨じ、三に所依の身を明
 し、四に所行の行、五に所觀の境、六に所離の障、七に所成の德、八に所寄の法、九に所
 攝の位、十に所成の果なり。初に名を釋するに二有り。一は總名、前の釋の如し。別の中
 に初とは、謂はく、外凡に依るに、十千劫より來、信善根を修し、方便の行滿じて大菩提
 に於て、決定心を起し、位不退に入るが故に初發心と云ふ。初發心即ち住、是れ持業釋な
 り。此は『起信論』の中の、信成就發心に當れり。二は此心を精練し、便ち業を離れて明
 淨なるが故に、治地と云ふ。謂はく、心地を熾治するなり。三は妙に空有を觀じて、正行
 薰修するが故に修行と云ふ。四は佛家に生在し、種性は尊貴の故に、生貴と云ふ。謂はく、

【二四】十住の特性を明す。

此は無漏の位に寄當するが故に。五は巧、眞に滯らず、悲を起し物を愍み、眞を帯し俗に隨ふ。此二、合觀して邊を離れ、巧に備るが故に、具足と云ふ。此は五地合し難し、眞俗を能く合するに同じ。六は無二の法を觀じ、既に漸く純熟し、佛等を讚毀するを聞いて、心傾動せざるが故に正心と云ふ。心は即ち是れ正の故に正心と云ふ。又正は是れ境、心は是れ智なり。心正理に住するを以ての故に、正心と云ふ。七は止觀雙運して、縁壞すること能はざるが故に、不退と云ふ。此は七地變行の相に同じ。八は三業光潔にして、染を離ること童の如し。童行性成、物能く阻むこと莫きが故に、眞と云ふなり。此は八地無功用行に同じ。九は機に應じて善く説く、法王に紹嗣するが故に、子と云ふなり。十は住位満足して智身を成就し、諸佛の法水、其頂に灌ぐを以ての故に、頂と云ふなり。若し圓教に依れば、此灌頂の位の滿に、即ち成佛して更に十行等無し。下の文の、海輪比丘の處に説くが如し。若し三乘教は則ち此の如くにはあらず。但是れ相を解して未だ眞を證せざるが故に、名を得ること三有り。謂はく、第四八九十は喻に従うて名と爲す。第七は離過に約して稱を受く。餘は並に功能に約して、目と爲すこと知るべし。

二に體性を明すとすは、三門を作る。一は所依に約す、即ち無量の方便三昧を以て體と爲す。此定に依りて十住を説くを以ての故に。下の論に云はく、「此三昧とは是れ法體の故に」と。二は本に約す、即ち前の種性甚深眞俗二諦を以てす。三は能縁に約す、悲智の二行を以てす。餘行の眷屬は皆此所攝なり。又眞俗の境俱に融じ、悲智唯一なり。此二復圓に俱

【五】第五に説分
これ當品の正宗。
まづ初に總じて分
齊を判す。

【並賢の位相】一
乘別教を以て三乘
に從へて説くが故
に住向地の差降
あるをいふ。

【六】隨釋十段の
中、初に初發心住
の釋。釋の一諸の
佛子：初發心住な
るといへる下。

に融じて、法界無障無礙、具德自在なり。是れ其體なり。此は圓教に約して辨す。餘門は

第五に説分とは、十住に二分有り。一は果分圓融不可説なり。二は因分、説に隨ひて二

分行り。一は普賢の白體行に約し、二は普賢の位相に約す。此に二有り。一は阿舍位、此

品の説の如し。二は證位、十地品の説の如し。今此は正しく阿舍位を説く。中に於て二有

り。初に攝體の位を明し、後は隨相の位を辨す。初の中に十住を釋して、即ち十段と爲す。

一一に皆二有り。謂はく、先に標、後に釋なり。釋の中に皆二あり。初に修行、是れ其別

相なり。一一の住の中に各一行を修するを以ての故に。二に觀解、是れ共同相なり。諸

住皆解悟の相有るを以ての故に。前の中に各二あり。初は自分の行、後は十法を學して

勝進行と爲す。勝進行に各二あり。先は、正修、後に何以故の下は、修の意を釋す。

其中に第一第十の文、相加ふることは、初は行の本と爲す、多縁に賴るを以ての故に。後

は位滿と爲す。德深廣なるが故に。又釋す、一一の中に皆二有り、謂はく、標と釋となり。

釋の中に皆三有り。初は入住の行を明し、二は十法を學するを淨住行と爲す、三は住滿

して果を得。地論に準するに、諸地に皆因と體と果と相即すること有り。入住を因と爲し、

淨住を體と爲し、住滿を果と爲す。並に知るべし。
今、且く前に依りて釋せば、初住の中に、先に名を標し、後に義を釋す。義を釋する中
に二有り。先に別行の中に二有り。先に自分、後に勝進なり。前の中に二有り。先に行本

【七】所得を釋するに先づ十分の差を教ぶ。

【漏盡】凡夫、眼等の六根門より煩惱を漏盡す、故に三乗の極果に至りて斷盡するが故に漏盡といふ。【二八】勝進行を釋す。諸佛を供養する等の十これなり。

を明す。謂はく、發菩提心を十住の本と爲す。但、此心を轉じて漸く増勝するが故に、後の諸住を成ずる故なり。二に所得、前の中に初の六句は發心所依の縁を擧げ、次の一句は所發心の體を明す。次の一句は發心の所求を明し、後の一句は不退還を明す。又釋す、初の六句は發を釋し、次の句は心を釋し、次の句は菩提を釋し、後の句は住の義を釋す。前の六句の中に、二處に説法を聞くとは、初は餘人の説を聞き、後は佛説を聞く。又、初は略説、後は廣説なり。又、初は因法を説き、後は果法を説く。又、七縁の發心は、準じて辨ぜよ。又一向不廻とは、外凡に簡異するなり。

二に所得の中に、一には、分は是れ因の義なり。謂はく、初發心に十力果法の因を、成ずることを得るに因るが故に、此は始教に約して辨ず。二には、分は是れ未圓の義なり。謂はく、入住の不還に由りて、始めて佛家に生じ、佛體の分を得るが故に。謂はく、十力に於て分に隨ひて得。此は終教に約して辨ず。三には分圓無礙の故に、分を得れば即ち圓を得。但、普賢門の中に就いて辨ずるを以て、是れ因にして果に非ず、故に分と云ふなり。中に於て漏盡も亦分に得とは、教に準じて之を知れ。又、此十力、小乗の中には佛果に至りて始めて得、三乗の中には地上に始めて分に得。一乘は入位に即ち得るが故なり。【二八】勝進の中に二あり。先に正しく辨じ、後に釋成す。前の中に十句有り。一は諸佛を供し、二は諸の菩薩の、能く自樂を捨てて、苦を忍んで果を求むるを教す。三は勝妙の法を以て諸の衆生を化し、彼心をして、凡小の位に墮せしめざるが故に護と云ふ。又

【二】に同相の中云
【釋】經文に「所聞
の法あれば、他に
由りて悟らず」と
いふ句、これ十住
各にあり。

【二九】 第二治地住
の釋。

善根を護り增長することを得しむ。四は下の頌に準ずるに、第三の常數賢聖に當れり。此に親近と云ふことは、此は自利に約し、頌は利他に約す。謂はく、近きて常に歡するなり。五は淨妙の法を數す、魔等壞せざるが故に知んぬ、不退なり。六は佛の功德を以て、菩薩を安立するが故に修と云ふ。此は頌に順す。七には巧に衆生を化して、佛を見ることを得しむるが故に、歡美生諸佛前と云ふ。八は薄く三昧を修し、衆生を教ふるを以ての故に、方便と云ふ。九は妙法輪を轉じ、生死輪を滅するが故に云ふなり。十は生死の苦類の爲に、清涼の歸處と作る。又釋す、九に無常の苦を離れしめ。十に其をして常樂を得しむと。此十は並に下の頌文に準じて之を知れ。二に意を釋する中に、先に後、後に釋す。徴して云はく、菩提心を發し已りぬ、何が故に復須らく此十行を學すべき。釋に三義有り。一は此心をして轉増勝ならしめんと欲するが故に。二は堅固ならしむるが故に。三は果を成ぜしむるが故に。又一は、自分をして堅固ならしむ、二は勝進轉増す、三は終に佛果を成ずるが故に須ふるなり。二に同相の中に、悟は必ず縁に頼ることを明すが故に、有聞開法と云ふ。解は内より發するが故に、不由他悟と云ふ。然も他の義に三有り。一は小教、二は心外、三は性外なり。自解に亦三有り。前に翻じて知るべし。故に下に、一切の法は他に由りて悟らずと知ると雖も、善知識を求めて厭足有ること無しと云ふ。下の諸住の中に、位の漸増に隨ふ義、皆此に同じ。

二住の中に、初に自分の内の十心とは、二義有り。一は一衆生に隨ひて、即ち此十心を

【二に勝進の十行】
經に「諸の弟子」

【非時に請問せず】
請問するに時を辨
へてなし、何時に
てもなさざること

【三〇】第三修行住
を釋す。

【無常とは…無し】
これ一切法無常の
義を標するなり。

起し、以て無盡を顯す。二は十心の別異の相を辨ぜんが爲の故に、十種の衆生處に於て起すことを明す。一は怨憎の衆生に於て報を加ふることを念はず。二は受苦の衆生に於て、三は資具に乏しき衆生に於てし、四は不善の衆生をして、善行に住せしめんが爲の故に。『論』に、安は因處、樂は果處と云ふ。五は善因樂果を得る衆生に於てし、六は有流の衆生に於て、度して發心せしむ。七は初發心の衆生に於てし、八は菩薩の道を修すれども、少しく己より劣れる衆生に於て、攝して己に同ぜしむ。九は行の、己と齊しきをば、之を推して師に同ず。十は徳の少しく己に過ぐるを、敬して佛に同ず。此十は並に第二地の集果の中に釋するが如し。二に勝進十行の中に、初の一は總なり。謂はく、若し多聞ならずんば、行所依無し。又何を以てか生を化せん、故に須ふ。餘の九は別なり。一に多聞を求むるの意を標す。又是れ己が欲を捨離す。二に善友に近づく。三に其教に順ず。四に非時に請問せず。五に不得の法を畏れず、又深法を畏れず。六に深義を解す。七に正教に達す。八に教義の中に於て修行の法を擇取す。九に法に依りて正しく修し、障を離れ徳を成ずるが故に、不動と云ふなり。下に釋して云はく、「此十行を以て慈等を修治し、更に増廣ならしむ」と。故に須らく修すべきなり。

三住の中に、初の十は自分、是れ護煩惱の行なり。謂はく、是中に行をして不住ならしむるが故に、總じて無常の義を明す。初の一は是れ總なり。無常とは是れ、物として常と爲すべき無し。謂はく、自性、實の無常等を成ぜず、三性も之に準ぜよ。二に苦、謂はく、

【自性・成ぜず】

小乗者流のいふ如
き無常に非ず、不
生不滅こそこれ眞
の無常の義といふ

【三性之に準ぜよ】

遍計、圓成實の二
性は不生不滅、依
他起性は生滅ある
を無常の義とす

【五蘊空を洞達す】

五受陰苦は、空を
以てその體となす
が故に、此に洞達
したるを苦を知り
たりといふ

【三無性の眞理空】

空も亦空諸法は畢
竟じて無所有なり
と達したるを眞空
といふ

【護小乗の行】

諸
界を觀察して破邪
顯正し、而も小乗
に墮せざるをいふ

【分別す】

即空即
有と知るをいふ

【三】 第四生貴住
を釋す

五蘊、空を洞達するを、苦と爲す等なり。三に空、謂はく、三無性の眞理空等なり。四に無我、謂はく、二我無し。又我と無我とに於て不二なる等なり。具には掩捷遮の説の如し。五に因縁に繫屬して、自ら所在有ることを得ず。六に、世法は妄礙にして、惡不淨の相なり。又速に滅するを以て、樂所以に逮ばず。七に成ずるに所集無ければ、壞するに所散無し。八に實に當に名くべき無し。又須臾も住することを得ず。九に相は有り體は無きを虚と曰ひ、虚を執じて實と爲るを妄と稱す。又實無きが故に虚、實と許るが故に妄なり。十に世法は速に滅す、護ひ心を加へて防護すとも、亦住せしむること能はず。又釋す、緣の中に無力の故に無精勤と云ひ、無力に由るが故に和合無く、和合無きが故に堅固無きなり。此十の無常は、三地の論の中に釋するが如し。後の十句勝進の中は、是れ護小乗の行なり。中に於て初の一は是れ總なり。謂はく、衆生の假名不實等を分別し、又種類の差別を分別する等なり。餘の九は是れ別なり。一は衆生の惑業業淨法界の差別を知るが故に、一は衆生依處の別を知る。次の四は、四大衆生を成ずる別を知る。次の三は三界を知に、一は衆生愈細の別を明す。又釋す、第三の句は總じて依報を知り、次の四は器の體を出り、衆生愈細の別を明す。又釋す、第三の句は總じて依報を知り、次の四は器の體を出し、次の三界は器の相を辨す、皆即空及び差別等を分別す。釋の中に徴して云はく、前に既に無常空等を觀す、何が故に復此の如きの分別を起すや。釋して云はく、空に即して事を分別するを以て、方に慧をして明淨ならしむるが故なり。

四住の標の中に、名を釋すること知るべし。『法華』に云はく、「佛口より生じ、法化より

【業に黑白】黒業とは、闇黒不淨の苦果を招く業。白業とは總じて善業をいふ。これ清白無垢の果を感ずるが故に。

【生死に七種】分段三種、變易四種なり。

【二】第五に具足方便住。

【前ノ第二】此心を發起す。第二住の自分第七守護衆生心。

【八難】聞法に障礙ある八難處。八無暇ともいふ。三惡道及び北躰單越長壽天、盲聾瘖啞

生ず」等と。初の十は自分、四地の中の十種の法智に同じ。初の三は心を攝して理に入り、以て止行を修す。一は心を佛に證し、二は法の源底を窮め、三は安心、彼に契ふ、此を以て出世の位に寄當するが故に、三寶に於て不壞の淨信を得。後の七は事相に照達して、以て觀行を修す。一に所化を分折するに聚類多端なり。二に機に應じて、利を現する差別一に非ず。三に衆生の依報染淨の類異なる。四に業に黑白の不同有り。五に果に苦樂の異有り。六に生死に七種の差別有り。七に涅槃に二四五の異あり。皆此等に於て分折し、空及び聚類の差別を顯す。二義之に準ぜよ。又釋す、七の中、一は總じて正報の染淨を擧げ、次の二は依報の染淨、次の二は因果の染淨、次の七は分位の染淨なり、知るべし。後の十の勝進の中に、初の三は尋思簡擇、次の三は擇び已りて正修す、後の三は修し已りて成滿す。末後の一は總じて無二を結す。又釋す、初の三は教法、次の三は行法、次の三は果法、後の一は理法なり、微釋知るべし。

五住の中に、初の自分の内に、初の一は總、餘の九は別なり。前の第二住には此心を發起す、此住には善根を擧げ、所爲の漸く熟することを顯すが故に、別なり。九の中、一は善行を修せしめ、二は樂果を得しめ、三は樂に著せしめず、四は出道を修せしめ、五は所生の處をして、八難等を離れしむ、又惡業等の難を離れしむ、六は畢く分段變易等の苦を出でしめんと欲す、七は示すに正法を以てし、不信及び疑を滅せしむるが故に喜ぶなり。八は授くるに三學を以てし、控御し造修す。九は學果を得しむ。又七は智、八は定、十は

世智辯聰、佛前佛後。
【又七は：斷果なり】更に後三を釋す。十の字は九の誤か。

【三】第六、正心住を釋す。

斷果なり。勝進學の中に、一は對治無きに由るが故に、生死無邊なり。二は此は去來に約するが故に二句と爲す。三は現在の苦に約す。四は十方に約し、又體性に約し、又根欲に約す。五は下の二界に約し、六は無色界に約す、又は類多に約し、七は所執の性に約し、八九は依他性に約す。謂はく、初の句は依緣、後の句は無實なり。又初は無性、後は似有なり。十は圓成實の中の、空如來藏に約して辨す。又、七は無相に約し、八は無生に約し、九は無性に約し、十は總じて三無性を結す。下の釋の中に無染著に二義有り。一は既に善根を以て、衆生を救攝す。學して衆生無邊等を知るを以ての故に、限分等の心に著せず。即ち是れ廣常の二心なり。二は學して空等を知るが故に、執著せず、實に是れ不顛倒の心なり。此所學に由りて、前の慈等をして、方に理に順じ、行増すること得しむるが故に、須らく學すべきなり。

【三三】六の自分の十の中に、初の四は所敬の三寶に約して、平等觀を修す、次の三は所悲の衆生に約して、平等觀を修す、後の三は法界を知るに約して、平等觀を明す。讚毀の辭は、皆緣によりて起りて、同じく無自性なるを以て、無性の理は是れ此觀の境なり。是故に動ぜざるを正心住と名くるなり。又、佛勝德を具するに、理宜しく褒讚すべし。故に歎ずるを聞きて動ぜず。若し佛に情有りと執せば、既に正理に非ず、故に毀を聞きて動ぜず。又、毀相は盡さしめ、讚の理は顯はさしむ、故に皆不動なり。是故に、『商主天子經』に云はく、「又復文殊師利に問ひたまはく、若し復人有りて、汝が所説を毀らんに、彼

【此位の中云云】
 此下、示現退を辨
 ず。示現退とは、
 起信論義記下末十
 二右に説く所、七
 住以前を退分と名
 け、善知識に遇は
 ざれば善提心を退
 すといふ、而もこ
 れ實に退するに非
 ず假説なる意。

將に何をか云はん。答へて言はく、「當に涅槃に向ふべし」と。又問ふ、何に緣りてか是の如
 きの説を作す。答へて言はく、「一切、不毀の語言有りて、能く聖解脱の中に至ることを得
 る者無し。所以は何ん。其聖道の中に、名字、章句、語言の説くべく、示すべきこと有る
 こと無し。若し不信の者は、彼等當に解脱せざるべし。」又問ふ、「何に緣りて、是説を作
 す。答へて言はく、「已に解脱を得、復解脱を得べからず。又法界は證に隨ひて淺深有り。
 故に量無量と云ふなり。世界多の故に、法界成壞と云ふ。故に頌の中に世界成壞と云ふな
 り。空不空を有無と爲すなり。此十種の決定心を得るに由るが故に、縁の逆順に於て皆
 動すること能はず。此位の中に於て、示現退有り。初心懈慢等を引くが爲の故に、舍利弗
 法才王等の如し。是故に第七に方に不退と名く。勝進の十の中に、初の三は、三無性觀に
 約し、四は惑業に約し、五は果報に約し、六は能現に約し、七は所現に約し、八は無體、
 九は實を現じ、十は緣集なり。又釋す、此十は皆展轉して疑を釋す。疑とは、所執の法の
 無相を聞きて、即ち依他有と爲すと謂ふ。釋すらく、縁に従つて無性と。復疑ふ、既に
 依他無し、在纏の眞如、豈修纏を須ひざらんや。釋すらく、性淨の故に修を待たざるな
 り。復云はく、眞若し性淨ならば、煩惱業等豈斷除せざらんや。釋すらく、無所有の故
 に。疑つて云はく、若し爾らば、何が故に現に依正の果報有るや。釋すらく、眞に依りて
 實ならざるを以ての故に。復云はく、若し世法實ならずんば、眞理は諸法の與に依と作る。
 此は是れ有なるべし。釋すらく、虚空の、色等の與に依と爲るも、然も自體は有に非ざる

が如し。復云はく、所依若し無ならば、能依の諸法は應に有なるべけんや。釋すらく、依
 他は自性無きを以ての故に。復云はく、若し爾らば業果を壞すべし。釋すらく、如幻の故
 に。復云はく、若し爾らば、世人何んが是れと見ずして是れ實と見るや。釋すらく、夢
 に在るを以ての故に。復云はく、夢みる者は夢の境を見、悟むる者は則ち見ず。世法は爾
 らず、凡聖同じく見る。釋すらく、響の、長幼俱に聞くと雖も、然も了了別なるが如
 し。何以故とは、問うて云はく、前に十法を聞きて、心定んで動ぜず。已に正理に順ず、
 何ぞ須く更に、是の如き等を觀すべきや。釋して云はく、更に深く入りて後位の不退忍
 を得しめんと欲するが故に。

【二四】第七不退轉
 住を釋す。初は前
 住に對して勝れた
 るを辨ず。
 【又前位は云云】
 此下、前後位に對
 して、漸熟の相を
 示す。

二四に不退轉の自分の中に、心堅不轉とは、前の正心と何の別ぞ。釋すらく、前の正心は
 理に入る、今は理事退せず。念念乃至にして、變て現前するを以ての故に、七地に同じし。
 又、前位は事を會して理に入るべし。此は俱行し、後位は理従り事に向ひ、漸く純熟す
 るを以ての故なり。是故に前位は但三寶等の處に於て、讚するを聞きて喜ばず、鍛るを聞
 いて憂へず、猶未だ有と無とを聞くに堪へず。勝れざるを以ての故に。此中には、有無の
 利害を聞きて、轉深く堅固にして、動ぜざるが故に前に過ぎたり。中に理に約するを無と
 爲し。事に約するを有と爲す。是有は無に即するの有なるを以ての故に、有を聞くも亦無
 を得て、有の爲に動ぜられず。無は是れ有に即するの無なるを以ての故に、無を聞くも亦
 有を得て、無の爲に動ぜられず。變行を得るを以ての故に爾なり。又、三性に約して以て

【中に理に約す云
 云】有無の言を釋
 するに、初は相即
 の旨を述べ、次に
 三性に約して釋す

【不出生死】第五
句中の言を釋す。
【又三世同如】非
ず。第十句の中
の句なり。
【勝進の中に】勝
進を釋す。
【有無無礙に十】
遍計に三、依他に
三、圓成に四義を
開き有無無礙を明
す。

【五】第八童眞住
を釋す。佛の十身
の靈相一時に具足
するをいふ。

有無を釋す。又、不生生死とは、出づべき無きを以ての故に、大悲捨てざるが故に。又、三世同如の故に、一相差別を壊せざるが故に一に非ず。勝進の中に十法五對有り。一は一多相即、二は教義相依、味は是れ教なり。三は有無無礙に十有り。一は所執の理無を非有と爲す。即ち是れ情有の故に有と爲す。二は此理無有るが故に非有是有なり。三は理法に約す、謂はく、情有に非ざれば是れ理有なり。四は依他は似有の故に非有、此有有るが故に、以て有と爲す。五は依他の無生を非有と爲す、似有を壊せざるが故に有と爲す。六は此無生有るが故に之に準ず。七は眞如は離相の故に非有、此眞有るが故に有と爲す。八は空眞如を非有と爲す、即ち是れ空を有と爲す。九は無性の性を非有と爲す、此性有るを有と爲す。十は染に隨つて隠るるが故に非有なり。性本淨の故に有と爲すなり。有是非有とは、前の十義に翻じて、則ち是を應に知るべし。四は相非相無礙、五は性非性無礙、並に十義を具し、逆順前と同じ。準じて知るべし。又釋す、後の三對は、三性三無性に約す。次の如く應に知んぬべし。所學を釋する中に、雙行無礙、善巧圓滿ならしめんと欲するが故に、具足等と云ふなり。

(二五五) 八の仕の中に、謂はく、理に従ひ事に向つて而も理を失はず、故に心得安立と云ふ。自分の中に、初に三業無染は、是れ童眞の體、眞理を失はざるを以て、事をして清淨ならしむ。是れ自利の行、餘は是れ利他の行なり、三業淨なるを以ての故に、能く愛生自在なり。信等の心を知り、心に従ひて欲樂を起し、欲を習ひて性と成り、性に依りて業を造る。

【器】 器世界。

並に第九地の十欄林の處に説くが如し。又、發心功德品の器世界二十劫成等の如し。又、集の故に成じ、散の故に壞す等を知る、神通自在は、總じて三業の勝用を結す。勝進の中に、初の六は外器自在、後の四は自身自在なり。又釋す、初の七は、廣く廣大の三業を知ること、を學するを明し、後の三は、自在の三業を明す。初の中に先に意業を明す。初の中に一は總じて器を知る。二は己が能用を知る。三は動ずと雖も、願力を以て持して壞せざらしむ、又持して常に用ひしむ。四は其れ即ち眞等と觀す。又、染淨の差別を觀じ、將に往詣せんと欲するが故に。五に身業を明す。謂はく、己が往くべき處を觀じて之に詣す。六に但次第に往詣するのみに非ず。亦能く一時に遍く至るなり。佛刹は定んで佛有るなり。世界は有佛無佛に通ずるなり。七は語業を明す。謂はく、若し有佛の處に至つては、能く佛に妙法を問ふ。若し無佛の界に至つては、能善衆難に答ふ。別本の中は後の釋に同じ。八に自在の身業を明す。謂はく、但一身、多世界に至るのみに非ず、亦能く變化して、復多身と作り、法界の身業を成す。九は語、十は意、皆法界自在の勝用を成ずること、知んぬべし。下の微釋の中に、凡そ一切の法に於て、則ち巧用自在を得、圓滿成就すること、を明す故なり。

【二六】 第九法王子住を釋す。初發心より第四住までは入聖胎、第五住まで第八までを長養聖胎と名け、愈本

九住の中に善慧地に同じ。自分の内に於て、一は六趣を解す。即ち是れ生行欄林なり。二は是れ使行欄林、三は是れ習氣行欄林なり。上の三は所化、四は是れ能化の方便智なり。五は是れ智成就して、法業を解す。六は化儀を知り、法師の威儀を示す。七は化處を解す。

住にて相形具足して田胎するに名く【眞際】至極の義にて、空平等の眞性をいふ。【勝進の中に】勝進行を明す。【住處とは八有り】初五は通相の三身門に約し、後三は一乘十身門に約す。【四威儀】行、住坐、臥、これに各各規則ありて威徳を損せざるをいふ。

【三七】第十灌頂住を釋す。菩薩既に佛子となり佛事を成ずに堪ふれば、佛智水を以て灌頂す。

謂はく、所化の衆生の住處なり。八は化の時を解す。謂はく、所化の根機の生熟の時等、故に三際を知るなり。九は眞際を動ぜずして諸法を建立す。十は假名を壞せずして諸法實相を示す。勝進の中に、既に法王の子爲るが故に、法王の住處等を知ることを學すべし。中に於て、一に住處とは八有り。一は法身に約す、住處無し。二は智に約す、眞理に住す。即ち住は所住無きなり。三は報身に約す、淨土に住する等、四は行徳に約す、四梵三空及び慈悲殿に住する等。五は化身に約す、摩竭國に住する等。六は十佛に約す、國土海に住す。七は華藏界に住する等。八は内に無障礙法界に住す。二に善く外の化、四威儀を現することをしる。謂はく、衆生に隨ひて行すべきには、即ち行する等なり。三は善く安立法王の處を知るとは、謂はく、機感及び悲願に由りて起すが故に。身土方に現す、故に安立と云ふ。別本には興立と名くるなり。四は巧に眞理を證し、又巧に應機に就く。五は證に依りて説を起し、又機に就きて判別す。六は佛智水を以て、得位の菩薩の頭に灌ぐことを知る等。七は佛の正法、何を以てか持して、受持するに堪ふべきことを知る。八は佛の十無畏、難を答へて怯えざる等を知る。九は佛の、世に處して染せず。又無著辯才等を知る。十は佛を數するの軌則を知り、又佛の讚すべきの實徳を知る。釋の中に、九地の四十無礙智を得んが爲の故に。

(三七) 十住の自分の中に二あり。先の十は所成就の智を顯し、後の十は其勝徳を數す。前の中に初の五は、世界無礙智を明す中に、一は心に隨ひて廻轉す。二は暉光照覺す。三は願等

【二に勝徳云云】
經に「彼菩薩の身
は知るべからず」
等の句。

住持す。四は自在に普く入る。五は至る處皆嚴る。次の三は衆生の心行を知る智にして、
一は心を知り、二は心の所行の境界を知り、三は根海を知る。後の二は授法の智にして、
一は根に應じて法を興へ、二は惑を滅して、徳を成ぜしむ、故に調伏と云ふなり。又亦初
に意を標し、後に釋成す。謂はく、云何が度する。三學を以て、調伏するが故なり。二
に勝徳を辨する十の中に、初の四は身業の不可知を明す。即ち是れ業自在の義なり。後の
六は心智の不可知にして、即ち是れ智自在の義なり。前の中に、一は身色微妙、二は身に
依りて勝業を起す、三は變現奇異、四は奇特無礙なり。又釋す。初は身體、二は用、三は
神足の體、四は用、皆知るべからずとは、事即ち理に同じて、而も事を顯すを以ての故に。
又用は顯密に遍するを以ての故に。後の六の中に、初の三は智三際を宛む、即ち三達の妙
智、一切時を知るなり。四は淨利を嚴るの智、即ち器世間自在の智、一切處を知るなり。
五は衆生世間自在の智、染淨の業集起心、是れ衆生なるを以ての故に。六は智正覺世間自
在智なり。又釋す。心は即ち定なり。後に慧と爲すなり。又釋す。心境は是れ俗諦にし
て、是れ集起なるを以ての故に。即ち是れ上の九の本智の境は、是れ眞なり。照理を以て
の故に、即ち眞に結歸するなり。此眞俗無礙、雙照懸鑿を以ての故に、皆知るべからず。
下は其位を簡定す。謂はく、豈同位の菩薩及び佛、亦知らざるべけんや。今釋すること文
の如し。後に勝進の十の中に、佛の一切智、一切種智を擧げて即ち當位に満足し、灌頂
作佛す。諸位を攝し、皆具足するを以ての故に。下の入法界品の海幢比丘の頂の、佛說法

【灌頂に受職の義あり】受職灌頂とは、如法に修行せし人に秘法を傳授し阿闍梨位を紹がしむるをいふ。

【法雲等と同異す】法雲廣大灌頂と、圓融門初後の皆位相即するよりすれば同なるも、行布門（即ち初後次第する）よりすれば異なるなり。

【第六顯實證成分の釋】第七偈頌分の釋

の處の如し、之を知れ。一は下の頌文に準ずるに、總じて三世の諸佛の智を學び、二は佛の教法の智を學び、三は理法智、四は理事多門無礙智、五は大用普周智、六は緣に對して覺照する智、七は世界依持智、八は下生界を窮むる智、九は上佛界を盡すの智、十は果徳多門智なり。此中の灌頂に受職の義有り。法雲等と同異す云々。

第六に顯實證成分の中に二あり。先に實を顯し、後に證成す。此二に各二あり。先に此界、後に結通す。顯實の中の此界の内に三、先に動地の内に一は動の因、二は動處三は動相なり。二に兩俱即ち身業なり。三は出音即ち語業なり、法を以て之に準ぜよ。

二に證成の中に、此界の中に四あり。一は菩薩此に來る。中に於て來因、來處、來人有り。二は發言讚美、三は已を述べて證を引く中に、一は説人同、二は處同、三は主同、四は義同、五は衆同、六は教同なり。四には其來意を顯し、正しく證を結成す。

第七に偈頌分の中に、四句を以て一頌を成す。即ち一百一頌半有り、二に分つ。初に九十二頌半有り。前の十住の法を頌す。後の九頌は結歎して修を勸む。前の中、十住を頌するに即ち十段と爲す。初住に就きて四十六頌有り。中に於て四に分つ。初の三は前の發心の緣及び體を頌す。二に三十二は、十力分を得ることを頌す。三に菩薩如是發心より已下の十偈は、應學の十法を頌す。四に是說菩薩の下の一頌は總結なり。第二の三十二頌の中に亦三あり。初の十頌は十力行なり。二に二頌有り。所知の二諦の法を求めて發心す。三に震動の下に二十頌は、佛の三業を求むる爲に發心す。中に於て初の十頌は身業、二に十

方以下の三頌は語業、三に一切十方の下の六頌は意業、下の一は結歎なり。又、此廣大の三業は、是れ此住の中の所得なり。謂はく、三業隨智行等と云云。三に勝進の所學を頌する中に、不退教とは說正理に順じ、教改易無し。又此入位不退の義を説く、教又此教法に順じ、不退を得るが故に。前は是れ持業、後の二は依主なり。前の勝進十法の中に於て、十頌は次第に各一法を頌す。後の一は總結なること、並に知るべし。第二住の中の六頌、初の二頌は自分、後の四頌は勝進なり。第三住の中に五頌有り。初の二は自分、後の三は勝進なり。第四住に六頌有り。初の三は自分、後の三は勝進なり。第五住に四頌半有り。初の三は自分、後の一は勝進を明す。第六住に五頌有り。初の四は自分、後の一は勝進なり。第七住に四頌有り。初の二は自分、後の二は勝進なり。第八住に五住有り。初の三は自分、後の二は勝進なり。第九住に三頌有り。初の二は自分、後の一は勝進なり。第十住に八頌有り。初の五は自分、次の一は顯徳、後の二は勝進なり。第二の大段、結歎勸修の中に九頌あり、三に分つ。初の一は、總じて十住を歎す。二に七有り、別して初住を歎す、後の一は初住を以て倍し、類して後を顯す。

【一】梵行品。當品は十住位を成ずる、十種の清淨行を示すなり。初に釋名。【梵の行】依主釋なり。

梵行品第十二。初に名を釋すと、妄念の染を離るるが故に梵と云ふ、無我の理を會するが故に行と云ふ。此行は即ち梵なり。二に離染の中の極を梵と名く、即ち眞境なり。智能く此を證するが故に行と云ふ。三に涅槃の果を梵と爲す、寂靜なるを以ての故に。修因を行と爲す、此二は梵の行なり。淨と梵と何の別とならば、六の別有り。一は報に約す

【淨と梵と…別】第二會中の淨行品と當品との差別を述す。

【入位已去】初住に入れる已後。

【二】今品の依て來る意を明す。

【三】宗趣を明す

【四】正しく文を釋するに、先づ正念の名を釋す。

【信家非家】經に「一家の家に非ざることを信じ」とあるを指す。

れば、欲天を淨と爲し、色天を梵と爲す。二は人に約すれば、在家の戒は是れ淨、出家の戒を梵と爲す。三は行位に約すれば、信の中の修を淨行と爲し、入位已去の修を梵行と爲す。四は二りに約すれば、三學自利を淨行と爲し、四等利他を梵行と爲す。此は「涅槃經」に説くが如し。五は二行に約すれば、事に隨ひて造修する、施戒等を淨行と爲し、離念玄に契ふを梵行と爲す、文の如し。六は因果に約すれば、涅槃を淨と爲し、道諦の行を梵と爲す。經に梵行已立と云ふは是なり。

二に來意とは五有り。一は前は位、次は行なり。謂はく、前は正位を明し、今は位を成ずる行を辨す、故に文に云はく、「何んが梵行を修習し、十住を具足す」と。二は前は正位を明し、今は位に依りて行を起すことを辨す。三は前は別、此は通なり。謂はく、前の十住の中には、各一種の別行を修す、今は諸位の中の同行の行を辨す。四は前は通、此は別なり。謂はく、前は位の通ずることを辨じ、今は別して出家の人の行を明す。五は前は位相の差別を顯し、今は縁を會して、實に入る。即ち前は相、後は體の故なり。

三に宗趣とは、無念の正行を以て宗と爲し、所成の十住の位、及び速に成佛する等を趣と爲す。無念の理觀、略して五門を作る云云。
四に文を釋すとは二有り。初に問、後は答なり。問の中に離染の法を受くるの器を明すが故に、天子に寄す。妄念を離るる器、方に能く受くるが故に正念と名く。其下の文の、天主光女の父なり。文の中に、初は事を擧ぐ、信家非家は是れ空、法は非家なり。二に彼

【答の中…結す】
此下、答の文を述
釋す。

【初の中…顯す】
別釋の中、初に修
梵行の間に答ふ。
今は尋思觀を明す
文を釋す。

【若身是の下】
經の「若し身是れ梵
行ならば」等をい
ふ。

諸の下は、正しく問ふに三有り。初は梵行を修することを問ひ、二は位を成じ、三は得
果なり。答の中に法慧説く所以は、照法の慧、方に能く法を示すを以ての故なり。中に於
て亦三、初に修梵行の問を答へ、二に又復修習の下は、成位の間を答へ、三に如是觀者の
下は、得果の間を答ふ。又亦此品は重ねて更に、上の十住の中の初住の義を釋成す。中
に於て三あり。謂はく、初には上の發心を釋し、二は發心所得の十力を釋し、三は上の自
悟得果を釋し、法界に會同す。是故に、即ち此初住に具に十住を攝するなり。初の中に四
有り。一は尋思觀を明し、二は又知過去の下は、如實智觀を明し、三は菩薩正念の下は、
觀成の益相なり、四に是名の下は觀の名を結す。

初の中に三あり。先に十法を擧げて所觀と爲す、二に應如是觀の下は、理を以て徵破し
て、梵行の眞理を顯す、三に當如是の下は結す。何が故に但十法に就いて、觀すとならば、
法を攝すること略盡くすを以ての故に。謂はく、身口意は是れ有爲の果、三業は是れ彼因、
佛と法とは是れ出世の果、僧戒は是れ彼因なり。又、出家の人の出世の行を修するは、要
す此十法に依りて、方に梵行を成す。謂はく、三寶及び戒は是れ四不壞淨の境にして、即
ち所信所入なり。身口意は是れ能修行の具にして、即ち能信能入なり。三業は是れ境に對
して、所修所成の行なり。今此梵行を推求するに、何の法の中にか在る。既に求むるに得
ず、即ち相盡きて理顯るを、方に眞實の梵行と爲す。是故に文の中に、此十法に約するに
唯梵行を徴して餘法を徴せず。文の中に二あり。先づ理を以て案定す。二に若身是の下は、

【身の中の八句】
知るべし。此下、
別して徴破を述す。
一は軌…啖食す。
經の一梵行は非法
爲り…穢汚爲り
の文に當る。

續して交非を顯す。又、初は是れ總、後は別、初は略、後は廣なり。此中に十法を徴窮す。即ち十と爲す。初の中に若身是梵行とは、其所立を定む。下は理を以て推徴す。謂はく、梵は既に淨法なり、身は是れ雜穢なるが故に非なり。此身等の六事は、是れ染淨の法に通ずるを以ての故に、但染淨の相違に約して、梵行に非ざるを明し、彼六の自體を破せず。後の四は是れ淨法にして、梵行に順するが故に。即ち別に推折し、以て眞理を顯す。身の中の八句、初の一は總、餘の七は別なり。一は軌則すべき無くんば、是れ出世の法に非ず。二は飲食資成す、三は惡氣燒勃す、四は三十六物を具す、五は垢汚塵染、六は邪命自養、七は諸蟲啖食す。「觀佛三昧經」に依れば、佛、將に成道せんとするに、魔來りて惱す。時に佛、白毫を以て之を擬し、彼魔女をして、自ら身内の膿囊涕唾、九孔の根本生藏熟藏廻腑、婉轉として、諸蟲を涌生す、八萬戸有り、戸ごとに九億の諸の小蟲等有り。遊戲して小腸の中に走入す。口を張り上に向ふ、大蟲は遊戲して大腸の中に入り、口を張ること亦爾り。諸藏髓脈を啖食す。蟲を生ずること、秋毫よりも細に、其數、甚た多きことを見せしむ。其女此を見て、即便ち嘔吐する等と。又小乘の中に説く、蟲の頭は内に向ひ、蟲の尾は外に向ひ、遍く人皮を作す。又此蟲は是觀の境なるが故に、實に之れ有りて離も、蟲の觀を作す時方に見る。白骨等も亦觀の時見るが如し。小乘は即ち實なり。初教は即ち空なる等、之に準ぜよ。上乘は但是れ縱破するが故に、當知梵行則爲蟲等と云ふ。若し具ならば、蟲等は既に梵行に非ず、明に知んぬ、梵行は即ち是れ身にあらず

【二に身業】 四威儀等の八をいふ。

【通行の五】 融、受、思、想、作意の五心行。

と云ふべし。身に梵無きが如く、餘門も亦爾り。此等に依りて梵行を成ずるを以ての故に、此十法に於て、梵を求むるに得ず。此十法を離れて、亦求むるに得ざるが故に、下の文に、何等か是れ梵行、梵行の法何處に在りとや爲ん等といふ。其意此の如し、文に隨ひて準知せよ。

二に身業は知んぬべし。三は口中の心觸は、是れ觸數境を縁じて言を起し、口業を助發す。俱舍論の十六種の觸の中に、増語觸と名く。四は口業の中の語言、前と何の別とならば、前は報體に約し、後は業用に約す、故に別なり。實に口體を論ずれば、身分の攝に屬す。但し能發の語の邊を取りて語と名け、所發の語法を語業と名く。是故に新羅に語業と爲し、古譯は相に就いて口と名くるなり。作無作は是れ、語業の體の中の表無表の義なり。五は意中の幻夢とは、睡中の意識の行なるを以ての故に、夢中所見の能所等の事、皆心の幻作の故なり。中に於て覺觀等は、既に是れ心法なり。猶是れ數を擧げて、以て王を徵す。六に意業の中に、通行の五に約して之を徵す。是れ根本の動作なるを以ての故に。想は是れ想數、施設は是れ思、寒熱飢渴は是れ觸、苦等は是れ受、略して作意無きなり。上來は但染淨の相、返りて梵に非ざることを顯す、細破を待たず。後の四は、梵に順するが故に別に破し、細に折して方に眞理を顯すが故に、不同なり。第七に佛の中に、一は五陰に約し、二は相好に約し、三に神通業報に約することは、金鎗等を示すなり。此上の三處は、皆前に依りて後を起し、次第に之を徵す。八に法の中の六句、一は淨教、二は理果、

三は縁の生不生に約し、四は體の實不實に就き、五は情に就くを虚妄と爲し、六は成壞を合散と爲す。此中は通じて三義有り。一は淨、謂はく、初の二句なり。二は染、謂はく、虚妄なり。三は非染非淨、謂はく、所餘の句なり。三性に約せば、見の一分に隨ひて、餘分の性異らざるを以ての故に、俱に法に非ず。又、執に約するが故に、梁の「攝論」に云はく、「涅槃は無生寂靜を以て體と爲し、能く三苦を離るるを用と爲す」等と計す。皆法我及び我所の執を成ず。是故に俱に法に非ざるなり。九に僧の中に、一は位に約して僧を求めば、謂はく、四向四果同じく無我を證するを以て、合する者は誰ぞ、故に僧無きなり。二は徳用に約して求む。謂はく、三明六通なり。三は根に約して求む。謂はく、鈍根の羅漢は、時處に假託して方に解脱を得るを、時脱と名く。利根は此に返す、非時脱と名く。十に戒の中に尋思知るべし。

【上來は云云】 尋思觀を明し來り、今之を結するに、四尋何の義を示すなり。
 【五】 二に如實智觀を明す。上來觀察の十法、尙ほ尋思求智の分齊を脱せず、此觀に依りて眞梵行成就するなり。

上來は是れ四尋思方便なり、亦求智と名く。一は名を以て求む。二は義をもて求む。三は自性を以て求む。四は差別を以て求む。
 自下は第二に如實智觀を明す、中に於て六あり。初に梵行所依の時を徴す、謂はく、三世皆空なり。初は總觀、後は別釋なり。謂はく、此現在の法は、體として住すべき無きが故に、過去世の中に流至すること有ること無し。又無體に由るが故に、續きて未來世に流至すべきこと無し。又過去は滅無なるを以ての故に、物として相續して、現在に流至すべきこと無し。又未來は無體なるを以ての故に、法として起りて現在に至らしむべきこと無し。

【六】之に觀成利益。經の一菩薩摩訶薩……虚空の如しの文。

【第四に：結す】四に結名。經の「是を菩薩…修習すと名く」の文。
【七】第二問に答ふる下。經の「又復増上の等の文。【三心三戒】直心深心大悲心、及び攝律儀、攝善法、饒有情戒。

【第三の内】云云。經の「悉く衆生を分別…化の如しと觀ず」の文。

し。刹那前後も當に知るべし亦斷り。二に梵行の體を徴し、三に梵行所依の處を徴す。謂はく、上の十法に於て、何者か是れ梵なる。梵は何れの處にか在る。四に梵行の主を徴し、五に有無に約して徴す。六は五陰に約して徴す。

第三に觀成利益の中に、初に觀成の中に、先に論法上の如し。三世に約して、十法を觀するに皆空なり、故に分別三世諸法平等と云ふ。後に喻説は知んぬべし。二に如是の下は、益の相を明すに二有り。初に妄は心を離せざるの益、謂はく、云何が不變なるを得る、相を取らざるを以ての故に。何に因てか取らざる、無性なるを以ての故に。二に法界を洞照する益、法喻知んぬべし。又亦前は身等の六法、平等にして空の如しと觀じ、後は作等の四法、空の如しと觀すべし。第四に名を結す、知んぬべし。初問を答へ竟んぬ。

自下第二の問を答ふ。前の觀行成するに由るが故に、更に勝行を増修して、十住の位に入る。文の中に三有り。初は深く果智を觀じ、二は大悲を増長し、三は悉分別の下は、理を以て前の二を導く。即ち是れ三心三戒、三徳三身等を成するなり。彼上の文に、初住の中に於て、十力分を得るを以ての故に、今行成じて位に入る、最初に辨するなり。初の二文は知るべし。第三の内に二あり。初に法、後に喻なり。法の中に二、先に理を以て悲を導く。謂はく、寂滅を捨てず、衆生を捨てず。空有不二是れ衆生なるを以ての故に、般若の大悲は是れ一心の故に。二は理を以て果を導く。謂はく、無上の業を行じて報を求めずとは、即空を以ての故に求めず。不壞を以ての故に常に行す。亦是れ止觀俱行して、

【八】第三問に答ふる下。經の菩薩摩訶薩是の如く」等の文。
【後を起す】「少方便を以て」の下をいふ。

【具足慧身：顯すなり】諸見亡じ佛智爰に起る、心を覺すれば理現じ、理現すれば智圓かなり。
【豈是れ：説かん

空有滯らされば、中道の行なり。何に因てか此の如きことを得る。諸法如幻等と觀するを以ての故に、無體は幻の如く、現實は夢の如し、有用は電の如く、緣聚は響の如く、成事は化の如し。

第三の問を答ふる中に二有り。初は前を牒し、二は後を起す。後を起す中に、兩重に少因大果を得ることを顯す。中に於て各二あり。先に標、後に釋なり。初の標の中に、以小方便は是れ因、疾得等は是れ果なり。釋の中に何ぞ少因を以て、疾く大果を得るや。釋す、常に樂しんで、悲智空有等しくして二法無しと觀するを以ての故に、是故に疾く得。故に斯有是處と云ふなり。第二重の中の標とは、初發心の時は是れ因、便成正覺は是れ果にして、亦是れ前を轉釋す。謂はく、前に疾得佛果と云ふも、未だ何の時を疾得と名くることを知らず。今釋す、發心の時に得るが故に。下に初發心の菩薩は、即ち是れ佛の故に、悉く三世の諸の如來と等しと云ふ。此には行滿入位の時、即ち普賢の位を得ることを明す。故に一位即ち一切位乃至佛果にして、圓備せざること無し、故に正覺と云ふ。下に釋す、何に因てか此の如きことを得る、一切眞實と知るを以て」とは、理圓を顯すなり。具足慧身とは、智徳備ふることを顯すなり。不由他悟とは、内に自ら聞覺するなり。豈是れ因中に果を説かんや。此は一乘普賢の行位、因果圓融し相即無礙なるが故に、然ることを致すなり。宜しく須らく之を思準すべし。

初發心菩薩功德品第十三。初に名を釋せば、本覺内に薰じ、大心創めて起るが故に發心

【一】 當品は初發心、功德廣大にして、善賢の萬德を攝し、德量法界に等しきを顯す。初に釋名。
 【二】 當品の來意を辨ず。

【前の二】 十住、梵行の二品。
 【同別二教】 同教一乘、別教一乗のこと。終頓二教の一乘に寄せて説くを、直ちに一多無盡の法を説くとなり。
 【三】 三に當品の宗趣。
 【四】 四に正しく文を釋す。

と云ふ、行成じ位立するを名けて菩薩となす、功は遠劫を超え、德は塵沙よりも廣し、故に功德と云ふ。此は菩薩初發心の功德を明す。是れ此に辨する所、二乘に簡ぼんが爲の故に菩薩と云ふ。終心に簡ぶが故に初發と云ふ。此は發心所攝の功德を明して、發心の相を辨するに非ず、故に以て題名とす。

一に來意とは三有り。一は前の住及び梵には、行位の體を明し、今は其勝德を顯すが故に來れり。二は前の品來に、初發心の時、便ち正覺を成ずといふ。未だ知らず、此心何の功德有りてか、便ち能く此の如くなることを、此義を釋せんが爲の故に來れり。三は前の二品は、法を以て機に就き、説きて行位をして分齊有らしむ。今は則ち機を以て法に就きて、德量の無限を顯す。是故に前の二は同別二教に通ず、今は則ち唯別教を明して、一乗の玄妙とするが故に、下の偈の中に美言詞を以て、讚述するが故に、次に來れり。

三に宗趣とは、初發心に普賢の德を攝し、因果を具し、分量法界と等きことを辨す、是れ其宗なり。

四に文を釋せば、此品の中に於て説分有り、四分と爲す。初に請、二に説、三に證、四に頌、今は説なり。中に於て二有り。初に長行散説、後に偈頌をもて總攝す。前の中に亦二、初に此界、後に結通なり。前の中に亦二、初に正説、後に證成なり。前の中に亦二、初に問ひ、後に答ふ。答の中に三、初に總じて甚深を歎じて、怖欲を生ぜしむ。二に校量して勝を顯し、其淨信を生ぜしむ。三は當相に深きことを辨じ、正解を生ぜしむ。初

【初の間】 天帝釋の問なり。
【二に説の中に云】 法慧の答をいふ。

【前の中】 分別し難し。別して甚深を歎ずるを釋す。

【五】 二に極量して勝を顯す。

【一八】 第一衆生を利益する喻。經の

の問の中に、天帝の問は、天に在るが故に、功德自在なるを顯すが故に。法慧の説とは、稱法の慧方に功德の際を窺む。二に説の中に二、初に深きを歎じて信ぜしめ、二に雖然の下は正しく説きて解せしむ。又釋す。前は其播欲を起し、後は正しく法理を授く。又釋す、前は體の甚深を顯し、後は用の廣大を明す。又釋す、前は義の大深を顯し、後は教の大廣を顯す故なり。前の中に、初の句は總、六句は別、一は自ら知ること能はず。二は他聞きに信ぜず。三は思惟して解せず。四は言宣明ならず。五は修慧、通ずること能はず。六は衆生の智、分別すること能はず、故に甚深なり。又釋す、一には教の量知り難し、二は義深くして信じ難し、三は思惟するも解し難し、四は教に應じて説き難し、五は證せんと欲して知り難し、六は數の極の故に分別し難し。

【五】 二に極量して勝を顯す中に、總じて十一段の校量有り。一は物を益する校量に約する喻、二は歩初校量に約する喻、三は算劫成壞の喻、四は善く欲樂を知る喻、五は善く諸供を知る喻、六は善く希望を知る喻、七は善く方便を知る喻、八は善く他の心意を知る喻、九は善く業相を知る喻、十は善く煩惱を知る喻、十一は供佛功德の喻なり。論の中に攝して以て六と爲す。初の三を二と爲し、次の五を一と爲し、次の二を一と爲し、後の一を一と爲す、故に六と爲すなり。釋に三門有り。一は前の六の甚深に對す、二は菩薩の菩提心の相似に約す、三は六障を治するに約す。初の中に二有り。先づ校量して勝を顯し、後に何以故の下は、勝の所由を釋す。前の中

一佛子、假使一尋これなり。
【前の中に十重有り】五戒、十善、四禪、四無量、四無色、初二三因果縁覺。

【二に顯勝云々】勝れたる所由を釋する下。

に十重有り、二と爲す。初の一は別説、後の九は通説なり。初の中に四有り。一は廣事を擧げ、二は正しく徴問し、三は答へて廣を顯し、四は超過を辨す。初の中に亦四の廣有り。一は所供の廣、謂はく、僧祇の衆生等、二は供事の廣、謂はく、一切の樂具。三は供時の廣、謂はく、一劫等。四は利益の廣、五戒を修せしむる等なり。下の九の中に亦四あり。初は併せて九事を擧ぐ。中に於て亦四廣を具す、初に準じて之を知れ。但し增多等を異と爲す。二は問、三は答、四は超過、並に知んぬべきのみ。二に顯勝を釋する中に二有り。初に何以故は、正しく徴責す。徴責に二の意有り。一は云はく、前の所説の如く、功德甚だ多し、何に因てか此に比する、而も類に非ず、故に釋して云はく、初發心の菩薩は、齊限爾等を爲さざるが故に比に非ずと。二は云はく、初心の菩薩は、何の勝徳有りてか前位に超過する。釋して云はく、悉く佛種を斷ぜざらしめんと欲する等の故に、是故に前に過ぐるなり。下の諸文皆之に準ぜよ。二に佛子の下は釋成す。釋成の中に二有り。先に齊限の事を爲すが故に、發心せざることを明し、前の四廣は、廣と爲すに非ざること顯すなり。二は欲不斷佛種の下は、無齊限の事を爲すが故に、發心することを明す。是故に此は彼に超過することを顯すなり。

此中に十二句有り。初の一は位の過、是れ總、菩提心は是れ佛種なるを以て、菩薩恆に起すを不斷と名く。又、菩薩衆生を化して、如來種を立つる中に、小果を取らしめざるを、亦不斷と名く。前の五戒に同じからず。餘の句は是れ別、一は是れ心過なり。下に準ぜば、

【衆生の報類垢淨】一切衆生の受くべき果報、流類穢淨をいふ。

【漏盡智】一切の煩惱を斷ずる阿羅漢の智慧。

【三達智】三明(天眼、宿命、漏盡)を佛にてはかくいふ。

【七】二に速に利土を歩行する喻の下。經に「佛子よ、一念の頃」等とあり。

應に慈悲心を以て十方界に充滿せんと欲すと云ふべし。前の十僧祇界等に翻す。二は行過なり。謂はく、一切の衆生を度せんと欲す、前の限局に翻するが故に、一切と云ふなり。三は器相の成壞を知る過、是れ所化の處を知る。謂はく、成壞の差別と知り、又成即壞等を知る。是れ佛の一切智は是故に廣なり。四は器の中の衆生の報類垢淨、皆業に由りて異なることを知る。即ち是れ業力智なり。五は前の器の體木淨なりと知る、是れ如理智なり。六は所化の生の、使習の龜細を知る、是れ漏盡智なり。謂はく、彼は即空にして、亦即障を成ずる等と知るなり。七は是れ生死智通、即ち天眼力なり。八は根力智、九は他心智、十は是れ三達智なり。亦宿命智有り。十一に亦如理智なり。又此十一の中に、初の二は是れ大悲、餘の九は是れ大智なり。智の中に第五及び十一は、是れ佛地の一切智、餘は是れ一切種智なり。並に分齊無きが故に、是故に超過するなり。

第二に歩利校量の喻の中に亦二有り。先は喻の及ばざる所を明し、後に何以故の下は、勝相を釋顯す。前の中の喻相に一百重有り。初の十重は別して説き、餘は總説す。釋の中に二有り。先は徵責、後は釋成す。釋成の中に亦二有り。先は齊限の事を爲さざるが故に、前は後に及ばざることを顯すことを明し、悉爲の下は無齊限を明すが故に、此は前に過ぐることを顯す。此中に亦十二句有り。初の二は悲心に約す、初は總標、後は別釋なり。謂はく、度して果を得せしめんと欲するが故に、爲と云ふなり。次の十は智に約す、自在智を成ぜんが爲の故に。中に於て、初の二は總知、次の八は別顯、後の二は意を結す。

【八】三に劫の成壞を算知する喻の下。輕に「佛子よ。成敗の數を」といふこれ。

【初の一】：顯すべし。初は總別に約し。平遍の下は一重の重重に約す。【此八の中】：無礙

又、初の一は平漫普遍の如、次の八は重重即入無礙の知なり。此中に、一は大小相即、二は多少相即、三は廣狹、四は一多、五は相入、六は染淨、七は帝網、八は相生なり。此八の中に二義有り。謂はく、相即と相入となり。此二に各二有り。謂はく、同體異體なり。此二に復二義有りて、即入を成ずることを得。一は緣起門に約す。二は眞性門に約す。初の中に亦二義有り。一は體に約す、空有の義有るが故に相即するを得。二は用に約す、有力無力の義有るが故に相入するを得。緣に約すれば、待不得の義有り。故に同異の二門有り。性に約するに亦二義有り。一は緣を壞せず、故に相入し、二は緣の相盡くるが故に相即す。並に圓融無礙自在の義、上に準じて之を思へ。

第三算劫校量の喻、此中に亦二有り。初は喻の及ぶこと能はざるの所を明し、後に何以故の下は、超過の相を釋す。初の中に亦二有り。先に喻の廣大なるを辨じ、二は超過を對顯す。前の中に、初に東方を辨するに十重有り。倍倍すること知んぬべし。後に九方を類結するに、亦各十有り。二に釋の中に、先に徵、後に釋なり。釋の中に二有り、初に齊限を爲さずして、爾所等を知るが故に、是故に喩ふべからざることを明すなり。此中に十句有り。無齊限の事を知るが爲の故に、是故に喩ふべからざることを明すなり。此中に十句有り。初の一は總じて知る、次の八は別して知るなり。云何が分別して知るや。謂はく、是の如く即入重重し、相擇自在無礙と、是の如く知るのみ。亦、初は是れ平遍して知り、後は重重即入無礙にして知り、純熟の相を顯すべし。此八の中に、一は長短の相即とは、長は

なり。初は大小、次は淨穢に約す。【莊嚴劫】過去の住劫を莊嚴劫、未來の住劫を星宿劫といふ。【星宿劫】の中に：【大通智勝佛】三千塵點劫の過去世に出世せし佛。法華經化城喻品の説

【九】衆生の欲樂を知る喻の釋。

是れ大劫、短は是れ小劫なり。又娑婆界は是れ短劫、安樂界等は是れ長劫、相即の故に無礙なり。二は一多相即、三は佛の有無に約す、莊嚴劫及び賢劫等の如し。是れ有佛劫、星宿劫を過ぎて、後に六萬二千劫有るが如し。空く過ぎて佛有ること無し。此二劫相即するを以ての故なり。四は佛の多少に約すとは、星宿劫の中に、八萬の佛、出づること有るが如し、是れ一劫の中の無量の佛なり。大通智勝佛出世の時、梵王讚じて、「或は千劫等空く過ぎて佛有ること無し。今始めて大通一佛を見ることを得」と云ふが如し。亦相即の故に云ふなり。五は異無異とは、是れ純雜無礙なり。或は過未を異と名け、現在を無異と名く。過未は現に入り、現は過未に入る、故に云ふなり。六は盡不盡とは、是れ存滅無礙にして、天人見劫盡、此土常安穩等の如し。七は一念即無量劫にして、念を積むに劫を成ずるを以て、別の劫の體無し、故に即ち念なり。八は有無相入とは、妄を推して眞に歸すれば、劫は無劫に入る、眞に依りて妄を起せば、無劫は劫に入る。又初は事を以て理に従へ、後は理を以て事に従ふ、故に無礙なり。結の中に初は所知を總結す。後に其本誓を結す。是故に功德、佛果に等きが故に、不可説なり。

第四に、衆生の欲樂を知る校量の中に、亦二有り。初は喻の及ぶ能はざる所を明す。十方に各十重有り、倍倍して知るべし。後に何以故の下は、超過を釋す。中に於て初に勝の所由を責め、後に勝の所以を釋す。此中に先づ齊限等の欲樂智力を爲さず、衆生の欲樂の海を知る故に、種種欲樂と云ふなり。下に別して顯す中に二有り。初は法に約す、別し

て知る。後に一一衆生の下は人に約す、通じて知るなり。論に、前を名けて遍知と爲し、後を微細知と名くることも、亦得たり。前は是れ異相、得は是れ同相なり。前の中に二十三句有り。一は衆生の求心に約して、別して無量欲と名け、同じく一果を期するを、即一欲と名く。同じく一果を期すと雖も、然も求行恒に別なるが故に、不壞一切欲性と云ふ。又悽望の念は二無く、同じく是れ別境の中の欲數の所攝にして、心法殊らざるを以ての故に、即一と云ふ。而も所樂は差別の故に、不壞等と云ふなり。此は一衆生心の、前後の欲樂多端に約して、相即無礙なるのみ。二は樂欲繁多にして深廣なること、海の如くなることを示す。三は異類の衆生欲樂の心海緣起無礙の故に相即するなり。又一衆生の善惡無記を知る、一切衆生も亦爾り、故に云ふなり。四は一衆生に於て、實際の中に隨ひて、前後の欲樂種種にして知る、一一の衆生は悉く皆是の如くなるが故に一切等と云ふなり。五は中に於て、流類同じきものを相似と名け、所樂異なる者を不相似と名く。六は三乗の欲別なるに約して一切と名け、同じく一乘に歸するを、即一欲と名く。實、一乘に即するを、名けて一欲と爲し、權、三乘を開くを一切欲と名く。又緣起無礙なるに約す、自他等の位に通ずること知んぬべし。七は佛果の智に同じ。是れ十力の中の欲樂智力の故なり。八は三乘等を求むるを、有上欲と名け、一乘を求むるを無上欲と名く。九は所求の處に於て、若し是れ究竟するを無餘欲と名け、上に反ずるを有餘と名く。十は理を求むるを等と名け、事を求むるを不等と名く。十一は餘の心所に託するは、是れ有所依、獨起の欲數を無所依

と名く。又境に依りて欲を起すを有依と名け、境の唯心を知り、心起りて寄する無きを無依と名く。十二は同じく求むるを共と名け、異求するを不共欲と名く。十三は欲の因位に在るを有邊と名け、佛果の位に至るを無邊と名く。惑障盡くるを以ての故に。十四は理に順するを善欲と名け、理に違するを不善と名く。十五は隨流を世と名け、返流を出と名く。十六は佛の智徳を求むるを、大智欲と名く。十七は佛の斷徳を求むるを、淨欲と名く。十八は凡小の位に過ぐるを勝欲と名く。十九は菩薩の諸地證智般若を成ぜんと求むるの欲なり。又論の中に釋す。大智欲は種性の位に在り、淨欲は是れ見の位、勝は是れ修の位、無礙智は是れ八地已上の無功用的位」と。二十には佛果の位に在りて大智無礙圓明解脫す。二十一は染にして不染なるを、情淨欲と名け、不染にして染なるを、不清淨と名く。又若し世の名利を離るるを淨と名け、世の名利を求むるを不淨と名く。二十二は多求を廣と名け、少求を狭と名く。又大悲救生を廣と名け、専ら自脫を求むるを狭と名く。二十三は深を求むるを細と名け、淺を求むるを龜と爲す。下は人に約して、欲の同相を辨する中に、初に十數を擧げ名を列ぬ、八有り。此は是れ滅數の十なり。一は生死の苦の逼るに因りて、遂に涅槃を樂ふ。謂はく、苦に因りて樂を念す。囚の脫を求むるが如し。二は善惡の事の中に於て、聞に因りて思惟して、而して欲樂を生ず。故に方便欲と名く。三は可意の事に於て求むるを、希望欲と名く。四は得已りて捨てざるを、味著欲と名く。五は宿因の種子に因りて生ずるを、隨囚生と名け、又思想より生ず。經に云はく、「欲は汝が本

【可意の事】己が好む所の事をいふ

【下の總結の中云】これ經文中の句を釋す。

【一〇】五に諸根を知る驗の釋。

【一一】六に希望を知る驗の釋。

【一二】七に方便を知る驗の釋。

【一三】八に他人の心意を知る驗の釋。

を知らんと欲して、但思想より生ず。我今汝を思はず、汝還つて生ずることを得ず」と。
 六は外、境に託して生ずるを、隨緣生と名く、又善惡の爲に反化引生ずるを、亦隨緣生と名く。七は法として求めざることを無きを、盡欲と名け、又涅槃の盡滅を求むるを、亦盡欲と名く。八は廣く諸法を求むるを、一切欲と名け、又無邊の菩提を求むるを、亦一切欲と名く。下の總結の中の欲網とは、三義有り。一は難脱の義なり。世の羅網は魚鳥の脱し難きが如く、種種の欲網に由りて、生死を出で難し、此は染淨に約す。二は滂漉の義なり。世網の滂漉の如し、謂はく、淨欲を起して、諸の有情を漉し、生死の苦海を出でしむ。下の文に云はく、「智慧王の所説の欲を、諸法の本と爲す、應に清淨欲を起して、無上道を志求すべし」と、此は淨欲に約す。三は陰映の義なり。帝網の差別の如し、染淨等の欲、交渉無礙重重相入の故に、網と云ふなり。此は欲の體に約す。
 第五に知根校量、准例するに、亦應に具に顯して類同を爲すべし。故に文の中に略して辨ず。如來の十力の中の、種種の諸根智力を求めんが爲なり。
 第六に希望は前の欲と何の別ぞ。通じては即ち是れ一なり。中に於て分別せば、欲は始に據るが故に、根の前に之を説く。希望は終に就くが故に、根の後に之を説く。
 第七に知方便とは、緣起の行を造るを方便と名く。是れ發業の方便の故に、業に同じからず。

第八に知心意とは、如來の他心智を求めんが爲の故に、前は心法を明し、此は心の體を

【四】九に業相を知る喩の釋。

【五】十に煩惱を知る喩の釋。

【正使】現起する煩惱の正體をいふ煩惱の餘習を習氣といふに對す。
【纏】煩惱の異名煩惱能く人の身心をして纏縛し自在を得しめざるに名く。

【九結】結とは煩

辨す。

第九に知業とは、佛の十力の中の業智力を求めんが爲なり。此上の五門は、並に略して擧ぐ。上の欲門に類して應に知るべし。

第十に知煩惱校量の中に二あり。先に喩の及ぶ能はざる所を明す。後に勝相を釋し顯す。勝相の中に先に微、後に釋なり。釋の中に、先に齊眼を爲して知らざるが故に、此は前に過ぐることを顯す、後に欲悉分別の下は、無齊限の漏盡智力を爲す故に、前の及ばざる所を明すなり。此中の初の句は總なり。所謂の下は、別して顯すに十八句有り。略して十門を作りて分別す。初の二句は輕重に約して分別す。謂はく、率略に心の起るを輕煩惱と名け、慳厚に心の起るを重煩惱と名く。又微に起りて止み易きを輕と名け。龜に起りて息め難きを重と名く。又正使を重と爲し、殘習を輕と爲す。又本煩惱を重と爲し、隨煩惱を輕と爲す。又隨の中の小隨は輕、上中は重なり、知るべし。二に二句有り。使纏分別に約す、使は謂はく十使、即ち五見及び疑貪瞋癡慢なり。纏は謂はく十纏、即ち無慚、無愧、睡、悔、慳、嫉、掉、憍、忿及び覆地持なり。「瑜伽」には八纏を説き、忿覆を除く。何が故に除くとならば、有る論師の説を爲さく、忿覆は是れ使の性なり。謂はく、何が故に除くとならば、是れ貪使の性なり。他の利を貪るが爲に、己が過を覆藏すと。使と纏と何の別とならば、「維心」に云はく、「根本を使と名け、津液を縛垢と名け、急縛を纏と名け、輕纏を垢と名く」と。又此中の結は、即ち是れ九結なること、知んぬべし。三に二句有り、因果に約し

闇の異名。愛結、
志結、慢結、癡結、
疑結、見結、取結、
惛結、嫉結の九。

【四は二句有り】
無明煩惱、愛相應
煩惱の句。

【五に四句有り】
經の、貪欲不善根
乃至等分煩惱の四
句。

【六は二句有り】
經の、一切煩惱、
根本煩惱の句。
【四倒】四種の顛
倒の妄見をいふ、
無常、無樂、無我
無淨に於て常樂我
淨と執するをいふ。
【煩惱所知】 煩惱
所知の二障。

て分別するに、一一の衆生の無量の煩惱は、是れ貪瞋癡等の所起の果にして、煩惱覺觀は是れ煩惱の因なり。彼に由りて生ずるが故に『涅槃經』に説かく、八種の覺觀有り。故に種種と云ふ。一は欲覺。可意の事を求む、二は瞋覺、他を瞋せんと念欲す。三は憍覺。他を憍さんと念欲す。四は親里覺。親縁を憶念す。五は國王覺、世の安危を念す。六は不死覺、財を積みて資養す。七は族姓覺。族の高下を念す。八は輕侮覺、侮は是れ慢、自ら恃みて人を欺かんと念す。四は二句有り。本末に約して分別するに、亦是れ癡愛の分別なり。謂はく、無明は是れ無明住地なり。無明に依りて起るは、是れ恒沙の上煩惱なり。愛は是れ欲色有の三愛、是れ有愛住地。相應とは、是れ愛と相應の煩惱なり。謂はく、愛に因りて憂を生ずる等。五に四句有り。三不善根に約す。分別して知んぬべし。六は二句有り。地と起との分別なり。初の句は是れ五住起、後の句は是れ五住地なり。七は利鈍に約して分別す。我我所は是れ利、慢は是れ鈍なり。八は相生の次第に約して分別す。邪念虚妄は是れ心想見の三倒にして、生煩惱とは是れ三倒より四倒を生ずるなり。九は諸見の本末に約して分別するに、謂はく、六十二見は皆身見に依りて生ず。彼を以て本と爲すが故に。十に二句有り。過患に約して分別するに、蓋は謂はく五蓋、即ち貪瞋、睡眠、掉悔、及び疑なり、行人を覆蓋して、禪智を得ざらしむるが故に蓋と名くるなり。障は謂はく二障、即ち煩惱、所知障、所知障を亦煩惱と名くることを得るを以ての故に、下の結の中に、煩惱の脱し難きを以て、通じて惑網に名く。委細に一切の煩惱を了知するは、是れ一切種

【二六】十一に、佛を供養する功德驗の釋

【此中の過相云云】具に勝過の相を述す。

智なるに由りて、皆斷じて永く盡さしめんと欲す。是れ大慈悲なり。
（二六元）第十一に供養佛功德较量の中に二あり。初に事を擧げて较量し、喩の及ばざる所を明す、後に何以故の下は、超過を釋し顯す。前の中に十重有り。初の一重は別説、餘の九は總説なり。前の中に四あり。初に廣を擧げ、二に間に對へて廣く示し、三に答へて極廣を顯し、四に较量して勝を顯す。初の中に先に東方を擧げ、後に餘の九を類す。前の中に五行り。初は一念に多佛多衆生を見、二は自ら多時に於て多供を興し、三に前の衆生を勸めて、己が供に同じ、四は自ら勝塔を起てて供す。五は他を勸めて、亦同じく塔を起てて供せしむ。餘の文は知んぬべし。超過を釋し顯す中に就きて、二あり。先に徴し後に釋す。微問の意に云はく、且く東方の如く、一念に即ち無邊の諸佛を見、此念力を以て、無量劫を経て供す。佛等甚廣にして、東方の如く餘も亦爾ることを明す。即ち極廣を顯す、一人既に爾るが如く、更に復、他の一切衆生を勸むるも、亦是の如し。況んや復倍倍して前に過ぎたるをや。第十に至りて、此功德分限の知り難きことを明す。何に因りてか此發心功德に比せん。乃至不可説分の中に於て、其一に及ばざるが故に、何以故と云ふなり。下の釋の中に、先づ齊限を爲さざるが故に、前の此より劣れるを顯すことを明す。後に欲悉の下は、無齊限と爲す、故に此は前に過ぐることを顯す。此中の過相は、復、無量なりと雖も、大略して言はば、六種有り。一は處過。謂はく、盡く十方無盡の法界、虚空等の、無盡の世界處の佛を供養せんと欲するが故に。此は帝網等の處に通ず、故に前に同じから

【七】攝徳の深勝なることを明す文を釋す。經に「是心を發し」等といふ下、

【滅盡定】(Nirodhasamapatti)二無心定の一。六識の心所を滅して起らしめざる定。

す。二に時過。謂はく、三世の佛を盡す、即ち九世十世等の無盡重重の時に通ず。三に佛過。謂はく、佛境界所有の諸佛を盡して、皆供養するが故に、但前の如きのみならず。四は供過。謂はく、盡法界の中に自他色心理事の行等有り、並以て供養す。但前の如きのみならず。五に心過。謂はく、前の無盡の佛境の、一一の佛の所に於て、各無盡の供事を以て、各無盡の時を経て、供心猶盡きず、是故に過ぐるなり。六に行過。謂はく、能所に了達す。三事平等回融無礙の故に、過ぐるなり。問ふ、只比するに等に非ざらしむべし。豈不可説分の中に、一分に回ぜざるべけんや。答ふ、此發心の功徳は、即ち法界に同じ、分折すべからず、故に縱ひ不可説分の中の一分子なり、亦即ち法界に通じ、多少を問ふこと無く、皆無比なり。常住の僧の穀米の一斛、亦十方僧に通ず。乃至一合も亦十方僧に通ずるが如し、是れ不可分なるを以ての故に。之を思うて知んぬべし。

第三に當相顯深の中に二あり。先に標、後に釋なり。初の中、發是心已とは、前の諸喩の校量する所の心を標す。即ち是れ發心の字を標す。得知の下は功徳の甚深なるを標して辨す。中に於て初は、因を攝し盡すが故に深し。二は佛果に等きが故に深し。此中の是發は、前後際の菩提に徹し、心は是れ佛境を窮盡するなり。前の中に、初に所知の境を擧ぐ。謂はく、三世の佛の功徳智慧を知る。二に深行を成ず、謂はく、信向は是れ十信、受持は是れ十住、修習は是れ十行十廻、得證は是れ初地已上、身證は是れ十地の滿已還なり。又内證を得證と爲す。相外に彰るるが故に。身證と云ふ。小乗の中に滅盡定を以て、身證と

【三達】天眼、宿命、漏盡の三。羅漢に在ては三明と

爲すが如く、此も亦同なり。又初は是れ行證、後は位證なり。又初は智相應、後は身相應なり。又は得證は因圓に約し、身證は果滿に約すべし。二に悉等諸佛功德とは、是れ佛果に等きが故に深なり。二に何以故の下は、前の二標を釋す。中に於て三あり。初に因等を釋し、次に果等を釋し、後に因の分齊を結す。初の中に、先に微問す。謂はく、「何を以てか初發心は、已に即ち能く三世の諸佛の大福智を證得すと知るや」と。下の釋の中に二十句あり。謂はく、三世の佛の昔の所行路に、同ずることを顯すが故に等と云ふなり。中に於て、初の十一句は外化の徳、後の九句は内の自徳なり。又、前は是れ悲の徳、後は是れ智の徳なり。前の中の初の一句は、是れ摠なり。謂はく、衆生を化して、菩提心を發さしめ、佛種を紹繼するが故に、不斷と云ふなり。後に十句は別して顯す。一に物を愁む心を起す、二に救度の意を作す、三に所化の住處を知る、四に所化の類別を知る。謂はく、善惡の業は苦樂の報を起すが故に、垢淨起と云ふ、亦是れ十力の中の業智力なり。五は廣大の意を起し、亦是れ業障を離れしむ。六は所化の惑障の輕重を知る。亦是れ漏盡智力を求め、亦是れ煩惱障を斷ぜしむ。七は輪轉の相を知る。亦是れ天眼智力にして、亦是れ報障を捨せしむ。八に根の生熟を知る。是れ起行の所依にして、即ち是れ諸根智力なり。九は心の造修を知り、正しく起行を明す。亦是れ他心智力なり。十は所知を總結す。亦是れ三達智力なり。下の九句は、佛の自利の徳を求むる中に、初の一は是れ總、餘の八は別なり。中に於て初の二は因果分別なり、初は菩提の果を知り、二は菩提の因を知る。謂は

いひ佛に在ては三
達といふ。未來、
過去、現在に互り
て知り窮むるが故
に達といふ。

【二】果等を釋す
經に「此初發心、
佛なる故に」等と
いふ文の下。

【一は陀羅尼云云】
三故を以て圓教の
義を立す。一は緣
起相由、二は普賢
門、三は法性融通
に約す。

く、淨法是れなり。次の二は理行分別にして、初は理法平等を知り、二は智行清淨を知る。次の四は體德分別にして、初の三は佛德なり。一は十力、二は無畏、三は不共なり。後の一は佛體なり。謂はく、實智平等の故なり。

二に果等を釋すの中に、先に徵起、後に釋成す。釋成の中に、初の一句は總、二は別、三は結なり。初の中に、即是佛故とは、有人釋すらく、或は云はく、因中果を説くと。或は云はく、解は佛境に同すと。或は云はく、理の平等に約すと。若し三乘教に約するも、亦如上の説を得たり。今、上下の文を尋ぬるに、一乘圓教に約し、始終相攝し、圓融

無礙にして、始を得れば即ち是れ終、終を窮むるに方に始を原ぬ。一に陀羅尼門に由る。緣起相攝の故に。二は普賢の菩提心に由る。遍く六位を該ぬるが故に、因に即して是れ果なり。三は法性に由る。始終無きが故に。心を發して始に入れば、即ち正しく是れ終なる

故なり。是故に上の文に、初發心時便成正覺、具足慧身不由他悟とは、此謂なり。二に別の中に十五句有り。初の五句は佛の内德盈滿等に約し、後の十句は佛の外化の用普周等に約す。初の中に一は總、四は別なり。別の中に初の二は所依の法等し。一は俗諦の境、

二は眞諦の境なり。後の二は能依の德等し。一は身、二は智なり。二は外用の中に、初の

一は總、餘の九は別なり。別の中に初の三は、化して苦を出さしむ。一は動は信を生ぜしめ、二は照は驚覺せしめ、三は正しく苦を出さしむ。次の五は化して法に入らしむ。一は化處を嚴り、二は成佛を現じ、三は通を現じて喜ばしむ、四は正しく法に入らしめ、五は

【智正覺世間】本宗三世間の一。如来の大智慧を具し、偏邪を離れ、一切の法を覺了するをいふ、即ち釋迦能化の智身これ。【器世間】三世間の一。衆生の生棲する國土。【衆生世間】三世間の一。佛界を除きたる餘の世界にある有情。【二九】第三に因の分齊を結する下。經の「彼發心の菩薩……智慧無礙なり」といへる文。【三〇】顯實證成を明す文を釋す。經に「爾時、佛神力等」といひ、六種震動等を明す下なり。

法に入り已りて、護して失せざらしむ。後の一は外化の智を結す。又釋す。此十五句の中に、初の二は總、十四は別なり。別の中に、初の五句は、是れ智正覺世間自在等し。中に於て初の二は法等に約す。一は所縁及び分齊等し。二は理教等の下の三は、三業等し。謂はく、所化は語業に約して辨するなり。次の四は器世間自在等し。中に於て一は動、二は照、三は除、四は嚴なり。後の五は衆生世間自在等し。一は爲に現す、二は欣ばしむ、三は法を授く、四は護持す、五は果を得。若し護らざれば、二乘地に墮せんことを恐るるが故なり。

第三に因の分齊を結する中に、三世の中の三寶衆生染淨等の法を離れずとは、此に二義有り。一は菩薩は三世の身に通ずることを得るに由る。是故に常に三際に通じて在らざる所無き故なり。二は菩薩は法界に即するの身を得るに由り、豎に染淨を含み、横に三際に遍するが故に不離と云ふ。餘の文は知んぬべし。

第二に顯實を證成する中に、先に顯實の中に、一は動地、二は雨供、三は振音、四は放光なり。二に證成の中に、先に身を現じて證し、後に益を擧げて證す。前の中に、何が故に佛自ら證すとならば、初發心に即ち佛の因果を攝するを以て、此事信じ難し、故に佛は自ら證す。又因果同性を表すが故に、又勝進の因果攝成するを表すが故に。二は益を擧ぐる中に、彼一切世界の中の法慧の所説を擧ぐ、既に此益有り、明かに知んぬ、此法決定して虚からず、亦此説信受し難きを以ての故に、此證を致すなり。此心徳

【三二】以下結通。經に「此婆娑」等といふ下。

を威攝して、圓淨なるに由るが故に、淨心如來と名く。上來は此一世界の中の説竟んぬ。

【三三】第二に結通の中に二あり。先に法の普周無盡世界を顯す。後に十句有り、遍の所由を釋す。謂はく、何が故に此法は十方に遍じて、説處、説人、説法、及び證、悉く皆同なるや。釋すらく、佛力等の十句の故なり。一は此舍那佛、及び一切の佛は、各現在威神の力を以て、同じく共に加持するが故に、然らしむるなり。二は諸佛の本願の攝持する所なり。三は佛の所得の法を、顯示せんと欲するが爲に、理數、此の如く十方に遍するが故に。四は佛智の光、普からしむることを明すが故に。五は眞理の普遍を、解悟せしめんと欲するが故に。六は法界緣起の相由法爾の故に、須らく遍説すべし。七は入法を欣ぶ者の爲に、此稱性の廣大の法を示して、歡喜せしむるが故に。八は佛徳の普周なるを、具に讃げんと欲するが故に。九は十方一切の諸佛の、同じく得る所の法を顯示す。謂はく、平等にして差無きが故なり。十は十方法界二轍無きことを、解知せしめんが爲の故に。是上義に由るが故に、普遍の所以を説いて十と説く。亦是れ式則として無盡を顯すのみ。上下の諸文、結通の義、並に此に準じて之を知れ。上來此界他方、總じて無盡世界一切處なること、長行散説の意なり。

【三三】偏頌を以て總攝する下を釋す。經に「爾時、法慧」等をいふこれなり。

【三三】第二に大段偏頌總攝の中に二あり。先づ説の意を序し、後に正しく重頌す。初の中に十句あり。一は十方無盡世界、同じく此法を説くを以ての故に、須らく觀すべし。二は十方一切の衆海をして、悉く同じく聞かしめんと欲するが故に。三は自心空の如く、偏局無

【正頌の中云云】
此下正しく重頌を
釋するに、初に頌
を判ず。

【初の文中云云】
文段を隨釋するに
四ある中、初に前
の當相の文を頌す
る下、一百六十三
頌の釋。

きことを顯さん爲の故に。四は衆生を成就するの法門を觀するが故に。五は法性に稱ひ、
淨なること空の如しと雖も、而も因果失せざることを觀する故に。六は惑を離れしめんと
欲す。七は一乘の解脫を得。八は根海に了達す。九は縁を會し實に入る。十は自の無盡の
發心功德を現じ、衆をして見已りて修學せしむるが故に。正頌の中に就いて、總じて二百
四十一頌半有り、四に分つ。初の一百六十三頌半は、逆に前の第三段當相の文を頌す。二
に二十九頌有り、前の第二の喩の校量の文を頌す。三に三十九頌有り。前の最初の略顯甚
深の文を頌す。四に十頌有り、結數して勝を顯す。

初の文の中に就いて長く分ちて、二十七段有り。初の六頌は、前の欲令慈悲心充滿十
方世界等の文を頌す。二に欲悉分別知より下の七頌は、前の欲悉知一切世界廣狹即入等の
文を頌す。此中に作用益生等を顯すことを辨す。三に欲令諸佛種より下の三頌は、前の欲
不斷佛種故等の文を頌す。四に信心不可沮より下の二頌は、前の悉得諸佛智慧光明の文を
頌す。五に悉能分別知より下の二頌は、前の欲知衆生種種業、種種心種種根性等の文を頌
す。六に菩提心無量の下の六頌は、前の欲得法界等三世諸佛平等智慧の文を頌す。七に清
淨無量心より下の二頌は、前の供養一切佛の文を頌す。八に於諸甚深法の下八頌は、前
の得佛智慧因縁の文を頌す。謂はく、智慧の所因は、則ち是れ甚深三昧、及び眞如の境よ
り生ずる所なり。此中に通慧の作用を顯すことを辨するが故なり。九に具足大悲心より下
の九頌は、前の度脫一切衆生等の文を頌す。十に世界若成壞よト下の三頌は、前の知世

界成壞等の文を頌す。謂はく、此成壞は唯佛智の境にして、今佛を信じて疑ひ無きが故に亦了知す。十一に盡於未來際より下の五頌半は、前の休息一切世界衆生諸惡道苦を頌す。十二に菩薩放大光より下の七頌は、前の悉能普照一切世界を頌す。此中には兼ねて所照の刹の中に、佛の説法を聞ふことを辨す。十三に明淨利智慧より下の四頌は、前の與三世諸佛正法等の文を頌す。十四に清淨妙法身より下の十一頌は、前の悉於一切世界示現成佛等の文を頌す。十五に一身悉充滿の下の八頌は、前の得佛智慧等平等の文を頌す。十六に一切諸世界より下の八頌は、前の得如來一身無量身等の文を頌す。十七に其心無所染より下の十頌は、前の亦與三世佛境界等の文を頌す。此れ是分齊の境界に、一種の齊等有り。一は離染等し、二は救生等し、三は智慧等し、四は相好等し、五は所知等し、六は證理等し、七は深定等し、八は行堅等し、九は心安等し、十は充滿等し、十八に欲求道師慧より下の二頌は、徳を擧げて修を勸む。十九に菩薩摩訶薩より下の四頌は、説の分齊を頌す。上の二は前の文を頌せず。二十に善分別衆生より下の六頌は、前の得三世諸佛智慧光明を頌す。謂はく、俗境を照して常に眞に在るが故に。二十一に、無量不可數より下の四頌は、前の悉能嚴淨一切世界の文を頌す。二十二に、慧眼無障礙より下の八頌は、前の與諸佛所化衆生皆悉同等を頌す。二十三に悉能善分別の下の四頌は、前の知劫長短相即相入等の文を頌す。二十四に、成就智慧力の下十二頌は、通じて前の初心所得佛十力智を頌す。二十五に一一毛孔中より下の九頌は、前の悉能震動無量世界を頌す。謂はく、帝網等に入る。

三四 二に校量して功徳の殊勝なるを喻ふる文を頌する下、二十九頌の釋。

三五 三に略して甚深を顯す文を頌する下、三十九頌を釋す。

二十六に如是深法門の下の七頌は、前の悉欲長養諸佛智慧の文を頌す。二十七に菩薩摩訶薩より下の六頌は、前の菩薩不離諸佛菩薩及び二乘衆生等の文を頌す。上來此に至りて、總じて是れ、逆に第三段を頌す。當相文を辨すること竟んぬ。

自下第二に二十九頌有り。前の第二の約喻校量乃文を頌す。中に於て初の六頌は、第一の益生の喻を頌す。二に無量無有邊より下の二頌は、前の第二の歩刹の喻を頌す。三に去來現在劫より下に四頌有り。前の第三の算劫の喻を頌す。四に十方世界中の下の六偈は、前の欲等の五喻を頌す。謂はく、一は欲、二は希望、三は根、四は方便、五は心法、合せ知んぬべし。五は一切衆生類の下の四頌は、前の第九、第十の知業煩惱の二喻を頌す。六に十方諸世界の下の七頌は、前の第十一の供養諸佛を頌す。上來第二大段の喻、校量し竟んぬ。

第三に三世人中尊の下に、三十九頌有り。前の第一の標數顯深の文を頌す。中に於て七に分つ。初に七頌有り。前の最初の總句、甚深の文を頌す。謂はく、深く佛果に徹するが故に、深く群有を超ゆるが故に。深は法性に同するが故に。深用普週の故に。深智遠知するが故に。並に文の如く知んぬべし。二に常修妙功徳の下の七頌は、前の第二の難知甚深を頌す。中に於て初の四は自の深廣難知、次の二は佛深徳なるを以て加持難知なり。後の一は徳の難知を結す。謂はく、徳虚空の如くにして、算の能く知るところに非ず、故に難知と名く。三は初發菩提心の下の五頌は、前の難信甚深を頌す。謂はく、初發心に即ち佛果の

無邊の功德を成ずるを以て、此れ信受し難きが故なり。四は一切臂支佛の下の八頌は、前の難解甚深を頌す。謂はく、二乗をして、三界の所得安樂ならしむ。乃ち菩薩の初發心の中に在りて、此事、解し難し。是故に文の中に、初の四頌は二位の得樂を標し、各二頌有り。後の四は彼二位の得樂の所由を釋す、亦各二頌有り、知んぬべし。五は無量智慧明の下五頌は、前の難說甚深を頌す。謂はく、智深徳廣、業用數多にして言說及び難し。故に稱讚不可盡と云ふなり。六は普觀一切法の下四頌は、前の難通甚深を頌す。謂はく、心平等に住し、衆の爲に法を説く、二位の相違極めて相順せしむること、甚だ通會し難きが故なり。七は無量妙功德の下の三頌は、前の難分別甚深を頌す。謂はく、此初心は佛位に同じ、際限分ち難き故なり。

【三六】 結數して修を勸むる頌の下十頌あり。

【一】 當品は第三會の終にして、廣く行法の體と行所成の徳とを説くを名目とす。初に釋し、次に教義、境智に約し、最後に智行と諸行に約して釋す。

【二六】 第四に大段欲得一切佛の下の十頌は、結數して修を勸む。初の二は徳を擧げて修を勸め、次の二は徳の深廣なるを顯し、次の四は徳用の勝能を顯し、後の二は學の究竟を勸む。明法品第十四。四門は前に同じ。初に名を釋せば四義有り。一は後位の行法、明の前位に乗ず、此明は即法なり。二に明は是れ教、法は是れ義なり。三は明は是れ智、法は是れ境なり。此二は法の明、明の法なり。四は智行、染を離るる當相を、明と名く、即明にして軌とすべし。是を以て法と稱す。又諸行煥照稱性なるを明と爲す。當體妙軌の故に亦法と云ふ、故に明法と云ふ。爾らざれば、是れ闇なれば、則ち亦法に非ず。

【二七】 二に來意とは、前に當位の體の徳を明し、今は勝用の趣を辨じ、後は義の次第の故に、

【二】 當品の來意を明す。

【三】 宗趣を明す

【十二分教】 十二部經と同じ。即ち修多羅(契經)、祇夜(重頌)、毘陀(起偈)、尼陀那(因緣)、伊帝目多(本事)、闍多伽(本生)、阿浮達摩(阿毘達摩)、阿波陀那(譬喻)、優婆提舍(論義)、優陀那(自說)、毘佛略(方廣)、和伽羅(授記)なり。

【四】 以下正しく文を釋す。

是故に來れり。又前には自分を明し、今は勝進を顯すが故に、次に來れり。
三に宗趣とは、明法の不同に四種有り。一は理法。謂はく、眞如性なり。二は行法。謂はく、六度等の行なり。三は教法。謂はく、十二分教なり。四は果法。謂はく、菩提涅槃なり。今此は正しく行法を明し、兼ねて餘の三を明すが故に、以て宗と爲す。又此四の中に、理に依りて行を起し、行に依りて果を成ず。教は前の三を説くが故に、唯四なるのみ。

(四)に文を釋せば、此文三に分つ。初に請分、二に説分、三に證信分なり。初の中に二あり。初に長行、後に偈頌なり。前の中に二あり。初に前の自分を顯し、後に後の勝進を問ふ。前の中に、若し照理の機を、勸策するに非ずんば、以て勝進轉増の法を、受くるに堪ふること無し。又若し此眞淨を洞するに、行法を具するに非ずんば、以て能く説くこと無けん。故に進慧は問ひ、法慧は説くなり。領の中に八句有り。一は總、七は別なり。別の中に一は大誓白ら嚴る、二は行乘果乘、三は因位に入る、離は猶し無のごとし。謂はく、無生位の道に至るを、餘處に釋して初地の位と爲す。此は地前に在り、相攝するが故なり。四は背、五は向、六は佛住に同ず、七は定んで果を成ず。二に正しく後の勝進を問ふ中に二あり。先に正しく行法の體を問ひ、後に行に依りて成ずる所の徳を問ふ。前の中に總じて十一句有り。初の六は自利の行、次の四は利他の行、後の一は俱利究竟を通結す。前の中に彼菩薩とは、前の發心具徳の人を標す、初の句に何の行を修習して、功徳を

【普賢の行…二門】
自分と勝進の二門
【行】 恐くは後の
字か。

【下の一云云】 俱
利究竟の釋文を結
す。

【五】 行所成の徳
を問ふ下。初に結
前生後の文を釋す
【二に所成の徳云
云】 所成の徳を問
ふ文を釋す。

して轉勝せしむるを問ふ。問ふ。前の品の中に、甚深諸三昧、無量陀羅尼、諸佛自在力、無量妙功德、莊嚴初發心と云ふ。又卽是佛等と云ふ。何の少くる所ありて、故更に修習するや。答ふ。此圓教普賢の行の中の大位に二門有り、各法界を攝す。前は自分に約し、此は勝進を辨す。前の中に亦後を具し、行の中に亦前を具す。然るに前は恆に後に非ず、後は恆に前に非ず。謂はく、前を具するの後は前に非ず、後を具するの前は後に非ず。故に位前後に分つ。攝の義恆に同なるが故なり。二は何の行を修習して、如來をして歡喜せしむるやを問ふ。是故に云何修習の言は、下の諸句に貫通することにて準ぜよ。三に位地を問ふ。四には位に依りて行を起す。五は大願助成、六は徳を積みて藏を成す。利他の中に、初は物の機に應じて化し、二は自行を廢せず、三は欲に起きて生を度す、前は生、此は熟なるを異と爲す。四は化して菩提に趣かしむるが故に、三寶をして絶えざらしめ、興隆を成すのみ。下の一は俱利を結する中に、善根の境は自利を結し、方便は化行を結す。二俱に究竟するが故に、不虛と云ふ。

(五) 善哉の下乃至欲問は、此文に二の意有り。上に望めば、則ち請を結し、説を勸むと爲す、下に望めば、則ち是れ後の問を聞くを憐ふ。二に所成の徳を問ふ中に、如諸菩薩所修功德とは、總じて所依の徳を擧げ、滅除已下は、徳に依りて成する所、是れ所問の法なることを明すなり。中に於て、下の答に準ずるに、總じて十八句有り、二に分つ。初の十七句は徳の備はることを明し、後に得善根力の下は、勝用を明す。前の中に二あり。先の十六句

【下の徳圓云云】
 經に「菩薩に一切
 諸地：清淨の法あ
 り」の句。
 【下の果徳云云】
 經の「一切諸佛の
 世界を……薩婆若
 智」句。
 【下の利他云云】
 經に「佛刹を具足
 ……悉く能く演説す
 る」の文これなり。

は内徳の圓、後に天王の下は外の尊敬なり。前の中に二あり。九句は自利の徳を明し、後に具足佛刹の下の七句は、利他の徳を問ふ。前の中に二あり。先に七句有り、因の徳を問ふ。後に莊嚴の下の二句は、果徳を問ふ。前の中に二あり。先に六句は行修具足を明し、後に菩薩一切の下は衆徳圓備す。前の中に二有り、初の四句は是れ斷障の行なり。謂はく、先に無明住地を離るるは、是れ惡因を離るるなり。二は魔を伏し、三は外を制す。此は是れ起惡の縁を離る。四は塵垢を離る、是れ惡習を離るるなり。二は善行を修するに三有り。初は福徳を修成し、二は惡果を超離す。謂はく、三惡八難を離るるなり。三は淨慧を修具す。此慧の下の文は、將に答を爲すなり。故に唯六句有り。總じて是れ、二障を除き二嚴を成じ、行修具足するが故なり。下の徳圓の中に七有り。一は十地を攝し、二は十度を具し、三は多三昧、四は妙總持、五は六通、六は三明、七は清淨法の總結なり。下の果徳の中に二あり。先に依正は三業の果、後に力無畏等は、衆徳の差別の果を攝す。下の利他の中に四あり。初の一句は機に應じ、利を現することを具足す。二は隨成就衆生の下は、正行を以て生を攝す。中に於て、初は隨うて行縁を成じ、二は及諸菩薩の下は、正に行法を結するに五有り。一は勝徳、二は所軌、三は法に依りて造修す、四は行能く果に至る、五は廣く所縁及び分齊を攝して、皆悉く満足す、是れ總結なり。三は速成等とは、行に果を辨する功能有ることを明す、故に速成と云ふなり。四は護法の行を成するに四有り。初の句は、總じて護法の行を明し、云何が護するやの下の三句は、別して顯す。一は廣く

【六】以下、外護を明す文の下、龍王に一天王、龍王に愛敬するやといへる是なり。

【七】勝用を明す下。經に一善根の力を演説するやの文これなり。【四は次第等は】これ經に「次に菩薩」等とあるを指す。【八】前の請問を頌す。

教を説きて義を開示す。二は異道の爲に侵されず、三は自ら文義總持を具し、常に説き頌に説きて、而も窮盡する無し。

上來は内徳圓なり。下は外の敬護を明す中に二有り。初は總じて世間の十王、及び佛法王の守護を擧ぐ。二は別顯する中に三あり。先に一切世間等は、前の十王の護を顯し、二に常爲の下は、法王の護を顯す、三に一切菩薩の下は、同位の護を明す、行體の徳圓備し竟んぬ。

下に勝用を明す。謂はく、諸徳に依りて此勝用有り。中に於て四句有り。初は自の無漏法を増するが故に、自法と云ふ。即ち自ら證を成ずる行なり。二は能開等とは、證法を以て人を教ふ、三は自ら教行を具す、四は次第等は、人に教行を教ふ。

二に偈頌の中に四句をもて頌を成ずるに、十一頌有り。初の一は總請、下は別して頌す。別の中に二あり。初の一頌は前の文を頌し、二に云何の下は、正しく後の行法を問ふを頌す。中に於て、初に前の十一種の行法を頌す、二に大雄の下は、前の行に依りて成ずる所の徳を頌す。中に於て初の二句は、上の善哉願説の文を頌し、次の一頌半は上の行修離障を頌す。次の二句は衆徳の備るを頌す。次の一句は略して果徳の法を頌す。次に隨其の下の三句は、上の利他の中に行縁を頌す。次の一切の下の一頌は、上の護法の行を頌す。後の一は、上の十王敬護を頌す。中に於て四あり。初は智徳無畏なること、猶し師子のごとし。二は福徳圓備すること、満月の如し。三は斷徳離染すること、蓮華の若し、四は淨果

現前すること、最勝の如し。此四は亦是れ、上の善根力増白淨法等の勝用の文を頌するなり。

【九】 第二に答説なり。

第二に答の中に二あり。初は直説、後は重頌なり。前の中に二有り。先に問を數じて説を許し、後に法を以て正しく答ふ。前の中に二有り。先に問を數じ、後に佛子の下は説の分齊を許す。前の中に、先に所問の益を數じ、後に能問者の徳を數す。前の中に、先に益を辯す。謂はく、饒益は増善の因、安樂は授樂の果にして、慧利は出世の法利を得しむ。

後に哀愍の下は意を結す。能問を數する中に、先に自分の徳を數するに五有り。一は實慧に稱ふ、二は不動にして進む、故に大力と云ふ、三は無問修の故に、一心等と云ふ、四は位成就の故に不退と云ふ、五は當位の滿の故に、世を超出すなり。又初の句は有解を明し、後の四は有行を明す。又此等は亦是れ進慧の名を釋す、知るべし。下は勝進の徳を數す、謂はく、問に於て自在なること如來に等しと。

【二】 前問に隨ひ順次に行法の體を答ふる下。經に「佛子よ……已に發心の一等といふ、これ、初に功德轉勝を答ふる文。」

下の正答の中に二あり。先に前の十一問の行法の體を答へ、後に彼行に依りて、成する所の徳を答ふ。前の中に、問に依りて次第に之を答ふ。初の句の功德轉勝を答ふるに、二十句有り。初の十は始の修、後の十は終り成す。又初は是れ自分、後は是れ勝進なり。前の中に、已に發心の藏を得ればとは、前を牒して後に擬するなり。應離癡等は、是れ總じて擧ぐるなり。又「涅槃經一に云はく、「不放逸は根深固にして抜き難し、不放逸の根固きに因りて、一切の諸の善根皆增長することを得」と。不放逸に二有り。一は事に約す、

【前に：藏を得】

以下正しく當文を釋す。今の文は經に「已に發心功德

戒を得 といへるを指す

【論】唯識論第六 瑜伽、俱舍等。

【法集經】四、二

六丁。

【十種の放逸】初

四は體に就き、次

五は用に就き、後

一は體用を合せし

上にていふ。

【初とは云云】正

しく婦女の十不放

逸を釋す。

【三業淨戒】攝律

儀戒、攝善法戒、

攝衆生戒をいふ。

これ通俗共に通じ

て行する戒。

【然るに持つな

り】清淨持戒に必

ず三相あるを説く

【二乗の捨つ】

二乗は出離を求む

他の爲に非ず。今

是心を捨離す。

論に釋するが如し云云。二は理に約す、法集經の如し云云。下の別の中に三有り。初に

數を標し、二に名を列ね、三に數を結す、列の中に、十種の放逸を對治す。一は破戒の逸、

二は菩提に迷ふの逸、三は悲心を失ふの逸、四は墮の逸、五は誑雜を樂しむの逸、六は

世間を樂しむの逸、七は劣善を樂しむの逸、八は二乗を樂しむの逸、九は功德に染するの

逸、十は絶分を生ずるの逸にして、次の如く十句の對治、應に知んぬべし。初とは、既に

發心を得已りて、要す須らく菩薩の三聚淨戒を持つべし。然るに三種を持つなり。一は三

業の惡を作らず、二は名利の爲にせず、三は戒見を起さず。此は是れ標の中の守護なり。

二は菩提に於て、有無等の見を起して發心せず。此は是れ、標の中の離疑なり。三は言に

依りて物を攝す、故に詔曲を離る。四は所作の善根、必ず終成せしむ、故に不退と云ふ。

此は是れ標の中の精懃なり。餘は皆此等の三を離れず。五は業を造り生を求むるは、是れ

凡夫の行、菩薩は之を離れて、常に寂靜を樂ふ、二種有り。一は身に約するに二有り。

一は所住の靜、謂はく、家室の喧擾等の處を離る。二は能住の靜、謂はく、淨戒を持し、

三業の非を離る、此は福を以て罪を捨て、在家の凡夫を離る。一は心に約するに亦二有り。

一は所住。謂はく、眞空妙境なり。二は能住。謂はく、定慧の心なり。此は慧を以て惑を

捨て、出家の凡夫を離る。六は世樂を厭背し、七は専ら出業を修し、八は出を求むと雖も、

二乗の無悲救世の心を捨つ。九は菩薩の大悲功德を修すと雖も、而も能所修を見ず。故に

無汚なり。十は己身を知るに四義有り。一は、身は縁に従つて有なりと知り、我我所を離

【能所修を見ず】能所修を見るは遍計の妄情。菩薩の行は毫毛も機中に能所を見ず。

【二】後の十句を釋するに、まづ淨法を釋す。

【聞好：淨なり】經意を顯すに、二義を以て相成す。

【第一の答云云】以下、如來をして歡喜せしむるの問に答ふる文の下。

【下は別云云】別の十句を釋す。

る。二は己が道行の力、若し劣ると知れば、終に煩惱の境界に強對せず。三は知力若し強きときは、則ち須らく精苦して、進修の行を作すべし。四は定んで己身に菩提の種有り、當に佛を得べしと知るが故に。

二に勝進の中の淨法とは、謂はく、前の正行を練治して淨ならしむ。四に常樂の下は法を求めて淨なり。五は隨所の下は、疑を除きて淨ならしむ。六は具足の下は智慧淨なり。七は心常の下は三昧淨なり。八は聞好の下は解空淨なり。亦是れ嚮思淨なり。九は等視の下は勝想淨なり。十に恭敬の下は報恩淨なり、亦是れ敬養淨なり。

第二の答は、如來をして歡喜せしむ。二十句有り。亦初の十は自分、後の十は勝進なり。前の中に、初は前を結つ、不捨の下は後を生ず。中に於て初の句は、下の初の五句を牒し、二は心無倚は、下の第六を牒す。修甚深法は、下の七八二句を牒す。於無諍等の下は、下の第九第十を牒す。是故に總じて下の十門の行を標す。聖心に稱可するが故に、如來をして歡喜せしむ。下は別の十の中の初の三は修有行、初の一は勤勇行、次の二は有の中に於て過を離るる行なり。謂はく、内、身を惜まず、外、財を求めず。次の三は空慧行を修す。一は加行、空を修し、二は正證、實を照す、三は後得分別して猶倚無し。七は常に菩提を求む、故に大願と名く。八は勝相現前の故に光明と云ふ。九は有に隨ひて過を離るるが故に、善知損益と云ふ云々。十は無著の心を以て、諸法を造履す、故に清淨と云ふなり。下は勝進の十法を明す、修し已りて成就するが故に安住と云ふ。十の中に、一は過

【餘の四】經に滿足せる三量の、大願一等といふ文を指す。

【巧慧雙行】善巧方便と眞智雙行するをいふ。

【第三に云云】菩薩所住の功德に答ふる下。十の中、初三は修始、次四は修次、後三は修終、今之を以て釋成す。

【二諦】眞俗二諦の三性。遍、依、圓の三性。

【三量】現量、比量、聖言量。

【意は滅惡成徳に在り】上の教義、究竟すると、行じて滅惡成徳すること善取佛意の終極なり。

に對して染せず、二は實を證して相を捨す、三四は慈悲をもて物を攝す、五六は行滿じて染を離る。餘の四は願智具す。一は大願具し、二は巧慧雙行し、三は恩擇の勝力、四は性に達して無礙なり、故に無依止と云ふ。

第三に菩薩行住の功德を答ふ、亦二十句有り。初の十は自分なり。中に、一は起行の心、二は正行の行、三は智、理に順するが故に言を超えたり。此上は修始なり。四は善友に近く、五は若し精勤せざれば、近くと雖も益無し、六は若し意を取りて法を會せざれば、勤むと雖も益無し。又善取佛意とは三種有り。一は教に約す。二諦、三性、三量、四理、四悉檀、四意、四密、六相、六釋、八聲、五力等を以て、經意を會取して之を受持す。二は義に約す。謂はく、言近く意遠し、法相の諸門を説くと雖も、意は眞理超言の處に在り。

三は行に約す。謂はく、意は滅惡成徳に在り、但言ふ所のみに非ざるが故なり。七は若し行に依りて意を會せずんば、亦何の益ぞ。此上は修の次なり。八は大誓の二嚴を成じ、九は因位成滿し、十は圓に果位に同す、此上は修の終なり。勝進の中に二有り。先は觀解を明し、後に摩訶薩作是念の下は、解に依りて行を起すことを明す。前の中に、初に結前生後、謂はく、善く諸地を成ずるを、巧方便と名く。又地に於て著せざるを、亦巧便と名く。地を成ずるの要の故に、先應修習と云ふなり。十の中に、初の八は是れ所成の地法、初の

一は總、二は是れ諸地の說智、三は施戒等の行、四は所依の淨土、五は所緣及び分齊、六は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

は勝進及び十自在等、七は異身を示現し、八は後智、法を説く。此れ並に諸地一に非ず。

【第四に云云】 四に清淨の行を答ふる下。經に「佛子よ、諸行を清淨にす」等といふ。

故に皆隨其と云ふなり。下に能成の方便を明す。謂はく、分別すと雖も著無し、是れ方便なり。「心に由り造る」とは、無著の所以を釋す。謂はく、心外無法と知るが故に、所著無し。心造に三重有り。一は轉識分別の作、二は本識薰に隨ふの作、三は真心依持の作なり。皆心の作なるが故に有にあらす、心の作なるが故に無にあらす、是故に無著なり。菩薩若能の下は、能成の地を結す。下は起行を明す。中に於て三有り。先に標、三に釋、三に結なり、並に知んぬべし。

第四に清淨行を答ふるに二十句有り。初の十は自分の中に謂はく、十度純熟して障を出づるが故に。淨は謂はく、初に施すときは、則ち捨せざること無し、二は戒は則ち毀犯等無し、皆清淨の相を明すなり。前の六は知るべし。七は巧に諸行を成す、故に是れ方便なり。八は大願堅誓尊重なること山の如し、此は下の尊重行に同す。九は思擇力修習力に由りて、法を説き熱を除くこと、世の涼池の如し。十は智度、生を攝し、佛法に同ぜしむ。後に勝進の中に、後は前に過ぐるを以ての故に、轉勝と云ふ。十の中に、初の三は宿成の行、次の三は依縁の行、後の四は悲智の行なり。前の中に、一は内に實徳有り、外に佛の念を感ず。二は護念するに由依て、更に勝善を増す。三は能く佛の八相に同じ、龜を現じ細を隠すを、密方便と名く。又如來玄密の義に了達す、王の髻中の珠等の如し。又善く權密の教等を解するが故に、安住と名くるなり。次に依縁の中に、一は善友に近く、謂はく、身は親近し心は依附す。二には善友に依りて正行を起す。三は正解を生ず。謂は

【第五は大願云云】
五に大願の成滿を
答ふる下。經に佛
子よ：清淨の願
等といふ。

く、別を攬りて總を成ず、故に總に非ず。總を分ちて別を成ず、故に別に非ず。全奪俱に盡き雙融無礙なり。是故に緣起俱に總別に非ず。後に悲智行の中に、先は一は大悲、後の三は大智なり、中に於て一は實智、後の二は巧智なり。一は因を成ずるの巧、二は果に向ふの巧なり。

第五は、大願の滿を答ふるに、二十句有り。初は自分の中の所求皆得るを、願滿と名く。一は憍を忍びて生を攝す。二は土を嚴り物の爲にす。三は佛に於て供を興す。四は法に於て守護す。通じて護法を論ずるに四重有り。一は理法を護る。謂はく、理を照して無明等を雜せず。二は行法を護る。謂はく、行は名利懈怠等を雜へず。三は教法を護る。謂はく、如法の説を授け廣宣流布す等。四は果用の法を護る。謂はく、形像等を護ることを存す。五は物の身をして淨土に生ぜしむ。六は物の智をして法門に入らしむ。七は他をして願滿せしむ。八は修行足ること無し、謂はく、行は來際を盡し、須臾の如くにして、厭倦を生ぜざらしむ。又、劫は心に隨ひて轉ずることを願す。九は囚の究竟を願す。十は果の間淨を願す。後に勝進の十の中に、一は大哲心を嚴り、慮らず成ぜざるが故に憂無きなり。二は仰いで勝侶を念じ、轉彼願を起す。三は悉願往生とは、頓に諸行を起す。四は究竟等とは、常に所行を起す。上は自利なり。五は化して願をして滿ぜしむ。六は常に化して倦まず。七は苦に處して生を益す。八は樂を捨てて物を利す。九は授くるに果法を以てす。十は得果平等、上は利他なり。

【第六には云云】六に菩薩藏を得ることを答ふる下。經に一菩薩：諸願満じ已りて一等といふ。

【第七に云云】七に、隨機說法することを答ふる下。經に一佛子よ：所應に隨ひて一等の文。【衆生の病患：知法を知ることを】

第六には菩薩藏を得ることを答ふ。初は結前生後、總じて十句有り。謂はく、徳を藏み藏を成じて、深廣無盡なるを以ての故に、勝進無し。一は佛を見る、二は法を持す、即ち是れ持藏なり。三は說法、即ち辯藏なり。四は悲普、五は妙定、六は勝用、七は入證、八は證に依りて通を起す。謂はく、天眼を以て地の伏藏、及び海中の衆寶を見、并に衆寶の出處價直等の事を知る。九は佛加して徳を増す。十は智、器界に達す。

第七に其所應に隨ひて、之を化度することを答ふ。先に結前生後なり。謂はく、機に稱ひて法を授くるを、隨應化と名く。中に於て三有り。初に根機を知り、二は教へて過を離れ、三は教へて善を修せしむ。初の中に亦三有り。初に衆生の病患の所宜を知る、二は宿習の因縁を知る、三は現在の心念を知る。二に教へて過を離るる中に三有り。先に一句は總、次の九句は別なり。中に於て第八は、自他平等を觀するに由りて、慢を他に起さす。第九に、心の詭曲とは、多は名利の爲に喧心不直なり。菩薩は其非有を知るが故に心靜かなり。三に非是の下は結なり。三に教へて善を修せしむる中に、初の一句は總、下の十三句は別して顯す。中に於て、初の八は自分の法化、後の五は勝進の法化なり。前の中に、初の二は法に於て能説す。一は理等を觀じて、事別に達せず。二は事を折し壞して、而も理存を礙せず。良に以れば、理事復相奪ひ、俱に盡くと雖も、而も變存するを礙せざる故なり。又釋す。分別は是れ説。謂はく、平等法の上に於て、更に異門を以て種種に別説すと雖も、皆本宗を失はず、故に先後無違と云ふ。此は是れ本來無礙なり。二は緣起の法

【第八に云云】八に諸波羅蜜を捨てざるを答ふ。ト。經に一菩薩は是の如く「等の文。

【第二の内に】淨ならしむ。禪に「持等の相を生ぜず」といふ二句なり。

無性と説くを、破壊と名く、而も亦緣起を礙せざれば、法界散滅する所無し。此は是れ成壞無礙なり。已下は人に於て能益す。三は化して信を生ぜしむ、信は疑を除くが故に歡喜するなり。四は化して解を生ぜしめて、實理を解するを入と名く。下は教へて行を起さしむ。五は福行果に趣く下は慧行を教ふ。六は破相の行なり。七は入實の行、八は無著の行、皆心に依る、二邊俱に離るるが故に無染と云ふ。下は勝進の化を明す。九は教ふるに此無二平等の念をもて、諸佛を念敬することを以てす。此は佛身に近く。十は教へて自ら軟音を學し、所著無し。十一は他の異音に於て、差別無し、此二は佛の語業を學す。十二は佛の法教を學す。十三は具足の下は、佛の智慧を修す。此二は佛の意業を學す、知るべし。

第八に諸波羅蜜を捨てざることを答ふ。先は結前生後、此に二義有り。一は常に物を化すと雖も、内心恆に寂たり、故に不捨自行と云ふ。二は他の爲に此を行す。是故に自行を捨てず、即ち是れ利他の故に云ふなり。十度の中、後の四は是れ、第六の中より闡出するを以ての故に、但六を標す。又後の四を以て、前の六を嚴るが故に、一切諸度具と云ひ、六を莊嚴す。十の中に於て、第二の内に戒に倚りて、以て自ら高ぶらず。又戒を執して有と爲さず、故に淨ならしむ。三の中に、初は苦忍を安受するより、惡を聞きて憂無き等は、耐怨害忍なり。好を聞いて喜無きは、法思惟忍、未曾等は變べて違を結す。四の中に、初は勤めて佛因を修し、究竟の下は佛果を勤修す。五の禪の中の一は、定體に入る、捨欲等

【一】に入りて多を知り。經に「一三昧門に入りて一切三昧の境界を知る」といふ。【六】に云云。以下方便度、願度、力度をあぐ。

は是れ初禪なり。次第入は是れ後の三禪なり。此は是れ事定に入りて著せざるが故に、無染と云ふ。下には滅惑生定を明す。是れ理定なり。下は定用、通を起すことを明す。二に超次とは、謂はく、八九に於て次第に入り、及び超越して入る、此は是れ上の事定の用なり。三に一に入りて多を知り、四は漸く、智徳を具す。此二は是れ理定の用なり。六に智度の中に、初は聞慧を求め、次に所聞等の下は思慧を明す。次に入眞等は修慧を明す。上は是れ加行智なり。次の妙善等は、正證、智を辨じ、次の具足等は、後得智を明し、佛慧に趣く。七には方便の中に六種の方便有り。皆悲智相導きて巧に住著する無きを以ての故に、故に方便と云ふ。一は悲は威儀を示し、智は愛見を離る。二は悲は身を現じ、智は染無し。三は悲は外に童を示し、智は内に黠を具す。四は悲は縛脱を現じ、智は巧に取らず。五は悲智嚴を現す。六は悲は能く趣に入り、智は所行を了す。八に願の中に十有り。一一に、皆彼原際を盡さんと願じ、各究竟と云ふ。初は衆生を化するの願、二は佛土を淨むるの願、三は佛を供養するの願、四は智慧を攝するの願、五は法界の行を修す、六は志を大にするの願なり。謂はく、志力を以て上行を修する時、來劫を盡して住するは須臾の若しと謂ふ。七は促を修するの願。謂はく、長劫を以て促と爲さんと願す。上の句は但能見の心を轉す、此は所住の劫を廻す。是故に上の句に住の字有りて、此には無し。八は成壞の願、謂はく、世界の成壞に解達せんと願す。一は縁集の成は壞を作らず。二は劫の初、成劫未だ壞せずして、皆了達せんと願す。九は淨土を現するの願なり。十は正覺を

成ずるの願なり。九に力度の中に十義有り。皆堪能有りて、屈伏すべからざるが故に、力と名くるなり。一一各の初に名を標し、後に義を釋す。初の中に釋す。内に煩惱を離る等は是れ離過なり。具淨等は是れ成徳なり。此二は自行を成ずるが故に、自專正と名く。二に釋の中に、謂はく、勝力を以て理を正すに、他の時に能壞する者無き故なり。此二は、總じて利他を擧ぐ。三は拔苦の心滿じ、四は與樂の心、齊く悉く能く一切を覆護す、是れ力の義なり。此二は利他の心なり。五は持力内の法義を蘊め、六は辨力外に宜しく機に應ず、此二は利他の徳なり。七は大行具嚴力、八は弘願不斷力、九は因力多出、十は果力普く覆ふ。十に智度の中に、謂はく、病を識りて根を了し、理に稱ひて法を授くるが故に、智と云ふ。亦十句有り。中に於て、初の四は病の輕重を知り、次の三は根欲を知る。謂はく、一は病者の學位を知り、二は其心中の串習の所行を知る、即ち根行なり。三は欲樂の希望を知る、次の三は法藥を知る。初に境法を知り、二は智法を知り、三は境智の無礙無邊の法門を知る、故に法界と云ふ。

【第九に云云】九に所請の衆生皆能く度脱するを答ふる下。經に佛子よ。請ふ所の衆生を度脱す一といふ文。

第九に所請の衆生、皆能く度脱することを答ふる中に三あり。先に結前生後、二は教化一切の下、十句は、正しく度脱を顯す。中に於て、初の一は化して惡道を出でしむ。謂はく、初の句は善因を修し、後に苦果を出で、二は化して衆難を出でしむ。謂はく、精進修は出の因、超難は八難を出づるの果なり。次の三は教へて三毒を治す。但貪欲に二種有り。一は、色を貪るには不淨觀を教へ、二は、財を貪るには離欲觀を教ふ。嗔にも亦二種あり。

【自在等】大自在
天外道の説にして
萬有創造を以て自
在天の作爲とす。

【十力】佛の十力
一、是處非處を知
報を知る。二、三世の諸
禪解脫三昧を知る
四、諸根の勝劣を知る
五、種種の
解を知る。六、種種の
一切趣くべき道を
七、知る。八、天眼無
礙。九、宿命と無
漏を知る。一〇、習
氣永斷を知る智。

一は、有情を嘔るには慈心觀を教へ、二は、無情を嘔るには平等觀を教ふ。意に稱はざる無情の物と、意に稱ふ物とは、無二なるを以ての故に、平等と云ふ。愚癡にも亦二種有り。一は、頑無知には界分別觀を教へ、二は、邪見愚癡には因縁觀を教ふ。諸法は因縁より生じ、自在等の作に非ざるを以ての故なり。又因果を信ぜざるを以ての故に、因縁觀を教ふるなり。次の三は教化して三界を出でしむ。初は欲患等を離るることを教ふ、欲界を捨てて、初禪等に至るなり。二は増上觀を教ふ、色界の増上を捨てて、無色處に至るなり。三は細微の智を教へ、細想を照察し、斷盡せしむるを以て、空を證し三界を超出す。次の二句は、化して三乘に入らしむ。中に三有り。初には寂靜行を教ふるに三義有り。一は彼二乘は、生死の喧雜を離るる行を、修するを以ての故に。二は人空に證入する、寂靜行を修せしむるが故に。三は無餘涅槃を寂靜と名け、彼を修するを名く。二に大乘を樂ふに、教ふるに十力等を以てす。是れ凡小を超過し、大乘を嚴顯す。三に如初等の下は、所請度の義を釋す。謂はく、初發心の如しとは、其本願を擧げ、本を指して如と曰ふ。生の墮惡を見るは、願の所爲を擧げ、大師子吼は其願辭を擧ぐ、誓の辭言の決定せるを、師子吼と名く。病を知り法をもて濟ふは、正しく願の相を顯す。此中の文の意は、初發心より、衆生の苦を見るが故に、決定の言を以て、一切衆生を請取して、誓ひて悉く之を度することを顯す。具足の下は意を結す、知んぬべし。

第十に興隆三寶を答ふる中に三有り。初は標、次は釋、後は結なり。釋の中に初の九は

【第十に興隆云云】
十に三寶興隆する
ことを答ふる下。
經に一傳子よ…三
寶を…等の文。

【二は法寶云云】
この中三義あり、
初に教理行に約し
次に示法解行加護
に約し、後に經論
律に約す。

【三は僧寶云云】
僧寶に約せば、受
法、行成、統衆に
約す。

【第十一に所爲云
云】一切の所爲虚
しからざることを
答ふ下。經に「菩
薩は…清淨の口
業」等といへる文。

別、後の一は總なり。別の中に九句を三重と爲す。有が釋して云はく、初は教道に約し、次は證道に約し、後は不住の道に約すと今更に釋す。謂はく、初中後分の三なり。且く佛寶に約せば、初に發菩提心を教へ、次に已に菩提の願を發すとは、彼大願を讀して退轉せざらしむ。三は願に依りて行を起し、便ち佛因をして圓ならしむ、故に下佛種等と云ふ、因圓に果發するを、正覺の牙を生ずと名く。是故に始終相續きて、佛寶をして斷ぜざらしむ。二は法寶に約せば、初に深教の法を示し、次に理法を釋す、三に護持等は行法を明す、又釋す。初は總じて深法を示し、次に深く難解なるを以ての故に、解釋を須ひ、法を解し流行せしむ。三は法既に行じ已りて、即ち守護を加へ、身命を顧みず。是故に斯法寶をして、廣く行じて絶えざらしむ。又釋す。初は契經、次は是れ對治、後は是れ毘尼なり。故に須く嚴護すべし。三は僧寶に約すとは、初に威儀教法を受持す。是れ僧行の方便なり。次に六和敬を行す。僧行成就して行を成じ、乖かざるを和と曰ひ、行和相導を敬と曰ふ。謂はく、三業の慈を三と爲し、同戒同施を亦同捨と云ふ。同見も亦同慧と云ふ、故に六有るなり。後に善く大衆を御し、心に憂惱無しといはば、是れ僧の徳已に成じて、統攝縮御す。是故に能く僧寶をして常に存せしむ。下に總結、知んぬべし。此中に三寶章有り、別に説くが如し。雜章門を指す。

【第十一に所爲の境界虚からざることを答ふ。中に於て、初に結前、菩薩如是安住より下は生後なり。中に於て三あり。初は總、次は別、後は結なり。總の中に三あり。初は語

【別の中に：嚴を明す】十種莊嚴は境界虚しからざるを明す。

【二】此下、二段を以て答ふ。

【諸地等の六種】經に「清淨なる諸地乃至四無所畏」等といへるを指す

業空からず。二は彼菩薩の下は、身業虚からず、謂はく、所作謬らざる是なり。三は如是一切の下は、意業の智慧廻向虚からず。二に別の中に三あり。初は法、次に喩、後に合なり。法の中に、初に標、次に列、後に結なり。列の中に初の五は、自の依正の嚴を明し、後の五は法の攝生の嚴を明す。前の中に、初の三は三業即正報の嚴なり。次の二は依報の嚴なり。中に於て、初は土の離染を明す。謂はく、此土を受用し、道を長じ惑を減する故なり。後に土の淨徳を具することを明す。謂はく、常に光明有るが故なり。後の五は、一は勝業を攝し、二は神力を示して信を生ぜしめ、三は聖教を授けて、解を生ぜしむ。四は成佛を化現す。謂はく、涅槃とは此は是れ圓寂の義に非ず。梵に泥畔と云ふ、此に化と名く。是は此所用の故に、應に化地嚴と云ふべし。謂はく、是れ現化の處の故なり。五は機を量し法を授く、餘は結なり、知んぬべし。喩合も亦知んぬべし。上來初問を答へ竟んぬ。

第二に行所成の徳を答ふる中に、二十句有り。初に滅愚癡は、是れ前の問を牒す。具智慧故は是れ答なり。下の諸句は皆先づ問を擧げ、後に答を顯す。二は慈悲は降魔の問を答ふ。三は慧功德力は、制外道の問を答ふ。四は金剛定に入り、心の習垢を除くは、離塵垢の問を答ふ。上來は離過の行なり。五は於先佛所等は、具足成一切功德の問を答ふ。六は淨慧満足は、能離惡道等の問を答ふ。上の六は總じて是れ修行具足す。七は次第方便智慧力は、諸地等の六種を、衆徳圓備と名くることを答ふ。一は地、二は度、三は定、四は

【終位】第十地。
【中間の二位】十
行、十廻向の二。

通、五は明、六は無畏なり。上來は囚圓なり。八は白淨法力は、佛の依正の三業の問を答ふ。九は智慧分別速解諸法等は、得佛十力等の問を答ふ。前の句は、依正相好の果を明し、此句は功德差別の果を明す。此二は總じて果滿を明せり。上來は總じて是れ自利の門竟んぬ。十に願力、神力、智力は、隨其佛刹の問を答ふ。十一には應に隨ひて化を受く等は、隨成就衆生等の問を答ふ。十二には、菩薩如是修行等は、修行成佛の問を答ふ。十三に於無量刹等は、護持法藏の問を答ふ。十四には、成就四辯等は、分別廣説の問を答ふ。十五には、於大衆中無所畏等は、是れ問を擧し、具足増上般若は、是れ魔不能壞の問を答ふ。十六には、次第分別等は、攝持正法無窮盡の問を答ふ。十七には、具足大悲の下は、於一切世界悉能演説の問を答ふ。十八には、十王敬護、略して答の文無し。又此は是れ行果の故に答無し。又、除佛無過等は、亦是れ通答なるのみ。問ふ、十地の滿の後の受職の菩薩を、方に唯除如來餘無能過と云ふは何が故ぞ。此中の位は是れ、地前十住の處なるに、即ち此言有りや。答ふ、此は是れ圓教普賢の位相、陀羅尼の法なり。是故に、一住成滿の處に、即ち一切の諸位を攝し、皆盡す、下の海幢比丘の頂上よりして佛を出し説法する處は、十住の滿の後にして、即ち補處の成佛なり。更に十行等に入ると云はざるが如き、此説に同じ。此は初位に據りて言を爲す。下の小相品の中の如し、地獄より出て、即ち十地の無生忍の後の位に到り、離垢三昧の前に至る等は、彼は終位に據りて而して説く。中間の二位は準じて知んぬべし。十九に一切世間の恭敬等、亦答無し。同じく行果の

【三】

以下偈頌の

故に、亦同じく後の間の内に在りて通ずべし。二十に佛子の下は、得善根力增長白法等の問を答ふ。中に於て、初は總じて擧げ、後に釋成す。前の中に、初に身業の勝利、次に以慈心の下は、意業の勝、後に具足辯才の下は、語業の勝なり。下の釋の中に十一句有り。初の六は自分の因徳を成じ、一は證智淨を成ず。二は證の如く巧に説く。三は教に於て能く念持す。四は念の如く能く巧に説く。五は已得の法に於て能く記持す。六は未得の法に於て能く推求す。後の五は勝進の果徳を成ず。一は佛の外の力用を得。二は佛の内の實智を得。三は佛の巧説の智を得。四は正しく深法を説く。五は佛の勝智を成ず。謂はく、理量及び菩薩の願智等を具するなり。

(二二) 第二に偈頌の中に二十偈有り。初の十三の偈は、前の初段の十一種の行法を頌す。後に七偈有り。後の十八種の行所成の徳を頌す。前の中に、初の四偈は初の二段を頌す。謂はく、初の一偈半は所修の轉勝を頌す。謂はく、初發心住を名けて初地と爲す。已に發心功徳の藏を得たり。故に長養と云ふなり。次の句は放逸を減ずることを頌し、次の句は離癡闇を頌す。次の二句は菩提心不忘等を頌す。下の二句は如來の歡喜を頌す。次の一偈は重ねて修の勝ることを頌す。初の三句は不退轉を頌す。下の一句は離在家出家凡夫を頌す。餘は略して頌せず。後の一偈は重ねて佛喜を頌すこと知んぬべし。次に二偈有り、次の三段を頌す。謂はく、初の五句は超えて、第四の起清淨行を頌す。次の一句は却りて第三菩薩の所住を頌す。後の二句は第五の大願成滿を頌す。次の半は第六の得菩薩藏を頌す。

【二】大文第三に
生信分。經に「法
慧大衆奉行す」といへる文。

し、次の一偈半は第七の隨其所應而化度之といふを頌す。次の一偈は第八の不捨諸波羅蜜を頌す。次の一は第九の隨所請衆生皆悉度脱を頌し、次の一は第十の興隆三寶を頌す。次の二は菩薩の所爲虚からざることを頌し、自下の七偈は所行成の徳を頌す。中に於て初の一偈半は、十八句の中の初の九句、因圓果滿の文を頌するなり。次の二偈半は、護持正法及び廣説等を頌す。次の三偈は第十八の三業利益の文を頌す。謂はく、上の大衆の中に於て、安諦に威猛堅固にして、甚深の説法は惑を除くを頌する故なり。
下は所證理に契ふが故に、如來隨喜の所説、機に合するが故に、大衆奉行することを明す。是れ第三會竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第五

華嚴經探玄記

卷第六 是れ第四會 盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【一】當品は、第一夜摩天宮會の初品、佛機縁に應じ妙用を顯し、昇天するを叙ぶ、今初に名を釋す。
【夜摩】Yama具には蘇夜摩(Suyama)欲界六天中の第二天の名。

【空居天】空に居住する天の意にて欲界の夜摩、兜率化樂、色界の諸天をいふ。地居天はこれに反す。

佛昇夜摩天宮自在品第十五。初に名を釋するに二有り。先づ會の名は、處に約して夜摩天會と名け、法に約して、十行會と名く。準釋して知んぬべし。二に品の名は、佛は是れ化主、體に依りて用を起し、機に赴くを昇と云ふ。應感何れの處ぞ、謂ゆる夜摩なり。夜摩とは、若し具には、蘇夜摩と云ふ。蘇とは此には善と云ふなり、夜摩とは此には時と云ふなり。謂はく、此天に日月の、時節を知るべき無し。故に『大集經』に云はく、「赤蓮華の聞くは是れ晝、青蓮華の聞くは是れ夜と觀ず」と『俱舍論』には、翻じて唱樂天と名け、亦多戲樂天と名く。天とは是れ、淨の義、光明の義なり。此天は樂に著して、全く善を念はず、頼に孔雀王菩薩有り。及び彼天主を牟修樓陀天王と名け、毎に以て開導す、或は實天伴を失ひ、悲泣して王に告ぐ。或は化天水に墮して、怖れて厭を生ぜしむる故なり。問ふ、「前後俱に是れ不離にして昇る、齊しく自在と名くべし。何が故に此會獨り、自在と標するや。」答ふ、「動ぜずして空居天に昇り遊ぶ。前の地居に過ぎたるが故に、自在と稱す。創めて地居を越え、兜率に同じからざるが故に、獨り名を標す。又行は玄に入りて、前の解に過ぐるに約する故に、自在を以て之を表す。又解行相接するを以ての故に、初利に次

【内凡】 似解を得るをいふ。大乘にては十住以上三賢の位をいふ。
【二】 當品の依て來る意を述す。

【三】 三に宗趣を明す。

【四】 四に本文を釋す。
【四品の經】 當品の外に、夜摩天宮菩薩說偈品、功德華聚菩薩十行品、菩薩十無盡藏品の三あり。

きて夜摩に至る。俱に是れ内凡にして、前の信に同じからず。果を感ずること、此に在るを以て、行は相を離るるを表す、故に此空天に届る。

二に來意とは亦二有り。初に會の來るは、謂はく、解に依りて行を起すか故に、前の十行の間を答ふるが故に、是故に來れり。二に品の來るとは、謂はく、明法は是れ前會の住の極、昇天は是れ此會の由致なり、隣接の次第、是故に須らく來るべし。又、明法の解深、用を起して行に入る、是故に昇天す、故に須らく來るべし。此は法に約して辨す。

三に宗趣の中に、亦二有り。初に會の宗とは、人に約すれば、化主及び助化、法に約すれば、教事及び義理にして、皆各體相用、相融無礙なり。前に準じて之を知れ。俱行に就いて異と爲す。二に品の宗とは、處を嚴り佛を請し、如來は感に赴く。是れ此所明なり。

四に文を釋せば、此會に四品の經有り。初の二は是れ序なり、後の二は正説なり。前の中に二有り。初は是れ請佛の序、後は是れ讚佛の序なり。又、初は是れ佛の昇天、後は菩薩の集なり。佛は是れ化主なるを以ての故に、先に於てし、菩薩は是れ伴なれば、次に後に居す。又、初は果、後は因、初は能化、後は所化の故なり。初の中の科文は、一の釋は、

前の會の初の説に同じ。又釋するに七有り。初に十方の覺樹に、法王同じく現す。二には、十方の諸佛、各夜摩に昇る。三には、十方の天王、各佛を嚴請す。四には、十方の諸佛、請を受けて殿に昇る。五には、十方の天王、益を獲て佛を敷す。六には十方の諸佛、同

【文の中…知るべし】正しく文相を釋す。

じく華座に昇る。七には、十方の寶殿、各皆廣闊なり、向が故に、皆十方に於て、同じく辨する。圓教の法門は、法界に亘周し、凡そ一法起れば、必ず一切俱に現するを以て、是故に將に此法を説かんとするに、理偏屈に非ざるが故に、十方無盡に同説することを致す。即ち一説一切説等の故に。此中に三重の無礙有り。一は一即多の故に。一樹下の佛は、即ち一切の樹下なり。二には、動即靜の故に。樹下の佛は即ち天に昇るなり。三には動靜即一多の故に。是故に一切處を動せずして、天に昇るなり。此は是れ十佛の具德、無礙圓融の相なり。餘宗の辨する所に非ず、之を思準せよ。

文の中に、前の二段は、前の會の釋に同じ。第三の嚴請の中に三有り。初に遙に勝縁を觀る。二に座を嚴りて根を表す。三に佛を請し欲を顯す。嚴座の中、初は總、後は別なり。總の中に前の會には一萬、此中には十萬有るは、位の増相を表す。又、前の殿は實に非ず、此中は寶嚴なることは、行の貴ふべき具德の相を顯す。別の中に二十三句有り。初の七は器世間の莊嚴を辨じ、次に十萬天子の下の七句は、衆生世間の莊嚴を顯し、後に十方如来の下の九句は、智正覺世間の莊嚴なり。又釋す。初の七は外事の嚴、次の六は内報の嚴、後の十法門は法門を嚴るなり。法門を嚴る中に、初の句は因相、二は果相、三は德相、四は定相、五は願相、六は勝相、七は法相、八は用相、九は妙相、十は教相なり。三は請佛の中に、初に結前、後に正請なり。第四に請を受けて殿に昇るは、機縁の相契ふことを顯す。先に此土を明し、後に餘方に類す。第五に天王獲益の中に、亦先に此界を辨じ、後

【一】當品は、序説のうち、無數の國土より菩薩來集し、十林の菩薩の偈を説きて、佛を讃嘆す。初に名を釋す。

【餘義】天の名を釋する等をいふ。

【二】次に廣く文を釋す。

【世界を同じく云云】以下、本文の世界、佛、菩薩の名を釋す。

【十度】菩薩十波羅蜜の行。

【第二に放光】經の一時：顯現せり。の文。下。

に餘方に類す。前の中に、先に定の益を得、後に慧の益を發す。慧の中に、先に自善根を憶し、後は昔の十佛を歎じ、今の處の勝るるを顯す。現實には過去の一切の諸佛、皆同じく此に於て、十行の法を説く。然るに今、位相の漸く増することを、表するが爲の故に、前會の十佛、向前の次第に於て、此名稱佛等の十佛を擧げて、之を歎す。向後の迦葉等は、向前の諸の餘の佛なり。皆曾て同じく此處に於て、十行の法を説かざるに非ず。第六には座に昇り、第七には殿を廣す。並に前に准じて知んぬべし。

夜摩天宮菩薩說偈品第十六。初に釋名とは、白體の妙因の行集り、文斑にして、教則も顯彰す、故に菩薩說偈と云ふ。餘義並に來意及び宗は、並に前の釋に同じ。

四に文を釋せば、三義前に同じ。初に衆を集むる内に、先に此界、後に類通す。前の中に、初に、所從來の處を顯し、後に佛神力の下は、菩薩の集來を明す。前の中に、初に分量の遠近なることとは、位の漸く増することを顯すが故に、前は百、此は十萬等なり。餘の分齊は上に同じ、之に准ぜよ。二に正しく本處の三世間の相を顯す。世界を同じく慧と名くとは、前の智慧を用て、行の所依と爲すが故なり。佛を同じく眼と名くとは、行心、法を見ること、明白なるを表するが故なり。又、諸度を行じ、世間を導引することを表するが故なり。菩薩を同じく、林と名くるは、法界の行を行じ、法界の徳を成ずるを表するなり。徳、高きを樹に方へ、行、廣きを林と稱す。十度鬱蘭として、齊く萬行を修し、森然として潜かに發す、法況相似するが故に、名けて林と爲す。餘文は知んぬべし。第二に放光の

【三】・偈讚の中に
十段あり、初に功
徳林菩薩の文を釋
す。

中に、足指は是れ光の出處なり。但し足指は行住の二力有り。前は住を彰し、此は行を顯すが故に別なり、餘は前の釋に同じ。

第三の偈讚の中に、十菩薩の偈を、即ち十段と爲す。初の一は總じて此會の事理を敍べ、後の九は別して、佛徳の義門を顯す。先に徳林とは別説の人を標し、是會の主なるを以ての故に、先づ首に説く。承佛神力は敷説の所依なるを顯す、普觀十方とは四意有り。一に「地論」に云はく、「我慢無く偏心無きことを顯すが故に」と。二には、所説の法十方に遍きを顯すが故に。三には、十方等く化するが故に。四には、十方の夜摩、同じく此説有り、合會同時にして、方に説くが故に。十一行の頌を二に分つ。初の七は總じて、會中の事を擧げ、後の四は、佛の自在の徳を敷す。前の中に、初の一頌は、此品の放光の事、近きを以ての故に先に顯すなり。次の二頌は、前の品の中の事なり。中に於て、初の半の頌は此界、下の半の頌は、餘の十方に類す。次の四頌は、此品の中の事、即ち十方なるを、通顯し顯示す。次の一頌は、覺樹を離れずして、夜摩等に至る。文に人中とは、是れ前の一の闍浮なり。道場とは是れ、前の菩提樹下なり。次の下の四は、佛徳を敷する中に、初の一は佛徳の深く、用の廣きを敷じ、各半偈に顯す。次の二は、前の用廣きを釋す。謂はく、一は應世離世亦各半に顯す。二には一多無礙にして、上半は標、下半は釋なり。此れ即ち一盧舍那身を顯す、一切の樹王の下に顯るる者是なり。後の一は、前の徳深きを釋し、亦上半は標、下半は釋なり、知んぬべし。

【第二に…彰す】
二に慧林菩薩の文を釋す。

第二に因果の益を悟るが故に慧林と名く。十偈を二に分つ。初の一は章を標す。謂はく、上半は佛徳の逢ひ難きことを擧げて、値はば度すべきことを明す。下半は、衆の遇ひ難きことを擧げて、値はば欣ぶべきことを顯す。離垢の大人は是れ菩薩なり。後の九の釋の中に、初の一は、菩薩衆遇ひ難き所以を釋す。上半は自の智明を顯し、下半は物を益すること、勝るることを辨す。後の八は、佛徳の遇ひ難き所由を釋す。中に於て初の六は、正しく佛徳を顯し、後の二は、解に約して校量す。前の中に初の一は、佛、燈と爲りて闇を破ることを明す。二には六度圓照す。三には勝徳情を超ゆ。四には寂用生を益す。五には、見聞益を獲。六には因深果厚の下は、知解の益を明す、中に初の一は、供佛に寄對して、解の益を校量す。後の一は廣施に寄對して、以て迷の損を彰す。

【第三に…云ふなり】
三に勝林菩薩の文を釋す。

第三に、殊勝の法を悟るに由るが故に、勝林と名く。十偈を二に分つ。初の四は、佛光の深廣なるを數じ、後の六は、理を照し、佛を見ることを明す。前の中に、初の二は喻を擧げ、後の二は法説なり。前の中に八句有り。初の句は、佛の成佛の時を喻ふ。二は佛心の垢障盡くるを喻ふ。三は佛身より、淨光を放つに喻ふ。謂はく、目を佛身に喻ふるなり。四は、光の普く照すに喻ふ。五は、光の廣多に喻ふ。六は、邊を知らざるに喻ふ。七は、智尙ほ知らざるに喻ふ。八は、何況愚癡等を喻ふ。下は法説の中に、初の一は、光の廣大なるを顯し、後の一は、光の甚深なるを顯す。同じく法性なるを以てなり。下の六の中に、初の三は離相、次の一は離性、後の二は疑を釋す。前の中に、一は三世の相を離

れ、二は生滅の相を離る。下半は觀の益を明す、後の諸偈皆此に准ぜよ。三は有ゆる相を離る。次の一は離性なり。縁に従ひて虚假なるを以て、是故に無性なり。無性の故に所解無きなり。次の二は、疑を釋して無生を顯す。疑ひて云はく、若し縁起無性ならば、何に因りてか生有るや。釋して云はく、所生に由るが故に、所生は即ち是れ妄想なり。妄想は縁に依りて、起るを以ての故に、所生と名け、此妄想執するに由るが故に、生有りと説く。而も實には生無し、此は所執の性に約す。又釋す。所生は是れ果なり、此果に待對するに由りて、因能く果を生ずと説く。既に依他は生因無し、亦是れ得無きが故に、不生なり、此は縁起の性に約す。又釋す。言ふ所の有生とは是れ、如來藏隨縁の義を明すなり。所生に由るとは、能熏の熏するに由るが故に、是故に縁に隨ふ。能熏は既に虚なれば、所熏は動ぜず、故に亦無生なり。彼能熏も亦是れ、心の所生なるを以ての故に、所生と名くるなり。此は圓成性に約す。此偈は是れ所に待し、能生を泯す。後の偈は能に類し、所生を遣るが故に、所生觀亦如是と云ふなり。

【第四に：得るなり】四に無畏林菩薩の文を釋す。

第四に深理を信樂するに由りて、惡趣を懼れず、故に無畏林と名く。十偈を五に分つ。初の二は、此佛の所説の法を聞信するの益を明す。先に所聞を辨ず。此處とは此華藏の處なり、又是れ此佛の、所説法の處なり。上の二句は廣大を顯し、次の句は隨縁を辨じ、下の句は不變を顯し、後の一偈は、此法を聞信する、利益を顯すなり。二に二偈有り。餘方の佛法を聞きて、益有ることを明す。先に所聞を明す。初の半は聞處の廣きことを顯すな

り。次の句は所聞深きなり。下の句は開きて忘れざるなり。後の偈は利益を彰すに、上半は前の所聞を躒す、次の句は之を用ひて佛を求め、下の句は、求むれば必ず得ることを明す、故に究竟等と云ふなり。三に二偈有り。過去の佛法を聞信して、益有ることを明す。各上半は所信を擧げ、下半は信の益を明す、知んぬべし。四に二偈有り。現在の佛法を、聞信して益有り。中に於て、初の句は能信、次の二句は所信の佛、下の句は所信の法、後の偈は益を顯す。聞を得ること難きを以ての故に。又釋す。前の偈の上半は、現佛を信ずることを明し、下半は信益を明す。謂はく、彼は此信に由りて、等正覺を成する等なり。後の偈は、法勝れて聞き難きことを顯す。五に二偈有り。總じて上來の、一切佛法に就きて、修學を結勸す。中に於て初の偈は、持を勧め説を勸む。初の句は上の法を躒し、次の句は持を勧め、次の句は説を勸む。下の句は勝を敷じて之を勧め、後の偈は、持を勧め、行を勸む。上半は行を勧め、修行を勸むるに由りて、二嚴を成するなり。次の句は持を勸む。前と別なることは、前は持に由るが故に、能く説き、此は持に由るが故に能く行す。下の句は、修行の利益を明す。謂はく、菩提を得るなり。

第五に無慚分別を離るるが故に、慚愧林と名く。十偈を二に分つ。前の九は、別して佛法を敷じ、後の一は雙べて前の二を結す。前の中に初の一は、佛の所證の法を敷す。上半は法の勝、下半は信の益なり。後の八は、佛の能證の智を敷するに、二有り。初の一は、證法の周盡を明す。上半は一切の佛、自の所證を説くことを明し、下半は一佛の慧證、盡

【第五に…結す】
慚愧林菩薩の文を釋す。

さざること無きことを明す、是故に難思なり。後の七は無證を證と爲すことを明す。中に於て、初の「一は標章なり。謂はく、上半は證無く、下半は證を爲す。上半の中に五の釋有り。一は智に約して釋す。謂はく、此正證無分別智は、世間の分別智より生ぜず、亦愚癡及び色法等より生ぜず。故に『攝論』に云はく、「此智は智に非ず、非智に非ず」と。智に非ずとは、是れ分別智に非ず。非智に非ずとは、是れ色法に非ず。此中に非智は、愚癡に據るなり。二には、境に約して釋す。謂はく、理を證する所の智は、但了因と爲る、生因に非ざるが故に。愚癡無智は生了俱に非の故に、皆不生と云ふなり。三には境智正會に約して釋す。謂はく、智は境に如するが故に、智に非ず、境は智に如するが故に、無智に非ず。四には、寂照に約して釋す。謂はく、智即寂の故に、智に非ず。照を失はざるが故に、無智に非ず。五は絶待に約して釋す。謂はく、智相盡くるが故に智に非ず。智の待すべき無き故に、無智なり。下半の中に、此の如きの無智の智、方に能く法を照し、暗を滅するが故に證と爲るなり。後の六箇の中に、初の五は、上半の章を釋し、後の一は下半の章を釋す。五の中に、皆上半は喻を擧げ、下半は法合す。初の「一は、愚智性別の喻、二は同じく虚妄を成ずるの喻、三には性相乖くの喻、四には愚智縁隔の喻、五は用相感すること無きの喻、五は皆愚智の事別を顯す、俱に眞ならざるが故に、迷悟斯に絶し、智相盡くるなり。後の一は妙智の勝用を釋すの中に、上半は喻を擧げ、伽陀は此には良薬と云ふ。謂はく、能く一切の毒を除く。下半は法合なり、知んぬべし。後の一は雙べて結する中に、上

【第六に：知んぬべし】六に精進林菩薩の文を釋す。

半は佛智の勝を結し、下半は上の法勝を結す。

第六に勤めて理事を觀じて、而も分別無きが故に、精進林と名く。十偈は總じて、佛の照無差別の智を數す、初の一は總、餘の九は別なり。前の中に、諸法の性相無差別の義は、唯佛のみ能く知る。然るに委細に具に知るを、分別知と名く。次の句は備に知る。下の句は深く知るなり。別の中に皆、初は喻、後は法なり、初の一は眞妄交徹の喻なり。謂はく、眞に依りて妄を起すこと、金色を現するが如し。非法は是れ妄なることを喻ふるに金色を以てす。無體即眞の故に、性は別無し。又、眞心隨緣して、法非法と爲る、心の體、殊らざるが故に性は別無し。是故に『楞伽』に云はく、「如來藏は善、不善の因と作る」と。又『涅槃』に云はく、「不善と俱なるを、名けて無明と爲し、善法と俱なるを、之を説きて明と爲す。明と無明とは、其性二無し、無二の性、即ち是れ實性なりとは此謂なり。又『維摩經』の不二法門品は、皆是れ此義なり。二に兩俱無實の喻なり。謂はく、衆生は法に喻へて、内報に約し、非生は外器に約して、非法に喻ふ。皆定性無く、俱に有ならず。又釋す。衆生即無我なるを以ての故に、衆生は不實なり。無我は衆生を礙へざるが故に、非衆生も亦眞ならず。理事相奪するが故に、皆眞ならず。經に云はく、「我と無我とに於て無二」とは、是れ無我の義なり。又、衆生即非なるを以ての故に、非相も亦離す、故に皆眞ならず。法合は知んぬべし。三に生に滅相無き喻なり。謂はく、生法は即ち無生なり。猶し滅の相無きが如し。又、此未來は當相即ち無し。猶し未來に過去の相無きが如し。四に

【餘無餘】有餘涅槃、無餘涅槃をいふ。

【第七に明す】七に力成就林菩薩の文を釋す。

は、滅に生相無きの喩なり。謂はく、生法即ち不生なり、猶し已滅の法の如し。又、過の法は即ち過無し、猶し現未無きが如し。五には、法體離取の喩なり。謂はく、涅槃は離相の故に取るべからず。報煩惱の滅する處に約して、餘無餘を説く。而も實滅の理は、差別有ること無し。六には、性無差別の喩なり、謂はく、數法殊らざれば、法は空性に同じ。七には、隨緣異を成ずるの喩なり、謂はく、十數を以て本と爲し、増して多の十に至るに、智慧は上に於て、百千等の解を作すが故に差別と云ふ。然るに彼數に於て、皆是れ諸の十の故に、皆是れ本數と云ふ。況んや彼眞理は、緣に隨ひて異を成ず。彼異法を求むるに、一眞に異らず。略して法合無し。八には體堅無壞の喩なり。謂はく、同じく有爲なりと雖も、恒常に湛たり。九には、異を報じて同に乖くの喩なり、知んぬべし。

第七に世間の空に達するを、力成就と名く。偈の意は、染淨の空を會することを明す。謂はく、眞佛を歎ず。十偈を、二に分つ。前の九は境を會し、後の一は行を成ず。前の中に初の六は、緣起の性に約して、以て無性を顯す、後の三は、所執の性に約して、以て無相を顯す。前の中に二あり。初の四は、世法の不生を顯し、後の二は、出生を類顯す。前の中、初の二は生空、後の二は法空なり。前の中に、初の一偈半は、未を推して本に歸し、後の半は、未を以て末を顯す。謂はく、心熏に隨ひて、變じて以て衆生と作る。心既に幻の如くにして眞ならず。即ち心と衆生と、寧ぞ實有るべけんや。下の二の中に、初は世間は虚と知らざるに由るが故に、還りて復空世間に輪轉す。後は世間は苦と知らざるに由

【下は成行を明す】
最後二頌を釋す。

【第八に：離る】
八に堅固林菩薩の
次を釋す。

るが故に、常に苦世間に流轉す。此中に、世間は自作他作に非ず、四の重有り。一には外道に約す云云。次の二は出世に類する中に、初は標なり。謂はく、此世間に翻するを、名けて出世間と爲す。世間は既に空なり、寧ろ出世行りて、取るべけんや、故に二俱非眞と云ふ。上半は理實、下半は情妄なり。後の偈の釋の中に、初の三句は、世の空を釋し顯す。下の句は、世對無きが故に、出世も亦眞ならず。又、此文に准するに、俱世を遮するを出と名く、別の表示無きが故に、亦空なり。次の二は、所執の無相に約する中に、亦二あり。初の二は世間空、後の一は出世に類す。前の中に、初の一は情を徴し、後の一は理を顯す。前の中に、初の句は體を徴し、次の句は相を徴す。下の二句は凡の迷失を明し、後の偈の中、上半は情執の無を明し、下半は理性の顯るることを明す。後に出世に類する中に、佛及び法は是れ出世、並に情計に約するに、俱に所有無し。下は成行を明す、上半は妄を滅して眞を見、下半は法佛常に現するを明す。

第八に佛法身を照すを、堅固林と名け、佛の法身の體、寂なることを數す。十偈を二に分つ。初の七は法を顯し、後の三は觀を成す、前の中に、初の二は、能所の二章を標す。先に所を顯し體寂なるを數す。謂はく、地より草木の種を生ず、然も地の中に於て、草木の種を求むるに、實に不可得なり。佛の機に應するに、現に差別有れども、佛に於て別を求むるに、竟に不可得なるに喩ふ。故に下に、無量の身は佛に非ず等と云ふ。後に能數の平等を顯す、見つべし。下の五は廣説する中に、先の三偈は、前の能數の空なることを釋す。

【第九に…故なり】
九に如來林菩薩の
交を釋す。

【學生…緣起し】
眞如門に依りて生
滅緣起する義なり
【名言】二種子の
一。名言種子をい
ふ、これ第八識
色法の諸法を生ず
る、親因緣となる
種子なり。
【有支】十二支の
一。善惡趣を生ず
る差別の因をいふ
【心眞如門】如來
藏の一心、體性平
等一味にして差別
の相を離るるをい
ふ。これ不變眞如
なり。

一は業の非有なるを明し、二は業を以て身に類するに、身も亦有に非ず。三は業身を以て識に類するに、識も亦有に非ず。下の二偈に、前の所數の非有なるを釋する中に、先に應機の大用を明し、後に體若干に非ざることを明す。下の三は、行の益を明す中に、一は法身を證見する益、二は相を破し眞に歸す、三は實を證し相を離る。

第九に、心眞如を觀するに由るが故に、如來林と名く。十偈を二に分つ。初の六は、心凡と作ることを明し、後の四は心聖を起すことを明す。前の中に、初の四偈半は喻を擧げ、後の一半は法合なり。前の中に初の二は、是れ畫師の畫を造るの喻にして、妄法の、眞に依ることを喻ふ。次の二は、畫心の畫を造る喻を明し、妄、心に依ることを喻ふ。後半は畫師の、畫心を知らざる喻を明し、緣起の無知に喻ふ。此中の意の説かく、一切衆生は皆、眞に依りて緣起し、本識の心は、名言有支我見等の塵に隨ひて、六道の身現するこ
と有りて、緣起虚假にして、無を礙へず、有を壞せず。是故に會攝するに、其二門有り。若し緣を會して實に従へば、即ち差別の相盡きて唯一眞如なり。若し未を攝して本に歸せば、即ち六道の異形、唯心にして轉ず。初に約すれば緣起存せず、是れ眞如門の故に。後に約すれば緣起壞せず、是れ生滅門の故に。是故に存壞無二、唯一緣起、二門無礙にして、唯是れ一心の故に。起信論に云はく、「一心の法に依るに、二種の門有り。一には心眞如門、二には心生滅門なり。然も此二門に皆各總じて、一切の法を攝す」と、此謂なり。今此文の中の畫に亦、二義あり。一は壁に依るが故に唯平なり。二には畫師の巧心に依る

【生滅門】如來藏の心、縁に隨ひて差別の相を起すをいふ、これ隨縁眞如なり。
 【初の二偈は初門】眞如門に依るをいふ。

【上半は顯す】變心と變色と、心と色と。

が故に、高下有るに似たり。初の二偈は初門を明す。謂はく、初の偈の上半は、熏に隨ひて異有ることを喻へ、次の句は、異るとは妄情なることを明す。下の句は、相、盡きて眞に同じ。四大を眞心に喻へ、也た彩色を縁起の虚相に喻ふるなり。後の偈の上半は、眞妄の不即を明し、上の句は能造、所造に非ざる喻を明す。妄を攝するの眞は妄に即せず、性眞なるを以ての故に。下の句は所造、能造に非ざるの喻を明す。眞に依るの妄は、眞に即せず、性虚なるを以ての故に。下半は妄の、眞に離れざることを明す。謂はく、虚は眞に徹し、虚盡きて眞現するを以ての故に、不離と云ふ。是故に不離、不異、不即なること、之を思へ。次の二偈は、畫像の、畫心に依るを、後の生滅門に喻ふるを明す。此畫師の心は、本識等の能變の心に喻へ、畫の色は五蘊の身所變の報に喻ふ。上半は能所の不即を明し、下半は本末不離を顯す。謂はく、心は本、形は末なるを以て、所以に不即なり。心變じて報と爲る、是故に不離なり。此は、心能く境を變ずるに、心體は境に非ず、境は心によりて變ず、境相は心に非ず。心に從りて變ずるが故に、境は心を離れず。能く境を變ずるが故に、心は境を離れず。是故に不即不離と雖も、要す是れ識にして唯境に非ざること明すなり。問ふ、前の偈は、但彩の、四大を離れざることを明し、四大の、彩を離れざること明さず。何が故に、此と同じからざるや。答ふ、前には、眞は妄を變ぜざること明し。此は心境を變ずることを顯す、故に同じからず。後偈の上半は、畫師の工巧の心を、能變の識に喻ふるを明す、無住を本と爲すが故に難思なり。下半は所現の畫色を、所

【第二に心云云】
經の「心の如く佛も亦爾なり」の頌を釋す。

【佛は已に知る】
經の「諸佛は悉く一切は心より轉ず」と了知すの文をいふ。

變の相に喩へ、各心に從ひて現じて、體の相知るべき無きを顯す。後半は畫師、此畫皆心に從ひて現すと知らず、諸の衆生の、自心の量に迷ふに喩ふ。下の「一偈半は法合なり、知んぬべし」。

第二に心、佛を起すことを明す中に、心の如く佛も亦爾なりと、凡を將て佛に類す。心の、凡を造るが如く、作佛も亦爾なり、皆心に從ひて起る。佛の如く衆生も然なりと、佛を將て凡に類す。下の二句は、會して以て同を顯す。謂はく、心佛と作るに佛と別無し。心凡夫と作るに、心と凡と別無し。能所依同なるが故に無別と云ふなり。又釋す。此は是れ、第二に結勸修學の中に、初の一偈は本末を融結す。本末に三有り。一は唯本なり。謂はく、眞理は性淨本覺に就くを以て佛と名く。二は唯末なり。謂はく、所變の衆生なり。三は俱なり。謂はく、能變の心は、眞に依りて、能く變ずるを以ての故に。此三緣起は融通無礙なり。一に隨ひて全く餘を攝す。性異らざるが故に、無差別と云ふなり。次の一は、益を擧げて修を勸む。上半は、佛は已に知るを明し、上を擧げて下を勸む。次の句は下を勸めて上に同す。下の句は、結して知の益を明す、次の一偈は、身心の不即不離を明す。上半は、身心相別るるが故に不即なり。下半は、心に依りて身を現するが故に不離なり。下の「一偈は修を勸む。上半は所求を擧げ、下半は理に依りて觀ぜよと勸む。謂はく、此は心を會して實に入るときは、則ち是れ如來る。此に返するを去と爲す故なり。又釋す。亦是心、佛の相を變じて現する故なり」。

【第十に：明けし】十に智林菩薩の文を釋す。

【前の中六云】第一の偈。

【八時の如く：無し】十地論十一、十四左に「八難の時智臣語るべからず心王身是の如し其時に説くべからず」とあるの意【五の過失】十地論二、十二右に出づ。一、不正信二、漢勇猛三、誑他四、誘佛五、難法

【心行處説】究竟の眞理は、心の能く思念するところ

【第二に佛：數す】佛の應現の徳を明す。應化身なること知るべし。經の論は顯意珠等の

文。

第十に佛の體用、深廣なることを知るが故に、智林と名く。十偈を三に分つ。初の三は、佛の法身の離相を歎じ、次の一は能く佛を歎ずれば、一功德を得ることを明し、次の六は佛の應、色聲を現することを歎す。前の中に初の一は、六塵の相を離るることを明す。謂はく、初の句は香味觸の三塵を離るるが故に不可取と云ふなり。次の句は色塵を離る、次の句は聲塵を離る、下の句は法塵を離る、次の一は量無量の相を離る。無量は是れ多、有量は是れ少とは、皆是れ妄計にして俱に取るべからず。次の一は言語の相を離るるに二義有り。一は謂はく、八時の如く、説くべからずして説くが故に、自他益無し。二は法身は言説の境に非ずと知らずして、言の如しと謂ひて、他の爲に説くときは、則ち有無に墮す、

四謗等の故に、自他を欺誑す。下の、聲に隨ひて義を取るに、五の過失有る等の如き是なり。上の二偈は、法身の心行處説を明し、此偈は言語路絶を明す、故に不可思議なり。第二の一偈は、佛、所得の功德を歎ずることを明す、智んぬべし。

第三は、佛應現の徳を歎す。六偈を二に分つ。初の三は、佛の身相を明す。謂はく、無身に身を現すれば、身即無身なり。後の三は佛語の相を明す。謂はく、無聲に聲を現すれば、聲は則ち無聲なり。前の中に、一は所現の、眞に非ざるに喩ふ。如意珠の、黄衣を以て映するときは、則ち黄色と作るが如し。此に二義有り。一は珠の黄なるに非ずして黄を現す。二には所現の黄は、實の黄に非ず、佛身も亦爾り、機昧じて現す。二義同じく喩ふる故に、下の句に合して、佛、亦如是と云ふなり。智慧莊嚴經に、廣く此喩を説くが如し、

【佛地なり】佛地論の意に依るといふ。

【第二に佛：明けし】經の「如來の聲を聞く」等の文の下。

【一】當品は正しく、夜摩天宮會の正説にて、當位の行法を示す。今初に名を釋す。
【莊嚴の功】莊嚴感果の功あるをいふ。

【二】二に來意を明す。

應に知るべし。二は能現も見を離るるの喻なり。謂はく、空に依りて色を現じて、而も空は可見に非ず。佛の、機に應じて色を現じ、而も佛は色に非ずして、見るべからざるに喩ふ。下の一は法合を擧ぐ、謂はく、「佛地」なり。大智に二義有り。一は圓明の義にして、前は之を喩顯す。二は離相の義にして、後に之を喩顯す。皆機に應じて色を現すること有り、而も色に非ざるが故に、能く觀るもの莫しと云ふなり。此文に准ずるに、自受用身は、色等の佛の功德無きこと明けし。【佛地論】に云云。

第二に佛の言聲を明す中に、初の一は非聲非不聲を明す、各半偈は、依證を以て、實を會することを顯すが故に離聲不知と云ふなり。次の一は、深を敷く學を勸む。莊嚴無上道とは、實に趣くの益、諸妄を遠離するは、虚を捨つるの益なり。後の一は、非説非不説を明す、各半偈に顯なり、知んぬべし。亦是れ佛地無説の説は、機縁に有ること明けし。

功德華聚菩薩十行品第十七。初に名を釋せば、十度の、體を利潤するを功德と名く、莊嚴の功有るは、華の果を結ぶが如く、衆行交飾すること、華聚の如し。又、徳は是れ行體、華は是れ行用、聚は是れ行相なり。菩薩は是れ人にして、彼徳を有する者、則ち有財釋なり。此は是れ、功德林の異名なり、下の金剛轉廻向品の如く相似せり。十行は是れ位法、則ち帶數に名を立つ。菩薩の十行は、亦依主に稱を受け、入法に章を題す。

二に來意とは、前は序分既に彰る。正宗宜しく顯すべきが故なり。又、前は衆盡く集れり、次は正しく説きて、授くるが故に、次に來るなり。

【三】三に宗趣を明す。生死海を渡る行法の意。

【六慧】聞、思、修、無相、照寂、寂照の六。

【六忍】信、法、修、正、無垢、一切智忍の六。

【法忍】十行住の菩薩に在りて、一切法空なりと知りて、化益の大行をなす。

【六種姓】習種性、性種性、道種性、聖種性、等覺性、妙覺性。

【過去因忍】過去これ三世因果の諸相を觀じ、我人衆生等の想を造除する三意止なり。【過去因忍】過去の無明と行の二を

第三に宗趣とは、三有り。一には、三乘寄位に約する法を明す。二には、別の行法を明す。三には、一乘普賢の行位の法なり。經の中に、諸の聖教、散説多門なり、統收するに十有り。一は因果二度の中に、是れ因度の位なり。二は七阿僧祇の中に、地前の三の内、第二の精進僧祇の攝なり。三は地前の四行の中に、破虚空器三昧の行を成ず。四は法身の四德了因の中に、樂德了因の種を成ず。五は地前の方便四人の中に、是れ第三の十行の人なり。此上は並に、梁の『攝論』等に説くが如し。六は六慧の中には、是れ第二の思慧の位なり。七は六忍の中には、是れ法忍なり。八は六種性の中には、是れ性種性の攝なり。此上は、並に『本業經』等に説くが如し。九は三持の中には、是れ行方便持の攝なり。『瑜伽』『地持』に説くが如し。十には地前に四部を除く中には、是れ第三に聲聞の畏苦を伏除して、銀輪王の報を得しめ、三天下に王たり。第二に、其別行を明さば、『仁王經』を伏除して、銀輪王の報を得しめ、三天下に王たり。第二に、其別行を明さば、『仁王經』の、第二性種性の位に十心有り。謂はく、身受心法、不淨苦、無常、無我を觀ず。三善根は則ち施と慈と慧と三なり。意止は、謂はく、過去の因忍、現在の因果忍、未來の果忍なり。已に我人知見衆生等の想を過ぎ、及び外道の倒想も壞する能はざる所たり。『本業經』も亦同じ。又、行に二種有り。一には通なり。謂はく、信等の十行、二には別なり。謂はく、此十度なり。此中には別を明し、通には非ず。別の中に復二有り。一には因、二には果なり。此中には因波羅蜜を明すなり。此れ並に三乘教の中に、法に寄せて行を顯すに約す。第三に圓教に就きて、普賢の行を明さば、則ち此十行の中に、具に前後の諸位の中の、

觀じ無因の見を除く。

【現在因果忍】現在

の愛取、有を引くことを觀、現在また過去の無明行の果たるを觀じ、無因無果の見を除く。

【未來果忍】現在の愛取有の果たる未來の生は、老死の果を生くことを觀じ、無果の見を除くをいふ。

【四】本文を釋するに、初に總じて二品を判す。

【初品の中云云】以下、別して當品を釋す。

【五】七分の中、初に三昧分を釋す

【己が力顯はす】經文に「佛の神力を承け」といふを指す。

【三は正しく得定を明す】經に「三昧に入り已りて」等以下なり。

行を攝す。一切皆盡く。是故に此位滿の際には、則ち究竟位に至る。第十行滿に、入因陀羅網法界自在は、如來の無礙解脱を成就して、人中の雄と爲り、大帥子吼して法輪王と爲り、無礙の法輪を轉ず等と云ふが如し。解して云はく、此は是れ、究竟の中の菩薩にして、猶是れ佛に非ず。果分は當に不可説なるべきを以ての故に。

第四に文を釋せば、此正説の中に、二品有り。初品は其所行を明し、後品は其所成を顯す。又、初は是れ位の階降の行に約し、後は是れ通相始終の行なり。又、初は是れ位、後は是れ行なり。又、初は自分、後は勝進なり。初品の中に就きて、七分有り、前に同じ。一は三昧分、二は加分、三は起分、四は本分、五は説分、六は證成分、七は僞頌分なり。何が故に爾るとならば、證に依りて説を起すことを、明さんと欲するが故に、先に定に入る。法の殊勝なるを顯すが故に、佛同じく加す。説時將に至らんとす、故に定より起ちて、言頓に韋れざるが故に、略して本分を標す。略は能く具なるに非ざるが故に、後に廣く説きて、所説稱周することを顯す、故に結して究竟を證す。所説の法に於て、受持し易からしむるが故に僞頌分有り。

初の中に、何が故に定に入るとならば、六の意有り、前の釋に同じ。此中に三有り。先に入定の人を擧ぐ。謂はく、行は功德を成ずること、林の如くにして十を説く、故に異名が入るにあらざるなり。二は己が力に非ざることを顯す。謂はく、化を推して佛に歸するが故に、承力と云ふなり。三は正しく得定を明す。謂はく、潛神證契の故に、入と云ふな

り。菩薩とは人を標し、法を別して佛果定に簡ぶ。善伏とは能顯の異を擧ぐ。善に二義有り。一には巧能の義、二には順理の義なり。伏にも亦二義あり。一には制伏の義、二には調伏の義なり。初は是れ障に約して、巧に能く制伏し、永く起らざらしむ、故に善伏と云ふ。二には是れ行に約す、修行は理に順じ、調伏の行なるが故に善伏と云ふ。三味は前の釋に同じ。

【六】 二に加分を釋す

【六】二に加分の中に三有り。初に總じて能加を顯し、二は加の所爲を釋す。三は正しく加の相を辨す。初の中に五有り。一は諸佛の現身を明し、二は佛の同名を彰し、三は此得定を歎じ、四は加に由りて定を得ることを明し、五は彼佛自ら加を作すの所因を釋す。初の中に、問ふ、「此諸佛は爲當、萬佛刹塵を過ぎて、之外に一處に併せて爾許の佛有りや。爲當散居するや。」答ふ、「是れ散居す。」云何が散するや。且つ東方の如きは、萬佛の世界塵數の刹を過ぎて、外に一の功德林佛有り。此より東に向ひて、復萬佛の世界塵數の刹を過ぎて、外に復一の功德林佛有り。是の如く東に向ひて展轉し、數へて萬佛の世界に至る、座數の諸佛各相去る數も、亦前に同じ。東方の如く、餘の九方も亦爾り。又、多佛の加とは、大衆の、人を敬ひ法を重んずる心を、增長するが故に。又、諸佛力を聚めて、同説することを顯すが故に。二に佛名同じとは、四意前に同じ。一には、功德林をして、増す勇悅ならしむるが故に。二には、彼佛同じく、此法を得るが故に。三には、此位の中に、因果の二徳を具することを顯すが故に。四には、此門に於て能加の佛と爲すも、法爾として皆

【第二に…是なり】
加分を釋する中、
二に加被の所爲を
明す。

功德林の名を得たり、法力を以ての故に。三には、此得定を歎する中に、乃能とは、是れ希越の辭、能く此希有の定に入ることを顯す。何が故に爾るとならば、功德林默して、斯定に入るを以て、衆既に所入是れ何と知らず、心に渴仰無きをもて、爲に説くことを得ず。須らく佛、歎じて、顯に衆の欲樂を起すべし。四には、加に由りて定を得るとは、謂はく、彼他方の諸佛、自ら説きて、已に加を作し、其をして定を得しむることを彰す。五は自ら、加を作すの所由を釋する中に、三句有り。初は、盧舍那の、本願力に由るが故に、是故に加を作す。何となれば『地論』に釋す。舍那、過去に曾て、一の盧舍那佛、菩薩にかして、此十行の法を説くに、能加の佛を、同じく功德林と名くること有るを見る。因りて則ち願を發す。願くば我成佛するも、亦斯事有らんと。今、本の如く成ず、是故に加するなり。二には云はく、亦是れ舍那現在の威力、相感して同じく加す、是故に加するのみ、三には云はく、又、諸の菩薩の善根の力は、應に此法を聞くべし、佛の同加を感ずる故なり。又、前に十住を説くときは、則ち法慧の善根力を以ての故にと云ふ。今は、諸の菩薩と云ふことは、前は劣にして、此は勝ることを顯すが故に多きなり。又、前は自利の増を顯し、此は利他の廣きことを顯す、又、是文綺て五顯彰略す、理實には齊しく有り。第二に加の所爲を明す中に、初の句は是れ總なり。謂はく、汝をして廣く普賢の十行、法界前後の諸位、及び諸の因行を説かしめんと欲すと、此に至らざること無く、此に收めざることを無し、故に甚深と云ふ。甚深に九種有り。一には養果深。謂はく、本有の因を

【種現正習】種子と現行及び煩惱の習氣をいふ。

【種智】一切種智即ち一切種の法に通達する佛智をいふ。

長じて、果を成ぜしむるが故に。此は自智に約す。二には照性深の謂はく、衆生の性類差別を分析するが故に。又、性の異を知るが故に。又衆生の如來藏性に於て、開示解釋するが故に、分別と云ふ。又、一衆生を知るときは、則ち一切の法門、及び一切衆生を具す。性融通すれども、而も分別するを以ての故に。下の文の第八行の中に、「一衆生を離れず、多衆生に著し、多衆生を離れず、一衆生に著し、衆生界を増せず、衆生界を損せず」と云ふが如し。乃至、菩薩は深く、衆生界と法界と無二にして、無二法の中には増無く損無く、無生無滅にして、法性眞實なりと解すと云ふ。是の如き等は、此れ所知に約す。三には除障深の謂はく、障は煩惱に約し、礙は所知に約す。種現正習盡さざること無し。故に離一切等と云ふなり。若し三乘に依らば、此中は聲聞の畏苦黑障の現行を寄伏す。四には入法深の謂はく、眞理に證入して、境は心を礙へざるが故に無礙と云ふ。下の偈に、「悉く諸の法界に入り、隨順して彼岸に到り、究竟して自在を得るは法日の所行なり」と云ふ。又亦能く帝網法界、相即相入、圓融自在無礙の境に入るなり。下の文に、「因陀羅網に入り、法界自在にして、如來の無礙解脫を成就す」と云ふは、此謂なり。五には巧便深の謂はく、巧に一法を以て一切の法を攝し、又、巧に一行一位を以て、各一切を攝す。一身一切に起き、有無俱に滯らず。是の如きの多門、善巧なるが故に、成就一切方便と云ふ。下に、窮盡諸佛方便大海と云ふ故なり。六には成果深の謂はく、能く種智の果を成就するが故に。前の義は始に據り、此成は終に約す。是れ如量智は、種別にして知るが故に。七には理智

【十種の大陀羅尼】當品第九善法行の中に明す。清淨、義、法、正語、無障礙、佛甘露灌頂、自覺語、同辯、正語、無量讚歎陀羅尼をいふ。

【下の一句】經の「所謂菩薩」の下。【第三に加の相云】加分を釋する中、三に加被の相を明す。經の「佛子當に佛の神力」といふ文。

【下の別の中に云云】經の「安住の法を與へ」等といへる文。

深。謂はく、如理智は一切の法皆同一性と覺るが故なり。八には知根深。謂はく、善く衆生の根器差別を知る。又、生熟の不同を知る。又、同一如の性を知る。又、一根則ち一切根等と知る。諸根海に説くが如し。九には聞持深。謂はく、十種の大陀羅尼を成ず。下の第九行の中に説くが如し、下の一句は結なり。謂はく、廣説すること上の如し。總別の十種の甚深の法は、是れ何の位の法ぞ。謂ゆる菩薩の十行是なり。

第三に加の相の中に三あり。初の一句は説を遣しむ。是れ口業の加なり。二に意加の中に二あり。先に加し後に釋す。此れ並に當時、事有りて説無し。結集者とは、事の如くして之を結す。前の中に十句あり。初の一句は總、餘の九は別なり。問ふ、「何が故に此中には、法を與へ、前には智を與ふるや。」答ふ、「與ふる所は是れ一なり。但前會は解を成ずるが爲に、理を見ること増するが故に、名けて智と爲す。此中には行を成ずるが爲に、軌範増するが故に、名けて法と爲す。總の中に、謂はく、説を起すこと自在なるを、無障礙と名く。又無礙辯を與へて説をして滯礙無からしむるが故なり。下の別の中に、一には、法に於て疑はざれば、情に異縁無きが故に安住と云ふ。又、無畏智を與へて、説時をして心安んじて、他の壞せんことを懼れざらしむ。二には解、中より發するが故に無師と云ふ。又、佛に同じき智を與へて、衆に對して説きて、佛の無師に同ぜしむるが故なり。三には法を見ること分明なるが故に、無礙と云ふ。無明を雜へざるが故に。又説時に、所知障の礙、無からしむるが故に。四には法の次第を見るが故に不亂と云ふ。又、餘乘及び世間の章句等を雜へ

【下】に釋す。經の何を以ての故に彼三昧力の故にの文を指す。【起分】第三起分の文は前卷十六右の所釋を指していふ。【七】四、正しく本分を釋す。【不思に總じて十種有り】初三は體の深、廣、勝に約し、第四は行相に約し、五六七は用の證理、斷證、利他に約し、八九は圓融、第十は成果の十を以て不思を釋す。【地前】攝す【位即一切位なるが故なり】一

す。五には所解眞正の故に、清淨と云ふ。又、智體に過無し。六には所解廣多の故に無量と云ふ。又、是れ稱法界の法門なり。七には所解深勝の故に最勝と云ふ、又、果法と相應す。八には説時に、慢らず語はず、驕らず食らざらしむるが故に無垢と云ふ。九には、所得忘れざるが故に、不退と云ふ。又、退失無しと言ふ。又、理を退すること爲し。又、退屈無きが故なり。下に偏加の所由と、並びに身の加と及び起分とを釋す。並びに前の釋に同じし。

(七) 第四に本分の中に二あり。先に行體、後に行相なり。體の中に行業不思とは、體を標して徳を顯す。謂はく、此普賢圓融の行は、具德情を超越るを不思議と名く。此行の不思に、總じて十種有り。一には廣大の故に。謂はく、一切身は一切處に於て、一切時に遍し、念頓修し、法界の行に稱ふを以てなり。是故に、此行を不思議と名く。二には甚深の故に。謂はく、此廣大の行は、則ち是れ不可思議にして、皆自性無し、則ち眞如に同じ。而も彼行相宛然として失せず。是れ性起の行なるが故に、亦不思なり。三は殊勝の故に。謂はく、餘乘に超過し、下位の因位に非ざるが故に、亦不思なり。四には攝位の故に。謂はく、此は地前に在りて、能く一切の前後の諸位を攝するを不思と名く。五には理を證すが故に。謂はく、此行能く不思の理を證するを、不思議と名く。六には斷障の故に。謂はく、此行は能く煩に、難斷不思の障を斷するが故に。七には利他の故に。謂はく、此行は能く一念に廣く利して、衆生界を盡窮するが故に、不思議なり。八には圓融の故に。謂はく、一行

【下の偈】無盡行を明す文をいふ。

【又釋す…當る】此下、六決定門に約して釋す。

【二に行相云云】經の一佛子何等をか…等の下。

は則ち一切行、一切行は則ち一行にして、定量し難きが故に、不思議と名く。九には重成の故に。謂はく、此所作は因陀羅網の如く、重重無盡の故に、不思議なり。十には成果の故に。謂はく、能く佛の不思議の果を成ずるが故に、亦不思議なり。十を辨する所以は、無盡を顯さんと欲するなり。下の偈の中の、大龍所行等の如し、准知せよ。此は問教に約して辨す。若し三乘に約せば、則ち此の如きの釋を、作すことを得ず。此は猶是れ、有漏の位なるを以ての故に。廣如法界究竟如空とは、前の不思議の相を顯す。然るに、法界に十有り、下に説くが如し。今、二門を擧げて、以て此行を釋す。謂はく、行寬きを廣と名け、行深きを大と曰ふ。此廣此大、皆性に稱ひて成ず、故に如法界と曰ふ。虚空にも亦十義有り。下の第八地の、虚空身の處に説くが如し。今亦、二義を擧ぐ。一には、行能く相を破し、畢竟の法性虚空に、證入するが故に、究竟如空と云ふ。二には、行能く無量の愛果を出生す。空に依りて色を現じ、色盡ること無きが如し、故に究竟如空と云ふ。下の釋の中に、先に徴し後に釋す。此行は是れ、三世諸佛の、所行なるを以ての故に、是故に此の如し。又釋す。前の行業は、觀、相善決定に當り、不思議は眞實善決定に當り、法界は勝善に當る。如空は因善に當り、學三世等は不怯弱に當る。餘は前の會釋に同じ。

二に行相の中に、先に數を標し要を顯す。謂はく、三世の諸佛同じく共に説くが故に。二に列名とは、此十行の義に、略して十門を作りて分別す。一には釋名、二には體性、三には建立、四には種類、五には修相、六には定位、七には行相、八には所依の身、九に

は所離の障、十には得る所の果なり。初に釋名とは二有り。施或等の十は、行體に従ひて名と爲す。歡喜等の十は、行用に約して目と爲す。今は後の名を辨す。中に於て、總名は品の初の釋の如し。二には別名とは、施は自他を悦ばしむるを、名けて歡喜と爲す。歡喜則行なれば、歡喜行と名く、此は自喜に約す、是れ、持業釋なり。又亦、歡喜の行を、歡喜行と名く、此は他をして歡喜せしむるに約す。自行を成するが故に依主釋なり。二には、淨は三聚を持し、變べて自他を益す。三には、忍力は自他の恚恨を息除す。四には精勤修攝して、勝德盡くろこと無し。五には止觀變運して癡亂斯に絶す。六には、般若は理を照し、善現して朗然たり。又法の實相を觀じて、般若現前す。七には、巧に勝行を起して、空に於て滯らず。又、無著の心を以て、諸の所行を起す。八には、無礙の大願は、勝善根を攝す、深く尊重すべし。九には、深く根器に達し、法化を善す。十には、善行相應して、空ならざるに、稱を受く。又此十の中に、得名に三有り。謂はく、第八は德に従ひて名を立て、第三、第五、第七は、離過に約して稱を受く。餘は並に功能に従ひて、目と爲すこと知んぬべし。二に體性に二有り。先は總、後は別なり、總の中に三門有り。一には所依に約す。善伏三昧を以て體と爲す。此定に依りて、十行の體を證して、然して後に説くを以ての故に。二地論に云はく、此三昧は是れ、法體の故に。一と。二に本に約す。本分の中の行業、不可思等を以て性と爲す。此は是れ思數廣大等の十義、前の釋の如し。是れ廣説の本なるを以ての故に、體と爲すなり。三には統收。境に約すれば、二諦變べ礙

【八】 五に説分を釋す。

【九】 十行の中、爲す文を分ち正しく釋す。

【九】 十行の中、第一歡喜行の文を釋す。一に體性を辨す。【假實爲す】唯識論第九に「施は無貪及び彼所起の三業を性とす」とあるはこれなり。

じ、行に約すれば、悲智無礙なり。復心境圓融し、無礙法界に無邊の徳を具するを以て體性と爲す。之を思うて見つべし。二に別して、體性を辨すと、各下の釋文の處に、辨するが如し。餘門は別作を待つ

第五に説分の中に、十行を釋するに、二分有り。一は果分なり。同じく性海平等にして、不可説の故に、此中に論ぜず。二には因分なり。緣に約して、隨ひて説くに、其四重有り。一は唯、比位の行に約す『仁王經』及び『本業經』等の説の如し。二は唯自體普賢の行を明す。下の普賢行品に説くが如し。此は位に依らず。三は自體行を以て、位に従ひて説く。即ち此中の長行に、説く所の如し。四は位相を會攝して、自體圓融の行に従ふ、下の偈の中に説くが如し。今の説分の中には、唯、後の二を辨す。

文の中に二有り。初は此一世界の十行を明し、後に如此の下は、十方界の中の十行を明す。此一説則ち一切説なるを以ての故に、合して一部と爲す。前の中に二有り。初は正しく十行を辨じ、後に動地等は、益相を顯説す。前の中に別して十行を釋す、即ち十段と爲す。

初行を釋する中に、六門を作る。一には、體性を辨するに三有り。一には、隨相に約するに亦三あり。一には、無貪の善根を以てす。二は彼と俱なる思。三は兼ねて三業の無表を取るなり。假實通論するに、此三を性と爲す、此は初教に約す。二は性に約す。或は眞如を以て性と爲すが故に、『起信論』に云はく、法性の體に慳貪無しと知りて、隨順して檀

【二に種類：如し】
二に種類を明す。

波羅蜜を修行す一と。此に法性の中の無食の功德に、順向することを顯すが故に、此は終教に約す。三は實に約す。下の文に准するに施門の中に於て、所攝無盡、圓融法界を性と爲す。此は圓教に約す。二は種類を明さば、施に三種有り。謂はく、財と法と無畏となり。財の中に亦三あり。謂はく外と内と俱となり。外の中に二あり。一には、無過の物を、索に隨ひて便ち施す。二には、有失の具。謂はく、刀杖、羅網、毒藥等は皆、施すべからず、不善を増すが故に、二に、内の中に亦二あり。一は自に約すれば、憍心を破し、彼に於て益有れば、即便ち施與す。仍ほ亦二有り。一は身力等を施し、二は支節等を施す。二に若し自の憍己に破し、彼に於て安樂有りと雖も、饒益すること無く、或は俱に無なる等は、餘の有情に於て、廣利樂有れども、即ち施與すべからず、或は天魔等の故に、損害せんと欲するには、菩薩與へざるに、犯すこと無し、後惡業を、救ふを以ての故に。此上は、並に『瑜伽』等に説くが如し。或は初心の菩薩は、未だ苦に耐ふること能はず、且つ許して未だ與へざるに、是れ亦犯すこと無し。故に『十住論』に云はく、一偈を説きて彼乞者を安慰せしめて、我初て道心を發し、善根未だ成就せず。願くは、我速かに成就して、後に必ず當に相與ふべし」と言ふ故なり。三には、俱の中に亦二あり。一には、身及び王位依正同じく捨す、故に内外施と云ふ。十藏に説くが如し。二には、吐食及び髮爪皆亦内外施なり。『瑜伽』等に説くが如し。二に法施は、下の第十の廻向に至り、彼に於て當に辨ずべし。三に無畏施とは、或は財を以て施して危きを濟ひ、或は法を施して軀を存し、或は二を施

【十藏】 本經十無
盡藏品をいふ。

【三に收：知るべし】三に收攝を明す。

【三檀】檀は梵語の檀那(Tana)の略、布施と譯す。今は財施、法施、無畏施をいふ。

【四に因：如し】四に因果を明す。

【貪愛を損す】貪愛の心を損滅するの意。

【五に秘密：説くと】五に秘密行を明す。

して苦を免る。皆即ち無畏施なり。或は俱非とは、謂はく、怨に於て酬いず等、或は苦危を救済す。總じて説くに二類有り、一には、根縁相應の者之を救ふ、二には、作業と受報の二種定まる者は、暫時之を捨す。又此施の種類、瑜伽「地持」には九門あり。十藏と雖世間には、各十門あり。第六の廻向の一百二十門、並に彼中に説くが如し。

三に收攝とは、二有り。一には三檀に約して、六度の行を攝す。謂はく、財施に初を攝し、無畏に二を攝す。持戒に由るが故に、殺すべきを殺さず忍に由るが故に、酬ゆべきを酬いざるが故に、法施に三を攝す。謂はく、勤めて説き一心に説き、不倒に説くが故に、方便等の四に由りて、前の六を助くるが故に、是十行總じて、初に在りて攝するなり。二に只一の財施も亦即ち十及び萬行等も下の第七地の中に説くが如し。應に之を知るべし。

四には因果とは、三有り。一は隨分果、謂はく、大財等と云云。二は位果、謂はく、地前は因、地上は果なり云云。三には佛果を得す。佛性論の第二に云はく、「捨に二種有り。一には、昔物を捨し、他に施すに由りて、今即ち貪愛を損す。二は昔法を捨して、人に施すに由りて、今即ち輕く無明を滅す。此捨に由るが故に貪愛無明並に稍輕薄にして、是因縁を以て、解脫の果を得。又、佛果の大功德聚を成ず、等と、賢首品に説くが如し。五に

秘密行とは、「商主天子經」に云はく、「復文殊師利に問ふ、汝寧之慳なりや。」と。答へて言はく、「我實に慳爲り。」又問ふ、「何が故ぞ。」答ふ、「若し心捨せざれば、是を即ち慳と名く。」又問うて云はく、「何ぞ捨せざるを慳と名くるや。」答ふ、「我常に諸の佛法聚を捨せず

【六には釋文云云】六に歡喜行の文を釋す。初は財施の行なり。

【下の十句】經の「但一切衆生を救護せんと欲し、欲するなり」の正憶念云云の句。

一切衆生を捨せず。是義を以ての故に、我を憚と爲すと説くこと。

六には、釋文の中に三あり。謂はく、標、釋、結なり。釋の中に二あり。先に財施を明し、後に觀察の下は、法施を明す。前の中に北臺の意法師の云はく、先に行體を明し、後に菩薩修歡喜行時といふより下は、此行を淨治す。又釋す。三に分つ。初には、行は理に順じ、自慶して歡喜することを明す。二に菩薩修の下は、物の求心を遂げて、他をして喜を生ぜしむ。三には離諸我想といふより下は、三輪を離れて、以て檀度を成ずることを明す。初の中に、先に釋し後に結す。釋の中に三あり。初に正に施行を行じ、二に其所離を簡び、三に其所求を顯す。前の中に三あり。初に施主とは「對法論」の第八に云はく、大施主と爲るとは、此は數數施するの義を顯す。串習に由りて性を成じ、數數能く施すが故に、主と爲すなり。捨離一切とは主の義を釋し顯す。則ち是れ解脫捨にして、手を舒べて施すなり。二に等心等は是れ論の中に、偏黨無く施すの義なり。三には行は大喜を成ずるが故に、無悔と云ふ。二に所離とは、是れ「對法」の中の無染意樂なり。中に於て四句あり。一には、未來の資財の報を望まず。二には、現在の名聞を求めず。三には、當來の入天勝處を期せず。四には、現在の利養を悖はず。三には所求とは、既に報等を求めず、何の事の爲ぞや。下の十句は、其意を顯す。一には、現の貧苦を救ひ、二には、攝して道に向はしむ。三には、益して出離の行を修行せしむ。上の三は是れ、施物を以て生を攝す。四には諸佛本昔の所行を學習す。是自分の始なり。五に正憶は是れ自分の終なり。六には

【第二は：知んぬべし】財施を明す中、二に物求心を遂げしむる一段なり。

勝進の始、七には是れ勝進の終なり。上の四は是れ、物に隨ひて行す。八には弘顯す。此行は他をして施習せしむ。九には、行を兼ねて説き、他をして受學せしむ。十には、傳授の意を結す。上の三は、行を以て物を益す。

【第二は、縁に對して施を行じ、衆生の喜を生ずる中に、二有り。初には、總じて以て標舉し、二には、隨分の下は、別して其相を顯す。中に於て二有り。先には、施を修する方便を明し、後に於念念の下は、正しく成行を明す。方便の中に貧處とは、是れ苦田に依止す。願生とは是れ、願に依止す。對法に云はく、願に依止して修す。謂はく、本願力に依止するに由りて、波羅蜜多に於て、正行を修習す」と。豪貴とは是れ、對法の報に依止して修するなり。謂はく、勝れたる自體力に由りて、波羅蜜多に於て、正行を修習す」と。財無盡とは是れ、大財に依止し、施行を修成す。二に於念の下は、正しく施行を明す。中に對法論の第十二の中に、菩薩は六種の意樂に依止して、波羅蜜多を修す。一には無厭意業。謂はく、諸の菩薩は、一有情に於て、一刹那の頃に、假使殘伽沙等の世界の中に、滿らん七寶を以て布施し、又殘伽沙等の壽命を以て布施し、是の如く殘伽沙等の大劫を經たり。一有情の所に於て是の如くし、乃至一切の有情界に於て是の如く施す時に、皆彼をして、阿耨多羅三藐三菩提に於て、速かに修行を成就することを、得せしむるが如し。是の如く差別して施く時、菩薩の意樂猶厭足せず、是を菩薩は施波羅蜜多に於て、厭ふこと無き意樂と名く。二に廣大意樂、謂はく、乃至菩提に施して、暫くも

息むこと無し等なり。三は歡喜意樂。謂はく、施を受くる者に遇ふ等なり。四は恩德意樂。謂はく、施を受くる者を見、己に恩有るに於て、我菩提を、助くるを以ての故に。五には無染意樂。謂はく、有情に於て大施福を與ふと雖も、而も報恩當來の異熟を希はず。六には善巧意樂。謂はく、廣施の果は皆有情に施す、又此福を以て、諸の有情と共に、菩提に趣向す。具に説くこと、彼論文の如し。此文に四有り。初に無厭意樂、及び廣大意樂を明す、財無きを貧と曰ひ、空く盡くるを婁と曰ふ。二に不以求索といふより下は、歡喜意樂を明す。三に作如是念の下は、恩德意樂を明す。謂はく、我福を生ずるが故に、福田と名け、我行を起すが故に、善友と名く。我今應の下は、其恩を報ずることを結す。四に我於三世より下は、善好意樂を明す。中に於て三有り。初に行を用て果を成じ、以て衆生を濟ふ。二は福を施し生に與へ、先に成佛せしむ。三には然して後に、自得すること知んぬべし。

【第三に】小果を見ず財施の下、三に三輪を離れて檢度を成ずるを明す。經の「我が想離れん」等の文。【三輪】今は施者受者、所施の財物をいふ。

第三に三輪の著を離れ、波羅蜜を成ずることを明す。中に於て二有り。初に觀解を破し、後に如是觀時の下は、觀成じて相を捨す。又釋す。初は通じて二輪を離れ、後は別して三輪を混す。前の中に、先の七句は、人執を離るることを明す。中に於て輪觀羅とは、此には數取趣と云ふ。謂はく、數數諸趣を取るが故に。舊には翻じて人と名くる是なり。【瑜伽】の第八十三に依るに、八名有り。一は我とは、五蘊に於て、我と我所の見を起す、現前に行ずるが故に。二は有情とは、謂はく、諸の賢聖、實の如く了知す。唯此法のみ

【摩納縛迦】(Mānaka)譯して人、長者、年少、備童といへり。今は人の意。

【二に法界云云】經の「法界と衆生界とは…離れんと」の文の下なり。【二は觀…九句】經の「一施す者を見ず一等の九句。【檀】(Dāna)施與又は布施といふ。【波羅蜜】(Pāramitā)度と譯し、菩薩の不行をいふ。

有り、更に餘無きが故に。又復彼に於て愛著有るが故に。三には意生とは、謂はく、此は是れ、意の種類の故に。四には摩納縛迦とは、謂はく、意に依止して、或は高、或は下の故に。五に養育とは、謂はく、能く諸有の業を増長するが故に。能く一切士夫の用を作すが故に。六には補特伽羅とは、謂はく、能く數數往きて諸趣を取り、厭足無きが故に。七に命とは、謂はく、壽和合して、現に存活するが故に。八に生とは、謂はく、生等の所有の法を具するが故に。【天假若】に依るに、十三の名有り。八は「瑜伽」に同じ、更に五種を加ふ。一は作者、二は受者、三は見者、四は知者、五は士夫なり。更に三本の一般若論の中を檢めて釋すべし。二に法界の下の七句は、法執を離るることを明す。一は謂はく、衆生界空と、法界とは別無し。二は體空無取の故に、離欲と云ふ。三は性に定實無し。四は相に所有無し。五は自住すること能はず。六は依恃すべからず。七は縁成して作を離る。二は觀成じて相を捨する中に、九句有り。初の三は三事空を見る。【莊嚴論】に云はく、施に三礙有り。謂はく、我相、他相、施相なり。此三相に著する布施は是れ、世間の檀にして、波羅蜜に非ず。世間の中に於て、不動不出なるを以ての故に。此三の著を離るるを、出世の波羅蜜と名く、世間の中より能く動出するを以ての故にと。四は福を生ずるの因を見ず。五は所生の福業を見ず。六は施に因りて、異熟果を得ることを見ず。七は等流果を得ることを見ず。八は佛地の大果を得ることを見ず。九は菩薩地の中に於て、得る所の小果を見ず。

【第二に法施云々】以上、明施の釋終りて、今法施を明す下なり。經の一菩薩三世を觀察一等の故。

【四住】三界見思の煩悩。

【佛の三堅】佛果無漏清淨なる身命財の三をいふ。

【二に饒益行の文を釋す。饒益するに六門あり、初に饒性を明す。

【戒波羅蜜】(二)在家大小乘等一切の戒行をいふ。
【二に種類】

【三歸戒】佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す、この三歸を師より受くるをいふ。

【十無盡戒】數は十なる戒も中に法界一切の戒を具する故に無盡戒といふ。

【第二に法施の中に二有り。初に物の苦を念傷し、二は意を起して饒益す。前の中に、謂はく、三世の衆生を觀す。一は無明に覆はる。二は四住に纏せらる、此は苦因を具らかにす。三は深苦の果を愛く、四は正濟を闕くことを明す。謂はく、佛の三堅の法を得ざるが故なり。我當の下は、意を起して饒益す。中に於て先に、自ら佛因を修して他を化し、習を同じくす。二は自ら當に成佛して、他をして同じく得しむべし。令淨は、前の苦因に對し、順滅は前の苦果に對す。下は結なり、知んぬべし。

【第二の饒益の中に、亦六門を作る。一は、體性とは三門有り。一は隨相門。謂はく、思の上に於て、無表を假立す。亦三事有り。一は思、二は無表、三は身語の表業なり。故に云はく、菩薩戒は三業の善を以て性と爲すと。二に本に約せば、眞如を以て性と爲す。起信論に云はく、一法性の體淨にして染無しと知りて、隨順して戒波羅蜜を修行す」と。三は實に約せば、無盡法界を以て體と爲す云々。二に種類とは、十類の差別有り。一は「梵網」等の經に依るに、菩薩の三歸戒有り。二は「善生經」に依るに、五戒は是れ在家の菩薩戒なり。三は「文殊問經」に依るに、八戒を世間の菩薩戒と名く。四は亦彼經に依るに、十戒有り。謂はく、即ち沙彌の所持とは、出家の菩薩戒と名く。五は「方等經」に依るに、二十四戒は亦在家の菩薩受く。六に「瓔珞」「梵網」の十無盡戒に依れば、在家出家の菩薩の所受到す。七は「瑜伽」「地持」に依るに、四波羅夷戒は、此戒相を觀するに、多分是れ出家の所受到似たり。亦は在家を兼ね。八は「善戒經」及び「重樓戒經」等の八重戒な

殺、盜、姪、妄語、
酩酒、說四衆過、
自讚毀他、慳惜加
毀、瞋心不受悔、
謗三寶戒、
【四波羅夷戒】
盜、殺人、大妄語
の四。

【具戒】比丘、比丘尼の具足戒をいふ。比丘二百五十戒、比丘尼五百戒【三は：如し】三に攝行。

【律儀戒】諸の律儀を守りて、悪行を遠離する戒なり【攝善法戒】八萬四千の法門をいふ【四に：得】四に得果。

【五は：爲すと】五に祕密。

【六に文を釋す云云】六に正しく本文を釋す。

り。謂はく、聲聞の四重の上に、「瑜伽」の中の四重を加ふ、故に八と爲す。此文を局りて出家の菩薩の受と爲す。先に五戒、十戒、具戒を受くるを以て、方に菩薩戒を受くることを得。四重樓閣の、漸次に成ずる等の如くなるが故なり。九は梁の「攝論」の、戒學に云ふに依るに、「毘奈耶毘佛略經」の説の如し。菩薩戒に十萬種の差別有り。十は「華嚴經」に依るに、十等の無盡の戒品有り。十藏品及び離世間に説くが如し。三は攝行の中「瑜伽論」に依るに、七衆所持の解脱戒は、是れ菩薩戒律儀戒の攝、六度十地等は是れ、攝善法戒に收む。四攝四無量等は是れ、饒益有情戒の攝なり。又、攝の義有り。「對法論」の第十二の中に説くが如し。四に得果とは、亦三有り。初に位に隨ひて果を得。「攝論」に、大生攝と名くるが故に。謂はく、即ち戒に由りて得る所、勝利勝善趣の攝なり。二に此意糧に由りて、當に地上の所得の勝報、及び自性戒を得べし。三は無上菩提の果を得。謂はく、律儀戒に由りて、斷德法身の果を得。攝善戒に由りて、智德報身の果を得。衆生を益する戒に由りて、化身恩徳の果を得。五は祕密の中に、菩薩も亦戒を破る。「商主天子經」に云ふが如し。「又復問うて言はく、「我惟付するが如く、文殊も説く所、汝今に於て、亦是れ戒を破するや。」答へて言はく、「我亦戒を破す。」問ふ、「何が故ぞや。」答ふ、「若し人破戒にして、彼三惡道に墮せば、我も故らに思惟して、惡道に墮して、衆生を成就す。是義を以ての故に、我を稱して破戒と爲す。」と。

六に文を釋する中に、三有り。謂はく、標、釋、結なり。釋の中に二有り。先に略して

【但堅持の下】經の「但堅く淨戒を」

【攝衆生戒】三衆一切衆生を饒益するを目的とすれば、淨戒有情戒ともい

【善法戒】三衆淨戒の一。一切善法を修せんとする戒。

【第一緣に云云】大覺王出現に端を發し、菩薩の行を

【其…非ず】今の文は「具非境逼る」に非ざるか。意通ぜず。

難過を覺して、以て行體を明す。二に菩薩如是の下は、緣に對して廣く堅固の行用を顯す。初の中に亦三有り。先に淨戒行を擧ぐ、謂はく、自ら淨戒を持して、六塵に染らず、此を盡きて人を化して、二利行を盡す。下は二の意を顯す。先に所離を明し、後に但堅持の下は、其所爲を明す。其所爲の中に、盡く世間の勝報を、求めんが爲ならずんば、何の事の爲なるや。爲に其四種有り。一は生死の大過患を離るるが爲の故に。煩惱等は是れ苦因なり、悲苦等は是れ苦果なり。此は是れ律儀戒の所離なり。二には下、衆生に於て、悲願に違はざるが故に不負と云ふ。謂はく、本弘誓に稱ひて救攝する故に、此れ攝衆生戒の所成なり。三には、上と佛意に順するが故に歡喜せしむ。此は是れ、攝善法戒の所成なり。此上は是れ因圓なり。四には菩提果滿の爲の故なり。

第三に、緣に對して廣く顯す中に、三有り。先に持ち難きを、能く持つことを明す。則ち律儀戒なり。二に作是念業生長夜より下は、救ひ難きを、能く救ふことを明す。則ち攝生戒なり。三は我當捨離といふより下は、作し難きを、能く作すことを明す。即ち攝善戒なり。前の中に六有り。一は其境逼るに非ず。二に爾時菩薩の下は、深く其過を見る。三に是故の下は、心堅にして佛に同ずることを明す。四に方便に違せずして、内心遠堅し。五に不爲の下は、堅の相を釋し顯す。中に於て、先に順じて釋し、寧捨の下は、返じて釋す。六に自見佛の下は、輕きを擧げて重きに況す。謂はく、自昔の初發心より來、見佛來と名く。中間より今に至りて、未だ曾て想を起さず、是は輕きを擧ぐるなり。何況從

【二に攝生戒】一切衆生救度の念願を發す下。經の「菩薩是の如き念を作さく、衆生長夜云」の文。

事とは、是は重きを況するなり。謂はく、想尙起らず、況んや形事有らんや。下は返じて其無を結す。

二に攝生戒を明す中に、三行り。初は衆生の欲の爲に縛せらるるを念す。二に我今の下は、志を建てて、其所作の饒益を標す。三に觀一切佛の下は、標に依りて理に順じ、法を以て正しく益す。前の中に五句有り。一は未だ得ずして思求するを、憶念と名く。二は創めて見て纏染するを、貪著と名く。三は得已りて、深味するを愛樂と名く。四は久しく處して捨せざるを常流と名く。五は後に於て厭はざるを、永く没して能く出づること莫しと名くるなり。二に意を標して、益を作す中に二有り。先に所作を標し、後に何以の下は、其意を釋し顯す。前の中に三有り。先に地前の淨戒を立て、二に地上の不退を得しめ、三は菩提涅槃の果を成す。下の釋の中に、先に意を徴して、他人に惡有るに、己に於て何ぞ急なる。下に釋す、「此は是れ、我業」なりと、謂はく、衆生をして淨戒を立てしめ、乃し涅槃に至らしむ。是れ諸の菩薩の家業法爾たり、是故に應に作すべし。三世の諸佛、本因に在りし時、亦同じく此を作し、人を淨戒に安き、乃し涅槃に至らしむ、故に離諸非行と云ふ。下は、已及ばず、之を行ふこと、太だ晚きことを傷む。我無知なるに由りて昔より來作さず、今始めて方に爲す、猶遲るることを恨むのみ。三は標に依りて願益する中に、亦三有り。初に總じて平等の法を得て、爲に倒を除くことを、説くことを明す。二は不離衆生の下は、倒相を辨釋す、即ち是れ平等なり。三は悟一切法の下は、觀解の益を明す。

【衆生は縁起；性なり】衆生は顛倒を起す人、乃ち染分の依他にして、顛倒は所起の妄、これ偏計所執なり。

【相依；非ず】上の兩段を合して、本性の自空を成立す。

【第三に攝善；證智なり】之に難作能作を明す、即ち攝善成なり。

【二】十行の中、三に無恚恨行の文を釋す。初に體性を明す。
【忍度】諸の侮辱迫害を忍受して、悲恨なきをいふ。

第二の中に、衆生は是れ、依他縁起の性、顛倒は是れ、妄想所執の性なり。謂はく、似に依りて實を執す、生を離れて倒有らず、執に依りて似起る。倒を離れずして生有り。二は倒能く生を起し、倒の内に生無し。生は能く倒を起し、生の内に倒無し。三は、倒は生より起りて、生に非ず。生は倒に従ひて有なれども、而も倒に非ず。四は生に即して倒に非ず、倒は内に非ず。生を離れて倒無し、倒は外に非ず。五には生も亦爾なり。相依相奪して俱に内外に非ず。空無所有の下は、餘の一切の法を類す。皆是れ虚妄にして實ならず。三には觀の益の中に、先に自知の益、未度の下は化他の益なり。中に於て九句有り。一は苦を度せしめ、二は集を脱せしめ、三は戒學を授與し、四は定學を與へ、五は慧學を與へ、六は龜惑を離れしめ、七は細習亦盡くるが故に、清淨と云ふ。八は涅槃を得しめ、九は菩提を得

第三に攝善成の中に五有り。一は順心を起す、修善上に順するが故に、佛をして喜ばしむ。二は所喜の事を出す、佛因を成就し、佛果に安住す。三には觀磨を成す。謂はく、衆生の平等を覺り、法も亦空なりと了す。四には染障を遠離す。中に於て、離惡は是れ業障を捨つ、餘は是れ煩惱なり。五は淨徳を成就す。初の句は是れ因、悉得の下は成果なり。初に教習を得、後の空慧は是れ證智なり。
【二】第三に無恚恨行は、即ち忍度なり。亦五門を作る。一に體性とは、瑜伽論に云はく、忍に三種有り。一は耐怨害忍なり、無恚善根相應の慧數を以て體と爲し、衆生を縁じて、

【二は修：如し】
修忍の方便として
す。三思五想を釋

【三に種：如し】
三に忍の種類を問

境と爲す。二は安受苦忍なり。精進相應の慧數を以て體と爲し、法を緣として境と爲す。三は法思勝解忍なり。定慧二數を以て體と爲し、無法を緣として境と爲す。正智、觀に入り、境智同じく知たるを以ての故に。又通論するに、四法を體と爲す。初に無瞋、次に勤、後に慧並に思なり、是三業は、前に通ずるが故なり。又起信論に、法性の體無瞋にして、憍を離ると知るが故に、隨順して忍波羅蜜を修行す。二は修忍の方便とは、初忍に約す。『莊嚴論』に云はく、「三思五想に由りて、即ち能く忍受す。三思とは、一は他我を毀るは、是れ我が白業なりと思ふ。若し報せば即ち重ねて、自ら苦苦を造り、他に由らず。二は彼我俱行の苦を思ふ、彼無知なるを以て苦に於て苦を加ふ。我今知る有り、云何が復爾らん。三に聲聞は自利にして、尙苦を以て人に加へず、菩薩は他を利す、豈苦を以て物に加ふることを得んやと思ふ。五想とは、一は本親の想を修す、一切衆生久しきより來、親屬に非ざることを無きが故に。二は法の想を修す、打罵の者不可得の故に。三は無常の想を修す、衆生の性は是れ死法、尙瞋るべからず、況んや害を加へんやとおもふ故に。五は擄取の想を修す。本願うて樂ならしめ、苦ならしめざるが故に。又『智論』に云はく、「若し毀害せらるれば、但對治の法を思ひ、瞋を起すべからず。風雨に遭ひて、但遮法を求めて、之を瞋るべからざるが如し」と。廣くは『智論』に多門有りて、辨するが如し。三に種類とは、或は唯一なり。謂はく、忍度なり、或は二なり。『智論』に云はく、「一は衆生忍、二は十法忍」と。或は三は前の如し。或は五、謂はく、信忍等なり。或は十、下の十忍品、及び離

【四に秘：云云】
四に秘密を明す。
下の文錯謬あるべし。

【五に文：云ふなり】
五に正しく本文を釋す。

世間品に説くが如し。四には秘密とは、『商主經』に云はく、又問ふ、『文殊汝願志の心有りや。答へて言はく、『是の如し。又問ふ、『何が故に。答ふ、『寧ろ瞋心ならざらんや、是れ愛ならずや。』答へて言はく、『是の如し。』文殊言はく、『我煩惱と二乘とに於て、愛念有ること無し。是義を以ての故に、我に瞋心有り。』と。餘門は別に説くが如し。云云

五に文を釋する中に、釋の内に、初は行を標し意を顯す。二は菩薩成就の下は、縁に對して相を辨す。前の中に初の一句は、總して以て標擧す。兼卑の下は別に顯す。先に自行を顯し、後に人を教ふ。前の中に、先に三業の性に、忍相有るに約す。謂はく、自謙して他を教ふは、是れ心忍の相なり。和顏は是れ身忍の相、愛語は是れ口忍の相なり。下は三毒を離れて、現に忍相を成ずるに約す。初は離瞋に約す。謂はく、自ら害せず等と。自ら苦の事有れば、安忍すること能はず、自の刑害等は、違安苦忍の行なり。怨に於て加へざるを、不害他と名く。此は是れ耐忍なり。前の二を變べて辨するが故に、俱と云ふなり。『智論』に二の忍有り。一は違に於て能く忍ぶ。二は順に於て能く忍ぶ。上は是れ違忍なり、二は離貪に約せば、順に於て能く忍ぶ。謂はく、名利の爲に慢を起し、自ら高ぶり他に傲らず。及び俱は並に知んぬべし。三に離癡に約す。自の是を言はざるは、慢を離るるなり。處して他を是とせざるは、諂を離るるなり。變べて離るるは俱ならざるなり。又、所作に於て自らはと言はず。所愛の處に於て、彼是を是せず。二俱に捨して、兩是を言はず、此は是れ法思忍の相なり。又釋す。三業に約す。初は和顏に由るが故に不害なり。次は謙卑に

【二は他…云ふ】
經の「我當に常に
安立せしむ」等の
文を釋す。

【二に緣に對して
云云】經の「菩薩
は是の」等の文を
釋す。

【下に…八句】經
の「自ら調伏せず
得しむべき」の
文。

【第二に往を云云】
菩薩過去の事を想

由るが故に不舉なり。後は愛語に由るが故に不是なり。二は、他を教ふるも亦是れ意を顯す。人を教へて、惡を斷せんと欲するが爲に、先に自ら忍を修す。中に於て、先に教へて過を離る。二は大忍の下は、治行を成す。謂はく、三忍を具して、三毒等を治するが故に、大忍と云ふ。

二に緣に對して忍の行相を辨す。謂はく、忍び難きを能く忍ぶなり。中に於て二有り。先に廣く害辱を擧げ、二は辱に於て能く忍ぶ。前の中に四有り。一は多の衆生、二は多く罵辱し、三は多く傷害し、四は多劫を經、此は忍び難きなり。二は心を安んじて能く忍ぶ。中に於て亦四有り。一は深く瞋の過を見るの忍。二は往を思ひて今を勵むの忍。三は身苦俱に空の忍。四は佛の攝生に同じての忍なり。初の中に、苦に遭ひて悲を生じ、返りて不忍を擧ぐ。下に、其過を彰すに八句有り。初の七は自行を失するの過なり。中に於て、一は自ら心を調せざるの過、二は身口を護せざるの過にして、此二は無戒の失なり。三は無慧を明す。瞋、心を覆ふに由りて、法理を見ざるを不明了と名く。四は瞋心を噴するに由りて、寂靜ならざらしむ。此れ定を修する方便を障ふ。五は正しく定を修するを障ふ。六は行虚にして實に非ざるの過、七は是れ妨善の失なり。七は増惡の過。謂はく、自ら身を愛するに由りて、他の侵を受けず、故に瞋惱を致し、以て惡業を増す。下は利他を失するの過を明す。何能令善は、無始の善を明し、而得度脫は終の利無きを明す。

第二に、往を思ひて、自ら勸す中に、謂はく、自ら往昔の因を思ふに、此身心を護るに

起して、自を策勵す。三釋あり、耐の如く法思忍、耐忍、安苦忍に配釋すること知るべし。經の「菩薩是思惟」以下の文。

【復更思】經文の復更に思惟す、等を指す。

【此下に明す】經の「此身は空寂……二有ること無し」の文を釋す。

諍を起し、惡を遣り、苦を受くること窮無し。今若し忍ばずんば、更に重ねて苦を増し、多劫に憩ふこと無く、此を以て自ら勵まし、心をして喜ばしめて忍ぶなり。又釋す。我に此身心有るを、苦の因と爲すに由るが故に、他をして、所憐害の事有ることを得しむ。苦は木己に在り、何ぞ自ら責めざらん。故に『涅槃經』に云はく、「手は、刀杖及び我身を用ふるが故に、打と名くることを得。我今應に横に他を瞋る應らず、乃ち是れ我身自ら此咎を招く。譬へば、的に因りて即ち箭の中ること有るが如し。我も亦是の如し、身有れば打有り」と。此を以て自勵す。又釋す。我は往昔に於て、未だ曾て凡愚の身心有らざるにあらず。或は惡業に由りて、地獄等の處に於て、尙無量劫虚く大苦を受け、一乃饒益無し。況んや今此小苦を受く、菩薩の大忍の行を成就せんと、此を以て自ら勵む、故に歡喜を生ず。前門の忍に對し、此を説きて重と爲し、心を勸めて退せず、心を留して進まらむ。此益を見るに由りて、辱に於て喜んで受くるを、心歡喜と名く。心を調し忿を離れ、攝して惡を遣らざるが故に、誦經と云ふ。下は調攝の意を釋す。先に徴し、後に釋す。自他をして無上の法に任せしむるが爲の故に、此は亦是れ安受苦忍なり。第三に身苦俱空忍の中に、前の二門に對して、説きて復更思と爲すなり。『思惟經』に云はく、「諸法念念に滅し、其性常に住せず。中に於て罵辱無く、亦恭敬有ること無し。若し節節身を解せば、其心常に動せず、心は内に在らず、亦復外に在らずと知る。身怨及び刀杖は、皆四大より起る。地水火風に於て、未だ曾て傷損有らず」と。此中に初は是れ生空、無眞實の下は法空を明

【第四に云ふなり】第四に佛の攝生に同ずる忍を明す、七句を釋す、經の「衆生を攝傳云云」の文。

【三】四に無盡の文を釋す。四門あり、初に體性、二に種類、三に秘密、四に釋門これなり。

す、此は自觀なり。諸法空の下は利他を明す。方に他の爲に空を説かんと欲す、豈自ら迷ひて忍ばざることを得んや。是故の下は結なり、知んぬべし、此れ亦法思惟忍なり。第四に佛の攝生に同ずる忍の中に、先に七句有りて、衆生の苦を念じ、後の一句は、佛の救護に同せんと欲す。前の七の中に、一は其惡有るを愍み、二は益、善を修せしめ、三は其樂果を安んじ、四は樂に著せしめず、故に攝取と云ふ。五は、未だ佛に至らしめず、故に不捨と云ふ。此は地前に至らしむ。六は地上の不退を得しむ。七は究竟菩提の果を得しむるなり。下は佛の行に同ずることを明す。謂はく、諸佛因時に此法を修行す、我今亦同じく方に衆生に於て、大饒益を作す、何ぞ忍ばずして、惱害を加ふべけんや。故に佛所行等と云ふなり。

(二) 第四に無盡行、即ち是れ精進波羅蜜なり。四門を作る。一は勤と思との二法を以て、體と爲す。一起信論に依るに法性を知る等と。二は、種類とは一瑜伽に依るに、三種の精進有り。一は被甲精進、是れ始修なり。二は加行精進、是れ次修なり。三は無厭足精進、是れ修の究竟なり、三業の策勤を以て性と爲す。此文及び下の離世間品に依れば、俱に十種の精進を説く。三に秘密とは、商主經に云はく、文殊に問ふ、汝に懈怠有りや。答へて言はく、「有り。」「又問ふ、何が故ぞ。」「答ふ、「夫れ懈怠は身口意を以て、諸行を發修せず。我今是の如く亦行を發さず。亦行せんと欲せず、捨せず取らず、是義を以ての故に、我を懈怠と名く。」と。

【四には：特進なり】正しく經文を釋す。

【被甲精進】菩薩大妙心の甲を披り種種の難行を畏れざるをいふ。

四には、文を釋す。釋の内に二有り。先に行を標し意を顯す。後に菩薩成就如是精進より下は、緣に對して相を辨す。又亦前は是れ當位の行體、後は是れ行じ難きを能く行じて、此行を淨治す。前の中に二あり。先に行を標し、後に菩薩復作是念の下は意を顯す。前の行の中に二あり。先は行體、二は、彼菩薩の下は離過を明す。前の中に、初の句は總、餘の九は別なり。別の中に、凡を過ぐるを勝と名く。二に小を越ゆるを最と名く。三に、善行を修しての極を、第一と名く。四は、化他の行の極を、大と名く。五は離過の行の極を妙と名く。六は上能く下を過ぐるを上と名く。七は下加ふること能はざるを無上と名く。八は下齊きこと能はざるを無等と名く。九は、下に過ぎて上に同じきを無等等と名く。二は、離過行の中に、大小煩惱を離るるに通じて十種有り、文の如し云云。上は是れ被甲精進なり、亦勤勇精進と名く。二に意を顯す中に、初に生を觸まさんと欲せざるは、其所離を顯し、後に正しく所爲を顯す。此中に二十句有り、三に分つ。初の三は斷惑と爲し、次の七を、所化攝生を知ると爲し、後の十を法理を知ると爲す。初の中に、初の句は伏して現行を離る。次の句は正しく種子を告す。後の句は變習の氣を離る。次に所化を知る中に、初の句は總、餘の六は別なり。別の中に、初の二は染過を知る。一は苦報の轉を知り、二は惑集の因を知る。後の四は受法の器を知る。一は樂欲多門、二は分齊差別、三は根に利鈍有り、四は心所念異。三に知法の爲の中に、初の句は總、餘の九は別なり。別の中に、初の四は、佛の理法を知るが爲に、一は如來藏に、恆沙の功德、不空の眞性を具るを知る。

【第二緣…稱すと】
此下、所緣に對して、行相を辨ずる文を釋す。

【三】五に離癡亂
行の文を釋す。四
門あり、體性、種
類、祕密釋文なり
今は初なり。
【別境】今は別境

二は如來藏、染に在るの當相、平等と知る。三は因位の前、三際殊らざるに約す。四は在果の淨位も、亦無生平等なり。又此の三亦是れ、三種の佛性なり。初は自性住に約し、次は引出に約し、後は至得果なり。又初は是れ『地論』の中の自性無生なり。次は數業別無生、三は佛果作業無生なり。次の二は果法を證せんが爲に初の句は標、下の句は釋なり。謂はく、一の巧智門を以て、廣く佛果の法を攝す。次の二は、佛果の大用の法を知らんと欲す。一は佛の無盡神通の徳を知り、二は佛の權實智慧の徳を知る、方便は是れ權なり。後の一句は、佛の教法を知ること、又亦得たり。初の四は加行に約し、次の二は正體に約し、後の三は後得に約す。又、此二十句の中に、初の三は自利に約し、後は利他に約す。利他の中に、初の七は所化の器を知り、次の九は化法の藥を知り、後の一は、正しく法を以て、機に授く、知んぬべし。第二に緣に對して、行じ難きに、行の堅固を顯す。中に於て二行り。初は假に重苦を擧げ、以て問を要す。行を顯すに先に二問、後に兩答あり、二に假に塵海を以て數へしめ、要顯す。亦先に問、後に答なり。答の中に二あり、初に他をして、苦を免れしむるの利なり。後に自他果を成ずるの益なり。此上は亦是れ、攝論一の中の難壞精進にして、二瑜伽一の中には無厭足精進なり。

【第五に離癡亂行は、即ち是れ禪波羅蜜にして、亦四門を作る。一は、別境の中の定を以て體と爲す。起信論に、法性を知る等と。二は、種類とは二瑜伽一に依るに、亦三種有り。一は現法樂住靜慮、謂はく、八定等なり。二は饒益有情靜慮、謂はく、此に依りて四

の心所をいふ。即ち各の境に對して起る心所なり。

【現法樂受所處】とは、梵に駄耶演那(Dhyanā)といひ、禪定のこと。

今は一切の妄想を離れて法味を愛樂し動ぜざるをいふ

【死に二種】せしむ【これ第六地の菩薩所觀の、十二因縁中の死をいふ今は取意の文。いふ今は大集經】卷二十七の文、凡聖の差異を示すなり。【胎】胎有情なり【入胎の差別を明すなり。

講を起し、有情を攝する等なり。三は神通功徳を引く靜慮。謂はく、能く十八變空等を引く。又、下の文に十種有り、以て無盡を顯す。三に要密とは「商主經」に、文殊の言よく、「我に亂心有り。何を以ての故に。夫れ亂心とは、住處有ること無し、我樂の中に於て心解脫を得、一切の諸の衆生を感就するが故に、住處有ること無し。是處を以ての故に、我亂心ありと稱す」と

四に文を釋す。經の内に、觀を修するに由りて妄を離れ、止を得ひて心息む。梁の「論」に云はく、「諸の菩薩位の中に、常に二行を修すべし。一は不顛倒、二は不散亂」と。是れ此行なり。文の中に三あり。初は、是れ現法樂住禪、二は是菩薩處、寂靜の下は、引功徳禪、三は、菩薩聞、此下は、利益衆生禪なり。初の中に二あり。先は總、後は別なり。前の中に十一句あり。初の二句は二章を標す。謂はく、初の句は亂を標し、後の句は離亂を標す。次の八句は、法に歷く通じて辨す、相從して四と爲す。初の句は、受持する所に約し、次の二は流轉受身に約す、此は是れ悲願、惑を留め、身を受くるが故に、癡亂れず。下の六地に云はく、「死に二種の作有り。一は不知を以ての故に、後生をして相續せしむ」とは、是は凡夫に約して説くなり。又「大集經」に云はく、「凡夫の胎を受くるは、男は母に於て愛を生じ、女は父に於て愛を生ず、是故に入胎癡亂なり。又、胎内に在りて情識分明なるも出る時に苦に逼られ、遂に即ち昏亂す。菩薩は彼に異れり、入出俱に癡亂等無きなり」と。又「胎伽」の第二に云はく、「四種の入胎あり。一は正しく入るを

に癡亂等無きなり」と。又「胎伽」の第二に云はく、「四種の入胎あり。一は正しく入るを

【別の中に十七句】
經の「謂ゆる甚深
の法、微妙法：自
在の法」の文をい
ふ。

【下は釋する中云
云】經の「何を以
ての故に」等の下

知りて、正しく住出を知らず。謂はく輪王なり。二は正しく入住を知り、正しく出を知らず。謂はく、獨覺なり。三は俱に正しく知る。謂はく、菩薩なり。四は俱に正しく知らず。謂はく、所餘の有情なり」と。次の三は修道の、行を起すに約す、知んぬべし。後の二は覺に約して、魔事を離る。止觀を修する時、多くは魔邪鬼等の爲に、憊亂せらるるを以て、是故に之を辨す。起信の疏の中の如し云云。下の一句は多劫修を結するなり。

第一に別して辨する中に二あり。先に離癡を明し、後に離亂を明す。前の中に、初は前を體す。於無の下は後を顯す。中に於て、先に癡闇を離るるに由りて、法を聞き忘れず。二に何以の下は釋成す。前の中に三あり。初は總、二に所謂の下は別なり。後に菩薩聞此の下は結す。別の中に十七句の法あり。一は體深、二は相妙、此二は理法なり。三は具德、四は多德、此二は行法なり。五には教法、六に因法、七には果法、八には欲願法、九には、世に處して染を離るるの法、十には、巧に世法に分別するの法、此二は智法なり。十一に、所知普く遍するを、廣法と名く。十二に、所知多門を無量と名く。十三に、明了に割折するの法、十四に眞通を共と名く。十五に俗別を不共と名く。十六に四位の所知は、限量有るの法、十七に果位の所知は、分限の法無し。下は結す。癡闇を離るるに由りて、多法を聞くと雖も、久きを経て忘れず。下は釋する中に、先に徴し、後に釋するに四句有り。一は他の定を憊さず。二は常に正法を護る。三は善を修して歇まず。四は智慧常に行するが故に、忘れざるなり。

【二に不亂云云】
經の一此菩薩は無
量種の聲も一等の
下。

【下は利他を明す】
經の衆生を教化
す一等の文。

【下は所由を釋成
す】經の一惡業を
行ぜざる一等の文

二に、不亂を釋す。中に、一あり。初に多聲を聞くも、宿障無きに由りて、是故に亂
 せず。後に如是等の下は、廣大の聲を聞くも、善く觀察に由りて、是故に亂せず。前の中
 に三あり。先に六聲を聞き、次に十二の不亂を明し、後に四障無し。十二を釋する中に、
 初の八は自行不亂、後の四は利他不亂なり。前の中に、一は聲の體空を知る、故に念不亂
 なり。然るに、菩薩は六塵の境に於て、悉く能く亂れず。高大の聲は、是れ動亂の中に、
 強きを以ての故に、偏に擧ぐ。二は正定廢せず。三は所緣踏らず。四は理に入りて踏ら
 ず。五は檀等常に行ず。六は本心に忘れず。謂はく、菩提の願を習ふ。七は佛定を念す。
 八は眞理を證す。下は利他を明す。一は化を起す智を將ふ。二は正しく化事を成す。三は
 化所成の益なり。四は化事空なりと觀す。彼聲を聞くと雖も、此等を廢せず、本常に行ず
 る所なるが故に、不亂と云ふなり。下は所由を釋成する中に、四障無きに由る。謂はく、
 前の二は惑と業との兩障を行ぜず、後の二は人を尊び法を重んずるが故に、是の如きこ
 とを得て亂を爲さず。第二に廣聲不亂の中に、二あり。先に總じて、廣聲は亂すこと能
 はざることを明す。二に不亂の所由を釋するに、三有り。初に尋思方便觀なり。先に聲相
 の生滅、停らざることを觀じ、次に彼性も亦不可得なりと觀じ、後に能聞の緣會を聞くと
 爲んも、亦聞者無きを觀ず。二は聞好惡の下は、如實離染の觀を明す。三に知一切の下は、
 正證法性觀を明す。中に於て、先に相を明し、盡く法性と等し。後に性を明す。此
 聲直に菩薩の正念を、壞亂すること能はざるのみに非ず、乃し菩薩の與に、法性の境に入

【四】六に善現行の文を釋す。

【加行】加行智のこと。これ種子の現行する勢力を伏除して、現起せしめざる智。

【正體智】二障の種子を斷除する智。般若・如し。般若の法、五波羅蜜を導引して菩提の果に至らしむるを以てなり。

ることを作し、返りて長道の縁を成ず、是れ亂心の境に非ずることを顯す。『如幻三昧經』の中に、「假に大地を以て鼓と爲し、須彌を槌と爲して、須菩提の耳の邊に於て、一劫までも鼓を打つとも、亦微念の心をして、亂れしむること能はず。何を以ての故に。空定に入るが故に」と。第一に功德を引くが中に、六種の功德を引成して、漸次に增長す。初に亂を離れ、定を得ることを明す。二に癡を離れて智を引く。三に定増して伴を攝す。四に智増して非を長ず。五に定圓にして無間なり。六に智當果を滿す。第三に、衆生を益する定の中に、三有り。初に、益して亂を離れしむ。二に於一切の下は、益して癡を離れしむ、此は因を成せしむ。三に究竟の下は、益して果を得しむ。

第六に善現行とは、即ち般若波羅蜜なり。一は別境の中の慧法を以て性と爲す。二に種類とは「唯識論」に云はく、「三有り。一は生空の慧、二は法空の慧、三は俱空の慧なり」と。「瑜伽」に亦三有り。加行と正體と後得となり。又四慧有り。一は能證の智、二は後得の智、三は利他の智、四は俱生の慧なり。下の文の十慧は、以て無盡を顯す。彼の如く應に知んぬべし。又「智論」に云はく、「若し般若無ければ、五度妄の如し」と。是れ慧明を以て餘を導き、波羅蜜を成ずることを得しむ。三に秘密とは「商主經」に云はく、「文殊の言はく、「我は是れ無智なり。何を以ての故に。夫れ智慧無き者は、生死を畏れず、涅槃を怖はず、迷惑の衆生と共に、同じく娛樂に處す。我亦生死涅槃の中に於て、畏れず怖はず、迷惑の衆生と共に、一處に安住し、彼に同じく娛樂して、成就と爲すが故に、是故に我智

【四に文を釋す云云】正しく經文を釋す。

【二に行を結す】正しく行相を明すに、先づ加行智の文を釋す。

【識により…道す】外境の眞ならざるは、唯識の所變なるを知らば、境空の理自ら彰るべし

慧行ること無しと稱す。

四には釋文の内に三有り、初は前を牒し、後を起す。二は無所依の下は、正しく行相を明す。三は是れ菩薩住、此下は、行益の用を彰す。初の中に四句有り、初の二は合して標す。謂はく、無所有は三業の體空にして、示現する所無ければ、三業の用空なり。後の二は開釋す。謂はく、染淨を聞き、無碍は染空にして、無礙は淨空なり、前の體空を釋す。下の句は用空を開釋す。此體用染淨、俱に空なるに由りて、名けて寂滅身口意業と爲す。此に依りて觀を起し、深理を照達せんと欲するが故に、先に牒して學ぐ。

二に行を顯す中に四有り、先に加行智を明す。相を推して實に入るの觀なり。二に不生不滅の下は、正體智を明す。相盡き實を證するの觀なり。三に菩薩作如是念の下は、後得智を明す。實に依りて相を起す、實無礙觀なり。四は大悲を以て相に隨ひて、化を攝する觀なり。是れ實に即するの相なるに由るが故に、唯相なるも亦過無し。前の中に初の三句は、唯識無相觀を明す。謂はく、所取の相の空を觀するに、始に所依無く、終に所住無し。何を以てか、境空にして依住無しと知るとならば、心に隨ひて住するを以ての故に。此は正しく唯識觀に住することを明す。此は即ち識に依りて、妄境を遣ふるなり。辨中邊論一に云はく、「識に所得有るに依りて、境に所得無くして生ず。舊論に云はく、「唯識に由依が故に、境の無體の義成ず」とは、此謂なり。次に識體無生觀を明す。無量心等とは、能取の心性、一切の所取の法性に同じ、同じく性相無しと觀す等は、猶し同のごとし。此は是

れ塵無きに依りて識を遣す。辨中邊論一に云はく、「境は所得無きに依りて、識、所得無くして生ず。」舊論』に言はく、「塵有ること無きを以ての故に、本識則ち生せず」とは、此謂なり。無相の相を示現すとは、即ち前の所取空なり。謂はく、無相の相、現前するが故なり。深無底とは即ち能取の識空なり。識を以て本と爲して、識盡くるが故に底無きなり。如如性とは雙べて二空に即す。謂はく、心如にして境も如なり、同じく一眞性なり。如の中に於て、相の起るべき無きを、業報を離ると名くと雖も、然も此加行能く正證を起すが故に、善方使出、生離生と云ふ。離生は則ち是れ證位なり。謂はく、總じて前の加行、證を起すの功能有ることを結す。

【自下第二：分別
す】二に正證智の
文を釋す。
【下有、木無の故
に、但有但無に非
ず、實に有無俱に
絶し、四句を超異
するをいふ。

自下第二に、正證智を明す。謂はく、境智相如の理は、生滅の爲に遷されざるが故に、不生滅と云ふ。眞理に泯同するが故に、涅槃等と云ふ。此は不有を明す。不有は、即ち是れ不無の故に、非有説有と云ふ。有無俱に絶し、言藉地無きが故に、言語道斷と云ふ。證は此に異ると簡ぶ。謂はく、世智は依主有り。此中にして倚るところ無きが故に、離一切等と云ふなり。自下は證益を顯すに、五句有り。一は増善の益。眞を證するに由るが故に、先づ所起の善をして、極めて倍増長せしむ、故に長養等と云ふ。又、初に刹那の無漏智起れば、即ち更に熏成し、其をして増益せしむる故なり。二は斷障の益を明す。謂はく、證に順するを入と名け、妄を捨つるを離と名け、煩惱障の種を斷するを、無縛と名け、所知障の種を害するを、無著と名く。三は證眞の益。謂はく、昔未だ證せざるの眞理を證す、

【第三に：此法なり】三に後得智の文を釋す。
 【事理無礙】差別の事相と平等の理體との關係に於て相即不離となすものをいふ。

【八に佛法：故に】正しく佛法の破壊すべからざるを示す。
 【隨ふを礙へず】衆生濟度するに、世のために染汚せられざる意。

四は超位の益。謂はく、世間を過ぐるなり。五は起智の益。謂はく、此證理に由りて、能く後智を起して、世法を分別す。

第三に、後得智を明す。中に、二有り。初に理を以て事を會し、方便思求することを明す。二は菩薩解如是の下は、理事無礙を明し、如實の正解を彰す。先に總、次は別なり。

別の中に八句有り。初に世の寂滅を解して、妄體空なりと知る。二に佛の深法を解して眞を知り、相を離る。三に染淨雙べ融するが故に、等しくして別無し。四に染に即して恆に淨、世、佛法に入る。五に不染にして染なり。佛法世に入る。六に染淨門別の故に雜亂せず。

謂はく、全體、淨に即して染なるを失はず。舉體、染に即して淨なるを失はず。是を染淨不二にして二と謂ふ。七に不雜の義を釋す。世法虚なるを以ての故に、壞を待たず、存を礙へず。壞を待たざるを以ての故に、未だ會て佛法に即せざるにあらず。存を礙へざるを以ての故に、未だ會て佛法を雜へず、故に世法不壞と云ふ。八に佛法眞なるを以ての故に、

破すべからず、隨ふを礙へず。隨ふを礙へざるが故に、未だ會て世法に即せざるにあらず、破すべからざるが故に、未だ會て世法を雜へざるが故に、佛法眞實等と云ふなり。又釋す。

佛法世間に入ると雖も、世法の爲に壞せられず、何を以ての故に。眞實の法界は、不可壞なるを以ての故に、問ふ。若し爾らば、何を以て、世法は、佛法に入り、世法も亦壞せず

と言はざるや。答ふ。世法は佛法に入るを以て、壞盡有るべし、故に論ぜざるなり。眞妄不齊を以ての故に、此の如し、所以に此の如く染淨を蹂躪し、常に世間に於て攝化して、

【第四に：解脱せしむ】四に大悲觀の文を釋す。經の「三世の平等」等の文。
【第二の中に五句】經の「我衆生を成就」等の五句。

【法の中に生を見りて後、衆生を見るの意】
【其闍羅王に故に】以下、闍羅王を解釋するに、諸説を列す。

恆に涅槃に住せんと欲するが爲の故に、下に「大悲生を攝して前も觀理に乖かず」とは、是れ此法なり。

第四に大悲觀の中に五有り。初に安住三世等は、理に依りて、悲を起すことを明す。二は生を攝するの志を建つ。三は已を以て物を慙む。四は自ら諷めて捨てず。五は、緣に對して正しく救ふ。第二の中に五句有り。一は、我生を成せずんば、誰か成せんとは、化して善を成せしむ。二は離惡業を調す。三は煩惱を寂滅す。四は喜びて因成することを得。五は淨は果滿を得。三は已を以て物を慙む中に、是一句は已が所解を顯す。後に正しく、物の苦を慙むに二有り。先に諸の重苦を具することを明し、二に不離三障の下は、解脱の樂無し。前の中に法喻合有り。法の中に生を見るに、苦を受くるは是れ現の苦なり。危徑に趣くは是れ當の苦にして、此は是れ苦の果、煩惱纏は是れ苦の因なり。法に合する中に、恩愛繫は是れ苦の因、在生死等は是れ苦果なり。此四惡趣の義なり云云。其闍羅王は、諸の聖教に依りて説くに、五種有り。一は是れ地獄趣の攝、二は是れ鬼趣の攝、三は是れ餓羅王趣有るが故に、四は是れ變化の作有り、觀佛三昧攝に非ず。此經文の如きは、別に闍羅王趣有るが故に。四は是れ變化の作有り、觀佛三昧經の第五の説、及び「二十唯識論」等の説なり。五は是れ菩薩の作なり。三、五は是れ菩薩の作なり。十八に云ふが如し、闍羅王と名く。益を作すと爲ん、損を作すと爲ん、應に唯益を作すと云ふべし」と。故に知る、是れ菩薩なり。又「正法念經」の中に、闍羅王、罪人の

【本中有】 四有の中の二。諸趣に受生する一刹那より死する一刹那より前までを本有といひ、死より次生する中間を稱して中有といふ。

【第四に：應ぜず】 四に自誠不捨。經の「善薩」は是の如きの觀察一等の文【第五に：解脱せしむ】 五に正しく救生する文の下。經文は知るべし。

【第三大段：知んぬべし】 此位殊に述べし。此位殊に述べし。此位殊に述べし。此位殊に述べし。

【五】 七に無著行の文を釋す。此方便波羅蜜を修習する位なり。

爲に偈を説きて言はく、「汝人身を得て道を修せず、寶所に至りて、手を空しくして歸るが如し。汝今自作し還りて自ら受く。苦と叫喚するは、何をか爲さんと欲する。」問ふ、此王は中有の衆生を斷ずと爲んや、本有の衆生を斷ずと爲んや。答ふ、「本有の衆生、中有は地獄の中に在らざるを以ての故に。解脱の樂無き中に、初に有障を明す。謂はく、煩惱業苦を離れざるを、三障と爲す。下は無脱を明す文に、三對有り。一は脱の因無し。謂はく、癡闇は是れ障有り。不見眞明は是れ治無し。二に解脱の果無し。謂はく、無窮生死は是れ障有り。不得脱は亦治無し。三に前の二を成す。謂はく、初に有障を明し、不觀正道は無治を明す。第四に自ら誠むる中に、衆生に是重苦有るに、若し先づ彼を化せずして、自ら先に成せば、道理に應ぜず。第五に、正しく生を攝する中に、三句有り。善を成じ惡を調し、度して解脱せしむ。第三大段に行益あり。此般若の行は、餘行に勝るるを以ての故に、是故に前の諸行の後は、皆此益無し。文の如く知んぬべし。

第七に無著行。無住の心を以て、諸の善根を集む。又、悲智相導くを以て、巧に住著無し。無著の行は、無著即行にして、即ち方便度なり、後得智の悲を以て體と爲す。種類とは二有り。「唯識論」に云はく、「一は廻向方便、二は拔濟方便なり」と。下の文に十種有り、知んぬべし。釋の内に三有り。初に自分の行の中に、無著行を修し、二に菩薩於諸佛國の下は、勝進の行の中の修なり。三に於一念の下は、成滿行の中の修を明す。前の中に二有り。初は大智の行を明して、自利の無著を彰す。二は、菩薩如是觀眞の下は、大悲

の行を明して、利他の無著を顯す。前の中に三有り。先に淨を見、染せず。二は穢を觀、嫌はず。三は變べて前の二を釋す。初の中に二有り。先に別釋、後に此菩薩の下は穢を和す。前の中に十四句有り。初の四は、淨土の行を成じ、於念念中は、是れ無間修なり。中に於て一は嚴利無著を觀じ、二は詣佛供無著、三は造修巧無著なり。謂はく、所行無きは是れ無著なり。四は所成の業無著なり。謂はく、思は是れ業の體泯じて、以て眞に入るを、無思法住と名く、是れ無著なり。二は、於念念の下に十句有り。法身の行を明す。中に於て初の三は、佛寶を見るの無著、次の二は法寶に於て無著なり。初の二は聞法の處、後の一は正しく法を聞く。次の三は僧寶に於て無著なり。一は僧處を見、二は聲聞僧を見、三は菩薩僧を見る。上の八は、三寶の境に於て、無著の行を修す。下の二は自己の行に於て、無著の行を修す。一は攝法行の中に於て修し、二は正行を造修する中の修なり。二は穢結の中に二有り。初は前の淨土の行を穢し、二に見佛の下は、前の法身の行を穢す。下は結して以て嚴を成ずるを結す。此等の法を以て彼淨土を嚴る。別を結して總を成じ、初の句を顯すなり。二に染に於て無著の中は、唯一句なることは、淨法は求むるに順じて著し易く、捨て難きを以ての故に、多門に約す。三に釋の中に、先に微問す。一切の世人、淨を愛し穢を憎む、菩薩何が故に是の如くならざるや。下に釋する中に、初は問に對して總じて釋す。染淨の法、寂滅平等と觀するが故に、無憎愛の下は別して、六對の法を顯す。並に相行相奪す。各自性無きが故に憎愛せざるなり。第二に大悲の行の中に、初に前を穢

して後に入る。謂はく、前の觀法性の智を驟し、便即ち衆生性の中に順入す、同性なるを以ての故に、是故に生を化して常に無著なり。下は正しく相を顯すにじ有り。一は所化に於て著すること無し。二は化法に於て著せず。三は化心に於て著する無し。謂はく、大悲は果に同じ佛の所住に住す。四は化教に於て著する無し。謂はく、方言に隨ひて異なるが故に、種種語等と云ふ。五は化處に於て、著する無し。謂はく、六道等は是れ、衆生の所居なり。又是れ化行著する無し。謂はく、三乘等は是れ、所化の行處なるを以ての故に、道と云ふ。六には、起化の所依に於て著する無し。謂はく、三昧に依りて化他の事を起す。七は逆刹に於て著する無し。此等は並に、修行及び事に於て、智を以て回轉せしめて、而も滞著する無し。

【第二に勝進行云
六】經の「菩薩摩訶
薩は」等の下。

第二に勝進行の中に三あり。先に自ら勝行を成じ、二に得受記已下は、大悲攝化なり。三に不著身の下は、大智、理を照し、以て無著なるを顯す。初の中に九句有り。一は實教を悟る。前の所遊の諸佛國處に於て、著するの心無きを以て、佛說盡理の教を、領解するが故に、實教と云ふ。二は、教を尋ねて旨を得るが故に、道に於て無礙なり。三は、教に依りて、行を立つるが故に於法已立と云ふ。四は、自の修行を成ずるが故に具菩薩行と云ふ。五は、行成じて、動せざるが故に住菩薩心と云ふ。六は、心に依りて徳を成ずるが故に成寂解脱と云ふ。七は、徳成じて相を離るるが故に不念著所行と云ふ。八は、相を離れて、證に入るが故に住淨道と云ふ。九は、證成じて果を攝するが故に受記と云

【二に大悲行の中云云】經の「記を受くる」等の文の下。

【二に不求の下】經の「調御の師を求めず」等をいふ

【棄捨等：明す】經の「正道を棄捨して邪伴に従ひ」の句を指す。
【二に大悲隨逐云云】經の「爾時、菩薩：作さく」等の文なり。

ふ。受記の義は、下の離世間品の中に、具に説くが如し。二に大悲行の中に二有り。先に衆生の無善有惡を念ず。二に爾時菩薩の下は、悲を興して濟度す。又前は是れ、大悲增長す。二は是れ大悲隨逐するなり、前の中に三有り。初は癡愛に由るが故に、生死に流轉することを明す。謂はく、苦を知らず滅を見ること無く、闇にして信無く、集を斷ぜず。心眞ならずとは、道を遠離す、此上は癡の過なり。常行染とは、是れ愛の過、流轉は前の癡愛の、集業に由るが故に、苦果相續す。二に不見佛の下は、明かに邪見慢に由るが故に、種種の苦を受くることを明す。中に於て二有り。初は障に由るが故に、正しく入法に遇はず、是故に邪見を起す。二に不求の下は、慢に由るが故に、正人法を誘り、魔邪境に入ることとを明す。中に於て、初は善友を求めず。二は空を聞きて怖を生ずる者、正法を聞くことを拒む。三は不正思の故に謗る。四は棄捨等は、倒修行を明す。下は此邪慢に由りて、有に著して苦を受くることを明す。三は爾時菩薩見の下は、悲心增長し、自の善に著せざることとを結す。二に大悲隨逐の中に三有り。先に化心を起し、次に無著を顯し、後に化行を成す。前の中に、初に總じて意を顯す。謂はく、多衆生の爲に、各多劫を経て、各暫も離るること無し。去ること毫端の如くにせず。大悲心、衆生に隨逐し、犢の母を逐ふ等の如きことを明す。二は別して、悲の深きを顯す。謂はく、多處に各多時に、一りの生を化せんと爲す、多生も亦爾り。念念不絶は無間修を明す。下の「一毫處具等は、化行を起すことを明す。是れ長時修なり。」

【第三大智は云々】經に身に著せず一等の文なり。

【遣す】 除遣する意。

【寂に即して用を起す】身は湛然寂靜のうちにあれ共而も隨緣攝化の用を起すをいふ。【因を求むるに】此句、恐くは剩れるか、意通ぜず。

第三に、大智は理を照すを以て、無著の所由を明す。中に於て、先に十句有り。直に無著を辨す。後に何以故の下は、所由を釋成す。釋の中に、先に微問す、何が故に菩薩一切に著せざる。下の釋の中に、八の喩に約して顯す。一は謂はく、總じて釋す。一切緣起の法界、非有を有と爲すこと、猶ほ幻の如きを以ての故に、是れ不著なり。下は次第に疑を遣す。疑ひて云はく、世間の幻火は、燒用を成せず。佛は今出世し、廣く衆生を益す。豈彼に同ぜんや。釋して、電の如しと云ふ。亦照闇等の用有るも、豈是れ實有ならんや。然るに、電に三義有り。一は忽有の義、二は照闇の義、三は速滅の義なり。佛果の三義は、一は寂に即して用を起す、是れ忽有の義なり。二に用に即して恆に寂なり、是れ速滅の義なり。三に寂用無礙にして、廣く衆生を益するは、是れ照闇の義なり。此は上に、佛に於て著せざることを顯す。三に疑ひて云はく、若し佛電の如しとならば、何を以てか、菩薩行を起す、往、因を求め、因を求むるに既に虛ならず、果、寧んぞ實ならざらん。釋して云はく、菩薩の行は夢の如し、安んぞ是れ實なることを得ん。然るに、夢に亦三義有り。一は體無の義。二は現實の我、夢者をして、有を見しむるが故なり、三は有用の義にして、覺の與に緣と爲るが故に、夢中に走るに因りて、遂に便ち驚覺し、返りて願るに元來走らず、自身に望むるに、本より動かざるが如し。菩薩も亦爾り。未だ成佛せずして、自心の大夢に於て、未だ究竟して悟らず。是故に修行も亦、三義有り。一は、理を證するが故に空なり。一は、無明、未だ盡きざるが故に實なり。三は、能く佛果を

【非衆生の數】衆生なるものの内に入らざるをいふ。

【意生身】意の儘に、化生する身の意。

成ずるが故に、用なり。謂はく、無明の夢の内に於て、勤勇すること多劫にして、豁然として大悟すれば、佛果現前す。返りて夢中を望むに、都て所作無し。本性を順領して、具徳宛然たり。下の第八地の中に、夢に河を度るの喩の如し、之を知れ。此に由りて、上の文の菩薩の行に於て、著無きことを釋す。

四に疑ひて云はく、若し菩薩の行は夢の如く、所有無くんば、何が故に經に此は是れ菩薩の行、此は是れ二乘の行と説くや。釋して云はく、所聞の法は響の如し。響に亦三義あり。一は犢谷等を以て、緣成ずるの義。二は無本の義、三は言詮の義なり。聖教に亦三あり。一は機感じ佛應ず。二は當體本無し、三は根に稱ひて詮示す。是故に此教は是れ、不説の説なり。此等は上の、自行に於て著無きことを釋す。五に疑うて云はく、向に果行等は、是れ空ならしむべしと説く。世界の事は廣し、此れ應に實と爲すべきや。釋して、化の如しと云ふ、化に亦三義あり。一は神力持して起す。二は非衆生の數、三は衆生の用有り、世界も亦同じ。一は自識變じて起す、二は性相實無し、三は有情を盛停す。此は上の文の、淨穢の國を觀じ、心に所著無きことを顯す。六に疑ひて云はく、若し土は化の如くにして有ならざれば、何が故に、彼因に善惡の差別有るや。釋して云はく、業報の起ること、摩訶摩化身の如し。古徳の釋に云はく、此を重化の身と名く。謂はく、化の上に、更に化を起す。是故に因果俱に化なるが故なり。今更に三藏師に問ふに、摩訶摩は此に意生と云ひ、或は意成と云ふ、即ち意生身なり。彼身更に化を起すが故に復化身と云ふ。此に

【第三に究竟云云】
此下、無著行を成
満するを明す。下な
り。經の「一念の
中に於て」等の文

亦三義あり。一は兩化俱に有に非ず。二は兩相現に宛然たり。三に因果生酬の用有り。業果の三義は、此に同じて准知せよ。是故に有に即して是れ不有なり。七に疑うて云はく、若し業果、俱に空ならば、衆生の報類、何に由りてか差別なる。釋して云はく、心の畫に由るが故に。畫像に亦三義あり。一は平泯の義、同じく壁なるを以ての故に。二は高下有るの義、畫工失はざるを以ての故に。三は無礙の義、平高無礙の故に。衆生も亦爾り。眞如の平壁に於て、心畫きて像を成す。一は是れ空の義、眞に泯同するが故に。二は有の義。業果を失はざるが故に。心熏に隨ひて變するが故に。三は無礙の義、謂はく、空有無礙なり。即ち是れ、空を空うして、相相宛然たり。無所有にして是故に攝化して、廢せざることを顯す、恆に所化無きが故に不著なり。八に疑うて云はく、若し衆生此の如くならば、何が故に菩薩は、機に赴きて法を説くや。釋して云はく、所説の法は實際の如し。謂はく、即ち此言説、常に實際に同す。無言を方に、彼に同じと爲すと謂ふには非ず。向來の四門は、上の利他行の中の、無著の義を釋す。

第三に究竟満足の行の中に就きて、無著を明さば、中に於て三あり。先に自行、二に化他、三に釋成す。前の中に三あり。先に行の廣、一に念は是れ時の速きなり。二に滿十方は、是れ處の廣きなり。三に行の大、四に如法界は、行の勝るるを顯す。五に如空は、行の廣きを彰す。謂はく、法性を照見するに由りて、而も此稱性の行を成す。二に解の廣きを明す。謂はく、諸佛の證理を解知し、所有の方便を決定す。三に前の二を釋成し、

【六】八に尊重行の文を釋するに、釋名、體性、種類を以てす。

【十願】此經第六會、初地の中に十種の大願を説くをいふ。

以て無著を顯す。謂はく、自己の心、迅速にして、一念に能く、十方世界に遍することを知するに由りて、願に解行を成ずるは、前の如く成就す。又、己が心性、縁に隨ひて起り、即ち亦起ること無し、理事無礙にして、一定に住せざることを知る、故に廻轉迅速と云ふ。此に由るが故に、能く法性に稱ひて、大行を起す。二に、大悲利他の行の中に、先に行、後に乃至の下は、無著を明す。前の中の五句、初は勝るるを觀て、喜を生じ、二に起大慈の下は、自他愛へす。三に未成の下は、其化の意を標す。謂はく、善を成じて惡を調す。四に遠離の下は、其化行を起すことを明す。五に若聞の下は、有に在りて正しく化する。謂はく、一は言音同じからず。二は造業各異る。三は諸方の法則を、施設と名く。四は攝衆の差別の故に、和合と云ふ。五は趣向同じからざるが故に、流轉と云ふ。六は所修各別なるを、諸行と名く。七は分齊差別、亦是れ所緣なり。八は得位亦殊れり。九は趣果等からず。十は我當の下は、願を起して正しく化する。三に雙釋は知んぬべし。
(二六)第八に尊重行に、五門を作る。初に名を釋す。菩薩の願行深廣高勝にして、貴ぶべきの名を立つ。二に體性とは、大願を以て行體と爲す。然るに、是れ後得智の故に、瑜伽の第四十九に云はく、「後後の地を、憶求する智の殊勝の性を、願波羅蜜多と名く。又、信と欲と勝解との、三法を以て性と爲す」と。又「起信論」に云云。三に種類とは、「唯識論」に云はく、「願に二種有り。一は菩提を求むるの願、二は他を利樂するの願なり」と。或は四弘五願は「瑜伽」の説の如し。或は十願は下の説の如し。四に功能とは、此大願、通じ

【前の中に三】初に自分行を明す下三分つ、初に行起の所依九句あり經の餘重の善根；善根を成就せり一の文

【第二に：成ず】二に行相を顯す下内心、外縁、行成顯成の四に分ちて釋す。

【第三に：處し、らす】三に行成の利益を明す下、此菩薩は尊重等の文。

【第二に：之を思相】次に勝進の行相を明す下。經の「彼菩薩、衆生を」

て諸行に過するに由り、資て高勝ならしむるに由りて、此功能に従ひて尊重行と名く。五に文を釋す。相を辨する内に二有り。先に自分の行を明し、後に被菩薩の下は、勝進の行を明す。前の中に三有り。初に行起の所依を明す。謂はく、諸善根なり。善は是れ順理の義、根は是れ増上の義、生長の義なり。中に於て九句あり、初の一は總、餘の八は別なり。別の中に、一は行を起して心堅し、二は高くして情の表に出づ。三は行深くして測り難し。四は徳を生ずること廣多なり。五は寂を證して動じ難し。六は行妙にして對する無し。七は取捨の心思む。八は廣行は佛に同じ。此諸義を具するが故に、尊重と名く。第二に正しく行相を顯す。中に於て四有り。一は内心堅し。謂はく、願行の二念を起す。二には外縁勝る。謂はく、逆順の二縁なり。魔は是れ逆縁なるも、亦能く行を成ず。三は行、尊重を成ず。謂はく、淨苦の一行なり。四に願は不退を成ず。第三に此菩薩の下は、行成するの利益を明す。中に於て、安住尊重行已とは、此自分の行、已に成ずることを結す。於念念の下は、正しく二利を明す。先に自利の中に、患に於ては轉た離れ、徳に於ては轉た増す。理實には通じて、一切の行願を増すなり。願に約して顯すとは、此は是れ願度の位なるを以ての故なり。下は利他を明す。此菩薩内に實徳を具するに由りて、外をして見聞せしめ、普處からざるなり。

【第二に：勝進行の中に三あり】初に尊重の心行を修成し、二に心に依りて、尊重の慧行を修成し、初の中に亦三あり。先に無礙の心行を、修することを明し、二に菩薩如是の下は、

等の文。三段ある中、初に尊重の心行を修成するの釋なり。

【生死の中流】發心の後より、成佛の前までをいふ。

【今更に云云】此下、今義を示す。初に直ちに驗法を釋す。

【問ふ、何を云云】此下、二に問答して深義を顯す。初に兩岸俱存を明し次に水波の喩を以て相即の義を談じて釋成す。

無盡の心行を、修することを明し、三に而菩薩の下は、變べて二行を結す。初の中に二あり。先に理に依りて化を起す、無礙の行を明す。二に於衆生數の下は、理事混融無礙の行を明す。初の中に法喩合あり。問ふ、既に生死に趣かず、涅槃に趣かず、應に不住と言ふべし。此二の中流なり。云何が偏に、生死の中流に住せずと言ふや。答ふ、遠法師釋して云はく、前の不趣二處は、是れ有を離るるなり。不住中とは、是れ無を離るるなり。謂はく、生死の無處を、中流を斷ずと名く。此無に住せざるが故に不住中流と言ふ。今更に釋せば、東流の水の如く、南岸に住せず、北岸に住せず、亦説きて、不斷北岸中流と言ふことを得。中に別體無きを以て、岸に約して分つが故に。若し爾らば、南岸も亦得、何を以て、涅槃の中流と言はざるや。釋すらく、所度の衆生は、此岸に在るを以ての故に、是故に偏に、生死に就きて論ず、彼に約するも亦得たり。問ふ、何を以て岸を離れて、別の中に無きや。答ふ、一切衆生に於て、水の如きの如來藏を以て、彼岸と爲し、波の如きの妄心を以て、此岸と爲し、波に即するの水は、動に非ざるを以ての故に、彼岸此に非ず。水に即するの波は、靜に非ざるを以ての故に、此岸彼に非ざるが如し。此義に由るが故に、兩岸にして俱に存す。又、動に非ざるの水、即波なるを以ての故に、彼は彼岸に非ず。靜に非ざるの波、即水なるが故に、此は此岸に非ず。此に非ず彼に非ず、是を中流と謂ふ。是故に菩薩は中に居して、未だ嘗て岸に即せず、凡小は岸に在りて、未だ嘗て中に即せざるにあらず。此義に依るが故に、菩薩は是れ能化にして、終に是れ能ならず。衆生は是れ所

二に理事混融云
此下、理事混
融無礙の行を明す
交を釋す。經の一衆
生數に於て「等の
文をいふ。

化にして、終に亦化無く、中邊相即するを以て、能所圓融無礙なり、之を思へ。

二に、理事混融の中に、二の釋を作る。一は相に約し、二は實に觀く。前の中に、初の

句は是れ、總じて一切に通ず。心無所著の下は、別して顯す中に、先に直に辨するに、五

對十句有り。一は上に無著と云ふは、是れ一衆生に於て無著にして、餘は皆著有るに非ず。

亦是れ多を離れ一に著するに非ず。一切俱に著せざるを以ての故に。二に、益して以て、

善を修すれども増さず、化して惡を斷せしむるに損せず。此れ因位の未だ果を成せざるに

望めて説く。三に善滿じ果起れども生ぜず。惑障永く盡くれども滅せず。又、功德の果滿

ずれども生ぜず、大涅槃に住すれども滅せず。此初めて、果を成ずるに望めて説く。四に、

縱使皆果を成すれども、生界盡きず、果位長ぜず。此は已に果を成じての後に望めて説く。

五は上の如く説き、増損等無しと雖も、然も此化事、益を成じて虚からず、化事復虚から

ずと雖も、然も前説に違はず、故に亦無二なり。此れ都て前を結するなり。下の釋の中に

二あり。初の中に微問す。現に衆生を化するに、増有り損有り、何が故に、乃し無二と言

ふや。釋すらく、生界は法界に同じきを以て、是故に増損生滅無く、等しくして倚著無し。

前は一多に著せざる等を釋す。後の釋の中に、先に微問す。設ひ法界に同すれども、豈無

二なることを得んや。釋すらく、法界無二なるを以ての故に。生界をして、亦増損等の二

無からしむるなり。二に實に約して釋せば、初の句は、菩薩の白心無染なるを顯す。有著

の智は、此無礙の法を照すこと能はざるを以ての故に。下は、無礙の相を顯す。初の五對

の智は、此無礙の法を照すこと能はざるを以ての故に。下は、無礙の相を顯す。初の五對

【一闍提】(Uchhi)

【第二に菩薩】(菩薩)永劫に成佛せざるもの謂なり

【第二に菩薩】(菩薩)等心によりて無盡の徳を修するの文の下

の中、三に分つ。初の二を一と爲し、事を會して融ぜしめ、一多無礙なり。初は標、後は釋なり。著は猶し置の如し。謂はく、一衆生界に於て、多衆生を置けども、一に於て増せず、多に於て損せず。多に於て一を置くこと、上に返じて知んぬべし。衆生界とは是れ如来藏なり。性、通じ相、融するを以ての故に、事は理に隨ひて、無礙なるを得。次の二を一と爲し、事已に理に同じて、起盡無礙なることを明す。亦一は標、一は釋なり、知んぬべし。後の一は前の二を雙び結し、理事無礙を明す。謂はく、眞理に同じて、而も事を失はず、故に不虛と云ふ。事相を現じて而も即ち眞なり。是故に無二なり。下に釋する中に二あり。先に事は理に同することを釋し、後は理を以て事を攝することを釋す。不増不減經に云はく、「衆生界は無二無別なり、即ち此法身、惑汚するを以ての故に、五道に流轉するを、名けて衆生と爲す」と。又云はく、「法身即衆生、衆生即法身にして、法身と衆生、義一にして名異れり」と。又云はく、「若し衆生界と法界と、有二有別と言ふ者有らば、我彼人を説きて、一闍提と名く」と。

【第二に菩薩如是の下は、無盡の心に依りて、無盡の徳を修す。中に於て二あり。先に直に顯し、後に釋成す。前の中に、先に理に依りて、行を起し、勝徳自ら嚴る。初に福勝を顯し、善能分別の下は、慧深を明す。法の原際を照すを以て、到彼岸と名く。二に悉分別の下は、外化普應を明す。初に身業普く現す、次に意業に染無し、後に語業を廣く説く。二に釋成の中に、法喻合あり。法の中に、謂はく、一切の法に於て、諸の欲際を

【中に於て五對】經の「究竟に非ず；得果に非ず」等を行修、斷惑、證理、所成、約位、各二行を泯す。

【自下第二】二に慧行を修成する文、經是の如く菩薩は尊重一等を釋す。

離ると雖も、而も自行の道を斷ぜず、化他の行を捨てず。是故に寂に依りて行を起し、行徳無盡なり。前の二利の徳相をして、殊勝ならしむるが故なり。功德無盡と言ふは徳廣きなり。入淨法界とは、證深きなり。合の中に二利は知んぬべし。三に雙べて結すとは、謂はく、前の二心を融じて、一行と爲すが故に、是故に相牽して兩相俱に泯す。中に於て五對十句あり。初對は行修に約す。謂はく、究竟は是れ無礙の心行なり。理に入りて、求むることを息るを以ての故に、非究竟は是れ、無盡の心行なり。徳を生じ、能むること無きを以ての故に。徳を生じて即ち理に入り、理に入りて、恒に徳を生ずるを以て、是故に雙べて非ず。下は並に此に准せよ。二に斷惑に約す、謂はく、惑性空と照せば斷離すべきこと無し、本末の照に異なるが故に、不離に非ず。三は、證理に約す、謂はく、理の無相に由る。是れ可依に非ず。即ち此無依の理を照すに由りて、智をして圓明ならしむ。是れ不依に非ざるなり。四は所成に約す。謂はく、證理の時、染空にして、捨つべきこと無きに約す、故に世間に非ず。淨は新有に非ざるが故に佛法に非ず。又、染の厭ふべき無く、淨の欣ふべき無し。五は位に約して、凡小に非ず、謂はく、得果は是れ、二乘の四果等なり。

自下第二に、心に依りて、尊重の慧行を修成す。中に於て、初は前を標して後を起す。謂はく、成就重心とは、是れ前の心を標するなり。修習菩薩行とは、正しく前に依りて、智慧を修習するの行を明す。中に於て二あり。初は照行入理の智を明し、二は譬如虚空の如は、理行變融の智なり。前に二あり。初は化行對ふること無きを明し、二は自行無念な

【無受無轉…なり】
三釋あり。初は正
法と邪惑に約し、
次は異縁と正行に
約し、後に上の五
對に約す。

【八地…同じ】此
は三乘の說に通ぜ
ざるをいふ。

【二に理行雙融云】
經の「譬へば
虛空」等の下。

り。前の中に、初に五對十句あり。正しく顯すこと知んぬべし。二に何故の下は釋成す。中に於て無受無轉とは、正法として領受すべき無く、邪惑として轉滅すべき無し。又、異縁を納れざるか故に、無受正行堅住の故に轉ずる無し。又上の五對に於て、二乘等の法は、而も能く受けず。不教の正理に於て、而も能く轉ぜず。理に稱ひて行を起し、退歇する無し、故に不退と云ふなり。二に、自行無念の中に二あり。先に正しく顯し、後に釋成す。前の中に、是寂滅を行ずる時とは、前を牒するなり。不念等は、正しく無念を顯す、此は八地の無功用行に同じ、故に無念なり。十法の爲に念を動ぜず。謂はく、三時、三科、三位なり。内は是れ正報、外は是れ依報、内外は二を具す。又、根境識の三も亦得たり。後の一は、位に就きて結す。此位の中に、大願を修すと雖も、而も無念なるを以てなり。下の釋の中に二あり。先に釋す。何を以てか無念とならば、諸法平等の中に、智行として能く、所緣所成に趣向すること、有ること無しと、了達するを以ての故に、無念なり。後が故に無不二と云ふなり。又、此は亦是れ、前を釋して後を起す。謂はく、理行不二は前を釋するなり。合せて無不二と雖も、然も能所宛然たり、故に無不二と云ふ。此は後を起す文なり。二に、理行雙融の智の中に、二あり。初に正しく理行無礙を明し、二に、此菩薩の下は、功成じ徳立つことを明す。前の中に二あり。初に法喻標起なり。謂はく、無差別は、行は理に同じて、行相混ずることを顯すなり。非不成等は、理は行に同じて、行功存

【此二は是れ一行の相續するも、相存するも、共に一行なりといふ。】

【餘物あり：非ず】法共ニ假説を簡ぶ。【父初に：知んぬべし】觀の一被最と眞實一等の下。【初の一句：彰す】無行の行なるを示す。

【功成じ：二あり】觀の一此菩薩は、惑等の下。

【第三に慧】慧に依りて、尊重の功とを明す文。經の

【功成じ：二あり】觀の一此菩薩は、惑等の下。

することを明すなり。此二は、是れ一行なり。喩の中に準ずるに、只此無差別の處の空無きに非ず、餘物有りと言ふには非ず。是れ即ち法の中には、此無差別の正覺を、成せざるに非ず。無別は理に約し、成等は行に約すと謂ふに非ず。此は無成を以て、成と爲すことを明す、之を思へ。下の釋の中に、先に無行の行を釋し、後に行即無行なるを釋す。又、初に理は行に違はず、行は理を攬りて、功を成ずることを明す。後に行は理に違はず、理は行を混して、空に歸することを明す。先に初の義を釋す。謂はく、理を攬るの行は、萬行と雖も恒に寂なり、此は是れ八地の行なり。中に於て、初の一句は正しく、眞理は正行に違はざることを顯し、下は理に即するの行相を彰す。先に自利の行、二に調伏の下は利他の行、不壞因果は二行を結す。謂はく、存を與へざるが故に、壞を待たざるが故なり。下に、行は理に違はざるを釋す、知んぬべし。二に功成じ、徳立つことを明す中に、二あり。初に、佛に於て能く等し。謂はく、三世の如来皆同じく、此無礙の行を成ず。今亦彼を得たり、是故に同じきなり。此は是れ總なり、下は別して釋す。初に内の本覺を顯すが故に不斷佛性と云ふ。二に、行は理に即すと雖も、造修恒に起るが故に、不壞正法と云ふ。是故に佛に等し。二に、法に於て能く興す。初の句は總、辯才の下は、別して顯すに三有り。初に、興法の辨は樂無し。二に安住の下は、興法の智の無畏を明す。三に不捨の下は、興法の行の無著を明す。第三に慧に依りて、尊重悲行を修習す。中に於て、初に前を明し、後を起す。菩薩如是成就尊重智慧とは、前の所成の深智慧を標するなり。修善薩行とは、

「菩薩は是の如く尊重」等を釋す。

【二に但欲下】經の「但一切の衆生を…するのみ」の文。

【一縷極少なり】極めて少き名利の極の意。

【三學】戒、定、慧の三を學ぶをいふ。即ち戒を以て定を資け、慧を以て惑を斷じ眞理を達觀す。

彼に依りて此大悲行を修するなり。
下は正しく顯す中に、二有り。先に悲行の意を總標す。謂はく、先に化して障を出でしめ、教化成の下は、化して道に住せしむ。又、前は惡難を出でしめ、人天の益を得、後は生死を出でしめ、解脱の益を得るなり。二に如是教の下は、事を以て心を考へ成悲行を顯す。中に於て二有り。初は心に異求無きことを明し、二に但欲調伏の下は、唯生を益すと爲す。前の中に、先に直に辨じ、後に釋す。前の中に、先に惡人、後に善人なり。謂はく、設ひ彼惡人あらんに、各明慧の善友、世間に滿つこと有るも、我終に名利等の爲の故に、化を競ひて修することを爲さず。又釋す。菩薩は終に、邪見の惡人に於て、化を捨てず。彼恩を顧みず、名利を得ざるを以ての故に、明慧の善人に於て攝化す。彼恩を顧み、名利を得るを以ての故に、我善人所得の名利處の爲に、菩薩の行を修せずと云ふ。下は異求無きことを釋す。一縷は是れ利の中の極少、一愛の言は是れ、名の中の極少なり。少尙爲さず、況んや多きをや。二は、唯生を益せんが爲の中に、亦先に直に辨じ、他の調者の爲に三學を授け、淨者には斷惑せしめ、度者には果を得しむ。下の釋の中に先に徴す。何を以てか、己が安きを求めずして、但益生の爲にはする。釋して云はく、一切諸佛の法、是の如しとは、佛を擧げて己に類す。下は己、佛に同じきことを彰す。中に於て、初は化心同じ。二に欲令の下は化益同じ。
第九に善法行の中に、七門を作る。一は所得の善巧智力を以て、法を説きて、機の爲に

【力度】 度は波羅蜜(Paramita)の譯諸法を思惟し、行を修習するなり。

【二力】 思擇、修習の二。

【前後】 前とは梵行品等に處非處等の十力を説く。後とは本經第四十一卷に十種の力を説くをいふ。

するが故に名く。二は來意とは、大願滿く淨にして、力度を増成す。又云云。三に體性と
は、又『攝論』に依るに、後得智大悲無邊の智能を以て、體と爲す。四に業用とは、『攝論』
に依るに二種有り。一は思擇力にして、能く一切の正行等の、所對治の障を伏し、起ら
ざらしむ。二は修習力にして、能く一切の善行をして、堅固に決定せしむ。五に種類とは、
或は二力は前の如し、又十種有り、前後に説くが如し。六に差別とは、此位は第九地無礙
辯力に、同じきが故なり。圓教に約するに、此位滿じての後、即便ち成佛して、餘を待た
ざるを以ての故に。文の内に之を顯す、見つべし。

じに、釋文の中に四有り。一は標、二は辨、三は結、四は嘆なり。第二に相を辨する中
に二有り。先に自分の行、後に勝進の行なり。前の中に、初は總じて、其相を顯すに三句
有り、初は、法を以て機を益す。謂はく、能く淨法を以て、生の熱惱を除くを、涼法池と
名く。二は正法を弘揚す。謂はく、持辯を以て、弘く正法を顯すを、守護と名く。三は弘
法の益なり。謂はく、十身を以て、多劫宣化して絶たざるを、佛種不斷と名く。是故に『智
論』に云はく、「般若をして世間流行せしむるは、即ち是れ佛種不斷なり」とは、此謂な
り。此等は亦是れ、略して善法行の名を顯す。下は別して辨する中に、四有り。一は持成
就、二は説成就、三は問答成就、四は語益成就なり。初の中に、持法を忘れざるに由りて、
方に能く演説す、故に先に之を明す。十の中に、皆初に持體を明し、後に業用を顯す。持
法分明なるに由るが故に、清淨と云ふ。此に依りて法を説くが故に、障礙無し。此は是

【下は業用を顯す】
經の「佛の如く、佛事を作して」の文を指す。

【第二…音なり】
二に說成就の文を釋す。經の「應化する」等の文の下

【第三…如し】三
に問答成就の文を釋す。

れ總句なり、餘の九は、是れ別なり。初の四は、持は四辯を起す。五は、行に由りて佛境に入り、諸佛爲に一切智甘露の法を説きて、其心頂に灌ぐ。此に持して忘れずとは、説、物の機に稱ふが故に歡喜せしむ。六は、内に自ら法を證するに由るが故に、同證の辯を起すこと無盡なり。七は、理に同するの辯に入るに由るが故に、文義を説くこと、廣多無盡なり。八は、正しく方言を、善くするに由るが故に。能異の異の言論を、無量辯と名く。前と何ぞ別なる。前は語圓に、義足りぬるに據るが故に、正語と名く。又是れ、義に當るの語なるが故に此別なり。九に、能現の身佛に同ず。不可盡を嘆す。下は業用を顯す、知んぬべし。第二に隨所應化の下は、說成就を明す。中に二有り。初に正しく説の相を顯し、二に隨所應於一一の下は、開化無礙を明す。前の中に、初は所應の機を明すに、三句有り。一は多の所化の熟する機に隨ふ。二は各各彼所解の言音を以てす。三に、各彼機の、聞くべき差別に隨ふ。下は正しく爲に宣説す。説、化心に稱ふを、不違悲と名く。二に開化不礙の中に、初に、多音をもつて開化して、障礙有ること無し。二は、説有の下は、一音を以て開化すること、無礙自在なり。又、前は是れ一多、後は是れ多一なり。此二の無礙は、是れ一圓音なり。第三に、爾時の下は、問答成就を明す、四義有り、微細なること、前の說成就に過ぎたり。一は、前は但世界と云ひ、未だ微細處の自在を顯さず。初に假に擧ぐ、此中は、一毛頭と一念の中とに、無量の衆有り。二に一念を餘念に類し、乃至過未の劫を盡す。三は、異語異問なり。四は、菩薩は無怯畏の言なり。設ひ一切衆生問ふ

【第四：成ず】 四に語益成就の文を釋す。經の一菩薩の說法は「等の文

【第二に勝進云云】 自分行を釋し終り次に勝進行を釋す。經の一此菩薩は善法行に「等の文の下。

【淨法界：體と爲す】 法身の所攝は淨法界、報身の所攝は根本智、化身の所攝は後得智。【境智を性と爲す】

も、尙一言をもて答ふ、況んや此少衆生に、況んや多言を以てするをや。此は智力辯才、有餘自在を明す、此は地前に在りて、此自在を得る者は、是れ圓教の中の、普賢の位なり。若し餘宗は、未だ此の如きことを得ず。『瑜伽』等に説くが如し。第四に語益成就とは、上の所説の言に、義利を具することを顯す、五句有り。初の句は總、二に深慧を具すること、を言ひ、三は能く福藏を成ず。謂はく、受持して福を生ず。四は照理周備す。五は能く果智を成ず。

第二に勝進行の中に、二有り。初は總標、後に如此の下は別釋す。前の中に、初に前を釋す。謂はく、自分の行成するが故に、安住と云ふ。下の初地の中の、安住地分に同じ、次に二利の兩章を標す。二に、釋の中に二有り。先に略、後に佛子の下は廣なり。前の中に、先に自淨を釋す。前の自分の中には、但し三千界に於て、佛の三業を現すと言ふ。今は彼に過ぐることを顯す、故に如三千乃至不可稱數世界と云ふ。身口は知んぬべし。一切の法に於て無礙なりとは、意業淨を明す。作佛事とは、此三業の所作を明す。下は益を釋す、化は謂はく、前の自淨の三業を以て、能く化他の事を作す。二は廣く釋すの中に、二あり。先は前の自淨を廣し、後の摩訶薩の下は、前の利他を廣す。前の中に、初は數を標し、二に十身を列ね釋するに、五門を作る。一は、體性を辨ずとは、淨法界と及び根本智と、并に後得智との三法を以て、體と爲す、文の如く見つべし。又、總じては唯境智を性と爲す、又、境智雙べて融すれば、唯一法界を性と爲す。二に、相を釋せば、一一の身

清淨法界は境にして理智の所證、即ち法身の自受用身に在り、後得智の大悲は、衆生を所縁とし化身を現す【境智：一法界】境即智、智即境の故にいふ。

に皆、先に標し後に釋す。初の中に、理證せざることを無きが故に、無邊の法界に入り、世超えざることを無きが故に、一切世を滅す。世滅し理現するを、法界身と爲す。二に、理に能滯無きが故に未來世に向ひ、生ぜざることを無きが故に、一切趣に生ず。前は即ち世を超えて盡さしめ、此は即ち世に遍じて同生す。三に、趣に遍じて同生すと雖も、然も寂に任して、動ぜざるが故に不生と云ふ。四に、生に即して不生なりと雖も、然も彼趣の中の身、恒に滅せず。此れ不生に異らずして不滅なれば、言も及ばず、故に言語道斷す。五に、彼離言の身、實狀有ること無し、即ち是れ眞如なるを以ての故に。又釋すらく、眞如を以て身と爲す、然も眞は相を離るるが故に不實と云ふ。是れ理性眞實なるを以ての故に、是故に實を離るるなり。六に、離礙とは、體安染を出づ、隨應とは淨用無礙なり、日雲を出でて、照用自在なるが如し。七に應用を起すと雖も、常に來去無くして死を離る、此等は釋成す。此に准するに、定んで分段生死を出づることを。八に、但用に來去無きのみに非ず、亦乃ち體に變壞無く、亦是れ縁も阻つこと能はず。九に、直に四相の爲に、遷されざるに非ず、亦乃ち妙に三際を絶す。已未等の言を以て取るべからざるが故に。十に、無相は相を礙へず。通じて身と名くるは、皆依止の義有るが故なり。三に相攝とは、二門有り。一は、三身に約す。謂はく、此中に法界と、不實と、不壞と、一相と、此四は是れ法身なり。不生と、不滅と、無來無去と、無相と、此四は是れ實報身なり。未來と離安と、此二は是れ化身なり。二に十身に約するに、三有り。初は、下の離世間品の説の、十身に約す云云。

【若し三乗有り】これ全く修教の地前分段、地上變易の意による。【廻心の二乗】現世に於て廻心して菩薩乘に入るもの今變易を除く。【若し攝方便】故の意。地前變易ありとは漸悟の菩薩に約し、地上變易ありとは漸頓二悟に通ず、而して初住以上、位位に入相の化儀を現す【若し自教云云】別教普賢の自體は唯これ一箇の分段報身。而も信位の満心に果海に没同し、一斷一切斷、如來の一切成を無量

二は、勝天王經の十身に約す云云。三は、法集經の十身に約す云云。四に得處とは、四位有り。一は、或は唯地上に得ず。『勝天王』及び『法集經』の、十身の如し。此は三乘に約して辨す。二は、或は唯地前に得ず。此所説の如し。三は、或は二に通じて得ず。下の離世間の十身の如し。四は、或は地前に非ず、地上に非ずして得ず、三身十佛等の果位に、得するが如き故に。五は分齊を定むとは、若し三乗中の菩薩の地前は、必ず是れ分段身なり。地上は方に變易身有り。廻心の二乗は、地前に亦有るを除く。是故に此十は、彼の所攝に非ず。若し一乗の中に、二説有り。若し攝方便に、地前地上俱に變易有りと言ふは、一一の位に、終には佛地に至るを以ての故に。若し自教に就きて言はば、俱に是れ分段なり。白淨寶網轉輪聖王は、普見の肉眼等を得るを以て、是れ十地の菩薩の故に。下の文に説くが如し。又、善財童子の如き、分段身を以て、普賢の位に至る。然るに並びに是れ、法門に即するの分段なるが故に過患に非ざるなり。第二に前の益、他を廣すと、先に前を牒し、後を起す。謂はく、此十身に依りて、衆生を化導す。句別つに十有り。一は、善を生じ、二は、苦を離れ、三は、樂に住す。此上は世益なり。四は、其に出路を示し、五は、其をして起入せしめ、六は、俗諦を解せしめ、七は、眞諦を得しめ、八は、其をして惑を斷ぜしめ、九は因位を成ぜしめ、十は果を示して向はしむ。四に嘆する中に、初に清凉池と作るは、總じて歎するなり。佛法の底を得れば、能く法池と作るの所由を釋するなり。又、初に前の自分を結嘆し、後は勝進を結嘆す。

身を得、故に十身具足す。

【下の文】小相品に兜率天子の生天を説く。

【又善財…至る】本

經入法界品に「汝今一生皆悉く具に得」とあるをいふ

【第二に前の…益他云云】經の「菩薩摩訶薩…能く一切衆生の爲に舍」等の文を指す

【心】十二眞實行の文を釋す

【生死涅槃…事】今は智慧を以て機を照し後に正しく益を施すをいふ

【下に施す】經に是處非處等の十力智相を説くをいふ

【捨眼…復す】涅槃經第三十一の文を引く。

第十に眞實行の中に、亦七門を作る。一は、名を釋すと、言に依り行に依り、徳を成じ言に稱ひ、言行虚からざるが故に眞實と云ふ。眞實即ち行、持業の名を得。二に次第とは、行力轉た勝れ増して、實智に入る。三に體性とは、後得智の用を以て、性と爲し、兼ねては、大悲等を以てす。四に業用とは、梁の「攝論」に依るに、生死涅槃に住せざる、是れ智の用、凡聖を利益する、是れ智所成の事なり。五に種類とは、二有り。一は、物の機を照すの智、二は、法業を授くるの智なり。又、十智有り、下に説くが如し。六に所成とは、此位は下の第十地満足の相に、同じきを以ての故に、智波羅蜜増上なり。餘行は皆具せざること無し。是故に、此位の行滿じ已りて、普賢無邊の境界に入る。故に下の文に云はく、「因陀羅網法界に入りて、如來の無礙解脫等を自在に成就す」と。

七に、釋文の中に、亦四有り。標、釋、結、嘆なり。釋の中に三有り。初に本誓の言を擧げ、二に此菩薩の下は、言に依りて行を成ず。三に、得一切法の下は、行成じ徳立す。又、初は即ち言の實、二は行の實、三は益の實なり。初の中に亦三有り。初に總じて標擧し、二に略して釋し、三に此菩薩成就の下は、事を擧げて廣く釋す。初の中に、如説能行とは、謂はく、行は初誓に稱ひて成ず。先の言の實を顯すなり。如行能説とは、言、終成の行に稱ふ、後の言の實を顯すなり。此れ始終の實言無二なるに由るが故に、第一誠諦の語と名く。然るに、此始終の一、誠實の言に、總じて三類有り。一は自行に約す、菩薩の初誓に、捨眼と言ふが如し。若し乞ふもの至ること有らば、言の如く施す。其故を問ふこと

【捨眼…復す】涅槃經第三十一の文を引く。

【生死涅槃…事】今は智慧を以て機を照し後に正しく益を施すをいふ

【下に施す】經に是處非處等の十力智相を説くをいふ

【捨眼…復す】涅槃經第三十一の文を引く。

【生死涅槃…事】今は智慧を以て機を照し後に正しく益を施すをいふ

【下に施す】經に是處非處等の十力智相を説くをいふ

【捨眼…復す】涅槃經第三十一の文を引く。

【生死涅槃…事】今は智慧を以て機を照し後に正しく益を施すをいふ

【下に施す】經に是處非處等の十力智相を説くをいふ

有れば、菩提の爲なりと答ふ、此言何の證ぞ。便ち誓言を發す。事若し虚しからずんば、眼をして平復せしめよと。妄語に非ざることを表す。眼言に隨ひて平復す。此は即ち初の言能く行を起し、後の言能く行を増すなり。二に利他の行に約す、菩薩の初て衆を度せんと言ふが如し、言の如く救度す。縦ひ自行滿すれども、亦果に就かず。要す本誓に稱ひて、以て生界を盡す。此に亦初の言能く起し、後の言能く滿す。三に因果に約す。謂はく、菩薩の初て誠言を發するが如し、要す萬行を修して、當に佛果を成ずべしと。言の如く行滿して、後の果に成佛す。師子吼して言はく、「我獨り尊し」等と。此は即ち初の言は因を辨じ、後の言は果を顯す。下に「人中の雄、大師子吼す」等と云ふは、是れ此門なり。上の三義の中に、此行の内に於て、義は通じて三を具し、文は唯後の二なり、知んぬべし。

【二に略釋云云】
經の「此菩薩三世の學び」等の文の下。
【二に「是菩薩是の如き等」の文の下。

【三に廣く釋す云云】
經の「此菩薩は衆生の是處非處等の文なり。

二に略して釋する中に、二句有り。初は、説の如く能く行ずることを釋す。謂はく、言の如く、行を起すが故に、實語と云ふ。諸佛平等の實性に證入して、入理の行を起すなり。善根齊等に、緣事の行を起すなり。二に、行の如く能く、説くことを釋す。謂はく、廣善を成すと雖も、而も化志に乖かず、先言を失はず、故に無二なり。語、終始を改めざるを以ての故に、無二と名く。此は即ち初は能く行するが故に實、後は終に改めざるが故に、無二なり。此は並びに、三世の諸佛の同じく行するところ、佛の果智に順するが故に、隨順等と云ふなり。三に廣く釋する中に、二有り。初に行徳高しと雖も、而も本誓を捨てず。二に何以故の下は、不捨の意を釋す。初の中に、先に十力智を成じて、徳の尊高なるを顯

【淨行品】 本記第四、六七左 三門を以て釋す。
 【下】に意…三あり
 經の「菩薩は復是念一等の文の下。」
 【折】に違はば…べし
 衆生を濟度せず正覺を成ぜば覺他の行を缺く、これ本誓に背けばなり。

【自下第二…なり】
 第二に本誓の言に由りて、行満足するを明す文を釋す。經の「此菩薩…已れり…」の文なり。

し、後に而不捨の下は、本誓を捨てずして、衆生を救攝することを明す。菩薩の行、十力の義は、淨行品の處に、已に釋するが如し。『淨名經』に云はく、「佛道を得て法輪を轉じ、涅槃に入ると雖も、而も菩薩の道を捨てず。是れ菩薩の行なり」と。下に、意を釋する中に、三有り。初に返釋す。謂はく、失を擧ぐ。誓に違はば自ら誠めて應ぜざるべし。二に我當の下は順釋す。謂はく、本願を酬い遂げ、理を以て自聞す。三に何以の下は轉釋す。謂はく、本を憶ひ今を念じ、心をして勇悍ならしむ。中に於て二有り。先に本を憶ふ。謂はく、言發ること裏自りす、豈還つて自ら食さんや。此れ本誓に違ふことを恐るるの失なり。二に是故の下は、今を念ず。謂はく、他の所請に非ずして、能く自を廢し、他の爲にするに由る。是故に自德をして、殊勝を成せしむ。今若し救を捨つれば、便ち此德に乗く。此れ恐くは、現德に違ふの失なり、前に由りて後を起すが故に是故と云ふなり。又釋すらく、我衆生に於て、是れ勝德有りて、救度を爲すに堪へたり。若し捨てて救はずんば、即ち此德に違ふ。中に於て六句有り。皆初に標し、後に釋す。一は無著の故に勝、二は能調の故に上なり。三は空を解して闇を離れ、四に願滿じ已りて得、五は具德能く變じ、六は佛念能く攝す。上來、本誓を成立す、違ふべからざることを顯す。

自下第二に、本誓の言に依りて、所作を成す。中に於て三句有り。初は前の不捨に由りて、此度生無上の智慧を得。二に隨一切の下は、正しく救度を明す。三に隨其等は、本願を成滿することを明す。謂はく、言の如く、所作究竟せざることを無し、故に満足じと云ふ

【白下第三】第三に、本行或滿し、徳立つを明す。交を釋す。經一切法の自在一等の交の下。

【遍吉】普賢菩薩をいふ。

なり。白下第三に行成じ徳立つとは、謂はく、此位の滿に、普賢法界圓明自在の徳を成就す。中に於て二有り。先に因滿足を成じ、後に摩訶薩住大悲の下は、成果の徳備をも明す。徳、滿せし菩薩は、此因果の二用を具するを以ての故に。前の中に三有り。先に二刹を標し、二に成滿を釋し顯し、三に此菩薩義身の下は、徳の無盡を顯す。前の中に得自在智は、自行の滿を標するなり。令衆生淨とは、利他の圓を標するなり。二に別釋の中に、二有り。先に、前の自在を顯すに、亦二有り。一は、身至らざることを明す、空法界に等し。無量無礙とは、一處に現すれば、即ち一切處に現することを明すが故なり。無依とは、身起無本の故に、自在を得ることを明す。二に、身に容れざること無く、内に一切を含むことを明す。謂はく、三世間等悉く、身内に現す。此法界の身は堅に三位を含み、横に九圍を該するに由る。是故に未來の諸佛も、亦中に於て現す。二に此菩薩の下は、前の衆をして、淨ならしむるを顯す。中に於て三有り。先に化の器を知り、二に隨其の下は、現身說法す。亦是れ自身の内、衆生を化す。三に、化に於て著せず。謂はく、諸の玄法を以て、夢の衆生を化す。是故に化すと雖も、是れ無化なり。三に、徳の無盡を顯する中に二有り。先に前の外化、滿するに由りて、量智の無盡を顯す。二に入諸三昧の下は、因行の圓なるに由りて、理智の無二を顯す。衆生は二に依るとは、凡を擧げて聖を顯す。上來は因徳竟んぬ、等覺の位に同じ。一智度論の第四十に云はく、復次に、十住の菩薩は、神と差別有ること無し。遍吉、文殊師利、觀世音等の如き、佛の十力の功德等を

【第二に果徳の用】
經の「菩薩摩訶薩
は大悲心」等の下

【下は結及び嘆】
經の一是を菩薩：
名く一は結、此菩薩：
せしむ一は嘆
なり
【自下第二に：竟ん
ぬ】二に説の利益
を明す。經の一節
時、佛神力」等の

具足して、佛と作らず、廣く衆生を度せんが爲の故に」と。乃至云はく、「是諸の菩薩は、餘の菩薩に於て、大と爲せども、佛に比ぶれば遍知すること能はず。月光は大なりと雖も、日に於ては、即ち現せざるが如し」と。解して云はく、彼は十地を十住と名くるに約す、是れ第十地なり。此第十行の中の、業用に同じ。第二に果徳の用を同する中に、初前を憚して後を起す。得佛の下は、正しく所成を顯す、此は妙覺位に同じ。文の中に、通じて如來十種の功徳智を成ず。一は佛の圓明の十力を得るの智、二は、帝網法界に入るの智、三は、成佛無礙解脫の智なり。謂はく、不思議解脫は、不思議品に、十種有りと言くが如し。四に人雄無畏を成ずるの智なり、謂はく、其實徳を吼するが故なり。五に、大法輪を轉ずるを得るの智なり、謂はく、法王、法を宣ふるが故に。六に、成佛無礙の智は、微細の礙無明無きことを顯す。七に絶生死の下は、佛の無垢智を成じ、微細の著無明無きことを顯す、亦變易の盡くる處を顯すなり。八に、廣く衆生を益するの智、九に、正法を興護するの智、十に、無功攝化の智なり、謂はく、能く盡く古佛の攝化方便に同じ。下は結及び嘆なり、知んぬべし。上來正しく説くこと竟んぬ。自下は第二に、説の利益を明すに、二有り。初に動地とは、生信の功徳なり。二に兩供等とは、是れ敬重の功徳なり、四有り。一は兩供、二は作樂、十行の曲を奏す、三は天光、四は天音、十行の徳を讚す。上來は總じて是れ、一世界の中に、十行を説き竟んぬ。自下は第二大段に、十方無盡世界所説の十行を明す。供等も亦爾り、此を同ならしめ一部を結成す。謂はく、一は十行即一切の十行

【九】當品に七分を立つる中、以上は説分終り、次に第六證成分なり。經の一附時、十方各各」等の下。

【一〇】七分の第七重頌分にして經の一附時、功德林菩薩、佛の神力」等の文なり。

の故なり。上來は一説一切説なり、總じて説分を明し竟んぬ。

自下第六に證成分を明す。中に於て二有り。初に此處の證を明し、後に一切處の證を明す。前の中に四有り。初に菩薩の來集を明し、二に此所説を嘆じ、三に各證する事を擧げ、四に是故の下は、意を述べて證を成す。問ふに既に行法圓融するに由りて、彼菩薩世界の諸佛をして、同じく功德と名けしむ。何が故に此處の佛及び世界を、功德と名けざるや。答ふに此經の中は、凡そ是れ所證は、皆悉く同じく是れ盧舍那佛にして世界も同じく是れ華嚴の娑婆なり。其説法の菩薩は、即ち法に従つて名を受く。凡そ是能證の名は、必ず法の名に同じ、主伴異なるを以ての故に。若し此處を彼に望めば、此を能證と爲す。即ち此名は彼に同じ、彼名は此に同す。是れ此經の中の觀例、宏致の、爾らしむる所なり。上來、十方各十萬の刹に、同じく十行を説く、總じて此一主の伴に屬するも、猶自ら是れ十方の主の攝に非ず。是故に後に更に十方を結し、一切處に同じく證することを明す。上來は一説一切説なり。總じて證説を明し竟んぬ。

第七に、重頌分の中に、二有り。先に、意を叙し、後に正しく頌す。前の中の句、別に十有り。一は、觀十方は、同説することを顯す。二は、觀眷屬は、同じく聞かしむ。下は正しく説の意を顯す。三に、果を紹しめん爲に、四に因を淨からしめん爲に、五に願堅し、六に行續くなり、此上は自分なり。七に勝進、佛を攝す、此上は自德にして、下は利他を明す。八に、十行、衆生の善根差別を説きて、物をして習學せしむ。九に器を量り法を授く。

十に總結す。此等は並びに、因門に約して説くが故に、俱に種と名く。又是れ、性種の位の故なり。

正しく重頌の中に、七言五言は、梵本別無く、俱に四句を以て頌と爲す。總じて百一偈有るのみ。此中の偈頌は、前の長行と、文勢同じからず、略して五例を論ず。一は、前は即ち位の始終に約し、布列して説く。今は即ち、前説を會融して、始終無からしむ。是故に、一一の行の中に、一切の行を具するなり。二に、前は別行に約し、此は普行を明す、普別無礙なるを以て、二文互ひに顯す。三は、前は唯因に約し、此は果行に通ず、因果圓融するを以て、此行門の法界と爲すが故なり。四に、前は同教に約して、彼中根に授け、今は別教を顯して、斯上達に彼らしむ。同別無礙なるを以て、一の同教と爲す故なり。五に、前は不雜辯才に約し、此は任放辯才に約す。説くに次を待たず、言辭不斷の故なり。文の中に二有り。初に五偈有りて、佛の功德を歎じ、人をして願求せしむ。二に、十方一切の下は、菩薩の行を頌し、人をして習學せしむ。此位の中に、因果の二行を、具することを顯すが故に。又、佛加するに由りて、説くが爲の故に、先に佛を歎ず、行に由りて説く所の故に、後は行を頌す。前の中に二有り。初の二頌は、舍那佛を嘆ず。此は化主の故に。中に於て初の一句は、佛の無垢無罣礙の智を嘆じ、次の二句は、佛の勝徳の廣大なるを歎じ、後の一句は、佛の證行の圓淨なるを歎じ、二に十方の佛を歎す。是れ助加なるを以ての故に。中に於て初の一句は、二嚴の果滿を顯す。謂はく、解眞は慧深く、無等は稱勝

【速究】經の一彼速かに無上道を究竟す一の句。

【十方一切名く】の句。

【句句分別して】五音の偈の初なり。

【末後の四偈】經の一菩薩の行…得ん一の偈。

【前の六偈】經の一十方、切の世界…名く一の七言六偈。

【二に前の十行】五音の偈は、前説の歡喜行より眞實行に至る十行を重頌するをいふ。

【第二に善入の下】經の一善く深智…所行なり一の五偈を釋す。

【第三に…頌す】經の一智慧量…所行なり一の四偈を釋す。

れ、速くは満果なり。次の一は眞悲廣益、後の一は智斷の徳の齊きことを顯す。第二には、菩薩の行を頌する中に、三有り。初の七言六偈は、前の本分の中の、行業不思を頌す、廣きは法界の如く、究竟は空の如し。二に「句句廣く分別して」の下は、前の説分の十行の差別を顯し、末後の四偈は、結歎して勝を顯す。前の六偈の中に、六種の行業、皆不思議を顯す。初の一は佛を見て妄を離るるの行、二は理を見て徳を成するの行、三は無功廣大の行、四は寂用無礙の行、五は顯發尊勝の行、六は據位多門の行、各一頌に顯すこと、知んぬべし。二に、前の十行を頌する中、初の一は、總して十行を説き、下は別して顯す中に、初の六偈は、歡喜行を頌す。中に於て初の三は、無畏施なり。一は害を離れ生を益し、二は苦を濟ひて安からしめ、三は語意憫を交く。次の二は法施なり。一は究の義、二は説教、後の一は財施なり。百福とは、涅槃經一に説く、下と中と、上と上中と上上との、五品の心の中に、各十善を修し、即ち五十と爲す。始修の五十のごとく、終の修も亦爾なり」と。故に百福有りて、百福は一相を嚴るなり。第二に善入の下五偈は、僥益行を頌す。中に於て初の一は、律儀戒を頌す。謂はく、過も動すること能はず、次の二は持善法戒を頌す。一は法行に順じ、二は二行を離る。次の一偈半は、攝衆生戒なり。一は化處、半は化行、下の半は、三聚を總結す。第三に智慧不可量の下四偈は、無恚恨行を頌す。中に於て初の一は、法思勝解忍、次の二は安受苦忍なり、謂はく、自ら修行するの時、苦有るに堪耐す。一は心の苦を忍ぶ。謂はく、上半は所修を擧ぐ。心無怠は心安忍を明す。

【第四に：無足なり】經の一語佛の法を五偈を釋す。

【第五に：頌す】經の「善く語言：所行なり」の二偈を釋す。

【第六に：頌す】經の「無量の諸の：所行なり」の二偈を釋す。

【第七に：頌す】經の「佛の甘露：所行なり」の四偈を釋す。

【第八安住：頌す】經の「法安即に安住：所行なり」の八偈を釋す。

二に身苦を忍ぶ、亦上半は所修を擧げ、身行無礙は身安忍を明す。次の一は他不益忍、上半は所忍の境を擧ぐ。菩薩悉救は益を擧げ、損に翻じて、正しく能忍を明す。第四に修習佛法の下の五偈は、無盡行を頌す。中に於て初の二は、加行精進なり、一には、前の勤修精進等の、十句を頌し、二は、前の欲悉知衆生根欲性等故修行精進を頌す。次の一は、被甲精進にして、前の爲衆生受地獄苦等を頌し、後の二は無厭足精進なり。一は智光遍く物を益し、後の一は、神力常に生を益す、故に無足なり。

第五に善解の下の二偈は、離亂行を頌す。中に於て、一は現法樂住禪なり。上半は加行にして、前の分別世間色法を頌す、經論等し。下半は住定明慧は離癡を彰し、不動は離亂を顯す。後の一は引功德禪なり。無盡地とは、前の、聞受正法乃至、多劫不退忘等を頌す。第六に無量の下の二偈は、善現行を頌し、前の加行の正體は略して頌せず。後得智の中に、一には大智自行、前の前亦不捨菩提心等を頌す。二に大悲利他は、前の不捨化衆生増大慈等を頌す。第七に佛甘露の下の四偈は、無著行を頌す。中に於て初の二は、前の受眞記を頌す。方便度此中に、満足するを以ての故に、究竟と云ふなり。次の一は、前の悲念衆生等を頌す。後の二は、前の於語言道心無著を頌す。第八安住の下の八偈は、尊重行を頌す。中に於て初の二は、前の深解法界住無相住を頌す。次の一は、前の於無量劫行菩薩道不計衆苦而生憂惱等を頌す。次の二は、普眼を以て佛を見る。亦是れ、前の與三世佛等を頌す。次の一は延促解脫なり、是れ不思議解脫も亦得たり。前の非究竟非不究竟等

【第九：頌す】經の智慧の藏：行なり一の三偈を釋す。

【第十に：勝なり】經の一忍の彼岸を：嚴淨す一の四十六偈を釋す。

を頌す、次の一は、前の若有衆生恭敬見聞皆得住不退轉等を頌し、次の一は、前の心常愛樂諸佛妙法を頌す。後の一は、前の不離一衆生者多衆生等を頌す。第九に、具足智の下の三偈は、善法行を頌す。中に於て初の一は、持成就清涼法池等を頌するなり。次の一は、說及問答成就等を頌し、後の一は、定に依りて身を現す、前の金色身及び十身等を頌す。第十に究竟の下の四十六偈は、前の眞實行を頌す。中に於て五に分つ、初の三は總じて頌す。初の一は、忍智過ぎ盡く、次の二は身土無礙なり。一は如意通、一は神通なり。次の二に七偈有り、前の言行相應を頌す。中に於て初の三偈は、所成の十力智を頌す。次の一は正言行不虛を頌し、下の三偈は入三世佛性、及び善根等を頌す。三は深入智海の下に、十二偈有り、前の依誓起行如言攝生を頌す。上の文は略す、此中は廣し。中に於て初の三は、眼と雨との法を授け、次の二は堅信心を知るの化。次に不思議の下の四偈は、三業自在の化を顯す。次の二は、根を知り法を授く、後の一は結嘆して勝れたるを顯す。四に彼智無與等の下の九偈は、前の所成の圓滿の德を頌す。中に於て初の四は、二嚴兩利の滿、後の五は三業二用の極なり。一は身、二は意、三は語、四は身用、五は語用なり、次の如く應に知るべし。是上の文は、此れ菩薩の義身味身、窮盡すべからざるなり。五に修習佛解脱の下の十五偈は、前の所成の佛の、果德を頌す。中に於て二有り。初の七偈は、別して上の文を頌し、後の八は通じて彼德を頌す。前の中に初の一は、前の成如來無礙解脫入雄無畏等を頌し、次の一は絶生死流入智慧海饒益衆生等を頌す。次の三は、八相恆寂、前の

【一】當品は、第四會のうち、第四品にて、菩薩の十藏無盡の行相を明すもの。初に品名を釋す。

【二】當品の來由を示す。

窮盡諸佛方便大海を頌し、次の一は、前の觀不二地等を頌し、次の一は、前の護三世諸佛正法を頌す。下は通じて此行徳を頌す。中に於て八偈有り。初の四は二利成滿の徳、先の三は自利の中に、初の一偈は色根の勝るるを嘆す。偏に眼耳及び身を嘆ずることは、是れ通の性の故に、鼻舌を論ぜず。次の二は心の勝るるを歎す。一は慧、一は定なり。又、初に通を嘆じ智を嘆じ、後の一は定を嘆じ慧を嘆す。下の一は利他、次の一切知見の下の四偈は、三業殊勝の徳なり。一は生處勝、二は言辯勝、三は身光勝、四は應機勝なり。第三に四偈は十行を總結し、嘆じて以て勝を顯すこと知んぬべし。

菩薩十無盡藏品第十八。初に名を釋すとは、人を標して法に別くるが故に、菩薩の十藏と云ふ。是れ人法合して目くるには非ず。謂はく、此一種は是れ、諸の菩薩の所行の法にして、菩薩の十藏は、依主に名を立つ。一周の圓數を、則に依りて十と説き、含攝纏積出生を藏と名く。此一一の藏の内に法界を含みて、體限分に非ず。故に無盡と云ふ。二に、一に各一切の行相を攝す、故に無盡と云ふ。三に、一に皆能く、果徳を出生して、窮竭有ること無し、故に無盡と云ふ。無盡、即ち藏の持業釋なり。十に約するは帶數、菩薩は依主なり。三釋知んぬべし。

二に來意とは五義有り。一には、普光の十藏の間を答へんが爲の故に。二には、前は正位を明す、今は位に依りて、行を起すが故なり、上の梵行品に同じ。三に、前は位に約する別行を明し、此は始終の通行を辨す。四には、前は行位成立し、今は彼を淨治する行を辨

【三】 當品の宗とするところを明す

【同一法界藏】 十藏通じて云へば、萬法を合攝し千門を貫括す、これ同一法界なる所以茲にあり。

【四】 正しく本文を釋す、六門あり初に數を擧ぐ。

【大玉の略】 故に轉輪玉の通語、三世を以て改易なきをいふ。
【五】 二に十藏の名を釋す。

す。十地等の信等の十行に同じ。五に、前は自分究竟す、今は勝進して後に越く。上の明法品に同じ。問に准せば、應に廻向の後に在るべし。今、此に辨すと、但し藏に二義有り。攝攝の義に約せば、十行の後に在り。出生の義に約せば、廻向の後に在り。義は二處に通じて、問答して互に顯す。

三に宗の中に二門を作る。先は通じて藏の義を辨す。或は一。謂はく、同一法界藏。或は二。謂はく、大小。或は三。謂はく、契經等、並に三乘等なり。或は四。雜藏を加ふ。或は五。謂はく、名相等なり。或は六。謂はく、大小に各三有り。或は九。謂はく、獨覺亦三なり。或は十。下の離世間品の如し。或は無盡。此品の如し。二に別して此宗を顯さば、此中の十種の行法、始を該ね終を括り、普賢法界の行徳を、具足するを、此品の宗と爲す。

四に釋文の中に、文及び義に通じて六門を作る。一には數を擧げ、二には名を釋し、三には體性、四には行を攝し、五には相を釋し、六には結嘆す。初の中に功德林の説は、是れ會主なるを以ての故に。又、此行法衆徳建立を表すが故に。三世同説とは、謂はく、佛の出づること異ると雖も、同じく十藏を説きて、此十種は、法界の行なることを顯す。大王の路の、三世に易ふること無きが如きが故に、同説と云ふ。

二に名を釋すとは、總名は前の如し。別の中に信とは、實と徳と能とに於て深く忍し、樂欲して、心を淨からしむるを性と爲す。不信を對治し善を樂むことをもつて業と爲す。

【二〇】三に十段の體性を明す。

此に因りて、諸徳を含攝し出生す、故に名けて藏と爲す。即ち持業釋なり。下並びに此に同じ。二に非を防ぐを戒と名け、三業の善を性と爲す。惡を止め善を作すを業と爲す。三に慚とは、自と法との力に依りて、賢と善とを、崇重するをもつて性と爲し、無慚を對治し、惡行を止息するをもつて業と爲す。四に愧とは、世間の力に依りて、暴惡を輕拒するを、性と爲し、無愧を對治し、惡行を止息するを、業と爲す。五に聞とは、教を喰ふことと廣多にして、聞慧を性と爲し、聰敏を業と爲す。六に施とは、己を贖めて人を恵み、無貪の思を性と爲し、慳を破るを業と爲す。七に慧とは、所觀の境に於て、簡擇するを性と爲し、疑を斷するを、業と爲す。八に念とは、曾習の境に於て、心をして明記して、忘れざらむるを性と爲し、定の依を業と爲す。九に持とは、所記を任持し、念慧を性と爲し、久しきを經て忘れざるを、業と爲す。十に辯とは、巧に所持を宣べ、慧を以て性と爲し、機に應ずるを、業と爲す。此上の十の中の、信と慚と愧と念と慧と、此五は各當體に名を得たり。餘の五は功能に稱を受く。謂はく、戒施は行用に名を立て、聞と持と辯とは、智用を目と爲す。

(六) 三に、體性の中に、二門有り。一には、相に約す。謂はく、信と慚と愧とは、是れ善の十一の中の三法、各自體に當りて性と爲す。念と慧とは是れ、別境の五の中の亦二法、自體に當りて性と爲す。戒は三業の善の思、及び哀と無哀とを以て、性と爲す。施は、無貪相應の思を以て、性と爲す。『智論』に依るに、持は定慧を以て、性と爲す。聞と辯との

【七】四に十藏行の攝攝を明す。

【施：擧ぐ】六変の行の始終を擧げて、以て六度を合ましむ。

二種は、俱に慧用を以て、性と爲す。二には、總通に約せば、謂はく、總じて是れ、一法界の行にして、義に隨ひて十と説く。一は是れ法界の性、自ら澄淨の義、清水の珠の如し。二は法界の性、自ら過を離るの義、三四は俱に是れ、法界の性能く過を滅するの義、五は法界の攝徳、廣多の義、六は法界の自性、放捨の義、七は法界の自性、聞覺の義、八は法界の自性、明照の義、九は法界の自體、任持の義、十は法界隨緣應接の義なり。是故に、一法界を性と爲す。

四に攝行とは、七門を作る。一には、二利に約して分別す。別して論せば、前の九を自利と爲し、後の一は利他と爲す。通じて論せば、皆二行を具す。二には、本末に約して分別す。初の一は是れ、行木の故に、上に信爲道元功德母等と云ふ。餘は並に、依りて成ずるが故に、是れ末なり。三には、正助に約して分別せば、慧は正にして餘は助なり。四に、資道に約して分別せば、慧を能導と爲し、餘は所導と爲す。餘は是れ能資、慧は是れ所資なり。五に財守に約して分別せば、前の七は、即ち是れ七聖財、念と持とに由りて守護して、損失せざらしめ、辨に由りて敗致して、增長を得しむ。六に、行相に約して、分別せば、初の四は離過の行なり、一は是れ本、二は末起の過を防ぐ。三四は已起の過を殄す。餘の六は、修善の行なり。聞は是れ修の始、施と慧とは修の次、六度皆修す。初を擧げて後を擧ぐ、中間は知んぬべし。後の三は修の終、初の二は自熟、後の一は化他なり。七に、生起の次第に約して、分別せば、信を入法の初と爲す。是故に先に辨ず。信に依りて行を

【二の白法】一は受戒以後、固淨潔なるをいひ、二は若し犯すあらば悔改する時、又これ清淨なるをいふ。

【八】五に十藏の相狀を述す。うち十段を分ち初に信藏の文を釋す。

【情有理無】實我實法を信するは、迷妄の見、理より云へば無しといふ。【依他無性】一切萬象は色心の二の縁生たり、その實體なし。【圓成無性】勝義の自性は自性なき

起し、過を離るるを先と爲す、故に次に戒を明す。戒或は犯す有れば、深く慚愧を生じて、戒行を莊嚴し、其をして光潔ならしむるが故に、二の白法有りて、能く衆生の過を救ふと云ふ。既に防離して將に善品を増さんとするには要す、博聞を以て首と爲す。所聞を求めんと爲るには要せず、自の内外を捨つ。既に私を忘れて、法の爲にすれば必ず、正慧現前す。正慧既に現すれば、必ず須らく、正念増明なるべし。正念既に明かなれば、必ず須らく憶持して、久しからしむべく、持して既に忘れず、要す他に辯説して、二利の行をして圓ならしむるを須て、方に究竟と爲す。

五に相を釋する中に、此十藏を釋するに、即ち十段と爲す。初の信の中に就きて、四あり。謂はく、標と釋と結と嘆となり。釋の中に二あり。先に修相を明し、後に成就如來無量の下は、修成を明す。前の中に三あり。初には法に對して、信を起すことを明し、二には、信に由るが故に、法を聞きて、怖れざることを明す。三に何以の下は、怖れざる所以を釋す。又釋すらく、初は理法を信じ、次は教法を信じ、後は果法を信す。初の中に、十法を信する中に於て初の三は所執無相を信す。空は謂はく、情有理無を空と名く。空に空相無きを、無相と名け、無相の故に、願求する所無し。次の三は、依他無生を信す。一には縁起無作、二には如幻不實、三には無體自守なり。後の四は、圓成無性を信す。一には性德無量、二には勝の故に無上、三には深くして到るべからず。四には常に生るべからず。又、初の一切法の中に、量不可得なり。上も亦、上の相を得べからず。文に「上の相

をいふ。
【性徳無量】諸法
の實性たる眞如中
に、無量の徳ある
をいふ。

【初の一切法】圓
成を指す、前は性
徳に約し、今は事
法不可得に約して
いふ。

【二に信に由る云
云】以下信の相を
釋す。

【此十の中云云】
總じて不思を辨ず

不可得の故に、號けて無上と爲す」と云ふは此謂なり。二に、信に由るが故に、法を聞き
て怖れず。中に於て十句あり。初の二は、勝上の法に於て怖れず。次の四は、廣多の法
に怖れず。何者か所化なる。謂はく、衆生界は、何の法を以てか化する。謂はく、法界は
何の處に化する。謂はく、空界を盡す。化して何なる處にか置く。謂はく、涅槃界なり。
後の四は、寛遠の法に怖れず。謂はく、三世入劫を十世と爲すなり。此十の中、不思に二
義有り。一には、無所有に即して、有と説くが故に、有なるべきに非ず。能く思議する所
無し。二には、此等の十法、並に無邊無盡にして、餘の位の智の、能く知るところに非ず、
故に不思と云ふ。亦、二信に由るが故に、之を聞きて驚かず。一には、三性三無性の理を、
信達するに由るが故に、初門を聞きて驚かず。二には、佛智平等にして、無量無邊なるを
仰信するに由る。此れ既に佛智の所知なり、我も亦隨て信ず。此は後門を聞きて、驚か
ざるなり。初の義は、前に顯すが如し。後の義は、釋の中に彰るるが故なり。三に釋の中
に、先に徴し、後に釋す。釋の中に、初の一句は、佛を信する心、堅きことを顯す。次の
句は、前の十法は是れ、佛智の所知なることを明す、故に佛如是知と云ふなり。彼境廣
大なり、佛云何が知る。良に以れば佛智亦彼境の如く、無盡無邊なるが故に、彼既に佛
菩薩を知る、佛を信するが故に驚かざるなり。十方の下は、佛智の是れ、信すべき所由を
釋す。先に大用、虚からざるが故に、信すべし。二に彼諸佛の下は、體に増損無きが故に、
信すべきことを明す。中に於て十不有り。此文は、佛智は生滅の法に非ずして、無爲に同

【第二に：知んぬべし】第二に修成の相を明す下。經の一菩薩は是の如き一等の文を釋す【涅】 惡くは沮の字か。【聞慧】 教法を開くより生ずる慧解をいふ。

【九】 第二に戒藏の文を釋す。

【鳥・戒】 外道邪情惡見より制する諸戒の名。

することを顯すなり。第二に、修成相の中に二あり。初の一句は、總じて如來乘に乗じて、佛果に越く。二に別顯の中に、先に行體を成ずるに、八句有り。一には、所信に稱ふが故に、無邊なり。二には、體堅なれば退かず。三に、所信雜らざるが故に不亂と名く。四に、緣も涅むること能はず、五に、深信は相を離る。六に、信は慧より起る。涅繫二に云はく、「聞慧より生ずるなり。又、慧有るの信を有根と名く。慧無くして信ずるは、無明を長じ、信無くして慧なるは、邪見を長す。信專具足して、方に法に入ることを得」と。故に梁の「攝論」の第十一に云はく「菩薩、自證施に由るが故に、施を行ぜざれ」と。前の信は、根有るが故に、信を成じ、後の信は、根無きが故に、信を成ぜず。七に古聖に順同す。八に家業法爾の下は、行の功能を顯す、四句有り。一には、能く法を護り、二には、能く困を増し、三には、能く果に順じ、四には、徳は佛より生ず。三に是爲は結、四に住此は嘆なり、二利有ること知んぬべし。

第二に戒藏の中に三あり。謂はく、標と釋と結となり、釋の内に二あり。先に十章を開き、後に一一に章を牒して、廣く釋す。光統の云はく、「初の二は攝衆生戒、次の八は攝善法戒、後の一は律儀戒なり」と。又第二の中の不受外道は、鳥、鵝、鹿、狗の戒等なり。第四は先に犯さざるが故に、後に疑悔無し。此文に准ずるに、故に一切の戒を、犯す人は、往昔會て、五逆罪を作るより、來るに似たり、是れ彼惡習なり。又「涅繫經」に云はく、「何が故に戒を持つや、不悔の爲の故に。何が故に悔いざるや、歡喜の爲の故に。何が

【更造立】經文「更に造立せず」といへるを指す。

【阿練若】阿蘭若 (Aranya) ともいふ。隠して無諍辯閑寂、遠離處といひ、寺院をいふ。

【衲衣】糞掃衣ともいひ捨てて顧みざる賤物を縫合して法衣とせるもの

【一坐食】午前中一食するのみなるをいふ。

【頭陀】 Dhuta 衣食住の食著を抖擻ふ行法。

【尼師檀】また尼師但那、額史那囊 (Nisidam) といふ

故に歡喜するや、悅樂の爲の故に、乃至大涅槃を得んが爲の故なり」と。第五の中に、蘇
 鹽等を食せざるを、更造立と爲す。又、穀を斷じ氣を服す等、法の外に制を立つ等なり。
 第七の中に、若し斷常の見を以て、戒を持ってば、即ち是れ、無明を雜ふるが故に犯戒と名
 く。第八の中、邪命に或は四種あり。一には方口食、二には仰口食、三には遺口食、四に
 は下口食なり。又「十住論」の第二に云はく、「誰をか五邪命の法と名く。一には綺異、二
 には白糞、三には激動、四には抑揚、五には因利求利なり。綺異とは、人有りて利益を、
 貪求するが故に、若は阿練若に住し、若しは衲衣を著し、若は常に乞食し、若は一坐食し、
 若は常坐し、若は中後に漿を飲まず。是の如き等の、頭陀の行を受けて、是念を作さく、
 「他は是行を作して、供養恭敬を得。我も是行を作して或は亦之を得ん」と。利養の爲の故
 に、威儀を改易するを、名けて綺異を爲す。二に白糞とは、人有りて利養を貪りて、檀越
 の家に至りて、語つて言はく、「我父母兄弟姉妹親戚の如く異り無からん。若し所須有らば
 我能く相與へん。若し所作有らば、我爲に作さん。我遠近を計らず、能く來りて問訊せん。
 我此に住すとは、正しく相爲さんのみ」と。供養を求めんが爲に、檀越に食著して、能く
 口辭を以て人の心を牽引す。是の如き等を、自親と名く。三に激動とは、人有りて、貪
 の罪を計らず、財物を得んと欲して、物を得たる想を作す。是の如く言ふ、「是鉢は好し、
 若は衣、好し。若は戸鉤、好し。若は尼師檀、好し。若し我得なば、即ち能く受用せん」
 と。又言はく、「意に隨ひて能く施さん」と。此人得難く又檀越の家に至りて是言を作す、

臥具の上、又は地に敷きて、臥具又は身を護るものはいふ。

【僧伽梨】 Saṅghī 制裁して後、更に合重すれば、復衣又は大衣ともいふ。

【慚】 慚藏と愧藏の文を釋す。

「汝が家の羹飯、餅肉香美にして、衣服復好し、常に我を供養すべし。我親舊を以て必ず當に見與すべし」と。是の如く貪相を示現する、是を激動と名く。四に抑揚とは、人有りて利養を食るが故に、檀越に語りて言はく、「汝極めて慳惜なり、尙父母、兄弟、姉妹、妻子、親戚に、與ふること能はず。誰か能く汝が物を得る者あらん」と。檀越愧恥し俛仰して施與す。又、餘家に至りて是言を作す、「汝福德有り、人身を受けて空しからず。阿羅漢常に、汝が家に入入して、汝と與に坐起し語言し、是念相を作さく、檀越、或は是心を生ず。更に餘人、我家に入出する無し。必ず我是と謂はん」と。是を抑揚と名く。五に、因利求利とは、人有りて、衣、若は鉢、僧伽梨、若は尼師檀等の、資生の物を以て、持ちて人に示して言はく、「若は王王等、及び公賤の貴人、我に是物を與ふ」と。是念を作さく、「檀越或は能く心を生ぜん。彼諸王貴人尙能く供養す、況んや我是人に與へざらんや」と。因りて此利を以て、更に餘の利を求むるが故に因利求利と名く。第九の中は「諸法無行經」に云はく、「若し破戒を見ば、其過惡を説かざれ。應當に彼人を念すべし、久久にして亦道を得べし」と。問ふ「涅槃」に云はく「破戒の者を見ば、應當に擯黙し呵嘖し擧處すべし。當に知るべし。是人福を得て無量なり」と。此文に何が故に將護して呵せず。豈攝生と爲さるんや。答ふ、「彼は慈心に據りて、呵して悔過せしめ、根熟するを以ての故に。此は彼を護るに約す。更に惡心を増さんことを恐る、根未熟の故に、餘文は知るべし。

三と四との二藏なる、慚と愧とは「涅槃」に云はく、「慚とは天に羞ぢ、愧とは人に羞づ。

慚とは自ら惡を作さず、愧とは他を教へて惡を作さしめず。慚とは内に自ら羞恥し、愧とは發露して人に向ふ」と。又「俱舍論」に云はく、「無慚とは、若し善人の呵する所、中に於て怖るることを見ず、是を無慚と名く。無羞とは、功德、及び功德の人に於て、尊重せず、敬畏の心無きを、無羞と名く。無羞とは、是れ無愧なり。經部に説かく、「自身を觀るに、過失に由りて、恥ぢざるを、無羞と名く」と。又「瑜伽一、對法一、唯識」に云云。慚藏釋の中に三あり。初には、昔の自他無慚の過を念ず。中に於て、先づ自後は他なり。六親とは謂はく、父母兄弟妻子を六と爲す。二に自惟の下は、過を擧げて自ら誡む。三に是故の下は、正しく慚行を修す。愧藏の中に三義あり。慚に同じく知んぬべし。

【二】五に多聞藏の文を釋す。

【無取の五蘊】出

【世無漏の五蘊】有漏の五

【取蘊】有漏の五

【又小乘得】今

【五分法身】五種

【の功德】戒、定、慧

【を以て佛身を成ずるをいふ】

第五に多聞藏。釋の内に二あり。先づ所學の法、後に摩訶薩の下は、其學意を明す。前の中に亦二あり。先は十章を聞き、後は次第に釋す。十が中に初の四は、十一緣生に約す。瑜伽を捨り。理實には、出世間に、亦無取の五蘊有り。今是れ取蘊擔苦積集するが故に是れ世間なり。又小乘に約して亦得。又五分法身は、前の五蘊に翻す、故に出世と爲す。又理實には、有爲更に餘位に通ず。今三界及び衆生を取るに、並に是れ感業の所爲の故に、是れ有爲なり。無爲法の中に於て、一に聞合とは、或は唯三と説く。謂はく、虚空、擇滅、非擇滅なり。此は小乘に約す。或は四と説き、眞如を加ふ。「掌珍論」に説くが如し。或は六と説き、不動等を加ふ。是れ第四禪及び滅定なり。「百法論」等に説くが如し。此二は、初

【或は六、加ふ】六無爲即ち虚空、擇滅、非擇滅、不動、想受滅、眞如無爲をいふ。

【八が中、故に】六を開きて八と爲せる所以を明す。

【無間道】まさに惑斷の途に在り、而も惑の爲に、間斷せられざる無漏智をいふ。
【僧祇部】梵に摩訶大衆部のこと。

【陰界入】色聲等の有爲法、十八界十二入の如きをいふ。

教の初に約して説く。或は八と説く。眞如の中に於て、善法の眞如と不善法の眞如と、無記法の眞如を聞く。瑜伽一「對法」に説くが如し。此は初教の終に約して説く。四の中、擇滅に二義有り。一には、惑障を滅するを擇滅と名け、定障を滅するを、不動及び滅定と名く。是故に、總じて擇滅の中に、攝在するなり。八が中に、漸く一切の法は悉く眞如と、展べんと欲するが故に、善等の三性を開きて、詮門顯示す。二に假實とは唯眞如無爲は是れ實、餘は並に是れ假なり、如の上にて、假に建立するを以ての故に「佛地論」に説くが如し云云。又眞如の中に亦二あり。一には安立。是れ相分の故に。二には非安立。識現に非ざるが故に。初は假、後は實なり。三に轉異の義とは、此文の六無爲の如し。一には事無の處を虚空と名け、二には性淨の果を涅槃と名け、三には、無間道に數結を斷して、得る所を數緣減と名く。四には、餘緣起らざるを、非數緣と名く。五には、十二因緣、是れ無爲とは、「俱舍論」に依るに、僧祇部、犢子部、並に十二因緣、是れ無爲の法と説く。如來の出世、若は不出世にも、此法は常住なるを以ての故に。經部師の破、彼に説くが如し。又、遠法師は「涅槃經」を引きて、釋すらく、「人に就きて論ぜば、三世流轉は是れ其れ有爲、人を廢して法を談ぜば、法相常に定れり、故に無爲と曰ふ。十二因緣の如く、陰界入等は一切皆然り。「涅槃經」に説くが如し」と。今釋すらく、此緣起各自性無く、各造作無きを以ての故に、無爲と名く。「涅槃經」に云はく、「十二因緣は即ち是れ佛性なり」と。又「大品」に云はく、「菩薩、十二因緣を觀すること、猶し虚空の盡くすべか

【有邊無邊等】亦有邊亦無邊、非有邊非無邊の二句を等しうす。

【郁軋歌】 郁軋歌には鬱軋趣に作る外道の名。

【答へざる所以云】 佛、答へざるは、問者眞空を解する力なきを知る故なり。此下、俱舍論第三十の五有に詳かなり。

【尼乾…答ふべからず】 雀の死生を問ふも、佛彼の心を知り定んで答へず。

【如來死…問ふ】

らざるが如し一等と。六に法界とは、是れ如來藏の體なり、實には不生滅の故に是れ無爲なり。又、一眞如の義に於て、此六を立つ。一には無相の義、二には所證の義、三には惑盡の義、四には性淨の義、五には隨緣の義、六には不變の義にして、亦是れ因と爲るの義なり。有る記の中に、四諦等とは、驅理の善に約して、記録すべき有るが故なり。上來は多く是れ、小乘の法なり。下の無記の中、虚空の法は、記録すべからざるが故なり。

【智論】には、十四の難を説く。此中には十六種有り。俱舍論二に、外道有り、郁軋歌と名く。此には能説と云ふ。佛に世間は有邊無邊等の四を問ふ。此は始終に約して問を爲す。常、無常等の四は、斷常に約して問ふ。答へざる所以は、若し彼、我を執して世間と爲し、已に我は無なるが故にと答へば、理に應ぜず。若し一切の生死を執して、世間の四と名けば、答亦理に應ぜず。若し世間常住ならば、一人として、涅槃を得ること無からん。若し常住に非ずんば、即ち一切皆斷滅して、自然に涅槃せん。若し二を具せば、必定して、一分は涅槃を得ず、一分は自然に涅槃せん。若し常に非ず、非常に非ずんば、應に涅槃を得るに非ず、涅槃を得るに、非ざるにも非ざるべし。問ふ。若し自ら涅槃を得ば、何の失か有らん。答ふ。若し自然に得ば、涅槃の至るに由る、隨ひて道に屬することを得るが故に。尼乾が雀を握るが如し、定んで答ふべからざるなり。如來、死に異なること有り等の四問は、此は縛解に約して問ふ。外に梵王及び己が師、已に解脫を得て、如來と名くと執するを以て、問ふ人の意を觀するに由るが故に、佛答へず。彼は、己が解脫の我を執して、

俱舍論第三十の五右、世尊、如來死後、有等の四を記したまはざる耶云一といふを指す【第三の四句云云】既の有邊無邊、有常無常の四句を述べ。今第三に、如去不如去の四句を明す。【陰】陰覆の義。今色聲等有爲の法は眞理を洞見する眞智を陰覆するが故に陰と名く。【我に龜細有り】經部、犢子部等の説く、非即非離龜の我をいふか。

【況】益なり、茲なり、滋なりの意あり、益する意か【三】第六に施藏の文を釋す。

如來と名くるを以てなり。既に我有りと執す、故に佛答へず。餘は「智論」の第二第十七、「瑜伽」「俱舍」「舍利弗阿毘曇」を檢するに、並に正しく、總計を疏するに、會して具に之を作る。第三の四句の中、如去、不如去等の四の中、如來とは、前より來る如く、後に向ふも亦爾り、故に如來と曰ふと、是れ佛には非ず、四句何が別なる。有る人、神我と陰と一なり。陰滅すれば我も亦滅すと計す。若し還りて、來る時の如く去ると言はば、此語受けず。二に我と陰に異れり、陰滅すれども我は滅せずと計す。若し來る時の如く、去らずと言はば、此れ亦受けず。三に、我體は常に虚空の如しと計す。來去有りと説かば、俱に受けず。四に我に龜細有りと執す。來去無しと説かば亦受けず。謂はく、龜我は陰と一なれば、同じく滅するが故に如去なり。細我は陰と異れば、同じく滅せざるが故に、不如去なりと、受けず。第四の四句の中に、我は是れ體、衆生は是れ用、我に由り下衆生有り、體に依りて用有り。二は此に反す、三は變べ存す、四は變べ反す、餘の文は知んぬべし。大いに上來の所學の法に況し、並に小乘及び外道等の法をも知らしめんが爲の故なり。此に因りて、衆生を攝めんと欲するが爲の故に。下は學の意を明す、知んぬべし。

(二)に釋す、第六に施藏の中、釋の内に、先づ十門を列ね、後に一一次第に釋す。一一に各三有り、標と釋と結となり。初の中、久しき宿習に由り乃至自食す、亦施す心有り。謂はく、所極の要命を捨てて、中天を受け、死邊に附近するを、最後難と名く。又、諸施の中に、最も後に在るが故に。内施の中に、少壯の輪王とは、捨し難きを、能く捨することを、明すが

故なり。内外施とは、「瑜伽」に依るに、剪髮剔吐等を内外と爲す。此中は、依及び正に通ず。唯妻子を除く。一切施の中に、並に妻子有るが故に、別なり。七に過去施の中、初には所貪の境を擧げ、二に聞己の下は、理を以て正しく觀す。中に於て先づ、直に空を觀じ、方便を失はず。後に其謝滅に況す。三に菩薩の下は、正しく捨行を成す。此三世の施は、但自らの貪心を捨す。無貪の善根と相應するが故に、此中に入れて收む。又通じて四句を論ずるに、一には捨にして施に非ず、三世の施の如し。二には施にして捨に非ず、自食して身の蟲に施す等の如し。三には亦是は施亦是捨、前門の如し。四には施に非ず捨に非ず、信藏等の如し。未來と現在とにも、亦各三義有り、上に同じて知んぬべし。現在所食の中、淨法の内に、但二乘を擧ぐることは、佛菩薩は、現在の緣成じて、求めざるに非ざるを以ての故に過と未との謝、及び未至の緣起無きに、同じからざるが故に、是故に前に同じからず。第十の中に四有り。初に乞食、二に菩薩の喜、三に身の過患を觀す、四に意を開きて施を成す。謂はく、縦ひ是れ好物なりとも、我尙應に捨すべし、況んや此れ惡物をや。又縦ひ所益無しとも、我尙應に施すべし、況んや復我をして、三堅の法を得しむる身財の自在なるをや。

【三堅の法】身、命、財なり。道を修せば、無極の身無窮の命、無盡の財を得るをいふ。
【二】第七に慧藏の文を釋す。

第七に慧藏。釋の中に三有り。初には法を照し、慧を成ずることを明し、二に菩薩成の下は、慧成の益相を明し、三に無盡の義を顯す。初の中に二有り。先に慧自ら法を照すを明し、後に他の爲に、正しく説くことを明す。前の中に、初には、總じて、所知を擧げ、

【二】に能知云云【
以下、能知の甚妙
なるを釋成す。經
の「云何が知る」
等の下。】

二は、能知の深妙を釋成す。前の中に、四諦を以て十法を歷知す。謂はく、五蘊と無明と愛と、及び三乘となり。五蘊は染果に約し、癡と愛とは因に約す。此は皆、當相是れ苦なり。緣成は是れ集、無性は即ち滅にして、滅を顯すを道と爲す。詮門と爲りて、滅を顯すを以ての故に。又是れ菩薩は巧に廻して、道具の用を成ずるが故に。論の諸惑成覺分の如し、生死を涅槃と爲す。後の三は淨に約す。聲聞は是れ人、四諦を法と爲し、所行の道品を集と爲し、所成の果を涅槃と爲す。十二緣は是れ緣覺の法、無邊法界は是れ菩薩の法なり。又釋す。知聲聞は即ち是れ、苦を知る。聲聞苦は是れ、已に知るを以ての故に、但其位を擧ぐ。二に是れ彼所行の法は、即ち道諦なり。三に彼惑習等、未だ盡きざるは、即ち是れ集諦なり。已に斷すること有るが故に、法の後に之を説く。涅槃は是れ滅なり。緣覺と菩薩とは、准じて見つべし。二に能知を釋する中に、初に問の意は、知に二種有り。一には相に稱ひて知る。小乘の人の如し。二には理に稱ひて知る。菩薩の人の如し。今但知ると言ふ、此二が中に於て、是れ何をか知る。故に云何知と云ふなり。下に釋す、是は理に稱へり。知に六句有り。一には、總じて因起を擧げ、二には、非我の下の二句は、二我無きことを顯す。上の句は相の不實を明し、下の句は體の空無なり。三には不取の下の三句は、法に對して染を離るることを明す。不取堅固は、前の上の句に對す。不取所有は、前の下の句に對す。三に知一切の下は、不取の所由を釋す。二に他の爲に説く中に、初の句は標、二に云何の下は釋なり。釋の中に三あり。初には總、二に何等の下は別なり。前

【二に菩薩云云】
經の「菩薩は是の如き成就し」等の下。

【二】第八に念藏の文を釋す。

【二に念の勝相】
經の「菩薩是の如き」等と十念を明す下。

の十法に於て、略して九門を擧ぐ。即ち如に同ずるを以ての故に、壞すべからざるなり。三に何以故の下は、所由を出す。先づ徴す。現に色等を見るに、是れ破壞すべし、何を以てか壞せずと言ふや。釋すらく、緣に従ひて起るを以て、自他共の言は、皆到らざるが故に、色心俱に離るるなり。二に菩薩成就の下は、慧成の益の中に、二句有り。一には、少功廣く達す。二には、自ら悟りて他に非ず。三に無盡の義を顯す中、十句の内に、初の三は自分なり、中に於て、先の二は自利、後の一は利他、後の七は勝進なり。中に於て、初の四は自利、後の三は利他なり。

第八に念藏。釋の中に三有り。初には、境に對して念を明し、二に菩薩の下は、念の勝相を顯し、三に菩薩作是の下は、念の益相を彰す。初の中に十有り。一には、過去の一生を念じ多に至る。二には、過去の一劫を念じて、多に至る。三に、一佛を念じて、無量に至る。四に、一佛の授記を念じて、無量に至る。五に、一佛の出世を念じて、無量に至る。六に、一佛より經を受くるを念じて、無量に至る。七に、一會一時の説法を念じて、無量に至る。八に、一法の器根を念じて、無量に至る。九に、一所治の煩惱を念じて、乃至無量に至る。十に一に三昧を念じて、乃至無量に至る。二に、念の勝相を顯すに、十句有り。一に妙念とは、妙に餘人に過ぐ。二に淨念とは、所記分明なり。三に不濁念とは、闇障を雜へず。四に遍淨念とは、法に於て悉く明かなり。五に離塵念とは、所念の事に於て、貪染を生ぜず。六に離種種塵念とは、餘結を生ぜず。七に離垢念

【三】念益云云
經の「此菩薩是念」
等の下。

【五】第九に持藏
の文を釋す。

【六】第十に辯藏
の文を釋す。

【二】勝進の下云
云經の「此菩薩
百萬阿僧祇」等の

とは、我能を計らす。八に光曜念とは、廣く照して極無し。九に樂念とは、樂修して息
まず。十に無礙念とは、意を發して即ち知りて、思量を待たず。三に念益を彰す中に、四
句有り。一には、世苦亂れず。二には、根淨にして染らず。三には、念堅うして壞せず。
四には法を持ちて錯らず。

【五】第九に持藏。釋の内に十一法有り。一には、一品の經乃し無量に至る。二には佛名、三
には界名、四には劫名、五には佛の記、六には一部の經、多に至る。七には會名、八には
說法、九には根、十には煩惱、十一には三昧なり。下結嘆の中に、唯佛境とは、因深くし
て、果に徹することを顯すが故なり。

【六】第十に辯藏の中に、亦四有り。標と釋と結と嘆となり。釋の中に二有り。先に辯の體を
擧ぐ。謂はく、後得甚深の智の故に。二に辯の功を顯すに、二有り。先に自分、二に此
菩薩の下は、勝進なり。自分の中に、初に廣說不違典は、是れ總じて顯す。下は別して辨
ず。中に於て二有り。先に說自在を明し、前の所持の十法を説くなり。二に何以故の下は、
自在の所由を釋す。二に勝進の中に二有り。初には總じて顯す。謂はく、法光の辯をもつ
て、深法を演ぶ。二に以廣長の下は別して辯す。中に於て二有り。先に無礙說に四句有り。
一には、說の益を明し。二には、善入の下は、教に於て自在なり。三に入普照の下は、義
に於て自在なり。四に不捨の下は、自行を失はざることを顯す。後に何以の下は、無礙の
所由を釋す。謂はく、此位は即ち是れ、究竟位の故に、此空法界に滿ずる、清淨法身を

【嘆の中に十句】
經の「此藏は無量」
等の下。

【二七】第六に十藏
を結嘆する下。經
の「佛子、是を
得しむ」等の文を
釋す。

是れ無垢の眞身の故に、淨と云ふなり。嘆の中に十句有り。一に無量とは、多門の故に。二に、無分齊とは、一一に皆無邊の故に。三に、多門無間、四に、和雜不壞、五に、自體無斷無し。六に、縁の爲に斷ぜず、是れ、斷すべき法に非ざるを以ての故に。七に、言に法障無し、八に懸遠にして甚深なり。九に、廓然として底無し。十に、法を攝して釋す。

第六に十藏を結嘆す。初の一句は結、下は勝を嘆す。勝を數する中に、初の一句は結數なり。謂はく、衆生をして、菩提を得しむるが故に。下の十門は別して顯す。別して釋するに、唯七句有り、各標釋有り。一に行の利を嘆じ、二に行常、三に行廣、四に行巧、五に行多、六に行堅、七に行、理に入る。是名の下は、總じて結嘆するなり。此後に應に、證成及び偈頌等、有るべし。文足らず、或は是れ略の故なるのみ。上來は總じて第四會竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第六

昭和五年九月一日印刷
昭和五年九月十日發行

昭和國譯大藏經 宗典部
第十四卷

不許複製

編纂者

國譯大藏經編輯部
代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

發行所

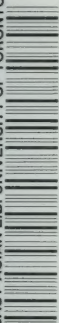
東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社

東方書院

電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3258